

資料

サクシュコトニ川遺跡

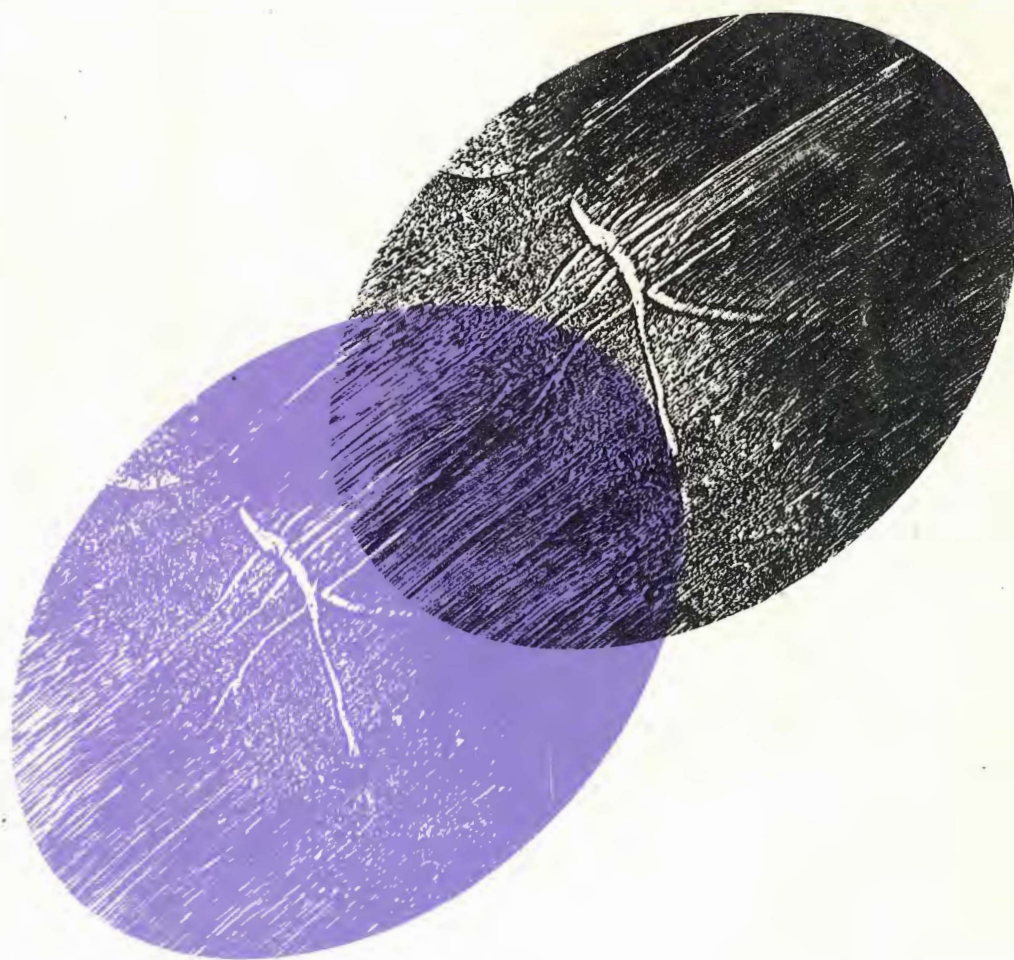
北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落

1986

北海道大学

[本文編]

1



サクシュコトニ川遺跡

北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落

1986

北海道大学

[本文編]

1

〔序〕

サクシュコトニ川遺跡の報告書がようやく刊行されることになった。そもそも、本学で建物の新営・改築等をはじめとする土木工事を実施するにあたって、埋蔵文化財の調査を実施するようになったのは昭和55年以来的のことである。その間、遺跡の保存の状況、あるいは工事の規模などの状況により、大規模な発掘調査はほとんど行なわれていなかった。この間に実施した調査の結果は、『北大構内の遺跡』1～4に報告されている。

昭和55年に、学生寮建設予定地で遺跡が確認され、56年夏からその年の冬を経て、翌57年秋までを費して発掘調査が実施された。ここでは、これまで構内で発見されている古代の住居跡や墓地跡ばかりでなく、日本ではほとんど発掘調査の例がないという魚止めの施設までが発見された。かつて構内の西北端を流れていたサクシュコトニ川のほとりにあった先史時代の集落が姿をあらわしたのである。

魚止めの遺構の発見がマスコミを通じて報道されて以来、この遺跡には専門研究者のみならず、一般市民も大きな関心を寄せるにいたった。遺跡そのものは、新寮建設という本学にとって年来の懸案の事業のためとは言え、その姿をとどめていない。調査の際に得られた所見はもとより、その後、資料の整理を通じて得られた知見を可能な限りことこまかに報告するのは大学に負わされた責任である。先年度刊行した、『北大構内の遺跡』3に重ねて、本報告を刊行し、サクシュコトニ川遺跡の調査とここで得られた知見を紹介する次第である。

サクシュコトニ川遺跡は擦文時代の集落としては決して規模の大きなものでないと聞いている。しかし、漁撈用の施設を中心として形成されたこの集落が、北海道の歴史を復元するうえで果たす役割は小さくないものと信じる。本書が研究資料として、ひろく研究者のあいだで活用されることを願う次第である。

最後に、発掘調査から資料の整理、報告書の刊行まで、多大の苦勞を惜しまれなかった埋蔵文化財調査室の各位、さらにその作業を側面から支援された埋蔵文化財担当委員の教官各位の勞をねぎらい感謝の意を表する次第である。

昭和61年3月20日

北海道大学長

有江幹男

[サクシュコトニ川遺跡調査報告書概要]

遺跡名	サクシュコトニ川遺跡
所在地	北海道札幌市北区北17条西13丁目 3 番地（北海道大学札幌団地内） 北緯43°04′ 東経141°20′
調査主体	北海道大学
調査機関	北海道大学埋蔵文化財調査室
発掘期間	1981年(昭和56年) 8 月14日～1982年(昭和57年) 9 月24日
調査面積	5,904㎡
調査結果	<p>上層より層位を異にして 3 文化層が確認された。</p> <p>『第 1 文化層』は擦文時代後期前半(西暦 9 世紀後半?)。焼土が 1 箇所検出されたほかは遺物集中地点のみ。土師器（土師質土器）甕12個体，須恵器 1 個体が検出された。坏は検出されていない。</p> <p>『第 2 文化層』は擦文時代中期前半(西暦 9 世紀中葉)。堅穴住居跡 5 軒・土壇 6 基・集石遺構 7 箇所・炭化物マウンド 1 を含む焼土と炭化物集積139 箇所(73ブロック)が検出された。ここから，土師器坏113個体，土師器甕183 個体，その他 1 個体および須恵器16個体・土製支脚 7 個体・土製羽口 2 個体・土製紡錘車 14個・土製玉17個・黒曜石製剥片および石器77点・金属製品 3 点・骨製銚先 1 点，大型浅鉢 1 点が出土した。また，サケ科魚類を中心とする魚骨片，栽培植物の種子（オオムギ・コムギ・キビ・アワ・シソ・アサ・アズキ・ウリ・コメ）など，炭化材（ヤナギ属・トネリコ属・クルミ属・カエデ属・ニレ属）が検出された。</p> <p>集落跡の南部に接する埋没していた幅12mの旧河川から『魚類を捕獲するための柵列遺構』が木製銚，金属製魚鈎銚（マレク）などの漁具や用途不明の木製品をともなって発見されている。ただし，これが第 1 文化層・第 2 文化層のいずれに属するものなのかについては，確定できなかった。</p> <p>『第 3 文化層』は 2 次的な堆積層で，続縄文時代中期後半（西暦 4 世紀）とおもわれる土器片が検出されただけであった。</p>
資料の所在	発掘された資料は北海道大学内の埋蔵文化財調査室に展示・保管されている。

Summary

Site Name: Sakushu-Kotoni-Gawa Site

Address: 3 Banchi
Kita 17 Jo, Nishi 13 Chome
Kita-ku
Sapporo, Hokkaido

Longitude and Latitude:
43° 04' N 141° 20' E

Location: On the campus of Hokkaido University

Research Organization:
Hokkaido University Salvage Archaeology Laboratory

Excavation Dates:
August 14, 1981 to September 24, 1982

Excavation Area:
5,904m²

Results: Three cultural levels (components) have been distinguished.

First Level

The upper, or youngest, is early Late Satsumon and dates to the early tenth century. A probable hearth consisting of burned soil was found. The only other features was a few concentrations of artifacts. The pottery sherds are estimated to comprise 13 vessels.

Second Level

This component is early Middle Satsumon (late Ezo-Haji) and dates to the middle ninth century. Five pit houses, a possible garbage pit, seven concentrations of river pebbles (7 to 64 stones each), a midden mound (**tankabutsu maundo**) containing concentrations of pottery, wood charcoal, other plant remains and burned soil were found. Concentrations of burned organic material were found at 139 locations.

Artifacts in this component consist of pottery estimated to represent 313 vessels, 7 clay firing pedestals (Shikyaku), 2 bellows' nozzles, 14 clay spindle whorls, 17 clay beads, 77 obsidian flakes and tools, 3 pieces of metal (iron and tin), and one bone harpoon head. A large quantity of fish bones, mainly of the salmon family, were recovered. Carbonized wooden construction material was made from willow, ash, walnut, maple and beech. In addition, ten taxa of cultigens are present in flotation samples from this component. They consist of barley, wheat, broomcorn millet, foxtail millet, rice, Japanese red bean, mung bean, melon, beefsteak plant, and hemp.

Third Level

This is the oldest and deepest level at the site and is evidenced by only a few

Epi-Jomon artifacts.

Baried River Channel Excavation

To the south of the hamlet is a 12 meter wide abandoned river channel. A fish trap or weir was unearthed. An iron hook or barb was found in the weir. Other artifacts found in this area include a wooden fish spear, a wooden foreshaft, other fishing related tools, and several functionally ambiguous wooden tools. Unfortunately, whether the weir and artifacts are associated with the first or the second component has not been determined.

Comments on Pottery and Artifact Distributions

Most of the pottery was manufactured on a potter's wheel. Disposal patterns have been clarified through the examination of potsherd distributions. Potsherds were not randomly discarded; rather, they were disposed of in specific areas. Interestingly, clay beads, a potsherd engraved with a written character, and various other kinds of artifacts are concentrated in the **tankabutsu maundo** (midden mound). This pattern of deposition is often observed among later Ainu villages.

Plant Remains Summary

Nearly one quarter million carbonized cultigen seeds and nearly 2000 specimens of wild weedy carbonized seeds and fruits have been identified in about 150 flotation samples from the Ezo-Haji component. Approximately one half of the nearly 400g. seed collection has been examined to date. Descriptive, taxonomic, and quantitative data are reported. About 46% of the non-cultigens are weedy annuals and 47% are fleshy fruit seeds. The so far identified and unknown taxa number 32, 26 of which have been identified. The plant remains collection is consistent with that of a food producing economy. Field weeds, forest edge taxa as well as cultigen by-products such as rachis fragments are all present. Of all of the cultigens present, wheat is the most unusual in that no precisely comparable type of wheat is known elsewhere. The grains are significantly smaller than other wheats but their overall shape and size most closely resembles Indian dwarf wheat. This points to a strong possibility that East Asian wheat is derived from Central Asian rather than Middle Eastern populations of wheat. It may also imply that the same is true for other Western Asian cultigens found in Japan and China. Research on the collection is continuing in order to answer these and other questions.

●例言●

●本書は、北海道大学による学生寄宿舎建設工事に伴う緊急発掘調報告査書である。

●遺跡の名称は、これまでに「学生寄宿舎建設地区」（吉崎・岡田 編 1984 北大構内の遺跡3 北海道大学 pp.10～21）とか「新寮遺跡」（横山 1985 北海道新寮遺跡 日本考古学年報35—1982年度版—日本考古学協会）などとして使用されていたが、今後は「サクシュコトニ川遺跡」と呼称するものである。

●本書の執筆は、北海道大学埋蔵文化財調査プロジェクトチームと調査スタッフの討論を経て、分担執筆し、各章末尾に執筆者名を付してある。しかし、第Ⅵ章7, 8, 9, 11, 12, 13については後述するとおりである。なお、英文サマリーはトロント大学の高宮氏の手をわずらわせた。

●本書の図面、実測図の資料作成や浄書は、主としてつぎの4名がおこなった。

土器類や土製品類等の分布図資料作成——椿坂恭代
 テン出土の木製品類実測図——平川泰彦
 その他の遺構、遺物実測図——横山英介

●本書の写真撮影、焼付は、つぎの3名がおこなった。

土器類や土製品類の撮影、焼付——吉崎昌一
 炭化材、炭化種子、魚歯骨の撮影、焼付——平川泰彦
 現場撮影やその他の遺物の撮影、焼付——横山英介
 また、「PL-□-33」の写真は、富樫泰時、菅原俊行両氏から借用したものである。
 厚く御礼申し上げる次第である。

●本書の第Ⅵ章7, 8, 9, 11, 12, 13の執筆は、下記の方々に依頼し玉稿をいただいた。
 厚く御礼申し上げる次第である。

第Ⅵ章7, 8——高橋理（東北大学考古学研究室）

第Ⅵ章9——Gary W. Crawford

（Department of Anthropology, Erindale Campus, University of Toronto, Canada.）

この章の和文抄訳は同志社大学石川直章氏が作成した。

第Ⅵ章11——佐伯有清（成城大学文芸学部）

第Ⅵ章12——野口徹、小笠原正明、石井邦宣（北海道大学工学部）

第Ⅵ章13——山田悟郎（北海道開拓記念館）

●本書に用いた引用、参考文献は、各節毎にその末尾に示した。

[本文編目次]

序	1
サクシュコトニ川遺跡調査報告書概要	3
Summary	4
第Ⅰ章 調査に至る経緯	10
第Ⅱ章 サクシュコトニ川遺跡と旧コトニ川水系における擦文時代の遺跡	12
第Ⅲ章 サクシュコトニ川遺跡の調査概要	15
Ⅲ-1 サクシュコトニ川遺跡の位置と環境	15
Ⅲ-2 発掘区と周辺の地形	17
Ⅲ-3 グリッドの設定と遺構・遺物の実測	17
Ⅲ-4 発掘調査の経過	18
第Ⅳ章 サクシュコトニ川遺跡の層序	19
Ⅳ-1 08-15グリッド～30-15グリッドにおよぶ西壁面の土層状況	19
Ⅳ-2 03-09グリッド～10-09グリッドにおよぶ東壁面の土層状況	20
Ⅳ-3 06-04グリッド～06-12グリッドにおよぶ南壁面の土層状況	20
Ⅳ-4 遺物包含層	21
第Ⅴ章 サクシュコトニ川遺跡の遺構	22
V-1 第1文化層の遺構	22
V-2 第2文化層の遺構	22
V-3 竪穴住居跡	23
V-4 土壇	38
V-5 集石	48
V-6 焼土・炭化物集積	50
V-7 柵状遺構—テシ—	75
V-8 遺構の小括	92
第Ⅵ章 サクシュコトニ川遺跡の遺物	95
Ⅵ-1 第1文化層の遺物	95
Ⅵ-2 第2文化層の出土遺物	98
Ⅵ-3 土器類	98
Ⅵ-4 土製品類	125
Ⅵ-5 石器・石製品および礫	128
Ⅵ-6 金属器および鉄滓	133
Ⅵ-7 骨角器	134
Ⅵ-8 動物遺存体	135
Ⅵ-9 植物種子遺存体(Sakushu-Kotoni-Gawa Plant Remains)	143
Ⅵ-10 炭化材	161
Ⅵ-11 刻字土器「夫」の意義	185
Ⅵ-12 出土スラグの顕微鏡観察について	191
Ⅵ-13 花粉化石について	192
Ⅵ-14 第3文化層の土器	197
まとめにかえて	198

Tab. Ⅰ-1	構内遺跡一覧①	16
Tab. Ⅰ-2	構内遺跡一覧②	16
Tab. Ⅰ-3	テシ木材の樹種	81
Tab. Ⅰ-4	基本骨格構造材の樹種	82
Tab. Ⅰ-5	第2文化層の土器類出土数	98
Tab. Ⅰ-6	土製玉計測表	127
Tab. Ⅰ-7	石器、石製品種類別出土点数	128
Tab. Ⅰ-8	サケ科魚類椎骨片・遊離歯	136
Tab. Ⅰ-9	出土動物遺存体	136
Tab. Ⅰ-10	遊離歯エナメル質高	137
Tab. Ⅰ-11	標本サケエナメル質高測定値	138
Tab. Ⅰ-12	椎骨前位・後位端の横径測定値	138
Tab. Ⅰ-13	推定椎骨横径	139
Tab. Ⅰ-14	フローテーション・サンプルから検出された植物種子種(属)名一覧	148
Tab. Ⅰ-15	フローテーション・サンプルから検出された植物種子の数量比	156
Tab. Ⅰ-16	炭化材の樹種	166
Tab. Ⅰ-17	検索済炭化材重量	167
Tab. Ⅰ-18	サクシュコトニ川遺跡における木材の樹種	183
Tab. Ⅰ-19	産出した花粉・孢子化石数	193
Tab. Ⅰ-20	第1文化層出土土師器・須恵器一覧表	204
Tab. Ⅰ-21	第2文化層出土土師器坏一覧表	209
Tab. Ⅰ-22	第2文化層出土須恵器一覧表	218
Tab. Ⅰ-23	第2文化層出土土師器甕一覧表	220
Tab. Ⅰ-24	第2文化層出土支脚一覧表	266
Tab. Ⅰ-25	第2文化層出土土製玉一覧表	266
Tab. Ⅰ-26	第2文化層出土紡錘車一覧表	267
Tab. Ⅰ-27	第2文化層出土フイゴ羽口・石製品一覧表	267
Tab. Ⅰ-28	第2文化層出土金属器・鉄滓一覧表	267
Tab. Ⅰ-29	第3文化層出土土器一覧表	268
Tab. Ⅰ-30	焼土・炭化物集積一覧表	269
Tab. Ⅰ-31	集石の計測	271

PL. Ⅱ-1	旧コトニ川水系における擦文時代の遺跡分布とサクシュコトニ川の位置	13
PL. Ⅱ-2	グリッドの表示方法	17
PL. Ⅱ-3	1号竪穴住居跡カマドの袖に入っていた土器片(ドット部分)	23
PL. Ⅱ-4	焼土、炭化物集積のグループ分け	50
PL. Ⅱ-5	テシ出土の土器	78
PL. Ⅱ-6	トネリコ割材の木取り	85
PL. Ⅱ-7	丸太からの板の割り取り	85
PL. Ⅱ-8	個体番号木器214:ヤスの横断面の拡大写真(×4)	86
PL. Ⅱ-9	木部細胞の壁形態	87
PL. Ⅱ-10	I期, II期別集落構成の図	93
PL. Ⅱ-11	須恵器大甕	97
PL. Ⅱ-12	甕の形態分布	109
PL. Ⅱ-13	土器類種類別出土量	117
PL. Ⅱ-14	土器類形態別出土量	117
PL. Ⅱ-15	土師器坏, 須恵器の底部拓影	119
PL. Ⅱ-16	甕の底部拓影 ①	120
PL. Ⅱ-17	甕の底部拓影 ②	121
PL. Ⅱ-18	土器の種類別組成比	123
PL. Ⅱ-19	土器の形態別組成比	123
PL. Ⅱ-20	磨製石斧とたたき石	129
PL. Ⅱ-21	礫石器の重量分布図	131
PL. Ⅱ-22	2号竪穴住居跡出土の離頭銚(1/2)	134
PL. Ⅱ-23	炭化種子の計測値と比率(長/巾):アワ	151
PL. Ⅱ-24	炭化種子の計測値と比率(長/巾):キビ	151
PL. Ⅱ-25	炭化種子の計測値と比率(長/巾):オオムギ	152
PL. Ⅱ-26	炭化種子の計測値と比率(長/巾):コムギ	153
PL. Ⅱ-27	炭化材の樹種別分布①	168
PL. Ⅱ-28	炭化材の樹種別分布②	169
PL. Ⅱ-29	炭化材の樹種別分布③	170
PL. Ⅱ-30	炭化材の樹種別分布④	171
PL. Ⅱ-31	炭化材中の木材腐朽菌	174
PL. Ⅱ-32	平城宮跡出土の「夫」	186
PL. Ⅱ-33	秋田市湯の沢F遺跡3号土壌墓出土土器の「夫」	186
PL. Ⅱ-34	サクシュコトニ川遺跡出土土器	188
PL. Ⅱ-35	スラグの外観	191
PL. Ⅱ-36	スラグの顕微鏡写真(×50)	191
PL. Ⅱ-37	スラグの顕微鏡写真(×200)	191
PL. Ⅱ-38	第3文化層出土の注口土器	197

第Ⅰ章

調査に至る経緯

〔調査までの経緯〕

北海道大学構内に古代の遺跡があることは、すでに、明治20年代に知られていた。当時札幌市内の古代遺跡をしらべていた高畑宜一の古代堅穴分布図に、旧恵迪寮西側の原生林に数多くの堅穴が窪地として残っている様子が示されている(羽賀 1975)。この遺跡の一部が初めて発掘調査されたのは、昭和27年のことである。当時北海道大学北方文化研究室の活動の一環として、窪地として残っている堅穴の分布図が作成され、その一部に対して発掘調査が行なわれている。その際、確認された堅穴の数は87基、発掘によって確められた堅穴住居は、形が隅丸方形で「皿状の床」をもつもので、出土土器は「土師器」の特徴をもつものであった(北大調査団 1955)。ここはその後、『北大遺跡』と呼ばれ現在に至っている。当地区は、昭和56年に北海道大学埋蔵文化財調査室によって、再度堅穴を含む周辺の地形測量図の作成が行なわれた。それに基づいてこの遺跡は周囲の自然林を含めた『遺跡保存庭園』として保存処置が計られた。(吉崎・岡田編 1983)。

昭和55年6月に発足した埋蔵文化財調査室は、構内におけるあらゆる土木工事に対して、事前にその地区の埋蔵文化財包蔵の有無・性格などを確認調査することを最初の任務とするものである。昭和57年10月までに埋蔵文化財調査室が行なった構内における遺跡の分布および発掘調査の結果をみると、28遺跡(地点)が確任されている(吉崎・岡田編 1983)。

昭和57年度当初に、大学本部より示された学生寄宿舍の建設予定地は、前述した明治中期の「高畑分布図」においても、埋蔵文化財調査室による構内遺跡分布図においても埋蔵文化財の存在が知られていない地域である。したがって、遺跡確認のための予備調査が必要となった。

〔予備調査〕

▶予備調査期間／昭和56年7月24日～昭和56年8月12日

当該地は準硬式野球場跡地であったため、積土がほぼ全域にわたってみられた。その除去に重機が使用された。まず、重機をF棟予定地に配し積土の除去を行ない、原地表土を取り除いて精査したところ、土師器の破片が2点出土した。つづいて、A、B、C、G棟予定地において同様な作業を行なったところ、同じように土師器の破片が出土した。したがって、当該地は、擦文時代に営まれた遺跡であることが判明した。このため、プロジェクトチームから、大学及び各関係機関に、文化財保護法による正規の手続きをふまえた協議を行なう必要がある旨報告された。

〔本調査〕

本調査を行なうにあたって、建設予定地とその周辺、つまりA～G棟および各棟間をその対象とすることに決定した。

▶遺跡所在地／札幌市北区北17条西13丁目3番地（北海道大学札幌団地）

▶調査主体／北海道大学

▶本調査期間／昭和56年8月14日～昭和57年9月24日
（約13カ月半）

▶発掘調査面積／5,904㎡

▶北海道大学埋蔵文化財調査プロジェクト・チーム

吉崎昌一（文学部助教授・調査プロジェクト責任者）

岡田宏明（文学部教授）

岡田淳子（文学部助教授）

林 謙作（文学部助教授）

菊池俊彦（文学部助教授）

横山英介（埋蔵文化財調査室・発掘調査担当者）

松岡達郎（埋蔵文化財調査室）

椿坂恭代（埋蔵文化財調査室）

平川泰彦（埋蔵文化財調査室）

《謝辞》

発掘調査および整理作業をつうじ、藤沼邦彦、深沢和三、石田茂雄、石附喜三男、伊東信雄、小松正夫、近藤義郎、桑原滋郎、松谷暁子、桜井清彦、菅原俊行、須藤隆、鈴木博子、田才雅彦、富樫泰時等の諸氏（アルファベット順）、ならびに札幌市教育委員会埋蔵文化調査室、秋田市教育委員会社会教育課、秋田県埋蔵文化財センター、文化庁記念物課、北海道教育委員会文化課、北海道大学文学部北方文化研究施設等の諸機関の御助力をえた。

《発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである（参加名簿順）》

三崎かおる、高橋立史、泉千鶴子、山田ヒデユ、菊地妙子、山口元雄、荒木ミヤ子、奥平操、高橋雅輝、峯キミ、中村全、柴田幹雄、浜沢満、星秀陽、立川佐津子、剣持早苗、原口萩子、田中妙子、安永アイ子、山崎真紀子、滝沢健裕、山口清、川井正人、植松留美子、溝口利明、渡辺茂、岡田奈智子、北田裕章、松井智浩、安田広光、石和治美、筒井勇二、春田俊哉、中村ゆり、林一朗、住谷研、田中修、高畑菜穂子、大本弘志、三谷純子、水山彰、小田桐秀人、品田紀江、和田紀昭、奄敬子、浦喜子、堀内洋子、大山哲男、橋本文宏、大門啓子、阿部順子、平塚昌子、二宮次郎、神田直子、金子峯行、渡辺洋子、平山恵子、中村利子、高橋典子、井上英子、小野信子、武部信彦、菊地リキ、久保サヨ子、木下悦子、岡田洋一、佐藤訓敏、和田澄子、鳴海ゆり子、渡辺幸、山下かず子、波川静枝、上田喜美子、舟口直子、永江加代子、小林雅子、小山田真弓、竹田葉子、尾崎周子、由本正英、高野勉、相内泰三、山田敬一、大八木秀子、唐島田淳、谷口牧子、田中淳、大窪千枝子、遠藤京子、川合トシ子、藤田恵子、佐藤恵美子、松橋達也、谷坂昭彦、菅野靖、坂下典子、松本久美子、金沢弘晃、国本チズ子、大泉嘉彦、寺崎智江、佐々木あずさ、加藤伸哉、吉田勤、佐藤由香里、伊藤雅子、鈴木主位、若木昭平、笠原曜子、生木純一、川治順子、川又時子、素麵クミ子、佐藤君子、長野愛子、佐藤和子、宇佐美美津江、鈴木留美子、蝦名京子、田中清子、白田恭子、後藤栄子、国田礼子、阿部留美子、加藤ヤヨエ、佐藤亮子、本田敦子、工藤茂行、工藤義衛、桜木三千代、佐々木享次、成田幸典、横剛、及川大介、酒井洋子、細井紘子、越湖梅子、山本一郎。

第Ⅱ章

サクシュコトニ川遺跡と旧コトニ川水系における

擦文時代の遺跡

遺跡の分布図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を使用してある。旧河川は、サクシュコトニ川、セロンベツ川およびその関連水系を、清水雅男が航空写真の判読をもとに作成したもの(吉崎・岡田編 1983 P.15)に、最上流部は明治20年代の古地図から復元・追加したものである。

分布図に示した遺跡のうち、北大構内の遺跡は、北海道大学埋蔵文化財調査室が昭和55年以来発掘調査を実施し、遺跡の時代や性格などがほぼ明らかにされているもの7箇所(PL.Ⅰ-1/1～7)と『遺跡保存庭園』として活用されているもの(吉崎・岡田編 1983)1箇所(PL.Ⅰ-1/8)の合計8箇所である。

北大附属植物園内の1箇所(PL.Ⅰ-1/25)は、昭和57年に発掘調査を実施したもの(吉崎・岡田編 1984)である。

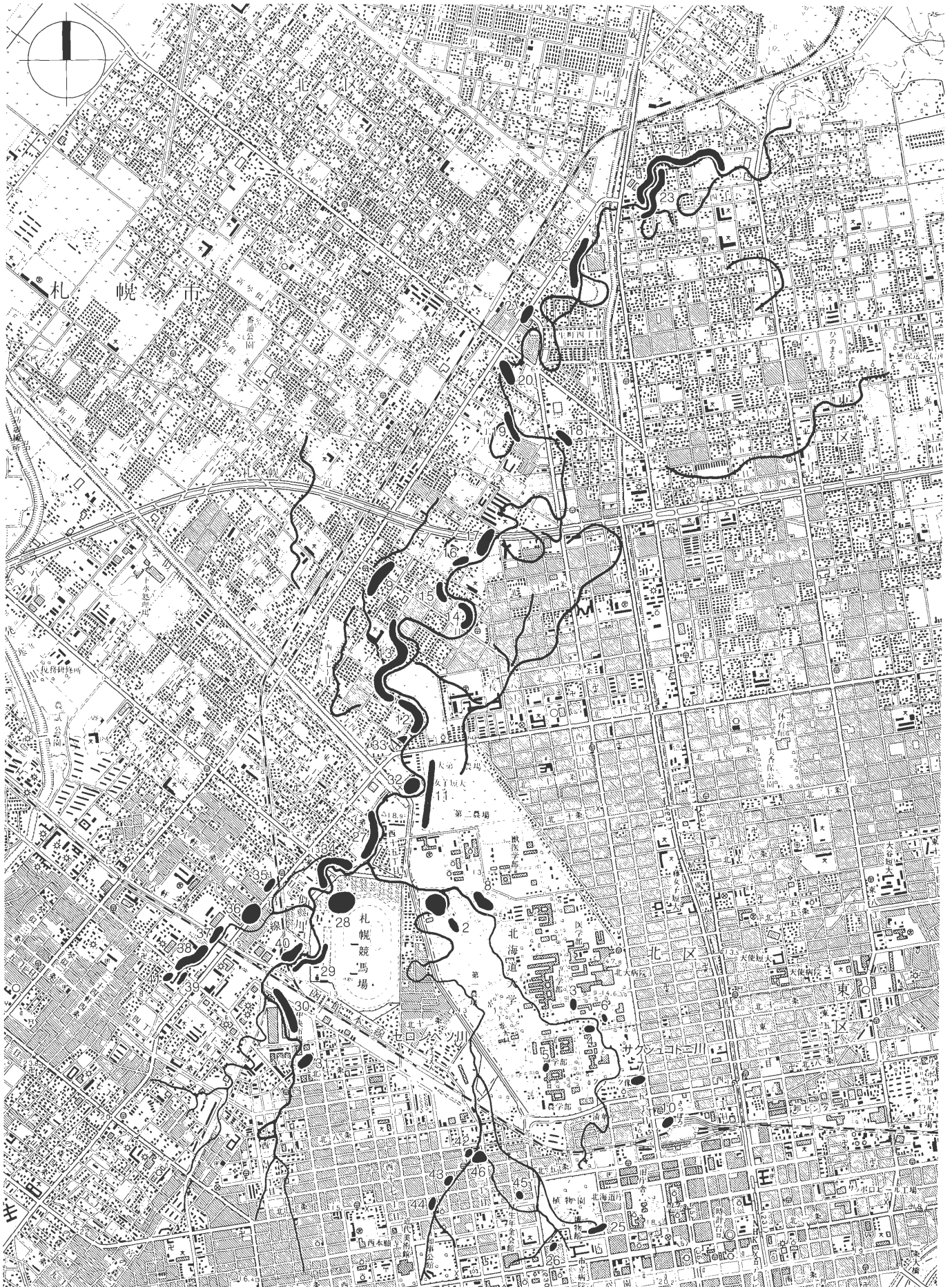
一方、北大関係以外に示した37箇所(PL.Ⅰ-1/10～46)の遺跡(地点)は、明治20年代に高畑宜一によって作成された分布図(羽賀 1975)と札幌市教育委員会による埋蔵文化財台帳(札幌市教育委員会 1984)との双方から擦文時代のものと判断された遺跡(地点)を転載したものである。

[地図に示した遺跡(地点)名]

図中に示された番号の遺跡名は、下記のとおりである。

1	サクシュコトニ川	13	K-437	25	C-44	37	N-427
2	課外活動共用施設	14	K-438	26	C-415	38	N-426
3	応電前	15	K-439	27	N-434	39	N-425
4	共同溝	16	K-440	28	C-430	40	N-428
5	農学部演習林	17	K-441	29	C-429	41	N-167
6	薬学部受水槽	18	K-442	30	C-424	42	C-421
7	中講堂	19	K-443	31	C-423	43	C-449
8	北大	20	K-444	32	K-120	44	C-422
9	K-35	21	K-445	33	K-36	45	C-450
10	K-135	22	K-446	34	N-434	46	C-420
11	K-436	23	K-447	35	N-433		
12	K-434	24	H-448	36	N-432		

PL. ①-1 旧コトニ川水系における擦文時代の遺跡分布とサクシュコトニ川の位置



*サクシュコトニ川、セロンベツ川およびその関連水系のみ

0 500 1000 1500m

〔旧コトニ川水系の遺跡群〕

PL.Ⅱ-1 に示した遺跡(地点)46個所のうち、発掘調査によって時期や性格等が判明しているものは、北大埋蔵文化財調査室の調査による8遺跡のほか、札幌市教育委員会によるK-446遺跡(札幌市教育委員会 1979)(PL.Ⅱ-1/22)がある。

残る35遺跡(地点)については、擦文時代に営まれたものを多く含むと推定されるが、遺跡個々についての時期や規模・性格等は、まだ不明の部分が多い。

このような状況のもとに、発掘資料や一般調査・予備調査等の資料から判断するなら旧コトニ川水系に営まれた遺跡群は、擦文時代の開始期(サークル会館遺跡・共同溝遺跡・受水槽遺跡・中講堂遺跡等)から終末期(H-448遺跡等)に至る各期にわたるもので構成されていたことはほぼ間違いないところであろう。しかし、それらの遺跡(地点)の大半は市街化などの開発によって消滅してしまっているため、それら相互の関係の証明はむづかしい。

《引用文献》

- ▶ 吉崎昌一・岡田淳子編 1983 『北大構内の遺跡2』 北海道大学
- ▶ 吉崎昌一・岡田淳子編 1984 『北大構内の遺跡3』 北海道大学
- ▶ 羽賀憲二 1975 「札幌市琴似川流域にあった堅穴群—明治中頃に作られた堅穴分布図について」
- ▶ 札幌市教育委員会編 1984 「札幌市埋蔵文化財台帳」『札幌市文化財調査報告書2』
- ▶ 札幌市教育委員会編 1979 「K-446 遺跡」『札幌市文化財調査報告書 XX』

第Ⅲ章

サクシュコトニ川遺跡の調査概要

Ⅲ-1

[サクシュコトニ川遺跡の位置と環境]

① 構内の座標系

構内の遺跡や遺物採集地点の標示に、構内を25mメッシュに分けた。座標系は、国家公共座標第Ⅱ系に従って設定した。原点は、 $X = -103.4500\text{km}$ 、 $Y = -73.5150\text{km}$ の点とした。

② 構内の基準点

構内の基準点は、構内中央道路に沿って3点、総合運動場に2点設定してある。位置の標示は公共座標値及び旧道庁座標値で、高さは水準点を基準として標示されている。

- ▶ 基準点№1：構内クラーク会館前20mの植樹帯の中に本点はある。 $X = -103.183\text{km}$ 、 $Y = -73.536\text{km}$ 、標高16.278mである。基準点№2との平面距離は、597.056mである。
- ▶ 基準点№2：歯学部前で、中央道路と北13条通りとの交差点より10m北進した道路右側に本点はある。 $X = -102.594\text{km}$ 、 $Y = -73.632\text{km}$ 、標高は、14.539mである。基準点№3との平面距離は、603.972mである。
- ▶ 基準点№3：教養部前で、中央道路と北17条通りの交差点より30m南進した道路右側に本点はある。 $X = -102.002\text{km}$ 、 $Y = -73.748\text{km}$ 、標高は、12.857mである。
- ▶ 基準点№4：総合運動場前で、中央道路と北13条通りの交差点より300m北進すると左側に総合運動場へ向う道路がある。その道路を700m進むと本点はある。 $X = -102.217\text{km}$ 、 $Y = -74.302\text{km}$ 、高さは、11.649mである。基準点№5との平面距離は、184.999mである。
- ▶ 基準点№5：総合運動場横で、中央道路と北13条通りの交差点より300m北進すると左側に総合運動場へ向う道路がある。その道路を900m進んだ総合運動場横に本点はある。 $X = -102.063\text{km}$ 、 $Y = -74.405\text{km}$ 、標高は、11.312mである。

③ サクシュコトニ川遺跡の位置

北海道大学構内(以後「構内」と略称)の中央道路と北13条通りの交差点より約300m北進すると、左側に総合運動場に向う道路がある。その道路を約900m進んだ左手に準硬式野球場がある。そこは、道々下手稲札幌線とサクシュコトニ川とが交差する所で、構内の最も西隅に相当する。サクシュコトニ川遺跡は、準硬式野球場を中心にその周辺一帯を含む。

④ 構内の遺跡分布について

北海道大学埋蔵文化財調査室が、昭和55年以降発掘調査や一般調査を実施したところに

よると、構内には統縄文時代の後半期から擦文時代に及ぶ遺跡が数多く分布していることが判明している。

- a 発掘調査を行なった遺跡(地点)
- 発掘調査により時期・性格等がほぼ明らかになった遺跡は、サクシュコトニ川遺跡を含め8箇所ある(Tab.Ⅰ-1).
- b 一般調査・予備調査から遺跡であることが判明した地点
- 20箇所にのぼる(Tab.Ⅰ-2).

Tab. Ⅰ-1 構内遺跡一覧①

位置	遺跡名	時代・時期	性格	文献
PLⅠ	1 サクシュコトニ川	擦文・中期	集落	(本書)
	2 課外活動共用施設	擦文・前期	集落(一部)	吉崎・岡田編 1981
	3 応用電気研究所前	擦文・(?)	竪穴一基	吉崎・岡田編 1981
	4 共同溝	擦文・前期	集落(一部)	吉崎・岡田編 1983
	5 農学部演習林	擦文・(?)	遺物包含地	吉崎編 1985
	6 薬学部受水槽	擦文・前期	廃棄場	吉崎編 1985
	7 中講堂	擦文・前期	集落(一部)	(未)
	8 ポプラ並木東地区	統縄文・後期	墓地	(未)

Tab. Ⅰ-2 構内遺跡一覧②

地点名	遺物・遺構	構内座標系
課外活動共用施設北側広場	土師器	50-50周辺
体育指導センター東側	土師器	46-53
第一農場内	土師器	34-45
第一農場内	土師器	29-44
第一農場内	土師器	29-42
第一農場内	土師器, 石器	29-38
第一農場内	土師器, 石器	33-33周辺
第一農場内	土師器, 石器	22-37周辺
ポプラ並木東地区～理・地物研	土師器, 後北式土器, 北大式土器, 石器	22-28周辺
農・苗畑北側	土師器, 石器	08-36周辺
農学部北側実験畑	土師器	15-23周辺
ポプラ並木北東側畑	土師器, 竪穴(?)	25-34
附属図書館玄関前	土師器	13-11
文学部車庫	土師器	15-12
情報処理教育センター西側	土師器, 竪穴	23-10
薬学部-応電研間	擦文土器, 石器, 竪穴	28-13周辺
恵迪寮跡地	土師器, 竪穴	48-36
言語文化部建設予定地	土師器	47-28
第二農場西北部	土師器	103-60
第二農場北東部	土師器	107-53

⑤ 構内の河川

構内には、旧コトニ川の2本の支流が流路を刻んでいた。ひとつはサクシュコトニ川で、いまも構内に姿をとどめてはいるが、すべてが自然の流路ではない。水源は北大付属植物園の北側、伊藤邸内の湧水池にある。もうひとつはセロンベツ川とよばれ、いまは埋設してみることができない。したがってその流路は、清水が実施した航空写真の判読と現地調査との結果を復元したものである(吉崎・岡田 1983)。また、この川の最上流部は流路が判然としないため、明治時代の古地図から復元しておいた。それにもとづけば最上流部や水源は、北海道大学農学部付属植物園内にあったとみられる(PL.Ⅱ-2)。

Ⅲ-2

[発掘区と周辺の地形]

遺跡は、標高約11m、その北西側をいまでも北大構内を流れるサクシュコトニ川に、また南東側を幅約12mの埋没河川(セロンベツ川)によって囲まれた舌状微高地上に営まれている(PL.Ⅱ-2)。

この遺跡の南東方向約100mには、昭和55年に発掘調査が行なわれ、擦文時代前期の竪穴住居跡3基がみつかった「課外活動共用施設遺跡」(吉崎・岡田編 1981)が、また東方向約200mには同じく擦文時代の竪穴約40基を含む『遺跡保存庭園』として活用している「北大遺跡」がみられる。

Ⅲ-3

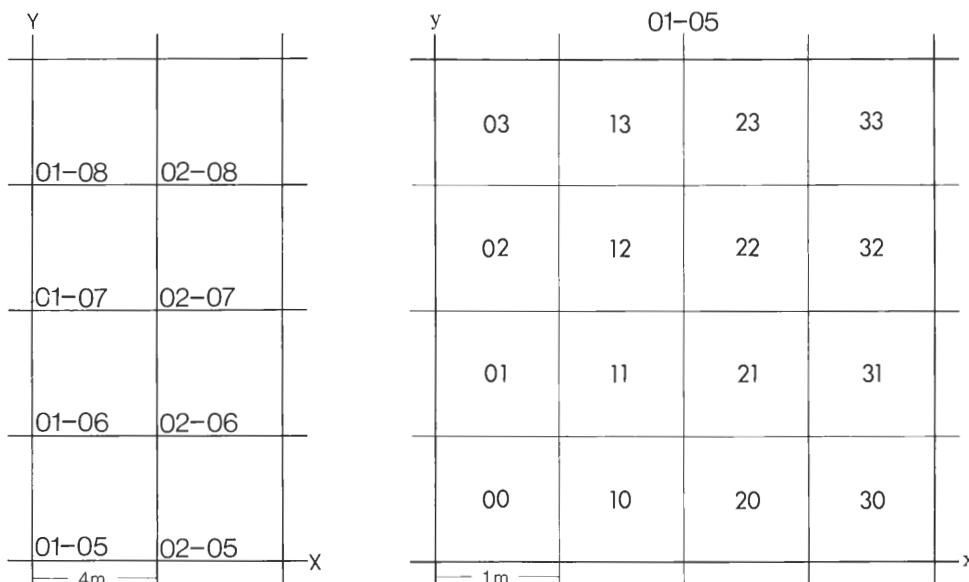
[グリッドの設定と遺構・遺物の実測]

調査用のグリッドは、4m×4mの方形区を単位とした。調査区域内の学生寄宿舍B棟—G棟—F棟の中心軸を結ぶラインと平行関係にある最も東端をかすめる軸(X軸)と、それに直交する最も南端を通る軸(Y軸)で直交座標系を設定し、4m単位で区切って大グリッドとした。X軸はほぼ南東から北西へ、Y軸はほぼ北東から南西へ向う。グリッドの原点は、調査区域の最も東南隅とし、ここから調査区域全体に4m×4mの大グリッドを設定したPL.Ⅱ-2。グリッドの原点と構内基準点との位置関係については、PL.Ⅱ-2に示す通りである。

4m×4mの大グリッドをさらに1m×1mの小区画に分割し、小グリッドとした。

グリッドの呼称は、そのグリッドの原点寄りの角の位置座標をもとに付けている。大グリッドでは4m単位のX座標の数値とY座標の数値を組み合わせた「X-Y」の二桁数字で、その区画を原点寄りにもつ大グリッドの呼称とした。例えば、大グリッド01-05のY軸正方向に隣接する大グリッドは01-06、X軸正方向に隣接する大グリッドは02-05となる(PL.Ⅱ-2左)。また、小グリッドの呼称も基本的には大グリッドと同様で1m単位のx座標とy座標を組み合わせた「x y」の数字で小区画を表示した。ひとつの大グリッドの中には、00～33まで16個の小グリッドが含まれる(PL.Ⅱ-2右)。

PL.Ⅱ-2 グリッドの表示方法



* しばしば「サークル会館」とよばれている。

このような表示方法によれば、調査区域での遺構、遺物の位置表示や小グリッドの呼称は、大グリッド名と小グリッド名の組み合わせ、「X-Y[xy]」として表示することができる。

遺構の平面実測や遺物の出土位置の実測は、大グリッドを区画する測量杭間を1 m単位に小区分し、それを水系によって結ぶ簡易遣り方法によって行なった。特に、出土遺物は全点実測を基本とし、小グリッド内におけるx yの距離をcm単位で示すこととした。つまり、遺物台帳には、遺物番号、日付け、地層のほか、その遺物の位置の大グリッド名と小グリッド名、小グリッド内でのx軸、y軸のそれぞれの数値が記入される。一方、遺構に伴う遺物やその在り方に何らかの意味があると判断されたものについては、10分の1の縮尺で実測図を作成、あわせて写真撮影を行なった。

遺跡内の水準測量は、調査区域の東南方向約40 mに設定した「北大基準点No. 5」(標高11.312 m)から、調査区域内に11.350 mのベンチマークを引用・設定し、これを基準として1 cm単位で測量値を求めた。

Ⅲ-4

〔発掘調査の経過〕

発掘調査は、昭和56年8月4日から開始され、昭和57年9月24日に完了した。

調査は、まず最初に、予備調査の続行作業として調査区域の積土を重機で除去した。この作業に延べ18日間を要した。それと並行して人手による精査を行なった。精査は、遺構の有無や遺物の広がり等を確かめることを初期の目的とした(～9月23日)。その結果、遺構は学生寄宿舍C、D、E棟予定地区を除く地域に分布していることが確かめられた。また、遺物の分布状況もほぼそれに見合う在り方を示していることも判明した。

まず遺構の発掘は、堅穴2基の調査を並行して進めた。その際、各堅穴の周辺に分布している遺物の取り上げも並行して実施した。遺物は全点測量を基本とし、必要に応じて写真撮影を行なった。

この作業は降雪前まで続けられ、1号と3号堅穴、ついで5号堅穴の3基の堅穴とその周辺の調査を終えた。

降雪期をむかえると、テントを3張り用意して発掘作業を続けた。テントは厚手の防水布製で、4間×5間の大きさのものである。テント内では大型石油ストーブを昼夜連続して使用し、遺物包含層の凍結防止につとめた。また、照明には蛍光灯をあてた。

冬期間の調査は遺物包含層に限って行ない、昭和56年12月3日から昭和57年4月3日までに、約1,390㎡発掘したことになる。

野外調査シーズンの到来とともに、埋没河川内の柵状遺構の調査を開始した(昭和57年5月7日～6月23日)。この種の漁撈施設が発掘調査によって確かめられたのは日本でも例がなく、実に多くの収穫を得ることができた。この作業と並行して残り2基の堅穴や多くの焚火跡、廃棄物集積遺構等のほか遺物集中区の調査を行ない、擦文時代としては稀にみる多量の遺物を検出、収納して9月9日に発掘調査を終了した。

一方、発掘作業とは別に遺構や遺物包含層の土壌サンプルを採取、一定の量になり次第土壌水洗法・浮遊選別法による微細遺物の收拾を行ってきたが、予想をはるかに上回る動・植物遺存体の検出に成功、9月24日をもってすべての現場作業を完了した。延べ13か月の長期におよぶ調査であった。

(横山英介)

第Ⅳ章

サクシュコトニ川遺跡の層序

サクシュコトニ川遺跡の層序は、08-15グリッドから30-15グリッドを通る各調査区の西壁面，03-09グリッドから10-09グリッドを通る各調査区の東壁面，06-04グリッドから06-12グリッドを通る各調査区の南壁面の観察で示す。遺構に関わる堆積状況については，第Ⅴ章のそれぞれの遺構の項で示す。

Ⅳ-1

〔08-15グリッド～30-15グリッドにおよぶ西壁面の土層状況〕

この地層断面は，遺跡をほぼ南北に縦断する基本層序を示している。第Ⅰ層，第Ⅱ層の観察は，遺跡の北西地域の28-15グリッドをもとに行なった。遺物包含層は2層あり，ひとつは第Ⅲ層中，もうひとつは第Ⅳ層下面～第Ⅴ上面にかけてである。特に，当遺跡で遺物包含層の主体をなす第Ⅴ層は，大部分はほぼ水平に近い堆積を示しているが，28-15グリッドから29-15グリッドにかけて緩い傾斜をみせる。これは，その地域がサクシュコトニ川に近接しているためである。

また，この地層図の東南部分にテシの埋没状況図が接続する。

層序区分と特徴

- ▶第Ⅰ層：黒色の粘土層。未分解の泥炭を含む。部分的に灰白色の火山灰や黄白色の細砂粒の堆積がみられる。遺物は出土していない。
- ▶第Ⅱ層：黄色の粘土層。部分的に炭化物の小粒を含む。遺物は出土していない。
- ▶第Ⅲ層：暗灰色の粘土層。粘性がつよく乾燥すると縦位に亀裂が入る。土師器などを出土し，**第1文化層**と呼称する。
- ▶第Ⅳ層：3層に細分できる。
 - a層：黄褐色の粘土層。縦位に亀裂が入る。
 - b層：暗灰黄色の粘土層。炭化物の細粒を含む。
 - c層：灰白色の粘土層。

遺物包含層である。各層とも多くの土師器などが出土し，この遺跡の文化層の主体をなす地層と考えられる。これを**第2文化層**と呼称する。
- ▶第Ⅴ層：2層に細分できる。
 - a層：暗灰黄色の粘土層。下部は白色を呈する。
 - b層：暗灰色の粘土層。a層の暗灰色の粘土が沈殿し堆積した様相を呈する。

遺物の一部はa層から出土する。これらの遺物は第Ⅳ層のものと型式学的に区別することができなかったので**第2文化層**の下部として扱った。
- ▶第Ⅵ層：2層に細分できる。
 - a層：12-15グリッドから13-15グリッドにかけて青色化した粘土層の堆積がみられる。
 - b層：黄褐色の細砂層。遺物は出土していない。

Ⅳ-2

〔03-09グリッド～10-09グリッドにおよぶ東壁面の土層状況〕

この地層断面は、遺跡の東部地区で焚火跡や炭化物堆積跡等が集中するところに設定してある。旧埋設河川（セロンベツ川）の左岸に相当する。

層序区分と特徴

- ▶第Ⅰ層，第Ⅱ層：大部分は消失していてみることできない。わずかに残存している所で見ると，第Ⅱ層は黄色の粘土層である。
- ▶第Ⅲ層：暗褐色の粘土層。この遺跡の遺構の上を覆う地層である。土師器等を出土し，**第1文化層**と呼称する。
- ▶第Ⅳ層：黄色の粘土層。この地区では細砂はでていない。全体に縦位・斜位の亀裂が入る。下部から土師器等が出土する。
- ▶第Ⅴ層：2層に細分できる。
 - a層：灰色の粘土層。縦位の亀裂が入る。
 - b層：暗灰色の粘土層。
 - a，b層からは土師器が出土する。第Ⅳ層下部から**第2文化層**と呼称する。
- ▶第Ⅵ層：2層に細分できる。
 - a層：灰色の粘土と黄褐色の細砂とが厚さ5～10cmで互層を形成，堆積している。
 - b層：黄褐色の細砂層。

Ⅳ-3

〔06-04グリッド～06-12グリッドにおよぶ南壁面の土層状況〕

この地層断面は、遺跡の東部地区で焼土や炭化物集積等が集中するところに設定してある。

層序区分と特徴

- ▶第Ⅰ層，第Ⅱ層：大部分は消失していてみることはできない。わずかに残存している06-11グリッドによれば，第1層は黒色の粘土層，第Ⅱ層は黄色の粘土層である。
- ▶第Ⅲ層：暗褐色の粘化層。06-04グリッドから06-07グリッドにかけてはほぼ水平に堆積，06-08グリッドを中心に盛り上がる。さらに06-11グリッドでは一段と窪んで堆積する。
- ▶第Ⅳ層：黄色の粘土層。縦位に亀裂が入る。堆積状況は第Ⅲ層と同様である。
- ▶第Ⅴ層：2層に細分できる。
 - a層：灰色の粘土層。炭化物の小粒を含む。
 - b層：暗灰色の粘土層。06-04グリッドから06-07グリッドまでは一様に堆積しているが，06-10グリッドでは部分的に堆積，06-11グリッドではみられない。
- ▶第Ⅵ層：灰色の粘土層と黄褐色の細砂が互層をなして堆積する地層。
 - b層：褐色の細砂層。

Ⅳ-4 〔遺物包含層〕

サクシュコトニ川遺跡の遺物は、無遺物の間層によって区分される3枚の地層に含まれていた。

最上位の遺物包含層は第Ⅲ層であり、これを**第1文化層**と呼称する。

つぎは、第Ⅳ層から第Ⅴ層上面にかけてであり、この遺跡の主体をなす文化層である。これを**第2文化層**と呼称する。

最下位の遺物包含層は第Ⅵb層で、縄文期の土器片3点が06-10,07-07グリッドから出土している。遺物量も少なく、出土範囲も旧河川に近い非常に狭い範囲に限られる。**第3文化層**と呼称する。
(横山英介)

第Ⅴ章

サクシュコトニ川遺跡の遺構

V-1

〔第1文化層の遺構〕

▶焼土72

A 位置

30-16～31-16グリッド。

B 規模・形状

長軸5 m強で不整形を呈する。中央部と左右の3個所が真赤に焼けており、全面に炭が分布している。周辺は暗紫色である。

C 堆積

第Ⅲ層。

D 出土遺物

焼土の中から土器片と共に多くの動物、植物遺存体が出土した。

① 土器

土師器甕が3個体分出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕107	――
(総個体数 3)	甕173	――
	甕174	――

②土製品

土製玉（遺物番号6869）が1点出土した。

③動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯、コイ科魚類椎骨が多量に出土した。

④植物遺存体

ヤマグワ、ヤチダモ、ドロヤナギ、エゾノカワヤナギ、オニグルミ、ハンノキ、カツラ、ニワトコ、ヤマブドウなどが検出された。

V-2

〔第2文化層の遺構〕

第2文化層から発見された遺構の種類と数はつぎの通りである。

竪穴住居跡――5基

土壇――6基

集石――7個所

焼土および炭化物集積跡――139個所73ブロック

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

V-3 [竪穴住居跡]

① 1号竪穴住居跡

A 位置

19-14グリッド内にある。遺跡の中央部からやや北西によったところで標高11mである。その南側約10mに2号竪穴住居跡と、間に2個所の炭化物52, 53がある。また、西側に炭化物58が、北東側に焼土47, 48, 51などが分布する。東南側は空き地となっている。

B 残存・規模・平面形

煙道の大部分が後世の暗きょによって壊されているほか、保存状況は良好である。長軸3.00m、短軸2.3mで南北にやや長く、隅丸方形のプランを呈する。遺構の確認面は、第Ⅳ層上面である。

C 壁

第Ⅳ層を掘り込んで壁としている。壁高は約40cmで床面からの立ち上りは急角度である。

D 床面

第Ⅴ層の粘土層を平坦に整地し床面としている。床の中央部は堅く、壁際は軟い。

E 柱穴

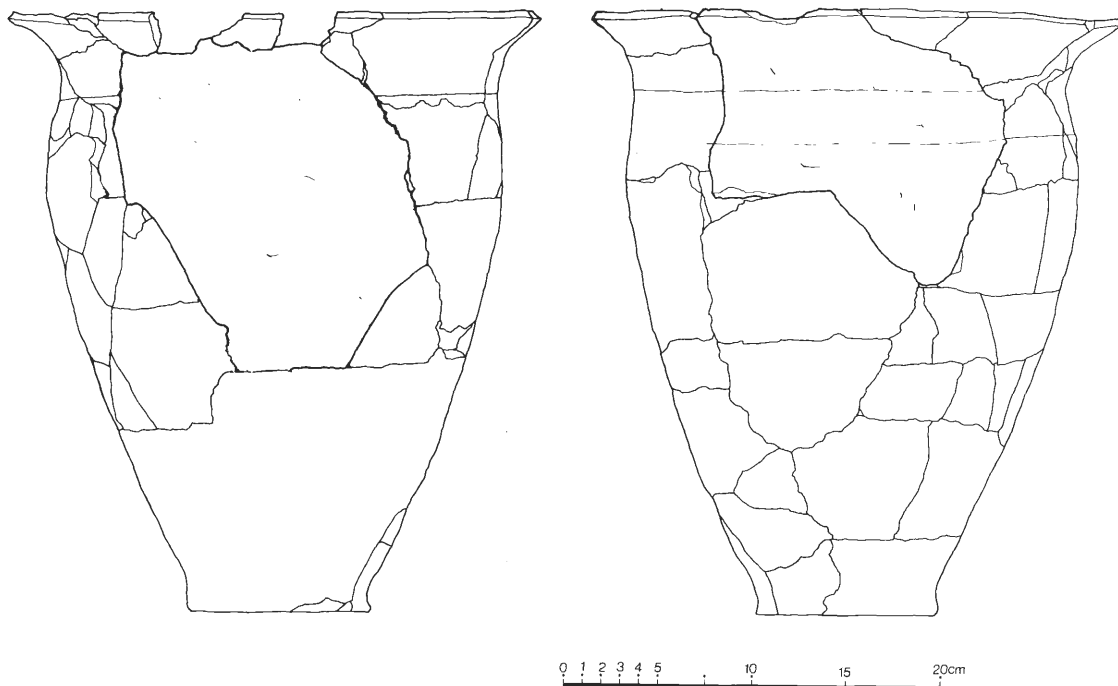
カマドの両袖付近に2個、西壁から約50cm内外の床面に2個のピットが検出されている。いずれも直径10～15cmの小さなもので柱穴かどうかは判断できない。ほかに柱穴の痕跡はない。

F カマド

東壁で南コーナーにやや寄った位置に1個設置されている。

焚口は住居の内側約50cmの位置に設けられている。両袖間の内側での距離は最も広い部分で約40cmである。焚口中央部には中形の甕（資料番号甕9）が固定・設置されている。その状況を左袖の土層でみると、正立した甕の胴部を別個体の土師器（个体番号甕27）の胴部破片（遺物番号735）と粘土を使用して固定している。袖部を形成する粘土は4層に区分できる。①層は灰色の粘土で炭化物の細粒を含む。②層は黄褐色の粘土で多量の炭化

PL. Ⅲ-3 1号竪穴住居跡カマドの袖に入っていた土器片（ドット部分）



物を含む、③層は炭化物の層、④層は炭化物を含む黄褐色の粘土層、

つぎにカマドの長軸にそって地層状況を見る。

①層は灰色の粘土層、比較的粘性のある自然堆積層で第Ⅳ層に相当する、②層はカマドの積土、灰色で粘性が強く炭化物を混入する粘土層である、③層は煙道の煙出し孔で赤色の細砂粒や粘土が流入し堆積した地層である、下面は炭化物が薄い層をなして堆積している、④層は真赤に焼けた粘土層で炭化物を含む、⑤層は黄赤色の粘土層、細砂、炭化物を含む、⑥層は真赤に焼けた粘土、⑦層は赤褐色の粘土で炭化物を含む、特に、焚口の部分では約2 cmの厚さに焼け堅い、③層は灰色の粘土層、自然埋積層で第Ⅴ層に相当する、

以上の観察からカマドの製作過程を述べるとつぎのようになる。

a 住居の東壁で南コーナーにやや寄った位置の地山⑧層を掘り下げる、掘り方の底面は屋内から屋外へむけて約8度の傾斜をもたせている、

b 屋内の壁際に焚口を設定し、支脚の小形甕（個体番号甕7）を倒立に置き、粘土⑦層で埋め固めて焚口の床面する、

c 屋外にのびる煙道は繰り抜きによってつくられる、底面の傾斜は2～3度とゆるいが、焚口に接続する部分は約20度と急である、

d 焚口では倒立した小形甕（前出）の上に中形甕（前出）を正立に重ね、粘土などで固定する、前後の固定は粘土だけでおこなうが、左右の固定には大形甕（個体番号甕27）の胴部破片（遺物番号735・736）それぞれ1片ずつを固定材として使用、粘土①層～④層とともに袖部を形成する、

以上は、製作の順序をそのまま示すものではない、特にb、dは一連の工程のものともみられる、またそれらはaより後に行なわれた作業であるが、cとの前後関係はわからない、

G 堆積土

ここで述べる土層観察は、当遺構の長軸で北西面にもとづくものである、第Ⅰ層から第Ⅴ層までは基本層序である、埋土は①層から⑤層まで5枚に識別された、

- ▶第Ⅰ層：表土、黒色の粘土層でほぼ平坦に堆積している、
- ▶第Ⅱ層：白黄色の粘土層、酸化鉄や縦位の亀裂がみられる、
- ▶第Ⅲ層：暗灰色の粘土層、遺構中では皿状、外側では平坦である、第1文化層である、
- ▶第Ⅳ層：黄褐色の粘土層、この層の中に遺構の掘り込みがある、
- ▶第Ⅴ層：暗灰色、下部が灰色の粘土層、遺構の窪みにそって皿状に堆積する、

②層：上面を白粘土の薄い皮膜に覆われた炭化物を多量に含む粘土層、

③層：灰色の粘土層、炭化物を含む、遺構の壁際に堆積する、

④層：炭化物層、

⑤層：黄褐色の粘土層、炭化物の細粒を多量に含む、

床面：粘土（第Ⅴ層）が固く踏み締められた面、上面には炭化物が点在する、

以上から判断すると、この遺構は火災をうけた住居であることがわかる、火災によって上屋や構造材が焼け落ちて堆積（②層～⑤層）、その後白粘土（②層上面）に覆われるという経過をたどる、

H 遺物

住居の床面やカマドから土師器甕と鉄滓が出土した、

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕7	――
（総個体数	3）甕9	――
〔土師器一甕	3）甕27	1号竪穴住居の周辺、3号土壇、焼土47、焼土48のへり、焼土51
鉄滓（1個）		

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい、

① 土器

土師器甕が3個体分出土した。

② 金属器および鉄滓

比較的大型の鉄滓が1点住居の床面直上(⑤層)から出土した。

小括

a この堅穴は長軸3.0m、短軸2.3mの小型住居である。この堅穴には床面などに柱穴を掘った形跡はない。

b カマドは東壁に1個設置されており、堅穴内の焚口には甕がそなえ付けられていた。

c この堅穴は火災を受けており、そのために放棄されたものである。

d この堅穴に伴う遺物は、土師器甕3個体と鉄滓1個である。そのうち、2個体分の土師器甕はカマドにそなえ付けられたり(个体番号甕9)、支脚として使用されていたもの(个体番号甕7)である。残りの1個体(个体番号甕27)は、この堅穴内で割られ、そのうちの2点の大型破片がカマドの両袖の中に入れられ、个体番号甕9の固定材として粘土とともに使用されていたものである。この甕の破片は、堅穴内に残されていたものと堅穴の外に持ち出されたものとがあった。

e 个体番号甕27の破片の分布状況から判断すると、この堅穴住居はすくなくともつぎの3個所の遺構と直接関連していたことになる。

それは、3号土壇と焼土48、同51である。

② 2号堅穴住居跡

A 位置

16-17, 16-18, 17-16, 17-17, 17-18, 17-19, 18-16, 18-17, 18-18, 18-19, 19-17, 19-18の12個のグリッドにまたがる。遺跡の中央部からやや西側によったところで、標高11mである。この堅穴住居跡の北側約10mに1号堅穴住居跡があり、その間に2個所の炭化物集積跡52, 53がみられる。南側でカマドの煙道先端部周辺には3号土壇や焼土41, 43が、また西側には小規模な焼土59がみられる。

B 残存・規模・平面形

煙道の一部が後世の暗渠によって壊されているが、保存状況は良好である。長軸9.1m、短軸8.7mで南北にやや長く、隅丸方形のプランを呈する。遺構の確認面は、第Ⅳ層中である。

C 壁

第Ⅳ層から第Ⅴ層を掘り込んで壁としている。壁高は約45～50cmで、床面からの立ち上りは急角度である。

D 床面

第Ⅴ層の粘土層中を掘り込んで床面としている。床の中央部が周辺部より15～20cm高く、平坦に整地され、堅い。一方、周辺部は軟弱である。

E 柱穴

床面上で、各コーナー寄りに1個ずつ、合計4個の柱穴(ピット)が検出された。ピットの平面形はいずれも円形もしくは不整円形である。ピット1の大きさは上部で45cm×45cm、底部で30cm×32cm、深さは65cm～68cmである。西コーナー寄りで南壁から1.8m、西壁から1.7mに配置され、内傾する。ピット2の大きさは上部で45cm×30cm、底部で25cm×18cm、深さは55cmである。北コーナー寄りで西壁から1.9m、北壁から1.8mに配置され、垂直である。ピット3の大きさは上部で50cm×35cm、底部で40cm×35cm、深さは60cmであ

る。東コーナー寄りでは北壁から1.7mに配置され、内傾する。

各ピットの芯を結んだ距離は、ピット1とピット2の間が5.2m、ピット2とピット3の間が5.2m、ピット3とピット4の間が5.2m、ピット1とピット4の間が5.0mとなり、その間隔は5.0m～5.2mのほぼ正方形に配置されている。

以上の観察からこの住居の柱の状況をまとめると、つぎのようになる。

柱は4本を基本とし、各コーナーの内側でそれぞれの壁面から1.9m～1.4mの床面に配置される。そこは平坦に整地された床面が壁際に向ってゆるやかに傾斜する境目付近にあたる。4本の柱は5.0m～5.2mのほぼ正方形に配置される。

F カマド

東壁の南コーナーに寄った位置に1個設置されている。

煙道先端部から焚口部までの長さは3.2mで、煙道の長さは2.2mを占める。そのうち1.8mの突出部を壁外に設ける。煙道の幅は平均65cmで、底面の幅は約50cmである。煙出し孔は直径20cmで、円形のプランを呈する。焚口は支脚（個体番号支脚6）を中心に直径1mの範囲がほぼ円形に焼けており、固い。

カマドの土層堆積はつぎの通りである。

①層はカマドの積土。a層：暗褐色の粘土層で炭化物がまじる。B層：灰黄色の粘土層で炭化物の細粒が混入する。

②層は煙道部の土層。a層：焼土、炭化物を多量に含む灰黄色の粘土層。煙出し孔に流入・再堆積した土層である。b層：焼土の堆積層。c層：暗紫色の粘土層。d層：焼土。e層：暗灰色の粘土層。炭化物がまじる。f層：焼土。g層：真黒色の粘土層。h層：真黒色の堅固な粘土層。

③層は焚口部の土層。a層：灰黄色の粘土層。炭化物粒、焼土粒を含む。天井部の崩壊土である。b層：焼土層。下面に炭化物層の薄層がみられる。c層：灰、焼土、炭化物粒がまじりあった層。b層とともに焚口だけに堆積する。d層：灰の層。支脚の周りに堆積する。e層：焼土。d層：灰の層。支脚の周りに堆積する。e層：焼土。赤に焼けている。

以上の観察からカマドの製作過程を述べるとつぎのようになる。

a 住居の東壁でやや南コーナーに寄った位置の地山（第Ⅴ層）を掘り窪めて焚口部を設定、支脚（遺物番号12274）を埋め込んで固定する。カマドの両袖には大形の礫（遺物番号12129, 12159, 12228）や土器の破片（遺物番号12075, 12079, 12089, 12130, 12133, 12158）を芯材として粘土（③-a・b・c層）で積みあげる。特に、礫の固定には地山にピットを掘り込んで埋め固める。

b 煙道は住居の外側に幅60cm～70cm、深さ約40cmの溝を掘り、土器の破片を敷きつめた後、天井部に粘土（③-a層）を張り付けるやりかたをとる。底面の傾斜は、焚口から先煙道中間部付近まではほぼ平坦に、その先は6cm～7cmほど低くなり煙出し孔へほぼ垂直に立ち上る。これは、雨水の住居内への侵入を防ぐ方策とみられる。

G 堆積土

遺構の埋没状況をしらべるために、直交する2つの土層観察用ベルトa-a'、b-b'を設定した。第Ⅰ層から第Ⅵ層までは基本層序である。埋め土は①層から⑥層まで6枚に識別された。

▶第Ⅰ層：黒色の粘土層。未分解の泥炭を含む。ただしこの図にはない。

▶第Ⅱ層：黄色の粘土層。ところどころに炭化物の細粒を含む。

▶第Ⅲ層：暗褐色の粘土層。粘性が強く乾燥すると縦位に亀裂が入る。a-a'面では遺構の壁際から落ち込んだ後比較的平坦に堆積するのに対してb-b'面では波状に堆積する点で異なる。

▶第Ⅳ層：黄褐色の粘土層。遺構の掘り込まれる地層で、遺構外に分布する。

▶第Ⅴ層：暗褐色の粘土層。遺構の壁、床面はこの土層を掘り込んでつくられている。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

▶第Ⅵ層：赤褐色の砂層．b-b'面の床面の一部にみられる．

▶埋土：竪穴住居を埋めているもので下記の様になる．

- ①層：明灰色，黄色のシルト層．炭化物の小粒を含む．
- ②層：暗灰色のシルト層．上面を白粘土の皮膜が覆う．南壁際に堆積する．
- ③層：青灰色のシルト層．炭化物を少量含む．南壁際に堆積する．
- ④層：焼土と炭化物の混じり合った土層．南・北壁際に堆積する．
- ⑤層：灰色のシルト層．南・北壁際に堆積する．
- ⑥層：焼土と炭化物の混じり合った土層で遺構の掘り方面にのる．生活面で遺物を含む．

以上から判断すると，この遺構は火災をうけた住居であることがわかる．火災によって上屋の構造材が焼け落ちて堆積(④～⑤層)，その後シルトなど(①～③層)に覆われる，という経過をみることができる．

H 遺物

この住居の床面やカマドの周辺，煙道などから土器，支脚，紡錘車のほか多量の動・植物遺存体が出土した．

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏5	炭化物52
(総個体数 36)	坏9	炭化物52
〔土師器—坏 5〕 —甕30 〔須恵器— 1〕	坏18	—
	坏43	炭化物マウンド, 焼土43, 焼土44
	坏106	炭化物52
	甕4	炭化物マウンド
	甕15	炭化物マウンド, 焼土34周辺, 焼土51
	甕23	炭化物マウンド, 焼土43, 炭化物52
	甕28	炭化物マウンド
	甕30	炭化物マウンド, 焼土37, 焼土43, 炭化物52
	甕31	3号土壇, 炭化物マウンド, 焼土43, 炭化物52
	甕32	炭化物マウンド, 焼土43, 炭化物52
	甕34	焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕37	焼土43, 炭化物52, 炭化物70
	甕38	焼土41周辺, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕41	焼土43周辺, 炭化物52
	甕42	焼土13
	甕45	炭化物52, 炭化物マウンド
	甕49	炭化物52, 炭化物マウンド
	甕52	焼土41, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕59	炭化物52, 炭化物マウンド
	甕62	焼土43, 焼土24周辺, 炭化物52
	甕65	焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕66	5号竪穴住居, 炭化物52
	甕67	焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕68	3号竪穴住居覆土, 焼土43, 炭化物52, 炭化物30周辺, 炭化物マウンド
	甕69	焼土41, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕70	焼土41, 焼土43, 炭化物52
	甕75	炭化物52, 炭化物マウンド
	甕85	焼土43, 焼土49, 焼土62, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕92	炭化物52
	甕93	焼土41周辺, 焼土43, 炭化物4, 炭化物52
	甕105	3号土壇, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕118	焼土41, 焼土43, 焼土47, 焼土60周辺, 炭化物50, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕156	炭化物52周辺, 炭化物59
	須恵器16	炭化物マウンド
土製支脚(個体数1)	支脚6	炭化物52
土製紡錘車(個体数1)	紡錘車3	—
石器・剥片類(4)		炭化物52 (接合資料4:遺物番号1745, 1835, 9125, 12154)
礫(10)		
鹿角製銚先(1)		

① 土器

土師器坏11個体分、甕30個体分が出土した。

土師器坏：5個体分の坏が出土している。そのほか覆土中から6個体分が出土した。

土師器甕：住居の床面やカマド周辺・煙道などから30個体分のほか覆土中から8個体分が出土した。

② 土製品

支脚と紡錘車がそれぞれ1個体分出土している。

③ 石器・石製品および礫

黒曜石製の石器・剥片が4点出土した。3点（遺物番号1745, 1835, 9125）は住居内の生活面（⑥層）から、1点（遺物番号12154）はカマドの煙道内の流入土に混じって出土した。このうち、2組が住居外の剥片類と接合する。

礫10点が18-18〔31〕グリッドで住居の床面から、紡錘車番号3と共に出土した。

④ 木製品

この住居は火災を受けていたため、多量の炭化材が採取された。それらの大部分は住居の構造材で狭義の木器一道具類は含まれていなかった。これらの炭化材については樹種の同定を中心に分析され第Ⅵ章10に示されている。しかし、柵状遺構に伴った道具類の素材と同種のノリウツギ、イタヤカエデ、ヤチダモが検出されており、これらを材料とした道具類が存在した可能性は大きい。

⑤ 骨角製品

鹿角製(?)の銚先が1点、住居の床面で焼土の中からサケの歯・椎骨などと共に出土した。

⑥ 動物遺存体

住居のカマドを中心に多量の魚歯骨が検出された。主体はサケ科魚類だが、コイ科魚類、ニシン科（マイワシ）魚類の椎骨などが検出されている。

⑦ 植物遺存体

住居のカマド焚口やその周辺、そして床面直上を中心に多量の炭化材が出土した。

カマド焚口およびその周辺から出土した炭化材として、トドマツ、ミズナラ、ハルニレ、ヤマグワ、イヌエンジュ、ヤチダモ、ドロヤナギ、エゾノカワヤナギ、オニグルミ、シラカンバ、カツラ、ホオノキ、マユミ、ミズキ、ニワトコ、ヤマブドウなどがある。

床面直上からは上記のほかキハダ、ニガキ、ハンノキ、ノリウツギ、エゾヤマザクラ、イタヤカエデなどが出土している。

小括

a この堅穴は長軸9.1m、短軸8.7mの大型住居である。この堅穴には床面に4個の柱穴が検出された。

b カマドは東壁に1個設置されており、焚口には破損した支脚（個体番号支脚6）がそなえ付けられていた。カマドの煙道部は堅穴外に1.8mと長く突出しており、その部分は掘り抜きによって作られていた。

c この堅穴は火災を受けており、そのために放棄されたものである。

d この堅穴に伴う遺物は、土師器坏5個体分、同甕30個体分、土製支脚1個体分、土製紡錘車1点、黒曜石製の石器・剥片4点、礫10点、鹿角製銚先1点のほか多量の動植物遺存体が出土している。

e 主に土器の接合状況から判断すると、この堅穴住居はすくなくともつぎの21個所の遺構と直接関連していたことになる。

それは、5号堅穴住居、3号土壇、炭化物マウンド、炭化物4、焼土13、炭化物30、焼

※骨角器の分析については、第Ⅵ章7を参照されたい。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

土34, 同37, 同41, 同43, 同44, 同47, 同49, 炭化物50, 焼土51, 炭化物52, 焼土59, 焼土60, 同62, 炭化物70および3号竪穴住居の覆土である。

f この竪穴住居から21個所の遺構に遺物類がもたらされたわけだが, その在り方からつぎのようなことがいえる。

まず3号竪穴住居とは, 2号竪穴住居からの1個体分の甕(個体番号甕68)の破片がその覆土中にみられたことから判断すると, 2号竪穴住居が活用されていた頃すでに3号竪穴住居は廃棄され埋没しつつあった, ということになる。

5号竪穴住居からは1個体分の甕(個体番号甕66)の破片1点がカマドの煙道底面にみられたことから判断すると, 2号竪穴住居ですでに廃品となったこの甕の一部がもたらされたことになり, 5号竪穴住居が構築された頃にはすでに2号竪穴住居は活用されていた, ということになる。

土壌や焼土, 炭化物遺構には2号竪穴住居からの廃品の類が廃棄されたものである。したがって, これらとはほぼ同じ時間帯に属していたということになる。2号竪穴住居からもたらされた土器の個体数は, 炭化物52が27個体分と最も多く, ついで炭化物マウンドが21個体分, 焼土43が19個体分であり, この3個所がこの住居の居住者の廃棄の場の核となっていたことがわかる。その他の焼土, 炭化物遺構からは焼土41が6個体分, 残りの焼土, 炭化物遺構からは1～2個体分と少ない。

③ 3号竪穴住居跡

A 位置

08-12, 08-13, 09-11, 09-12, 09-13, 10-11, 10-12, 10-13, 11-12の9個のグリッドにまたがる。遺跡の中央部からやや東南に寄ったところで, 標高11mである。この竪穴住居跡の煙道の先端部周辺には焼土24が集中。また東南側には焼土, 炭化物集積の密集する地域が, 北側約8mには4号竪穴住居跡がみられる。さらに, 南側約16mには埋没河川(セロンベツ川)がみつかり, その中から柵状遺構(テシ)が検出されている。

B 残存・規模・平面形

煙道の間中部から先端部にかけてと, 南コーナーの一部, 東コーナーの付近が後世の暗渠や風倒木によって壊されているほか, 保存状況は良好である。長軸8.0m, 短軸7.6mで北西～南東にやや長く, 北西と北東の壁が外側に張り出す隅丸方形のプランを呈する。遺構の確認面(掘り込み面)は第Ⅳ層中である。

C 壁

第Ⅳ層中から掘り込んで壁としている。壁高は30cm～35cmで床面からの立ち上りは急角度である。

D 床面

第Ⅴ層の粘土を掘り込んで整地し床面としている。床面はほぼ平坦であるが, 北東壁に近接する部分の床が中央部より約20cmほど低くなっている。また床は中央部が固く, 周辺部になると軟い。

E 柱・柱穴

遺構の床面上で7個の柱穴(ピット)が検出された。ピットの平面形はいずれも円形もしくは不整円形である。ピット1の大きさは上部で47cm×40cm, 底部で20cm×20cm, 深さは75cmである。西コーナー寄りで北壁から1.4m, 西壁から1.5mに配置され, 内傾する。ピット2の大きさは上部で47cm×37cm, 底部で40cm×27cm, 深さは55cmである。北コーナー寄りで北壁から1.9m, 東壁から2.4mに配置され, 垂直である。ピット3の大きさは上部で42cm×42cm, 底部で27cm×28cm, 深さは65cm×68cmである。北コーナー寄りで北壁か

ら1.6m,東壁から1.7mに配置され,垂直である。ピット4の大きさは上部で28cm×28cm,底部で20cm×17cm,深さは73cmである。東壁から1.7m,南壁から3.3mに配置され,やや内傾する。ピット5の大きさは上部で40cm×36cm,底部で25cm×25cm,深さは40cm~65cmである。東コーナー寄りで東壁から約1.6m,南壁から1.3mに配置され,内傾する。ピット6の大きさは上部で36cm×34cm,底部で20cm×20cm,深さは60cm~65cmである。南コーナー寄りで南壁から0.9m,西壁から1.9mに配置され,垂直である。ピット7の大きさは上部で30cm×28cm,底部で17cm×15cm,深さは30cmである。南壁から2.9m,西壁から1.6mに配置され,ほぼ垂直である。

各ピットの芯を結んだ距離は,ピット1とピット2の間が3.0m,ピット1とピット3の間が3.8m,ピット3とピット4の間が2.9m,ピット4とピット5の間が2.1m,ピット5とピット6の間が3.9m,ピット6とピット7の間が2.1m,ピット1とピット7の間が3.1mである。このようにピット2を除く,6個の柱穴は長辺で5.0m~5.1m,短辺で3.8m~3.9mの長方形に配置されていることがわかる。

これらのピットのほかに,炭化した杭がみつまっている。直径10cm前後のもので,西と東の壁際にそって比較的密に打ち込まれている。

F カマド

南壁で中央よりやや南コーナーに寄った位置に1個設定されている。

カマドの現存の長さは2.6m,そのうち煙道は1.9mを占める。煙道はそのうち1.5m以上壁外に突出する。煙道の幅の平均は85cm,底面幅は70cmである。焚口より奥行70cm,左右80cmの範囲を住居の床面より約5cm~6cm掘り窪めてあり,底面は10cm以上の厚さに焼けている。

カマドの土層堆積はつぎの通りである。

①層はカマドの天井部の土層。a層:灰色の粘土層。焼土,炭化物を多量に含む。b層:上部は真黒色の粘土,下部は暗褐色の焼土。c層:灰色の粘土層。炭化物を多量に含む。d層:灰色の粘土層。e層:灰白色の粘土層。f層:暗褐色の焼土。g層:焼土。

②層は煙道部の土層。a層:黒色の粘土層。b層:暗褐色の粘土層。c層:暗灰色の粘土層で暗褐色の焼土が点在する。天井部の崩壊土である。d層:真黒色の粘土層。e層:灰を含んだ砂質シルト層。f層:灰色の粘土層。

③層は焚口部の土層。a層:焼土。b層:灰を含んだ砂質シルト層。c層:焼土,灰,炭化物の混じり合ったもの。

以上の観察からカマドの製作過程を述べるとつぎのようになる。

a 住居の南壁でやや南コーナーに寄った位置の地山(第Ⅴ層)を掘り窪めて焚口部を設定する。その位置は壁から約60cm内側で,直径1mの範囲を皿状に掘り窪めている。その両側には粘土を固めて袖を設けるが,つくり方の詳細は不明である。

b 煙道は住居の外側に幅70cm~80cm,深さ約40cmの溝を掘り,後に天井部に粘土(②~c層)を張り付けるやりかたをとる。底面の傾斜は,焚口に接続する部分では平坦だが,壁外に出るにつれて低くなり,煙出し孔へはほぼ18度でたち上る。

G 堆積土

遺構の埋没状況をしらべるために,直交する2つの土層観察用ベルトを設定した。しかし,双方ともほぼ同じ堆積を示すため図示したa-a'面で説明する。第Ⅰ層から第Ⅴ層までは基本層序である。埋土は①層~⑧層まで8枚に識別された。

▶第Ⅰ層:後世の積土(0層)と表土(1層)である。表土は黒色の粘土層でほぼ平坦に堆積している。

▶第Ⅱ層:白黄色の粘土層。酸化鉄や縦位の亀裂がみられる。

▶第Ⅲ層:暗灰色の粘土層。遺構の壁付近で大きく落ち込み,内側では平坦に堆積する。

※動物遺存体(第Ⅵ章8),植物遺存体(第Ⅵ章9),炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については,それぞれの節を参照されたい。

- ▶第Ⅳ層：黄褐色の粘土層。遺構はこの層から掘り込まれている。
- ▶第Ⅴ層：暗灰黄色の粘土層。遺構の壁や床面がつくられている。
- ▶埋土：竪穴住居跡を埋めた土層で下記ようになる。

- ①層：灰黄色の粘土層。第Ⅴ層によく似ているがより灰色度が強い。
 - ②層：暗灰色の粘土層。5～10mmの白色粘土粒が点在する。
 - ③層：灰白色の粘土層。
 - ④層：焼土。ブロック状に入る。
 - ⑤層：炭化物の堆積層。炭化材で形状の判別が可能なものもみられる。
 - ⑥層：灰黄色の粘土層。壁際にのみ堆積する。
 - ⑦層：黄色のシルト層で灰色の粘土粒を含む。壁際にのみ堆積する。
 - ⑧層：灰白色の粘土層。遺物や炭化物粒を含む。遺構の最終放棄面である。
- 以上から判断すると、この遺構は火災をうけた住居であることがわかる。火災によって上屋や構造材が焼け落ちて堆積（④層・⑤層）、その後粘土など（①層～③層）に覆われる、という経過をみることができる。

H 遺物

住居の床面やカマド・煙道内から土器、鉄滓などのほか多量の動・植物遺存体が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏13	――
(総個体数 7)	甕71	4号土壌, 3号竪穴住居, 5号竪穴住居, 焼土32・炭化物, 焼土22, 炭化物16, 炭化物52周辺, 炭化物マウンド
土師器—坏 1 —甕 5 その他— 1	甕78	――
	甕108	――
	甕165	焼土24
	甕166	焼土24
	その他(すり鉢)	――
土製紡錘車(1)	紡錘車1	――
鉄滓(1)		――

① 土器

住居の床面やカマド・煙道内から1個体分の土師器坏と5個体分の土師器甕と1個体分のすり鉢形土器が出土したほか、住居の覆土中から2個体分の土師器坏と5個体分の土師器甕、1個体の紡錘車などが出土した。

② 土製品

個体番号紡錘車1が1点、09-13(01)グリッドにおいて住居の覆土中から出土した。

③ 金属器および鉄滓

鉄滓：住居の床面（09-13グリッド）の焼土中から鱗片状鉄滓が出土した。

④ 動物遺存体

住居のカマドや焼土の中からサケ科魚類の歯骨を中心にコイ科魚類の椎骨などが検出された。

8 植物遺存体

住居の床面直上からの多量の炭化材が検出された。それは、ハルニレ、ヤマグワ、イヌエンジュ、キハダ、ヤチダモ、エゾノカワヤナギ、オニグルミ、アサダ、シラカンバ、ハノノキ、エゾヤマザクラ、イタヤカエデ、ヤマブドウなどである。

小括

a この竪穴は長軸8.0m、短軸7.6mの大型住居である。この竪穴には床面に7個の柱穴が検出された。

b カマドは南壁に1個設置されており、煙道部は竪穴外に1.5m以上の長さで突出している。そして、その部分は掘り抜きによって作られている。

c この竪穴は火災を受けており、そのために放棄されたものである。

d この竪穴に伴う遺物は、土師器坏1個体分、土師器甕5個体分、すり鉢形土器1個体分のほか多量の動植物遺存体が出土している。

e 主に土器の接合状況から判断すると、この竪穴住居はすくなくともつぎの8個所の遺構と直接関連していたことになる。

それは、5号竪穴住居、4号土壇、炭化物マウンド、焼土22、同24、同32、炭化物16、炭化物52である。

f 8個所の遺構にはこの竪穴住居からもたらされたわけだが、その在り方からつぎのようなことがいえる。

まず、4号土壇の窪みに個体番号甕71の破片が廃棄されていた。個体番号甕71の破片の残りは同じように炭化物マウンド、焼土22、炭化物52へと廃棄されている。住居の南側に接近してみられる焼土24には、個体番号甕165、同166の破片が廃棄されている。

このように、3号竪穴住居から直接他の遺構に廃棄されたことが判明した土器は、甕が2個体分であり、2号竪穴住居などに比べるとはるかに少ない。

そして、これらの8個所の遺構は、3号竪穴住居が活用されていた頃から形成されたものである。ところが、この竪穴住居の覆土中から出土した個体番号甕68の破片の存在は、2号竪穴住居が活用されている頃すでにこの竪穴住居は廃棄されていたことを示している。

④ 4号竪穴住居跡

A 位置

11-09, 11-10, 12-09, 12-10の4個のグリッドにまたがる。遺跡の中央部から東へ寄ったところで、標高10.8m～11.0mである。南側約8mに3号竪穴住居跡が、東側約9mに5号竪穴住居跡がみられる。また、南東側5m～6mから先セロンベツ川左岸までの広場には焼土や炭化物集積跡などの集中がみられる。一方、北側から西側にかけては空き地が広がり、カマドの先方に焼土33があるのみである。

B 残存・規模・平面形

遺構の西コーナー寄りの壁から東コーナーにかけての壁が調査では判別できず、床面からの推定で示した。それを別にすると、保存状況は良好である、長軸3.9m、短軸2.9mで北西の壁が最も長く、対応する南東の壁が最も短い。多少いびつであるが基本形は隅丸方形のプランを呈する。

C 壁

前述のように、南西壁から南東壁にかけて確認することができなかった。確認できた壁面から判断すると、第Ⅳ層から第Ⅴ層を掘り込んで壁としている。壁高は約40cmで、床面からのたち上りは急角度である。

D 床面

第Ⅴ層の粘土を掘り込んで整地し床面としている。床面の大部分は非常に固いが、南西部から南東部にかけてやわらかである。この部分については炭化物粒の分布がトレースできる範囲内を床面として認定した。

E 柱穴

床面には柱穴を示すピットは全く検出されなかった。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

F カマド

北西壁で中央部分の位置に 1 個設定されている。

カマドの煙道先端から焚口中央部までの長さは約 1.4m で、壁外に突出する煙道の長さは約 1 m である。焚口は住居内で壁から約 40cm のところに設けられており、両袖間の最大幅は 40cm である。焚口の底面は固く、真赤に焼けているが支脚などはなかった。

カマドの土層堆積はつぎの通りである。

①層は灰色の粘土層で、第Ⅳ層に当る。②層は黒色土で煙道の煙出し孔に堆積した土層。③層は焼土。カマドの袖の積み土である。④層は灰や炭化物の混じり合った土層。下面は真赤に焼けている。⑤層は砂質の粘土層。第Ⅴ層である。

以上の観察から判断すると、このカマドの煙道は繰り抜き法によって作られたものである。また、焚口の袖は粘土(③層)を積み上げただけの簡単なつくりである。

G 堆積土

ここで述べる土層説明は、遺構のほぼ東西を横切る土層観察用ベルトにもとづくものである。第Ⅰ層および第Ⅱ層の上部は示していないが、第Ⅴ層までは基本層序である。また、埋め土は①層～⑤層まで 5 枚に識別された。

▶第Ⅱ層：白黄色の粘土層。

▶第Ⅲ層：暗灰色の粘土層。遺構の中に皿状に落ち込んで堆積する。

▶第Ⅳ層：暗褐色の粘土層。遺構はこの土層から掘り込まれている。

▶第Ⅴ層：暗灰黄色の粘土層。遺構の壁や床面がつくられている。

▶埋土：4 号堅穴住居を埋めている土層で下記のようになる。

①層：灰色の粘土層。炭化物粒を含む。

②層：炭化物の薄層。

③層：赤黄色の粘土層。炭化物を含む。

④層：灰黄色の粘土層。壁際に堆積する。

⑤層：炭化物を含む粘土の面。遺構の最終放棄面である。厚さ約 1 cm で、非常に堅固である。

以上から判断すると、この遺構は⑤層面で放棄された住居で、その後で粘土(③層・④層)が流入し炭化物の薄い層(②層)に覆われた、という経過をみることができる。

H 遺物

住居の覆土中から土器 1 個体分が出土した。

① 土器

土師器甕 1 個体分が出土している。

遺物	個体番号	関連遺構
土器(個体数1)	甕22	—

小括

a この堅穴は長軸 3.9m、短軸 2.9m の小型住居である。この堅穴には床面などに柱穴を掘った形跡はない。

b カマドは北西壁に 1 個設置されており、堅穴内の焚口には何の設備もなかった。

c この堅穴は火災を受けておらず、それ以外の理由で放棄されたものである。

d この堅穴に直接伴う遺物は皆無である。したがって、遺物の側面から直接他の遺構との関係をとらえることはできない。しかし、この堅穴住居の覆土中から出土した 1 個体分の土器の在り方と堅穴の掘り込みが第Ⅳ層の粘土層であることから判断すると、この住居が他の多くの遺構と同じ時間帯に営まれたものであること、つまりこの集落を構成する住居のひとつであったといえる。

⑤ 5号竪穴住居跡

A 位置

10-04, 10-05, 10-06, 11-04, 11-05, 11-06, 12-04, 12-05, 12-06の9個のグリッドにまたがる。遺跡の中央部からみても最も東側に寄ったところで、標高10.7～10.8mである。煙道の周辺部には、ほぼ接するように1号土壇、焼土・炭化物28などがみられる。しかし、この遺構は北側、西側および南側が広く空き地となっている。

B 残存・規模・平面形

後世の破壊もなく、保存状況は良好である。長軸8.5m、短軸7.2mで、東南壁が最も長い隅丸方形のプランを呈する。遺構の確認面は第Ⅳ層である。

C 壁

第Ⅳ層から第Ⅴ層を掘り込んで壁としている。壁高は約45cm～75cmで、床面からの立ち上りは急角度である。

D 床面

第Ⅴ層の粘土と第Ⅵ層の砂質粘土の一部を掘り込んで整地し床面としている。床面の中央部とカマドの周辺部は堅固であるが、壁面は軟弱である。

E 柱穴

遺構の床面上で4個の柱穴が検出された。ピットの平面形はいずれも円形もしくは不整円形である。ピット1に大きさは上部で27cm×30cm、底部で25cm×22cm、深さは55cmである。西コーナー寄りで西壁から1.2m、南壁から1.4mに配置され、垂直である。ピット2の大きさは上部で25cm×25cm、底部で18cm×18cm、深さは53cmである。北コーナー寄りで西壁から1.2m、北壁から1.2mに配置され、垂直である。ピット3の大きさは上部で27cm×25cm、底部で18cm×18cm、深さは55cmである。東コーナー寄りで北壁から1.2m、東壁から1.2mに配置され、垂直である。ピット4に大きさは上部で30cm×30cm、底部で20cm×20cm、深さは35cmである。南コーナー寄りで東壁から1.6m、南壁から1.4mに配置され、垂直である。

各ピットの芯を結んだ距離は、ピット1とピット2間が4.7m、ピット2とピット3間が4.6m、ピット3とピット4間が5.8m、ピット1とピット4間が4.3mである。このようなピット間の長さは壁の長さによく対応するもので、ピット3とピット4間を長辺としピット1とピット4間を短辺とする梯形に配置されている。

F カマド

最も長い東南壁でやや南コーナーに寄った位置に1個設定されている。

カマドの全長は3.1m、煙道は2.1mを占める。煙道はそのうち1.9m壁外に突出する。煙道の幅は47cm～55cm、底面幅は約45cmである。焚口は奥行40cm、左右80cmの範囲を住居の床面より約4cm～5cm掘り窪めてあり、底面は真赤に焼けて堅固である。左右の袖は粘土を積み上げたものである。

カマドの土層図は示さないが、その堆積状況からみて煙道のつくりは、掘り抜き法によるもので、底面には土器の破片が敷かれている。底面の傾斜は焚口に接続するあたりではほぼ平坦だが、壁外で約8cm～10cm低くなってそのまま煙出し孔の真下までつづき、そこからほぼ垂直に立ち上がる。

G 堆積土

遺構の埋没状況をしらべるために、直交する2つの土層観察用ベルトa-a'、b-b'を設定した。第Ⅰ層は示していないが、第Ⅵ層までは基本層序である。埋め土は①層～⑧層まで8枚に識別された。

▶第Ⅰ層：黒色の粘土層。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

- ▶第Ⅱ層：黄色の粘土層．遺構の壁際で大きく落ち込む．
- ▶第Ⅲ層：暗灰色の粘土層．遺構の壁際で大きく落ち込む．
- ▶第Ⅳ層：褐色の粘土層．遺構の掘り込まれる地層で遺構外に分布する．
- ▶第Ⅴ層：暗褐色の粘土層．遺構の壁や床面はこの土層を掘り込んでつくられる．
- ▶第Ⅵ層：赤褐色の粘土層．
- ▶埋土：竪穴住居跡の埋土で下記のようなになる．

- ①層：黄色の粘土層．炭化物を含む．
- ②層：白色の砂層．
- ③層：黄色の粘土層．炭化物を含む．
- ④層：黄灰色の粘土層．炭化物を含む．
- ⑤a・b層：黒色の粘土層．遺構の壁際や中央部で2枚にわれる．
- ⑤c層：灰色の粘土層．褐鉄鉱が入る．
- ⑤d層：灰色の粘土層．
- ⑥a層：灰黄色の粘土層．
- ⑥b層：赤色の砂質粘土層．
- ⑥c層：灰赤色の粘土層．
- ⑦層：赤色の砂質粘土層．
- ⑧層：白色の粘土層．遺物や炭化物を含む．遺構の最終放棄面である．

以上から判断すると、この遺構は⑧層で放棄された住居で、その後で粘土（⑤c層～⑦層）が流入し炭化物の薄い層（⑤a・b層）に覆われた、という経過をみることができる．

H 遺物

この竪穴住居の床面、カマド周辺、煙道内および覆土中から土師器坏や甕などのほか支脚、フイゴ羽口、紡錘車、石器、鉄滓などが出土した．

遺物	個体番号	関連遺構
土品	30	坏8
(総個体数	28)	坏12
〔土師器—坏10〕	坏29	——
	—甕18	坏33
〔須恵器—2〕	坏48	1号土壇周辺の焼土・炭化物, 焼土27周辺
	坏71	5号土壇
	坏81	5号土壇
	坏112	——
	甕1	1号土壇
	甕8	——
	甕16	——
	甕17	(2号住居跡の西〔20-21グリッド〕)
	甕24	1号土壇周辺の焼土・炭化物, 6号土壇, 炭化物マウンド
	甕39	——
	甕40	1号土壇内とその周辺の焼土・炭化物
	甕44	——
	甕66	2号竪穴住居, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕71	3号竪穴住居, 4号土壇, 焼土・炭化物22, 炭化物マウンド, 炭化物16
	甕74	焼土28
	甕103	——
	甕129	——
	甕141	焼土27
	甕181	——
	甕187	——
	甕194	6号土壇
	須恵器11	——
	須恵器15	——

遺物	個体番号	関連遺構
土製支脚(3)	支脚1	3号竪穴住居跡の覆土
	支脚2	1号土壇, 6号土壇
	支脚4	1号土壇周辺の焼土・炭化物
土製紡錘車(1)	紡錘車4	――
スクレイパー	――	(遺物番号823)
たたき石(1)	――	(遺物番号999)
金属製品(1)	環1	(5号竪穴住居の東側)
鉄滓	――	(遺物番号3845)

① 土器

住居の床面や煙道内から 8 個体分の土器師坏と16個分の土師器甕, 2 個分の須恵器が出土した。

② 土製品

支脚 3 個体分, フイゴ羽口 2 個体分, 紡錘車 2 個体が出土した。

③ 石器・石製品および礫

黒曜石製のスクレイパー (遺物番号823) と礫を利用したたたき石 (遺物番号999) がそれぞれ 1 点出土している。スクレイパーは住居の床面で11-04〔03〕グリッドから出土し、たたき石は床面直上で10-15〔20〕グリッドから出土した。

④ 金属器および鉄滓

環状の金属製品が 1 点, 住居の東側から出土した。

また, 鉄滓 (遺物番号3845) が 1 点床面から出土した。

小括

a この竪穴は長軸8.5m, 短軸7.2mの大型住居である。この竪穴には床面に 4 個の柱穴が検出された。

b カマドは東南壁に 1 個設置されており, 焚口の周辺には破損した土器片がみられた。カマドの煙道部は竪穴外に1.9mと長く突出しており, その部分は掘り抜きによって作られていた。

c この竪穴は火災を受けておらず, それ以外の理由で放棄されたものである。

d この竪穴に伴う遺物は, 土師器坏 8 個体分, 同甕17個分, 須恵器 1 個体分, 土製支脚 3 個体分, 土製紡錘車 1 点, 黒曜石製の石器 1 点, たたき石 1 点, 鉄滓 1 点が出土している。

e 主に土器の接合状況から判断すると, この竪穴住居は少なくともつぎの13個所の遺構と直接関連していたことになる。

それは, 2 号竪穴住居, 3 号竪穴住居, 1 号土壇, 4 号土壇, 5 号土壇, 6 号土壇, 炭化物マウンド, 1 号土壇周辺の焼土・炭化物, 焼土22, 焼土27, 炭化物16, 炭化物28, 同52である。

f 13個所の遺構とこの竪穴住居との関係は, 接合資料のあり方からつぎのようなことがいえる。

うちから 1 点がもち出され, この竪穴住居のカマド煙道底面に他の土器片とともに敷設されたことから判断すると, 2 号竪穴住居が活用されていた頃にこの竪穴住居は作られた, ということになる。

一方, それ以外の遺構では 5 号竪穴住居での廃品類などが廃棄されたり, 使用されたりしたものである。1 号土壇の甕 2 個体分と支脚 1 個体のうち, 個体番号甕 1 は同 2 とともに土壇内に倒立で埋設されていたもので, 底部は 5 号竪穴住居に残されていた。このことは, この甕が本来は 5 号竪穴住居で使用されていたものである。その他の遺構には 1 ～ 2

※動物遺存体(第Ⅵ章 8), 植物遺存体(第Ⅵ章 9), 炭化材(第Ⅵ章 10)などの分析については, それぞれの節を参照されたい。

個体分の土器や支脚の破片がもち込まれ、この竪穴住居とはほぼ同じ時間帯に営まれていたことを示している。

⑥ 竪穴住居小括

a この遺跡からは、5基の竪穴住居が発見された。これらの竪穴住居は標高10.7m～11.0mの平坦地上に、もっとも近いもの（3号竪穴住居と4号竪穴住居間）で約8m、もっとも遠いもの（2号竪穴住居と5号竪穴住居間）で50m弱の間隔で作られていた。

b すべての竪穴住居は、プランが方形でカマドが付設されていた。

竪穴住居の広さは、最大で約78㎡強、最小で約7㎡弱であり、前者に属する大型住居が3基、後者に属する小型住居が2基である。

主柱穴は大型住居で4個、小型住居にはみられなかった。

カマドは東壁あるいは東南壁に1個設置されていたが、4号住居だけが北西壁であった。カマドの煙道の作り方は、大型住居が掘り抜き、小型住居がくり抜き^{*}である。

c 5基の竪穴住居のうち、3基の竪穴住居（1号・2号・3号住居）が火災を受けており、それらの住居ひいては集落の放棄の原因となっていた。

d 5基の竪穴住居は、その掘り込み面が第Ⅳ層の粘土層中であるということから判断すると、ほぼ同じ時間帯に営まれたといえる。さらに、土器片などの接合を基軸に判明した各竪穴住居間の関係はつぎのようになる。

まず、小型住居では直接他の住居との関係を示す資料に乏しかったが、1号竪穴住居の場合、3号土壌を介在させることによって2号竪穴住居との併存は確かである。

大型住居では、3号竪穴住居の廃棄が2号竪穴住居の活用中に行なわれたこと、5号竪穴住居の構築が2号竪穴住居の活用中に行なわれたことから判断すると、2号竪穴住居を軸に、先に3号竪穴住居が、後に5号竪穴住居がそれぞれ併存していたことが判明した。その結果、この遺跡における竪穴住居の組み合わせはまず、1号・2号・3号・4号の大小4軒の竪穴住居が併存し、ついで3号竪穴住居が火災を受けて消失した後それに代る住居として5号竪穴住居が作られた、という経過をみることができる。

e 各竪穴住居からの廃品、廃棄物の処理の場に炭化物集積遺構や焼土などが相当し、竪穴住居との対応関係がそれぞれ把握された。

1号竪穴住居からは主に3箇所へ、2号竪穴住居からは主に21箇所へ廃棄され、その中でも特に炭化物52、炭化物マウンド、焼土43の3箇所が多用されていた。3号竪穴住居からは主に8箇所へ、5号竪穴住居からは主に13箇所へ廃棄されていた。一方、4号竪穴住居からの廃棄の場を直接みることはできなかったが、この住居の覆土中から出土した土器は、住居の付近に廃棄されたものが後世に落ち込んだものと推定される。

f 住居の建材に使われた樹種は、火災住居から採取された炭化材から推定された。それによると、トネリコ属が構造材の主要材と考えられ、他にヤナギ、クルミ属等があげられる。

また、焚木類はカマドや煙道内から採取された資料からみて、12属中トネリコ属がやや多い程度で樹種ごとの量的差は少なく、針葉樹、広葉樹が幅広く利用されていた。

（横山英介）。

* カマド煙道のつくり方について：掘り抜きとは、オープンカット法、くり抜きとは、トンネル法を意味する

V-4 [土壙]

① 土壙の概要

ここでいう土壙は、竪穴住居跡の外に掘られた直径が1 m～2 m前後で平面形が円形ないし不整形の穴を指す。このような形態をなす穴は合計6個検出され、それぞれ1号から6号までの番号が付されている。以下、番号順に説明する。

② 1号土壙

A 位置

09-04, 09-05, 10-04の3グリッドにまたがって焼土、炭化物が分布している。土壙はその中で09-04と10-04の2グリッドにまたがっている。土壙の北西側約30cmの近距離に5号竪穴住居跡の煙道先端部がみられる。また、南側には多くの焼土、炭化物が集中するセロンベツ川の左岸広場が続いている。

B 規模・形状・焼土

炭化物の分布域は長軸4.0m弱、短軸2.5m強であり、土壙はその北側に位置する。土壙の大きさは壙口部で1.5m×1.2m、壙底部で1.2m×1.0m、深さ32cm～35cmである。壙口部の平面形は隅丸長方形で、南西～北東に長軸をもっている。

C 壁・床面

第Ⅳ層から掘り込んで壁としている。壁高は、32cm～35cmで床面から急角度で立ちあがる。床面は、第Ⅳ層の粘土を掘り込み平坦に整地している。

D 堆積土

土壙の埋没状況をしらべるために、土壙の長軸にそって土層観察用ベルトa・a'を設定した。

土壙は自然堆積の第Ⅲ層を取り除くと、炭化物の細粒や炭化木材などが分布する炭の層が現われる。これを①層と呼称する。炭化木材は長さ1 m前後で保存状態の良好なものが含まれているが、出土状況上とくに規則性を見出すことはできない。②層は灰色の粘土層で炭化物を少量含んでいる。③層は炭化物と焼土の混ざり合った土層である。土壙の中央部から東側にかけて間層(④層)をはさんで上下にみられる。この土層は下面まで焼けており、直接火を受けたことを示している。土壙の周囲に分布している焼土は、この③層の続きである。④層は3 mm～10 mmの細砂の堆積層である。遺物は含まれていない。⑤層は灰色の細砂の堆積層である。⑥層は茶褐色の細砂の堆積層である。

E 土器の埋設・敷設

土壙の南西壁寄りに、大形甕2個体(個体番号甕1, 同2)が発見された。これら2個体の甕は、倒立の状態で胴部中ほどまでを砂(⑥層)に覆われていた。また③層つまり、炭化物と焼土の混ざり合った土層の上面には赤色に変色した1個体分の甕の破片(個体番号甕40)と土製支脚(個体番号支脚2)の破片とが敷設されていた。

E 出土遺物

土壙内からは土師器甕3個体分と土製支脚1個体分が出土、その周辺の焼土、炭化物中から土師器坏、甕などのほか多量の動・植物遺存体が出土した。

① 土器

土師器坏5個体、土師器甕9個体分が出土した。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

—土壌内出土土器—

土壌内からは土師器甕 3 個体分と土製支脚 1 個体分が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕1	5号竪穴住居
(総個体数 3)	甕2	—
〔土師器—甕 3〕	甕40	5号竪穴住居, 1号土壌周辺の焼土・炭化物
土製脚(1)	支脚2	5号竪穴住居, 6号土壌

—土壌周辺の焼土, 炭化物からの出土土器—

土壌周辺の焼土, 炭化物からは土師器坏 5 個体分, 甕 4 個体分が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏2	—
(総個体数 9)	坏19	—
〔土師器—坏 5〕	坏33	5号竪穴住居, 焼土27周辺
—甕 4)	坏62	炭化物マウンド, 焼土17
	坏66	—
	甕24	5号竪穴住居, 6号土壌, 炭化物マウンド
	甕80	5号竪穴住居
	甕149	—
	甕176	—

② 土製品

支脚 1 個体分が出土した。

③ 動物遺存体

土壌周辺の焼土や炭化物の中から, サケ科魚類の歯・椎骨, コイ科魚類の椎骨が出土した。

④ 植物遺存体

土壌と周辺の焼土や炭化物の中から, トドマツ, ハルニレ, エゾエノキ, キハダ, ヤチダモ, エゾノカワヤナギ, オニグルミ, シラカンパ, マユミ, イタヤカエデ, ニワトコ, ヤマブドウなどが検出された。

小括

a 1号土壌は, 第Ⅳ層の粘土層から掘り込まれている。土壌の形は南西—北東にやや長い隅丸長方形を呈し, 大きさは墳口部で1.5m×1.2m, 墳口部で1.2m×1.0m, 深さは32cm~35cmである。さらに, 土壌上面の炭化した木材の出土状況からみて, ヤチダモなどからなる簡単な上部構造(土壌内外に柱穴などを示すものはない)を持っていたと推察される。

個体番号甕1の底部だけが5号竪穴住居跡の床面直上から出土した。このことは, 土壌への埋設用甕が, すくなくとも1個体に関して5号竪穴住居からもたらされたということを示している。また, この土壌が造られ, 使用された時代および時期は, これらの甕によって示される。

c 土壌内の甕の埋設後, 土器片などが敷設される。この面は二次的に火を受けており, 土壌の周辺の焼土, 炭化物分布層につながる。このことは, すくなくとも土壌に関する埋め甕2個体を伴う何らかの行為がなされた後, 土壌の周辺で火の使用を伴う作業が行われたことを示している。土壌の木製上部構造が焼け落るのは, この周辺での火の使用と関連している。

d そこで, この地区でのヒトの行為を土壌の造型から甕の埋設・土器片の敷設までと, 土壌周辺での火の使用に大別できること。そして, 前者が後者より時間的に先行したこと,

を指摘できる。

e 火を伴う作業の主たる目的のひとつは、魚類（主としてサケ科やコイ科魚類）などに対するものである。

f この土壌および周辺の焼土・炭化物と他の遺構などとの関連は、主として土器の接合からつぎのようなことが指摘できる。

まず、土壌は5号竪穴住居と6号土壌のふたつと関連している。竪穴住居には個体番号甕1，同40，支脚2の3個体分がそれぞれにまたがってみられた。土壌には支脚2の破片がみられた。

周辺の焼土・炭化物遺構は、5号竪穴住居，6号土壌，炭化物マウンド，焼土17，同27の5個所と関連している。5号竪穴住居には個体番号坏33，個体番号甕24と同176の3個体分が，6号土壌には個体番号甕24の1個体分がそれぞれまたがってみられた。

その他の焼土・炭化物遺構は，炭化物マウンドには個体番号坏62，個体番号甕24，の2個体分がそれぞれまたがってみられた。

このことは，これらの土器が竪穴住居で使用されていたものと仮定すれば，5号竪穴住居のそれに相当し，そこで廃品となったものが，1号土壌周辺の焼土・炭化物をはじめとする5個所に廃棄されたことを示している。

③ 2号土壌

A 位置

18-08グリッド内に位置する。

B 規模・形状

土壌の大きさは，塙口部で1.4m×1.1m，塙底部で1.3m×0.9m，遺構確認面からの深さは，15cm～16cmである。平面形は，隅丸長方形ではぼ南北に長軸をもつ。

C 壁・床面

第Ⅳ層から掘り込んで壁としている。壁高は15cm～16cmで，床面からはなだらかにたち上がる。床面は，第Ⅳ層の粘土層を掘り込んでつくられており，炭や焼土を含んでいる。遺構の各コーナーの床面上から炭化材が出土した。

D 堆積土

土壌の埋没状況をしらべるために土層観察用ベルトa-a'を設定した。第Ⅰ層から第Ⅳ層までは基本層序で，その堆積状況に遺跡の他の地区との大きな違いはない。土壌の埋め土は，①層と②層の2枚にわけられる。

①層：黄色の粘土層。炭を少量含む。

②層：暗紫色の焼土層。厚さ1cm～2cmで炭を多量に含む。生活層で，この土層の上面が最終放棄面である。

E 出土遺物

① 土器，土製品，石器などの遺物は出土していない。

② 動物遺存体

埋め土②層から，サケ科魚類の歯・椎骨が検出された。

③ 植物遺存体

埋め土②層から，ハルニレ，キハダ，エゾノカワヤナギ，ノリウツギの炭化したものが検出された。そのうち，土壌の各コーナーに分布していた炭化物はエゾノカワヤナギである。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)，植物遺存体(第Ⅵ章9)，炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については，それぞれの節を参照されたい。

小括

a この遺構は，第Ⅳ層から掘り込まれており，この遺跡を形成する他の多くの遺構と

同じ時間帯に営まれたものである。

b この遺構は、隅丸長方形の小土壇（長軸1.4m）で、四隅にエゾノカワヤナギを柱とする簡単な上屋構造をもっていたとみられ、それは火災によって消失し埋没していた。

c この土壇の生活層から多くの炭とともにサケ科魚類の歯や椎骨が検出された。このことは、この土壇内において、すくなくともサケ科魚類に関する何らかの作業が行われたことを示している。

④ 3号土壇

A 位置

15-17, 16-17の2グリッドにまたがる。北側約4mに2号竪穴住居跡の煙道部がある。また、焼土41, 43, 44が近接している。

B 規模・形状

土壇の大きさは、壇口部で1.5m×0.9m強、壇底部で1.2m×0.7mである。壇口部の平面形は、長軸が北西―南東で不整楕円形を呈する。

C 壁・床面

第Ⅳ層から掘り込んで壁としている。壁高は40cm～42cmで、床面からの立ち上がりはなだらかである。床面は、第Ⅳ層の粘土層を平坦に整地したもので柱穴などはみられない。

D 堆積土

遺構の埋没状況をしらべるために土壇の長軸にそって土層観察用ベルトa-a'を設定した。土壇は第Ⅳ層中に掘り込まれており、その上には自然堆積の第Ⅰ層から第Ⅲ層がみられる点では他の地区と同じである。

土壇の埋め土は、①層から⑤層まで5枚の土層にわけられた。

①層：炭を多量に含む灰黄色の粘土層である。

②層：炭の堆積層である。

③層：灰白色の粘土層で、炭を多量に含む。

④層：褐色の粘土層で、炭を含む。炭の上面から紡錘車や礫などの遺物が出土した。

⑤層：炭の堆積層で、厚さ1cm～1.5cmである。この土壇の最終使用面である。

E 出土遺物

土器や紡錘車などの遺物は、④層から出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏16	炭化物マウンド, 焼土41
(総個体数 5)	甕21	焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
〔土師器―坏 1〕 ―甕 4	甕27	1号竪穴住居, 焼土47, 焼土48, 焼土51
	甕31	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕87	焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
土製紡錘車(1)	紡錘車2	――
礫(33)	――	――

① 土器

土師器坏1個体分、同甕4個体分が出土した。

② 土製品

紡錘車が1点出土した。

③ 石器・石製品および礫

土壇内で、④層上面に33個の礫の集中がみられた。他に石器などは出土していない。

集石：礫は安山岩で、相接するものはあるが重なり合うものはない。5個体分の土師器の破片と紡錘車（個体番号紡錘車2）が伴出する。

礫の大きさ・重量は、Tab.Ⅱ-38に示す。それによると、重量は300g以上が1個含まれるが、100g～200gの範囲に入り、さらに、140～200gに集中する。

④ 動物遺存体

土壌の埋め土④層と⑤層から、サケ科魚類の歯・椎骨、ニシン科魚類（マイワシ）、コイ科魚類の椎骨が検出された。

⑤ 植物遺存体

土壌の埋め土②層、④層および⑤層から、ハルニレ、ヤチダモ、エゾノカワヤナギ、オニグルミ、ハンノキ、イタヤカエデなどの炭化材が検出された。

小括

a この遺構は、第Ⅳ層から掘り込まれており、この遺跡を形成する他の多くの遺構と同じ時間帯に営まれたものである。

b この土壌が作られ、使用された時代・時期は、④層から出土した5個体分の土師器が製作・使用・廃棄された時代・時期である。

c この遺構は、不整楕円形の小土壌（長軸1.5m）で、上部構造を示すものは何も検出されていない。

d この土壌は炭だけの堆積層や炭と礫、紡錘車、そして破損した土器などが堆積する層がみられた。さらに、炭に混じって多量の魚歯骨が検出された。しかし、土壌底部などに焼けた痕跡がないので、ここでの火の使用は否定される。

e この土壌の用途のひとつは、上記の残滓としての魚の歯・骨や炭あるいは廃品となった土器や礫を集積することである。

f 炭の素材は7樹種であり、焼土43の12樹種のうちに含まれる。焼土43の遺物は、炭化物マウンドなど複数の遺構に分散しているため、当土壌からの炭の素材が少ない理由も成り立つ。

g この土壌と他の遺構との関連は、主として土器の接合からつぎのようなことがいえる。

まず、堅穴住居では1号、2号のふたつの堅穴住居と関連している。1号堅穴住居には個体番号壘27の1個体分、2号堅穴住居には個体番号壘31の1個体分がそれぞれまたがっている。

炭化物マウンドでは個体番号坏16、個体番号壘21、同31、同87の4個体分がそれぞれまたがっている。

焼土41には個体番号壘16の1個体分が、焼土43には個体番号壘21、同31、同87の3個体分が、焼土47、焼土48、焼土51には個体番号壘27の1個体分がそれぞれまたがっている。

このことは、この土壌がこれらふたつの堅穴住居および7個所の焼土・炭化物遺構と併存していたことを示している。

したがって、eに示したような廃棄物の出所はこれらふたつの堅穴住居や焼土41、同43が有力である。

⑤ 4号土壌

A 位置

07-09、07-10、08-09、08-10の4グリッドにまたがる。埋没河川・セロンベツ川の左岸域に分布する焼土・炭化物群の中にある。

B 規模・形状

長軸は2.2m強で、平面形は不整円形を呈する。遺構確認面からの深さは10cm～35cmで

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

ある。

C 壁・床面

第Ⅳ層の粘土から第Ⅴ層の粘土を掘りぬいて壁としている。壁はなだらかにたちあがり、床面との境界が不明瞭である。床面は第Ⅴ層の粘土層の中につくられており、凹凸があって軟弱である。床面は部分的に赤色に焼けており、特に北東部分の一段低くなっている箇所全体が焼けている。

D 堆積土

遺構の堆積状況をしらべるために、土壌に直交する2本の土層観察用ベルトa-a'、b-b'を設定した。この土壌の場合も、第Ⅰ層から遺構の掘り込まれている第Ⅳ・第Ⅴ層といった土層堆積の基本は他の遺構同様かわらない。

土壌の埋め土は、c1～c3、f1～f3の6枚にわけられた。

c1～c3層：炭の堆積層である。

f1層：粘性の強い焼土層で、c1層とc2層の間にはさまれている。

f2層：焼土の堆積層で、c2層とc3層の間にはさまれている。

f3層：墳底面での焼土の堆積層でブロック状に分布し、炭が混じる。

以上の観察にもとづくなら、この土壌内で墳底面から数えて最低3度にわたる火の使用が行われていたといえる。つまり、f1、f2、f3の焼土がその痕跡でc1、c2、c3がそれぞれの焼土と組み合わせとなる燃料の痕跡である。

E 出土遺物

土師器、石器、鉄滓など多くの遺物が出土している。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏26	――
(総個体数 14)	坏31	炭化物マウンド, 炭化物42, 炭化物52
{ 土師器一坏 7 一甕 7 }	坏68	――
	坏78	――
	坏82	――
	坏93	――
	坏107	――
	甕14	焼土32
	甕71	3号竪穴住居, 5号竪穴住居, 焼土22, 炭化物マウンド, 炭化物16, 炭化物52
	甕73	焼土24
	甕76	焼土12, 同18, 炭化物14, 炭化物19, 焼土27
	甕98	焼土22
	甕152	炭化物14, 炭化物19, 焼土24
	甕179	炭化物マウンド, 焼土27
石器・剥片 (2)	――	(遺物番号15931, 13499)
鉄滓 (1)	――	(遺物番号16030)

① 土器

土師器坏 5 個体分、土師器甕 7 個体分と帰属不明の破片179点が出土した。

② 石器・石製品および礫

黒曜石の剥片が2点出土した。

③ 金属器および鉄滓

鉄滓（遺物番号16030）が1点、墳底部の焼土中から出土した。

④ 動物遺存体

土壌内の炭や焼土中から、サケ科魚類の歯・椎骨を中心にコイ科、ニシン科魚類の椎骨が出土した。

⑤ 植物遺存体

土壌内の炭の中から、イチイ、ミズナラ、ハルニレ、エゾエノキ、ヤマグワ、ヤチダモ、ドロヤナギ、エゾノカワヤナギ、オニグルミ、ハンノキ、エゾヤマザクラ、ニワトコ、ヤマブドウなどの炭化したものが検出された。

小括

a この遺構上は、第Ⅳ層から掘り込まれており、この遺跡を形成する他の多くの遺構と同じ時間帯に営まれたものである。

b さらに、この土壌と他の遺構との関連は、主として土器の接合からつぎのようなことがいえる。

まず、竪穴住居では3号、5号竪穴住居との関連が個体番号甕71の接合関係からいえる。土壌間での接合関係はみられない。炭化物や焼土では、炭化物マウンド(個体番号坏31, 個体番号甕71, 同179の3個体), 炭化物14(個体番号甕76, 同152の2個体), 炭化物16(個体番号甕71の1個体), 炭化物19(個体番号甕76, 同152の2個体), 炭化物42(個体番号坏31の1個体), 炭化物52(個体番号坏31, 個体番号甕71の2個体), 焼土12(個体番号甕76の1個体), 焼土18(個体番号甕76の1個体), 焼土22(個体番号甕71, 同98の2個体), 焼土24(個体番号甕73, 同152の2個体), 焼土27(個体番号甕76, 同179の2個体), 焼土32(個体番号甕14, 同71の2個体)など14個所との関連がみられた。

c この遺構は、不整円形の小土壌(長軸2.2m)で、上部構造を示すものは何も検出されていない。

d この土壌は、墳底面から数えて3枚の焼土とそれを覆う炭の堆積がみられた。このことは、墳底部をふくめて最低3度にわたる火の使用が行われたことを意味している。

e この土壌内での火の使用は、墳底面から出土した鉄滓と密接な関連をもつものである。そのための燃料は、炭を構成するおよそ16種類の樹木が使われていた。一方、炭の中にサケ科魚類の歯骨を主体とする残滓や12個体分の土器片、石器など廃品が含まれていた。これらは主に3号、5号竪穴住居などからもたらされた廃品の類で、bに示した6箇所の焼土へも同時にともたらされ、焼却されたことを意味している。

f この土壌での作業の過程は、炭化物マウンド、炭化物14, 同16, 同19, 同42, 同52などへもおよぶ。つまり、この土壌での作業—多分鉄滓と密接な関連をもつ作業によって生じる廃棄物の処理の場がこれらの炭化物集積跡であると推定される。もっとも遠い炭化物42までの距離は、約50mである。

⑥ 5号土壌

A 位置

08-07グリッド内に位置している。埋没河川・セロンベツ川の左岸域に分布する焼土・炭化物群の中にある。

B 規模・形状

墳口部が2.0m×1.9mの不整円形を呈する。遺構確認面からの深さは、12cm～20cmである。

C 壁・床面

第Ⅳ層の粘土層を掘り込んで壁としている。壁高は12cm～16cmで、床面からの立ちあがりはなだらかである。床面は第Ⅳ層の粘土層の中にあり、凹凸があって軟弱である。床面上には、厚さ10cm～25cmで炭が堆積、遺物も含まれている。

D 堆積土

遺構の埋没状況をしらべるために、土壌に土層観察用のベルトa-a'を設定した。この

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

土壌も他の遺構同様、第Ⅰ層から第Ⅲ層が上面を覆い、遺構が掘り込まれる第Ⅳ層もふくめこの遺跡の基本層序である。

埋土は、①層から第④層までの4枚の土層にわけられた。

- ①層：炭化物粒、白粘土、焼土粒（5mm大）の混じり合った土層である。
- ②層：炭の堆積層で、少量の白粘土粒や焼土粒を含む。
- ③層：炭を少量含む白粘土の堆積層である。
- ④層：細砂の堆積層である。

E 出土遺物

遺物は③層、④層をのぞく埋土から出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器 (総個体数 9) {土師器— 5 — 甕 4}	坏48	5号竪穴住居
	坏63	炭化物30
	坏71	5号竪穴住居
	坏95	—
	坏100	炭化物16
	甕77	焼土27, 焼土29, 炭化物28
	甕180	炭化物16, 焼土22
	甕182	焼土24
	甕194	5号竪穴住居

① 土器

土師器坏5個体分、土師器甕4個体分と帰属不明の破片123点が出土した。

② 動物遺存体

土壌の埋土①層、②層から、サケ科魚類の歯・椎骨とウグイ、マイワシの椎骨が出土した。

③ 植物遺存体

土壌の埋土②層の炭は、トドマツ、アカエゾマツ、ミズナラ、ハルニレ、イヌエンジュ、キハダ、ヤチダモ、エゾノカワヤナギ、オニグルミ、マユミ、イタヤカエデ、ニワトコ、ヤマブドウなどの炭化したものが含まれていることがわかった。

小括

a この遺構は、第Ⅳ層から掘り込まれており、この遺跡を形成する他の多くの遺構と同じ時間帯に営まれたものである。

b さらに、この遺構から出土した土器の接合状況からみて、5号竪穴住居跡とその周辺域(個体番号坏48、個体番号甕71、同甕194の3個体分)、炭化物16(個体番号坏100、個体番号甕180の2個体分)、同22(個体番号甕180の1個体分)、同30(個体番号坏63の1個体分)、焼土24(個体番号甕182の1個体分)、焼土27、28、29(個体番号甕77の1個体分)などとはほぼ同時に存在したといえる。

c この遺構は、不整円形の小土壌(長軸2.0m)で、上部構造を示すものは何も検出されていない。

d この土壌には炭だけの堆積層や焼土粒、粘土粒、炭に破損した遺物が混じり合って堆積する層がみられた。また、主に炭に混じって魚歯骨が検出された。しかし、墳底部などは焼けておらずこの土壌での火の使用は否定される。

e この土壌の用途のひとつは、上記の残滓としての魚歯骨や炭あるいは土器片などの廃物・廃品を集積することにあり、それらの出所の主な遺構に5号竪穴住居が相当する。

f 炭は、樹種が16と豊富である。

7 6号土壌

A 位置

08-07, 09-07の2グリッドにまたがる。5号土壌とは近接し、埋没河川・セロンベツ川の左岸域に分布する焼土・炭化物群の中にある。

B 規模・形状

長軸1.3m弱で、塙口部の平面形は不整形を呈する。遺構確認面からの深さは20cm～35cmである。

C 壁・床面

第Ⅳ層の粘土層を掘り込んで壁としている。床面からはなだらかにたちあがり、境界がはっきりしない。床面は凸凹があり、北西部分が一段と深くつくられている。

D 堆積土

遺構の埋没状況をしらべるために、土壌に土層観察用ベルトa-a'を設定した。この土壌の場合も、第Ⅰ層から遺構の掘り込まれる第Ⅳ層までの土層およびその状況は、他の多くの遺構同様にこの遺跡の基本層序を示している。

土壌の埋土は、①層から⑥層までの6枚にわけられた。

- ①層：暗褐色の粘土層で炭（4mm～5mm）や灰白色の粘土粒を含んでいる。
- ②層：灰黄色の粘土層で炭の細粒を含んでいる。
- ③層：灰黄色の粘土層で上面を炭の薄層に覆われている。
- ④層：黄褐色・暗紫色の焼土で炭の細粒を含む。魚歯骨や土器片などが出土する。
- ⑤層：暗紫色の焼土で炭や魚歯骨の細粒を多量に含んでいる。
- ⑥層：暗褐色の粘土層で塙底面である。

E 出土遺物

遺物は③・④・⑤層の炭、焼土から出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器(総個体数 4) 坏47	—	—
（土師器一坏 1）	甕24	5号竪穴住居, 1号土塙周辺の焼土・炭化物, 炭化物マウンド
— 甕 2	甕194	5号竪穴住居
（須恵器— 1）	須恵器10	焼土11
土製支脚(1)	支脚2	5号竪穴住居, 1号土塙周辺の焼土・炭化物
鉄滓(粉末状)	—	—

① 土器

土師器坏1個体分、土師器甕2個体分、須恵器1個体分が出土した。

② 土製品

土壌の埋土③層から支脚の破片が出土した。

③ 金属および鉄滓

金属器は出土していない。

鉄滓：塙底部の焼土中から粉末状の鉄滓が出土した。

④ 動物遺存体

土壌の埋土④・⑤層からサケ科魚類の歯骨が採取されているが、分析はしていない。

⑤ 植物遺存体

土壌内のスミは、ハルニレ、ヤマグワ、イヌエンジュ、ヤチダモ、エゾノカワヤナギ、オニグルミ、シラカンバ、ハンノキ、イタヤカエデ、ニワトコなどである。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

小括

a この遺構は、第Ⅳ層から掘り込まれており、この遺跡を形成する他の多くの遺構と

同じ時間帯に営まれたものである。

b さらに、この土壌から出土した遺物の接合状況からみて、5号竪穴住居跡、1号土壌周辺の焼土、焼土11、炭化物マウンドなどが同時に存在した遺構である。特に、甕24や支脚2の破片の在り方からみると、6号土壌で火を伴う作業が行なわれた後の窪みに、廃品となったこれらの破片の一部が5号竪穴住居からもたらされ、廃棄されたものである。したがって、厳密には6号土壌での火を伴う作業が5号竪穴住居からの遺物の廃棄行為より時間的に先行したことになる。

c この遺構は、不整形の小土壌（長軸1.3m）で、上部構造を示すものは何も検出されていない。

d この土壌の最初の用途は、火の使用を伴う作業場である。その作業は、墳底部から出土した鉄滓と密接な関連をもつと推定される。

e この土壌からは10種類の炭化した木材片が検出されたが、それらの大部分は窪みに廃棄されたもので、この土壌内での作業とは直接結びつかない。

⑧ 土壌小括

a この遺跡では、竪穴住居などの遺構と重ならず6個の土壌が発見された。土壌の大きさは直径が1m～2m、深さは10cm～35cmで円形や不整形円形である。

b 土壌は大型住居の外でカマドの煙道付近に焼土や炭化物の集中する所がみられるが、その中にある場合（1号、3号土壌の例）と、セロンベツ川の左岸にあたる集落の東南広場で焼土、炭化物が集中する地域の中にみられる場合（4号、5号、6号土壌の例）、とがある。

c 土壌が作られた時代、時期は、この集落を構成する他の多くの遺構とほぼ同じ時期である。さらに、各々の土壌について他の遺構との関連性が判明したものをあげるとつぎのようになる。

1号土壌は、5号竪穴住居、6号土壌および1号土壌周辺の焼土・炭化物遺構と直接関連する。3号土壌は、1号竪穴住居、2号竪穴住居、炭化物マウンド、焼土41、同43、同47、同48、同51と直接関連する。4号土壌は、3号竪穴住居、5号竪穴住居、炭化物マウンド、炭化物14、同16、同19、同42、同52、焼土15、同22、同27、同32と直接関連する。5号土壌は、5号竪穴住居、炭化物16、同30、焼土22、同24、同27、同28、同29と直接関連する。6号土壌は5号竪穴住居、1号土壌周辺の焼土・炭化物、炭化物マウンド、焼土11と直接関連する。

d 土壌の用途は3号、4号、5号、6号の4土壌がそれぞれ関連が判明した竪穴住居からの廃品、廃物の廃棄場であった。また、4号、5号、6号の4土壌は廃棄場に使用される前は、鉄製品の加工などを行なう作業場であった可能性が強い。

しかし、1号、2号土壌は木造りの上屋をもった作業場等の可能性があるが、主たる作業までを特定することはできなかった。

（横山英介）

V-5 〔集石〕

① 集石の概要

ここでいう集石とは、複数個の礫が、ある範囲内にまとまっている状態をさす。この遺跡では、7個所の集石が発見された。集石は、竪穴住居などの遺構のなかにみられるものと、遺構外の生活面にみられるものの2種類がある。前者の2個所については、それぞれの遺構の項で説明している。したがって、ここでは遺構外の5個所について説明する。

② 13-10グリッドの集石

総点数は39個である。礫は安山岩で、第Ⅳ層（粘土層）中の平坦面上65cm×35cmの範囲内に分布している。礫は一部分で接したりするが重なり合うものはない。大きさ、重量については、Tab.Ⅰ-39に示す。それによると重量は、80g～100gに5個、200g以上に3個みられるほかは100g～200gにおさまり、さらに100g～140gに集中する。

③ 20-08グリッドから21-08グリッドにかけての集石

総点数は45個である。礫は安山岩で、第Ⅳ層（粘土層）中の平坦面上70cm×35cmの範囲内に分布している。礫は一部分で接したりするが重なり合うものはない。大きさ、重量については、Tab.Ⅰ-39に示す。それによると重量は、150g以下で50～110gに集中する。

④ 20-15グリッドの集石

総点数は64個である。礫は安山岩で、第Ⅳ層（粘土層）中の凹凸面上30cm×50cmの範囲内に分布している。礫は一部分で接したりするが重なり合うものはない。大きさ、重量についてはTab.Ⅰ-39に示す。それによると重量は、100g以上が2個と少なく、100g以下にまとまりをみせ、特に20g～40gに集中する。

⑤ 31-16グリッドの集石

総点数は7個である。礫は安山岩で、第Ⅳ層（粘土層）中の平坦面上35cm×20cmの細長い範囲内に分布している。礫は一部分で接したりするが重なり合うものはない。大きさ、重量については、Tab.Ⅰ-39に示す。それによると重量は、120g～180gである。

⑥ 集石の小括

- a 集石は、遺構に伴うもの2個所と遺構外に5個所の合計7個所発見された。
- b 遺構に伴う集石のうち、2号竪穴住居の集石は床面で紡錘車と共伴したものである。3号土壌の集石は紡錘車や破損した土器などと共に廃棄されたもので、焼土62周辺の集石も同様である。遺構外の集石は、当時の生活面上に直接置かれており、作業後の状態を示していると思われる。

c 集石のなかの礫の数は、最少7個(31-16グリッド)で最多64個(20-15グリッド)である。また、集石のおよぶ範囲は、小形のもので35cm×20cm、大形のもので径2mである。

d 集石のなかの礫は、相接することはあるが重なり合うことはほとんどない。

e 礫の重量は3群にわけられる。

1群：80g～200gの範囲内にあるが、まれに200g以上のものが含まれる。そのうち、140g～200gにまとまるもの(2号堅穴住居と3号土壇④層面)と、100g～140gにまとまるもの(13-10グリッド)とがある。

2群：100g以下で、特に20g～60gに集中するもの(20-15グリッド,焼土62周辺)。

3群：30g～150gの範囲内にあるが、50g～100gに比較的まとまるもの(20-08～21-08グリッド)。

その他、31-16グリッドの礫群のように、礫が7個と少ないが大形で重量のかさむもののみ、という集石もみられた。

(横山英介)

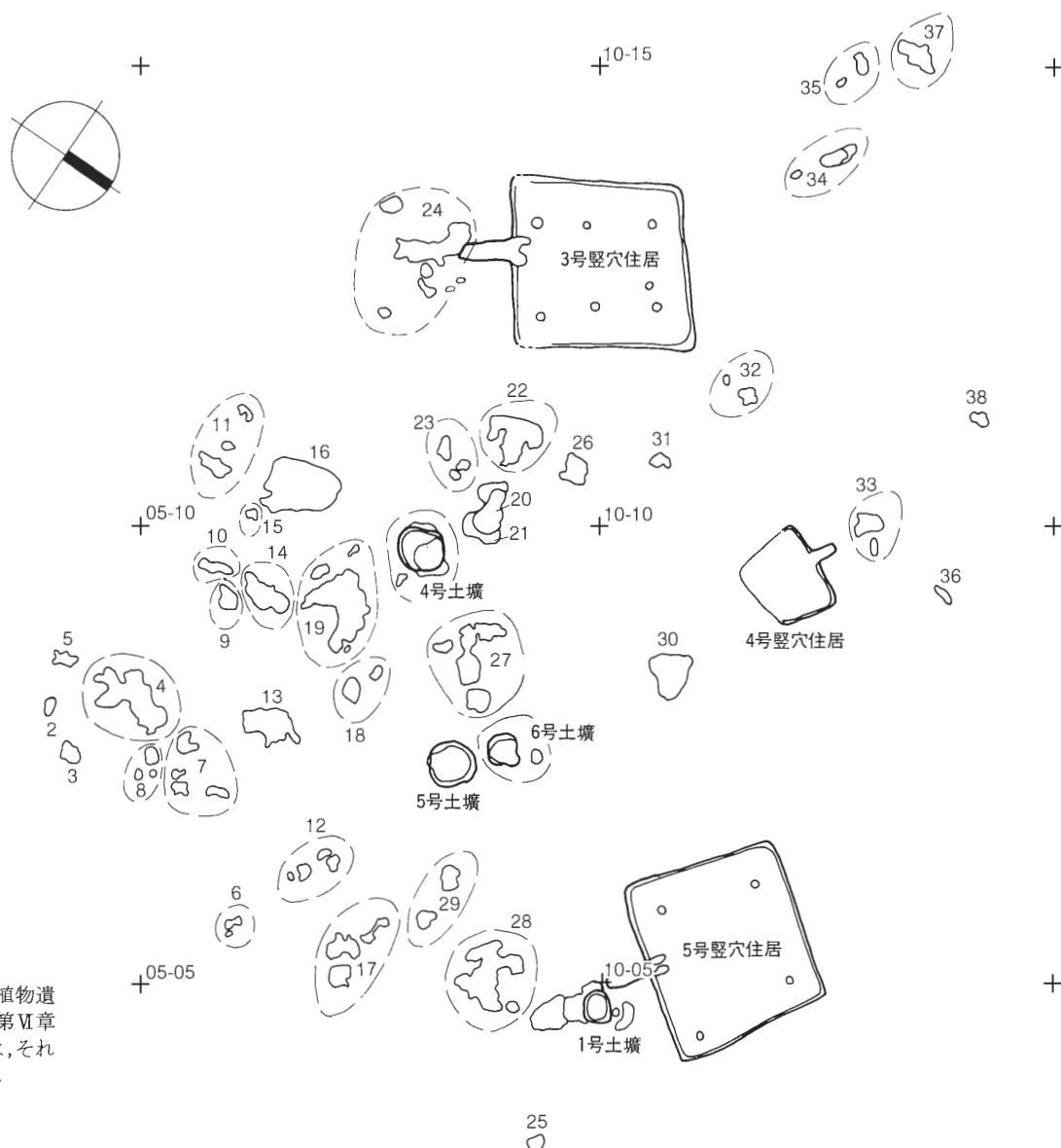
V-6 [焼土・炭化物集積]

① 概要とグルーピング

ここでいう焼土とは、主として「焚火」のあとを、炭化物集積とは、炭などを廃棄し集積した場を指す（以下略して「炭化物○番」「焼土○番」あるいは「焼土・炭化物○番」と示す）。

竪穴住居跡内以外における焼土・炭化物集積は142個所におよぶ。ここでは便宜的にそれらを76にグルーピングし、一括通し番号を付けた。そのうち、№1は03-14グリッドで旧河川内での炭化種子の自然の集中を指す。また、№45(16-11グリッド内第Ⅳ層)、№46(16-13グリッド内第Ⅳ層)、№56(20-12グリッド内第Ⅳ層)、№57(20-13グリッド内第Ⅳ層)、№75(21-17グリッド内第Ⅳ層)の5個所については細部の位置関係が調査の際の不幸のため図示できなかった。

PL. Ⅱ-4 焼土、炭化物集積のグループ分け



※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。



② 炭化物マウンド

A 位置

16-11, 16-12, 17-09, 17-10, 17-11, 17-12, 18-09, 18-10, 18-11の9個のグリッドにまたがり、標高10.8m～11.0mの生活面上にある。西側には焼土47, 48, 49, 51, 炭化物50が近接し、北側には約5mの距離に2号土壇, 焼土54, 55が分布する。東側には焼土74, 炭化物39がみられるほか比較的空き地が多い。各竪穴住居跡までの直線距離は、1号までが10m弱、2号までが15m弱、3号までが22m弱、4号までが18m強、5号までが25m強である。

B 規模・形状

長軸はほぼ南北で14m弱、短軸0.4m～0.6mの不整楕円形を呈する。さらに、このマウンドはふたつの小マウンドから成り立っている。ひとつは17-11グリッドから17-12グリッドにかけての盛り上りで「小マウンドA」と呼称する。もうひとつは17-10, 17-11, 18-10, 18-11グリッドにかけての盛り上りで「小マウンドB」と呼称する。

「小マウンドA」は標高10.9mの生活面（第Ⅴ層）上にあり、最も高い部分は周囲の生活面より約13cm高い。「小マウンドB」は標高約10.8mの生活面（第Ⅴ層）上にあり、最も高い部分は周囲の生活面より約11cm～40cm高く、その範囲は60cm～80cmである。「小マウンドB」は「小マウンドA」より分布範囲が広く、大小14個の焚火跡を含んでいる。

C 堆積

3箇所での地層図をもとに説明する。なお、マウンド上に堆積する土層と生活面の土層は基本層序である。

① a-a'ライン(18-10グリッド↔18-11グリッドの南東を通る地層)

炭化物の堆積は、18-11グリッド付近が20cm～22cmと最も厚く、18-10グリッド付近が北西の末端部で薄くなる。炭化物層は炭、焼土、土器片、礫などから成り、1cm～3cm単位の薄い層が何枚にも重複して堆積している。

② b-b'ライン(17-10グリッド↔19-10グリッドの西南を通る地層)

「小マウンドB」の北端末端部を通るラインのため、堆積は5cm～7cmと薄い。焼土の小ブロックが部分的にみられる。

③ c-c'ライン(17-11グリッド↔18-11グリッドの北東を通る地層)

炭化物の堆積は、18-11グリッド杭付近が15cm～18cmと最も厚く、17-11グリッド杭付近で薄くなる（5cm～6cm）。最も堆積が厚い部分では炭が4～5枚の層を形成しており、また幅10cm～12cm、厚さ2cm～6cmの焼土がみられる。さらに、この部分には土器片などの遺物が多量に含まれている。

D 出土遺物

炭化物マウンドからの出土遺物は、土器、土製品、金属器などのほか多量の動・植物遺存体が炭に混じり合ったりその周辺などから出土した。

① 土器

土師器坏24個体分、甕46個体分、須恵器4個体分のほか帰属不明の破片848点が出土した。

土師器坏：土師器坏は個体数で24個体分のほか帰属不明の破片が232点出土した。

土師器甕：土師器甕は、個体数で46個体分のほか帰属不明の破片が616点出土した。

須恵器：炭化物マウンドからは4個体分の須恵器が出土した。

② 土製品

紡錘車2個分、玉15点が炭の中やその周辺から出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏6	——
(総個体数 74)	坏10	——
(土師器—坏24)	坏16	3号土壇, 焼土41
—甕46	坏17	焼土18, 焼土28, 炭化物30
須恵器——4	坏21	焼土43
	坏22	焼土27
	坏24	焼土44, 炭化物52
	坏28	炭化物52
	坏30	——
	坏31	4号土壇, 炭化物42, 炭化物52
	坏35	炭化物42
	坏36	炭化物52
	坏37	——
	坏41	炭化物52, 焼土62
	坏42	——
	坏43	2号竪穴住居, 焼土43, 焼土44
	坏51	焼土43
	坏53	——
	坏54	焼土43
	坏55	炭化物52
	坏58	焼土53
	坏61	——
	坏62	1号土壇周辺の焼土・炭化物, 焼土17
	坏110	——
	甕4	2号竪穴住居
	甕10	焼土43, 焼土58, 炭化物52
	甕11	炭化物52
	甕12	焼土43, 炭化物52
	甕15	2号竪穴住居, 焼土34, 焼土51
	甕20	炭化物52, 炭化物53
	甕21	3号土壇, 焼土43, 炭化物52
	甕23	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52
	甕24	5号竪穴住居, 1号土壇周辺の焼土・炭化物, 6号土壇
	甕28	2号竪穴住居
	甕29	焼土43, 炭化物52
	甕30	2号竪穴住居, 焼土37, 焼土43, 炭化物52
	甕31	2号竪穴住居, 3号土壇, 焼土43, 炭化物52
	甕32	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52
	甕34	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52, 焼土34, 焼土47
	甕36	焼土35, 焼土37, 焼土43, 炭化物52
	甕38	2号竪穴住居, 焼土41周辺, 焼土43, 炭化物52
	甕43	焼土43, 炭化物52
	甕45	2号竪穴住居, 炭化物52
	甕48	炭化物52, 炭化物53
	甕49	2号竪穴住居, 炭化物52
	甕52	2号竪穴住居, 焼土41, 焼土43, 焼土44
	甕57	焼土41, 焼土43, 焼土48, 炭化物50, 炭化物52
	甕59	2号竪穴住居, 炭化物52
	甕63	焼土43, 炭化物52
	甕64	焼土41周辺, 焼土43, 炭化物19
	甕65	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52
	甕67	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52
	甕68	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物30周辺, 炭化物52, 3号竪穴住居覆土中
	甕69	2号竪穴住居, 焼土41, 焼土43, 炭化物52
	甕71	3号竪穴住居, 4号土壇, 5号竪穴住居, 焼土22, 炭化物16周辺, 炭化物52
	甕75	2号竪穴住居, 炭化物52
	甕85	2号竪穴住居, 焼土43, 焼土49, 焼土62, 炭化物52
	甕87	3号土壇, 焼土43, 炭化物52

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕90	――
	甕99	――
	甕102	焼土50, 焼土49
	甕105	2号竪穴住居, 3号土壇, 焼土43
	甕113	――
	甕118	2号竪穴住居, 焼土41, 焼土43, 焼土47, 焼土60, 炭化物50, 炭化物52
	甕119	炭化物52
	甕120	――
	甕130	――
	甕132	――
	甕179	4号土壇, 焼土27
	甕195	――
	須恵器2	炭化物50
	須恵器7	――
	須恵器8	炭化物50, 炭化物52, 焼土57, 焼土62, 焼土64, 焼土65
	須恵器16	2号竪穴住居
土製紡錘車(2)	紡錘車8	――
	紡錘車9	焼土43
土製玉(15)	――	――
石器・剥片(3)	――	炭化物52(遺物番号8632, 3398, 3375)
金属製品(1)	環	――(遺物番号8527)
鉄滓(1)	――	――(遺物番号3321)

③ 石器・石製品および礫

黒曜石製の剥片，剥片石器 3 点が小マウンド B から出土した。

遺物番号8632は土器片9237，9238，10446，10966などと極小ブロックをなす。遺物番号3398は土器片8659，10019，10419などと極小ブロックをなす。遺物番号3375は土器片10754，10755，10666，10442，10667や種子10444などと極小ブロックをなす。

④ 金属器および鉄滓

環（遺物番号8527）が 1 点17-11〔33〕グリッドから，鉄滓（遺物番号3321）が 1 点17-11〔11〕グリッドから出土した。

⑤ 動物遺存体

17-10グリッド	サケ科魚類椎骨・歯，ニシン科魚類（マイワシ）椎骨，コイ科魚類椎骨
17-11グリッド	サケ科魚類椎骨（イトウ椎骨を含む）・歯，コイ科魚類椎骨，カサゴ科魚類椎骨，ニシン科魚類椎骨，ネズミ類尾椎骨・中節骨・中手骨
17-12グリッド	サケ科魚類椎骨（イトウ椎骨を含む）・歯，コイ科魚類椎骨・ニシン科魚類（マイワシ），ネズミ類尾椎骨・中節骨
18-10グリッド	サケ科魚類椎骨・歯，コイ科魚類椎骨，カサゴ科魚類椎骨
18-11グリッド	サケ科魚類椎骨・歯そのほか，ウグイ椎骨，シカ中節骨・末節骨

⑥ 植物遺存体

炭化物マウンドからは，この遺跡から出土し同定された炭化材26科26属のうち大部分が検出された。

それは，つぎのとおりである。

トドマツ，ミズナラ，ハルニレ，エゾエノキ，ヤマグワ，イヌエンジュ，キハダ，ヤチダモ，ドロノキ，エゾノカワヤナギ，オニグルミ，アサダ，ハンノキ，カツラ，ホオノキ，ノリウツギ，エゾヤマザクラ，イタヤカエデ，ニワトコ，ヤマブドウなどである。

※動物遺存体(第Ⅵ章 8)，植物遺存体(第Ⅵ章 9)，炭化材(第Ⅵ章 10)などの分析については，それぞれの節を参照されたい。

小括

a 炭化物マウンドは，各竪穴住居のうちもっとも近い 1 号住居から10m 弱，もっとも

遠い5号住居から25m強の距離をおいた、集落のほぼ中央広場に形成されていた。そこは、標高約10.9mで炭などは第Ⅴ層の粘土層の上面から堆積していた。

b 炭などの分布範囲は、長軸約14m弱、短軸約0.4m～0.6mで、ふたつの小マウンドが形成されている。マウンドはもっとも高い部分で約40cmである。マウンドは炭が主体で、灰や焼土が複雑に堆積を繰り返している。これらは遺物類とともにこの場所に集積されたものである。また、この場所で行われた焚火の跡は大小14箇所みられた。

c 遺物の大部分は土器片で、マウンドの底面から上面にいたるまで含まれており、炭などとともにマウンド状遺構を形成している。出土した土器片は、坏24個体分、甕45個体分、須恵器3個体分と帰属不明の破片848点とに仕分けされた。土器以外の遺物は、土製紡錘車2点、土製玉15点、石器3点、金属製環1点、鉄滓1点が出土している。また、サケ科魚類の椎骨・歯などの動物遺存体やオオムギ、コムギ、コメ、アワなどの植物種子類、トマツ、ミズナラ、ハルニレ、ヤチダモなど26科26属の炭化材が出土している。

d この炭化物マウンドは、主として土器片の接合作業を基軸として他の遺構との直接の関係が把握された。それによると、堅穴住居は2号、3号、5号堅穴住居の3箇所と関連が認められた。2号堅穴住居からはすくなくとも22個体分の土器の破片や1点の黒曜石製の剥片がもたらされていた。3号と5号堅穴住居からは、判明したものでそれぞれ1個体分の土器の破片がもたらされていた。

土壌では、つぎの3箇所との関連が直接あったことが判明した。3号土壌とは5個体分の土器片が、4号土壌とは3個体分の土器片が、6号土壌とは1個体分の土器片がそれぞれまたがってみられた。

焼土、炭化物遺構では、30グループとの関連が直接あったということが判明した。1号土壌周辺の焼土・炭化物、炭化物16、焼土17、同18、炭化物19、焼土22、炭化物・焼土28、同32、同34、同35、同47、同48、同51、同57、炭化物58、焼土60、同64、同65とは1個体分の土器片が、焼土27、炭化物30、焼土37、炭化物42、焼土49とは2個体分の土器片が、焼土44、炭化物53、焼土62とは3個体分の土器片が、焼土41とは7個体分の土器片が、焼土43とは28個体分の土器片と1個体分の紡錘車の破片が、炭化物50とは5個体分の土器片が、同52とは39個体分の土器片がそれぞれまたがってみられた。

e この炭化物マウンドは、堅穴住居などで廃品となった物資—その主体をなすものは土器である—や残滓、カマドの炭や灰などを廃棄し集積した場であり、数多い廃棄場のなかでも炭化物52とともにこの集落における核をなすものである。同一個体の破片がこの炭化物マウンドを含め複数の土壌や焼土、炭化物遺構にまたがってみられる場合があるが、それはその個体が複数に分れて廃棄されたことを示している。

土器片などの大部分は大型住居からもたらされたもので、そのなかでも2号堅穴住居からのものが主体を占める。このことは他の物資、土製玉や石器はもちろんのこと残滓や炭、灰、植物種子などの多くが2号堅穴住居からもたらされたものである、ということを示している。

③ 焼土・炭化物集積

Tab.Ⅱ-30に一覧を示す。ここでは図示したものを中心に説明する。

Ⅰ 炭化物 4

位置———14-07, 04-08, 05-07, 05-08グリッド。

規模・形状——長軸4mで不整形を呈する。暗紫色の炭の堆積で、焼土の小ブロックを含む。

堆積———第Ⅳ層中である。

出土遺物——遺物は炭や焼土ブロックに混じって出土する。

遺物	個体番号	関連遺構
土器(総個体数4)	坏104	炭化物16
(土師器—坏 1)	甕93	2号竪穴住居, 焼土41, 焼土43, 炭化物52
	—甕 2	炭化物14
	須恵器—— 1	須恵器1

① 土器

土師器坏 1 個体分, 同甕 2 個体分, 須恵器坏 1 個体分が出土した。

② 動物遺存体

サケ科魚類椎骨が炭の中から出土した。

小括

土器の接合からこの炭化物遺構と関連のある遺構は, 2 号竪穴住居, 焼土41, 同43, 炭化物16, 同52の 5 個所である。

② 焼土12

位置——06-06～07-06グリッド。

規模・形状——4 個が一組である。最大のもので長軸70cm強, 最小のもので30cm弱で, いずれも不整形に焼けている。炭を多く含み暗紫色を呈する。

堆積——第Ⅴ層上面がうすく焼けている。

出土遺物——炭にまじって出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器(個体数1)	甕26	4号土壇, 焼土18, 炭化物14, 炭化物19

① 土器

土師器坏 1 個体分が出土した。

小括

土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は, 4 号土壇, 焼土18, 炭化物14, 同19の 4 個所である。

③ 炭化物14

位置——06-09グリッド。

規模・形状——長軸2.1mで不整形を呈する。暗紫色の炭堆積で, 厚さは10mm～20mmである。

堆積——第Ⅴ層上面。

出土遺物——炭に混じって多量の遺物が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏99	——
(総個体数 4)	甕76	4号土壇, 焼土12, 焼土18, 炭化物19, 焼土27
(土師器—坏 1)	甕152	4号土壇, 焼土24, 炭化物19
	—甕 3	炭化物4

① 土器

土師器坏 1 個体分, 同甕 3 個体分が出土した。

② 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯が出土している。

※動物遺存体(第Ⅵ章 8), 植物遺存体(第Ⅵ章 9), 炭化材(第Ⅵ章 10)などの分析については, それぞれの節を参照されたい。

小括

土器の接合からこの炭化物遺構と関連のある遺構は、4号土壌、焼土12、同18、同24、炭化物19の5個所である。

4 炭化物16

位置—————06-10～07-10グリッド。

規模・形状————3.6m×2.5mの範囲内で不整形に堆積する。炭の厚さは10mm～50mmである。

堆積—————第Ⅴ層上面。

出土遺物————遺物は炭に混じって出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏100	5号土壌
(総個体数 6)	坏106	炭化物52, 2号竪穴住居
〔土師器—坏 2〕	甕71	3号竪穴住居, 5号竪穴住居, 4号土壌, 焼土22, 炭化物マウンド, 焼土32
—甕 3	甕153	——
〔須恵器—— 1〕	甕180	5号土壌, 焼土22
	須恵器4	——
石器 (1)	——	——

① 土器

土師器坏 2 個体，同甕 3 個体，須恵器 1 個体が出土した。

② 石器

黒曜石製のスクレイパー（遺物番号16782）が1点出土した。

③ 植物遺存体

ハルニレ，ヤマグワ，ヤチダモ，エゾノカワヤナギ，オニグルミ，ハンノキ，ニワトコ，ヤマブドウなどの炭化材が検出された。

小括

土器の接合からこの炭化物遺構と関連のある遺構は、3号竪穴住居、5号竪穴住居、5号土壌、焼土22、焼土32、炭化物マウンドの6個所である。

5 焼土18

位置—————07-08グリッド。

規模・形状————2個一組である。大きいもので長軸1.4m，小さいもので80cmであり，いずれも不整形を呈する。炭の厚さは約60mmである。

堆積—————第Ⅴ層上面。

出土遺物————遺物は焼土に混じって出土する。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏17	炭化物マウンド，焼土28, 炭化物30
(総個体数 3)	甕76	4号土壌, 焼土12, 炭化物14, 炭化物19, 焼土27, 焼土28
	須恵器3,	炭化物19

① 土器

土師器坏 1 個体分，同甕 1 個体分，須恵器 1 個体分の破片が出土した。

② 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯が出土している。

③ 植物遺存体

エゾノカワヤナギの炭化材が検出された。

小括

土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は、炭化物マウンド、4号土壌、焼土12、同27、同28、同30、炭化物14、同19の8個所である。

⑥ 炭化物19

位置—————06-10～07-08～07-09グリッド。
規模・形状——長軸3.6m，短軸2.5mの不整形範囲内に，少量の焼土，粘土粒を含む厚さ10mm～40mmの炭の層が堆積する。
堆積—————第Ⅴ層上面。
出土遺物——遺物は主として炭に混じって出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏38	——
(総個体数 10)	坏46	焼土61
(土師器—坏 3)	坏107	焼土22, 4号土壌
	甕64	焼土41, 焼土43, 炭化物マウンド
—甕 6	甕76	4号土壌, 焼土12, 焼土18, 炭化物14, 焼土27
須恵器—— 1	甕111	——
	甕137	——
	甕152	4号土壌, 炭化物14, 焼土24
	甕159	炭化物・焼土20・21
	須恵器3	焼土18, 焼土15

① 土器

土師器坏3個体分，同甕6個体分，須恵器1個体分が出土した。

② 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯とウサギ中足骨が出土した。

③ 植物遺存体

ハルニレ，ヤマグワ，イヌエンジュ，ヤチダモ，エゾノカワヤナギ，ミズキといった炭化材が検出された。

小括

土器の接合からこの炭化物遺構と関連のある遺構は，4号土甕内，炭化物マウンド，焼土12，同15，同18，同20・21，同22，同24，同27，同41，同43，同61，炭化物14の13個所である。

⑦ 炭化物20・焼土21

位置—————08-09～08-10グリッド。
規模・形状——直径2m強の不整形の範囲内に焼土と炭化物とが分布する。このふたつの在り方は，焼土21の上に炭化物20がのっている。したがって，焼土と炭化物は対になるものである。厚さは約50mm～60mmである。
堆積—————第Ⅴ層上面。
出土遺物——焼土，炭化物中からそれぞれ多くの遺物が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏84	——
(総個体数 3)	甕159	炭化物19
(土師器—坏 1)	甕167	——
—甕 2		
石器(1)	——	(遺物番号16052)

※動物遺存体(第Ⅵ章8)，植物遺存体(第Ⅵ章9)，炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については，それぞれの節を参照されたい。

① 土器

土師器坏 3 個体分，同甕 2 個体分が出土した。

② 石器

炭化物20から黒曜石製石器（遺物番号16052）が 1 点出土した。

③ 動物遺存体

炭化物20 サケ科魚類椎骨・歯，ウグイ咽頭骨，コイ科魚類椎骨。

焼土21 サケ科魚類椎骨・歯，コイ科魚類椎骨，鳥類(尺骨？)。

④ 植物遺存体

焼土21からイチイ，ハルニレ，エゾエノキ，ヤマグワ，ヤチダモ，エゾノカワヤナギ，カツラ，エゾヤマザクラ，イタヤカエデ，ニワトコ，ヤマブドウなどの炭化材が検出された。

小括

土器の接合からこの炭化物・焼土遺構と関連のある遺構は，炭化物19の 1 個所である。

8 焼土・炭化物22

位置—————08-10～08-11～09-10～09-11 グリッド

規模・形状——長軸2.4m 弱の不整形を呈する。焼土の厚さは10mm～70mm，その上に 2 mm～5 mmの厚さで炭の層が堆積する。

堆積—————第Ⅳ層中。

出土遺物————主に炭化物に混じって多くの遺物が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏98	——
(総個体数 6)	坏107	4号土壌, 焼土22
(土師器—坏 2 —甕 4)	甕71	3号竪穴住居, 4号土壌, 炭化物マウンド, 5号竪穴住居, 炭化物16, 炭化物52
	甕98	4号土壌
	甕163	5号竪穴住居
	甕180	5号土壌, 炭化物16
土製支脚(1)	支脚5	——

① 土器

土師器坏 2 個体分，同甕 4 個体分が出土した。

② 土製品

支脚 5 の破片が出土した。

③ 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯，コイ科魚類椎骨，ネズミ左上顎骨が出土した。

④ 植物遺存体

エゾノカワヤナギ，ヤマブドウなどの炭化材が検出された。

小括

土器の接合からこの遺構と関連のある遺構は，3 号竪穴住居，5 号竪穴住居，4 号土壌，5 号土壌，炭化物マウンド，炭化物16，焼土22，炭化物52の 8 個所である。

9 焼土24

位置—————3 号竪穴住居跡の煙道周辺に分布する。そこは07-12～07-13～08-12～08

- 13グリッドに相当する。
- 規模・形状——7個が一組である。最大のもので長軸7m、最小のもので1m、いずれも不整形である。
- 堆積——第Ⅳ層中。
- 出土遺物——焼土の中などから遺物が出土する。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏11	焼土24
(総個体数 11)	坏86	——
{土師器—坏 2 —甕 9}	甕73	4号土壇
	甕83	——
	甕104	——
	甕152	炭化物14, 炭化物19, 4号土壇
	甕165	3号竪穴住居
	甕166	3号竪穴住居
	甕170	——
	甕182	5号土壇
	甕192	——
鉄滓(4)	——	(遺物番号2735, 2737, 2802, 3006)

- ① 土器
土師器坏が2個体分と同甕9個体分が出土している。
- ② 金属器および鉄滓
固形の鉄滓(遺物番号2735, 2737, 2802, 3006)4点と粉末状の鉄滓が出土した。焼土からの出土例は他にない。

小括
土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は、3号竪穴住居、4号土壇、5号土壇、焼土24、炭化物14、同19の6個所である。

10 炭化物・焼土26

- 位置——09-10グリッド。
- 規模・形状——長軸1.3mで不整形を呈する。炭、焼土、粘土粒が20mm～80mmの厚さに混じり合って堆積する。底面は焼けていない。
- 堆積——第Ⅳ層中。
- 出土遺物——出土していない。

11 焼土27

- 位置——08-08グリッド。
- 規模・形状——4個で一組である。最大②で長軸2.6m、最小①で1m、いずれも不整形を呈する。①は炭を含む焼土で、焼け方は弱い。②、③は骨片を多量に含む厚さ50mmの焼土である。aは灰と焼土、bは赤褐色の焼土で多量の骨片を含む。cは暗褐色の焼土である。④は強く焼けた焼土。地山は赤褐色でボロボロになっている。多量の骨片や遺物を含む。
- 堆積——第Ⅳ層。
- 出土遺物——多量の遺物が出土した。

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

- ① 土師器
土師器坏3個体分と同甕4個体分が出土している。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏22	炭化物マウンド
(総個体数 7)	坏33	5号竪穴住居, 1号土壇周辺の焼土・炭化物
〔土師器—坏 3〕 —甕 4〕	坏83	——
	甕3	——
	甕77	焼土29, 炭化物28, 焼土27, 5号土壇
	甕141	5号竪穴住居
	甕179	4号土壇, 炭化物マウンド
石器(2)	——	(遺物番号15301, 15302)

② 石器

黒曜石製剝片，石器（遺物番号15301，15302）2点が出土した．

③ 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯，コイ科魚類椎骨が出土した．

④ 植物遺存体

ミズナラ，エゾノカワヤナギ，エゾヤマザクラ，ニワトコ，ヤマブドウなどの炭化材が
検出された．

小括

土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は，5号竪穴住居，1号土壇周辺の焼土・炭
化物，4号土壇，5号土壇，焼土29，炭化物28，炭化物マウンドの8個所である．

12 焼土29

位置—————08-05，08-06グリッド．
規模・形状——2個で一組．長軸1mで，いずれも不整形を呈する．暗紫色の焼土で芯
は赤褐色である．厚さ10mm～20mmで焼け方は弱く，地山までは焼けてい
ない．
堆積—————第Ⅴ層．
出土遺物———土師器甕が1個体分出土した．

遺物	個体番号	関連番号
土器(個体数1)	甕77	焼土27, 炭化物28, 5号土壇, 焼土29

小括

土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は，5号土壇，焼土27，炭化物28，焼土29の
4個所である．

13 炭化物31

位置—————10-10グリッド．
規模・形状——長軸1.1mで不整形を呈する．厚さ10mm～30mmに炭，焼土ブロック，粘
土粒が混じり合った層である．薄い粘土の間層（約5mm）をはさんで下
位からも同じような炭化物の堆積がみられた．下面は焼けていない．
堆積—————第Ⅳ層．
出土遺物———出土していない．

14 焼土33

位置—————12-09～12-10～13-09～13-10グリッド．西側に約1mはなれて集石があ
る．
規模・形状——2個一組である．長軸1.5m，厚さ10mm～70mm，いずれも不整形を呈す

る。炭を多量に含んでおり、焼土部分は真赤に焼けている。

堆積————第Ⅴ層上面。

出土遺物————なし。

15 焼土34

位置————12-13～12-14グリッド。

規模・形状——2個一組である。1.4m×0.6m，楕円形である。

堆積————第Ⅳ層。

出土遺物————土師器甕が1個体分出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器(個体数1)	甕15	2号竪穴住居, 焼土51, 炭化物マウンド

小括

土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は、2号竪穴住居、焼土51、炭化物マウンドの3個所である。

16 焼土41

位置————15-16～15-17グリッド。

規模・形状——2個一組である。いずれも不整形である。④は長軸1.1mで厚さ20mm～40mmの赤褐色部分①と、厚さ50mm～70mmの暗紫色部分②とからなる。⑤は長軸1.5mの赤褐色の焼土で、炭を多量に含む。

堆積————第Ⅳ層。

出土遺物————焼土中や周辺から遺物が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏16	3号土壇, 炭化物マウンド
(総個体数 9)	甕38	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンド
(土師器一坏 1 一甕 8)	甕52	2号竪穴住居, 焼土43, 焼土44, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕57	焼土43, 焼土48, 炭化物マウンド, 炭化物50, 炭化物52
	甕64	焼土43, 炭化物マウンド, 炭化物19
	甕69	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕70	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52
	甕93	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物4, 炭化物52
	甕118	2号竪穴住居, 焼土43, 焼土47, 焼土60, 炭化物マウンド, 炭化物50, 炭化物52

① 土器

土師器坏が1個体分、同甕が8個体分出土した。

② 植物遺存体

ハルニレ、キハダ、ヤチダモ、エゾノカワヤナギ、ヤマブドウなどの炭化材が検出された。

小括

土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は、2号竪穴住居、3号土壇、炭化物マウンド、焼土43、44、47、48、60、炭化物19、50、52の11個所である。

17 炭化物42

位置————15-21～15-22～16-21グリッド。

規模・形状——2個一組である。大きい方は長軸7mで不整楕円形を呈する。上部は炭

※動物遺存体(第Ⅵ章8)、植物遺存体(第Ⅵ章9)、炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については、それぞれの節を参照されたい。

を含む暗褐色の粘土で、多量の遺物を出土する。下部は多量の炭と少量の焼土ブロックを含む厚さ約10cmの黒色土である。

堆積———第Ⅳ層。

出土遺物———炭に混じって遺物が出土する。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏31	4号土壇,炭化物52
(総個体数 2)	坏35	炭化物マウンド

① 土器

土師器坏 2 個体分が出土した。

小括

土器の接合からこの焼土と関連のある遺構は、4 号土壇、炭化物52、炭化物マウンドの 3 個所である。

18 焼土43

位置———16-16～16-17～17-16～17-17～18-16～18-17グリッドにまたがる。そこは 2 号堅穴住居跡煙道部の周辺にあたる。

規模・形状——赤く焼けた焼土部分 6 個所が 5 cm～60cmの間隔で分布している。いずれも長軸が50cm～60cmで不整形を呈する。各々の焼土は周辺部が暗紫色に変色し、連なっている。このうち、4 個の焼土は 2 号堅穴の東南壁にはば並行してみられ、堅穴側にあって深さ12cm～13cmで方形に掘り込まれたピット内焼土と一群をなす。ピット内焼土には支脚 3（遺物番号1000 0）が埋め込まれており、後に火を受け赤く変色している。これら 5 個の焼土より東側に約 1 m離れてもうひとつの焼土がみられる。これらの焼土の厚さはいずれも10cm～15cmである。

また、これらの焼土群の周辺には炭が分布しており、特に、2 号堅穴寄りの空間部に顕著である。

堆積———第Ⅳ層。3 個所での土層観察を示す。

a-a'ライン

①は白粘土の薄層（約 5 mm）上に、赤褐色の焼土と暗紫色の焼土が混じり合って堆積している。

②は赤色の焼土。

③は炭の堆積。

④は暗紫色の焼土。

b-b'ライン

①は赤色の焼土。支脚 3 が埋め込まれている。

②は炭を含む暗紫色の焼土。

③は炭を含む暗灰色のシルト。

④は暗紫色の焼土。

⑤は暗灰色のシルト。

c-c'ライン

①は暗紫色の焼土。

②は赤色の焼土。支脚 3 が埋め込まれている。

③は暗紫色の焼土。灰、炭を含む。

- ④は炭を含む暗灰色の粘土.
- ⑤は赤色の焼土.
- ⑥は暗紫色の焼土.

出土遺物

遺物	個体番号	関連遺構
土器 (総個体数 42) {土師器— 6 — 甕35 (須恵器— 1)	坏21	炭化物マウンド
	坏25	炭化物52
	坏43	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土44
	坏51	炭化物マウンド
	坏54	炭化物マウンド
	坏67	—
	甕10	炭化物マウンド, 炭化物52, 焼土58
	甕12	炭化物マウンド, 炭化物52
	甕21	3号土壌, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕23	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕29	炭化物マウンド, 炭化物52
	甕30	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52, 焼土37
	甕31	2号竪穴住居, 3号土壌, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕32	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕33	—
	甕34	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕35	—
	甕36	焼土35, 焼土37, 炭化物52, 炭化物マウンド
	甕37	2号竪穴住居, 炭化物52, 炭化物70
	甕38	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52, 焼土41
	甕41	2号竪穴住居
	甕43	炭化物マウンド, 炭化物52
	甕52	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土41, 焼土44, 炭化物52
	甕57	炭化物マウンド, 焼土41, 焼土48, 炭化物50, 炭化物52
	甕61	炭化物52, 炭化物マウンド
	甕62	2号竪穴住居, 炭化物52
	甕63	炭化物52, 炭化物マウンド
	甕64	炭化物マウンド, 焼土41, 炭化物19
	甕65	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕67	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕68	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物52, 3号竪穴住居覆土中
	甕69	2号竪穴住居, 焼土41, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕70	2号竪穴住居, 焼土41, 炭化物52
	甕85	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土49, 焼土62, 炭化物52
	甕87	3号土壌, 炭化物マウンド, 炭化物52
	甕93	2号竪穴住居, 炭化物4, 炭化物52, 焼土41
	甕95	—
	甕116	炭化物52
	甕118	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土41, 焼土47, 焼土60, 炭化物50, 炭化物52
	甕128	—
	甕146	—
	須恵器 7	炭化物マウンド
土製支脚(1)	支脚3	—
土製紡錘車(1)	紡錘車9	炭化物マウンド
石器・剥片(4)	—	(遺物番号8329, 8587, 12510, 12517,)
磨製石斧(1)	—	(遺物番号400)

※動物遺存体(第Ⅵ章 8), 植物遺存体(第Ⅵ章 9), 炭化材(第Ⅵ章 10)などの分析については, それぞれの節を参照されたい.

① 土器
土師器坏 6 個体分, 同甕35個体分, 須恵器 1 個体分が出土した.

② 土製品

支脚，紡錘車がそれぞれ 1 点出土した。

③ 石器

黒曜石製の石器 4 点が出土した。そのうち 1 点（遺物番号8329）は焼土中から，3 点（遺物番号8587，12510，12517）は周辺の炭の中から出土した。また，磨製石斧（遺物番号400）が 1 点，3 号土壌に近接して出土している。

④ 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯，コイ科魚類椎骨が焼土の中から出土した。

⑤ 植物遺存体

ハルニレ，ヤマグワ，キハダ，ニガキ，ヤチダモ，エゾノカワヤナギ，オニグルミ，アサダ，ハンノキ，エゾヤマザクラ，イタヤカエデ，ヤマブドウなどの炭化材が検出された。

小括

a この焼土群は，2 号堅穴住居の煙道周辺にみられたもので，6 個所の強く火を受けた部分からなる。

b この焼土群は，方形遺構 1 個所以外地面が直接焼けており，生活面で焚火を行なったことを示している。一方，方形遺構の焼土は，方形の小ピットの中に支脚を設置したものであり，他とは仕組みが異なる。しかし，いずれの焼土も 10～15cm の厚さで地面が焼けており，ここでの作業にかなりの時間を要したことを示している。

c この焼土群は，他の多くの遺構が営まれた時代・時期とほぼ同じ頃の所産である。

d さらに，この焼土群は出土した 44 個体分の土器や土製品の接合状況からみると，つぎに示す 20 個所の遺構と関連する。

まず，堅穴住居では 2 号堅穴住居が 1 個所で，19 個体分の土器がまたがる。また，3 号堅穴住居の覆土中から甕 1 個体分（個体番号甕68）の破片のうち 1 点が出土した。これは 3 号堅穴住居の廃絶が，すくなくともこの焼土群や 2 号堅穴住居よりは時間的に先行したことを意味している。

土壌では 3 号土壌が 1 個所で，2 個体分の土器がまたがる。

炭化物・焼土では炭化物マウンドをはじめ 17 個所の遺構と関連する。炭化物マウンドでは 30 個体分，炭化物 4，同 19，同 30，同 70 では 1 個体分，炭化物 50 では 2 個体分，同 52 では 29 個体分，焼土 35，同 37 では 2 個体分，焼土 41 では 8 個体分，焼土 44，同 47 では 2 個体分，焼土 48，同 49，同 58，同 60，同 62 では 1 個体分の土器や土製品がそれぞれまたがる。

e この焼土群での遺物の在り方から判断すると，2 号堅穴住居からもたらされた廃品，廃物の処理作業と，この場で支脚を必要とする火を伴う作業とが読みとれる。前者は 2 号堅穴住居に残されていた 19 個体分の土器の廃棄やサケ，コイ科魚類などの残滓の焼却等が相当する。2 号堅穴住居からの土器片は，この遺構の他に炭化物マウンドや炭化物 52 を中心に 3 号堅穴住居の覆土など複数の個所に廃棄されている。

後者は，野外での煮沸作業の結果を示している。多量に検出されたサケ，コイ科魚類の椎骨や歯などの大部分はそれに付随する残滓の可能性がある。煮沸作業は，支脚の在り方から判断するかぎりほとんど終了していると考えられ，その作業によって生じた廃品などの一部が焼土 37 や同 58 あるいは 3 号土壌などにも廃棄，焼却されたとみられる。

このような火を伴う作業に必要な燃料は，ハルニレ，ヤマグワ，キハダなど 12 種類の樹木が使用されていた。

19 焼土 49

位置———18-10，19-10，20-10，20-11 グリッド。

規模・形状—長軸7.5m強，短軸1m強で不整楕円形を呈する．暗紫色の焼土が薄く直線状にのびている．上面には割材のような炭化材が数本みられる．また，その周辺には細かい炭が分布している．

堆積———第Ⅳ層中．
出土遺物——炭や焼土の中から遺物が出土した．

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕85	2号竪穴住居，炭化物マウンド，焼土43，焼土62，炭化物52
（総個体数 2）	甕102	焼土50，炭化物マウンド

① 土器

土師器甕が2個体分出土した．

② 植物遺存体

ミズナラ，エゾノカワヤナギ，ノリウツギ，イタヤカエデ，ニワトコ，ヤマブドウなどの炭化材が検出された．

小括

土器の接合からこの焼土と関連があるのは，2号竪穴住居跡，炭化物マウンド，焼土43，焼土50，同62，炭化物52の6個所である．

20 炭化物・焼土50

位置———19-11グリッド．
規模・形状—炭化物と焼土の組み合わせである．炭化物の集中は長軸2.6m，焼土は長軸0.6mでほぼ接する．
堆積———第Ⅳ層中．
出土遺物——炭や焼土の中から遺物が出土した．

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕57	炭化物マウンド，焼土41，焼土43，焼土48，炭化物52
（総個体数 5）	甕102	炭化物マウンド，焼土49
（土師器—甕 3） （須恵器—— 2）	甕118	2号竪穴住居，炭化物マウンド，焼土41，焼土43，焼土47，焼土60，炭化物52
	須恵器2	炭化物マウンド
	須恵器8	2号竪穴住居，炭化物マウンド，炭化物52，焼土57，焼土62，焼土64，焼土65
土製玉(1)	玉12	—

① 土器

土師器甕3個体分，須恵器2個体分が出土した．

② 土製品

玉1点が出土した(個体番号玉12)．

③ 動物遺存体

サケ科魚類椎骨，コイ科魚類椎骨が出土した．

小括

土器の接合からこの炭化物・焼土と関連があるのは，2号竪穴住居跡，炭化物マウンド，焼土41，43，47，48，49，57，60，62，64，65，炭化物52の13個所である．

※動物遺存体(第Ⅵ章8)，植物遺存体(第Ⅵ章9)，炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については，それぞれの節を参照されたい．

21 炭化物52

位置———18-15，19-14，19-15，19-16，20-14，20-15グリッド．1号竪穴住居跡と2

号竪穴住居跡との間に位置している。

規模・形状—長軸 8 m 弱で不整形を呈する。炭化物の薄層が何枚にも重複して堆積している。

堆積——第Ⅳ層上面。

出土遺物——炭に混じって多量の遺物が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏1	——
(総個体数 74)	坏5	2号竪穴住居
{土師器—坏22}	坏9	2号竪穴住居
	—甕51	坏20
	—甕51	——
	須恵器——1	坏23
	坏24	炭化物マウンド, 焼土44
	坏25	焼土43
	坏28	炭化物マウンド
	坏31	4号土壇, 炭化物マウンド, 炭化物42
	坏34	——
	坏36	炭化物マウンド
	坏41	炭化物マウンド, 焼土62
	坏49	2号竪穴住居, 炭化物30
	坏50	——
	坏55	炭化物マウンド
	坏56	——
	坏60	焼土62
	坏64	——
	坏70	——
	坏79	——
	坏106	2号竪穴住居
	坏113	——
	甕10	炭化物マウンド, 焼土43, 焼土58
	甕11	炭化物マウンド
	甕12	焼土43, 炭化物マウンド
	甕20	炭化物マウンド
	甕21	3号土壇, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕23	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕26	——
	甕29	焼土43, 炭化物マウンド
	甕30	2号竪穴住居, 焼土37, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕31	2号竪穴住居, 3号土壇, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕32	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕34	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物マウンド, 焼土34, 焼土47
	甕36	焼土43, 炭化物マウンド, 焼土35, 焼土37
	甕37	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物70
	甕38	2号竪穴住居, 焼土41, 焼土43, 炭化物マウンド
	甕41	2号竪穴住居, 焼土43
	甕43	焼土43, 炭化物マウンド
	甕45	2号竪穴住居, 炭化物マウンド
	甕48	炭化物53, 炭化物マウンド
	甕49	2号竪穴住居, 炭化物マウンド
	甕52	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土41, 焼土43, 焼土44
	甕57	炭化物マウンド, 焼土41, 焼土43, 焼土48, 炭化物50
	甕59	2号竪穴住居, 炭化物マウンド
	甕61	焼土43
	甕62	2号竪穴住居, 焼土43
	甕63	炭化物マウンド, 焼土43
	甕65	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土43
	甕66	2号竪穴住居, 5号竪穴住居
	甕67	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土43
	甕68	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土43, 3号竪穴住居覆土中

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕69	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土41, 同43
	甕70	2号竪穴住居, 焼土41, 焼土43
	甕71	3号竪穴住居, 4号土壌, 5号竪穴住居, 焼土22, 同32, 炭化物16, 炭化物マウンド
	甕72	――
	甕75	2号竪穴住居, 炭化物マウンド
	甕85	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土43, 焼土49, 焼土62
	甕87	3号土壌, 炭化物マウンド, 焼土43
	甕88	――
	甕92	2号竪穴住居
	甕93	2号竪穴住居, 炭化物4, 焼土41, 焼土43
	甕94	――
	甕106	――
	甕112	――
	甕115	――
	甕116	焼土43
	甕118	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 焼土41, 焼土43, 焼土47, 焼土60, 炭化物50
	甕119	炭化物マウンド
	甕131	――
	甕147	――
	甕156	2号竪穴住居, 焼土59
	甕193	――
	須恵器8	炭化物マウンド, 炭化物50, 焼土57, 焼土62, 焼土64, 焼土65
土製支脚 (1)	支脚6	2号竪穴住居
土製紡錘車 (2)	紡錘車6	――
	紡錘車10	――
土製玉 (1)	――	――
石器・剥片 (15)	――	一組は炭化物マウンドと接合 (遺物番号7648, 7682, 8861, 9010, 9060, 9171, 9175, 9555, 11202, 11340, 11340, 11342, 11351, 11719, 12113, 12482)
石製品 (1)	――	(遺物番号5602)

① 土器

土師器坏22個体分, 土師器甕51個体分, 須恵器 1 個体分が出土した。

② 土製品

支脚 1 個体, 紡錘車 2 個体, 玉 1 点が出土した。

③ 石器・石製品および礫

黒曜石製の剥片石器, 剥片 (遺物番号7648, 7682, 8861, 9010, 9060, 9171, 9175, 9555, 11202, 11340, 11342, 11351, 11719, 12113, 12482) が15点出土した。そのうち, 当遺構内外で接合した資料が 5 組ある。

石製品(遺物番号5602) 1 点出土した。

④ 動物遺存体

サケ科魚類椎骨 (イトウ椎骨を含む) ・歯, コイ科魚類椎骨, が出土した。

⑤ 植物遺存体

アカエゾマツ, ミズナラ, ハルニレ, イヌエンジュ, ヤチダモ, エゾノカワヤナギ, オニグルミ, ハンノキ, マユミ, イタヤカエデ, ニワトコ, ヤマブドウなどの炭化材が検出された。

小括

a この炭化物集積遺構は, 1 号竪穴住居と 2 号竪穴住居との間にみられた。

b この炭化物集積遺構は, 他の多くの遺構が営まれた時代・時期とほぼ同じ頃の所産である。

c さらに, この炭化物集積遺構は出土した74個体分の土器, 4 個体分の土製品, 15点

※動物遺存体(第Ⅵ章 8), 植物遺存体(第Ⅵ章 9), 炭化材(第Ⅵ章 10)などの分析については, それぞれの節を参照されたい。

の石器などの接合状況からみると、つぎに示す31個所の遺構と関連する。

まず、竪穴住居では2号、3号、5号竪穴住居の3個所と関連がある。2号竪穴住居とは土器27個体分、土製品（支脚）1個体分、石器・剝片の接合1組とで関連する。このことは、2号竪穴住居での廃品類の処理の場のひとつにこの遺構が相当したことを示している。

3号竪穴住居とは床面からの1個体分（個体番号甕71）および同竪穴の覆土中からの1個体分（個体番号甕68）が関連する。床面からのものは、破損したこの甕の一部が3号竪穴住居の住人によってこの炭化物集積遺構に捨てられたことを示している。一方、覆土中からのものは、本来は2号竪穴住居で使用されていたもので廃品となった甕が処分される際に分割されて数個所に捨てられたが、そのひとつに3号竪穴住居の窪みが当てられた、ということを示している。これは、少なくとも3号竪穴住居の廃絶が、2号竪穴住居より先であったことを意味するものである。

5号竪穴住居とはカマドの煙道内にみられた1個体分の甕（個体番号甕66）の破片によって関連する。この甕は、本来は2号竪穴住居で使用されていたもので廃品となった甕が処分される際に分割されて数個所に捨てられたが、そのうち破片1点が5号竪穴住居のカマドの煙道底面に他の土器片とともに敷設されていたものである。これは、2号竪穴住居の構築が5号竪穴住居より時間的に先行したことを意味するものである。

土壌では、3号土壌と4号土壌の2個所と関連している。3号土壌では3個体分の甕が、4号土壌では2個体分の土器が関与している。

炭化物・焼土では炭化物マウンドをはじめ26個所の遺構と関連する。炭化物マウンドでは38個体分の土器と1組の接合石器、炭化物4、16、30、42、58、70では1個体分、炭化物50では3個体分、焼土22、34、35、48、49、57、58、59、60、64、65では1個体分、焼土37、44、47、53では2個体分、焼土62では3個体分、焼土41では8個体分、焼土43では29個体分、1号土壌周辺の焼土・炭化物では1個体分の土器や土製品、石器などがそれぞれまたがる。

d この炭化物集積遺構は遺物の在り方からみると、廃品、廃物となった土器や石器あるいは炭や灰、残滓となったサケ、コイ科魚類の椎骨・歯などを廃棄する場であった。それらをもたらししたのは2号竪穴住居の居住者が主で、3号や5号竪穴住居からもわずかなではあるがもたらされていた。そして、この遺構は炭化物マウンドとともに、とくに2号竪穴住居の人々にとって重要な廃棄の場であった、といえる。

22 焼土54

位置——19-17～20-07グリッド。

規模・形状——3個が一組である。最大のもので長軸3 m弱、いずれも不整形を呈する。

焼土の中心は赤褐色を呈し(厚さ4 cm)、その上を骨片、灰を含む暗灰色の土が覆っている。赤褐色の焼土は白粘土をはさみ上下に2枚みられる。

この焼土の周辺には暗紫色の小規模な焼け跡が点在している。

堆積——第Ⅳ層。

堆積状況はつぎのようになる。

- ① 炭、灰を含む焼土。
- ② 赤褐色の焼土。周辺や下面は暗紫色を呈する。
- ③ 炭を含む灰白色
- ④ 骨片、炭、灰を含む焼土。
- ⑤ 赤褐色の焼土。
- ⑥ 暗褐色の焼土。

⑦ 赤褐色の焼土.

出土遺物——焼土中から遺物が出土した.

遺物	個体番号	関連遺構
石器(1)	——	(遺物番号6513)

① 石器

黒曜石製剥片（遺物番号6513）1点が出土した.

② 動物遺存体

細かい骨片を含むが、同定はできなかった.

③ 植物遺存体

ハルニレ、ヤマグワ、ヤチダモ、エゾノカワヤナギ、イタヤカエデ、ニワトコなどが検出された.

小括

この焼土は、他の多くの遺構とほぼ同じ頃の所産と思われる.

23 焼土57

位置——20-13グリッド.

規模・形状——不明.

堆積——第Ⅳ層.

出土遺物——遺物は焼土に混じって出土した.

遺物	個体番号	関連遺構
土器(個体数1)	須恵器8	炭化物マウンド, 炭化物50, 52, 焼土62, 同64, 同67

① 土器

須恵器瓶の破片1点が出土した.

② 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯, コイ科魚類椎骨, ニシン科魚類（マイワシ）椎骨が出土した.

小括

この焼土は、他の多くの遺構とほぼ同じ頃の所産と思われる.

24 焼土・炭化物59

位置——19-19～20-18グリッド. 2号竪穴住居の西側約4 mに見られる.

規模・形状——焼土2個と炭化物集積の2個所からなる. もっとも大きな焼土で長軸90cm, もっとも大きな炭化物集積で長軸30cmで、いずれも不整形を呈する.

堆積——第Ⅳ層.

出土遺物——焼土, 炭化物に混じって遺物が出土した.

遺物	個体番号	関連遺構
土器(総個体数2)	甕156	2号竪穴住居, 炭化物52
	須恵器5	——

※動物遺存体(第Ⅵ章8), 植物遺存体(第Ⅵ章9), 炭化材(第Ⅵ章10)などの分析については, それぞれの節を参照されたい.

① 土器

土師器甕と須恵器環がそれぞれ1個体分出土した.

② 動物遺存体

焼土の中からサケ科魚類椎骨・歯が出土した。

③ 植物遺存体

焼土の中からオニグルミ，ハルニレ，ヤマグワ，ヤチダモ，イタヤカエデなどが検出された。

小括

この焼土は，他の多くの遺構とほぼ同じ頃に営まれたものである。さらに，土器の接合状況からつぎの2個所の遺構と関連する。

まず竪穴住居では，2号竪穴住居1個所と関連がある。土壙とは直接の関連はみられない。炭化物・焼土遺構では，炭化物52の1個所と関連する。

25 焼土62

位置————21-15グリッド。

規模・形状—長軸2.3mで不整形を呈する。焼土の中心は赤褐色で周辺は暗紫色を呈する。全体に炭が含まれる。

堆積————第Ⅳ層。

出土遺物——焼土，炭化物に混じって遺物が出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏41	炭化物マウンド, 炭化物52
(総個体数 5)	坏60	炭化物52
〔土師器—坏 2〕	甕85	2号竪穴住居, 焼土43, 焼土49, 炭化物マウンド, 炭化物52
—甕 1	須恵器6	——
〔須恵器—— 2〕	須恵器8	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物50, 炭化物52, 焼土57, 焼土64, 焼土65

① 土器

土師器坏2個体分，同甕1個体分，須恵器2個体分が出土した。

小括

この焼土は，他の多くの遺構とほぼ同じ頃に営まれたものである。さらに，土器の接合状況からつぎの9個所の遺構と関連する。

まず竪穴住居では，2号竪穴住居1個所と関連がある。土壙とは直接の関連はみられない。炭化物・焼土遺構では，炭化物マウンド，炭化物50，同52，同57，焼土43，同49，同64，同65の9個所と関連する。

26 焼土64

位置————22-15，22-16，23-16グリッド。

規模・形状—2個で一組である。大きい方は長軸2.5m弱，小さい方は長軸80cmでいずれも不整形を呈する。

堆積————第Ⅳ層。大きい焼土の①は赤褐色の焼土，②は暗紫色の焼土，③は炭を含む暗褐色の焼土である。小さい方の焼土は暗褐色で焼け方も弱い。

出土遺物——焼土中から出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	甕19	——
(総個体数 4)	甕155	——
〔土師器—甕 3〕	甕161	焼土67
〔須恵器—— 1〕	須恵器8	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物50, 炭化物52, 焼土57, 焼土62, 焼土65

① 土器

土師器甕 3 個体分と須恵器 1 個体分が出土した。

② 動物遺存体

大きい方の焼土の中からサケ科魚類の歯が出土した。

③ 植物遺存体

ハルニレ，ヤマグワ，イヌエンジュ，エゾノカワヤナギ，ヤマブドウなどが検出された。

小括

この焼土は，他の多くの遺構とほぼ同じ頃に営まれたものである。さらに，土器の接合状況からつぎの 7 個所の遺構と関連する。

まず竪穴住居や土壙とは直接の関連はみられない。炭化物・焼土遺構では，炭化物マウンド，炭化物50，同52，焼土57，同62，同65，同67の 7 個所と関連する。

27 焼土65

位置———23-16グリッド。

規模・形状—長軸65cmで不整形を呈する。炭は含まれておらず，暗紫色（厚さ 5 mm）に焼けている。

堆積———第Ⅳ層。

出土遺物——焼土中から出土した。

遺物	個体番号	関連遺構
土器(個体数1)	須恵器8	2号竪穴住居, 炭化物マウンド, 炭化物50, 52, 焼土57, 62, 64, 65
土製支脚(1)	支脚7	——

① 土器

須恵器 1 個体分が出土した。

② 土製品

支脚が 1 個体分出土した。

③ 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯が出土した。

④ 植物遺存体

ハルニレ，ヤマグワ，ヤチダモ，エゾノカワヤナギなどが検出された。

小括

この焼土は，他の多くの遺構とほぼ同じ頃に営まれたものである。さらに，土器の接合状況からつぎの 6 個所の遺構と関連する。

まず竪穴住居や土壙とは直接の関連はみられない。炭化物・焼土遺構では，炭化物マウンド，炭化物50，同52，焼土57，同62，同64，同65の 7 個所と関連する。

28 焼土68

位置———26-15～26-16グリッド。

規模・形状—2 個で一組である。大きい方は長軸2.5 m，小さい方は長軸80cmでいずれも不整形を呈する。大きい方はよく焼けており(厚さ 5 ～ 7 mm)，炭，遺物を多量に含む。小さい方は暗紫色で焼け方は弱い(厚さ 2 ～ 3 mm)。

堆積———第Ⅳ層。

出土遺物——主に大きい方の焼土の中から土器片が出土した。

※動物遺存体(第Ⅵ章 8)，植物遺存体(第Ⅵ章 9)，炭化材(第Ⅵ章 10)などの分析については，それぞれの節を参照されたい。

遺物	個体番号	関連遺構
土器	坏44	――
(総個体数 2)	甕148	――
土製支脚(1)	支脚3	焼土43

① 土器

土師器坏 1 個体分と同甕 1 個体分が出土した。

② 土製品

支脚 1 個体分の破片が出土した。

③ 動物遺存体

サケ科魚類の椎骨が出土した。

④ 植物遺存体

ミズナラ，ハルニレ，ヤマグワ，イヌエンジュ，ヤチダモ，エゾノカワヤナギ，シラカ
ンバ，イタヤカエデ，ヤマブドウなどが検出された。

小括

この焼土は，他の多くの遺構とほぼ同じ頃に営まれたもので，特に43と関連する。

29 焼土69

位置――――27-15グリッド。

規模・形状―長軸70cm強で不整形を呈する。中心が真赤に焼けており(厚さ20～55mm)，
炭，骨片を含む。また，周辺は暗紫色である。

堆積――――第Ⅳ層。

出土遺物――動物，植物遺存体が焼土中から出土した。

① 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯が焼土の中から出土した。

② 植物遺存体

エゾノカワヤナギ，イタヤカエデなどが検出された。

小括

この焼土は，他の多くの遺構とほぼ同じ頃に営まれたものであるが,詳細はわからない。

30 炭化物・焼土70

位置――――26-16，26-17，27-16，27-17グリッド。

規模・形状―炭化物が広範囲に分布(長軸2 m弱),下層に赤褐色の焼土がみられる。

堆積――――第Ⅳ層。

出土遺物――遺物はすべて炭化物に含まれている。

遺物	個体番号	関連遺物
土器	坏27	――
(総個体数 10)	坏74	――
土師器―甕 7	甕37	2号竪穴住居, 焼土43, 炭化物52
	―坏 2	甕109
須恵器―― 1)	甕110	――
	甕140	――
	甕145	――
	甕151	――
	甕162	――
	須恵器9	――
石器(1)	――	(遺物番号5581)

① 土器

土師器坏 2 個体分，同甕 7 個体分，須恵器 1 個体分が出土した。

② 石器

黒曜石製剥片（遺物番号5581）が 1 点出土した。

③ 動物遺存体

サケ科魚類椎骨・歯，コイ科魚類椎骨が出土した。

④ 植物遺存体

アカエゾマツ，ハルニレ，ヤマグワ，イヌエンジュ，ヤチダモ，エゾノカワヤナギ，カツラ，イタヤカエデ，ニワトコ，ヤマブドウなどが検出された。

小括

この焼土は，他の多くの遺構とほぼ同じ頃に営まれたもので，特に 2 号竪穴住居，炭化物52，焼土43と関連する。

④ 焼土・炭化物の小括

a この遺跡の第 1 文化層に属する遺構は，焼土72が唯一であり，残りは第 2 文化層の所産である。堆積層は，第Ⅳ層中と第Ⅴ層上面とである。これらふたつの地層は自然堆積であり，層位的な判断にもとづくならば第Ⅴ層上面のものが第Ⅳ層中のものより使用開始が先行していたことになる。第Ⅴ層上面の焼土・炭化物集積は，炭化物マウンドを含め19グループ（2，6，9，11，12，13，14，15，17，18，19，20，21，28，29，35，36，53）28個所であり，残りの57グループ，114個所は第Ⅳ層中である。

b 焼土・炭化物遺構と竪穴住居との関係は，土器などの接合にもとづきかなり克明に把握された。このことは，これらの焼土・炭化物群が集落を構成する重要な部分になっていたことを示すものである。

c 分布は，3 号と 5 号竪穴住居を結ぶラインから東南側でセロンベツ川までの広場と，1 号，2 号竪穴住居の北東側から北西側にかけての広場の 2 群に大別できる。また，2 号，3 号，5 号竪穴住居のような，いわゆる大型住居の煙道周辺に付随するようにみられることも特徴のひとつである。

d 焼土の規模は長軸が 7 m をこえるもの（焼土49）から 30 cm 程のもの（焼土12）まで，地面の焼け方も 60～70 mm と厚いもの（焼土18，33）からほとんど痕跡程度のものまでみられる。炭化物遺構の規模は，炭化物マウンドを最大級とし，炭化物52や19，16などのように炭の堆積が厚く比較的床面積の広いものや，炭化物は痕跡程度のもの（炭化物 2，31，36など）までみられる。

（横山英介）

※動物遺存体(第Ⅵ章 8)，植物遺存体(第Ⅵ章 9)，炭化材(第Ⅵ章 10)などの分析については，それぞれの節を参照されたい。

V-7

〔柵状遺構―テシ―〕

かつて遺跡を流れていた埋没河川の中から、木製の柵状遺構が発見された。川の中につくられたこのような施設は、アイヌ民族などが遡上するサケ科魚類などを捕獲するために、川幅いっぱいに木製の柵を張り巡らせる「テシ」に似ている。そこで、以下の記述に際してテシという用語を使用することにする。

① 位置および埋設状況

① 位置

テシが発見された場所は、遺跡のもっとも南側で、旧コトニ川の一支流、いまは埋没してしまっているセロンベツ川の中にある。

グリッドでいうと、01-14, 02-14, 02-15, 03-13, 03-14, 03-15, 04-13, 04-14, 04-15の9グリッドにまたがっており、主体部は、そのなかでも01-14, 02-14, 03-14, 04-14の4グリッドを占めている。

この遺跡の集落は、セロンベツ川の左岸の広場に営まれていたが、そのうちでテシにもっとも近い堅穴は3号堅穴住居跡で、テシまでの距離はおよそ13mである。また、テシの位置からみて下流側の左岸にそって土壌、焼土・炭化物が濃密に分布する地域がみられる。

② 埋没状況

テシが埋没していたセロンベツ川の幅は、川のかげあがりの部分で約12m、川底で約9.5mである。川底の標高は9.4m～9.8mである。

セロンベツ川の埋没状況は、つぎのようになる。

- A層
- ①層：黄褐色の砂層で、未分解の植物が堆積する。
 - ②層：未分解植物の堆積層で、灰白色のシルトが混じる。
 - ③層：未分解植物の堆積層である。色調は茶褐色である。
 - ④層：灰色シルトの堆積層で、未分解の植物を含む。
 - ⑤a層：青色粘土の堆積層で、未分解の植物を含む。
 - b層：暗灰色粘土の堆積層で、ところどころに未分解の植物を含む。
 - c層：暗灰青色粘土の堆積層で、多量の未分解植物や流木などを含む。
 - d層：多量の未分解植物や流木などの堆積層で、灰白色シルトがわずかに混じる。
- B層
- ⑥層：暗青色粘土の堆積層で、少量の未分解植物を含む。
 - ⑦a層：褐色粘土の堆積層で、多量の未分解植物などを含む。
 - b層：黄褐色の砂、褐色のシルト、未分解植物が互層に堆積した層である。
 - c層：褐色のシルトの堆積層である。
 - d層：黄色の砂層である。
 - ⑧a層：径1mm～2mmの黄色の砂層である。
 - b層：径1mm～4mmの黒色の砂層である。
 - c層：径1mm～2mmの黄色の砂層である。

- ⑨ a 層：径 1 mm～2 mm の灰黄色の砂層である。
b 層：径 1 mm～4 mm の灰黄色の固くしまった砂層である。
C 層 ⑩層：黄色の細砂と暗灰色シルトが互層に堆積した層である。
⑪層：灰褐色粘土の堆積層である。
⑫層：灰青色粘土の堆積層である。

以上のような12枚の堆積層は、つぎに示す3段階にわたる堆積を繰り返したことがわかる。

▶ A 層

①層から④層までで、もっとも新しい流路を埋めた堆積層である。川底はシルト質—④層である。

▶ B 層

⑤層から⑦層までで、A 層以前に、テシがつくられていた川を覆っている。テシがつくられていた川の川底⑧層は、1 mm～4 mm の細砂の堆積層である。

▶ C 層

確認できたもっとも古い川で、B 層によって切られている。

このように、テシはB ⑧層の、細砂に覆われた川底につくられていた。この川の流路が安定する以前にもさらに古い川（C 層）がみられたことがわかる。また、テシは、⑤層から⑦層の数回にわたる堆積によって埋没したもので、その後新たな流路（A 層）が刻まれた、という経過をみることができた。

▶ B ⑧層の形成

テシが埋没していた河川の形成過程については、00-15～07-15グリッド東壁の土層観察にもとづく。

この河川の左岸に堆積している土層は、第Ⅰ層の黒色粘土から第Ⅵ層の砂質粘土にいたるまでこの遺跡の他の地区の状況と基本的に一致する。ただし、この図に示された範囲内では、河川の右岸はテシの河川以前の古い河川によって運搬され、堆積した砂や粘土（C ⑨層～⑫層）の分布が続いており、左岸とはその様相を異にしている。

左岸では、第Ⅱ層と第Ⅲ層はA 層によって切断されており、もっとも新しい流路は第Ⅲ層以降にできたことを示している。

第Ⅲ層は、テシの河川の肩部にわずかに堆積している。一方、第Ⅳ層は3枚に細分され、そのいずれもがテシの河川に切断されている。

したがって、テシの河川の形成は第Ⅳ層の堆積が終了した後で、第Ⅲ層が堆積するまでの期間である、といえる。テシの河川の形成に関する層位学的見解は、テシが構築・使用された時代・時期の特定をある程度可能にするものである。つまり、この遺跡を営んだ擦文時代の人々のうち、古くみて第2文化層、新しくみて第1文化層の人々の所産ということになる。

② 規模・形状および構造

まず、テシは川がゆるやかに蛇行する屈曲部につくられている。このテシの場合は、左岸側が川の攻撃面に相当する。テシの基本骨格構造物は、川底に打ち込む杭とそれらを横方向に結ぶ横木の2種類があり、さらに、それらの間隔をうめるための枝材が追加される。

杭は、62点の割杭と33点の丸杭の2種類がみられる。横木は、49点の割材と16点の丸材の2種類がみられる。このように杭、横木とも割材が多く使用されており、丸材を2～3倍うわまわっている。

川幅いっぱい張り巡らされたテシで、杭がもっとも密に打ち込まれていたのは左岸部である。そこには、長さ約80cm、幅約20cmの範囲内に31本もの割杭が使用されている。各々の相接する割杭は、川底の細砂層を貫通し、下層の粘土層中へ約1 m以上もの深さにわたって打ち込まれている。杭がもっとも密に打ち込まれている左岸から先、右岸にかけて杭の間隔は平均60cm～80cmとまばらである。しかし、川の中央部分（03-14グリッド）のように、7～8本の割杭が密に打ち込まれている個所もみられる。

以上のような間隔で川底に打ち込まれた杭は、左岸の割杭密集部分を基準にとれば、川上へ向って「ハ」の字状に配列されている。川岸から約3 mの沖合いで左右からのびる杭列が交わる。その角度は約140度である。

割杭によるテシの基本骨格とは別に、左右の川岸に丸杭の分布がみられる。いずれも割杭列—テシ本体の上流部にみられ、杭の間隔やそれらの配置に規則性はみられない。

横木は、テシの杭と杭との間にわたされるが、同時に数百点以上にのぼる枝材を組み合わせて使用している。割材の横木はテシ全体にほぼ均等にみられるのに対し、丸材の横木は川の中央部付近に集中する傾向にある。

横木には一端を削り込んだ杭が20点使用されていたほか、杭も含めて6点に切り込み等の加工のみられる材が使用されていた。前者は杭を横木へ、また後者は住居などの建材をテシへ転用したものであろうと推定される。

数百点以上にのぼる枝材は、大部分がヤナギ属で占められている。これらの小枝は、1 mほどの長さに切断され、束ねられて使用されていた。

これらの横木や枝材の大部分は、川底の砂に堆積していたものであり、テシの構築・使用時そのままの姿を示しているものではない。この川底には、横木や枝材がからまっていた杭列以外にも、それを伴わないが同じような杭列が数組検出されている。このことは、横木や枝材がからまって発見された杭列がもっとも新しいテシで、それ以前にもほとんど同じ場所で数回にわたってテシが構築・使用されていたことを示している。

③ 出土遺物

出土遺物は、テシの構造に関する遺物とその他の遺物に分けられる。

① テシの構造に関する遺物

①基本骨格構造材

総数160点で、内訳は杭95点と横木65点である。

杭は、割杭62点と丸杭33点に分けられる。

横木は、割材49点と丸材16点に分けられる。

これらの出土層位は、テシのつくられていた川底の砂—B⑧層である。杭はそこから打ち込まれており、左岸の数本のように第Ⅳ層からのものも含まれる。横木は大部分のものが川底の砂—B⑧層中から出土した。

これらの配列や樹種などについては別に記載があるので参照されたい。

②骨格補助材

数百点以上にのぼる枝材は、大部分がヤナギ属で占められている。これらの小枝は、1 mほどの長さに切断され、束ねられて使用されていた。

② その他の遺物

① 土器

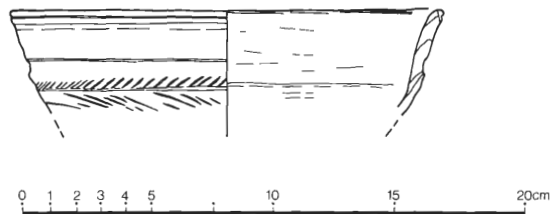
土器の破片が4点出土した。内訳は坏あるいは高坏の破片が1点と甕の胴部破片が3点

である。

坏あるいは高坏

口縁部から身部の一部にかけての小破片で、04-15グリッド⑧c層（川底の砂）から出土した（個体番号坏405）。破片から推定できる口径は約16.8cm、現存の高さは4.2cmである。土器の外面の口縁部と身部には沈線文様が描かれている。口縁部の文様は3条の横走沈線、身部の文様は短い沈線を異方向に組み合わせたものである。器面は内外ともヘラミガキによって調整され、内面は黒色処理が施されている。

PL. Ⅱ-5 テシ出土の土器



甕の破片

3点とも⑧c層（川底の砂）から出土した。個体番号甕9は05-15グリッドから出土した破片である。土器の内外は縦・斜位のハケ目調整痕がみられ、内面は黒色処理が施されている。個体番号甕303, 414の2点是小破片で、04-14, 03-14グリッドから出土、内外ともヘラミガキが施されている。

② 金属器

鈎鋏が1点出土した。

鉄製鈎鋏（マレク） 02-14グリッドで、⑧層つまり川底の砂の中から出土した。鈎鋏は中柄に装着する部分約3分の1が欠損している。現存の長さは57mm、重さは10gである。断面形は四角で、もっとも厚い部分で7mm～9mmある。

③ 木器

ここでいう木器は、テシの基本骨格構造物や骨格補助材など、直接その製作に結びつく木製品以外の木製品を指す。つまり、A—漁具とB—それ以外の木器である。

A 漁具

⑧層つまり川底の砂の中やテシ材にからまって8点の漁具が出土した。これらは、逆刺が付くものと付かないものに大別できるが、番号33（イチイ）以外アジサイ属（ノリウツギ）が用いられている。

a 逆刺が付く漁具

出土例は3点である。

個体番号木器50 03-14グリッドから出土した。先は丸く、長軸に6列の逆刺が付いている。長さ139mm、断面は丸く厚さ14mmである。

個体番号木器64 03-14グリッドから出土した。先は鋭く尖り、長軸に逆刺が付いている。長さ175mm、断面は梯形で幅13mm、厚さ9mmである。

個体番号木器214 03-14グリッドから出土した。先は鋭く尖り、長軸に4列の逆刺が付いている。破損しており、現存の長さ109mm、断面は丸く長さ11mmである。

b 逆刺が付かない漁具など

出土例は5点である。

個体番号木器3 03-14グリッドから出土した。先は丸く仕上げられている。長さ173mm、断面は丸く厚さ12mmである。

- 個体番号木器33 02-14グリッドから出土した。両端は鋭く尖る、長さ157mm、断面は丸く厚さ11mmである。
- 個体番号木器46 14-15グリッドから出土した。一端は丸く、他端は偏平である。丸い方が先端で偏平の方が基部である。長さ128mm、中間部がもっとも厚く12mmである。
- 個体番号木器253 02-14グリッドから出土した。一端は丸く、他端は偏平である。丸い方が先端で偏平の方が基部である。長さ147mm、中間部がもっとも厚く22mmである。
- 個体番号木器86 03-14グリッドから出土した。両端が共に尖る。断面は偏平である。長さ196mm、厚さ7mmである。

以上述べた漁具の機能は、aタイプがヤス、bタイプが銚の中柄と考えられる。ただし、個体番号木器86はその範疇ではない。

B その他の木器

⑧層つまり川底の砂の中やテシ材にからまって7点出土した。

a 木槌

- 個体番号木槌 1 02-14グリッドから1点出土、完形品である。イチイからの一本ずくりで、幹から槌部を、枝から柄部をつくり出している。槌部は両方とも使用によるツブレがみられるが、一方(図の右側)が特に著しい。長さ302mmで、柄部分は230mmである。

b えぐり込みのある木器

- 個体番号木器 1 03-13グリッドから出土、破損品である。トネリコ属製で、現存の長さは356mmである。えぐりを境に一方の側に厚味があり60mm～70mmである。素材は丸太であり、幅広い削り痕がみられる。えぐり込みの幅は20mm～60mmである。
- 個体番号木器 2 04-14グリッドから出土、完形品である。カエデ属製で、長さは360mmである。えぐり込みは一方の側によった部分にあり、幅は80mm～95mmである。断面は四角形で90mm～83mmの厚さがある。

以上、2点のえぐり込みのある木器のうち、2は手持ち杵とみられるが1は不明である。

c 槌

- 個体番号槌 1 04-14グリッドから出土、破損品である。カエデ属製である。えぐり込みとの逆の面には無数の刃物痕がみられ、工作台としての機能をも持つものである。

d 棍棒

- 個体番号棍棒 1 03-14グリッドから出土、完形品である。カエデ属製で、長さは580mmである。厚味のある方(60mm～70mm)が使用部分でツブレが広範囲にわたってみられる。柄の長さは約300mm、太さは35mm～30mmで、端部に比較的幅広い沈刻が施されている。

e 用途不明なもの

- 用途不明品 1 04-14グリッドからテシの杭として出土、破損品である。トネリコ属製で、現存の長さは600mm、太さは32mmである。丸材の一端を長軸方向に削り、その部分を中心にえぐり込みや沈刻を施している。
- 用途不明品 2 04-14グリッドから出土、完形品である。樹皮らしいが詳細は不明である。「て」の字状に切断しているが用途などは不明である。

(横山英介)

④ 樹種鑑定結果

テシを構成する木材およびその周囲に散在する木材は、それらの外形から、約2千点の人為的な加工痕のあるものと、数千点の自然風倒木等の流木とに大別される。さらに前者はそれらの位置や配列状態からテシを構成する木材と、水中投棄や洪水等により流されテシに単にからみついた木材とに分けられるであろう。またテシを構成する木材は、杭およびそれとほぼ直交して横木として使用されている基本骨格をなす160点の構造材と、それらのすき間をうめるように網目状に差し込まれている数百点の枝材とに分けられる。さらには加工木材とは認められるものの流木となっているものはその外形から確実に道具類と認め得るもの15点と、用途が不明なものに分けることができる。すなわちテシとその周辺から出土した木材は、5種に大別でき、ここでは便宜的に以下の名称を用いる。

- ① 基本骨格構造材（160点）
- ② 骨格補助材（数百点）
- ③ 道具類（15点）
- ④ 加工材流木（数百点）
- ⑤ 自然流木（数千点）

①～⑤についての点数表示は、①と③を除いては、取り上げ時や保存処理中に1個体が何個所にもわたって寸断されたことにより、個体数が実際より増加しているものと推定されるため、単なる目安的な数と考えるべきであろう。

これらの木材については、①～④については全点鑑定し、⑤の自然流木については、ヤナギ属とハンノキ属が極めて多いため、できるだけ多くの樹種を確認できるように選択しながら、約千点について鑑定を行なった。

樹種鑑定の方法は、以下のとおりである。

大部分の木材の組織構造の観察には、光学顕微鏡を用いたが、微細レベルでの観察が必要なものについては、走査型電子顕微鏡（以下SEMと略す）も使用した。

▶光学顕微鏡観察手法

水に浸漬した検体から、約5×5mmの木口、板目、柃目の薄切片を3枚以上片刃カミソリで切り取り、無染色のままスライドガラス上で検鏡し、鑑定を行なった。

また、写真撮影用と参考試料保存のため、各樹種につき数枚の永久プレパラートを作製した。その方法は、約5×5×5mmの試料ブロックを1検体につき数個片刃カミソリで切り取り、アセトンシリーズ（50, 70, 80, 90, 100%）で各2時間ずつ脱水し、エポキシ樹脂（TAAB, Epon 812）：100%アセトンの1：1混合液に約1晩浸漬置換させ、その後100%エポキシ樹脂と1～2日間置換させ、40～60℃で硬化させた。エポキシ樹脂の硬度は、できる限り軟調となるようメーカー指定の方法に準じ調製した。その後包埋後の試料からスライディングマイクロームを用いて5～20μm厚の切片を切りだし、スライドグラス上で、1%塩基性フクシン又は2%サフラニン水溶液で染色、水洗しホットプレート上で乾燥させた後、オイキッド封入し、永久プレパラートとした。

▶SEM観察手法

まず検体より、約5×5×5mmの試料を3個切りとり、木口、板目、柃目の各々1断面が露出するように片刃カミソリで切り、アセトンシリーズで各々半日ずつ脱水し、臨界点乾燥法により乾燥した。乾燥後の試料の観察表面には、イオンスパッタリング法により、

金を7mA，1KV．D.C．で7～15分間コーティングし，その後試料を導電性ペーストを用いてSEM試料台にはりつけ，JSM－35CFⅡ(加速電圧15～25KV．)で観察した．写真撮影フィルムは，ネオバンSS(6×7cm)である．

約3千点の木材を鑑定した結果，19科，24属が同定され，そのうち4属については，種のレベルまで同定することができた．それらの結果を既述の項目別に一覧表に示す．樹種構成は，針葉樹3属，広葉樹21属，ツル性植物1属（2属以上の可能性もある）であり，他に同定できなかった広葉樹が約10種ある．各樹種の同定の根拠，組織・構造等については，第Ⅵ章の10-2を参照されたい．

Tab.Ⅱ-3から，テシの基本骨格構造材は5属，同補助材は3属，また道具類も4属と少なく，他の加工材流木や自然流木が20属，13属と多樹種にわたるのと対照的であり，用途に応じた樹種の選択特性を認めることができる．そこで，以下には，各項目ごとに，木材の樹種，外形，並びに位置関係を検討した結果を記す．

Tab. Ⅱ-3 テシ木材の樹種

No.	属名	代表的樹種	基本骨格 構造材	骨格 補助材	道具類	加工材 流木	自然 流木
1	イチイ(<i>Taxus</i>)	イチイ*			2	39	少数
2	モミ(<i>Abies</i>)	トドマツ	2			24	少数
3	トウヒ(<i>Picea</i>)	アカエゾマツ				32	少数
4	コナラ(<i>Quercus</i>)	ミズナラ				23	少数
5	ニレ(<i>Ulmus</i>)	ハルニレ	10			41	少数
6	エノキ(<i>Celtis</i>)	エゾエノキ				1	
7	クワ(<i>Morus</i>)	ヤマグワ					少数
8	イヌエンジュ(<i>Maackia</i>)	イヌエンジュ				4	
9	キハダ(<i>Phellodendron</i>)	キハダ				1	
10	ハリギリ(<i>Kalopanax</i>)	ハリギリ*				1	少数
11	トネリコ(<i>Fraxinus</i>)	ヤチダモ	125	少数	2	160	少数
12	ハコヤナギ(<i>Populus</i>)	ドロノキ				37	少数
13	ヤナギ(<i>Salix</i>)	エゾノカワヤナギ	22	多数		173	多数
14	クルミ(<i>Juglans</i>)	オニグルミ*				6	
15	カバノキ(<i>Betula</i>)	シラカンバ				5	
16	ハンノキ(<i>Alnus</i>)	ハンノキ		少数		11	多数
17	カツラ(<i>Cercidiphyllum</i>)	カツラ*				2	
18	モクレン(<i>Magnolia</i>)	ホオノキ				2	
19	アジサイ(<i>Hydrangea</i>)	ノリウツギ			7		
20	カエデ(<i>Acer</i>)	イタヤカエデ			3	15	少数
21	シナノキ(<i>Tilia</i>)	シナノキ				1	
22	ミズキ(<i>Cornus</i>)	ミズキ				1	
23	ハシドイ(<i>Syringa</i>)	ハシドイ	1				
24	ニワトコ(<i>Sumbucus</i>)	ニワトコ					少数
25	ツル性植物(<i>Vitis</i> など)	ヤマブドウ等					少数
26	不明				1	9	少数

注1 種名が同定されたものには* 印。
2 多数としたのは全て100点以上．中でもヤナギ属が多い．
3 多数，少数と表示したのは寸断された同一個体が多いと考えられるため．

a 基本骨格構造材

基本骨格を構成する構造材は，川底に打ち込まれた杭と，それらを横方向に結ぶ横木の2種に大別でき，杭は割材の杭と丸材の杭に，横木は，割材と丸材に分けられる．それらを樹種別にテシのTab.Ⅱ-4に示す．ここで特徴的なのは，割杭62点，割材49点の計111点全てがトネリコ属（ヤチダモと推定される）であり，丸太から割りとった材はこの一属のみからなる．

それに対して丸杭は、モミ属、ニレ属、トネリコ属、ヤナギ属の4属からなり、丸材もニレ属、トネリコ属、ヤナギ属、ハシドイ属の4属から成る。丸杭と丸材ではニレ属、トネリコ属、ヤナギ属の3属が個体数も計46点と多く両者に使用されているが、モミ属とハシドイ属は計3点と少なく、また2点が廃材であり、丸杭や丸材の主要材は、前三者で占められている。

Tab. Ⅱ-4 基本骨格構造材の樹種

属名	代表的樹種	杭		横木	
		割杭	丸杭	割材	丸材
モミ	トドマツ		2(1)		
ニレ	ハルニレ		5(1)		5[杭状3]
トネリコ	ヤチダモ	62	8(1)	49(3)	6[杭状3]
ヤナギ	エゾノカワヤナギ		18		4[杭状3]
ハシドイ	ハシドイ				1(1)

() 内は廃材の数

これらの樹種構成に加えて、各樹種の位置関係について検討した。割杭と丸杭の位置については既に図示したが、割杭は全てトネリコ属である。また丸杭は、川岸の両側付近に多く、かつ特に左岸側に集中しており、わずかながらではあるが樹種ごとの分布傾向が認められる。右岸の丸杭の大部分はヤナギ属であり、また同じヤナギ属の丸杭は、左岸では遺構の上流側に集中している。またニレ属の丸杭は、左岸のヤナギ属丸杭よりやや下流側に、トネリコ属丸杭はさらに下流側に位置している。大量の木材が集積しているテシの中心部を支える杭は、その大部分が割杭であり、テシの基本構造の構築には、トネリコ属の割杭が使用されたものと推定される。

次に横木の分布状態であるが、トネリコ属の割材はほぼ遺構全体に均等に分布しているのに対して、丸材は遺構の中心部に集中しており、割材と丸材の分布様式は異なっている。しかし、丸材は4属からなるものの、個体数も少ないことから特に樹種的な分布傾向を見いだすことはできない。PL.Ⅱ-340における上流側の5本の丸材は、やや遺構本体から離れており、基本骨格をなす材というよりむしろ加工流木とすべきものかもしれないが、丸杭と接近していることから一応基本骨格構造材に含めたものである。

各樹種の位置関係においては、割杭、丸杭、割材が樹種の特徴を示すのに対して、丸材は遺構中央部に集中する点では特異的ではあるものの樹種の特徴を示さない。

これらに加えて、木材の外形上さらに区別されるべきものがある。それらは、横木割材や丸杭中の杭状の材、さらに廃材である。

横木の割材中には、単純な割材が多数とそれらの先端を杭と同様に削り、あたかも割杭を横木として使用したかのような材が11点認められたが、それらもやや左岸よりの中央部付近に集中している。しかし、これらも全てトネリコ属であり、割杭や他の割材と同一樹種である。

また、横木の丸材中にも同様に先端を杭状に削ったものが9点認められた。それらは、ニレ属：3点、トネリコ属：3点、ヤナギ属：3点であり、既述したように、丸杭の主要樹種である。

さらに、横木の割材、丸杭、丸材中には、PL.Ⅱ-331に示すような、杭や横木には本来不必要と考えられる切込みを入れた材が7点認められ、それらは家屋等に利用後転用された廃材であるものと推定された。それらの樹種は、トネリコ属の割材が3点、丸杭のモミ属、ニレ属、トネリコ属が各1点、丸材のハシドイ属が1点であり、計4属である。位置

的には、丸杭が左岸上流側に、横木が遺構の中央部付近に集中しており、すべて中央より左岸側に集中している。しかし、個体数が少ないことから各樹種別の位置的傾向を見いだすことはできない。

以上の結果を要約すると、基本骨格構造材の利用樹種は5属（モミ、ニレ、トネリコ、ヤナギ、ハンドイ）に限定され、さらに遺構周辺の丸杭およびやや遺構から離れている5本の丸材を除けば、トネリコ、ニレ、ヤナギ、ハンドイの4属に限定される。それらの個体数は、順に、116、3、2、1であり、トネリコ属が大部分を占める。

b 骨格補助材

テシの基本骨格構造のすき間を埋るように織り込まれていた枝材は、数百以上に上るが、樹種はトネリコ属、ヤナギ属、ハンノキ属に限定され、中でも大部分がヤナギ属で占められている。ここで補助材としたものは、出土状況から明らかに織り込み構造をなす枝材や、枝の一端が斜めに切断されているものであるが、寸断されているものが多く、個体数の特定はできない。従って、Tab.Ⅱ-3において自然流木とした枝材の中にも、ヤナギ属とハンノキ属が多いことから、これらの枝材が含まれている可能性もある。しかし、川岸周辺には、これらの樹種が多いことは一般的に知られており、これらの自然流木が多いことにも特に問題はない。いずれにせよ、基本的にテシの補助材は、その大部分がヤナギ属の枝材で占められており、遺構全体にわたって基本骨格構造材の間に織り込まれていたものと考えられる。

c 道具類

道具類の構成樹種は、1点の不明樹種を除きイチイ、トネリコ、アジサイ、カエデの4属であるが、それらの代表的樹種は、順にイチイ、ヤチダモ、ノリウツギ、イタヤカエデと推定される。これらは、全てが堅牢な木部をもつ点で共通しており、加工調製は容易でないものの、使用上においては、かなり優れた材をもつ樹種を選択利用していたものと考えられる。個々の道具類の位置についてはPLⅡ-337を、形状等については第Ⅴ章7-3を参照されたい。

d 加工材流木

加工材流木としては、20属が同定されたが、これらの中には、遺構の構成自体には関係のない加工材流木に加えて、既述した構造材が流失したものや、それらの一部が劣化し寸断された破片も多数含まれているものと考えられる。本来であれば、それらは構造材とすべきものであるが、それらが他目的の加工材である可能性も否定できず、判断が難しいため、ここでは一括して加工材流木に含めた。形状や位置からみてその可能性のあるものとしては、個体数の多い順に、トネリコ、ヤナギ、ニレ、ハンノキ、モミ、ハリギリの各属であり、トネリコ、ヤナギ両属では100点以上、ニレ、ハンノキ属では数点、モミ、ハリギリ両属では一点ずつの木材にその可能性がある。

その他の木材は、位置的に遺構本体から離れていたり薄板状等の木片であること等から、加工材流木と考えられる。それらの中で、確実に加工材と認め得るものは、モミ属の丸杭1点、トウヒ属の割板等2点、ニレ属の大丸杭1点、イヌエンジュ属の丸杭1点、キハダ属の割材1点、焼けこげ跡のあるトネリコ属の丸杭1点であり、その他の材は、加工痕がやや不明瞭であった。

これらの丸杭、割材は、全てテシからなり離れた上流部に位置しており、上流の他の遺跡からの流失物か、テシとは別の用途に用いられた木材であろう。加工材流木は、広く遺

構周辺に散在しているが、1例として針葉樹材の分布状態をPL.②-342に示す。ただしこれらには、一括取あげ材は含まれていない。PL.②-342では、各樹種が広く遺構周辺に散在していることが明らかであるが、個体数の多いイチイ属を例にとれば、それらはやや左岸よりに偏っており、河川水域が左岸側で強かったことが伺える。

加工材流木としては20属同定されたが、確実に加工木材と認定できるものは6属であり、cの道具類を含めるならば、それらは、イチイ、モミ、トウヒ、イヌエンジュ、キハダ、トネリコ、ヤナギ、アジサイ、カエデの9属に限定される。ハリギリ属の個体については、柵状遺構中に構造材として挿入されている可能性や加工材である可能性は高いものの、明確な加工材とは認め難い。

e 自然流木

自然流木は、数千点以上に上り、全点の樹種鑑定は困難であったので、樹種構成の一般傾向を把握すること、およびできるだけ多くの樹種の存在を確認できるよう検索し、鑑定を行なった。

自然流木中では13属が認められ、数点については同定できなかった。ヤナギ属とハンノキ属が多数認められることについては河川兩岸部での一般的な植生からみても当然である。大部分の流木は、枝材であるが、コナラ属とハコヤナギ属では、12~15cm径で150cm長程の比較的大きな流木も認められた。また、ニワトコ属とツル性植物は、加工材中にはみられなかったものであり興味深い。

テシとその周辺に認められた全24属の木材、ツル性植物のうち、明らかに人為的に使用されていたと考えられるものは12属であり、内訳は、イチイ、モミ、トウヒ、ニレ、イヌエンジュ、キハダ、トネリコ、ヤナギ、ハンノキ、アジサイ、カエデ、ハシドイの各属であった。その中でもテシの基本構造を構成するものは、6属（モミ、ニレ、トネリコ、ヤナギ、ハンノキ、ハシドイ）である。また、テシ中における家屋等から転用したと推定される廃材は4属（モミ、ニレ、トネリコ、ハシドイ）である。

道具類としては4属（イチイ、トネリコ、アジサイ、カエデ）に1不明樹種が認められ、他に、本遺構の構成上には直接関係がないと推定される加工材では6属（モミ、トウヒ、ニレ、イヌエンジュ、キハダ、トネリコ）が認められた。

また、判断は難しいものの人為的な使用が推定されるものは19属（イチイ、モミ、トウヒ、コナラ、ニレ、エノキ、イヌエンジュ、ハリギリ、トネリコ、ハコヤナギ、ヤナギ、オニグルミ、カバノキ、ハンノキ、カツラ、モクレン、カエデ、シナノキ、ミズキ）である。

自然流木としては13属（イチイ、モミ、トウヒ、コナラ、ニレ、クワ、ハリギリ、トネリコ、ハコヤナギ、ヤナギ、ハンノキ、カエデ、ニワトコ）にツル性植物が認められ、同定できなかったものも数点ある。

当時の利用樹種は、多樹種にわたるが、テシの構築には主としてトネリコ属割材、ヤス・中柄や木槌にはアジサイ属（ノリウツギと推定される）やイチイ等の極めて堅牢な材をもつものを用いる等、用途に応じた樹種の選択特性を認めることができる。

⑤ 木材の木取り等について

テシにおける木材の樹種や位置等については、前項で詳述したが、本項では、それらに加えて木材の外形、年輪、木取り等について検討した。

テシ中の割材は、割杭、横木、杭状の横木全てがトネリコ属である。割杭の外形は、広い幅の割板を削ったものや、尖り側の方が太いもの等様々であるが、それらの木取りは、全62点中、柂目木取りが31点、板目木取りが31点と半々であった。それらの木取りの違いによる割杭の分布をPL.Ⅱ-343に示す。右岸よりに柂目木取りの材がやや多い程度で特に顕著な分布傾向は示さない。

横木の割材は、杭状の先端加工材11点と割板38点、そのうち横断面が方形な材（便宜上角材とよぶ）が17点であるが、杭状の横木では、柂目木取りが5点、板目木取りが6点と半々であり、角材以外の横木の21点は、全て柂目木取りであった。即ち、杭と杭状の横木では、木取り法が柂目、板目半々であり、単なる割板の横木は木取りを特定できない角材を除き全て柂目木取りである。

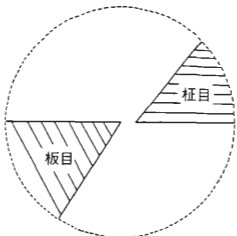
ここで注目されるのは、杭状の横木が廃材や丸材と同様に遺構の中央部付近に集中し特異的な分布傾向を示す点であり、また木取りの特徴からみて、この杭状横木が杭と同時に作られた可能性が高い点である。即ち、これらの杭状の横木は杭として製作はしたものの横木の補強材へと目的を変えたものと推定される。

また、板の割取りには、さらに興味深い事実が認められた。角材以外の割材の断面形は、台形と不定長方形が多いが、前者では板目木取りが、後者では柂目木取りが多い。板目木取りの割材（杭）は多くの場合台形であるが、PL.Ⅱ-6に示すように、逆台形とした場合には、年輪からみて、上側に木表側（樹皮側）が、下側に木裏側（芯側）となるものが大部分である。また、柂目木取りでは、平行四辺形に近いもの等不定の四角形が多い。さらに、割材中に芯を含む例はなく、2～3点の割材の端側に芯付近の組織特徴がみられる程度であった。即ち、割材製作には、まず丸太を芯を通るように分割し、さらに四半形もしくはそれ以上に分割した後に、適宜、板を割取ったものと推定される。（PL.Ⅱ-7）これは、割材の板幅が2～11cmと個体間で変化に富むこともとも良く一致している。割杭と杭状の横木では板目、柂目半々であるのに単なる横木の割材が全て柂目木取りであることを考えれば、杭と単なる割材とで木取りを変えていたとするのはやや不自然であり、2グループの人間が、丸太を大分割してからか、又は別々の丸太から板を割取っていた可能性が強いように思われる。全ての割材が同一丸太から得られたものかどうかは、詳細な年輪解析を行なう他ないが、若干の解析を行なった結果では、単純に年輪が一致する個体は極めて少く、かなり多くの丸太を使用しているかもしれない。

PL. Ⅱ-6 トネリコ割材の木取り



PL. Ⅱ-7 丸太からの板の割り取り

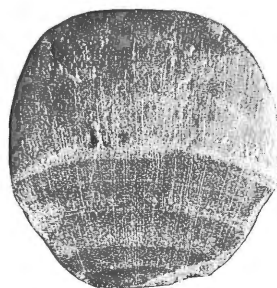


また、割材は、柁目木取りで15～60年程度、板目木取りでも15～30年程度の年輪を含み、年輪幅はかなり狭い個体が多い。トネリコ属の大径の丸太は出土していないが、ニレ属の大丸杭を例にとると、それは径約12cmで年輪数は50～60年程度であり、この種の丸太から板を割り取ったとすれば、かなり大量の丸太を使用していた可能性もある。しかし、このニレ属の材は大枝材である可能性が強いようにも思われ、仮にトネリコ属材でもこの種の材を利用していたとすれば、一本の大径木の太い枝を払い落して利用していたことになり、丸太の個体数は仮に多くても出所は一本の樹木である可能性もある。

川底に打ち込まれていた割杭は、上部の損傷が著しく、原形での長さが不明である。しかし、横木では損傷の少ないものも多く、最も長いものでは、杭状の横木が221cm、角材の横木が218cm、単なる割材が212cmとほぼ同一である。割材製作時に仮に同一丸太から全ての割材を取ってはいなくても、丸太の長さを約220cmに揃えたとすれば、割杭の長さもほぼ同じであると推定され、当時の川の水深を知る上での手掛りとなるかもしれない。少くとも200cm長の丸太から得られた割材は数個体あることから、かなり長い丸太も使用していたことは事実であり、そのような丸太から最も細いもので2×2cm程の材を割取るには、道具類を含め、かなり優れた技術を持っていたものと考えられる。

また、漁具は、アジサイ属のノリウツギであるものと推定されたが、横断面は円形であるものの小枝をそのまま利用したものではなく、髓を避けるように木取ってから切削加工したことが明らかであった。1例として、個体番号木器214の横断面の拡大写真を示す。写真の下側が髓方向であり、髓側の5年輪が確認できる。

PL. Ⅲ-8 個体番号木器214:ヤスの横断面の拡大写真(×4)



テシとその周辺の木材は、一端を持った場合には自重で折れる程の脆弱な材であり、材の腐朽や劣化が著しい。しかし、劣化程度は道具類や自然流木等で異なり、また、一個体でも部位により異なる場合があり、これらの違いは埋没以後に発生したものではなく、それ以前の木材腐朽状態をほぼ反映しているとも考えられる。したがって、木材の腐朽や劣化に関する知見は、遺構が使用されていた当時の状況を把握する上での一つの手掛りとなるであろう。

材劣化の状態は、割杭や丸杭では加工先端に近い程着色も少く強度も強いが、上部側約50cm付近から上では濃褐色となり強度も落ち、さらに上部側1m付近では解繊状態に近い程劣化していた。それに対して横木の割材、丸材や枝材では、解繊状態に近くなるようなものは少ないが、繊維方向と直角方向にでも簡単に折れる程度の強度を維持するのみである。また、道具類は、極めて劣化が少ないのが特徴である。これらに対して加工材流木や自然流木では、特に後者で形を維持するのがやっとな状態を示すものも多く、劣化はかなり進んでいる。木材含水率は、ニレ属やクワ属で約500～750%であった。

樹種による劣化程度の違いはかなり顕著であり、加工材や流木に係らず極めて堅牢な木部を維持しているもの4属（イチイ、カエデ、アジサイ、ハシドイ）、極めて脆弱なもの1属（ハコヤナギ）であり、他は中間的で個体間での差も大きい。一般的には、元来堅牢な木部を持つ樹種では、劣化が少いものもあるといえるであろう。

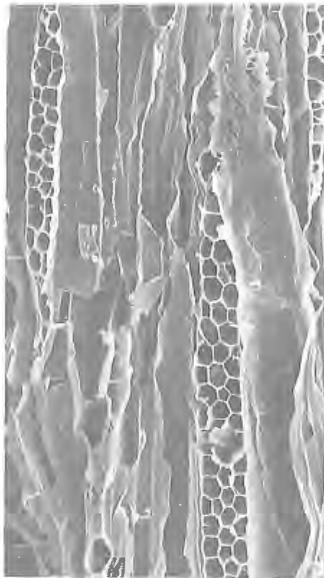
木材細胞の壁形態は、先の保存状態の良い4属では正常材と殆ど変わらないが、他のものでは種々の形態変化を示した。割杭の先端に近い部分や割材、丸材横木では、木部繊維壁の薄層化が認められるが、道管壁や放射柔細胞壁はやや薄層とはなるもののさほどではない。それに対して広葉樹の加工材流木や自然流木では、木部繊維壁や放射柔細胞壁の薄層化が著しく、道管壁もかなり薄層化しているものが多い。針葉樹では、イチイ属は殆ど変化しないが、モミ、トウヒ属ではやや変化し個体間でかなりの差が認められた。

また、偏光顕微鏡による観察では、先の4属の細胞二次壁は正常材と変わらない複屈折を示し、トネリコ属割材では、小道管壁が一般的に強い複屈折を、また木部繊維壁も薄層化はされているものの複屈折を示したが放射柔細胞では、所どころに全く複屈折を示さない細胞が認められた。それに対して広葉樹の自然流木では、道管壁が強い複屈折を示す樹種（カバノキ、シナノキ属等）と殆ど示さないもの（コナラ、ハコヤナギ属等）があるが、一般的に木部繊維壁や放射柔細胞壁は複屈折を示さない場合が多い。

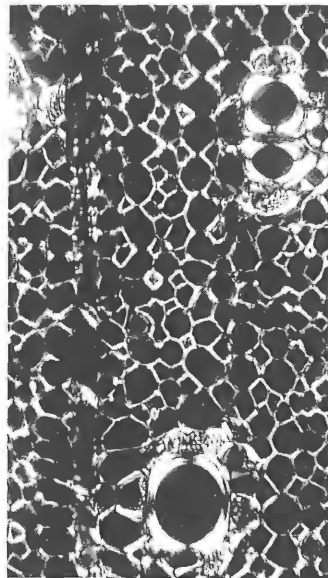
PL. Ⅱ-9 木部細胞の壁形態



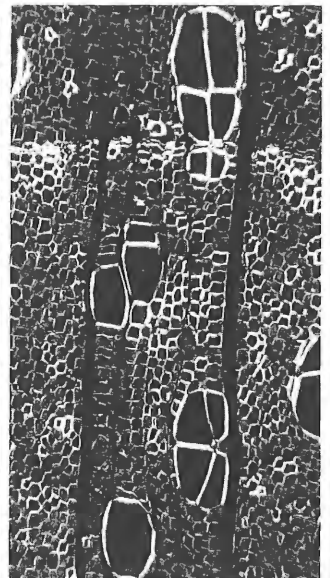
トネリコ属割材の板目面(×200)



ミズキ属流木の板目面(×220)



トネリコ属割材の木口面
(偏光顕微鏡写真 ×80)



カバノキ属流木の木口面
(偏光顕微鏡写真 ×75)

この種の木部繊維の著しい劣化は、既に報告されている結果(松田 1974)と類似している。その理由としては、広葉樹材の木部繊維では、明確に引張りあて材とは認められない木材中においてもゼラチン繊維が存在する場合がかなりあることが知られており、他の細胞と比較して木部繊維の劣化の著しいのは、G層の存在によることも推定される。

G層を持つ木部繊維では、木化された二次壁が少い場合が多く、また内腔側の未木化層の存在により腐朽等の影響を受けやすいことが考えられる。特に、枝材では、ゼラチン繊維の出現頻度が高いものと考えられ、腐朽抵抗性等が弱いことは事実であろう。しかし、あくまでゼラチン繊維が多いとの仮定の上での推論であり、通常の木部繊維が他の細胞と比較して弱いかどうかについてはさらに検討していく必要がある。

単純に材の劣化状態から判断すると、イチイ属の木槌等道具類は極めて保存状態が良く、

他の材と水中投棄等の時期がかなり異なるとの推定もなされ得るが、保存状態が良いのは樹種的に腐朽等に対する抵抗性が強いとみなすべきであろう。その理由としては、イチイ、カエデの両属は流木個体も多数あるが、全て保存状態が良いためである。アジサイ属のヤスの保存状態が良いのも同様の理由からであろう。その他の材では、テシの構造材は、製作時に良材が使用され、かつすぐ川底に打ち込まれた杭では下側程保存が良く、常に水面下に位置し土中にも早く埋没した横木等では流木として水中に漂っていた材よりも腐朽が少なかったものと考えられる。ハシドイ属個体の腐朽が少ない理由としては、後日補強された可能性があり、そのために保存状態が良かったのかもしれない。

木材腐朽の要因としては、白色、褐色、軟腐朽菌、バクテリア等が一般的に知られているが、腐朽様式に関する報告では事例が多種多様であり(Wilcox 1970)、テシ材に単純に当てはめることはできず、また、テシ材も当時は種々の菌の影響をうけていたものであろう。偏光顕微鏡による観察等では、細胞二次壁のセルロース結晶性が維持されているものもあれば逆のものもあり、また、壁の薄層化が極端なものもあればほとんど影響のないものもあるなど好例である。しかし、本遺構の出土材で注目すべきは、遺構の木材が当時腐朽作用を受けてはいたものの、割杭の川底に埋れていた部分等で外観的にも組織、構造的にも特に変化なく、また菌糸やバクテリア等がSEMによりほとんど認められないものまでもやはり全体に脆い点である。この種の遺構材全てに共通する材質の脆さは、腐朽作用というよりむしろ、長年の埋没による土壌中成分との化学反応的要素がより強いのではなかろうか。単純な腐朽作用では、この種の均一な材質低下は少なく、また、低温、無酸素に近い状態での埋没環境からみても、埋没時に強い腐朽作用を受けていたとは考えにくい。また、発掘直後に木材の色調が急激に変化したことも木材成分の化学変化を示しているといえよう。それらの解釈については、既往の報告を参照されたい(増澤 1979, 岡本・増澤 1984)。すなわち、同一樹種での個体内や個体間で認められるような木材劣化の程度の差は、遺構使用時の腐朽状態を、全体的な材の脆さは遺構の長年の埋没を反映しているのではなかろうか。

⑥ 樹種構成からみた組み立て手順

テシとその周辺部の木材の樹種構成、外形、木取り等を検討した結果を基に、テシの組み立て手順について考察する。

Tab. 1-4 に示したように、テシ中の割材は、河川上流部で認められたキハダ属の1点を除いては、全てがトネリコ属であり(ヤチダモと推定される)、割杭も割材の横木も丸杭や丸材と比較して数が圧倒的に多く、かつテシ中に均等に配置されていることから、これらの割材がテシの構造上、基本骨格となるべく使用されているものと考えられる。

組み立ての作業手順としては、まずトネリコ属の丸太から、約2 m長、4～9 cm幅、2～3 cm厚の板を割取り、半数以上のものにつき片側先端を削って杭とし、それらを川底に打ち込むことから始めたものと考えられる。杭の打ち込みがある程度進んだ時点で割材を横木として組み立て、大体の骨組ができる。割杭と横木割材では丸太からの木取りに違いが認められ、別グループにより作業が行なわれた可能性が強い。

そして、次には、河川の水量や流速に合わせて、杭状の割材(トネリコ属)、杭状等の丸材(ニレ、トネリコ、ヤナギの各属)、廃材(トネリコ、ハシドイの各属)を横木として補強する。これらは全て、遺構のやや左岸よりの中央部付近に集中しており、やはりこの付近では割杭の数も多いこととも共通で、水流の強い部位を補強する目的であったものと推定される。ただし、廃材等による補強は、テシの完成後に年月を経てからなされたも

のかもしれない。それは、廃材のハンドイ属が、炭化材を含めても遺跡中でこの一点が認められただけであり、また材の劣化も極めて少ないことによる。これらの作業と前後して、横木としてやや太めの枝等を加えながら、主としてヤナギ属の枝材をすき間に多数織り込み、テン本体が完成する。

ここで一つの問題は、配置等を含めた丸杭とテン本体との関係についての解釈が難しいことである。丸杭は、右岸側に4本、左岸下流側に3本、同上流側に26本配置されている。右岸側ではトネリコ属1本とヤナギ属3本、左岸下流側ではヤナギ属3本である。これらは2属のみからなり、位置的にみてもテン本体中にあり、割杭の補助的意味合いが強いように思われるが、左岸上流側の丸杭のもつ意味が問題となる。それらは4属から成り、配列にも若干の傾向がみられる。モミ属は個体数が少ないものの、他の3属では、最上流部にヤナギ属がやや円状に、そのやや下流側にニレ属がほぼ直線的に、最下流側にトネリコ属が弧を描くように配置されている。しかし、配列様式に樹種の傾向はみられるものの、同一樹種の丸杭が同時に打ち込まれた証拠はない。

そこで、これらの丸杭を樹種別に比較すると、ヤナギ属では右岸側の3本と左岸下流側の2本が類似個体であるが、左岸上流側の個体は変化に富む。またニレ属では、最も河川中央部寄りの廃材1本を除いては全て類似個体である。トネリコ属では、7本中廃材1本が全く別個体で、残る6本中でも3本のみが類似個体であった。左岸上流側の丸杭は、廃材やモミ属の少数個体を含み、同一樹種でも個体はかなり異なる等変化に富むことは明らかである。しかし、丸杭も丸杭状の横木とほぼ同じ長さを持っていたと仮定するならば、約2mであり、丸材が低木や枝であることからみて、1本の枝等から分割して何本もの丸材を取っていたとは考えにくく、丸杭の個体が全て形状的に一致しなくても特に問題はないとも考えられる。従って、確実な証拠はないものの、これら3属（トネリコ、ヤナギ、ニレ）の丸杭の各々は、位置的にみて、やはり、何らかの規則性を持って配置されているものと考えらるべきであろう。また、これら3属が、丸杭状の横木として各々3点ずつ使用されていることからみて、左岸側の丸杭がテン本体と全く関係のない構造物であるとは考えにくい。したがって、丸杭は、丸杭状横木が組み立てられている時点とほぼ同時期に左岸上流側に打ち込まれていたものと考えられる。本遺構が魚止めの堰であるならば、これらの丸杭は上流部のかつ集落寄りに集中していることから、魚道や足場確保の支え杭のような役割を持っていたのかもしれない。その他の部位に散在する丸杭や廃材の丸杭は補助的なものであろう。これらを要約すれば、テンの組立手順は、以下のようなになるであろう。

- ① トネリコ属丸太から割板の調製
- ② 割板の一部の先端加工、割杭の調製
- ③ 割杭の打込み
- ④ 割材による横木の組み立て
- ⑤ 同時並行的に
 - a 割杭状材、丸杭状材、丸材、廃材での横木の補強
 - b 枝材の織り込み
 - c 丸杭の打込み

以上、樹種構成等からみたテンの組み立て手順について類推してきたが、割材以外の横木等が遺構完成後ある期間を経てから補強された可能性も否定できず、既述した内容は、あくまで推定である。しかし、基本的に、トネリコ属の割材でテンが構築されている点では問題がないと思われ、住居跡の構造材でトネリコ属が大量に使用されていることや、燃料用材等も含めてトネリコ、ニレ、ヤナギの3属が堅穴や焼土で大量に利用されていることを考え合わせると、両者の使用材主要樹種は極めて良く一致し、興味深い。

⑦ 木材の保存処理

テシの木材は劣化が著しいため、ポリエチレングリコール（PEG）とエポキシ樹脂により保存処理を行なった。現段階ではPEG処理が出土木材保存の常法とされており、それは保存処理上において優れた性質をもっている（佐藤 1983）が、大規模装置が必要なこと、処理に長時間を要する等問題も多いため、PEG処理装置もできるだけ簡易な装置を作製するよう工夫し、また、別方法としてエポキシ樹脂による処理方法も試みた。

▶PEG処理

処理タンクは、板厚4cmの木製水槽（80[幅]×175[長]×60[深]cm）を2基用意し、それぞれに挿入形温度調節器を連動させた液体加熱用投込型ヒーター（200V，3KW）を2本ずつ取り付け付けた。水槽の使用容量は約600ℓである。水槽には蓋は用いず、厚手のビニールシートで覆いをするにとどめた。

処理には、#4000PEGを用い、約40%（重量比）水溶液からはじめ、段階的に約10%ずつ濃度を上げ、70%で処理を打ち切った。PEGは、濃度を上げるごとに液を交換するのではなく、水の自然蒸発で容量が減った時点でPEGを加え、比重計を用いておおよその濃度を測定した。PEG処理においては、最終濃度を100%とすることが理想であるが、本遺構の木材は最終濃度が60～70%の処理で十分な保存性が維持されている。

PEG温度は、常時50℃となるようセットしたが、水槽中の各個所での温度差は±1℃前後である。また、夜間は火災防止のため加熱を停止したが、冬期間でも約10℃程度下るのみであり、いずれも特に問題はない。

PEG処理は2基の装置で各2回行ない、約2千点の加工材の処理を約2年で完了した。処理期間は、割材、丸材等については14カ月、10カ月、加工材流木については7カ月であり、ニレ属の大径材については20カ月であるが、現在のところ保存状態は良好である。各濃度での処理期間は、水漏れ事故のため必ずしも一定ではないが、40、50、60、70各%ごとで2～4カ月間である。

PEGは、出土木材では特に、繊維方向だけではなく全方向から浸透することが知られているが（松田 1975）、本遺構の木材も同様の傾向を示した。浸透率についての厳密な調査は行っていないが、40%処理では、4カ月後には、5cm径、各17、40、63cm長のヤナギ属自然流木3本の全ての材で内部全体にPEGが含浸しているのが確認され、さほど繊維方向の長さを考慮に入れて処理を行なう必要はないようである。しかし、各個体ごとの含浸率は、木材の劣化程度や樹種によりやや異なるため、自然流木等の試験体を同時に処理し、常にそれらを切断、内部観察しながら処理を進めるのが確実である。

木材の保存状態は、40%処理材では乾燥後の収縮やそれに付随する割れの発生が多いのに対して、50%ではほとんどそれが認められない等、わずかの濃度差でもかなりの違いが認められるため、少なくとも50%以上の処理は必要であろう。

PEG処理後の木材は、水槽から引上げた後ただちに温流水で表面のPEGを洗い落とし、自然乾燥させた。乾燥速度は、トネリコ属材で約1カ月後に、半径方向で表面から約4mm、接線方向で約8mmを進む程度であり、内部までの乾燥にはかなりの長時間を要した。また、PEG処理後の表面の木質感が問題とされているが、解織状態に近いような試料以外では、ある程度乾燥した時点で表面を温流水で軽く洗うのが効果的である。この場合でも内部のPEGが試料収縮を引き起こすほど溶け出すことはないようである。

▶エポキシ樹脂処理

PEG処理では、保存の長期安定性に問題のあることが指摘されているため、エポキシ樹脂処理も試みた。エポキシ樹脂は、TAABのEpon 812とQuetol 812とを用いたが、仕上りに差はない。

処理方法は、試料を容器内で50%、70%アセトン水溶液、次に100%アセトンに2回、その後エポキシ樹脂：アセトン＝1：1混合液、わずかにアセトンを加えたエポキシ樹脂の順に浸漬、置換させ、約40℃で熱硬化させた。各溶液の処理時間は試料の大きさによりまちまちであるが、径2cm、長さ15cm程度の個体では各々1週間程度で十分である。熱効果の際ににじみ出る樹脂は、数時間おきにアセトンを湿したガーゼで軽くふきとった。また、硬化は軟調で十分である。

試料の保存性は、径5cm以下、長さ30cm以下程度の小さな個体では良好であったが、それ以上の大きなものでは、いくつかの試料で内部に樹脂が浸透せず、収縮や割れが発生した。特に、劣化の少ない個体程、浸透性は悪いようである。したがって、この種の大きな個体については、減圧又は加圧の樹脂注入装置が必要であろう。また、表面の木質感は、やや光沢のあるものが多く、若干の問題がある。

しかし、エポキシ樹脂処理は、薄板状の木材や削り屑、マツの球果、巻皮等の浸透がさほど問題とはならず、かつ脆弱な遺物に対しては極めて良好な結果を示しており、この種の遺物保存には効果的である。

結果的に現時点では、大きな個体については、質感、保存性においてPEG処理の方が良好な結果を示しているが、将来の長期保存性を考慮すれば、小個体ではエポキシ樹脂処理の方が良好であるように思われる。

PEG処理では、長期日数を要し、かつ火災防止対策等面倒な問題が多いが、エポキシ樹脂処理ではその種の問題は少なく経済効率も優れている。今後は、小遺物のエポキシ樹脂処理の併用と合わせて、大遺物についても簡易な樹脂注入装置の導入をはかっていきたいと考えている。現在では、数多くの樹脂が開発されているが、処理過程においてあまり高価な薬品や危険性の高いものを使用することはできず、今回はアセトンで簡単に置換のできるエポキシ樹脂を使用した。今後は他の樹脂についても検討していくべきであろう。

(平川泰彦)

V-8 〔遺構の小括〕

① 遺構の種類と数量

① 第1文化層の遺構

第1文化層に所属することが判明した遺構は、焼土72が1個所である。

② 第2文化層の遺構

第2文化層に所属することが判明した遺構は、竪穴住居跡が5基、土壇が6基、集石が7個所、焼土・炭化物集積が139個所73ブロックである。

なお、テシの所属については第1文化層、第2文化層いずれであるか確定できなかった。

② 第2文化層の集落

① 竪穴住居の組み合わせ

3基の大型住居と2基の小型住居は、住居の掘り込み面がいずれも第Ⅳ層の粘土からである、という層位的な側面と、出土遺物のうち土器類の型式学的な側面から判断してほぼ同一時期に営まれたものである。

その一方で、大型住居に関しては土器の破片の接合状況から、3号→2号（个体番号甕68の破片接合に基づく）、2号→5号（个体番号甕66の破片接合に基づく）という時間差があったということを読み取ることができた。

3号→2号という時間差は住居の廃絶が3号の方が先、2号→5号という時間差は住居の構築が2号の方が先、という関係になる。

そこで2号を基軸に、3号が組み合わせとなっていた時期をⅠ期、5号が組み合わせとなっていた時期をⅡ期とし2時期を設定、1号、4号の各小型住居が2時期にまたがるものとみれば、つぎのような住居の組み合わせが成立する。

Ⅰ期——1号、2号、3号、4号の4基

Ⅱ期——1号、2号、4号、5号の4基

以上のように、第2文化層の住居は大型、小型住居それぞれ2基ずつ合計4基の組み合わせがみられた。さらに、Ⅰ期では2号と1号、3号と4号、Ⅱ期では2号と1号、5号と4号というふた組ずつの大型、小型住居が近接して配置されていた。

② 集落の構成

ここでは土壇、集石、焼土・炭化物集積遺構などをⅠ期とⅡ期別にその所属を明らかにする。

① Ⅰ期

▶土壇

3号と4号の2基

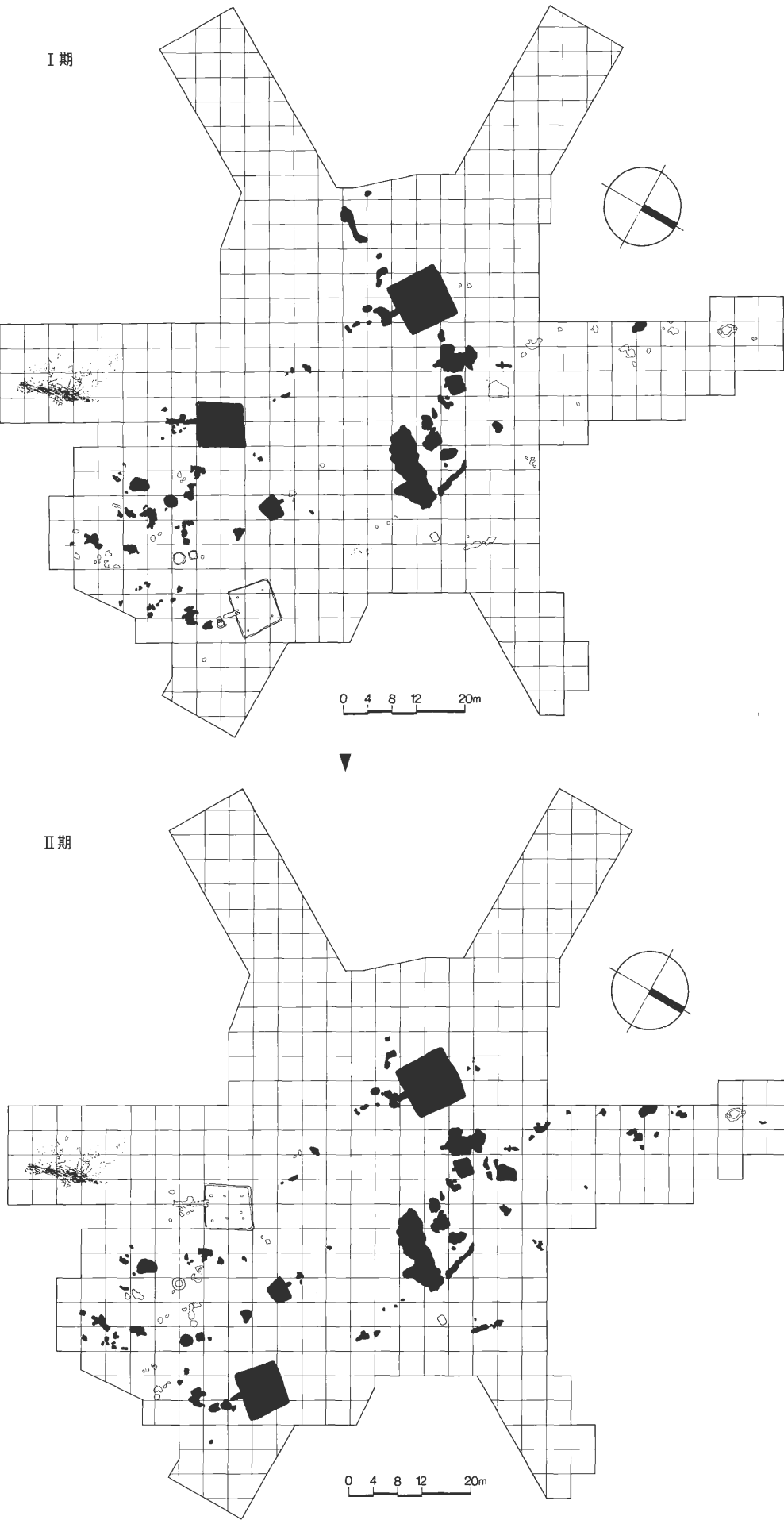
▶集石

2号竪穴住居内の集石と3号土壇④層の集石

▶焼土・炭化集積遺構

炭化物マウンド、1号土壇周辺の焼土・炭化物、炭化物2、同4、同6、焼土9、同

PL. Ⅰ-10 I 期, II 期別集落構成の図



11, 同12, 同13, 炭化物14, 焼土15, 炭化物16, 焼土17, 同18, 炭化物19, 焼土・炭化物20・21, 焼土22, 同24, 同27, 焼土・炭化物28, 焼土29, 炭化物30, 焼土32, 同34, 同35, 炭化物36, 焼土37, 同41, 炭化物42, 焼土43, 同44, 同47, 同48, 同49, 炭化物50, 焼土51, 炭化物52, 同53, 焼土59, 同60, 同62, 炭化物70の42ブロック

② II期

▶土壌

1号, 3号, 5号, 6号の4基

▶焼土・炭化物集積遺構

炭化物マウンド, 1号土壌周辺の焼土・炭化物, 焼土3, 炭化物4, 焼土5, 同7, 同8, 同10, 同11, 同13, 炭化物16, 焼土22, 同23, 同25, 炭化物26, 焼土・炭化物28, 焼土29, 炭化物30, 同31, 焼土33, 同34, 同37, 同38, 炭化物39, 同40, 焼土41, 同43, 同44, 同47, 同48, 同49, 炭化物50, 焼土51, 炭化物52, 焼土54, 同55, 炭化物58, 焼土59, 同60, 同61, 同62, 同63, 同64, 同65, 同66, 同67, 同68, 同69, 炭化物70, 焼土71, 同73, 同74の51ブロック

③ 集落の時期と廃絶

この集落が営まれたのは, おおまかにいえば擦文時代の中葉である。その詳細については, この集落で使用されていた土器類と密接に関係している。土器類の分析結果に基づけば西暦9世紀の中頃をもってその開始とする, ということになる。

一方, この集落にたいするⅠ期とⅡ期の区分を, 3号住居の火災による廃絶とそれにかわる5号住居の構築においたが, 集落としては4軒の住居の集合を基本形とし, 93頁に示した土壌や焼土・炭化物遺構がそれぞれ組み合わせとなって, 1号, 2住居が火災によって消失するまで継承して営まれていた, といえよう。(横山英介)

第Ⅵ章

サクシュコトニ川遺跡の遺物

Ⅵ-1

[第1文化層の遺物]

土師器甕類12個体分と須恵器大甕 1 個体分が出土した。

① 分布

つぎの 3 群にわけられる。

- ① 05-05, 05-09, 05-10, 05-11, 06-09, 06-10, 07-06, 07-08, 07-10, 07-11, 08-08, 08-11, 09-06, 09-07, 09-08, 09-09, 10-07, 10-08グリッドで、発掘区の東南部分にあたり、分布範囲はもっとも広く 5 個体分の土器が出土した(个体番号甕53,54,55,101, 183)。
- ② 09-18グリッドで、1 個体分の土器が出土した(个体番号甕56)。
- ③ 焼土72とその周辺から 7 個体分の土器(个体番号甕107,157,172,173,174,184, 須恵器大甕)が出土した。

以上であり、①、②は遺物包含層、③は焼土遺構に関係する。

② 土器の特徴

个体番号甕53	<p>出土位置：05-09, 05-10, 06-09, 06-10, 06-11, 07-08, 07-10, 09-09の 8 グリッドにまたがる。</p> <p>法量：高さ39.8cm, 口径30.4cm(推定), 底径10.0cmで器厚約 1 cmである。文様：口縁部から頸部に施文される。口縁部文様は隆帯を口縁部にそって張り付け、その上にヘラによる異方向の刻み目を付けている。頸部文様は縦・横・斜位の沈線文と鋸歯状文の組み合わせ文様、胴部との境に刻み目を付した隆帯を張りつけている。器面調整：胴部外面は縦位の細かいハケ目のあと縦位のヘラミガキ、内面の口縁部から頸部にかけては横位のヘラミガキ、胴部は縦位のヘラミガキで、さらに黒色処理が施されている。</p>
个体番号甕54	<p>出土位置：09-07, 09-08, 10-07, 10-08の 4 グリッドにまたがる。法量：計測不可能。但し、底径7.8cmである。文様：頸部に施文される。複数の横走沈線文と鋸歯状文の組み合わせ文様。胴部との境に二本単位の鋸歯文がみられる。器面調整：胴部外面の上半は横・縦位の太いハケ目、下半は縦・斜位のハケ目、内面の口縁部から頸部にかけては横位のヘラミガキ、胴部は縦位のヘラミガキである。</p>
个体番号甕55	<p>出土位置：05-11, 06-10, 06-11, 07-10, 07-11, 08-11の 6 グリッドにまたがる。法量：高さ38.0cm, 口径29.8cm, 底径8.2cmで器厚約1.2～2.2cmである。文様：口縁部に施文される。隆帯を口縁部にそって張</p>

り付け，その上にヘラによる刻み目を付けている．器面調整：胴部外面は縦・斜位のハケ目，内面の口縁部から頸部にかけては横位のヘラミガキ，胴部は横位のハケ目のあと縦位のヘラミガキで，さらに黒色処理されている．

個体番号甕56

出土位置：09-18グリッドである．法量：高さ28.2cm，口径26.0cm，底径7.6cmで器厚約0.7cmである．文様：口縁部から頸部にわたる．口縁部は隆帯を口縁部にそって張り付け，その上にヘラによる異方向の刻み目を付けている．頸部文様は縦位のハケ目の後，上下に鋸歯状文，胴部との境に刻み目と鋸歯状文を付した隆帯を張り付けている．器面調整：胴部外面は縦位のハケ目のあと縦位のヘラミガキ，内面の口縁部から頸部にかけては横位のヘラミガキ，胴部は横位のハケ目のあと縦位のヘラミガキである．

個体番号甕101

出土位置：07-06，08-07，09-06，09-07の4グリッドにまたがる．法量：高さ19.0cm，口径16.6cm，底径6.2cmで器厚約0.2cmである．文様：みられない．器面調整：胴部外面は縦・斜位のハケ目のあとヘラミガキ，内面の口縁部から頸部にかけては横位のヘラミガキ，胴部は縦位のヘラミガキである．

個体番号甕107

出土位置：焼土72．底部（径8.9cm，厚さ1.3cm）．文様：みられない．器面調整：胴部外面は斜位のヘラミガキ，内面は横位のハケ目のあと縦位のヘラミガキである．

個体番号甕157

出土位置：31-17グリッドで焼土72の西へりである．法量：高さ17.5cm，口径19.0cm，底径8.4cmで器厚約0.6～0.8cmである．文様：口縁部から頸部にわたる．口縁部は隆帯を口縁部にそって張り付け，その上にヘラによる刻み目を付けている．頸部文様は横走の多重沈線文のうゑに縦位の沈線文，鋸歯状文を組み合わせている．胴部との境に刻み目が付けられている．器面調整：外面の口縁部から頸部にかけてはヨコナデ，胴部は風化していて不明である．内面の口縁部から頸部にかけては横位のヘラミガキである．

個体番号甕173

出土位置：焼土72．頸部から胴部上半にかけての破片である．文様：横走沈線の上に鋸歯状文が描かれ，胴部との境に刻み目が付されている．器面調整：胴部外面は不明，内面は横位のヘラミガキである．

個体番号甕174

出土位置：焼土72．頸部から胴部上半にかけての破片である．文様：斜・横位の隆起帯とそれにそった刺突文，複数の沈線文の組み合わせ文様である．器面調整：胴部外面は横位のハケ目とヘラミガキである．

個体番号甕183

出土位置：05-05グリッド．口縁部の破片である．文様：口縁部にそって隆起帯が巡り刻み目が付される．器面調整：外面はヨコナデ，内面は横位のヘラミガキである．

須恵器大甕

出土位置：30-17グリッド．胴部の破片である．器厚は0.5～0.8cm．器面：器外面の側面叩き目は縦位平行線叩き目で，下部で異方向の叩き目と重複する．この部分が底面に近い部分である．内面は重複する半弧状の当て具痕がみられる．

なお，個体番号甕172，同184の説明は省略する．

小括

- a 遺構は焼土跡が1箇所検出されただけで，住居跡などは見出されなかった．

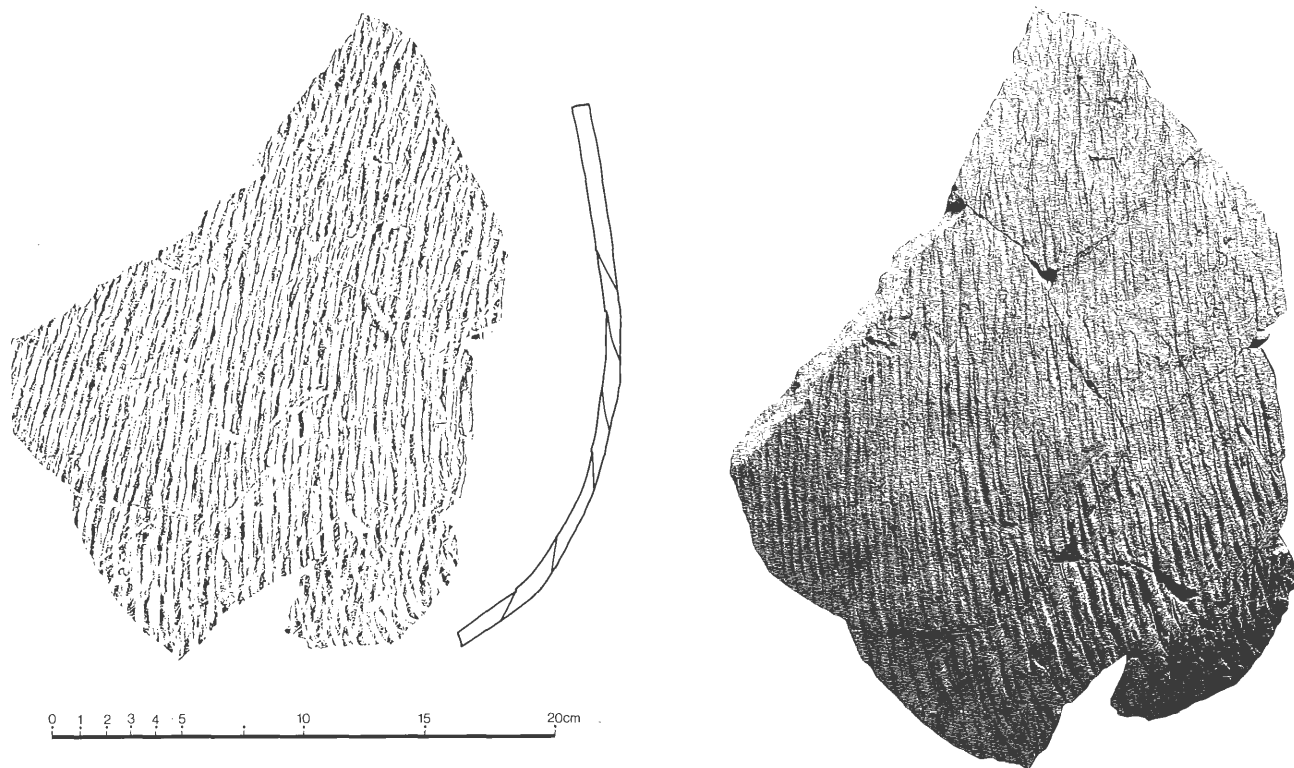
b 遺物は12個体分の土師質甕と1個体分の須恵器大甕が出土した。これらの土器類は焼土跡を中心に分布するほか、合わせて3箇所に見られた。

c 土師質甕は器高が20cm以上のもの（個体番号甕53, 54, 55, 56）4個体、器高20cm以下のもの（個体番号甕101, 157）2個体が見られた以外は破片である。

d 土師質甕は個体番号甕101以外口縁部から頸部にかけて文様がみられる。また、器面は内外ともヘラミガキによって調整され、個体番号甕53, 55のように内面に黒色処理を施すものもみられる。

（横山英介）

PL. Ⅱ-11 須恵器大甕



Ⅵ-2
〔第2文化層の出土遺物〕

出土遺物は、土器類、土製品類、石器・石製品類、金属器・鉄滓類、木製品類、骨角器類および動物・植物遺存体などである。
以下にこれらの遺物類について述べる。

Ⅵ-3
〔土器類〕

① 種類と数量

土器類には土師器、須恵器、「赤焼」土器などがある。量的には土師器が主体を占め、須恵器、「赤焼」土器が少量みられる。
帰属不明の破片も同様の傾向を示す。

Tab. Ⅵ-5 第2文化層の土器類出土数

	土師器		須恵器		「赤焼」土器		計	
	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数	個体数	破片数
坏類	113	1,139	7	66	4	—	124	1,205
甕類	183	5,562	—	—	—	—	183	5,562
瓶類	—	—	5	—	—	—	5	—
その他	1	—	—	—	—	—	1	—
計	297	6,701	12	66	4	—	313	6,767

② 出土状況

土器の種類別にみた個体別出土状況を以下に述べる。

① 土師器坏類

- 個体番号坏1
- 炭化物52と遺構外から出土した。
- 個体番号坏2
- 1号土壌の周辺の焼土炭化物から出土した。
- 個体番号坏3
- 2号竪穴住居の周辺（18-16グリッド）から出土した。
- 個体番号坏4
- 2号竪穴住居内から出土した。
- 個体番号坏5
- 2号竪穴住居内と炭化物52から出土した。
- 個体番号坏6
- 炭化物マウンドから出土した。
- 個体番号坏7
- 2号竪穴住居の周辺（17-16，18-20グリッド）から出土した。
- 個体番号坏8
- 5号竪穴住居内から出土した。

個体番号坏9	2号竪穴住居内と炭化物52から出土した。
個体番号坏10	2号竪穴住居の覆土中と炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏11	焼土24と炭化物52周辺から出土した。
個体番号坏12	5号竪穴住居の煙道内から出土した。
個体番号坏13	3号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号坏14	遺構外(06-08グリッド)から出土した。
個体番号坏15	遺構外(10-08グリッド)から出土した。
個体番号坏16	3号土壇内と焼土41と炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏17	焼土18, 焼土28, 炭化物30, 炭化物マウンドと遺構外(08-05グリッド)から出土した。
個体番号坏18	2号竪穴住居のカマド内から出土した。
個体番号坏19	1号土壇周辺の焼土・炭化物から出土した。
個体番号坏20	炭化物52から出土した。
個体番号坏21	焼土43と炭化物マウンドのへりから出土した。
個体番号坏22	焼土27と炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏23	炭化物52から出土した。
個体番号坏24	焼土44と炭化物52と炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏25	2号竪穴住居の覆土中, 焼土43, 炭化物52と遺構外(19-16グリッド)から出土した。
個体番号坏26	4号土壇内から出土した。
個体番号坏27	炭化物70から出土した。
個体番号坏28	炭化物52のへりと炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏29	5号竪穴住居内から出土した。
個体番号坏30	炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏31	4号土壇内, 炭化物42, 炭化物52, 炭化物マウンドと遺構外(15-08グリッド)から出土した。
個体番号坏32	3号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号坏33	5号竪穴の床面, 1号土壇周辺の焼土・炭化物, 焼土27のへりから出土した。
個体番号坏34	炭化物52から出土した。
個体番号坏35	炭化物42およびその周辺, 炭化物マウンド(フローテーション資料)と遺構外(13-22グリッド)から出土した。
個体番号坏36	炭化物52と炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏37	炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏38	炭化物19のほかは遺構外(06-07, 08-12, 08-14, 10-17, 11-16グリッド)から出土した。
個体番号坏39	2号竪穴住居の覆土中のほかは遺構外(11-18, 13-15, 13-17, 14-15グリッド)から出土した。
個体番号坏40	焼土35, 焼土37のへりのほかは遺構外(13-15, 13-16, 14-15, 15-15グリッド)から出土した。
個体番号坏41	炭化物52, 焼土62と炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏42	炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏43	2号竪穴住居の床面と焼土43, 同44, 炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏44	焼土68から出土した。
個体番号坏45	炭化物52のへりのほか遺構外(17-13グリッド)から出土した。

個体番号坏46	炭化物19, 焼土61と遺構外(07-07グリッド)から出土した.
個体番号坏47	6号土壌内とその周辺から出土した.
個体番号坏48	5号堅穴住居の床面, 5号土壌内と遺構外(04-06グリッド)から出土した.
個体番号坏49	2号堅穴住居の床面と焼土30, 炭化物52から出土した.
個体番号坏50	炭化物52から出土した.
個体番号坏51	焼土43と炭化物マウンドから出土した.
個体番号坏52	すべて遺構外から出土した.
個体番号坏53	炭化物マウンド. 破片2点だけが1号堅穴住居のへりから出土した.
個体番号坏54	焼土43と炭化物マウンドから出土した.
個体番号坏55	炭化物52, 炭化物マウンドと遺構外(12-08グリッド)から出土した.
個体番号坏56	2号堅穴住居の覆土中と炭化物52のほかは遺構外(15-14, 15-15, 15-16グリッド)から出土した.
個体番号坏57	すべて遺構外(21-14グリッド)から出土した.
個体番号坏58	焼土53と炭化物マウンドから出土した.
個体番号坏59	すべて遺構外(19-18, 21-13, 21-17グリッド)から出土した.
個体番号坏60	炭化物52と焼土62から出土した.
個体番号坏61	炭化物マウンドから出土した.
個体番号坏62	1号土壌周辺の焼土・炭化物, 焼土17と炭化物マウンドから出土した.
個体番号坏63	5号堅穴住居の覆土中, 5号土壌内と炭化物30から出土した.
個体番号坏64	すべて炭化物52のへりから出土した.
個体番号坏65	焼土47と遺構外(11-13, 19-12グリッド)から出土した.
個体番号坏66	3号堅穴住居の北東へりと1号土壌周辺の焼土・炭化物から出土した.
個体番号坏67	焼土43のへりと遺構外(11-09, 15-16グリッド)から出土した.
個体番号坏68	4号土壌内から出土した.
個体番号坏69	すべて遺構外(11-11, 14-17グリッド)から出土した.
個体番号坏70	炭化物52と遺構外(16-13グリッド)から出土した.
個体番号坏71	5号堅穴住居の床面, 5号土壌内と遺構外(08-05, 09-06, 09-08グリッド)から出土した.
個体番号坏72	遺構外(29-15グリッド)から出土した.
個体番号坏73	遺構外(10-10グリッド)から出土した.
個体番号坏74	焼土70から出土した.
個体番号坏75	遺構外(09-11グリッド)から出土した.
個体番号坏76	焼土7, 焼土11と遺構外(07-07, 09-06, 09-08, 09-10グリッド)から出土した.
個体番号坏77	遺構外(18-14グリッド)から出土した.
個体番号坏78	4号土壌内から出土した.
個体番号坏79	炭化物52と遺構外(10-09グリッド)から出した.
個体番号坏80	遺構外(06-08グリッド)から出土した.
個体番号坏81	5号堅穴住居の床面から出土した.
個体番号坏82	4号土壌の周辺と遺構外(17-13グリッド)から出土した.
個体番号坏83	遺構外(08-09, 14-12, 15-05グリッド)から出土した.
個体番号坏84	焼土・炭化物20・21から出土した.
個体番号坏85	遺構外(16-09グリッド)から出土した.

個体番号坏86	底部であり、焼土24(07-12グリッド)から出土した。
個体番号坏87	遺構外(14-14グリッド)から出土した。
個体番号坏88	遺構外(22-21グリッド)から出土した。
個体番号坏89	焼土42から出土した。
個体番号坏90	焼土11から出土した。
個体番号坏91	遺構外(07-08グリッド)から出土した。
個体番号坏92	遺構外(05-08グリッド)から出土した。
個体番号坏93	4号土壌内から出土した。
個体番号坏94	遺構外(09-07, 09-09グリッド)から出土した。
個体番号坏95	5号土壌内から出土した。
個体番号坏96	遺構外(30-16グリッド)から出土した。
個体番号坏97	遺構外(04-09グリッド)から出土した。
個体番号坏98	焼土22と遺構外(10-10グリッド)から出土した。
個体番号坏99	炭化物14から出土した。
個体番号坏100	5号土壌内と炭化物16から出土した。
個体番号坏101	遺構外(09-08グリッド)から出土した。
個体番号坏102	遺構外(20-16グリッド)から出土した。
個体番号坏103	遺構外(10-06グリッド)から出土した。
個体番号坏104	炭化物4から出土した。
個体番号坏105	遺構外(10-05グリッド)から出土した。
個体番号坏106	2号竪穴住居のカマド内と炭化物52から出土した。
個体番号坏107	4号土壌、焼土22から出土した。
個体番号坏108	5号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号坏109	5号竪穴の覆土中と遺構外(07-11グリッド)から出土した。
個体番号坏110	炭化物マウンドから出土した。
個体番号坏111	焼土11から出土した。
個体番号坏112	破片1点が5号竪穴住居の床面から出土、5号竪穴住居の東壁外(11-04-)からの破片2点と接合した。
個体番号坏113	炭化物52から出土した。

② 土師器甕類 (代表個体)

個体番号甕1	5号竪穴住居の床面と1号土壌内から出土した。
個体番号甕2	1号土壌内から出土した。
個体番号甕3	焼土27のほか遺構外から出土した。
個体番号甕4	2号竪穴住居の床面、炭化物マウンド、3号竪穴住居の北側(10-11グリッド)などから出土した。
個体番号甕5	遺構外(21-17グリッド)から出土した。
個体番号甕6	3号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号甕7	1号竪穴住居のカマドで支脚として使用されていた。
個体番号甕8	5号竪穴住居の床面から出土した。
個体番号甕9	1号竪穴住居のカマド焚口に固定されて出土した。
個体番号甕10	1号竪穴住居の覆土中や付近(19-14グリッド)、炭化物マウンド、焼土43のへり、炭化物52のへり、焼土58などから出土した。
個体番号甕11	炭化物マウンドと炭化物52から出土した。
個体番号甕12	炭化物マウンド、焼土43、炭化物52などから出土した。

個体番号壺13	1号竪穴住居の南側(18-14グリッド)1個所に集中する。
個体番号壺14	4号土壇内、焼土32, 4号竪穴住居の東および西側から出土した。
個体番号壺15	2号竪穴住居の床面、炭化物マウンド、焼土34、同51などから出土した。
個体番号壺16	5号竪穴住居の床面およびカマドの煙道内から出土した。
個体番号壺17	5号竪穴住居の床面と2号竪穴住居の西側(20-21グリッド)から出土した。
個体番号壺18	遺構外(09-09～10-09グリッド)から出土した。
個体番号壺19	焼土64から出土した。
個体番号壺20	炭化物マウンド, 炭化物52, 同53から出土した。
個体番号壺21	2号竪穴住居の覆土中, 3号土壇内, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンドから出土した。
個体番号壺22	4号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号壺23	2号竪穴住居のカマド周辺, 炭化物マウンド, 焼土41, 焼土43, 炭化物52から出土した。
個体番号壺24	5号竪穴住居の床面, 1号土壇周辺の焼土・炭化物, 6号土壇内およびその周辺部, 炭化物マウンド内から出土した。
個体番号壺25	焼土36, 同39, 4号竪穴住居の北東側から出土した。
個体番号壺26	炭化物52の中に破片が1点みられ, 多くの破片はその周辺から出土した。
個体番号壺27	破片2点が1号竪穴住居でカマドの袖に使用され, 他の破片は同竪穴の床面やその周辺, 3号土壇内, 焼土47, 同48のへり, 焼土51などかなり広範囲に分布している。
個体番号壺28	2号竪穴住居の床面と炭化物マウンドから出土した。
個体番号壺29	炭化物マウンド, 焼土43, 炭化物52から出土した。
個体番号壺30	2号竪穴住居の床面, 焼土37, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンドから出土した。
個体番号壺31	2号竪穴住居の床面, 3号土壇内, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンドなどかなり広範囲に分布している。
個体番号壺32	2号竪穴住居の床面, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンドなどかなり広範囲に分布している。
個体番号壺33	2号竪穴住居の覆土中, 焼土43およびその周辺に分布している。
個体番号壺34	2号竪穴住居の床面や住居外の南東部分, 焼土43, 炭化物52, 炭化物マウンドおよび4号竪穴住居周辺, 焼土34, 同47などかなり広範囲に分布している。
個体番号壺35	2号竪穴住居の覆土中, 4号竪穴住居周辺, 焼土43から出土した。
個体番号壺36	焼土35, 同37, 同43, 炭化物52, 炭化物マウンドなどかなり広範囲に分布している。
個体番号壺37	2号竪穴住居の床面とカマド, 焼土43, 炭化物52, 炭化物70などかなり広範囲に分布している。
個体番号壺38	2号竪穴住居の床面やカマド, 焼土41, 同43, 炭化物52, 炭化物マウンドに分布している。
個体番号壺39	5号竪穴住居の床面に破片が2点出土, 大部分の破片は10-10グリッドに集中する。
個体番号壺40	5号竪穴住居の床面とカマドの煙道内, 1号土壇内および周辺の焼土

- ・炭化物，3号・4号竪穴住居周辺部から出土した。
- 個体番号甕41 2号竪穴住居の床面と覆土中，焼土43およびその周辺に分布している。
- 個体番号甕42 2号竪穴住居の床面と覆土中，焼土13およびその周辺に分布している。
- 個体番号甕43 焼土43，炭化物52，炭化物マウンドなどかなり広範囲に分布している。
- 個体番号甕44 5号竪穴住居の床面，カマド煙道部から出土した。
- 個体番号甕45 2号竪穴住居の床面やカマド，炭化物52，炭化物マウンドに分布している。
- 個体番号甕46 遺構外(05-08，06-08，09-06，19-13，20-09グリッド)から出土した。
- 個体番号甕47 遺構外(13-11，14-06，14-09，14-11，15-10，19-13グリッド)から出土した。
- 個体番号甕48 炭化物52，同53，炭化物マウンドに分布している。
- 個体番号甕49 2号竪穴住居の床面，炭化物52，炭化物マウンドに分布している。
- 個体番号甕50 遺構外(20-09，20-10，21-10グリッド)から出土した。
- 個体番号甕51 焼土27とその周辺部に分布している。
- 個体番号甕52 2号竪穴住居の床面やカマドおよび覆土中，焼土41，同43，同44，炭化物52，炭化物マウンドに分布している。
- 個体番号甕57 焼土41，同43，同48，炭化物52，同50，炭化物マウンドに分布している。
- 個体番号甕58 遺構外(20-17，20-18，21-17，22-14グリッド)から出土した。
- 個体番号甕59 2号竪穴住居の床面や炭化物52，炭化物マウンドに分布している。
- 個体番号甕60 焼土35，同39に分布している。
- 個体番号甕61 焼土43，炭化物52に分布している。
- 個体番号甕62 2号竪穴住居の床面やカマドおよび覆土中，焼土43，炭化物52に分布している。
- 個体番号甕63 焼土43，炭化物52，炭化物マウンドに分布している。
- 個体番号甕64 焼土41，同43，炭化物19，炭化物マウンド，1号竪穴住居と炭化物58の間に主として分布している。その他3号竪穴住居の西側(09-18グリッド)約20mにも破片がみられる。もっとも離れていた破片間の距離は約80mである。
- 個体番号甕65 2号竪穴住居のカマド内，焼土43，炭化物52，炭化物マウンドに破片が分布している。
- 個体番号甕66 2号竪穴住居のカマド周辺に7点の破片が出土，5号竪穴住居のカマド煙道内の1点の破片，炭化物52からの破片と接合した。もっとも離れたもので約60mの距離がある。
- 個体番号甕67 2号竪穴住居の床面・カマド周辺，焼土43，炭化物52，炭化物マウンドに破片が分布している。
- 個体番号甕68 2号竪穴住居の床面・カマド周辺・煙道内，およびその周辺部，3号竪穴住居の覆土中，焼土43，炭化物30，炭化物52，炭化物マウンドからの破片と接合した。
- 個体番号甕69 2号竪穴住居の床面および覆土中，焼土41，同43，炭化物52，炭化物マウンドからの破片と接合した。
- 個体番号甕70 2号竪穴住居の床面およびその覆土中，焼土41，同43，炭化物52からの破片と接合した。
- 個体番号甕71 3号竪穴住居の床面およびその周辺部，5号竪穴住居の床面，4号土壇内，焼土22，焼土32，炭化物16，炭化物52および炭化物マウンドのへりからの破片と接合した。

個体番号甕72	炭化物52から出土した。
個体番号甕73	4号土壌内と焼土24からの破片が接合した。
個体番号甕74	5号竪穴住居の床面および覆土中と焼土28などからの破片が接合した。
個体番号甕75	2号竪穴住居のカマド周辺、炭化物52、炭化物マウンドからの破片が接合した。
個体番号甕76	4号土壌内、焼土12、同18、炭化物14、同19、焼土27からの破片が接合した。
個体番号甕77	5号土壌内、焼土27、同29、炭化物28からの破片が接合した。
個体番号甕78	3号竪穴住居のカマド焚口から出土した。
個体番号甕79	5号土壌の東がわから南がわぞいと2号竪穴住居の南西がわ(16-22, グリッド)に分布した。
個体番号甕80	5号竪穴住居の覆土中および5号土壌の周辺部、1号土壌周辺の焼土・炭化物からの破片と接合した。
個体番号甕81	3号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号甕82	3号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号甕83	焼土24から出土した。
個体番号甕84	遺構外(31-16グリッド)から出土した。
個体番号甕85	2号竪穴住居の床面・カマド周辺・煙道内、焼土43、同49、同62、炭化物52、炭化物マウンドからの破片が接合した。
個体番号甕86	遺構外(20-13, 20-15, 21-16, 22-18グリッド)から出土した。
個体番号甕87	2号竪穴住居の覆土中、3号土壌内、焼土43、炭化物52、炭化物マウンドからの破片が接合した。
個体番号甕88	炭化物52の周辺部から出土した。
個体番号甕89	焼土13や同18の周辺部からの破片が接合した。
個体番号甕90	炭化物マウンドと遺構外(21-22グリッド)からの破片が接合した。
個体番号甕91	遺構外(21-15, 21-16, 21-17グリッド)から出土した。
個体番号甕92	2号竪穴住居の床面と炭化物52からの破片が接合した。
個体番号甕93	2号竪穴住居のカマド周辺、焼土41、同43、炭化物4、同52からの破片が接合した。
個体番号甕94	炭化物52から出土した。
個体番号甕95	焼土43から出土した。
個体番号甕96	遺構外(21-18, 21-19, 22-18グリッド)から出土した。
個体番号甕97	遺構外(22-18, 22-21グリッド)から出土した。
個体番号甕98	4号土壌内と焼土22からの破片が接合した。
個体番号甕99	炭化物マウンドから出土した。
個体番号甕100	遺構外(10-08グリッド)から出土した。
個体番号甕102	4号竪穴住居外の南西がわ、焼土49、同50、炭化物マウンドのへりからの破片が接合した。
個体番号甕103	5号竪穴住居の床面から出土した。
個体番号甕104	焼土24から出土した。
個体番号甕105	2号竪穴住居のカマド煙道内、3号土壌内、焼土43、炭化物マウンドなどからの破片が接合した。
個体番号甕106	炭化物52から出土した。
個体番号甕108	3号竪穴住居のカマド周辺や煙道内からの破片が接合した。

- 個体番号壺109 炭化物70から出土した。
- 個体番号壺110 炭化物70から出土した。
- 個体番号壺111 炭化物19と遺構外(10-17グリッド)から出土した。
- 個体番号壺112 炭化物52と遺構外(18-20グリッド)から出土した。
- 個体番号壺113 炭化物マウンドから出土した。
- 個体番号壺114 1号竪穴住居の南側(18-14グリッド)から出土した。
- 個体番号壺115 炭化物52と遺構外(12-07, 15-13, 15-16, 17-13, 18-15, 19-15グリッド)から出土した。
- 個体番号壺116 2号竪穴住居の覆土中, 焼土43, 炭化物52からの破片が接合した。
- 個体番号壺117 焼土・炭化物20・21周辺から出土した。
- 個体番号壺118 2号竪穴住居の床面・カマド周辺, 焼土41, 同43, 同47, 同60, 炭化物50, 同52, 炭化物マウンドからの破片が接合, 一方1号竪穴住居の南側(18-14グリッド)や4号竪穴住居の付近(10-09, 13-14グリッド), 3号竪穴住居と4号竪穴住居の間などにも破片が分布し, もっとも離れた距離は約60mである。
- 個体番号壺119 炭化物52と炭化物マウンドからの破片が接合した。
- 個体番号壺120 炭化物マウンドから出土した。
- 個体番号壺121 2号竪穴住居の北西側(19-18グリッド)から出土した。
- 個体番号壺122 遺構外(08-09グリッド)から出土した。
- 個体番号壺123 遺構外(21-17グリッド)から出土した。
- 個体番号壺124 遺構外(14-13グリッド)から出土した。
- 個体番号壺125 遺構外(16-13グリッド)から出土した。
- 個体番号壺126 遺構外(20-19, 22-18グリッド)から出土した。
- 個体番号壺127 2号竪穴住居の西側(17-20, 17-21グリッド)から出土した。
- 個体番号壺128 焼土43から出土した。
- 個体番号壺129 5号竪穴住居の床面から出土した。
- 個体番号壺130 炭化物マウンドから出土した。
- 個体番号壺131 炭化物52と遺構外(20-19グリッド)から出土した。
- 個体番号壺132 炭化物マウンドから出土した。
- 個体番号壺133 遺構外(22-15グリッド)から出土した。
- 個体番号壺134 遺構外(07-14グリッド)から出土した。
- 個体番号壺135 遺構外(07-09グリッド)から出土した。
- 個体番号壺137 炭化物19と遺構外(06-08, 07-05, 07-09グリッド)から出土した。
- 個体番号壺138 遺構外(10-11, 10-12グリッド)から出土した。
- 個体番号壺139 遺構外(05-10グリッド)から出土した。
- 個体番号壺140 遺構外(26-16グリッド)から出土した。
- 個体番号壺141 5号竪穴住居の床面と焼土27からの破片が接合した。
- 個体番号壺142 遺構外(11-07グリッド)から出土した。
- 個体番号壺143 遺構外(09-06グリッド)から出土した。
- 個体番号壺144 遺構外(12-21グリッド)から出土した。
- 個体番号壺145 炭化物70から出土した。
- 個体番号壺146 焼土43から出土した。
- 個体番号壺147 炭化物52から出土した。
- 個体番号壺148 焼土68から出土した。
- 個体番号壺149 1号土壇周辺の焼土・炭化物と遺構外(05-06, 09-07グリッド)から出

	土した。
個体番号甕150	2号竪穴住居の覆土中から出土した。
個体番号甕151	炭化物70から出土した。
個体番号甕152	4号土壇内、炭化物14、同19と焼土24から出土した。
個体番号甕153	炭化物16と遺構外(4号竪穴住居の周辺部)から出土した。
個体番号甕154	遺構外(19-20, 20-20, 22-21グリッド)から出土した。
個体番号甕155	焼土64と遺構外(19-16, 21-16グリッド)から出土した。
個体番号甕156	2号竪穴住居の床面と炭化物52, 焼土59からの破片が接合した。
個体番号甕158	遺構外(09-07～09-08グリッド)から出土した。
個体番号甕159	炭化物19と焼土・炭化物20・21から出土した。
個体番号甕160	遺構外(05-09, 05-10, 05-11グリッド)から出土した。
個体番号甕161	焼土64, 同67から出土した。
個体番号甕162	炭化物70から出土した。
個体番号甕163	5号竪穴住居覆土中、焼土22から出土した。
個体番号甕164	焼土37と遺構外(4号竪穴住居の周辺部)から出土した。
個体番号甕165	3号竪穴住居のカマド煙道内や覆土中、焼土24からの破片が接合した。
個体番号甕166	3号竪穴住居のカマド煙道内や覆土中、焼土24からの破片が接合した。
個体番号甕167	焼土・炭化物20・21から出土した。
個体番号甕168	遺構外(19-13グリッド)から出土した。
個体番号甕169	遺構外(21-16, 21-17グリッド)から出土した。
個体番号甕171	遺構外(15-12グリッド)から出土した。
個体番号甕176	1号土壇周辺の焼土・炭化物からの破片が接合した。
個体番号甕177	焼土71から出土した。
個体番号甕178	遺構外(08-09, 09-09グリッド)から出土した。
個体番号甕179	2号竪穴住居の覆土中、4号土壇内、焼土27, 炭化物マウンドからの破片が接合した。
個体番号甕180	5号土壇内、焼土22, 炭化物16からの破片が接合した。

[3] 土師質土器その他

3号竪穴住居のカマド煙道内から破片が出土した。

[4] 須恵器・「赤焼」土器 (16個体のうち11個体について説明する)

個体番号須恵器1	炭化物4と遺構外(05-07, 05-09, 06-07グリッド)から出土した。
個体番号須恵器2	炭化物50と炭化物マウンドから出土した。
個体番号須恵器3	焼土18と炭化物19から出土した。
個体番号須恵器4	炭化物16と遺構外(05-10グリッド)から出土した。
個体番号須恵器5	焼土・炭化物59と遺構外(21-17, 22-18グリッド)から出土した。
個体番号須恵器6	焼土62と炭化物52の周辺から出土した。
個体番号須恵器7	炭化物マウンド, 焼土43から出土した。
個体番号須恵器9	炭化物70から出土した。
個体番号須恵器10	6号土壇内と焼土11から出土した。
個体番号須恵器11	5号竪穴住居の床面と遺構外(09-05グリッド)から出土した。
個体番号須恵器12	遺構外(09-06, 11-10, 11-11, 11-12グリッド)から出土した。

なお、須恵器類の個体識別が可能なものは、16個体である。その他破片などで帰属不明

なものは、28番まで番号を付して分布図に示してある。

③ 種類別に見た土器の特徴

① 土師器(土師質土器)

坏類、甕類およびその他の土器にわけて説明する。

① 坏類

ここで坏類とした土器は、底部から口縁部にかけて大きな屈曲をもたずに単純に外傾しながら立ち上がる器形のものをさす。このなかには、坏、鉢、椀、皿などが含まれる。

坏類として個体識別された土器は113個体、帰属不明の破片は1,139点ある。

▶ 坏類の形態と製作手法による分類

坏類の製作にロクロによる調整があるかどうかによって二類にわけられる。

1 類：ロクロによる調整のみられない坏類

A 一体部に単数の横走沈線を施すもの

B 一体部に横走沈線や段などを施さないもの

C 一口縁部にそって横走沈線や段を施すもの

2 類：ロクロによる調整がみられる坏類

A 一回転糸切り後、体部や底部に再調整を施すもの

B 一回転糸切り後、体部外面や底部に再調整を施さないもの

以下に、各類別にその特徴を述べる。

▶ 1 A 類

個体番号坏19、個体番号坏27の2個体が見られる。

法量は口径が14.4cm～14.8cm、底径が5.6cm～6.2cm、器高が6.4cm～7.4cmで、口高比が1.9～2.4となり、外傾度はいずれも29度である。

体部の形状は、内湾しながら外傾するもの（個体番号坏19）と直線的に外傾するもの（個体番号坏27）である。器面調整は、いずれも外面がハケ目調整の後ヘラミガキ、内面がヘラミガキ・黒色処理されている。

底部はいずれも平底である。

▶ 1 B 類

個体番号坏6、個体番号坏12、個体番号坏13、個体番号坏14、個体番号坏28、個体番号坏42、個体番号坏57、個体番号坏58、個体番号坏59、個体番号坏64、個体番号坏65、個体番号坏113の12個体が見られる。そのうち、計測が可能なものは個体番号坏6～同57までの7個体である。

法量は口径が10.9cm～14.8cm、底径が4.7cm～5.8cm、器高が5.2cm～8.0cmで、口高比が1.9～2.4となり、外傾度はいずれも29度～36度である。

そのうち、a＝口径が10.9cm～12cmまでの比較的小型のもの（個体番号坏6、同12、同113）が3個体みられるほかは、b＝口径が14cm～16cmまでの大型品である。

体部の形状は、Ⅰ＝内湾しながら外傾するもの（個体番号坏14、同42、同57、同59、同64、同65、同113）が7個体、Ⅱ＝直線的に外傾するもの（個体番号坏6、同12、同13、同28）が4個体みられ、Ⅰが量的にうわまわる。

器面調整は、いずれも内外面ともにヘラミガキによって仕上げられ、内面は黒色処理が施される。しかし、ヘラミガキに先だってハケ目調整を施すもの（個体番号坏12、同13、同14、同59）4個体や外面の口縁部にヨコナデ調整を施すもの（個体番号坏13、同57）などもみられる。

底部はいずれも平底であるが、外側へ張り出すもの（個体番号坏6）もみられる。

▶ 1 C類

個体番号坏4，個体番号坏8，個体番号坏11，個体番号坏15，個体番号坏16，個体番号坏21，個体番号坏35，個体番号坏39，個体番号坏41，個体番号坏45，個体番号坏47，個体番号坏50，個体番号坏62，個体番号坏71，個体番号坏73，個体番号坏75，個体番号坏76，個体番号坏107，個体番号坏109，個体番号坏110の20個体がみられる。そのうち、計測が可能なものは個体番号坏4～同50までの12個体である。

法量は口径が13.8cm～17.0cm，底径が5.3cm～7.4cm，器高が6.1cm～7.7cmで，口高比が1.9～2.5となり，外傾度はいずれも29度～39度である。

そのうち，a＝口径が13.8cm～14cmまでの比較的小型のもの（個体番号坏4，同16）の2個体みられるほかは，b＝口径が14.8cm（個体番号坏47）～17cmまでの大型品である。

体部の形状は，Ⅱ＝直線的に外傾するもの（個体番号坏21）が1個体みられるほかはすべてⅠ＝内湾しながら外傾するものである。

器面調整は，いずれも内外面ともにヘラミガキによって仕上げられるが，特に外面がヘラミガキに先だってハケ目調整を施すもの（個体番号坏11，同15，同21，同47，同50，同71，同73，同76）8個体や内外面にハケ目がみられるもの（個体番号坏8）1個体，外面の口縁部にヨコナデ調整を施すもの（個体番号坏35）などもみられる。内面は1個体（個体番号坏41）以外黒色処理が施される。

底部は垂直あるいは，外側へ張り出すもの（個体番号坏4，同16，同39，同41）4個体のほか体部からスムーズに移行するもので占められている。

以上のほかに，破片や底部であるため形態が不明なものが11個体分（個体番号坏52，同80，同87，同91，同92，同97，同98，同100，同103，同105，同106）みられる。

▶ 2 A類

個体番号坏1，個体番号坏3，個体番号坏20，個体番号坏25，個体番号坏30，個体番号坏31，個体番号坏33，個体番号坏40，個体番号坏60，個体番号坏63，個体番号坏65，個体番号坏70，個体番号坏90の13個体みられる。そのうち，計測が可能なものは個体番号坏1～同40までの9個体である。

法量は口径が13.5cm～16.6cm，底径が5.8cm～7.4cm，器高が6.2cm～7.9cmで，口高比が2.0～2.4となり，外傾度は23度～36度である。

そのうち，a＝口径が13.5cm～14.5cmまでの比較的小型のもの（個体番号坏1，同33，同65）が3個体みられるほかは，b＝口径が14.8cm～16.6cmまでの大型品である。

体部の形状は，Ⅱ＝直線的に外傾するもの（個体番号坏20）が1個体とⅢ＝内湾しながら外傾し口縁部で若干外反するもの（個体番号坏1）が1個体みられるほかは，すべてⅠ＝内湾しながら外傾するものである。

器面調整は，多くのものについて底部外面以外ロクロ調整後ヘラミガキによって仕上げられ，内面を黒色処理している。しかし，特に体部外面が部分的にヨコナデ（個体番号坏1）あるいは底部の外面がケズリ調整されるもの（個体番号坏20，同60），体部の外面以外についてヘラミガキ調整されるもの（個体番号坏40）がみられる。

底部は，揚底（個体番号坏1，同3，同20，同30，同33，同40）が6個体，平底（個体番号坏25，同31）が2個体で，回転糸切りの痕跡をとどめているが，ヘラミガキ調整によってそれが消失しているもの（個体番号坏40）が1個体みられる。

▶ 2 B類

個体番号坏2，個体番号坏5，個体番号坏7，個体番号坏9，個体番号坏10，個体番号坏17，個体番号坏18，個体番号坏22，個体番号坏23，個体番号坏24，個体番号坏26，個体番号坏29，個体番号坏32，個体番号坏34，個体番号坏36，個体番号坏37，個体番号坏38，

個体番号坏43, 個体番号坏44, 個体番号坏46, 個体番号坏48, 個体番号坏49, 個体番号坏51, 個体番号坏53, 個体番号坏54, 個体番号坏55, 個体番号坏56の27個体がみられる。そのうち、計測が可能なものは個体番号坏48以外の26個体である。

法量は口径が14.2cm（個体番号坏5）～17.5（個体番号坏17）cm, 底径が5.8cm（個体番号坏17, 同23）～7.2cm（個体番号坏29）, 器高が6.2cm（個体番号坏49）～7.9cm（個体番号坏29）で、口高比が2.0～2.6となり、外傾度は、①21度～30度に16個体、②31度～41度に8個体みられ、①が②の2倍である。ちなみに、「夫」文字坏（個体番号坏17）は①に含まれる。

体部の形状は、Ⅰ＝内湾しながら外傾するもの（個体番号坏9, 同10, 同18, 同24, 同26, 同34, 同36, 同43, 同44, 同46, 同49, 同51, 同53, 同54, 同55）が15個体、Ⅲ＝内湾しながら外傾し口縁部で若干外反するもの（個体番号坏2, 同5, 同7, 同17, 同22, 同23, 同29, 同32, 同37, 同38, 同56）が11個体みられる。

器面調整は内面にかざられ、13個体（個体番号坏5, 同9, 同22, 同23, 同24, 同32, 同34, 同36, 同37, 同43, 同44, 同48, 同55）がヨコ・ナナメのヘラミガキによって調整されており、全個体について黒色処理されている。

底部は体部からスムーズに移行するもの（個体番号坏18, 同32, 同37）が3個体と少なく、大部分のものは低い台状を呈する。

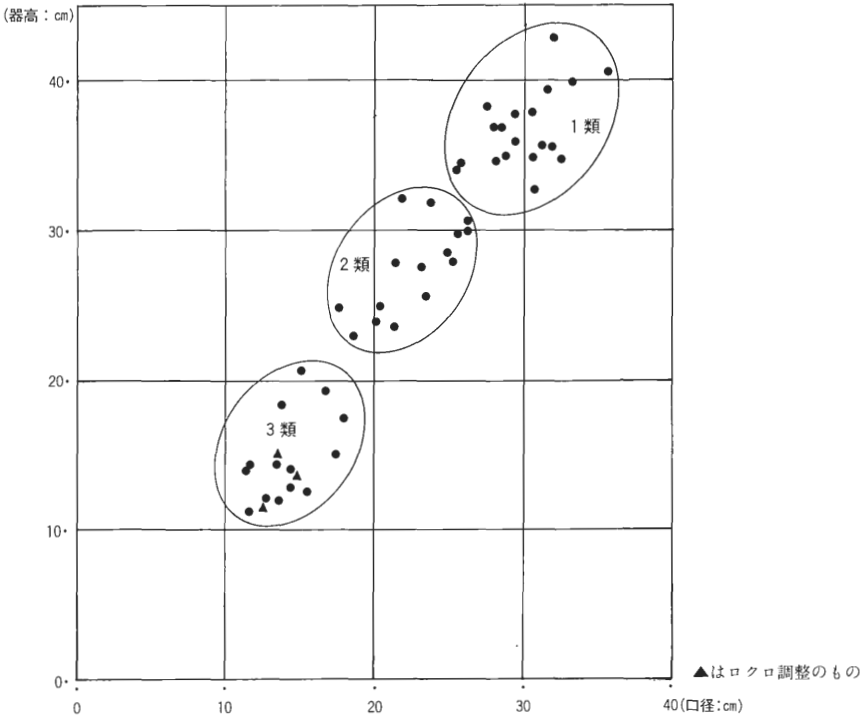
以上のほかに、2類に含まれるが形態の不明なものが21個体分（個体番号坏61, 同66, 同67, 同68, 同69, 同77, 同78, 同81, 同82, 同83, 同84, 同85, 同86, 同88, 同89, 同93, 同94, 同95, 同96, 同99, 同100）みられる。

② 甕類

ここで甕類とした土器は、最大径が口縁部にあり胴部が長胴形ないし胴張形をなし、頸でしまり口縁部がひらく器形で、頸部の径が最大径の約2分の1以上のものをさす。

甕類として個体識別された土器は183個体、帰属不明の破片は5,562点ある。

PL. Ⅱ-12 甕の形態別分布



甕類の製作過程でロクロ調整をうけたものはわずかに4個体（個体番号甕8，同14，同88，同90）で全体の2.2%にすぎず，他は粘土紐の積み上げによるもので占められる．

▶ 甕類の形態分類

甕類の口径と器高との相関関係にもとづくなら，三類に分けられる．

計測が可能なものは51個体で，全体の27.9%である．さらにこれらのデータをもとに底部以外の個体で類型化ができたものが131個体，それができなかったものが52個体で，全体の約7割が類型化できたことになる．

1類：口径が25.5cm～36.0cm，器高が33.0cm～44.0cmにおさまる甕

2類：口径が17.5cm～26.0cm，器高が23.0cm～32.0cm代におさまる甕

3類：口径が10.0cm弱～18.0cm弱，器高が8.0cm代～21.0cm弱におさまる甕

以下に，各類別にその特徴を述べる．

▶ 1類

計測が可能なものはつぎの19個体である．

個体番号甕1，個体番号甕2，個体番号甕24，個体番号甕27，個体番号甕28，個体番号甕29，個体番号甕30，個体番号甕31，個体番号甕32，個体番号甕33，個体番号甕36，個体番号甕39，個体番号甕40，個体番号甕41，個体番号甕64，個体番号甕69，個体番号甕70，個体番号甕76，個体番号甕77．

これらの甕類は，口径が27.0cm～33.0cm，器高が35.0cm～39.0cmの範囲内に12個体（個体番号甕27，同28，同29，同30，同31，同32，同33，同40，同64，同69，同70，同77）と もっとも多くみられ，それより小さいものが3個体（個体番号甕24，同36，同76），大きいものが4個体（個体番号甕1，同2，同39，同41）みられる．

さらに，破損品について識別が可能なものが44個体分（個体番号甕34，同35，同37，同38，同42，同43，同44，同45，同46，同60，同62，同63，同65，同66，同67，同68，同71，同72，同73，同74，同75，同78，同79，同81，同85，同86，同102，同104，同112，同113，同116，同134，同149，同163，同166，同167，同176，同179，同186，同190，同191，同192，同193，同194）あり，1類の甕の総数は63個体である．

甕1類の製作過程でロクロ調整をうけたものはみられず，すべて幅1cm～1.5cmの粘土紐の積み上げによる．粘土紐の接合状況は器内面へと傾斜している．

▶ 器形の特徴

頸部と器高との関係をとらえることができる個体数は，31個体である．

1 頸部が短く（器高の約10分の1強），外反しながら口縁部へ移行するもの

個体番号甕1，同27，同32，同33，同34，同35，同37，同38，同40，同41，同66，同70，同77，同81の14個体である．

2 頸部が直立あるいは内傾（器高の約5分の1弱）し，大きく外反しながら口縁部へ移行するもの

個体番号甕2，同24，同28，同29，同30，同31，同36，同39，同62，同64，同68，同69，同71，同76，同79，同85，同179の17個体である．

▶ 器面調整

観察が可能なものは，54個体である．

器面調整は部位によって異なるが，口縁部はヨコナデ（個体番号坏1，同2など），頸部，胴部はハケ目，ヘラミガキ，あるいはその組み合わせである．

器内外面ともにハケ目調整が施されるものは，24個体（個体番号甕1，同28，同32，同40，同43，同44，同45，同46，同62，同65，同66，同67，同70，同73，同75，同76，同81，同86，同102，同104，同112，同179，同192，同193）と もっとも多い．

器内外面ともにヘラミガキ調整が施されるものは，3個体（個体番号甕27，同30，同31）

と少ない。

器外面がハケ目調整で、内面にヘラミガキ調整が施されるものは、4 個体（個体番号甕 2，同72，同149，同163）みられる。

器外面がハケ目調整で、内面にヘラミモキ調整に先だってハケ目調整が施されるものは、6 個体（個体番号甕29，同33，同35，同42，同64，同167）みられる。

器外面がヘラミガキ調整に先だってハケ目調整が施され、内面にハケ目調整が施されるものは、4 個体（個体番号甕69，同74，同77，同85）みられる。

器外面がヘラミガキ調整に先だってハケ目調整が施され、内面にヘラミガキ調整が施されるものは、2 個体（個体番号甕24，同39）みられる。

器内外面ともにヘラミガキ調整に先だってハケ目調整が施されるものは、8 個体（個体番号甕24，同36，同37，同38，同60，同68，同79，同194）みられる。

器外面がヘラミガキ調整で、内面にハケ目調整が施されるものは、1 個体（個体番号甕 63）みられる。

器外面がヘラミガキ調整で、内面にヘラミガキ調整に先だってハケ目調整が施されるものは、1 個体（個体番号甕41）みられる。

▶器面調整のハケ目やヘラミガキの方向

器外面では頸部、胴部は縦位もしくは斜位、頸部下半から胴部上半は横位もしくは斜位に、器内面では口縁部から頸部は横位もしくは斜位、胴部は縦位に施されるという傾向がみられる。

▶文様

文様が施文される部位は、口縁部から頸部にかけてである。

観察が可能な個体は47個体分であり、そのうち文様がみられたものは25個体である。したがって、甕1 類では53.2%に文様がみられたことになる。

▶文様の種類

1 横走沈線文——22個体

- a 1～2本の横走沈線文——5 個体（個体番号甕27，同62，同76，同77，同163）
- b 多重横走沈線文——17個体（例えば個体番号坏2）
- 2 多重横走沈線文、縦位沈線文、鋸歯文、刻み目文の組み合わせ文——2 個体（個体番号甕102，同186）
- 3 斜行沈線文の組み合わせ——1 個体（個体番号甕36）

▶文様のある器形

甕1 類で文様のある器形は、「頸部器形2」が大部分である。「頸部器形1」では2 個体にしかみることができず、文様の種類も1-a（個体番号甕27）であり、文様の部位も頸部と胴部との境目に付される（個体番号甕77）。

▶2 類

計測が可能なものはつぎの15個体である。

個体番号甕9，個体番号甕16，個体番号甕17，個体番号甕18，個体番号甕19，個体番号甕20，個体番号甕21，個体番号甕22，個体番号甕23，個体番号甕25，個体番号甕26，個体番号甕57，個体番号甕118，個体番号甕152，個体番号甕154。

これらの甕類は、口径が17.0cm～21.0cm，器高が23.0cm～25.0cmの範囲内に5 個体（個体番号甕16，同18，同57，同152，同154），口径が21.0cm～25.0cm，器高が26.0cm～29.0cmの範囲内に5 個体（個体番号甕9，同17，同19，同20，同21），口径が21.0cm～26.0cm，器高が30.0cm～32.0cmの範囲内に5 個体（個体番号甕22，同23，同25，同26，同118）みられる。

さらに、破損品について識別が可能なものが22個体分（個体番号甕47，同48，同49，同

50, 同52, 同57, 同58, 同59, 同80, 同82, 同89, 同93, 同95, 同96, 同97, 同108, 同137, 同150, 同164, 同181, 同182, 同189)であり, 2類の甕の総数は37個体である。

甕2類の製作過程でロクロ調整をうけたものはみられず, すべて幅1cm～1.5cmの粘土紐の積み上げによる。粘土紐の接合状況は器内へと傾斜している。

▶器形の特徴

頸部と器高との関係をとらえることができる個体数は, 24個体である。

- 1 頸部が短く(器高の約6分の1強), 外反しながら口縁部へ移行するものは, 3個体(個体番号甕26, 同47, 同182)である。
- 2 頸部が直立あるいは内傾(器高の約3分の1～4分の1)し, 大きく外反しながら口縁部へ移行するものは, 17個体(個体番号甕9, 同16, 同17, 同18, 同19, 同20, 同21, 同22, 同23, 同25, 同48, 同49, 同50, 同52, 同57, 同58, 同59, 同82, 同118, 同152, 同154)である。

▶器面調整

観察が可能なものは, 30個体である。

器面調整は部位によって異なるが, 口唇部はヨコナデ, 頸部・胴部はハケ目, ヘラミガキ, あるいはその組み合わせである。

器内外面ともにハケ目調整が施されるものは, 8個体(個体番号甕9, 同17, 同19, 同21, 同49, 同80, 同82, 同152)である。

器内外面ともヘラミガキ調整が施されるものは, 14個体(個体番号甕18, 同20, 同22, 同23, 同25, 同26, 同50, 同58, 同59, 同89, 同93, 同96, 同154, 同164)ともしっかり多い。

そのほか器外面がハケ目調整で, 内面にヘラミガキ調整(個体番号甕52, 同57, 同181)やヨコナデ(個体番号甕16)が施されるものなどもみられる。

▶器面調整のハケ目やヘラミガキの方向

器外面では頸部, 胴部は縦位もしくは斜位, 頸部下半から胴部上半は横位もしくは斜位に, 器内面では口縁部から頸部は横位もしくは斜位, 胴部は縦位に施されるという傾向がみられる。

▶文様

文様が施される部位は, 口縁部から頸部にかけてがもっとも多い。観察が可能な個体は30個体分であり, そのうち文様がみられたものは25個体である。したがって, 甕2類では約70%に文様がみられたことになる。

▶文様の種類

- 1 横走沈線文——12個体
 - a 1～2本の横走沈線文——2個体(個体番号甕22, 同182)
 - b 多種横走沈線文——10個体(個体番号甕9, 同19, 同21, 同26, 同57, 同89, 同96, 同97, 同154, 同164)
- 2 多種横走沈線文, 縦・斜位沈線文, 鋸歯文, 刺突文, 刻み文の組み合わせ文——13個体
 - a 頸部に1本の横走沈線文を施し, 口唇部に刻み目をつけるもの(個体番号甕47)
 - b 頸部に多重走沈線文を施し, 口縁部と頸部・胴部の境(個体番号甕20)あるいは頸部に複数列の刺突文をつけるもの(個体番号甕48)
 - c 頸部に多重横走沈線文, 縦・斜位沈線文, 刺突文の組み合わせ文(個体番号甕17, 同50, 同52)を, あるいはさらに胴部上半に鋸歯文(個体番号甕18, 同25)をつけるもの
 - d 頸部に多重横走沈線文, 斜位沈線文の組み合わせ文(個体番号甕59, 同118, 同1

81) を、あるいは縦・斜位沈線文の組み合わせ文（個体番号甕49）をつけるもの

e 頸部に多重横走沈線文と鋸歯文を組み合わせたもの（個体番号甕189）

以上のように、甕2類には約7割に文様が施文されていた。文様は口縁部から胴部上半に限られ、特に頸部を横走沈線文で充填するという特色がみられた。

文様の種類には多重横走沈線文を基調とし、縦・斜沈線文、刺突文、刻み目文、鋸歯文などの組み合わせ文がみられた。

▶ 3類

計測が可能なものはつぎの17個体である。

個体番号甕3, 個体番号甕4, 個体番号甕5, 個体番号甕6, 個体番号甕7, 個体番号甕8, 個体番号甕10, 個体番号甕11, 個体番号甕12, 個体番号甕13, 個体番号甕14, 個体番号甕15, 個体番号甕88, 個体番号甕153, 個体番号甕155, 個体番号甕156, 個体番号甕169.

これらの甕類は、口径が11.0cm～16.0cm, 器高が11.0cm～15.0cmの範囲内に11個体（個体番号甕3, 同4, 同6, 同7, 同8, 同11, 同12, 同13, 同14, 同88, 同156）ともっとも多くみられ、それより小さいものが1個体（個体番号甕5）、大きいものが5個体（個体番号甕10, 同15, 同153, 同155, 同169）みられる。

さらに、破損品について識別が可能なものが14個体分（個体番号甕51, 同83, 同84, 同87, 同90, 同91, 同92, 同94, 同98, 同99, 同100, 同117, 同133, 同180）あり、3類の甕の総数は31個体である。

3類の製作過程でロクロ調整をうけたものは4個体（個体番号甕8, 同14, 同88, 同90）で12.9%である。その他は幅1cm～1.5cmの粘土紐の積み上げによる。粘土紐の接合状況は器内面へと傾斜している。

▶ 器形の特徴

まず、ロクロ調整の4個体にはつぎの2種類がみられる。

- 1 頸部と胴部の境が不明瞭で、頸部が直立ないし外傾し、外反する口縁部へ移行するもの（個体番号甕14, 同90）。
- 2 頸部と胴部の境が不明瞭で、頸部が強くしまる。口縁部は短く外反する。最大径は胴部にあり、大きく膨らむ（個体番号甕8, 同88）。

つぎに、ロクロ調整のみられないものにはつぎの2種類がみられる。

- 1 口縁部から頸部までの長さが、器高の約3分の1を占めるもので8個体（個体番号甕3, 同4, 同5, 同10, 同11, 同12, 同153, 同156）ある。
- 2 口縁部から頸部までの長さが、器高の約4分の1を占めるもので5個体（個体番号甕6, 同13, 同15, 同155, 同169）ある。

1, 2いずれも頸部は直立、内傾、外傾し口縁部へ大きく外反する。また、個体番号甕7は「ロクロー1」と形態が似ており、個体番号甕10は二重口縁部をもつ器形である。

▶ 器面調整

観察が可能なものは、29個体である。

まず、ロクロ調整の4個体について、風化の著しい個体番号甕8以外はつぎのようになる。

個体番号甕14は内面をヘラミガキ、個体番号甕88は内面をヘラケズリによって再調整している。しかし、個体番号甕90は再調整がみられない。

つぎに、ロクロ調整のみられないものについて、観察が可能なものは25個体である。

器面調整は部位によって異なるが、口縁部はヨコナデ、頸部・胴部はハケ目、ヘラミガキ、あるいはその組み合わせである。

器内外面ともにハケ目調整が施されるものは、7個体（個体番号甕12, 同13, 同83, 同

91, 同92, 同94, 同98), 器内外面ともにヘラミガキ調整が施されるものは, 6 個体 (個体番号甕11, 同51, 同84, 同87, 同100, 同180) とほぼ半々である。器外面がハケ目・ヘラミガキ調整で, 内面にヘラミガキ調整が施されるものは, 3 個体 (個体番号甕4, 同5, 同155) みられる。器外面がハケ目調整で, 内面にヘラミガキ調整に先だってハケ目調整が施されるもの (個体番号甕6, 同10, 同153, 同156) と内外面がヘラミガキ調整に先だってハケ目調整が施されるもの (個体番号甕7, 同15, 同99, 同169) はともに4 個体みられる。また, 器外面にハケ目調整が施され, 内面にヨコナデ調整が施されるものは, 1 個体 (個体番号甕3) みられる。

以上のように, 甕3 類の器面調整の約7 割が, 器内外のいずれかにヘラミガキ調整を施す, という特徴を示している。

▶器面調整のハケ目やヘラミガキの方向

器外面では頸部, 胴部は縦位もしくは斜位, 頸部下半から胴部上半は横位もしくは斜位に, 器内面では口縁部から頸部は横位もしくは斜位, 胴部は縦位に施されるという傾向がみられる。

▶文様

文様が施される部位は, 口縁部から頸部にかけてであるが, 胴部に施文されるもの (個体番号甕13) が1 個体だけみられる。

観察が可能な個体は23個体分であり, そのうち文様がみられたものは16個体である。したがって, 甕3 類では約65%に文様がみられたことになる。

▶文様の種類

- 1 多重横走沈線文——5 個体 (個体番号甕4, 同11, 同98, 同117, 同155)
- 2 多重横走沈線文, 縦・斜位沈線文, 鋸歯文, 刺突文, 刻み目文の組み合わせ文——7 個体
 - a 多重横走沈線文と口唇部刻み目文の組み合わせ文——2 個体 (個体番号甕3, 同10)
 - b 多重横走沈線文と口唇部および頸部刻み目文の組み合わせ文——2 個体 (個体番号甕15, 同153)
 - c 多重横走沈線文, 縦・斜位沈線文, 刻み目文の組み合わせ文——2 個体 (個体番号甕84, 同99)
 - d 多重横走沈線文と口唇部刻み目文, 鋸歯文の組み合わせ文——1 個体 (個体番号甕100)
- 3 斜行沈線文の組み合わせ文——2 個体 (個体番号甕12, 同51)
- 4 斜行沈線文と縦位沈線文の組み合わせ文——1 個体 (個体番号甕156)
- 5 多重横走沈線文のほか胴部に斜行沈線文が施文されるもの——1 個体 (個体番号甕13)

③ その他の土器

大形の鉢型の土器が1 個体, 3 号竪穴住居のカマド煙道底面から出土した。

法量は口径が36.8cm, 底径が8.5cm, 器高が14.3cmで, 器厚は1.4cmである。口高比が2.6, 外傾度は57度である。

体部の形状は, 直線的に外傾し口縁部に移行する。土器の成形は, 幅約1.5cmの粘土紐の積み上げによる。器面調整は, 器内外面ともにヘラミガキ調整で, 内面は黒色処理が施されている。

底部は厚く(1.5cm~2.3cm), 高台様の平底で, ヘラミガキ調整が施されている。

以上のような特徴をもつ土器は, 大形の鉢とみられる一方で, 蓋としての形態をもそなえている。

〔2〕 須恵器・「赤焼」土器

坏類と瓶類にわけて説明する。

① 坏類

須恵器の坏類は、7 個体（個体番号須恵器 1，同 3，同 6，同 7，同 10，同 11，同 12）出土した。

法量は口径が 12.7cm（個体番号須恵器 3）～14.9cm（個体番号須恵器 3）～14.9cm（個体番号須恵器 11），底径が 4.6cm（個体番号須恵器 1）～6.4cm（個体番号須恵器 7），器高が 4.6cm（個体番号須恵器 1，同 10）～6.0cm 前後で，口高比が 2.1～2.8 となり外傾度は 22 度～39 度である。

体部の形状は，①内湾しながら外傾するもの（個体番号須恵器 7，同 10，同 11）が 3 個体②内湾しながら外傾し，口縁部が若干外反するもの（個体番号須恵器 1，同 6，同 12）が 3 個体③直線的に外傾するもの（個体番号須恵器 3）が 1 個体みられる。

器面調整はロクロによる調整以外に再調整は施されない。

底部は回転糸切り底で，体部からスムーズに移行するもの（個体番号須恵器 1，同 3，同 10）が 3 個体，低い台状を呈するもの（個体番号須恵器 6，同 7）が 2 個体とほぼ半々みられる。

「赤焼」土器としたものは，個体番号須恵器 2，同 4，同 5，同 9 の 4 個体分である。

法量は口径が 11.4cm（個体番号須恵器 4）～14.8cm（個体番号須恵器 5），底径が 5.4cm（個体番号須恵器 4）～6.2cm（個体番号須恵器 5，同 9），器高が 3.7cm（個体番号須恵器 9）～6.7cm（個体番号須恵器 4）で，口高比が 1.7～3.6 となり外傾度は 18 度～29 度である。

体部の形状は，①内湾しながら外傾するもの（個体番号須恵器 4，同 9）が 2 個体，②内湾しながら外傾し，口縁部が若干外反するもの（個体番号須恵器 2，同 15）が 2 個体みられる。

器面調整はロクロによる調整以外に再調整は施されない。

底部は回転糸切り底で，体部からスムーズに移行するもの（個体番号須恵器 5，同 9）が 2 個体，低い台状を呈するもの（個体番号須恵器 4）が 1 個体みられる。

② 瓶

合計 5 個体分みられたが，個体番号須恵器 8 について述べる。

▶ 出土状況

2 号竪穴住居の覆土中，炭化物マウンド，炭化物 50，同 52，焼土 57，同 62，同 64，同 65 とかなり広範囲に破片が分布している。

▶ 土器の特徴

頸部が胴部との接合部分で破損している。

土器の肩部は比較的張りが強く，なだらかに底部へ下降する。底部幅は広く，頸部幅とほぼ同じで端が尖る低い高台が付されている。器厚は一定せず，肩部から胴部上半にかけて厚く（約 1cm），胴部下半から薄くなる（約 3～4mm）。底部も中央部分が周辺部分より厚い。

この土器は，ロクロによる調整をうけているが，その後器外面は肩部から胴部下半にかけて縦・斜位右下りのハケ目調整が施されている。また，器内面では頸部と肩部の接合部分に縦位の，底部付近に斜位のハケ目調整を施している。

なお，現存の法量は器高が 20.7cm，頸部径が 10.2cm，肩部径（最大径）20.8cm，底部径が 10.8cm である。

④ 土器の小括

① 土器の出土および分布状況

① 出土状況

第2文化層の土器類は、つぎのような出土状況を示した。

① 土器の使用時あるいは意図的な配置を示しているもの

使用時にかなり近い状態を示している例に、1号竪穴住居のカマド焚口部に据え付けられた中形甕と支脚用小形甕がある。使用後の状態を示している例に、1号土壌内から倒立で出土した2個体の大形甕がある。

② 土器の再利用の状態を示しているもの

A 土器自体を再利用したもの

1号竪穴住居のカマド焚口部に支脚として埋め込まれていた小形甕がある。

B 土器の破片が使用された例

a 煮沸用土器の固定材としての使用

1号竪穴住居のカマドの袖に埋め込まれ、煮沸用土器の固定材として使用されていた大形甕の破片

b カマドの補強材としての使用

3基の大形住居のカマドにみられた。なかでも2号竪穴住居で破損した甕の破片のうち1点だけが、他の複数の土器の破片とともに5号竪穴住居のカマド煙道底面に敷かれていた。

c 土器片の敷設

1号土壌内で、土器片の敷設された面がみられた。

③ 土器の廃棄の状態を示しているもの

第2文化層の土器は、ある個体の破片が竪穴住居内から、残りの破片が他の遺構あるいは遺構外から出土する場合が圧倒的に多い。この大半は竪穴住居内での破損品を、竪穴住居外に持ち出し廃棄したことを示すもので、竪穴住居内の破片は廃棄もれ、と考えられる。ここでは3基の大形住居を中心に、土器片の分布をもとに廃棄の状況を見る。

② 分布状況

① 2号竪穴住居からは38個体分の土器（土師器坏7個分、土師器甕30個体分、須恵器瓶1個体分）の破片が出土した。分布はつぎの3地域にみられる。

a 3号土壌、焼土41、同43、同44、炭化物52、焼土59、同62など住居に近接した地域

b 炭化物マウンドを中心に焼土47、同49、炭化物50、焼土51、同60など住居の北東側で、かけ離れた地域

c 3号竪穴住居の窪地、炭化物4、焼土13、炭化物30、焼土34、同37など住居の東南側で、かけ離れた地域と炭化物70など北側で、かけ離れた地域

この3地域のうち、分布の主体はa、bにある。これは、2号竪穴住居の人々はもっぱら住居の周りや、炭化物マウンドを中心とする地域を廃棄の場として活用し、住居から大きくかけ離れた地域へはほとんど廃棄しなかった、ということを物語っている。

② 3号竪穴住居からは7個体分の土器（土師器坏1個体分、土師器甕5個体分、すり鉢形土器1個体分）の破片が出土した。分布はつぎの3地域にみられる。

- a 焼土22, 同24など住居に近接した地域
- b 1号土壇周辺の焼土・炭化物, 4号土壇内など住居の東側で, かけ離れた地域
- c 炭化物52, 炭化物マウンドなど住居の北東側で, かけ離れた地域

この3地域のうち, 分布の主体はa, bにある。これは, 3号竪穴住居の人々はもっぱら住居の周りや東側のかけ離れた地域を廃棄の場として活用し, 炭化物マウンドなど住居から大きくかけ離れた地域へはほとんど廃棄しなかった, ということ を物語っている。

③ 5号竪穴住居からは27個体分の土器(土師器坏10個体分, 土師器甕17個体分, 須恵器坏1個体分)の破片が出土した。分布はつぎの3地域にみられる。

- a 1号土壇内およびその周辺の焼土・炭化物, 炭化物28など住居に接近した地域
- b 5号土壇, 6号土壇内など住居の南西側で, かけ離れた地域
- c 炭化物52, 炭化物マウンドなど住居の西側で, かけ離れた地域

この3地域のうち, 分布の主体はa, bにある。これは, 5号竪穴住居の人々はもっぱら住居の周りや南西側のかけ離れた地域を廃棄の場として活用し, 炭化物マウンドなど住居から大きくかけ離れた地域へはほとんど廃棄しなかった, ということ を物語っている。

② 種類別出土量

識別された個体総数は, 313個体である。

土師器(土師質土器)が297個体, 須恵器が12個体, 「赤焼」土器が4個体である。個体総数に占める割合では, 土師器(土師質土器)が94.9%と圧倒的に多く, 須恵器が3.8%, 「赤焼」土器が1.3%と少ない。

③ 器種構成

土師器(土師質土器)には坏類, 甕類, その他の土器の3種類がみられる。量的には坏類が113個体(38.0%), 甕類が183個体(61.6%), その他が1個体(0.3%)となり, 甕類が坏類を大きく上回っている。

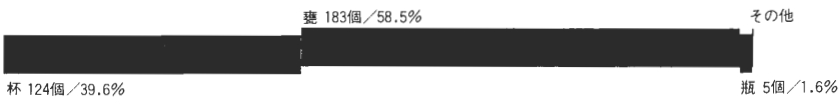
須恵器には坏類と瓶類の2種類がみられる。出土量は少ないが, 坏類が7個体, 瓶類が5個体で坏類がやや多い。また, 「赤焼」土器には坏類が4個体みられるだけである。

土器の形態別では, 坏類が124個体(39.6%), 甕類が183個体(58.5%), 瓶類が5個体(1.6%), その他が1個体(0.3%)となり, 煮沸形態の土器(土師器あるいは土師質土器の甕類)が供膳形態の土器(土師器, 須恵器, 「赤焼」土器の坏類および須恵器の瓶)を上回っている。

PL. Ⅱ-13 土器種類別出土量(313個体)



PL. Ⅱ-14 土器形態別出土量(313個体)



④ 土師器 坏類の特徴

個体総数113個体のうち、形態不明の7個体を除く106個体について、製作手法をもとに2種類にわけられた。

それによると、1類(ロクロによる調整のみられないもの)が45個体(42.5%)、2類(ロクロによる調整のみられるもの)が61個体(57.5%)で、2類が1類を上回る。

① 坏1類の特徴

幅1cm～1.5cmの粘土紐を積み重ねて成形し、器内外面ともヘラミガキによって調整している。しかし、器面にはハケ目痕を残しているものもみられるから、ヘラミガキの前かあるいは並行してハケ目調整も行なわれたことをうかがわせる。内面は、ほとんどのものが黒色処理されている。

坏1類は体部に単数の横走沈線文や段などがみられるもの(A類)が2個体(4.4%)、体部に横走沈線文や段などがみられないもの(B類)が12個体(26.7%)、口縁部に横走沈線文や段を施すもの(C類)が20個体(44.4%)、不明11個体(24.4%)となり、C類がもっとも多くみられ、以下B類、A類の順となる。

このように坏1類は、C類を主体にしてB類が組み合わせとなり、非常に少ないがA類もみられるところに特徴がある。

② 坏2類の特徴

ロクロによる調整の後、体部や底部に再調整を施すもの(A類)が13個体(21.3%)と再調整を施さないもの(B類)が27個体(44.3%)で、21個体(34.4%)が不明である。観察が可能な個体では、B類がA類の2倍強にのぼる。

A、B類ともほとんどの土器は、ロクロによる調整以前に、幅1cm～1.5cmの粘土紐を積み重ねて成形されている。

また観察が可能な資料にもとづけば、ロクロからの底部切り離しは、回転糸切り法による。

A類の器面再調整は、ヘラミガキが基調となっている。内面の黒色処理はA、B類ともほとんどの個体に施されている。

⑤ 土師器(土師質)甕の特徴

個体総数183個体のうち、形態不明の52個体を除く131個体について、口径と器高との相関関係をもとに3種類にわけられた。

ここで仮りに1類を大形甕、2類を中形甕、3類を小形甕とするなら、大形甕が63個体(48.1%)、中形甕が37個体(28.2%)、小形甕が31個体(23.7%)となり、大形甕が全体のおよそ半分近くを占めている。

甕の製作過程でロクロ調整をうけたものは、小形甕の中に4個体(2.2%)みられただけで、それ以外のものは粘土紐の積み重ねによって形成されていた。粘土紐の幅は1cm～1.5cmで、その接合縦断面は器内面へ傾斜するのが一般的である。

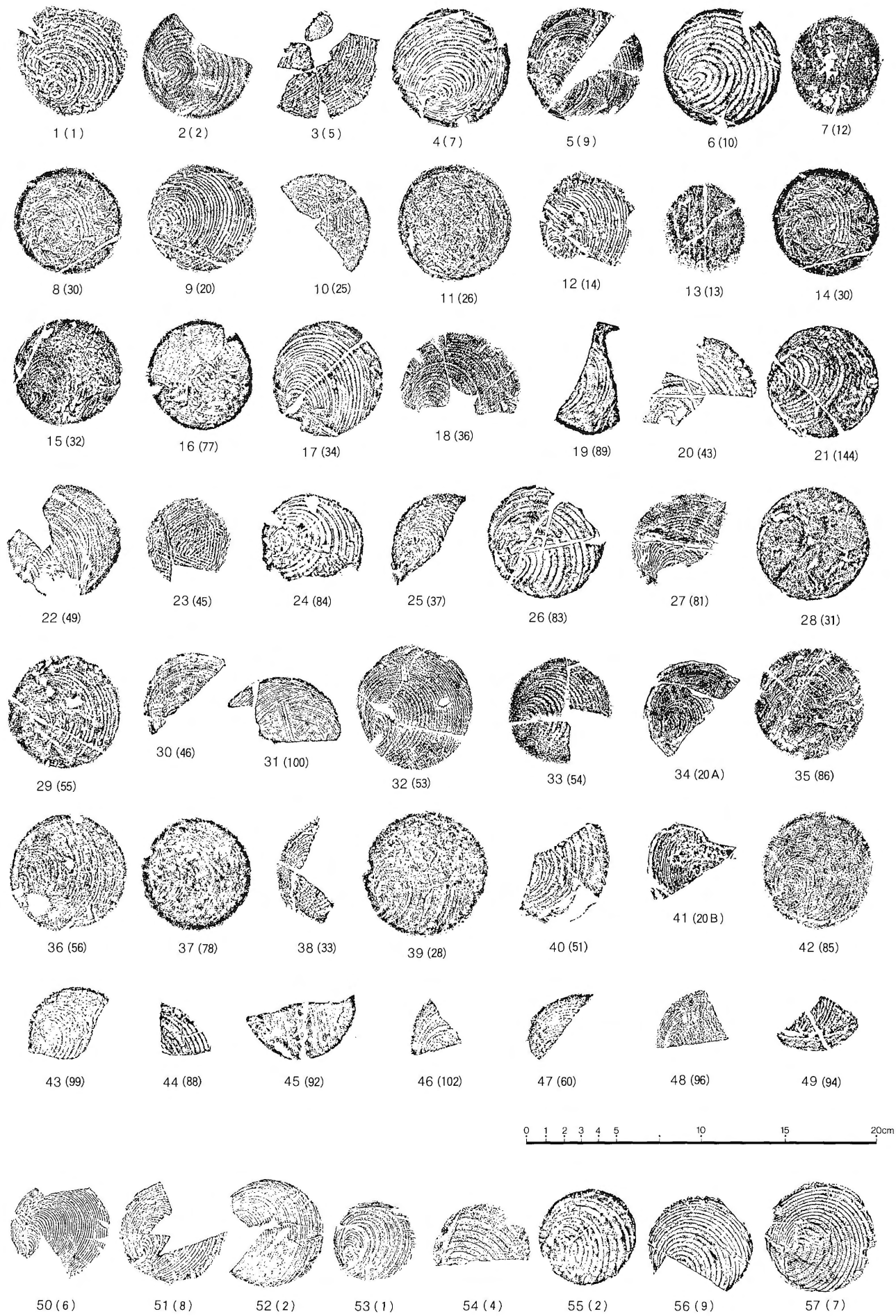
器形の特徴は、器高に対して頸部の占める割合と、頸部から口縁部までの形状によくあらわれている。

まず、頸部は各類とも長いものが多くみられるが、とくに大形甕よりも中形甕や小形甕にその傾向が大きい。

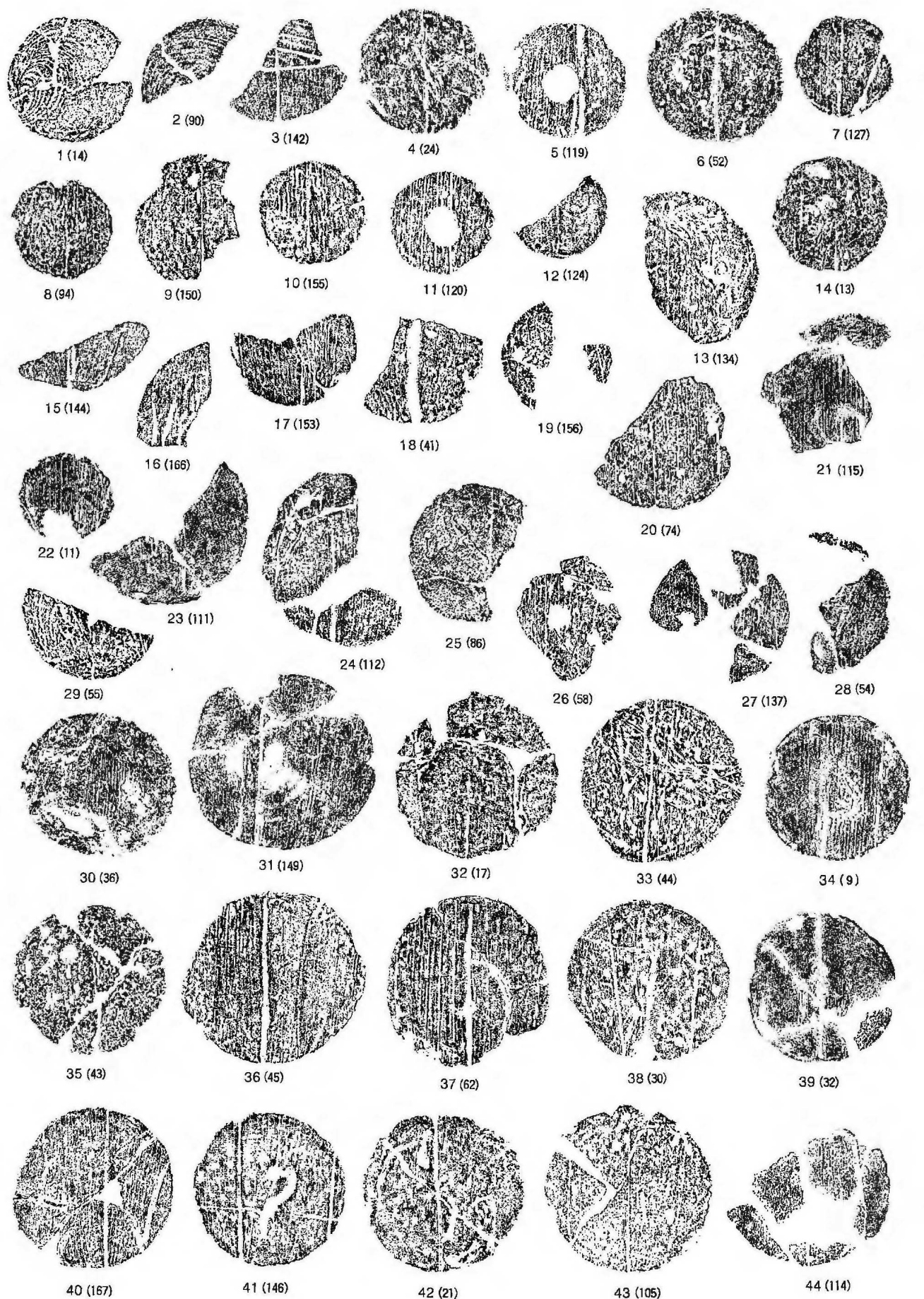
頸部から口縁部までの形状は、頸部が短い甕では外反し、頸部が長い甕では直立あるいは内傾し大きく外反しながら口縁部へ移行するものが多い、という傾向がうかがえる。

底部は平で、半数以上のものにササや木の葉の圧痕がみられる。

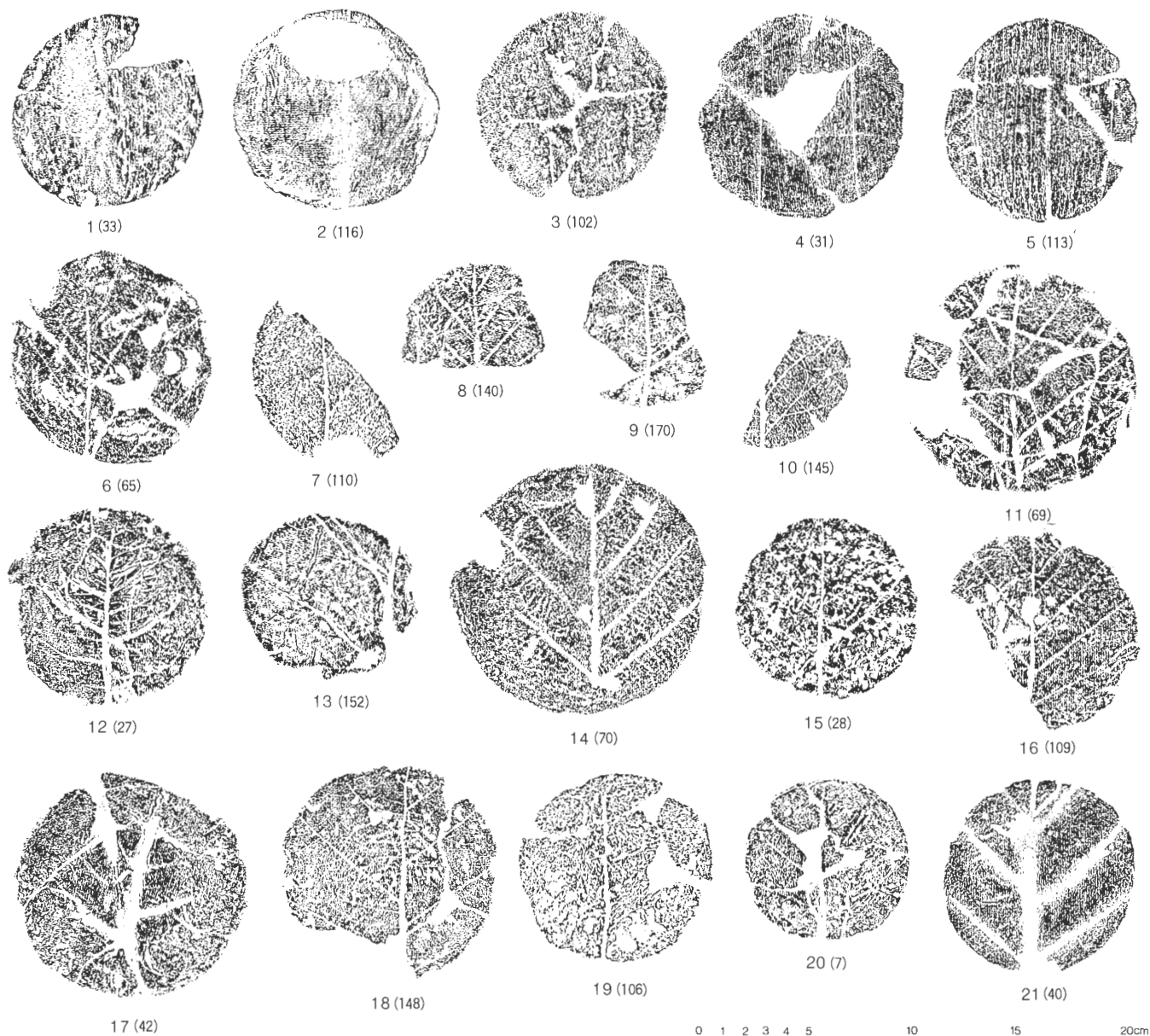
PL. Ⅲ-15 土師器坏(1)～(49),須恵器(50)～(57)の底部拓影〔()内は個体番号を示す〕



PL. Ⅲ-16 甕の底部拓影 ① [()内番号は個体番号を示す]



PL. Ⅰ-17 甕の底部拓影 ② [()内番号は個体番号を示す]



器面調整は、口縁部がヨコナデ、頸部や胴部がハケ目かヘラミガキ、あるいはそれらの併用という手法が一般的である。とくに胴部についてみると、大形甕では器内外面ともにハケ目調整というものが24個体みられ、ヘラミガキ調整3個体を大きく上回っている。中形甕ではヘラミガキ調整が14個体で、ハケ目調整8個体をやや上回っている。小形甕ではヘラミガキ調整が6個体、ハケ目調整7個体と両手法の使いわけは接近しているが、残りの個体は両手法を併用している。

以上のように、大形甕ではハケ目調整が主体を占めるのに対し、中形甕や小形甕ではヘラミガキ調整を軸にハケ目調整と併用するところに特徴がある。

文様が施された甕は、観察が可能な100個体のうち66個体(66%)にみられた。そのうち、大形甕が25個体(37.9%)、中形甕が25個体(37.9%)、小形甕が16個体(24.2%)となり、文様が施されるのは大形甕と中形甕に多くみられる。

施文の部位は口縁部から頸部にかけてであるが、胴部施文の例が小形甕に1個体だけがみられた。

文様は沈線文、とりわけ多重横走沈線文が主体を占める。沈線文にはほかに1～2条の

横走沈線文、縦位沈線文、斜位沈線文、鋸歯文などがある。

文様はほかに刻み目文、刺突文などもみられる。

これらの文様は単独か、あるいは複数が組み合わせとなって施文されている。大形甕では沈線文、とりわけ多重横走沈線文が17個体にみられ他の文様と組み合わせとなるものは2個体にしかみられないのに対し、中形甕、小形甕では多重横走沈線文を基調に種類が増加する傾向にある。

〔6〕 土師器、「赤焼」土器

土師器坏類7個体、瓶類5個体、「赤焼」土器坏類4個体については、第Ⅵ章3・3・(2)に示した。

そのうち、坏類のロクロからの底部切り離しには、回転糸切り法によることが製作上もっとも大きな特徴のひとつであること、を指摘するにとどめる。

〔7〕 土器類の編年的位置

他の遺物同様土器についても、遺跡での出土状況や共伴遺物等から、直接実年代を知り得るような手掛りは発見されていない。

また、この種の土器を出土する北海道内の他の遺跡においても、直接年代を知り得るような手掛りが発見されたという情報もない。

北海道では土師器が東北地方からもたらされ、展開する時代を擦文時代という。その開始期の土師器は、坏類、甕類、壺類、甗などが組成をなしており、坏類の製作にロクロ調整がみられないことなどが大きな特徴となっている。このような土器の組成、製作技法などから判断して、擦文時代は西暦8世紀代に開始されたと考えられている。

それでは、サクシュコトニ川遺跡第2文化層のように、土師器の坏類の製作にロクロ調整が施される土器群は擦文時代の中でどのあたりに位置づけられるだろうか。

まず、擦文時代の遺跡で層位的上下関係あるいは遺構の切り合い等によって、開始期の土師器と新旧関係が把握された例を示そう。

千歳市末広遺跡では堅穴住居跡88基、土坑墓1基、製鉄遺構1基を含む擦文時代の集落が発掘調査された。そのうち、堅穴住居が直接切り合っていたり、新たに堅穴住居を構築する際に、隣接する古い堅穴内に排土を投棄したりして、その新旧がわかった例が20数組あった(大谷・田村 1981, 1982 P. 28)。

そのなかで例えば、「I H14」(旧)→「I H15」(新)という遺構間の新旧関係は、堅穴住居の床面やカマドから出土したロクロ調整のみられない土師器坏の土器群がロクロ調整による土師器坏の土器群より時間的に先行するものである、という事実を示すものである。

末広遺跡でのこのような土器群の新旧関係が、擦文時代の土器編年の大筋をも示しているとすれば、それは東北地方での土師器の変遷とつぎのような理由で符合し、矛盾がない。

東北地方の土師器の変遷は、宮城県多賀城跡出土の土器類を中心とした最近の研究によればつぎのような傾向を示す。

土器は土師器、須恵器、須恵系土器(「赤焼」土器)の3種類が主体を占め、土師器では製作過程でロクロを使用しない土器群からすべての坏類がロクロによって製作される土器群へ、須恵器では坏類のロクロから切り離しがへら切りを主体とするものから糸切りを主体とするものへ、須恵系土器土器では坏類が比較的大型の坏類だけで構成されていたものからこれに小型の坏類が加わる組成のものへ、と変遷したことが確かめられている。

さらに、土師器の坏類がすべてロクロによって製作される土器群(C群土器)は、西暦9世紀の初頭からであるという年代観が示されている(進藤ほか 1982 pp.388~393)。

一方、擦文時代のロクロ調整のみられない土師器坏の土器群は3型式あるいはⅢ期に分

類されており、そのうちもっとも新しい土器群は西暦9世紀に入ってからのものである、とみられている(斎藤 1967, 横山 1984)。したがって、北海道でロクロ調整の土師器坏が使用されるのは、東北地方より1型式あるいは1期分遅れてからということになる。

それでは、サクシュコトニ川遺跡第2文化層の土器群とロクロ調整のみられない土師器坏の土器群のうち、もっとも新しい土器群との関係がどうであるか、を北大構内のサークル会館遺跡^{*}(吉崎・岡田編 1981 P. 11~35)との比較を通してみよう。

サクシュコトニ川、サークル会館両遺跡から出土した土器の種類および形態別比較グラフを示す。

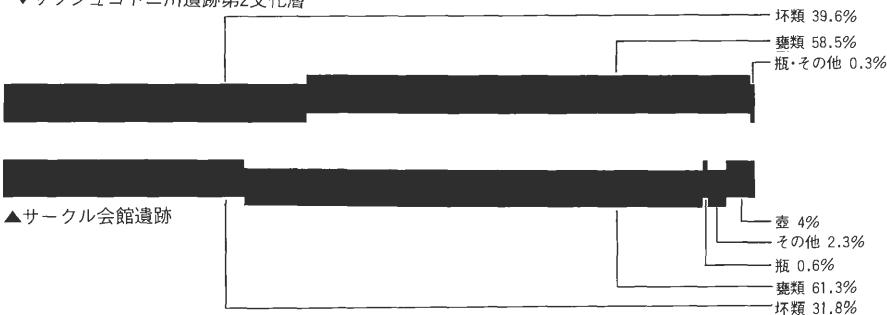
PL. Ⅱ-18 土器の種類別組成比

▼サクシュコトニ川遺跡第2文化層



PL. Ⅱ-19 土器の形態別組成比

▼サクシュコトニ川遺跡第2文化層



それによると、種類別ではいずれの遺跡でも土師器（土師質土器）が94～95%以上を占め、須恵器などより圧倒的に多いことが確かめられた。一方、サクシュコトニ川遺跡の土器組成に「赤焼」土器がみられることが特徴的である。

また、形態別ではいずれの遺跡でも甕がおおよそ60%を占め、煮沸形態の土器が供膳形態の土器を上回る、という共通した特徴を示している。

主な器種別では、つぎのような特徴を示している。

▶土師器坏類

坏類の製作で、サクシュコトニ川遺跡の土器はロクロ調整のみられるものとみられないものが相伴していたが、サークル会館遺跡の土器には全くロクロ調整がみられなかった。

ロクロ調整がみられない土器のうち、サークル会館遺跡で主体を占めるのは体部に横走沈線文や段を施す器形のものであるのに対し、この種の器形の土器はサクシュコトニ川遺跡ではわずかに2個体(4.4%)しかみられなかった。また、体部に横走沈線文や段などを施さない器形のはサークル会館遺跡ではわずかに2個体(18.2%)しかみられないのに対し、サクシュコトニ川遺跡では12個体(26.7%)とやや多くを占めていた。

さらに、両遺跡の坏類のもっとも大きな違いに、サクシュコトニ川遺跡の坏類の中にロクロ調整技術がみられることに加えて、ロクロ調整がみられないもので口縁部直下に横走沈線文や段を施す器形が出現することをあげることができる。

* 課外活動共用施設遺跡の俗称である

器面調整はいずれもヘラミガキを基調とし、内面には黒色処理を施す、という共通性が見られる。

▶須恵器坏類

サークル会館遺跡の坏類(2.9%)、サクシュコトニ川遺跡の坏類(3.9%)とも土器組成に占める割合が著しく低い、という共通した特徴を示している。

しかし、ロクロから底部を切り離す製作技法が、サークル会館遺跡の坏類では回転ヘラ切り法であるのに対し、サクシュコトニ川遺跡の坏類では回転糸切り法である、という大きな違いをみることができる。

▶土師器(土師質土器)甕類

サクシュコトニ川遺跡の甕類は、大形甕が甕類全体のおよそ半数を占めていたのに対し、サークル会館遺跡の甕類は大形甕に相当するものがみられず、すべて中・小形甕類によって占められていたという違いがある。

製作はいずれも幅およそ1cm～1.5cmの粘土紐の積み重ね法による、という共通性が見られる。しかし、サクシュコトニ川遺跡の甕類にわずか4個体(2.2%)だけだが、ロクロ調整のものが伴出していることは注目される。

器面調整では顕著な違いはみられない。ただサークル会館遺跡の中・小形甕類にハケ目調整が多用される、という傾向がうかがえる。また、底外面の二次調整はサークル会館遺跡の甕の方がいきとどいているようである。というのは、底外面にササや木の葉圧痕がみられるものが、サクシュコトニ川遺跡の甕類ではおよそ半数にのぼるのに対し、サークル会館遺跡の甕類ではわずか4例しかない、という違いがあるからである。

文様がみられる甕は、サークル会館遺跡ではわずか5%強と少ないのに対し、サクシュコトニ川遺跡ではおよそ12倍の66%にそれがみられる、という大きな違いがある。その結果、種類も沈線文と口縁部刻み目文しかみられないサークル会館遺跡の甕類に比べ、サクシュコトニ川遺跡の甕類では多重沈線文を基調に変化に富んだ文様構成がみられるようになるわけである。

以上のような比較にもとづけば、サクシュコトニ川遺跡第2文化層の土器群をサークル会館遺跡の土器群、つまりロクロ調整のみられない土師器坏の土器群のうち、もっとも新しい土器群の直後に位置付けることに何ら矛盾はない。そして、ロクロ調整のみられない土師器坏の土器群の段階を「擦文時代前期」とするなら、サクシュコトニ川遺跡第2文化層の土器群からを「擦文時代中期」とし、その開始を西暦9世紀中葉に求めることができる。

また第Ⅳ章で述べたように、サクシュコトニ川遺跡での層位は、第2文化層が第1文化層より古い時期の所産である、という事実を示している。ただ、第2文化層のような土器群が直接第1文化層のような土器群へ至るのか、あるいはその間にいくつかの異なった土器群が介在するのかなどの問題は、現状では判断することができず、今後の課題として残る。

(横山英介)

《引用文献(アルファベット順)》

- ▶大谷敏三・田村俊之 1981, 1982「末広遺跡における考古学的調査(上),(下)」『千歳市文化財調査報告書Ⅶ, Ⅷ』千歳市教育委員会
- ▶斎藤傑 1967「擦文文化初頭の問題」『古代文化』第19巻第5号 pp. 77～97
- ▶進藤秋輝ほか 1982『多賀城跡—政庁跡本文編—』宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所
- ▶横山英介 1984「北海道におけるロクロ使用以前の土師器—擦文時代前期の設定—」『考古学雑誌』第70巻第1号 pp. 52～75
- ▶吉崎昌一・岡田淳子編『1981北大構内の遺跡1』北海道大学

VI-4

〔土製品類〕

土製品類には、支脚、フイゴの羽口、紡錘車、玉などがみられた。

① 支脚

総数は7個体で、完形品は1個体（個体番号支脚1）である。

▶分布

- 個体番号支脚1 5号竪穴住居の床面(10-05〔21〕グリッド)と3号竪穴住居の覆土中(10-13グリッド)から出土した。
- 個体番号支脚2 5号竪穴住居の床面、1号土壌内、6号土壌内に破片が分布する。これは、5号竪穴住居で使用、破損したものの破片の一部を、個体番号甕40などの破片とともに1号土壌の中に敷設さらに他の破片を6号土壌の③層に廃棄したものである。
- 個体番号支脚3 焼土43に分布する。これは焼土43のピット内に固定して使用、破損したものである。
- 個体番号支脚4 5号竪穴住居の床面と1号土壌周辺の焼土・炭化物に破片が分布する。これは5号竪穴住居内で破損したものを1号土壌周辺の焼土・炭化物に廃棄したことを意味している。
- 個体番号支脚5 焼土22(08-11グリッド)から破片が出土した。
- 個体番号支脚6 2号竪穴住居のカマド焚口と炭化物52に破片がみられた。これは2号竪穴住居のカマド焚口に固定されて使用、破損後破片が炭化物52へ廃棄されたものである。
- 個体番号支脚7 焼土65(26-15グリッド)から破片が出土した。

▶用途

例として、焼土43でピット（個体番号支脚3）に、あるいは2号竪穴住居のカマド焚口（個体番号支脚6）に支脚が埋め込まれていたことをあげることができる。

▶形態・製作

円筒状で1対の透しが設けられ、天井が粘土板で封じられるもの（個体番号支脚1、同2、同4、同5、同6）が5点、天井が封じられないもの（個体番号支脚3、同7）が2点みられる。大きさは、最も大きいもの（個体番号支脚2）で器高が16.7cm、天井径8.2cm、脚間が11.6cmである。透しの高さは、器高の2／3弱のもの（個体番号支脚1、同4、同5、同6）と、1／3弱と小さいもの（個体番号支脚2、同3）との2種がある。製作は、いずれも幅1.5cm～2cm弱の粘土紐の積み上げによる。粘土紐の重なりは、器外側へ傾斜する。器面の整形は内面に明瞭に残されており、横位のハケ目調整である。

小括

a 形は円筒形で天井板のあるものとないものの2種類があり、いずれも対になる透しが切りこまれる。

b 製作は、幅1.5～2 cmの粘土紐を7～8段を積み上げたものである。器面はハケ目調整で、特に内面に顕著に残っている。

c 出土状況で支脚の用途を示すものは2個所でみられた（個体番号支脚3，同6）。それらはいずれも地面を掘り込んで固定（その場合支脚6によると、透しは焚口―煙道を結ぶ線とおよそ90度の向きを示している）し、煮沸用の器台として用いられていたことを示している。そのため二次的に過熱され、破損したものが多く、他の遺物とともに廃棄の場から出土した。

② 羽口

土師質で円筒状をなすもので、2点出土した。いずれも破損品である。

個体番号羽口1 先端部の小破片。直径6.0cm，孔の径は約4 cmである。先端は強い火熱をうけて脆く、黄赤色に変色している。製作法や器面調整不明である。

出土位置は、5号竪穴住居の覆土中(10-05〔12〕グリッド)で、小破片が接合した。

個体番号羽口2 先端部の破片。直径は約8 cm，孔の径約5 cmで大型品である。この部分の破片には二次的に火熱されたようすがみられない。器面は外面が縦、斜めのナデ調整が施されている。口唇は器内外面にヨコナデ調整がみられる。孔内面は縦の条痕がみられ、芯に粘土を巻きつけ、ナデ調整で成形し、芯を引き抜いて焼成したことを示している。

出土位置は、5号竪穴住居の覆土中(10-05〔02，03〕グリッド)である。

③ 紡錘車

出土総数は、14点で完成品は3点（個体番号紡錘車2，同3，同4）である。

▶出土状況

- ① 住居に伴うもの―2点（個体番号紡錘車3，4）
- ② 土壌に伴うもの―1点（個体番号紡錘車2）
- ③ 炭化物マウンドと焼土43に破片がまたがるもの―1点（個体番号紡錘車9）
- ④ 炭化物52―2点（個体番号紡錘車6，同10），炭化物マウンド―3点（個体番号紡錘車8，同9，同13）
- ⑤ 遺構外出土―6点（個体番号紡錘車1，同5，同7，同11，同12，同14）

▶形態

一面が平坦で、他面は周縁部以外へこむ、いわゆる紡錘形である。中央には芯棒を通す小孔（焼成前）がみられる。

▶大きさ・重さ

完形品3点にもとづけば、大きさは6.6～5 cm(最大径)、厚さ2.4～1.5 cmで2 cm前後のものが多い。重さは、44 g～100 gである。

▶整形・文様

器面は表裏、側面ともにヘラミガキによって整形されている。文様は2点（個体番号紡

錘車 6 は放射状文，個体番号紡錘車 8 は側縁に鋸歯状文）にみられる．

④ 土製玉

ここでいう土製玉とは，土師質で円柱状をなし，短軸方向に貫通孔を有するものである．
17点出土しており，14点が完形品である．

▶出土状況

- ① 炭化物マウンドから出土したものは15点（個体番号玉 1，同 2，同 3，同 4，同 5，同 6，同 7，同 8，同 9，同10，同11，同14，同15，同16，同17）
 - ② 炭化物50から出土したもの 1 点（個体番号玉12）
 - ③ 炭化物52から出土したもの 1 点（個体番号玉13）
- 以上のように，炭化物マウンドでの在り方は，小マウンド A，B 双方から土器片などと共に出土した．

▶形態・大きさなど

完形品の形態は，A：縦断面が側辺に膨らみをもち，方形に近いもの（個体番号玉 1，同 7，同 8，同 9，同10，同12，同13，同15，同16，同17）が10点，B：円形に近いもの（個体番号玉 2，同 3，同 4，同 5，同 6）が 5 点，C：長方形に近いもの（個体番号玉 11）が 1 点で，Aが多い．

Tab. Ⅰ-6 土製玉計測表

No.	形	最大径 (cm)	高さ (cm)	貫通孔直径 (cm)
1	A	1.4	1.0	0.4
2	B	1.6	1.5	0.4
3	B	1.0	0.9	0.2
4	B	0.9	0.7	0.2
5	B	1.1	0.9	0.2
6	B	1.1	1.0	0.2
7	A	1.0	1.0	0.2
8	A	1.0	0.8	0.2
9	A	0.9	0.7	0.2
10	A	1.0	0.8	0.2
11	C	1.1	1.1	0.3
12	A	0.9	0.8	0.2
13	A	1.5	1.1	0.4
14	A	0.9	0.7	0.2
15	A	1.3	1.0	0.4
16	A	1.0	0.9	0.2
17	A	1.0	0.8	0.3

大きさは，最大径が0.9～1.6cm，高さが0.7～1.5cmである．
形態との関係をみると，Aでは，0.9～1.0cm，Bでは0.9～1.1cmにまとまる．
貫通孔の直径は，0.2cmが多く，他に0.3cmと0.4cmがそれぞれ 2 点と 4 点みられる．
（横山英介）

Ⅵ-5
〔石器・石製品および礫〕

① 石器・石製品

▶種類と出土点数

石器・石製品の総数は77点である。石器は、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、剥片・破片と石核が72点(94.7%)、磨製石斧、たたき石、石製品が5点(5.3%)で、いわゆる剥片石器の類が石核石器を大きくうまわっている。

▶出土状況

13個所の遺構から出土した。堅穴住居では2号、5号堅穴住居の2個所から、土壌では4号土壌内から出土、残りは炭化物マウンドをはじめとする炭化物、焼土遺構からである。遺構外では、2号堅穴住居や炭化物52などの周辺部に多い。

▶種類別の特徴

- ① 石錐：07-13〔11〕グリッドから出土。頁岩製である。1.9cm×1.4cm×0.5cm。
- ② スクレイパー：2号、5号堅穴住居、炭化物マウンド、炭化物16、焼土43からそれぞれ1点、炭化物52から5点出土、残りの7点は遺構外から出土した。すべて黒曜石製で、剥片のエッジに細かな二次加工を施している。

Tab. Ⅵ-7 石器、石製品種類別出土点数

出土地点	石錐	スクレイパー	ピエス・エスキーユ	剥片・破片	石核	磨製石斧	たたき石	石製品	合計
2号堅穴住居	—	1	—	2	1	—	—	—	4
5号堅穴住居	—	1	—	—	—	—	1	—	2
4号土壌	—	—	—	2	—	—	—	—	2
炭化物マウンド	—	1	—	2※	—	—	—	—	3
炭化物16	—	1	—	—	—	—	—	—	1
炭化物20	—	—	—	1	—	—	—	—	1
炭化物27	—	—	—	—	1	—	—	—	1
炭化物28	—	—	—	2	—	—	—	—	2
焼土43	—	1	—	3	—	—	—	—	4
炭化物52	—	5	—	10	—	—	—	1	16
焼土55	—	—	—	1	—	—	—	—	1
炭化物58	—	—	—	3	—	—	—	—	3
炭化物70	—	—	—	—	1	—	—	—	1
小計	—	10	—	26	3	—	1	1	41
遺構外部	1	7	2	22	0	2	0	1	35
合計	1	17	2	48	3	2	1	2	76

注※ フローテーションにより1個検出

- ③ ピエス・エスキーユ：2点出土しており、いずれも遺構外である。もっとも大きなもの（図示のもの）で2.9cm×1.9cm×1.1cmである。黒曜石製。
- ④ 剥片・破片：48点出土した。すべて黒曜石製である。剥片の大きさは最大で3cm前後、最小で2mm前後である。剥片の形状は縦長、幅広、梯形などいわゆる不定形のものである。また、剥片の約6割には使用による細かな刃こぼれがみられる。
- ⑤ 石核：2号堅穴住居、炭化物27（破損品が接合して1個体になる）、炭化物70から

それぞれ1点出土した。

石核の技術的な特徴のひとつに打面の転位がほとんど行なわれないことがあげられる。黒曜石製。

⑥ 磨製石斧：2点出土した。

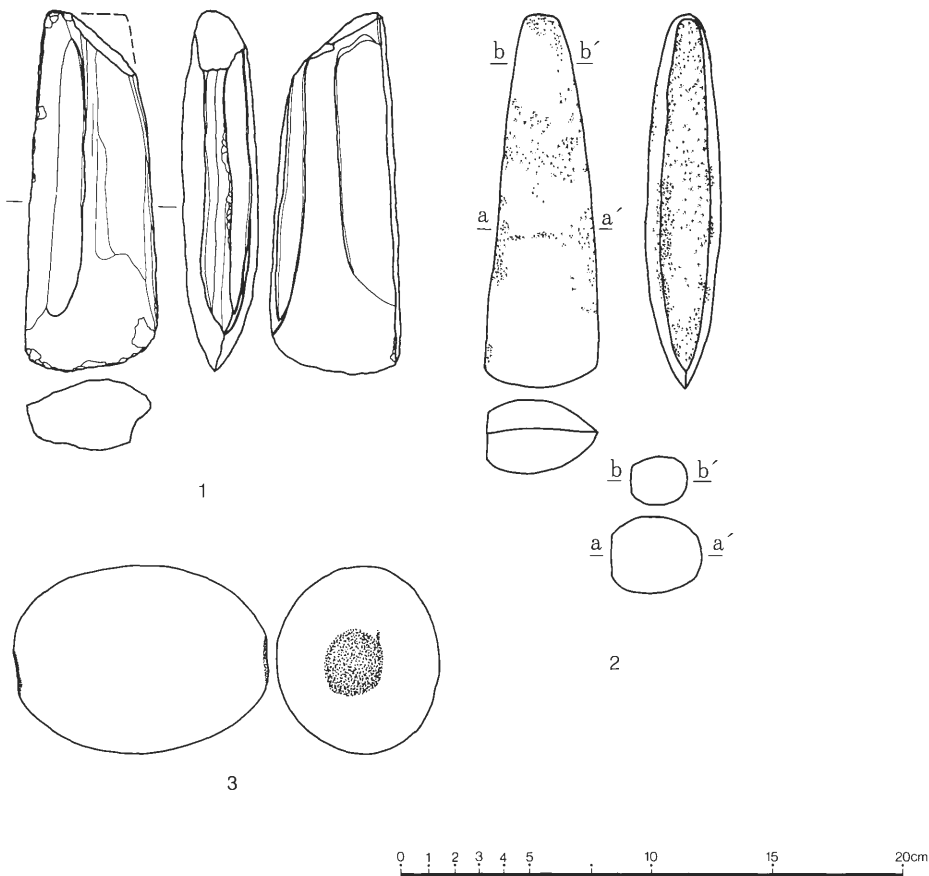
1：緑泥片岩製擦り切り磨製石斧。出土位置は16-17〔01〕グリッドで焼土43のスキに混じって出土，3号土壌にも近接している。基部の一部が破損している。両刃で，一方の刃部に使用による刃こぼれがみられる。14.3×5.3×3.0cm。

2：閃緑玢岩(?)。両面，両側を研磨している。部分的に敲打痕も残っている。出土位置は，19-18〔03〕グリッドで，2号竪穴住居の西壁に近接している。14.9×4.5×3.8cm。

⑦ たたき石

頁岩。卵形の自然礫の両側に敲打痕がみられる。出土位置は，5号竪穴住居跡内出土(10-05〔00〕グリッド)である。10cm×7.5cm。

PL. Ⅱ-20 磨製石斧(1,2)とたたき石(3)



⑧ 石製品：2点出土した。

1：安山岩製。14-18〔30〕グリッドから出土した。棒状礫の一端寄りに敲打痕が一周する。陽物様石製品。11.1cm×4.8cm。

2：頁岩製。炭化物52(19-15〔23〕グリッド)から出土した。小礫の短軸にそってえぐり込みがみられる。性格不明。5cm×2.7cm。

► 接合資料

接合資料は9組ですべて黒曜石である。「石器の分布図」に線で結んで示してある。

- ① 接合資料 1：剥片（番号 9116 と 9125）が 2 点剥離面で接合する．番号 9125 は 2 号堅穴住居の床面から出土した．
- ② 接合資料 2：剥片（番号 8159 と 12436）が 2 点剥離面で接合する．番号 8159 は炭化物 52 から出土した．
- ③ 接合資料 3：スクレイパー（番号 906）1 点と剥片 6 点が剥離面で接合する．番号 12301 以外は炭化物 52 から出土した．
- ④ 接合資料 4：石核（番号 1745）にスクレイパー（番号 8928, 1720）2 点と剥片（番号 12113）1 点が剥離面で接合する．石核は舟底状を呈する．スクレイパーは側面から剥離された剥片を用いている．分布は、石核が 2 号堅穴住居の床面、剥片が炭化物 52 から、スクレイパーが 2 号堅穴住居の周辺部から出土した．剥片の生産が 2 号堅穴住居内で行なわれたことを示している．
- ⑤ 接合資料 5：スクレイパー 2 点と剥片 6 点が剥離面で接合する．これらの 8 点は同一平坦面から同一方向に剥離されている．剥離の順序はつぎのようになる．

番号9474→同9471→同6006→同6008→同11524→同6007

→ 同 12419 → 同 11703

分布は2号竪穴住居の北側に近接した所に集中する。

- ⑥ 接合資料 6：スクレイパー（番号8288, 12043）2点と剥片（番号9010, 11378）2点が剥離面で接合する。分布は剥片が炭化物52から、スクレイパーが遺構外から出土した。
- ⑦ 接合資料 7：剥片（番号6195, 6196）2点が剥離面で接合する。21-05グリッドから出土した。
- ⑧ 接合資料 8：破損したの剥片が炭化物52(番号7682)と炭化物マウンド(番号8632)から出土した。
- ⑨ 接合資料 9：破損した石核（番号15301と15302）が焼土27内で接合した。

小括

a これらの石器・剥片類は、層位、出土・分布状況から判断して第2文化層に伴うことが確実である。

b 出土・分布にみられる特徴は、これらの石器類がおもに 2 号堅穴住居と 5 号堅穴住居を起点として製作・使用された後、住居外へ廃棄された状況をよく示している。とくに「接合資料 4」にもとづけば、剥片の剥離→剥片石器の製作→石器の使用までの作業は 2 号堅穴内で行なわれ、廃品は炭化物 52 など住居外へ廃棄されたことを示している。

c 石器・剥片類の大部分は、黒曜石によって作られている。石器の主体はスクレイパーで、ピエス・エスキューや石錐がわずかにみられる。また、剥片の約6割に使用によるものとおもわれる刃こぼれがみられる。

スクレイパーの二次加工は、剥片の一部に主要剥離面側から施される。

d 石器は、いわゆる第二次生産用具のなかにその役割を占めていた。2点の磨製石斧は縄文時代など、より古い時期の製品の再利用品である可能性が高い。

② 礫群

遺構内や遺構外から安山岩の礫がまとまって出土した。

① 遺構に伴う礫群

遺構に伴う礫群は2号堅穴住居と3号土壇から出土した。

① 2号堅穴住居の礫群

出土位置——床面で住居の北西壁寄りに10個の礫が集中して出土した。

状況——40cm×25cmの範囲内で、不規則にならんでいる。土製紡錘車（個体番号紡錘車3）を伴う。

重量——10個とも100g以上で、160g～180gのものが多い。

② 3号土壇④層の礫群

出土位置——土壇の中央部から西側へかけて33個の礫が集中して出土した。

状況——積み上げた様子はみられず、不規則にならんでいる。土製紡錘車（個体番号2）を伴う。

重量——320gのものが1個みられるが、100g～200gにまとまり、その中でも140g～200gのものが多い。

② 遺構外の礫群

遺構外の遺物包含層で、礫群が5箇所から発見された。

① 13-10グリッドの礫群

出土状況——65cm×35cmの範囲内に39個の礫が集中して出土した。積み上げた様子はみられず、不規則にならんでいる。

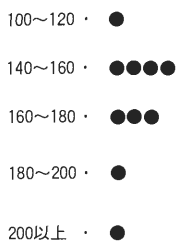
重量——80g～100gに5個、200g以上に3個みられるが、100g～200gにまとまり、その中でも100g～140gのものが多い。

② 20-08～21-08グリッドの礫群

出土状況——70cm×35cmの範囲内に45個の礫が集中して出土した。積み上げた様子はみられず、不規則にならんでいる。

重量——150g以下に集中し、その中でも50g～110gのものが多い。

PL. Ⅱ-21 礫石器の重量分布図



(重量:g) (個数)

③ 20-15グリッドの礫群

出土状況——30cm×50cmの範囲内に64個の礫が集中して出土した。積み上げた様子はみられず、不規則にならんでいる。

重量——100g以上のものは2個で、それ以下にまとまりをみせる。その中でも20g～40gのものが多い。

④ 21-15グリッドの礫群

出土状況—— 2 m四方の範囲内に33個の礫が出土した。積み上げた様子はみられず、不規則にならんでいる。

重量—— 100 g 以下に18個，140 g 以上に 4 個で120 g 以下のものが多い。

⑤ 31-16グリッドの礫群

出土状況—— 35cm × 20cmの小範囲内に 7 個の礫が集中して出土した。積み上げた様子はみられず、不規則にならんでいる。

重量—— 120 g ～180 g にまとまる。

小括

a 礫群は遺構に伴うものが2個所と遺構外のもの5個所の合計7個所で出土した。遺構に伴うものは2号竪穴住居と3号土壇とである。

b 礫群に伴う遺物は土製紡錘車であり、いずれも遺構に伴う礫群に関係する。

c 礫群はもっとも少ない個数で7個(31-16グリッド)，もっとも多い個数で64個(20-15グリッド)である。それらは積み上げた様子はみられず、不規則に分布し出土した。

d 礫個々の重量分布から礫群はおおよそつぎの3群にわけられる。

① 80 g ～200 g 以内で，200 g 以上のものがわずかに含まれる。特に，140 g ～200 g のものが多い礫群(2号竪穴住居や3号土壇，31-16グリッド)と100 g ～140 g のものが多い礫群(13-10グリッド)がみられる。

② 100 g 以下で20 g ～60 g に集中する礫群(20-15，21-15グリッド)

③ 30 g ～150 g で50 g ～100 g に集中する礫群(20-08～21-08グリッド)

(横山英介)

Ⅵ-6 [金属器および鉄滓^{スラグ}]

① 金属器

▶種類と出土点数

金属器は3点出土した。環状金属器が2点と刀子(?)の破片が1点である。

▶種類別の特徴

- ① 環状鉄製品：長径4.8cm，短径4.2cmで，厚さ0.4cmである。炭化物マウンド(17-11[13]グリッド)から出土した(個体番号金属器1)。
- ② 環状錫製品：長径3.4cm，短径3.3cmで，厚さ0.7cmである。5号竪穴住居の東側(11-04[20]グリッド)から出土した(個体番号金属器2)。
- ③ 刀子(?)：鉄製品。大部分が破損しているが，断面が三角形をなしており，刀子と思われる。遺構外(09-05[22]グリッド)から出土した(個体番号金属器3)。

② 鉄滓

鉄滓は，固形のもの[／]と粉末状のものが合計10点，遺構内外から出土した。

- ① 1号竪穴住居出土：固形の鉄滓1個(個体番号鉄滓4)。
- ② 4号土壇内出土：固形の鉄滓1個(個体番号鉄滓10)。
- ③ 6号土壇内出土：鱗片状の鉄片1個(個体番号鉄滓11)。
- ④ 炭化物マウンド出土：固形の鉄滓1個(個体番号鉄滓12)。
- ⑤ 焼土24出土：固形のもの[／]と鱗片状のものが採取された(個体番号鉄滓5，同6，同7，同8，同13)。
- ⑥ 10-08グリッド出土：固形の鉄滓1個(個体番号鉄滓9)。

(横山 英介)

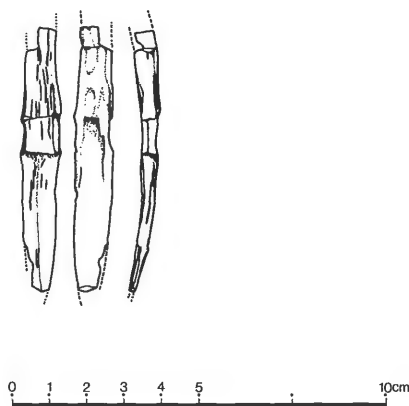
Ⅵ-7 [骨角器]

高橋 理 *

2号竪穴住居の床面(18-18)より1点出土している。いわゆる袂入離頭銛(大塚 1966)であるが、先端部と尾部のそれぞれ1部が欠損している。現存最大長は69.2mm, 最大幅9.7mm, 最大厚5.4mmである。また茎槽部はやや不明瞭であるが幅4.5mm長さ15mmほどで、コ形に造り出されている。この離頭銛の先端部の表面(索溝のある面)および索溝から尾部へかけての一部に海綿状組織が残っていることから、索溝のある表面が素材としての骨角の内側となっていることがわかる。素材という点については確定的ではないが、先端部の裏面(茎槽のある面)に2~3の凹凸があることからシカの角を加工して作成されたと推定される。この離頭銛はPL.Ⅰ-22に示したように、裏面(茎槽のある面)の側に湾曲している。この形状は中柄に着装し、銛として機能させるには不都合であると推定されるが、全体が火を受けていることから、本来は直線のあるいは表面(茎槽のある面)の側に湾曲していたのが加熱によって変化したという可能性も考えられる。

擦文時代の遺跡における離頭銛の出土例は多くはなく、サクシュコトニ川遺跡の離頭銛に形態上類似する例としては、虻田郡豊浦町礼文華の小幌洞穴出土の離頭銛(北大解剖学教室調査団 1963)、岩内郡共和村発足の発足洞穴出土の離頭銛(竹田 1964)、古宇郡神恵内村観音洞穴(石川 1982, 石附 1983)出土の銛頭が挙げられるであろう。

PL. Ⅰ-22 2号竪穴住居跡出土の離頭銛



《引用文献》

- ▶ 北大解剖学教室調査団 1963 「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』第18輯 pp.179~287
- ▶ 竹田輝雄 1964 『発足岩陰遺跡』小樽博物館 pp.9~17, fig.6
- ▶ 大塚和義 1966 「袂入離頭銛」『物質文化7』 pp.33~46
- ▶ 石川直章 1982 「回転式銛先—キテの源流」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ pp.19~28
- ▶ 石附喜三男 1983 「〈エゾ地の鉄〉稲と鉄—さまざまな王権の基盤—」『日本民俗学大系3.』 pp.301~321

Ⅵ-8
[動物遺存体]

高橋 理

サクシュコトニ川遺跡においては、擦文時代の竪穴住居跡内部・土壙・周辺に分布する多量の焼土や炭化物及び炭化物マウンドの中にサケ科魚類を主体としたかなりの量の骨片が含まれていた。このことは、採取した土壌をフローテーションによって処理した後の残渣を双眼実体顕微鏡を用いて精査した結果判明した。これらの動物遺存体は、すべて熱をうけており白色化している。乾燥させた後、同定・測定・集計を行なった。

① 出土動物遺存体

同定された動物遺存体は以下である。

▶軟体動物門

腹足綱 Gastropoda
陸産貝類

▶脊椎動物門

硬骨魚綱 Osteichthes
サケ科 Salmonidae *gen. et sp. indet.*
 イトウ *Hucho perryi.*
コイ科 Cyprinidae *gen. et sp. indet.*
 ウグイ *Tribolodon hakonensis*
ニシン科 Clupeidae.
 マイワシ *Clupea pallasii*
カサゴ科 Scorpaenidae *gen. et sp. indet.*
鳥綱 Aves
破片 1 点のみ
哺乳綱 Mammalia
ウサギ科 Leporidae *gen. et sp. indet.*
ネズミ科 Muridae *gen. et sp. indet.*

② 動物遺存体の遺構別・地点別出土数

出土した動物遺存体の遺構別・地点別出土数は次頁の表のとおりである。

③ 出土動物遺存体の分析

▶サケ科魚類を中心として

出土した動物遺存体の中で、量的に最も多いのはサケ科魚類である。サケ科魚類と同定できたのは遊離歯及びその破片・椎骨片で、その他顎骨と推定される骨片も出土しているが、部位が一定でなく、従って測定部分が決定できないことから今回は分析の対象から除

Tab. Ⅰ-8 サケ科魚類椎骨片・遊離歯

遺構		椎骨片	遊離歯
焼土、炭化物集積	4	5	0
	14	70	32
	18	184	181
	19	31	218
	20	14	8
	21	6	5
	22	47	4
	27	587	198
	43	273	313
	50	1	0
	52	1,828	609
	54	20	271
	56	3	7
	57	96	35
	59	13	43
	64	0	27
	65	4	10
	68	1	0
	69	2	8
	70	16	4
	72	89	45
	75	263	90
計		3,553	2,072
遺構		椎骨片	遊離歯
2号竪穴住居	カマド	880	55
	カマドまわり	7	1
	煙道	3	0
	b ² (17-16)	2	2
	b ² (17-18)	113	41
	b ² (19-17)	494	136
	小計	(1,499)	(235)
3号竪穴住居		705	1,653
計		2,204	1,888
遺構		椎骨片	遊離歯
	1号土壌	105	30
	2号土壌	3	2
	3号土壌	736	212
	4号土壌	941	12
	5号土壌	63	66
計		1,848	322
遺構		椎骨片	遊離歯
炭化物マウンド	17-09	0	2
	17-10	108	38
	17-11	488	583
	17-12	1,108	383
	18-10	68	70
	18-11	16	25
	展示用	1,207	781
計		2,995	1,882

Tab. Ⅰ-9 出土動物遺存体

遺構		出土動物遺存体	個数				
焼土・炭化物集積跡	19	ウサギ中節骨(基節骨?) (近位端)	2				
	20	ウグイ咽頭骨 コイ科魚類椎骨	1 3				
	21	コイ科魚類椎骨 鳥類尺骨(?)	1 1				
	22	コイ科魚類椎骨 ネズミ左上顎骨(基部)	10 1				
	27	コイ科魚類椎骨	7				
	43	コイ科魚類椎骨	1				
	50	コイ科魚類椎骨	1				
	52	コイ科魚類椎骨 イトウ椎骨	5 1				
	57	コイ科魚類椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨	16 1				
	70	コイ科魚類椎骨	1				
	72	コイ科魚類椎骨	3				
遺構		出土動物遺存体	個数				
2号竪穴住居 カマド		陸産貝類(臍穴部) コイ科魚類椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨	1 5 1				
	19-17	コイ科魚類椎骨	1				
	3号竪穴住居	コイ科魚類椎骨 陸産貝類(臍穴部)	2 1				
遺構		出土動物遺存体	個数				
1号土壌		コイ科魚類椎骨	11				
3号土壌		コイ科魚類椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨	4 1				
	4号土壌	コイ科魚類椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨	1 1				
5号土壌		ウグイ椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨	1 2				
遺構		出土動物遺存体	個数				
炭化物マウンド	17-10	コイ科魚類椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨 カサゴ科魚類椎骨	1 1 2				
		17-11	コイ科魚類椎骨 カサゴ科魚類椎骨 カサゴ科類背鰭棘 イトウ椎骨 ニシン科魚類椎骨 ネズミ類尾椎 ネズミ類中節骨(基節骨?) ネズミ類中手骨(中足骨)	7 1 1 1 1 3 1 1			
			17-12	コイ科魚類椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨 イトウ椎骨 ネズミ類尾椎 ネズミ類基節骨 ネズミ類中節骨(基節骨?)	12 3 1 1 1 1 1		
	18-10			コイ科魚類椎骨	4		
	展示用			ウグイ椎骨 コイ科魚類椎骨 ニシン科魚類(マイワシ)椎骨	1 9 2		
				出土位置不明	シカ中節骨 シカ末節骨	1 1	

Tab. Ⅱ-10 遊離歯エナメル質高

遺構	遊離歯エナメル質																			(単位:mm)
焼土・炭化物集積	14	4.4	5.0																	
	18①*	4.7	4.5	3.0	2.7	3.1	3.3	1.4												
	18②	6.6	5.2	3.7	6.2	3.1	3.0	2.0	4.3	5.0	3.0	4.0	6.4							
	19	5.0	2.5	3.2	3.7	5.0	3.4	3.7	4.6	6.1	3.7	3.0	4.0	4.4	3.0	4.1	2.6	2.6	4.2	2.8
		1.9	4.2	2.7	3.1	3.4	1.1	2.7												
	21	2.1																		
	22②	1.7	2.4																	
	27①	1.8	1.8	2.4	1.8	1.5														
	27②	3.2	6.2	5.3	4.2	4.7	3.2													
	43②	4.2	3.2	5.6	4.2	4.8	4.2	3.4	2.7	3.3	2.8	2.8	3.0	3.6	2.0					
	52②	3.9	2.4	2.9	1.7	3.6	4.0	3.0	3.0	1.9	2.0	3.2	3.2	2.0	2.2	2.1	3.4	3.2	2.7	2.6
		2.5	2.1	1.4	1.6	2.0	1.6	3.1	3.0	2.0										
	52③	4.0	4.9	3.9	4.4	4.5	3.2	3.9	3.8	1.8	2.1	2.2	2.1	1.4	1.1	2.5	3.3	1.6	2.3	1.6
		2.6	2.5	2.8																
	54①	1.9	1.9																	
	54②	5.9	5.0	5.4	5.2	4.3	3.2	1.6	4.4											
	56	2.3	1.4																	
	57①	3.0	2.7	2.5	2.8	1.8	2.5													
	69	2.1																		
	72	5.3	1.7																	
	75	5.3	4.7																	
	計	148個																		
2号竪穴住居	b ² 19-17	5.6	4.2	4.8	2.9	3.9	2.3	2.0	2.0	2.2										
	17-18	5.2	5.8	3.5	2.9	1.9														
	カマド	2.5	3.0	3.3	1.7															
	計	18個																		
3号竪穴住居	①	2.8	3.9	3.9	3.0	2.4	3.3	3.4	1.6	3.1	1.7	1.6	1.7	1.9						
	②	4.3	6.0	5.1	4.3	3.4	3.5	3.6	2.9	2.5	3.3	3.2	4.1	2.5	1.5	3.0	1.9	2.8	1.8	2.2
	③	6.5	5.6	5.5	6.2	5.3	6.4	4.6	5.4	4.0	4.2	3.8	2.8	5.3	2.7	2.6	4.2	5.2	4.0	4.2
		4.0	2.9	2.3	2.7	4.4	2.5	3.0	3.0	3.7	2.6	3.0	1.7	5.1	3.7	2.7	5.1	2.1	2.1	3.4
		3.0	3.4	3.5	2.7	3.2	3.7	3.1	2.8	2.5	3.0	2.7	3.2	2.2	2.2	3.0	2.4	2.4	3.0	2.2
		1.6	1.9	3.3	2.3	1.7	2.4	1.9	1.8	1.7	1.9	1.5	2.1	1.3						
	④	4.5	4.9	3.5	6.0	4.6	4.2	3.2	4.5	4.6	4.6	4.0	4.0	2.7	5.3	3.9	2.9	2.5	3.0	4.3
		2.9	3.4	3.0	1.9	2.9	2.5	2.0	2.5	2.2	1.8	3.0	2.5	2.3	2.5	3.2	3.3	2.9	1.9	3.2
		2.7	3.2	2.1	1.8	2.8	2.5	1.4	1.7	1.6	2.4	2.3	2.0	1.9	2.7	2.8	2.0	2.5	2.0	2.3
		2.8	1.2	2.3																
	計	162個																		
1号土壇		4.7	2.3																	
	計	2個																		
3号土壇	①	1.7	1.8	2.2	1.8	1.3	0.7													
	②	4.0	5.0	4.6	4.0	5.0	2.7	2.1	2.4	5.5	2.9	2.8	3.4	3.7	1.8	3.4	4.0	2.2	2.6	1.8
		2.4	3.1	2.0	3.0	1.8	2.3	3.8	2.0	2.2	2.4	1.4	1.3	1.5	2.0	1.5	2.4	1.8	1.7	
	計	43個																		
4号土壇	③	2.5	2.5	2.6																
	計	3個																		
5号土壇	①	3.0																		
	③	4.2	2.4	2.1	3.1	2.5	2.3	1.4	1.9											
	計	9個																		
炭化物マウンド	17-11②**	3.6	1.9																	
	17-11③	3.3																		
	17-11④	3.9	2.0																	
	17-11⑤	3.7	7.2	3.0	4.6	3.8	2.5	4.6	2.4	3.1	2.3									
	17-11⑥	2.3																		
	17-11⑦	4.5	6.1	4.3	3.6	5.3	3.9													
	17-11⑧	4.0	3.9	4.5																
	17-11⑨	4.1	3.2																	
	17-11⑩	4.1	3.6	2.8	2.1															
	17-11⑫	2.2																		
	17-11⑬	4.4	5.3	1.8	2.4	2.4	1.2	1.6	2.0	1.4										
	17-12①	3.4	4.7	4.2	4.0	3.2	3.6	4.3	2.8	4.4	3.4	2.8	1.7	2.1	3.9	2.0				
	17-12②	4.2	3.2	2.4	2.8	1.5														
	17-12①	7.7	3.4	4.0	4.2	3.2	3.0	4.0	3.0	4.0	3.7	2.2	2.4	2.0	2.3					
	17-12⑧	3.7	2.4	2.0																
	18-10①	4.4	4.9	4.0																
	18-10②	3.7	2.4																	
	Na2621	2.1																		
	展示用	3.5	3.0	3.3	4.4	2.1	2.9	4.7	3.0	2.7	1.7	1.7	3.6	3.4	2.0	3.1	1.3	2.3	2.5	1.7
		3.7	2.6	2.9	1.9															
	計	108個																		
総計		493個																		

*○囲みの数字はサンプル番号， **―で接続する数字はグリッドを示す。

Tab. Ⅲ-11 標本サケエナメル質高測定値

S L .630mm				(単位:mm)	
歯骨		主上顎骨		前上顎骨	
ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r
8.0	8.0	4.1	2.2	3.9	2.8
4.8	4.5	3.4	2.9	6.0	5.9
6.8	6.4	3.2	3.2	4.6	4.7
4.5	4.0	2.8	2.7	4.5	5.0
4.3	3.2	3.2	3.2	3.3	4.7
4.0	3.1	2.0	1.6	4.1	3.0
4.0	1.7	2.1	3.0	4.3	4.3
3.6	3.0	2.6	3.2		3.9
3.2	3.0	2.0	2.4		
3.4	2.7	1.2	2.4		
3.3	2.7	2.1	1.4		
2.4	2.5	1.9	2.0		
2.8	2.6	1.4	2.6		
2.8	2.1	1.8	2.2		
2.6	2.7	1.8	1.2		
2.9	2.9	2.0	1.3		
2.7	1.8	2.0	1.6		
2.3	3.0	1.9	1.9		
1.7	1.0	1.5	1.2		
3.0	2.6	1.5	1.3		
2.5	1.5	1.7	1.2		
2.8	1.7	0.8	1.4		
3.0	2.5	1.4	0.9		
1.2	2.2	1.7	1.1		
2.0	2.2	1.7	0.6		
2.3	1.6	1.2	1.0		
1.0	1.5	1.2	0.8		
	1.9	1.5	0.6		
	1.2	1.5			
	1.3	0.7			
	0.9	0.8			
	4.0	0.9			
		1.4			
測定部数				135	

S L .960mm				(単位:mm)	
歯骨		主上顎骨		前上顎骨	
ℓ	r	ℓ	r	ℓ	r
5.7	9.3	3.8	2.3	7.9	6.7
8.6	9.4	5.2	3.9	6.7	6.0
6.1	6.3	3.6	4.8	6.0	6.7
5.4	5.2	3.8	4.1	5.9	7.9
4.2	3.8	3.6	5.0	6.7	5.9
3.1	2.7	4.8	4.1		
1.9	4.2	4.2	4.3		
3.3	3.0	3.8	3.1		
3.3	2.7	3.2	4.2		
3.4	3.3	3.3	4.0		
3.3	3.5	1.5	2.7		
2.4	2.7	2.5	2.6		
3.6	3.0	2.5	2.4		
3.1	1.8	3.0	2.0		
1.9	3.5	1.9	2.0		
2.7	3.6	2.0	1.5		
2.7	2.9	2.7	2.0		
3.1		2.5	1.2		
2.9		2.0	2.0		
2.4		2.5	2.4		
3.3		2.0	1.6		
1.5		2.0	1.5		
3.0		2.0	1.6		
4.0		1.4	1.2		
測定部数				99	

Tab. Ⅲ-12 椎骨前位・後位端の横径測定値

S L .630mm		S L .960mm	
前位	後位	前位	後位
—	8.7	—	9.9
8.2	8.2	10.7	10.4
8.0	8.2	10.5	10.2
7.9	8.1	9.5	9.5
7.3	7.3	10.9	10.7
7.7	7.8	9.9	10.5
7.6	7.7	9.8	9.8
7.9	8.1	9.5	9.6
8.1	8.2	10.0	9.1
8.0	8.3	9.6	10.0
8.2	8.1	10.3	9.7
8.2	8.1	9.8	10.2
7.8	7.9	9.6	9.8
8.1	8.6	10.9	9.6
8.4	8.7	9.2	11.0
8.2	8.4	10.8	9.6
8.1	8.1	9.7	10.7
8.2	8.5	10.1	9.9
8.5	8.8	9.5	10.2
8.8	—	11.0	9.6
8.6	8.7	9.4	11.0
8.8	8.6	10.1	9.2
8.8	9.0	10.0	9.9
9.0	9.0	10.0	9.7
9.2	9.4	9.3	9.6
9.2	9.3	10.9	9.6
9.2	9.4	10.7	11.0
9.3	9.3	10.8	10.4
9.2	9.3	11.2	10.6
9.3	9.4	11.1	11.1
9.2	9.3	10.7	11.1
9.5	9.3	10.9	11.0
9.4	9.3	9.8	10.9
9.2	9.3	10.6	9.8
9.3	9.1	11.1	10.2
9.1	9.3	11.2	11.1
9.2	9.2	10.8	10.9
9.2	9.2	10.5	10.9
9.5	9.4	10.8	10.6
9.1	9.3	10.5	10.6
9.2	9.1	9.6	10.5
9.1	9.1	10.9	10.0
9.1	9.1	10.9	10.8
9.1	9.1	11.4	10.6
9.2	9.0	11.3	11.4
9.0	9.0	10.9	11.3
9.0	9.3	11.2	10.5
9.1	9.0	10.8	10.8
9.0	9.0	11.0	10.8
8.7	9.0	10.8	10.6
9.2	9.1	11.4	11.0
9.1	8.9	9.7	11.4
9.1	9.2	10.6	10.0
9.0	9.1	11.0	11.1
9.1	8.7	11.6	10.4
9.2	9.0	10.2	11.1
8.9	8.6	10.0	9.9
8.7	—	10.3	9.7
9.0	8.5	10.2	10.2
8.8	8.3	10.0	10.3
8.6	8.3	9.8	10.1
8.6	8.5	8.2	9.9
8.2	8.0	9.7	7.0
8.0	7.8	9.6	8.2
8.0	8.0		9.5
7.0	7.0	測定部数 129	
5.9	5.3		
測定部数		131	

Tab. Ⅱ-13 推定椎骨横径

遺構	推定背骨横径					(単位:mm)
	27①	11.0～11.5				
	27②	11.0～11.5	10.5～11.0	8.0～8.5		
	43②	7.0～7.5	7.5～8.0			
	52②	9.5～10.0	9.0～9.5	7.0～7.5	7.5	9.0～9.5 8.0～8.5
	52③	2.7(イトウ)	11.0～11.5	10.0～10.5		
	57②	10.0～10.5	10.5～11.0	9.0～9.5		
	72	10.0～10.5	7.0～7.5	7.5～8.0	7.0～7.5	
	75	10.5～11.0				
2号竪穴住居	b ² 19-17	9.0～9.5	9.0～9.5	10.0～10.5	7.0～7.5	
	b ² 17-18	10.5～11.0	7.0～7.5			
	かまど	8.5～9.0	11.0～11.5	7.0～7.5	8.5～9.0	
3号竪穴住居	②	8.5～9.0				
3号土壌	②	11.0～11.5	8.0～8.5	8.0～8.5	9.0～9.5	
炭化物マウンド	17-11⑤	11.0～11.5	3.9(イトウ)	5.0～5.5		
	17-11⑩	11.0～11.5				
	17-12①	3.5				
	17-12④	5.5(イトウ)				
	17-12⑥	10.0～10.5	10.0～10.5	10.5～11.0		
	17-12⑧	11.0～11.5	9.0～9.5	9.0～9.5		
	18-10①	6.5～7.0				
	展示用	10.5～11.0	8.5～9.0	10.0～10.5		
総計	54					

外した。検出した遊離歯の総数は6,036点、椎骨片10,092点である。椎骨は完形は皆無で
すべて ¼以下の大きさに割れていた。（上記の数値は残存の程度、大きさに関わりない
破片数である。）各地点ごとの出土数はTab.Ⅱ- 8 に示してある。

① 出土したサケ科魚類の体長推定

遊離歯・椎骨片から標準体長（吻端より終尾椎までの長さ、以下S Lとする。）の推定
を試みた。まず遊離歯の中でエナメル質の部分が完全に保存されているものを選別し、高
さを測定した（Tab.Ⅱ-10）。

次に、現在手許にある2体のシロザケの現生標本について左右歯骨・前上顎骨・主上顎
骨の骨のエナメル質高を推定した。2体のシロザケはいずれもオスで、11～12月に宮城県
沿岸の定置網で捕獲されたものである。S Lはそれぞれ630mm・960mmで、産卵期にあたり、
吻端・歯が著しく内湾している。それぞれの推定値はTab.Ⅱ-11に示した。

サケ科魚類は硬骨魚綱に属するが、真骨魚類の中でも原始的な部類で化骨の程度は低い。
このことは脆い頭骨や網目状の椎骨などからもわかる。また歯数も固体によってばらつき
があり、しかも左右同数ではない。S L 630mmは135本、S L 960mmは99本である。測定
の結果、630mmでは平均2.6mm、S L 960mmでは平均3.62mmとなり両者を合せると測定数234、
平均3.03mmで1.0～3.0mmに最も多い。

一方、遺存体の測定結果についてみると、3号竪穴住居跡出土の資料は測定数162で、
平均3.08mm、1.5～3.0mmに最も集中する。2号竪穴住居跡・3号竪穴住居跡の資料合計に
ついては、測定数180、平均約3.10mmで、やはり1.5～3.0mmに最も集中する。

さらに、他の土壌出土の遊離歯を加えると測定数237、平均2.99mmとなり1.5～3.0mmに
集中する。

また、焼土・炭化物分布域全体では測定数148、平均3.24mmで、1.5～3.0mmと4.0mmに多
い。

また、1号住居跡の東側にある炭化物マウンドでは、測定数108、平均3.25mmであり、2.0mmに最も集中し、3.0～4.0mmがそれに次ぐようである。焼土・炭化物分布域と炭化物マウンドの合計では測定数256、平均3.24mmとなり1.5～4.0mmに多い。

最後に、遺跡出土の遊離歯総計についてみると、測定数493、平均3.12mmとなり、1.5～3.2mmによく集中し、4.0mmがそれに次ぐ。

以上、標本と遺存体のエナメル質高分布を調べてきたが、これから次のことが言えるだろう。

各遺構ごとの出土した遊離歯のエナメル質高分布は互いによく似ている。平均3.0～3.3mmであり、共通して1.5～3.0mmに多く集中する。また、これら遺構出土の遊離歯のエナメル質高分布と2標本のエナメル質高分布もまた非常に似たものになっている。このことは特に2標本を合計した場合において一層明確といえるだろう。最小値についても、ともに0.5～1.0mm（未満）におさまる（S L 630mmの0.6mm、3号土壇出土の0.7mm）。最大値の場合、S L 960mmの個体には、8.5～9.5mmに及ぶ歯があるが、遺存体の遊離歯では、7.5mm台の1点（炭化物マウンド出土の7.7mm）が最大で、7.0mm台にも一点あるにすぎない。今回は、エナメル質が完全に残されているものについて測定しているので、その対象外となった破損した遊離歯の中に、本来はより大型のものが含まれていた可能性があるが、筆者の実見した限りでは、8.5mm以上に及んだと考えられる遊離歯の破片はないようである。これにより、S L 960mmを大きく越える個体は遺存体の中には含まれていないと推定される。

以上より、サクシュコトニ川遺跡より出土したサケ科魚類の標準体長は、エナメル質高の分布から60～95cm程と推定される。

同様に、出土した椎骨片と、S L 630mm・S L 960mmの2標本の椎骨との比較によって、標本体長の推定を試みた。前述したように、サケ科魚類の椎骨は、完全な形を留めているものはほとんどなく、1/4以下に割れており、しかも加熱、土圧の影響もあり変形している例が多い。従ってある程度の大きさを保ち、かつ変形のない（あるいは小さい）椎骨片は非常に少なく、全部で54点にすぎない。サケ科魚類の椎骨は、前・後位端面の形状は円ではなく、左右方向（横方向）に大きな楕円であり、また一つの椎骨でも、前位端面と後位端面の大きさが異なる。そこで、2つの標本の椎骨の大きさを左右の長さ、即ち横径で代表させることとし、前位端と後位端について測定した。標準体長の違いは椎骨の横径によく反映され、S L 630mmとS L 960mmの分布はほとんど重複はないようである。次にこれらの標本の椎骨から0.5mmごとの大きさのものを選びだし、前位端と後位端のトレースによって輪郭線を取り、さらにそれを用いて型紙を作成した。54点の出土椎骨片を1点ずつ輪郭線と型紙にあてて横径の分布を推定した結果がTab. Ⅱ-13である。数が少なく、また測定の精度にも多少の問題があるので、細かい部分までは言及できないが、横径が7.0～11.5mmに多いことは明らかである。また、横径2.5・3.5・5.0・5.5mmの各1点ずつはサケ科の中のイトウの椎骨と同定されたので、これらを除けば椎骨の大きさの推定値からも、標準体長60～95cm程の個体が出土していることが裏付けられたと言えるだろう。

② 他の動物遺存体について

Tab. Ⅱ-9に示したように、サケ科魚類以外の動物遺存体の出土数は、同定困難で不明とした例を加えても非常に少ない。

貝類が2点出土しているが、いずれも陸産貝類であり、しかもマイマイのような大型の陸産貝類ではなく、ヒラマキガイ科の貝類のような直径10mmにも満たない微細な個体である。これらの微細な貝類が捕獲の対象となったものではないことは言うまでもなく、この遺存体に限って熱を受けていないことをみても、廃棄物の中に後から混入したものであろう。

魚類では、コイ科魚類とニシン科魚類が多い。コイ科魚類は椎骨が多いが、種の判定は困難である。ただし大きさを考慮するとウグイ・フナ・コイなどが考えられる。また明らかにウグイと同定される咽頭骨・椎骨が出土していることから、ウグイの占める割合がかなり高いことも想定される。ニシン科魚類は椎骨のみ出土しているが、マイワシと同定される。非常に小型でかつ大きさが揃っており、体長10cm以下の個体である。

鳥類は第21地点(08-10グリット)より骨片が1点出土している。小破片であり、稜線の形状は尺骨に類似するが断定はできない。

哺乳類については、中～大型の哺乳類の遺存体は、ほとんど検出されなかった。ウサギ類は第19地点(07-08)から出土しているだけであるが、ネズミ類は顎骨・中節骨・基節骨・尾椎など比較的多い。大きさはイエネズミほどである。

④ 小括

以上、動物遺存体の分析を行ってきたが、出土数は圧倒的に魚類が多い。特にサケ科魚類が主体を占めており、サクシュコトニ川遺跡を残した擦文時代の人々の漁撈活動は、サケ科魚類を中心としたものであったことが判明した。またサケ科魚類は、その遊離歯がほとんど屈曲しており、標準体長は60～95cmと推定される個体に集中されることから、イトウ・カワマスなどの陸封魚ではなく、降海して海で成熟し、産卵のため遡河したサケ科魚類であろう。日本に生息するサケ科魚類の中で体長が60～96cmに達する降海型の種類は以下のサケ属に限られる。

サケ属 Genus *Oncorhynchus*

ベニマス *Oncorhynchus nerka*

サケ(シロザケ) *Oncorhynchus keta*

ギンマス *Oncorhynchus kisutch*

マスノスケ *Oncorhynchus tshawytscha*

サクラマス *Oncorhynchus masou*

この中で、日本、特に北海道西部地域において、一定量の捕獲が可能なサケ属はシロザケが圧倒的に多い。シロザケは、その捕獲される時期、場所によってトキシラズ・アキアジと呼ばれているが、産卵のために沿岸に来遊し、9～12月に河川を溯るのはアキアジである。サクラマスは、日本において主として捕獲される。日本海を中心に分布し、サケ科の中では最も温暖性である。幼魚はヤマメと呼ばれ、ふ化一年程後の春にギンケヤマメとして降海する。その年の冬、沿岸もどり、急速に成長し、北海道では5月下旬～6月下旬に産卵のため溯河する。豊平川の本流である石狩川に溯河するサケ科魚類は、やはりシロザケが主であり、明治元年から16年までの間の8年間は、年百万尾以上の水揚げが記録され、9月下旬の漁期には、川口の石狩町は非常にぎわいをみせたという(市川1977)。

シロザケとサクラマスを骨の形態から判別することは困難であるが、石狩川及びその支流において捕獲されるサケ科魚類のうち大型のものはシロザケが主体である。したがってサクシュコトニ川遺跡の臨むサクシュコトニ・セロンベツ両川で捕獲されたサケ科魚類は、かなり高い確率でシロザケと限定できるのではないだろうか。

捕獲の方法としては、セロベツ川より出土した堰状遺構(テシ・柵状置構)、及びその中から出土したヤス、マレックなどが大きく関わってくるだろう。

以上のサクシュコトニ川遺跡出土の動物遺存体の分析の結果をまとめると次のようになる。

- a 竪穴住居跡・土壌・周辺の焼土，炭化物中に多量の動物遺存体がふくまれていた．
- b 動物遺存体の主体はサケ科魚類であり，他にコイ科・ニシン科・カサゴ科魚類が少量出土した．
- c 魚類以外では，陸産貝類・鳥類・小型哺乳類がごく少数出土した．
- d サケ科魚類の遊離歯・椎骨片の大きさより，遺構・地点の別に関わりなく標準体長60～95cm程の個体が大部分であった．
- e これらのサケ科魚類は9～12月に産卵のために石狩川を溯河したシロザケを捕獲したものと推定される．

《参考文献》

- ▶東 正雄 『原色日本陸産貝類図鑑』 保育社1982
- ▶中村守純 『原色淡水魚検索図鑑』 古隆館1982
- ▶阿部宗明 『原色魚類検索図鑑』 北隆館1980
- ▶市川健夫 『日本のサケ―その文化誌と漁―』 日本放送出版協会 1977

VI-9

〔植物種子遺存体〕

Gary W. Crawford

サクシュコトニ川遺跡出土の植物遺存体

はじめに

本論は、サクシュコトニ川遺跡出土の植物遺存体のうち、主にフローテーション・サンプルの分析と若干の考察からなっている。分析研究は現在も続行中であり、本論は最終報告ではない。この遺跡でフローテーション法を採用した目的は、a) 擦文期における植物利用のパターンを復元すること、b) 同期における農耕の存在を検証すること、の2点である。ことに農耕の存在については、おおよそ同時期と考えられる道内の3遺跡から炭化栽培植物が検出されていること、また農耕具も他の遺跡から検出されたことなどを考えあわせると非常に重要な問題であるといえよう(石附 1975; 岡田・山田 1982)。今回の調査で得られたフローテーション・サンプルの分析により、農耕の存在は確証を得たといえよう。

サンプル

本論では種子と果実についてのみ触れる。同定できた種とその量はTab.Ⅱ-15にまとめられている。炭化物のうち調査済みのものは約197g、未調査のものは約200~210gである。調査済みの遺物の中には116,422個の種子が含まれていた。これより推察すると、この遺跡よりえられたすべてのサンプル中には約234,000個の種子が含まれ、そのほとんどが栽培植物のものであろう。なおこれらのサンプルは2号、3号住居の焼土、および住居外の「炭化物マウンド」から得られた。

同定

ここで報告する32種類の植物のうち10種類は栽培植物である。それに加え、同定はできなかったが、分類しえなかったもの、同定もできなかったものなどがいくつかある。

非栽培植物は、1年生の雑草(非栽培植物のうち46%)、多肉果実(47%)、他に4種類の植物群からなる、タデ属(*Polygonum*)の中ではレンズ状の種子をもつ*P. densiflorum*が最も優勢である。オオイタドリ(*P. sachalinense*)に類似したものもみられた。イネ科雑草のうち穀果のものは、ヒエ属(*Echinochloa*)を除き、「未同定」の数の中に含まれている。「未同定」のイネ科雑草は、キビ属に含まれるものと、Crawford(1983: 37)であげた「Type 2」のイネ科雑草の2つに大きく分けられる。ヒエ属の種子は平均1.5mm×1.1mmであるが、縄文前期末から中期末にかけて種子の大きさが15%増大することが、亀田半島の遺跡で確認されている。イネ科植物の表現型が多様であることはよく知られており、例えばタイヌビエ(*E. crusgalli* Beauv. var. *olyzicola*)は水田雑草としてよくみられるものである(Barret 1983)。しかし、サクシュコトニ川遺跡でイネが検出されたとはいえず、ここでみられるヒエ属が水田雑草であることや、イネが栽培されていたという明確な証拠はない。この他にギンギン属(*Rumex*, 種はスイバ<*R. acetosaR. japonicusR. obtusifolius*>)とアカザ属(*Chenopodium*, おそらくシロザ<*C. album*>もしくは、コアカザ<*C. ficifolium*>と思われる)が検出された(Craw-

ford1983 : discussion参照).これらの植物は主に種子と葉を食用としていたと考えられる.

非栽培植物の中で多肉果実の占める割合が47%であることはすでに述べた.しかし,多肉果実是一般に種子まで食され炭化種子となる蓋然性は低く,これらは数字以上に重要な食糧資源であったと考えられる.

現在までに道内の遺跡から5種類の多肉果実が検出されている.そのうち,イヌホオズキ(*Solanum nigrum*),ホオズキ属(*Physalis*),ガンコウラン属(*Empetrum*)の3種類は,今回の検出例が最初である.これらはいずれも食用となる(Heiser1969; Ohwi1965 : 788).また,最初の2種は荒れ地や農耕で攪乱された土地でよくみかけるものである.

多肉果実の遺存体については,すでに Crawford(1983)の中で触れているが,この種類の植物は食用以外にも利用されていて,この遺跡においても「テシ」の多くがニワトコ(*Sambucus*)の木で作られている.また,ミズキ属(*Cornus*),ブドウ属(*Vitis*)も食用の他,イナウなど宗教的器具の材料となる.

「その他」の中には4種類のものが含まれている.そのうちネギ属(*Allium*)は,住居外の「炭化物マウンド」からかなり多量の検出があった.ただし炭化種子ではなく,炭化した球芽としてである.この種のうちノビル(*Allium grayi*)は,低地の草原でみられるものである(Ohwi1965).付表にあがっていない他の3種類はキハダ(*Phelodendron*)?,オニグルミ(*Juglans ailanthifolia*)そしてエンドウマメ様のマメ科植物である.最後のものはレンリソウ属(*Lathyrus* sp.)として道内4個所の遺跡からの出土が知られている.

数字の上では,キビ(*Panicum miliaceum*)アワ(*Setaria italica*)は優勢な栽培植物である.この他にキビもしくはアワである可能性を持つグループがあるが,これは「未同定」としている.これらの中にヒエが含まれている可能性があるが,ヒエとキビとの区別は微妙なものであるため確定はできない.道内の先史遺跡からのヒエの出土例は報告されていないが,西南日本の歴史時代の遺跡からは3例が知られている.

PL.Ⅰ-23, 24にキビとアワの種子の大きさの変異を示しておいた.2つの測定値ともヨーロッパ種(Van Zeist 1968)として報告されたものの値の範囲におさまる.

この遺跡において,数の上では,最も優勢な栽培植物であった穀物はオオムギである.これは六条オオムギ(*hexastichous*)である. PL.Ⅰ-25に示した測定値は,北部ヨーロッパ種(Van Zeist 1968)の範囲におさまる.国内の他の先史遺跡出土のオオムギは比較的小型で,九州上ノ原の例($3.8 \times 2.0\text{mm}$, 小谷 1972)を除くと,サクシュコトニ遺跡出土例のもつ変異の範囲におさまる.

この遺跡出土のコムギはあまり例のないもので,その測定値はコンパクトコムギ(*Triticum aestivum* ssp. *compactum*)の変異の範囲の外側に位置する.この種は,小型種のインディアンワーフコムギ(*T.aestivum* ssp. *sphaerococcum*)となんらかの関係があることも考えられる.測定値は小型種のコムギとパンコムギの値の間に位置している(PL.Ⅰ-26 参照 - Janushevich 1984 : 275, 276; Van Zeist 1968 : 126, 128).またこれらはエンマコムギ(*T.dicoccum*)ともいくつかの類似点がみられる.

イネは6個体検出され,いずれも短粒型の *japonicum* である.測定可能であった1個体の値は $4.1 \times 2.6\text{mm}$ ($L/W = 1.6$)であった.なお佐藤(1971)では,100以上の弥生遺跡出土のイネを分析し, $L/W = 1.3 \sim 2.0$, 短粒型であるとしている.

マメ科植物ではアズキ(*Vigna angularis* var. *angularis*),ケツルアズキ(*V.radiatus* var. *radiatus*)を検出した.

ウリ(*Cucumis melo*)は破損したもの1個体を検出した.藤下(1984 : 64)に日本各地出土の5,076個体のウリが集成されているが,本例に適合するものは含まれていない.この他にシソ(*Perilla frutescens* var. *crispa*),アサ(*Cannabis sativum*)を検出した.ともに食用の他に油採集などに利用されたであろう.

考察

まだ分析していない試料の中に、かなりの量のムギの小穂の柄の一部が含まれている。このことは農耕の存在と矛盾しない。さらに、筆者はこれら栽培植物が食生活の中で重要な位置を占めていたと考えている。

これら栽培植物の多くは日本列島の先史遺跡からの出土としては最北の例である。また、アワ、イネ、ウリ、コムギは道内最初の例である。イネ、ウリはごく少量のため、ここで栽培されたものである確証はない。しかし、筆者は、小規模であるが、ここでの栽培を想定している。

最後にサクシュコトニ川遺跡の植物遺存体の構成は、カナダ・オンタリオの Woodland(Iroquoian)における構成に類似している点を指摘しておきたい。両者とも、各々の地域で最北の食糧生産地帯であること、狩猟採集を主な生業としていること、同様の技術体系をもっていることなど共通点を多くもっている。その中で植物の構成が類似していること(Crawford 1985, Monckton 1985)を考察することは、エゾ社会における初期農耕をめぐる議論の一助となろう。

SAKUSHU-KOTONI-GAWA PLANT REMAINS

Gary W. Crawford *

Introduction

This report details the analysis and initial interpretations of the flotation samples from Sakushu-Kotoni-Gawa. The data reported herein were identified and quantified in December of 1984 with some analysis continuing until the time of this writing. The purposes for collecting the plant remains were a) to describe plant use patterns in the Ezo-Haji phase (Yoshizaki & Okada 1984) and b) to test for the existence of plant husbandry. The latter test was important because of previous discoveries of a few carbonized cultigen remains from three sites on Hokkaido dating to roughly the same time period as Sakushu-Kotoni, as well as agricultural tools from several other sites (Ishizuki 1975; Okada and Yamada 1982). In this first analysis of flotation samples from the ninth century in Hokkaido, the plant husbandry hypothesis has been confirmed. The quantities, taxonomy, and metric data regarding the cultigens, along with a discussion of wild and weedy taxa and their implications to understanding Ezo-Haji subsistence are outlined.

The Samples

Some 150 soil samples were floated by the excavation staff utilizing a form of the bucket method outlined in Crawford (1983). The light fractions were decanted into fine gauze rather than geological sieves. The gauze succeeded in collecting a large quantity of millet ranging from about 0.8 mm in minimum width, as well as smaller weed seeds. The carbonized seeds* were separated from their light fraction matrix over a two year period. This analysis pertains to the resulting seed and fruit portion only. Contents of small samples were examined in their entirety. Larger samples were not because of extreme time constraints; 30–50% of these samples were carefully examined and the contents of the remaining portion estimated on the basis of the examined components. Identifications and quantifications are summarized in (Tab. 1–15)

Nearly 197g. of carbonized material have been analyzed to date. Approximately 200 to 210g. of sorted remains have not yet been examined. The unexamined samples number 65, averaging 3.0 to 3.2g. per sample. In the material examined so far are 116,422 seeds. Assuming that the unexamined light fractions have a similar composition, the total sample from Sakushu-Kotoni is expected to contain approximately 234,000 items, mostly cultigen seeds. The samples are from Houses 2 and 3, external house pits, areas of burned soil (e.g. unit 22-16) and refuse dumps outside houses (e.g. units 17-10 through 18-10).

Identifications

Thirty-two plant taxa comprise the collection reported here. Ten of these are cultigens. An additional 16 taxa are identifiable (64 seeds) but not yet classified (unknown). Some unidentifiable specimens are present. Tab. 1–14 summarizes the taxa that occur in the samples. Items are listed in the same order that they appear in Tab. 1–15.

The non-cultigens (1679 items) consist of weedy annuals (46% of non-cultigens), fleshy fruits (47%), and four other taxa (7%) (Plate 1). Several species of *Polygonum* (11) are present, but the lenticular *P. densiflorum* is the most common. Nineteen achenes are likely *P. sachalinense* while eight specimens are unidentified, trigonous achenes. Caryopses of wild grasses in the sample belong

* Department of Anthropology, Erindale Campus, University of Toronto, Ontario, Canada

to a number of yet unidentified taxa except for the 109 specimens of *Echinochloa* (12). The unidentified grass seeds are mainly two types. One appears to be in the Paniceae tribe, with flat, rugulate caryopses measuring 1.2 by 0.9 mm. The second type is similar to the Type 2 grass illustrated in Crawford (1983:37). The *Echinochloa* seeds measure, on average, 1.5 by 1.1 mm. *Echinochloa* has been identified in Jomon samples from the Kameda Peninsula where the seeds increase in size by about 15% over a period spanning the end of the Early Jomon to the end of the Middle Jomon (1000 to 1500 year span) (Crawford 1983). The grass is genetically flexible and phenotypically variable. For example, *E. crus-galli* var. *oryzicola* Ohwi is a rice mimic in paddy fields. It is a large seeded form (Barrett 1983). Although rice is present at Sakushu-Kotoni, there is no evidence that the *Echinochloa* here is a large seeded rice mimic, nor does it appear to be a cultigen.

Two other herbaceous weeds, *Rumex* (14) and *Chenopodium* (15) are present. Both are present in archaeological collections from the Kameda Peninsula (Crawford 1983). The latter taxa cannot be identified to species at the moment, but the first is likely either *R. acetosa*, *R. japonicus* or *R. obtusifolius* and the latter is probably *C. album* or *C. ficifolium*. The possible identifications are based on the size range of the specimens (see Crawford 1983 for discussion). Plants in this herbaceous weedy annual group can be used for their seeds and greens except for the grasses which could be used as a grain source.

Fleshy fruit seeds are an important component of the Sakushu-Kotoni assemblage. Although they represent 47% of the non-cultigen seeds, their importance here is probably underestimated by the percentage figure. The weedy annuals are prolific seed producers in comparison with fleshy fruit producing plants. Fleshy fruits are usually ingested seeds and all, so again, the probability of fleshy fruit seeds being carbonized is lowered. The weedy annuals probably represent fortuitous weed seed inclusions in the cultigen harvest and to some extent represent a source of leafy vegetable food. The fleshy fruit group is more likely a food source.

Five of the fleshy fruit taxa have been previously reported from archaeological sites in Hokkaido. Three, *Solanum nigrum* (16), *Physalis* (17), and *Empetrum* (18), are reported here for the first time from archaeological contexts in Hokkaido. The first two are herbaceous weeds, common in waste ground and areas disturbed by cultivation. *Solanum nigrum* berries (16) are toxic when green, but present no problem once ripe. The young leaves of this plant are edible as well (Heiser 1969). *Physalis alkekengi* (17) is a weedy, perennial herb producing an edible berry within a bladdery calyx (Ohwi 1965:788). This is the only Asian species in northern Japan today. It is also found throughout Korea and northeastern China (ibid). It is often cultivated today, and it is a possible cultigen at Sakushu-Kotoni. *Empetrum nigrum* is an evergreen shrub that is common in Hokkaido and grows in dense mats (Ohwi 1965). It grows along the Japan sea coast today, and not in the immediate Sapporo area. Whether or not its distribution was different in the ninth century is unknown.

The remaining fleshy fruit taxa are all discussed in Crawford (1983). Of all the taxa in this group, *Sambucus* is the most common in the site vicinity today. As reported by Hirakawa elsewhere in this volume, much of the fish wier was constructed of elderberry wood. *Cornus* and *Vitis*, besides providing edible berries, are reportedly important sources of raw materials for making items such as *inau* and other sacred symbols (Sarashina and Sarashina 1976).

Within the "Other" category are four taxa, one of which, *Allium* (17), is in significant abundance in five samples from the large midden east of House 2. The remains of *Allium* are not seeds; they are carbonized sessile bulbils which form in place of flowers on some members of this genus. Ohwi (1965) lists only one species, *Allium grayi* (nobiru), in Japan with this charac-

Tab. Ⅱ-14 Plant Taxa Identified in the Sakushu-Kotoni-Gawa Flotation Samples

Cultigens

1. <i>Hordeum vulgare</i>	barley	<i>o-mugi</i>
2. <i>Triticum</i> c.f. <i>T. aestivum</i>	wheat	<i>ko-mugi</i>
3. <i>Panicum miliaceum</i>	proso or broomcorn millet	<i>kibi, inakibi</i>
4. <i>Setaria italica</i>	foxtail millet	<i>awa</i>
5. <i>Oryza sativa</i> var. <i>japonicum</i>	rice	<i>kome</i>
6. <i>Vigna angularis</i> var. <i>angularis</i>	adzuki	<i>azuki</i>
7. <i>V. radiatus</i> var. <i>radiatus</i>	mung bean	<i>ketsuru-azuki</i>
8. <i>Cucumis melo</i>	melon	<i>uri, makuwa-uri</i>
9. <i>Perilla frutescens</i> var. <i>crispa</i>	beefsteak plant	<i>shiso</i>
10. <i>Cannabis sativum</i>	hemp	<i>asa</i>

Weedy Grains/Greens

11. <i>Polygonum</i> sp.	knotweed	<i>tade zoku</i>
<i>P. densiflorum</i>		<i>inu-tade</i>
<i>P. sachalinense</i>		<i>o-itadori</i>
12. <i>Echinochloa crusgalli</i>	barnyard grass	<i>inubie, ta-inubie</i>
13. Gramineae	grass family	<i>ine ka</i>
14. <i>Rumex</i> sp.	dock	<i>gishi-gishi zoku</i>
15. <i>Chenopodium</i> sp.	chenopod, goosefoot	<i>akaza zoku</i>

Fleshy Fruits

16. <i>Solanum nigrum</i>	black nightshade	<i>inu-hozuki</i>
17. <i>Physalis</i> sp. c.f. <i>P. alkekengi</i>	Chinese lantern plant	<i>hozuki</i>
18. <i>Empetrum nigrum</i>	crowberry	<i>gankouran</i>
19. <i>Rubus</i> sp.	bramble	<i>ki-ichigo zoku</i>
20. <i>Vitis</i> sp.	grape	<i>budo zoku</i>
21. <i>Actinidia</i> sp.	silvervine	<i>matatabi, kokuwa</i>
22. <i>Sambucus</i> sp. c.f. <i>S. sieboldiana</i>	elderberry	<i>ezo-niwatoko</i>
23. <i>Cornus</i> sp.	dogwood	<i>mizu-ki zoku</i>

Others

24. <i>Rhus</i> sp.	sumac	<i>urushi zoku</i>
25. <i>Ostrya japonica</i>	ironwood	<i>asada</i>
26. <i>Potomegaton</i>	pondweed	<i>hiru-mushiro zoku</i>
27. <i>Allium</i> c.f. <i>A. grayi</i>	onion	<i>negi zoku; c.f. nobiru</i>

teristic. *Nobiru* is found in lowland meadows, and would have probably been available close to the hamlet. Collection of *nobiru* may not always have taken the Ainu outside the hamlet. Sarashina and Sarashina (1976:160) mention that *nobiru* could be harvested from the back yards of Ainu houses. No mention is made of whether or not the plant was encouraged to grow there or in gardens. Nevertheless, both Sarashina and Sarashina (Ibid.) and Ohnuki-Tierney (1974) report that *nobiru* (presumably *nobiru* in the case of Ohnuki-Tierney who refers to “leeks”) was minced and added to a variety of foods. Large quantities of *Allium* were stored and dried; harvesting took place in July to mid-August (Ohnuki-Tierney 1974:29).

Three other taxa are in the samples, but they are not listed in the Tables. The first is a single possible *Phelodendron amurense* (*kihada*, Amur corktree) in a sample from 18-11[00]. Fragments of *Juglans ailanthifolia* (*onigurumi*, walnut) are in the same sample as well as from 18-10[03] for a total of 0.69g. Finally, three pea-like legume seeds are present in the same midden. Their seed coats are missing, and their diameters are 2.4, 2.7 and 3.0 mm. The genus appears to be *Lathyrus* sp. (*renri-so zoku*, wild pea), with four possible species in Hokkaido (Plate 1c). The specimens bear close resemblance to *Lathyrus maritimus* (L.) Bigel (*L. japonicus* Willd.) (beach pea, *hama-endo*), a species common along beaches in Hokkaido today.

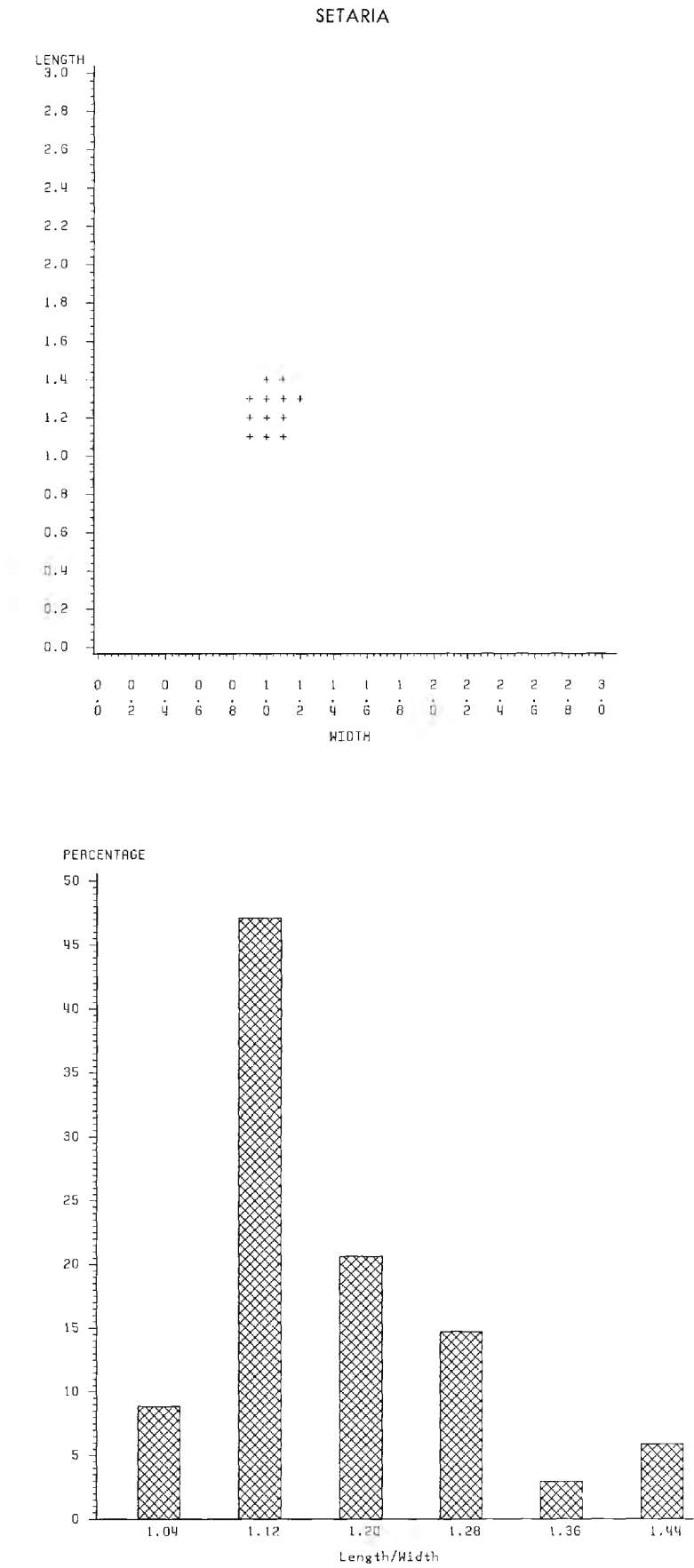
Broomcorn millet (3) and foxtail millet (4), are numerically the dominant cultigens in the samples (Plate 2). Few specimens are not hulled. They are found in nearly all contexts. A third group of large, panicoid grass seeds are difficult to further classify but seem to be either broomcorn or foxtail millet; these seeds are the “unidentifiable” millet in (Tab. [1]-15). Another type, barnyard millet (*Echinochloa utilis* or *hie*) may be present in the samples, but its presence has not been confirmed. The distinction between barnyard and broomcorn millet is subtle, but for the present, none is clearly identifiable as barnyard millet. This millet has not yet been found from any prehistoric Hokkaido site, although it is known from three historic sites in southwestern Japan (Matsutani 1984).

PL. [1]-23, 24 illustrate the size distribution of the two millet taxa. The sample of measured broomcorn millet numbers 108 while a sample of 105 foxtail millet seeds was measured. The length vs. width plot of foxtail millet shows few points due to considerable overlap of measurements. Both sets of measurements fall within the range of variation reported for European specimens (Van Zeist 1968).

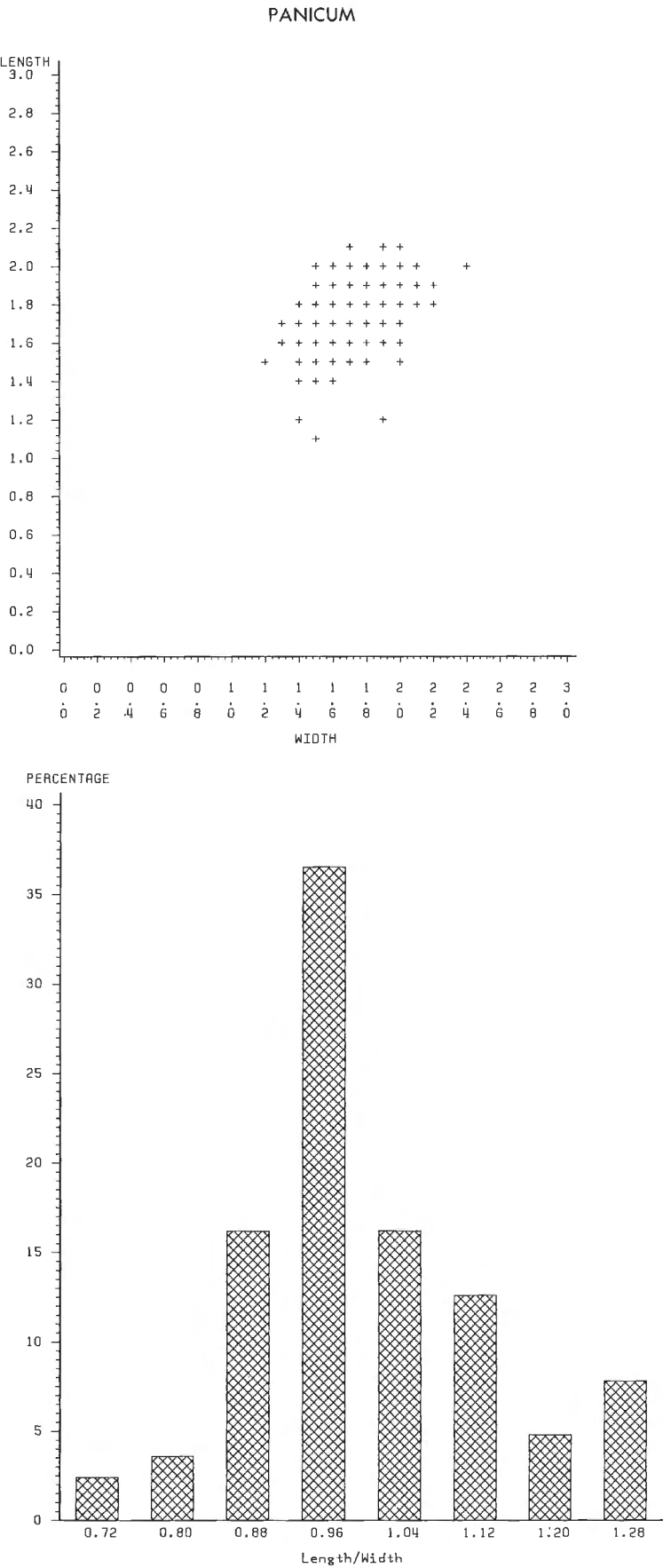
Next to the millets, the numerically most common cultigen at Sakushu-Kotoni is *barley*. The barley is hexastichous, with both hulled and naked grains apparent. Length-width measurements are summarized in PL. [1]-25. The measurements fall within the range reported by Van Zeist (1968) for northern European specimens. Although Asian barleys are relatively unique, in particular by being small seeded (Takahashi 1964), the barley in this sample is not small (PL. [1]-25). Other prehistoric barley grains from Japan are relatively small, but except for the single measured grain from Uenoharu, Kyushu (3.8 by 2.0 mm) (Kotani 1972), they are within the Sakushu-Kotoni range.

The Sakushu-Kotoni *wheat* is unique (see PL. [1]-26, PL. [2]-346 and PL. [2]-347). The sample of 106 measured caryopses has mean length and width measurements outside the range of the small club wheat, *Triticum aestivum* ssp. *compactum*, which differs from bread wheat by one gene (Van Zeist 1978:53). The maximum width of the caryopses is toward the embryo end of the caryopses, making them somewhat drop shaped in contrast to the club and bread wheats. Indian dwarf wheat (*T. aestivum* ssp. *sphaerococcum*) is another compact form that may have some historical and taxonomic relationship to the Ezo wheat, but this has not been closely examined

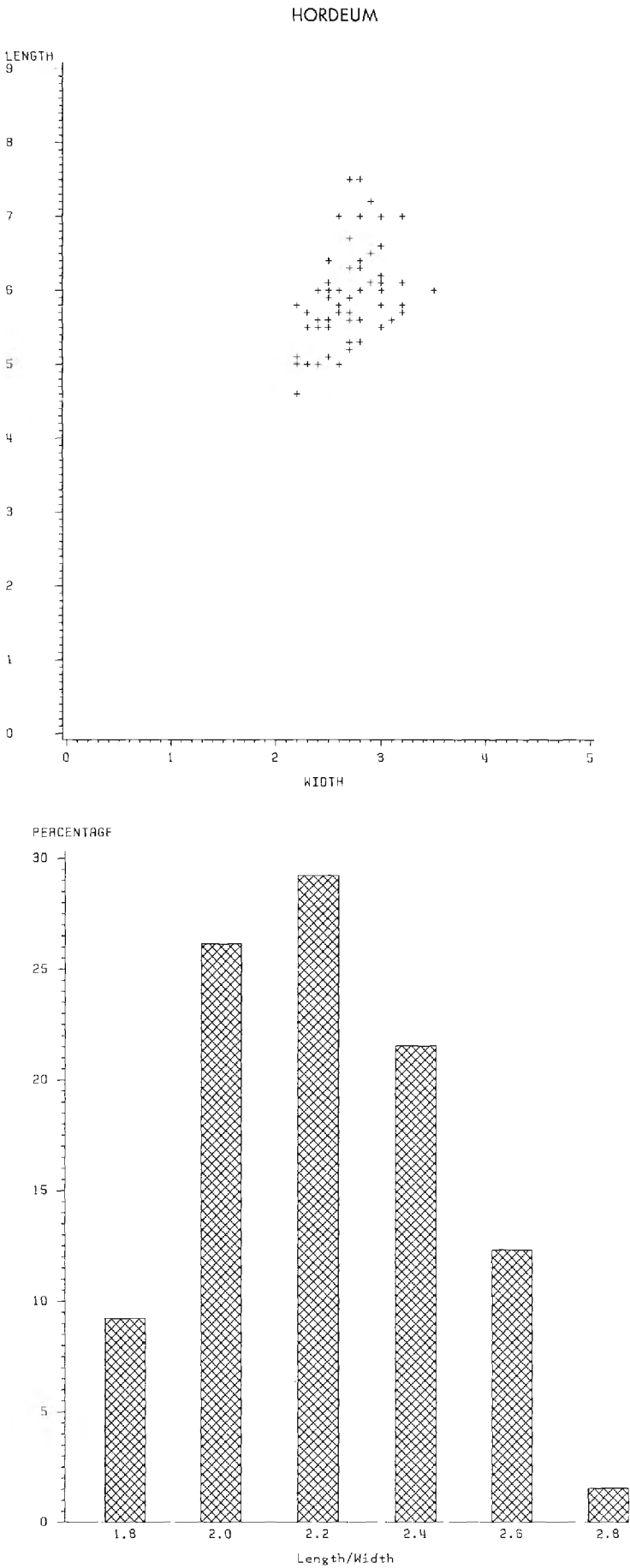
PL. Ⅱ-23 Carbonized Foxtail Millet (*Awa*): Plot of Length vs. Width (mm) and Length/Width.
n = 105, Mean L/W = 1.2, Mean L × W = 1.2 × 1.0 mm.



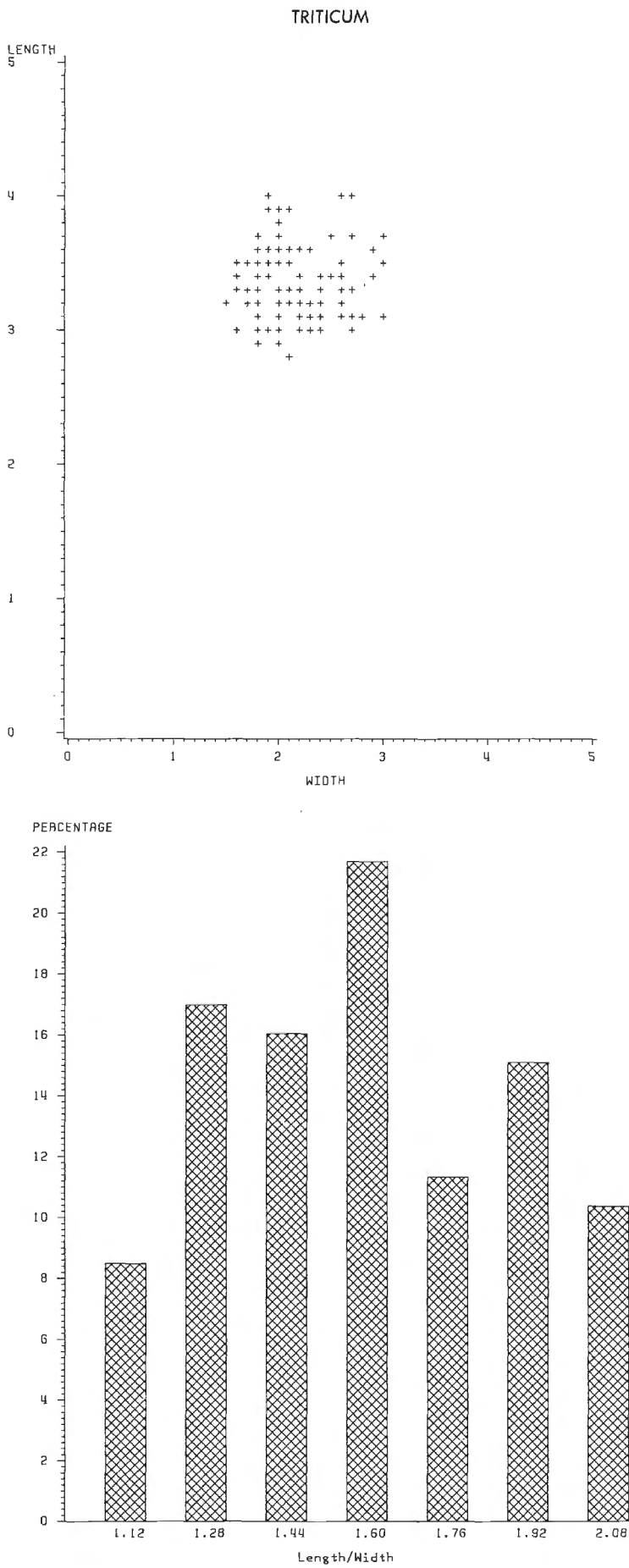
PL. Ⅱ-24 Carbonized Broomcorn Millet (*Kibi*): Plot of Length vs. Width (mm) and Length/Width.
n = 105, Mean L/W = 1.0, Mean L×W = 1.8×1.8 mm.



PL. Ⅱ-25 Carbonized Barley: Plot of Length vs. Width (mm) and Chart of Length/Width.
n = 63, Mean L/W = 2.2, Mean L × W = 5.9 × 2.7 mm.



PL. Ⅱ-26 Carbonized Wheat: Plot of Length vs. Width (mm) and Chart of Length/Width.
n = 106, Mean L/W = 1.5, Mean L × W = 3.4 × 2.2mm.



at the time of writing. The mean length/width ratio (PL.1-26) is between that reported for some compact forms and regular bread wheat (e.g. Janushevich 1984:275, 276; Van Zeist 1968:126, 128). In a way, the Sakushu-Kotoni wheat is similar to emmer (*T. dicoccum*), which occasionally has carbonized seeds which are drop shaped. These caryopses are wider at the end opposite the embryo. Emmer caryopses are larger than the Sakushu-Kotoni specimens as well, and are not nearly so plump (L/W ratios of emmer are larger than 1.6 for the most part).

The half-dozen rice caryopses from Sakushu-Kotoni are all the short-grained variety, *japonicum*. One measurable seed is 4.1 by 2.6 mm. (length/width = 1.6). Sato (1971) classifies rice caryopses from over 100 Yayoi sites with length/width ratios between 1.3 and 2.0 as short-grained as well. All prehistoric rice so far recovered in Japan is *Oryza sativa* ssp. *japonicum*.

Within the 61 specimens of the legume, *Vigna*, two types are present. These are adzuki (6) and mung (7). No attempt has been made to separate the whole sample of beans into the two taxa; however, examples of each have been examined. Mung appears to be rare in the assemblage. A sample of 13 beans were measured and have mean (range) dimensions in millimeters of 6 (4.8 – 8.0), 4.1 (3.0 – 5.7) and 3.8 (2.3 – 5.0) mm.

One broken melon (8) seed has been identified. It is not measurable, but compares well with reference specimens of cultigen melon seeds. Not including this specimen, 5076 archaeological melon seeds from 102 sites have been reported in Japan (Fujishita 1984:64). 69% are from sites later than the Yayoi period (later than A.D. 300).

A few specimens of beefsteak plant (9) are in the Sakushu-Kotoni collection. The plant was likely used as an herb and for its oil producing seeds. This is a red-leaved form of the plant. A green leaved form (*P. frutescens* var *japonica:egoma*) has seeds which are generally distinguishable from *shiso* seeds.

Another relatively abundant cultigen seed is that of hemp (10), a plant indigenous to central Asia (Bailey 1976:218; Simmonds 1976:203). This plant has several uses: as an oil, food, fibre and drug source. Hemp grown in the north is usually used for oil, food, and fibre. The Ainu used hemp in weaving clothing and making baskets.

Discussion

This report has dealt with an initial presentation of the Sakushu-Kotoni-Gawa plant remains. A number of technical and interpretive aspects of the remains have not been attempted at this stage. For example, Dennell (1972) and Hillman (1984) have documented techniques for determining crop processing methods using among other factors, grain size variation as a clue to sieving procedures. Metric data have been presented here to describe intra-specific variation; a full documentation of such variation by sample will be required eventually.

One important aspect of this ongoing research is that at Sakushu-Kotoni we have incontrovertible evidence for an ancestral Ainu food production phase. This phase was suspected from a few sporadic discoveries of plant remains throughout Hokkaido, but confirmation did not exist until the research on this collection. References to the early evidence can be found in English in Aikens and Higuchi (1982:307) and Crawford (1983:25). Two discussions in Japanese are by Ishizuki (1975) and Okada and Yamada (1982). To briefly summarize the interpretive status of the few cultigen reports until 1982, either the cultigens were considered sporadic imports because the few reports until then were coastal, or there was, indeed, an early agricultural phase in Hokkaido. The nearly quarter of a million carbonized seeds from Sakushu-Kotoni from excellent context, demonstrate that the latter was the case. Rice paddies and dry fields are common in the area

(Ishikari Plain) today. The Plain receives an average annual precipitation of 1200 mm. Between May and September are 2600 cumulative mean temperature degrees (Hokkaido Development Bureau 1983). Rice, for example, today requires more than 2500. The local environment is quite suitable for agriculture today.

This interpretation raises several questions. When did this plant husbandry begin and how did it develop? What became of it? What role does plant husbandry play in understanding Ainu history? Regarding the last question, the Ainu were considered to be foragers until 1884. In that year, the Japanese government instituted a programme to encourage the Ainu to take up agriculture (Watanabe 1967:72). Agriculture seems not to have been entirely new to the Ainu. Apparently, some Ainu in the Tokapchi and Azuma Valleys had done some small scale farming (Watanabe 1972:41). According to Watanabe, households grew foxtail millet (*awa*) and barnyard millet (*hie*) in plots of 1000–2000 m² on river banks. Hayashi (1975), too, has examined ethnohistoric data and has interviewed Ainu elders concerning this problem. The Ainu, according to Hayashi's data grew *awa*, *hie*, barley, wheat, *azuki*, pea, *daizu* (soy bean), *daikon* (radish), hemp, *negi* (leek or onion, *nobiru*?), cucumber, tobacco, a potato and two types of American squashes. Rice was known to the Ainu but was apparently imported. Naked barley was the most important of the *mugi* group which is also comprised of wheat (*komugi*) and hulled barley. Wheat was grown, but was not an important crop. All of these plants but *hie* (barnyard millet), according to Ainu myth, were introductions (Ibid.). Two legumes, *Vicia* and *Crotalaria* were reportedly harvested from gardens as well. This plant husbandry likely has a longer history in Hokkaido than previously suspected, a history needing considerable research.

Ten taxa of cultigen seeds appear in varying quantities in the samples. Another cultigen remain which has not been analyzed yet is the considerable quantity of barley and/or wheat rachis fragments. Including these fragments, the assemblage of carbonized plant remains are consistent with an interpretation that the Sakushu-Kotoni residents were involved in plant husbandry. Cultigen plants must have been an important part of their diet. No sickles, hoes or plough shares have been identified at the site yet, but the former are reported from three Ezo sites while the latter have been found at two Ezo sites (Okada and Yamada 1982).

Most of the cultigens at Sakushu-Kotoni are at their northernmost occurrences in prehistoric Japan. Foxtail millet, rice, melon and wheat are reported for the first time in prehistoric Hokkaido. Of these plants, rice and melon are so rare as to suggest they were not grown locally. I suspect, however, that they were grown at Sakushu-Kotoni but were not an important part of the plant husbandry system.

There are two cultigens conspicuous in their absence from the sample: buckwheat (*Fagopyrum esculentum* or *soba*) and safflower (*Carthamus tinctorius* or *benibana*). A single carbonized buckwheat seed was recovered from the late Early Jomon Hamanasuno site in southwestern Hokkaido in 1974 (Crawford, Hurley and Yoshizaki 1976; Crawford 1983). Since then, pollen analysis from archaeological contexts suggests the presence of buckwheat in northern Japan by the Final Jomon (Yamada 1980) and buckwheat pollen is known from several Zoku Jomon and Ezo period sites on Hokkaido (Yamada 1975, 1978, 1979; Okada and Yamada 1982:28). The presence or absence of buckwheat husbandry in prehistoric Japan remains a problem. To compound the issue, preservation characteristics may influence buckwheat seed recovery. In the Netherlands, the earliest carbonized buckwheat (a single seed) comes from Dommelin (Van Vilsteren 1984:230). In later periods, the prehistoric buckwheat seeds are never carbonized and come from cesspits. Carbonized seeds do not occur at the same sites (Ibid.). Carbonized buckwheat reported from the Ezo site of

Tab. 11-15 Sakushu-Kotoni-Gawa Flotation Samples: Seed Taxa as Percentage Total Number of Seeds per Sample

Grid	Pt	Cultigens										Weedy Grains/Greens				
		Hordeum	Triticum	Unidentifiable Millet	Panicum (Kib)	Setaria (awa)	Oryza	Vigna	Cucumis	Perilla	Cannabis	Polygonum	Echinochloa	Gramineae	Rumex	Chenopodium
4-7	-	-	-	50.0	50.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4-8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50.0	-	-	-
5-7	-	-	-	-	-	6.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.3
5-9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6-10	-	-	-	-	15.0	10.0	-	-	-	-	5.0	-	65.0	-	-	5.0
7-8	-	-	-	-	-	12.5	-	-	-	-	-	12.5	-	-	-	-
7-8/9	-	-	-	-	-	15.0	-	-	-	-	-	35.0	-	-	-	-
7-9[33]	4	-	-	-	-	90.5	-	-	-	-	-	2.0	4.7	-	-	-
8-7	-	-	-	2.9	5.9	11.8	-	-	-	2.9	-	5.9	-	-	-	-
8-7	6	9.1	27.3	-	9.1	36.4	-	-	-	-	-	9.1	-	-	-	-
8-8	-	-	-	-	25.0	12.5	-	-	-	-	-	-	-	12.5	-	-
8-9[02]	4	12.1	2.4	-	37.1	43.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8-9[03]	-	21.2	8.7	-	26.2	42.7	-	-	-	-	-	0.1	0.1	-	-	-
8-8	6	-	-	-	-	91.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8-10	-	-	-	-	25.0	50.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9-10	-	-	-	-	33.3	33.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9-13	-	-	-	-	59.1	36.4	-	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-
15-16	-	-	-	-	21.7	78.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16-11	-	-	-	-	50.0	50.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16-19	-	-	-	-	17.9	25.0	-	-	-	-	-	14.3	-	-	-	-
16-22	-	-	9.1	-	-	27.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17-10[23]	-	63.5	11.8	-	19.1	1.9	-	-	-	-	0.3	-	-	-	-	-
17-11[02]	-	*	*	*	23.6	75.8	-	*	-	*	*	0.4	-	-	*	-
17-11[12]	-	0.1	-	*	17.7	81.3	*	*	-	*	*	0.4	-	0.1	*	-
17-11[21]	-	3.8	2.1	-	43.1	49.2	-	0.5	-	-	-	0.1	0.1	-	-	-
17-11[22]	-	2.5	0.3	-	38.8	51.4	-	*	-	-	-	2.4	0.5	0.2	2.3	-
17-11[23]	-	7.9	2.6	-	-	-	-	-	-	-	10.5	-	78.9	-	-	-
17-11[30]	-	22.5	10.7	14.0	44.2	7.8	*	*	*	-	0.5	*	*	-	-	-
17-11[31]	-	29.7	11.2	0.1	21.6	35.1	-	-	-	*	-	0.1	0.1	0.5	-	*
17-11[32]	-	4.3	1.1	-	59.8	33.7	-	-	-	-	-	0.1	0.2	*	-	-
17-12[11]	-	7.1	21.4	-	21.4	-	7.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17-12[20]	-	0.5	1.3	-	66.8	26.6	-	0.3	-	-	-	1.8	-	-	-	-
17-16	-	-	-	-	42.9	14.3	-	-	-	-	-	28.6	-	-	-	-
18-9	-	-	-	-	23.1	42.3	-	-	-	-	-	34.6	-	-	-	-
18-10	-	0.9	1.7	7.8	36.2	27.6	-	-	-	-	-	-	-	-	0.9	1.7
18-10[03]	-	11.6	1.2	-	18.4	65.1	-	-	-	-	*	*	-	0.3	-	-
18-11[00]	-	26.4	7.1	-	11.5	53.4	*	*	-	-	-	0.1	-	0.2	-	-
18-12	-	-	-	-	50.0	37.5	12.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19-10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19-11	-	-	-	-	-	50.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19-13	-	-	-	-	12.5	12.5	-	-	-	-	-	4.2	-	-	-	-
19-15	-	8.0	56.0	-	8.0	20.0	-	-	-	-	-	-	4.0	-	-	-
19-16	-	-	-	-	20.0	40.0	-	-	-	-	-	20.0	-	-	-	-
19-18	-	-	-	-	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20-12	-	-	-	-	30.0	70.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20-14	-	-	-	18.2	18.2	-	-	-	-	-	-	18.2	-	-	-	-
20-18	-	-	-	-	5.6	83.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21-12	-	-	-	-	10.0	50.0	-	-	-	-	-	30.0	-	-	-	-
21-14	-	-	-	-	5.3	57.9	-	-	-	-	-	5.3	-	-	-	-
21-15	-	-	-	-	66.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22-15	-	-	-	-	-	80.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22-16	-	-	-	-	2.0	92.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26-15	-	-	-	-	-	66.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
26-21	-	-	-	-	20.0	80.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28-16	-	-	-	-	29.5	65.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
27-15	-	-	-	-	-	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28-17	-	12.5	-	-	31.3	56.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30-16	4	-	-	4.8	64.3	28.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Total Number		11443	4108	3158	34037	61600	6	61	1	10	136	429	106	90	140	5

a: less than 0.01g * less than 0.1%

Fleshy Fruits								Others						Weight(g)	Total Number
Solanum	Physalis	Empetrum	Rubus	Vitis	Actinidia	Sambucus	Cornus	Rhus	Ostrya	Potomegaton	Allium	Undentifiable	Unknown		
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	2
-	50.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	2
11.1	-	-	-	-	-	43.8	-	-	-	-	-	18.8	25.0	10.04	16
-	-	-	-	-	-	66.7	-	11.1	-	-	-	11.1	-	0.01	9
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.02	20
-	25.0	-	-	62.5	-	-	-	-	-	-	-	12.5	-	a	8
-	-	-	-	-	10.0	-	-	-	-	-	-	-	15.0	0.02	20
8.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.0	0.7	0.06	148
-	-	-	-	-	-	55.9	-	-	-	-	-	-	5.9	0.04	34
-	-	-	-	-	-	19.1	-	-	-	-	-	-	-	0.02	11
-	-	50.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.02	8
-	-	1.6	-	-	-	3.2	-	-	-	-	-	-	-	0.2	124
-	-	0.4	-	-	-	0.2	-	-	-	0.2	-	-	-	2.65	1341
-	-	-	-	8.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	12
-	-	-	-	-	-	12.5	-	-	-	-	-	12.5	-	a	8
-	-	-	-	-	-	33.3	-	-	-	-	-	-	-	a	3
-	-	-	-	-	-	-	2.3	-	-	-	-	-	-	0.14	44
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.05	23
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	2
-	-	-	-	-	-	28.6	-	-	-	-	-	14.3	-	0.06	28
-	-	-	-	-	-	45.5	-	-	-	-	-	18.2	-	0.02	11
-	-	0.8	-	1.0	-	0.3	-	-	-	-	-	1.3	-	3.17	619
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*	*	35.23	41210
0.1	0.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.1	0.1	*	4.74	6391
-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	*	-	-	-	0.4	12.05	7447
0.1	0.4	-	-	0.3	0.1	*	-	*	-	-	-	0.4	0.1	6.16	5796
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.14	38
-	*	-	-	*	-	-	-	-	-	*	0.2	-	-	59.22	22416
-	0.1	0.3	*	0.1	0.1	0.1	-	-	-	-	0.5	0.3	-	9.18	3088
0.1	*	0.1	-	0.1	-	-	-	0.1	-	-	-	0.2	0.3	5.50	3955
-	-	-	-	42.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	14
0.2	0.7	-	-	1.3	-	0.1	-	-	-	-	-	0.4	-	0.75	1204
-	14.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	7
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.02	26
-	-	-	-	-	-	19.8	-	-	-	-	-	1.7	1.7	0.03	116
-	2.9	-	*	-	0.2	-	-	-	-	-	*	0.1	-	14.09	10836
-	*	0.7	-	0.1	*	-	-	-	-	-	0.2	0.2	*	37.42	10980
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.02	8
-	-	-	-	-	-	100.0	-	-	-	-	-	-	-	0.01	18
-	-	-	-	-	-	50.0	-	-	-	-	-	-	-	a	4
-	-	-	-	-	-	66.7	-	-	-	-	-	4.2	-	0.01	24
-	-	-	-	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.10	25
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20.0	-	a	5
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	1
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.01	10
-	-	-	-	-	-	45.5	-	-	-	-	-	-	-	0.01	11
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11.1	-	0.01	18
-	-	-	-	-	-	10.0	-	-	-	-	-	-	-	0.01	10
-	-	-	26.3	-	-	5.3	-	-	-	-	-	-	-	0.01	19
-	-	-	-	-	-	33.3	-	-	-	-	-	-	-	a	3
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20.0	-	a	5
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6.0	-	0.02	50
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	33.3	-	0.01	6
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	5
-	-	-	-	-	-	4.1	-	-	-	-	-	0.8	-	0.10	122
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	a	3
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.03	16
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.4	-	0.05	42
19	368	110	10	104	36	136	1	5	1	7	102	129	64	19688	116422

Toyotomi (Kohno 1959) have now been identified as safflower (Crawford 1985; Crawford and Yoshizaki, in preparation). These are the seeds I reported as an unknown composite (Crawford 1983:25). Safflower is native to the Middle East (Knowles 1976:31) and is known to have been in western Japan by the eighth century (Yamazaki 1961).

The wild and weedy component of the plant assemblage likely represents fortuitous inclusions in the case of rare items and weed seeds and utilized plants in other cases. The knotweeds, grasses, dock and chenopod are useful as both grain and green, leafy vegetable food sources. Such seeds can also appear as a result of contamination during harvesting. All of the fleshy fruits but crowberry, which is not found in Sapporo or around Sakushu-Kotoni today, are likely part of the anthropogenic flora established around and in the Sakushu-Kotoni hamlet by the numerous ecologically disruptive activities of the inhabitants. Chinese lanternplant is an unconfirmed garden plant and may have become established in Hokkaido with the prehistoric introduction of cultigens.

This plant remains assemblage is somewhat similar to Late Woodland (Iroquoian) assemblages I am familiar with in Ontario, Canada. The comparison is appropriate because both Ontario and Hokkaido are northernmost occurrences of food production in their respective areas, and both Late Woodland and Ezo societies were unranked, maintained foraging as an important activity, and had similar technologies. All of the genera of fleshy fruits except for *Actinidia* and *Empetrum* are known from such Ontario sites (Crawford 1985; Monckton 1985). In addition, *Polygonum*, Gramineae, *Chenopodium*, *Rhus* and *Ostrya* are part of such assemblages. The habitats around plant husbandry oriented communities in Ontario are analogous to those from which the plant remains at Sakushu-Kotoni were derived. This further supports the contention of a local plant husbandry adaptation in Ezo period Hokkaido.

Acknowledgements

I would like to acknowledge the support of Yoshizaki Masakazu who facilitated my contribution to the over all Sakushu-Kotoni project. The Office of Research Administration of the University of Toronto provided a grant to support the plant remains analysis. I would also like to thank the staff of the Salvage Archaeology Center of Hokkaido University, and Hayashi Kensaku, Kikuchi Toshihiko, Okada Atsuko, Okada Hiroaki and Yokoyama Eisuke in particular, for their part in making this research come to fruition. Matsutani Akiko of Tokyo University made the original identification of rice from Sakushu-Kotoni. Hirakawa Yasuhiko and Tsubakisaka Yasuyo did the preliminary sorting of the flotation samples. The scanning electron microscope photographs were taken in the agriculture department of Hokkaido University with the assistance of Hirakawa Yasuhiko. Hiroto Takamiya and Jane Macaulay assisted me in the Toronto lab. A final note of thanks must go to Clara Stewart, who typed this chapter with her usual patience and skill.

REFERENCES CITED

- Aikens, C. Melvin, and Takayasu Higuchi
1982 *Prehistory of Japan*. New York: Academic Press.
- Bailey, Liberty Hyde
1976 *Hortus Third*. MacMillan Publishing Co., Inc., New York.
- Barrett, Spencer C.H.
1983 Crop mimicry in weeds. *Economic Botany* 37(3):255-282.
- Crawford, Gary W.
1985 Subsistence Ecology of the Seed Site. A Report on Ontario Heritage Foundation Grant ARG-156
- Crawford, Gary W.
1983 *Palaeoethnobotany of the Kameda Peninsula Jomon*. Ann Arbor, Michigan: Anthropological Papers, Museum of Anthropology, University of Michigan No. 73.
- Crawford, Gary W., William M. Hurley and Masakazu Yoshizaki
1976 Implications of plant remains from the Early Jomon, Hamanasuno site. *Asian Perspectives* XIX(1):145-148.
- Crawford, Gary W. and Masakazu Yoshizaki (in preparation)
Ainu Ancestors and Prehistoric Asian Agriculture.
- Dennell, R.W.
1972 The Interpretation of Plant Remains: Bulgaria. In *Papers in Economic Prehistory*, edited by E.S.Higgs, pp. 149-60. London: Cambridge University Press.
- Fujishita, Noriyuki
1984 *Shutsudo itai yori mita uri-ka shokubutsu no shurui to henkan to sono riyoho* (Archaeological cucurbits: types, temporal change and their use). In *Kobunkazai no Shizen-kagakuteki Kenkyu*, edited by Kobunkazai Henshu Linkai, pp. 638-654. Tokyo: Dohosha.
- Hayashi, Yoshishige
1965 *Ainu no noko bunka* [Ainu Agriculturalists]. Tokyo : Keiyusha
- Hillman, Gordon
1984 Interpretation of archaeological plant remains: the application of ethnographic models from Turkey. In *Plants and Ancient Man* edited by W. Van Zeist and W.A. Casparie, pp. 1-42. A.A. Balkema: Rotterdam.
- Hokkaido Development Bureau
1983 *Agricultural Development in Hokkaido*. Agriculture and Fisheries Department, Sapporo, Hokkaido, Japan.
- Ishizuki, Kisao
1975 *Satsumon shiki bunka ni okeru noko sakumotsu* [Agriculture Crops in the Satsumon Phase]. *Kodaigaku Kenkyu* 74:36-38.
- Janushevich, Z.V.
1984 The specific composition of wheat finds from agricultural centres in the USSR. In *Plants and Ancient Man* edited by W. Van Zeist and W.A. Casparie, pp. 267-276. A.A. Balkema: Rotterdam.
- Kohno, Hiromichi
1959 *Hokkaido shutsudo no ogata U jikei tekki ni tsuite*. A u-shaped iron tool excavated in Hokkaido). *Hokkaido Gakgei Daigaku Kokogaku Kenkyukai Renrakushi*.
- Kotani, Yoshinobu
1972 *Economic Bases During the Latter Jomon Period in Kyushu, Japan: A Reconsideration*. Ph.D. Dissertation, University of Wisconsin. Ann Arbor: University Microfilms.
- Monckton, Stephen
1985 Investigations into Huron paleoethnobotany: an interim report. On file at the Ontario Heritage Foundation.

Ohnuki-Tierney, Emiko

- 1974 *The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.

Ohwi, Jisaburo

- 1965 *The Flora of Japan*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.

Okada, Atsuko and Goro Yamada

- 1982 *Hokkaido ni okeru noko no kigen ni kansuru yosatsu* (A short note on the origin of agriculture in Hokkaido). In *Hokkaido ni okeru Noko no Kigen* (The origin of agriculture in Hokkaido) edited by T. Umehara, pp. 26-34. Sapporo.

Sarashina, Genzo, and Koh Sarashina

- 1976 *Kotan seibutsuki* I (Kotan Ethnobiology I). Tokyo: Hosei Daigaku Shuppan Kyoku.

Simmons, N.W.

- 1976 Hemp. In *Evolution of Crop Plants* edited by N.W. Simmons, pp. 203-204. Longman: New York.

Takahashi, R.

- 1964 Further studies in the phylogenetic differentiation of cultivated barley. *Barley Genetics* I: 19-26.

Van Vilsteren, V.T.

- 1984 The medieval village of Dommelin: a case study for the interpretation of charred seeds from postholes. In *Plants and Ancient Man* edited by W. Van Zeist and W.A. Casparie, pp. 227-235. Rotterdam: A.A. Balkema.

Van Zeist, W.

- 1968 Prehistoric and early historic food plants in the Netherlands. *Palaeohistoria* 14:41-173.

Watanabe, Hitoshi

- 1967 Subsistence and ecology of northern food gatherers with special reference to the Ainu. In *Man the Hunter* edited by Richard Lee and Irven Devore, pp. 69-77. Chicago: Aldine.
- 1972 *The Ainu Ecosystem*. Seattle: University of Washington Press.

Yamada, Goro

- 1975 *Teshio-kawaguchi iseki no kafun bunseki* (Pollen analysis from the Teshio-kawaguchi Site). In *Teshio-kawaguchi Iseki*, pp. 50-53. Teshio: Teshio-Cho Board of Education.
- 1978 *Dojo shiryo no kafun bunseki ni tsuite* (Pollen analysis from soil). In *Archaeological Research in the Naibetsu Basin*, pp. 131-133. Hokkaido: Chitose Board of Education.
- 1979 *Nayoro-shi Chitoh iseki no kafun bunseki* (Pollen Analysis of the Chitoh Site, Nayoro). Nayoro: Nayoro Board of Education.
- 1980 *Iwate-ken Kitakami-shi Kunenbashi iseki no kafun bunseki ni tsuite* (Analysis of Pollen from the Kunenbashi Site, Kitakami, Iwate Prefecture). In *Kunenbashi Site, Report Number 6*, edited by the Kitakami board of Education, pp. 63-75. Kitakami: Kitakami Bunkazai Chosa Hokoku, No. 29.

Yamazaki, Akira

- 1961 *Kusaki-zome* (Dyeing with Natural Materials). Kanagawa: Getsumeikai.

Yoshizaki, Masakazu and Okada, Atsuko

- 1984 *Kokogaku ni okeru Ezo-chi*.
In *Sozo no Sekai*, 49: pp. 80-105 Shogakukan, Tokyo.

VI-10 [炭化材]

① 炭化材の樹種鑑定結果

堅穴、土壌、焼土・炭化物集積遺構より出土した炭化材は、原形に近い形状を維持しているものと、土壌中に混じり合っている木片とがあるため、両者で取上げ法を変え、前者についてはバインダー#17を含浸させ1点ずつ、後者については浮遊選別法により各遺構ごとに一括して取り上げを行なった。それらの炭化材の出土地点や数の内訳は以下の通りであるが、浮遊選別材については出土量把握の目安としておおよその重量を示す。しかし、この値には木粉等も大量に含まれているためあくまでも目安であることに注意されたい。

① バインダー含浸材（62点）

a, 2号堅穴住居跡	7点
b, 3号堅穴住居跡	45点
c, 2号土壌	10点

② 浮遊選別材

a, 2号堅穴住居跡	覆土	約23kg
	かまど	約50g
	かまどまわり	約1kg
	煙道	約70g
b, 3号堅穴住居跡	覆土	約340g
c, 土壌	1号	約900g
	3号	約50g
	4号	約460g
	5号	約340g
	6号	約260g
d, 炭化物集積遺構（炭化物マウンド）		約5.5kg
e, 焼土・炭化物（33箇所）		約3.5kg
（16, 18, 19, 21, 22, 25, 27, 30, 32, 37, 38, 40, 41, 43, 44, 47, 48, 49, 51, 52, 54, 58, 59, 60, 61, 62, 64, 65, 68, 69, 70, 71, 72）		

これらのうち、バインダー含浸材については全点を、浮遊選別材については各地点ごとに適量を選び出し、樹種鑑定を行った。浮遊選別材は、木粉等も含めてではあるが検体全量が約35kgにも達するため、大体の樹種構成が把握された時点で鑑定を打ち切った。そのため少数個体樹種については見落しの可能性も否定できない。しかし、検索個体の全重量は約2.2kgに達し、検体（木片）1個の重量は0.5kg以下であることから、検体個数は4,400点以上にも上るため、樹種構成等の概要はほぼ把握できたものと考えられる。

樹種鑑定の方法は以下のとおりである。

バインダー含浸材からは1cm程度の木片を割り取り、浮遊選別材については木片をそのまま実体顕微鏡で観察、同定し、同定困難なものについては走査型電子顕微鏡(SEM)で

観察した。浮遊選別材については、無作為に選び出した木片の鑑定により樹種構成の一般傾向を把握してから、少数個体樹種の見落しがないよう肉眼的に質観の異なるものをできるだけ多く選び出し、鑑定を進めた。

SEM観察試料の調整方法は、気乾状態の木片を、まず軸方向と直角方向に折り、一方を木口面観察試料とする。次に、残りの木片に片刃カミソリでわずかに切れ込みを入れ、割裂し、板目又は柁目面を露出させ、縦断面の観察試料とした。炭化材のSEM観察表面の露出には、刃物で切るのではなく、試料を割るか折る方法が効果的である。その後、試料を導電性ペーストでSEM試料台に貼付け、イオンスパッタリング法により金を7 mA、1 KV、DC. でコーティングした。時間は7～15分間であるが、チャージアップの発生が著しい場合にはさらにコーティングを加えた。炭化材では、一般的に知られているイオンスパッタリングによる試料損傷は少く、コーティング時間の延長に特に問題はない。SEM観察には、JSM-35CF IIを用い、加速電圧15KV～25KVで観察した。写真撮影用フィルムはネオパンSS (6×7 cm) である。

バインダー含浸材62点と浮遊選別材を鑑定した結果、20科、25属を同定し、そのうち5属については種のレベルまで同定することができた。それらを既述の項目別に炭化材の表1に示す。樹種構成は、針葉樹3属、広葉樹22属、ツル性植物1属(2属以上の可能性もある)であり、他に同定できなかったものが草本類も含め数種ある。各樹種の同定の根拠、組織・構造等については、第Ⅵ章の10-2を参照されたい。

以下には、炭化材の表1の各項目別に樹種鑑定結果の概略を記す。重量の単位はgである。

① 2号竪穴住居跡

a バインダー含浸材

バインダー含浸材全7点中の内訳は、トネリコ、ヤナギ、クルミの各属が順に、5:1:1点であり、トネリコ属個体が多い。

b 覆土

15属が認められ、多いものから順に、トネリコ、クルミ、カエデ、ニレの各属で、重量比は635, 65, 10, 5であり、他はキハダ、ニガキ、ヤナギ、ハコヤナギ、カバノキ、ハンノキ、モクレン、アジサイ、サクラ、ニシキギ、ミズキの各属が少量認められた。量的には、トネリコ属が圧倒的に多いのが特徴である。樹皮も7とかなり多い。

c かまど

12属が認められ、トネリコ属が3とやや多く、ニレ、ニシキギ、モミ、クルミ各属が2程度であり、コナラ、クワ、ハコヤナギ、ヤナギ、カバノキ、ハンノキ、モクレンの各属が少量認められた。しかし、量的には、各樹種間で特に大きな差はない。樹皮もわずかに認められた。

d かまどまわり

13属認められた中で、特に多いのはトネリコ属の260であり、やや多いのはニレ、ヤナギ、クルミの各属にツル性植物で、重量比は8, 5, 5, 5であった。その他のものは少なく、コナラ、クワ、イヌエンジュ、カバノキ、カツラ、モクレン、ニシキギ、ミズキ、ニワトコの各属が認められた。

e 煙道

2属認められたがツル性植物がやや多く、クワ、ヤナギ属がわずかに認められたにすぎず、炭化材は極めて少なかった。

② 3号竪穴住居跡

a バインダー含浸材

全45点の内訳は、トネリコ属が29点と多く、以下、ヤナギ：4、キハダ：3、カバノキ：3、ニレ：2、クルミ：2、カエデ：1、クワ：1の順であった。

b 覆土

12属認められた中で量的に多いものは、ニレ：13、キハダ：5、トネリコ：3、ヤナギ：3の順であり、他の各属、クワ、イヌエンジュ、クルミ、アサダ、カバノキ、ハンノキ、サクラ、カエデ、ツル性植物は1～2と少量であった。

③ 土壌

a 1号土壌

12属中、トネリコ属が10と多く、ヤナギ、ニワトコの各属が3とやや多い。その他は少量であり、モミ、ニレ、エノキ、クワ、キハダ、クルミ、ハンノキ、ニシキギ、カエデの各属とツル性植物であった。

b 2号土壌

全10点中でヤナギ属が7点を占め、他にはニレ、キハダ、アジサイの各属が1点ずつであった。

c 3号土壌

7属中でやや多いのがハンノキ属であるが、他と大きな差はない。他にはニレ、キハダ、トネリコ、ヤナギ、クルミ、カエデが認められた。

d 4号土壌

15属中、ヤナギ属が5と多く、ニレ、トネリコ、クルミの各属が2～3とやや多い。その他は少量で、イチイ、コナラ、エノキ、クワ、ニガキ、トネリコ、ハコヤナギ、カバノキ、ハンノキ、カツラ、サクラ、ニワトコの各属とツル性植物が認められた。樹皮も8とかなり多いが、樹種の特定はできない。

e, 5号土壌

15属中、多いものはニワトコ、ヤナギの各属が各々5であり、ニレ、トネリコの各属も各々3とやや多い。その他は少量で、モミ、トウヒ、コナラ、イヌエンジュ、キハダ、クルミ、カバノキ、カツラ、サクラ、ニシキギ、カエデの各属とツル性植物が認められた。樹皮も5と多く、他に、草本類も少数認められた。

f 6号土壌

10属中多いものはトネリコ、ニレ、クルミ、ヤナギの各属が順に、8、5、5、5であり、その他のクワ、イヌエンジュ、カバノキ、ハンノキ、カエデ、ニワトコの各属は少量であった。樹皮も3とやや多く、草本類も少量認められた。

各土壌間では、トネリコ属の多いもの（1号、6号）、ヤナギ属の多いもの（1号、2号、4号、5号、6号）等、変化に富み、竪穴のバインダー含浸材や覆土材でトネリコ属が多いのとは様相を異にする。また、草本と考えられる炭化物が認められる。

④ 炭化物マウンド

本遺構内では、炭化物層も複雑に入り組み、ある樹種では遺構内で偏在する等の傾向が認められるため、1×1mの小グリッドごとにかけて鑑定を行なった。

遺跡内でも最高の20属が認められ、ニレ、ヤナギ、トネリコ、クルミ各属の順に多く、量は、85、78、67、36であった。その他としては、モミ、コナラ、エノキ、クワ、イヌエンジュ、キハダ、ハコヤナギ、アサダ、カバノキ、ハンノキ、カツラ、モクレン、アジサイ、サクラ、カエデ、ニワトコの各属とツル性植物が認められた。遺構内では、北側に偏

在する樹種（モミ，クルミの各属），南側に偏在する樹種（エノキ，キハダ，アサダ，ハンノキ，モクレン，アジサイ，カエデの各属），やや西側に偏在する樹種（コナラ，カツラ，サクラの各属）がある．他に，わずかではあるが草本も認められた．

⑤ 焼土・炭化物

No.16：全 8 属．ヤナギ属がやや多い．その他はニレ，エノキ，クワ，トネリコ，クルミ，ハンノキ，ニワトコの各属とツル性植物．

No.18：ヤナギ属が少量．

No.19：全 6 属．ニレ属やや多い．その他はヤナギ，クワ，キハダ，トネリコ，ニワトコの各属が少量．

No.21：全 10 属．ニレ属やや多い．その他は，イチイ，エノキ，クワ，トネリコ，ヤナギ，カツラ，サクラ，カエデ，ニワトコ，の各属とツル性植物．樹皮も多い．

No.22：ヤナギ属とツル性植物が少量．

No.25：全 7 属．量的差異はなく，ニレ，クワ，ヤナギ，クルミ，カバノキ，サクラ，ニワトコの各属．

No.27：コナラ，ヤナギ，サクラ，ニワトコの 4 属．量的差異はない．

No.30：全 6 属．量的差異はない．ニレ，クワ，イヌエンジュ，トネリコ，ヤナギ，カエデの各属．

No.32：ニレ，トネリコ，ヤナギの各属にツル性植物．量的差異はない．

No.37：イヌエンジュ，ヤナギ，ニワトコの 3 属が少量．

No.38：ヤナギ属が少量．

No.40：ハンノキ属のみ．

No.41：全 6 属．ニレ，クワ，キハダ，トネリコ，ヤナギ，カバノキの各属とツル性植物．量的差異はない．

No.43：全 11 属．トネリコ属が 15 と多く，ニレ属も 3 とやや多い．他は少量で，クワ，キハダ，ニガキ，ヤナギ，クルミ，アサダ，ハンノキ，サクラ，カエデの各属とツル性植物．

No.44：ツル性植物のみであるが，ブドウ属とは，若干異なる．

No.47：全 6 属中，ツル性植物が 5 と多く，他は少量．ニレ，トネリコ，ヤナギ，アサダ，ハンノキ，ニワトコの各属．樹皮も 5 と多く，草本類も少量．

No.48：ニレ，ヤナギ，クルミ，ニワトコの 4 属で量的差異はない．

No.49：全 5 属中，ニワトコ属が 5，ツル性植物も 6 と多く，コナラ，ヤナギの各属も各々 3 とやや多い．他にはカエデとアジサイの各属が少量．

No.51：ヤナギ属とツル性植物．

No.52：全 12 属中，トネリコ属が 15 と多く，ニレ，クルミの各属も各々 3 と多い．他には，ヤナギ属が 3，コナラ，カエデ，ニワトコの各属が 2 とやや多く，トウヒ，クワ，イヌエンジュ，ハンノキ，ニシキギの各属とツル性植物は少量．

No.54：全 6 属．ヤナギ属がやや多い．ニレ，クワ，トネリコ，カエデ，ニワトコの各属は少量．

No.58：全 7 属．量的差異はない．ニレ，クワ，キハダ，トネリコ，ヤナギ，クルミ，ハンノキの各属とツル性植物．

No.59：全 6 属．量的差異はない．ニレ，クワ，トネリコ，クルミ，カバノキ，カエデの各属．

No.60：サクラ属のみ．

No.61：ヤナギ，ニワトコの各属．

№62：3属のみであるが、トネリコ属が15と多い。他にはニレ、クルミ各属が少量。

№64：全4属。量的差異はない。ニレ、クワ、イヌエンジュ、ヤナギの各属とツル性植物。

№65：ニレ、クワ、トネリコ、ヤナギの4属で、量的差異はない。

№68：全8属中で、ヤナギ属が3とやや多い。その他は少量で、コナラ、ニレ、クワ、イヌエンジュ、トネリコ、ハンノキ、カエデの各属とツル性植物。

№69：ヤナギ、カエデの各属。

№70：全10属中、トネリコ属が20と多く、ヤナギ、カエデの両属も5と多い。他は少量で、コナラ、ニレ、エノキ、クワ、イヌエンジュ、カツラ、コワトコの各属とツル性植物。

№71：ヤナギ属とツル性植物。

№72：全9属中、トネリコ属が15と多く、クルミ属もやや多い。他は量的差異がなく、クワ、ハコヤナギ、ヤナギ、ハンノキ、カツラ、モクレン、ニワトコの各属とツル性植物。

焼土では、炭化材のない遺構や12属あるものまで、また樹種間で量的差異のないものからかなり大きいものまで、樹種数や個体数が各遺構ごとに多様である。しかし、トネリコ属に関しては若干の傾向が認められる。トネリコ属が他樹種より多い遺構は、№43, 52, 62, 70, 72の5地点であるが、それらは全て遺跡の西側に偏在している。また、これら5地点では、№62を除き、全て1地点内で10種以上と樹種数も多い地点である。また、1地点内で1～2属のみと少ないのは、№18, 22, 38, 40, 44, 51, 60, 61, 69, 71の10地点であるが、樹種は、ヤナギ、ハンノキ、サクラ、カエデ、ニワトコの各属とツル性植物のうちのいずれかであり、焼土全体としては量的に多く認められたトネリコ、ニレ、クルミの各属を含まないのが特徴である。

Tab.Ⅱ-16においては、各樹種の出土遺構数および各遺構ごとの樹種数も示したが、各樹種の遺跡内での分布の様相をPL.Ⅱ-27～30に示す。

出土遺構数は、検索全47箇所（バインダー含浸材3，浮遊選別材44）中で最も多く認められたのが、ヤナギ属の42箇所であり、以下ニレ属：31，トネリコ属：28等の順であり、最も少ないものは、イチイ属：2，トウヒ属：2，ミズキ属の2箇所等であった。

また、各遺構内での樹種数は、ツル性植物を含めて炭化物集積遺構内（炭化物マウンド）での21を最高に、5号土壌：16，2号堅穴住居跡覆土：15，4号土壌：15等で多く、焼土内では全般的に樹種数は少なく、1種のみ遺構が5箇所ある。

以上に樹種鑑定結果の概要を記したが、遺跡全体の炭化材量の樹種別の比較の目安として、検索済炭化材量を多いものから順にTab.Ⅱ-17に示す。

浮遊選別材の重量は、各遺構ごとに無作為抽出し、鑑定を行っていることから、各樹種ごとの炭化材量比較の目安となりうるが、原形での個体数把握の根拠とはならない。例えば、大径材一本と小枝材二本では、前者が大量に認められるものの、個体数はあくまで一点である。また、同条件で炭化した場合には、大径材の残存率が明らかに高いものと推定され、また、樹種的にも差があるものと考えられる。従って、個体数が重要な意味を持つ場合には、この種の炭化材量の値は参考とにならない。

しかし、本遺跡中の炭化材については、堅穴等の構造材と推定される材についてはバインダー含浸させ個体数が把握されており、その他については、燃料用材が大部分であるものと思われ、利用樹種やその中で主要樹種の概略が分れば十分であるように思われる。

先の例であれば、個体数が仮に少ないにしても、大径材であれば、主要利用樹種と考えて問題ないであろう。

遺跡全体の炭化材量は、多いものから順に、トネリコ、ヤナギ、ニレ、クルミ、カエデの各属でありTab.Ⅱ-17，中でもトネリコ属は堅穴で特に多く、その他の遺構においても全体的にみれば主要な材である。また、ヤナギ、ニレ、クルミの各属も各遺構で多く、やはり主要樹種といえるであろう。しかし、既述したように、各遺構ごとで利用樹種や主要樹種に違いがみられ、各遺構ごとに検討の要のあることはいうまでもない。また、出土炭化材全量からみれば、堅穴内覆土については全量の約5%，同様に土壌では8%，炭化物集積遺構（炭化物マウンド）では9%，焼土では15%を検索したにすぎず、あくまでも一般傾向を把握したにすぎない。

以上の結果を基に、既述の項目別に炭化材について検討を進める。

▶ バインダー含浸材と覆土材

家屋等の構造材の一部と考えられるバインダー含浸材は、堅穴中では、2号で7点中5点、3号で45点中29点がトネリコ属であり、トネリコ属が両堅穴に共通の構造材の主要樹種であるものと考えられる。また、2号堅穴の他2属、ヤナギとクルミは、3号堅穴でも認められており、両堅穴に共通の構造材としては、トネリコ、ヤナギ、クルミの3属が挙げられる。これらの事実からも、両堅穴の家屋建築様式は樹種的な意味で類似しているも

Tab. Ⅱ-16 炭化材の樹種

No.	属名	代表的樹種	出土 遺構数	2号堅穴住居				3号堅穴住居		土壙						
				バインダー 含浸材	覆土	かまど	かまど まわり	煙道	バインダー 含浸材	覆土	1号	2号	3号	4号	5号	6号
1	イチイ(<i>Taxus</i>)	イチイ*	2											○		
2	モミ(<i>Abies</i>)	トドマツ	4			○				○					○	
3	トウヒ(<i>Picea</i>)	アカエゾマツ	2												○	
4	コナラ(<i>Quercus</i>)	ミズナラ	10			○	○							○	○	
5	ニレ(<i>Ulmus</i>)	ハルニレ	31		○	○	○		○(2)	○	○	○(1)	○	○	○	○
6	エノキ(<i>Celtis</i>)	エゾエノキ	6								○			○		
7	クワ(<i>Morus</i>)	ヤマグワ	25			○	○	?	? (1)	○	?			○		○
8	イヌエンジュ(<i>Maackia</i>)	イヌエンジュ	11				○				○				○	○
9	キハダ(<i>Phellodendron</i>)	キハダ	12		○				○(3)	○	○	○(1)	?		○	
10	ニガキ(<i>Picrasam</i>)	ニガキ	3		○									?		
11	トネリコ(<i>Fraxinus</i>)	ヤチダモ	29	○(5)	○	○	○		○(29)	○	○			○	○	○
12	ハコヤナギ(<i>Populus</i>)	ドロノキ	5		○	○								○		
13	ヤナギ(<i>Salix</i>)	エゾノカワヤナギ	42	○(1)	○	○	○	○	○(4)	○	○	○(7)	○	○	○	○
14	クルミ(<i>Juglans</i>)	オニグルミ*	21	○(1)	○	○	○		○(2)	○	○			○	○	○
15	アサダ(<i>Ostrya</i>)	アサダ	4								○					
16	カバノキ(<i>Betula</i>)	シラカンバ	12		○	○	○		○(3)	?					?	?
17	ハンノキ(<i>Alnus</i>)	ハンノキ	16		○	?					○			○		○
18	カツラ(<i>Cercidiphyllum</i>)	カツラ*	7				○								?	?
19	モクレン(<i>Magnolia</i>)	ホオノキ	5		○	○	○									
20	アジサイ(<i>Hydrangea</i>)	ノリウツギ	4		○								○(1)			
21	サクラ(<i>Prunus</i>)	エゾヤマザクラ	10		○						○				○	?
22	ニシキギ(<i>Euonymus</i>)	マユミ	6		○	○	○					○				○
23	カエデ(<i>Acer</i>)	イタヤカエデ	18		○				○(1)	○	○			○		○
24	ミズキ(<i>Cornus</i>)	ミズキ	2		○		○									
25	ニワトコ(<i>Sambucus</i>)	ニワトコ	20				○				○				○	○
26	ツル性植物(<i>Vitis</i> 等)	ヤマブドウ等	24				○	○			○	○			○	○
樹種数				3	15	12	14	3	8	13	13	4	7	16	16	10

注1. バインダー含浸材には（*）内に点数表示をした。
2. ? はやや不確実なもの
3. 種名が同定されたものには* 印

のと考えられるが、それでは、3号堅穴の他のバインダー含浸材樹種（ニレ、クワ、キハダ、カバノキ、カエデの各属）は2号でも使用されていたのだろうか。ここで一つのがかりとなるのが覆土材の鑑定結果である。

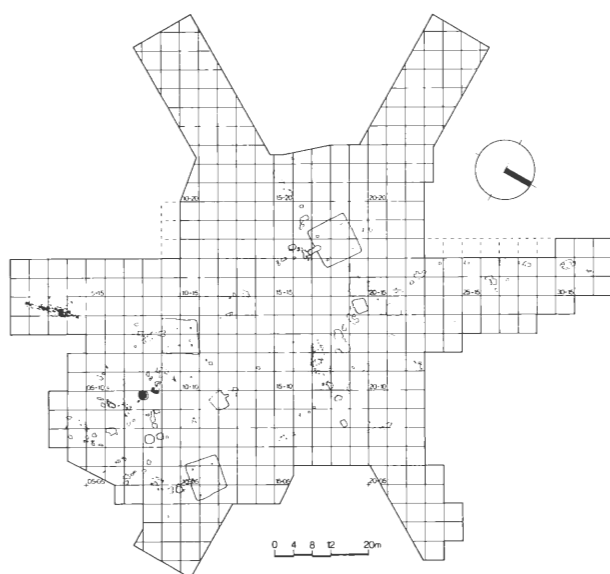
2号堅穴覆土中では、トネリコ属が多く、クルミ属も多い。また、3号堅穴でもバインダー含浸材樹種8属は全て覆土中に含まれ、ニレ、キハダ、トネリコ、ヤナギの各属は量的にも多い。即ち、覆土中には構造材の一部が混入し、覆土材樹種の一部は構造材樹種を反映しているものと推定される。3号堅穴では覆土中のトネリコ属材が2号程多くないが、これはバインダー含浸材が2号に比較して多いことからみて、構造材の覆土への混入が少なかったものであろう。そこで、先の3号堅穴のバインダー含浸材の残り5樹種を2号堅穴の覆土材と比較すると、それらは、クワ属を除き全て覆土中に認められ、かつニレやカ

Tab. ①-17 檢索瀝炭化材重量

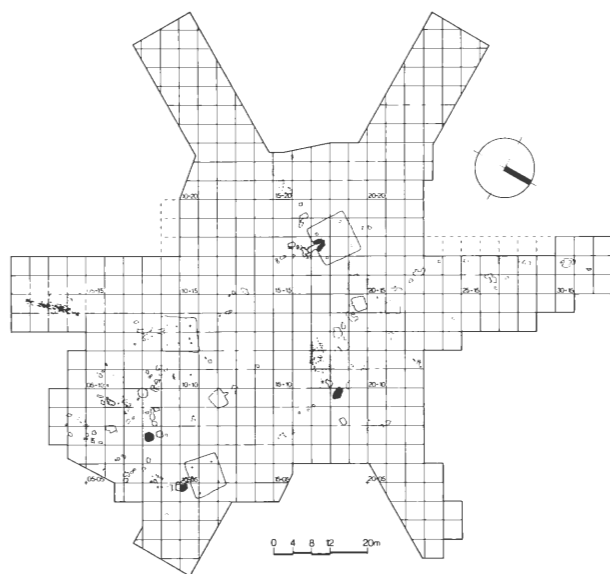
属名	代表的樹種名	全量	竪穴内	土壌	炭化物集積遺構	焼土
トネリコ	ヤチダモ	1,128 g	901 g	23 g	67 g	137 g
ヤナギ	エゾノカワヤナギ	163 g	10 g	19 g	78 g	56 g
ニレ	ハルニレ	165 g	28 g	13 g	85 g	39 g
クルミ	オニグルミ	137 g	73 g	10 g	36 g	18 g
カエデ	イタヤカエデ	33 g	11 g	5 g	1 g	16 g
その他(21属)		637 g	53 g	84 g	250 g	250 g
計		2,263 g	1,076 g	154 g	517 g	516 g

炭化物 集積遺構	焼土・炭化物																																			
	16	18	19	21	22	25	27	30	32	37	38	40	41	43	44	47	48	49	51	52	54	58	59	60	61	62	64	65	68	69	70	71	72			
				○																																
○																																				
																				○																
○							○											○		○										○		○				
○	○		○	○		○		○	○				○	○		○	○			○	○	○	○			?	○	○	○		○					
○	?		○																													?				
○	○		○	○		○		○					?	○						?	○	?	○					○	○	○		○		○		
○								○		○										○								○		○		○				
○			○										○	○								?														
														○																						
○		○		○	○			○	○				○	○		○				○	○	○	○			○			○	○		○		○		
○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
○		○				○								○			○			○		○	○			○								○		
○														○		○										○										
?						?							?										?													
○		○										○		○		○				○		○							○					○		
○				○																												○		○		
○																																			?	
○																																				
○				○		○	○							○											○											
○				○				○						○				○		○	○			○						○	○	○				
○		○		○	○		○	○		○							○	○	○		○	○			○						○		○		○	
○		○		○	○				○				○	○	?	○		○	○	○		○						○		○		○	○	○	○	
21	9	1	6	11	2	7	4	6	4	3	1	1	7	12	1	7	4	6	2	13	6	8	6	1	2	3	5	4	9	2	11	2	10			

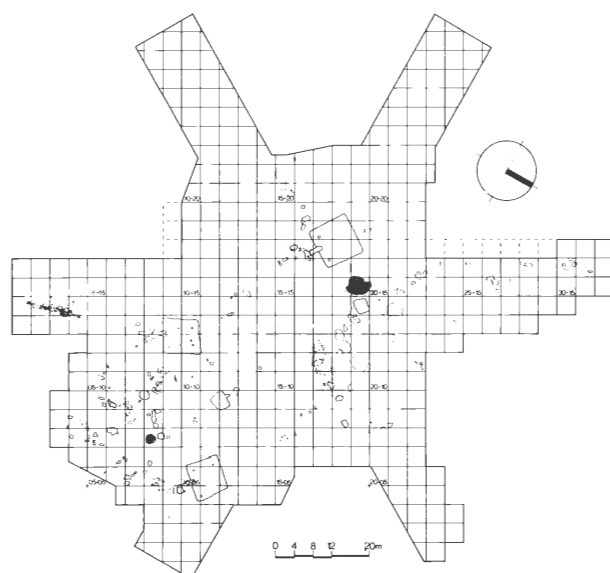
PL. ①-27 炭化材の樹種別分布①



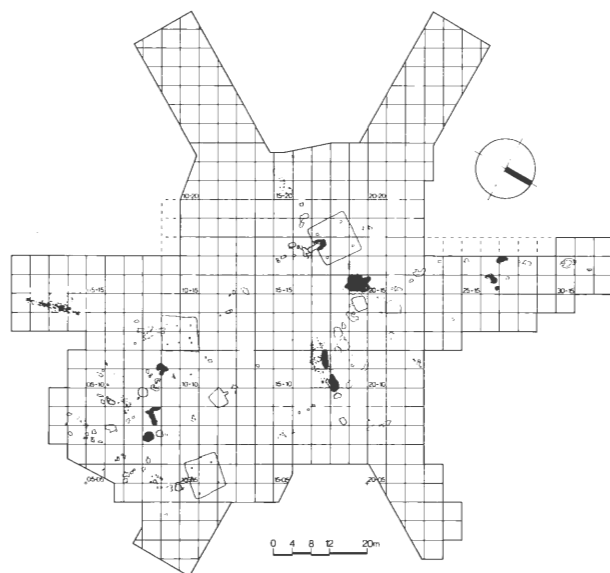
1 イチイ



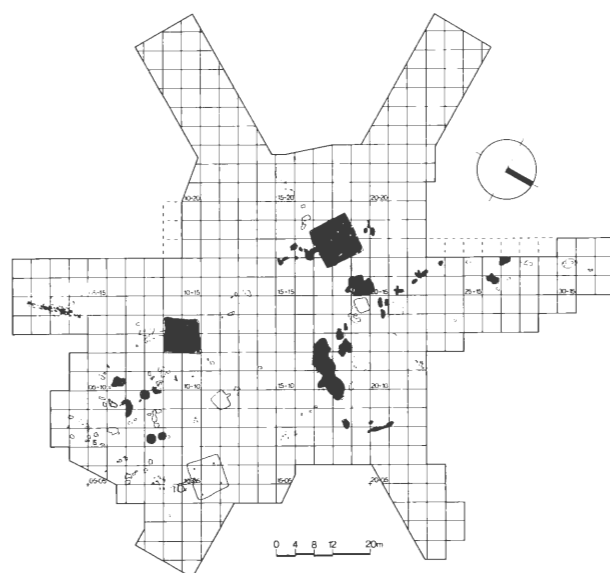
2 モミ属 (トドマツ等)



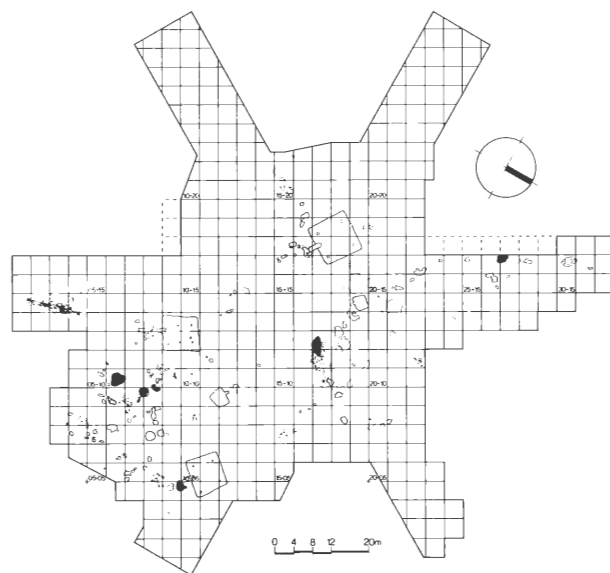
3 トウヒ属 (アカエゾマツ等)



4 コナラ属 (ミズナラ等)



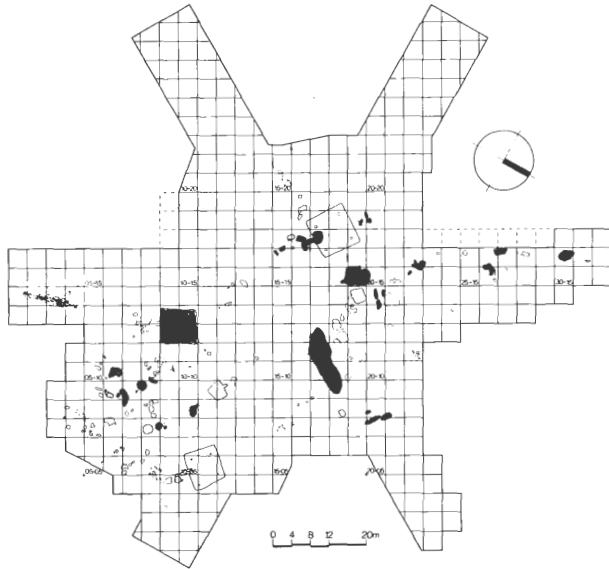
5 ニレ属 (ハルニレ等)



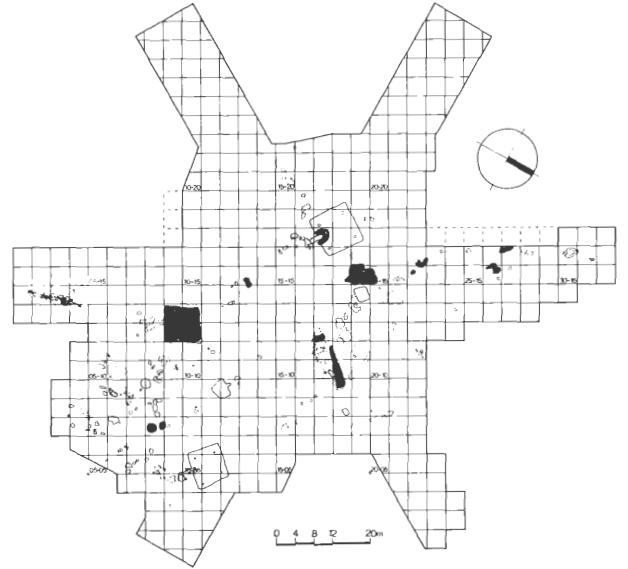
6 エノキ属 (エゾノキ等)

(注：ミズキは、HP₂覆土中およびカマドまわりに認められたが図からは割愛した)

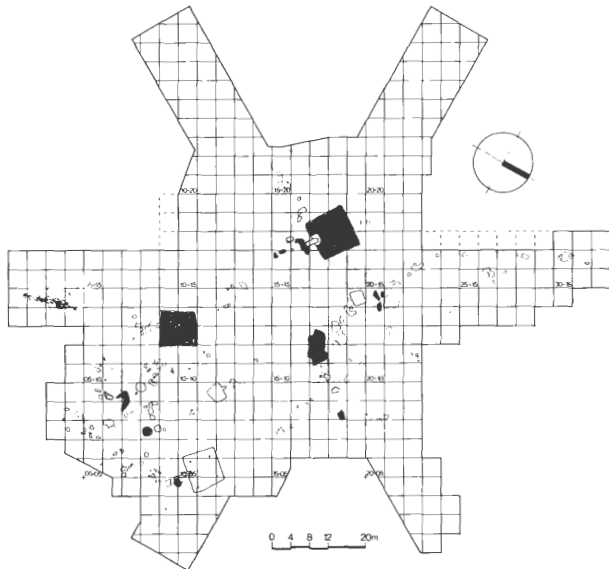
PL. Ⅰ-28 炭化材の樹種別分布②



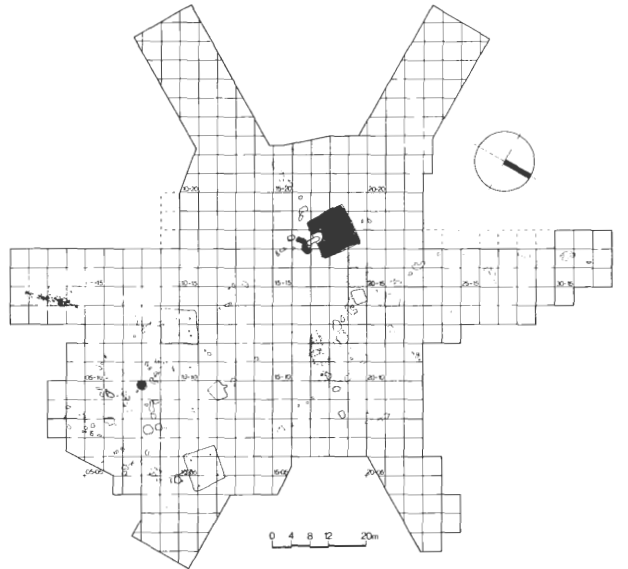
7 クワ属 (ヤマグワ等)



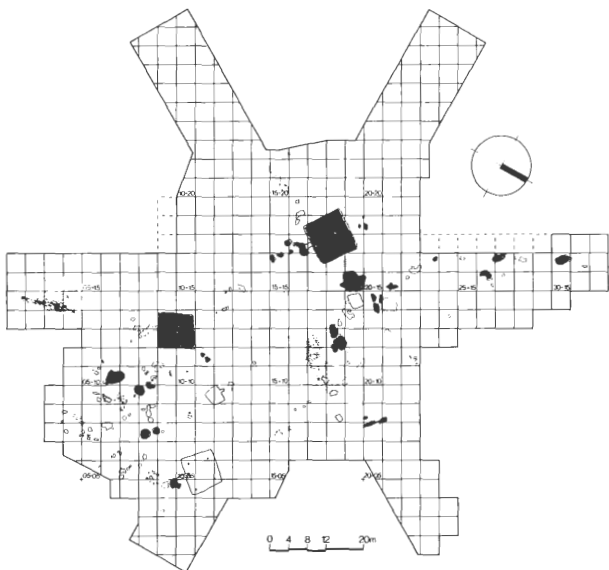
8 イヌエンジュ



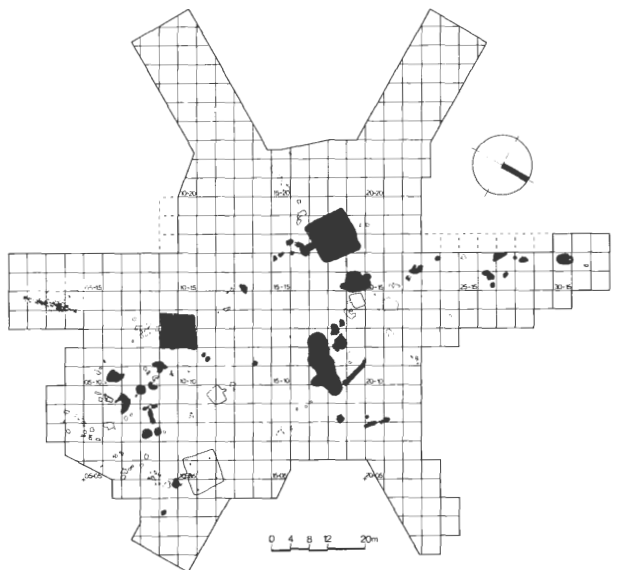
9 キハダ属 (キハダ等)



10 ニガキ

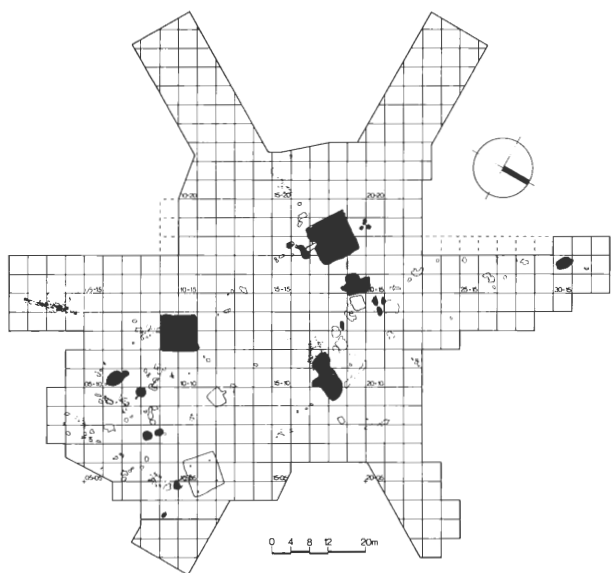


11 トネリコ属 (ヤチダモ等)

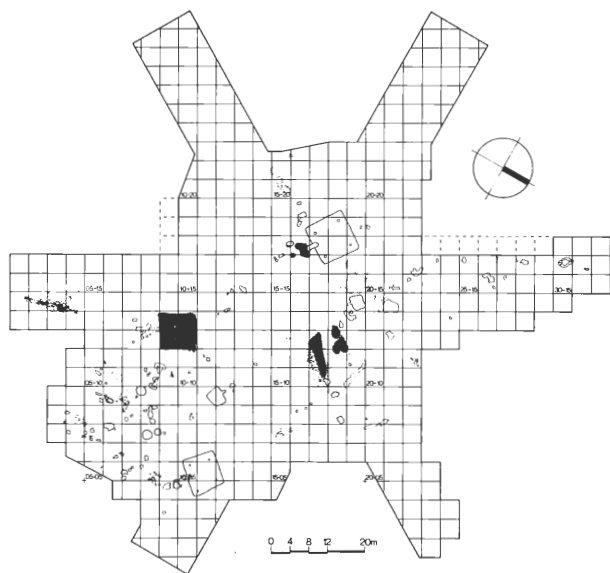


12 ヤナギ科 (ドロノキ, エゾノカワヤナギ等)

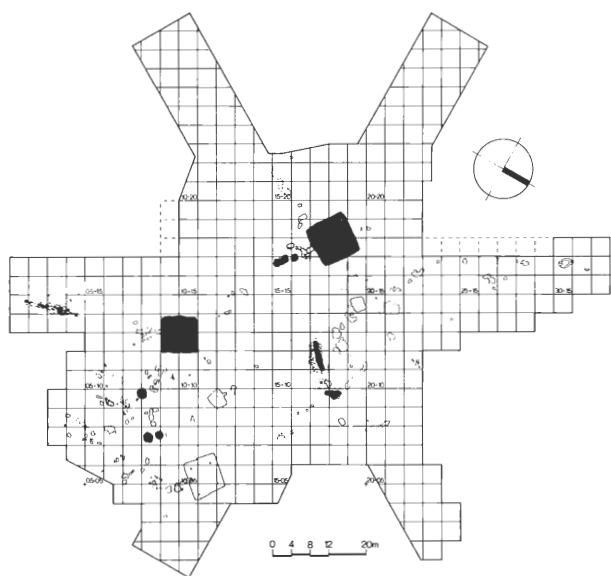
PL. Ⅰ-29 炭化材の樹種別分布③



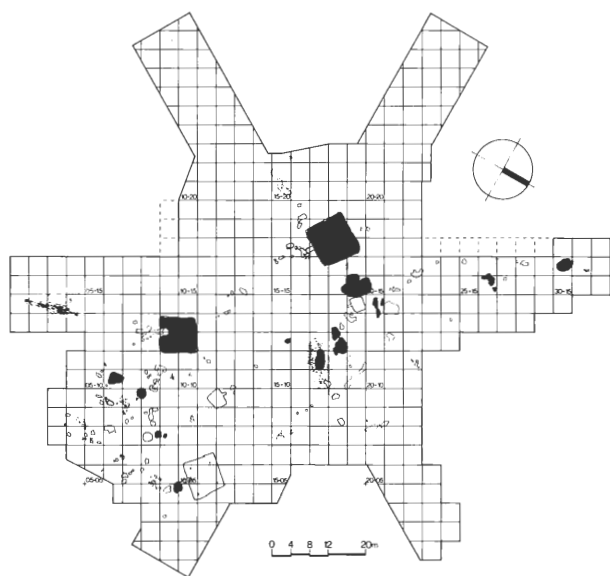
13 オニグルミ



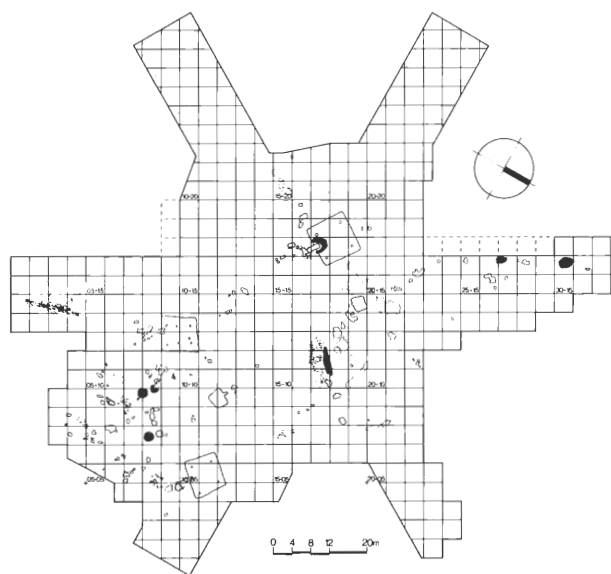
14 アサダ



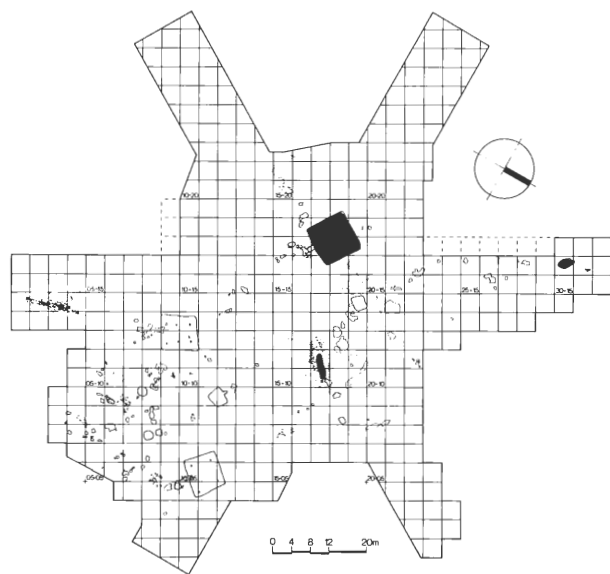
15 カバノキ属 (シラカンバ等)



16 ハンノキ属 (ハンノキ等)

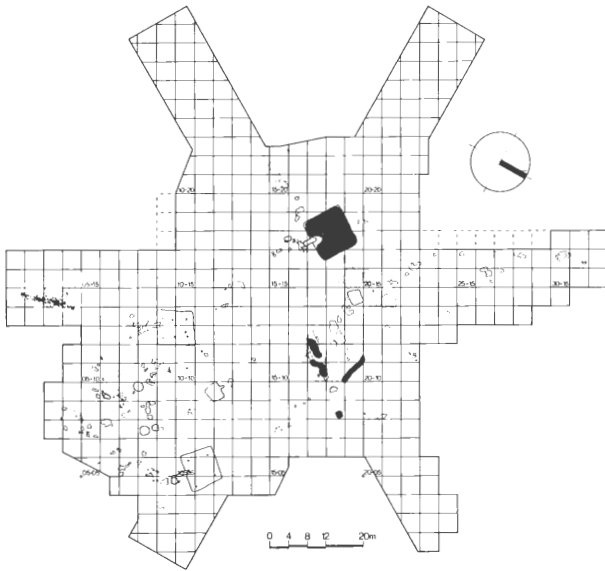


17 カツラ

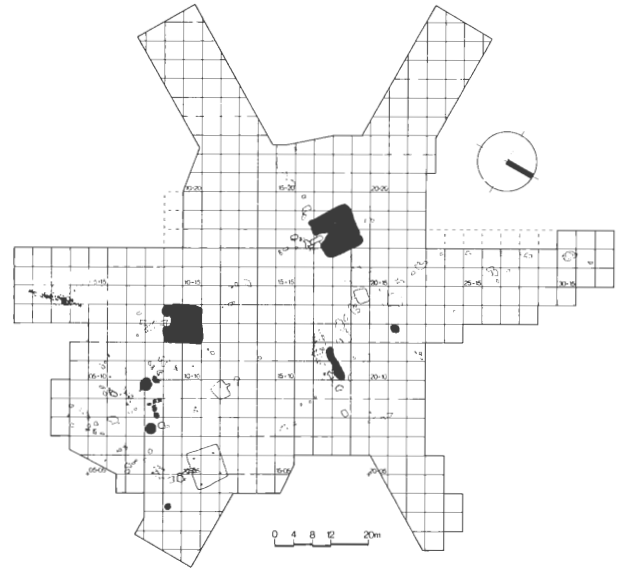


18 モクレン属 (ホノノキ等)

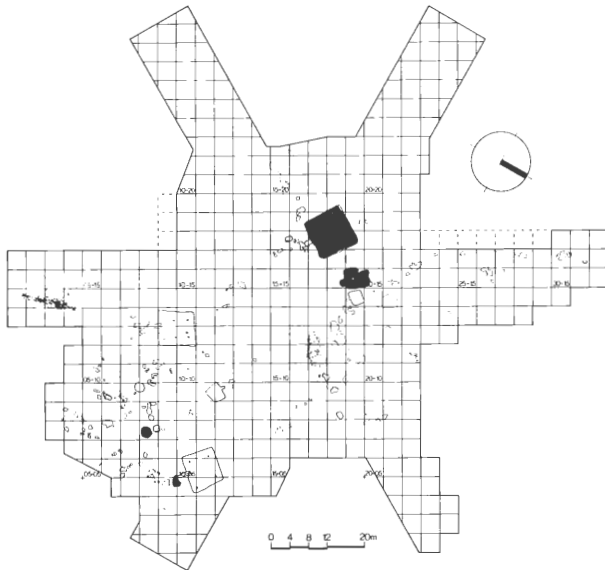
PL. Ⅱ-30 炭化材の樹種別分布④



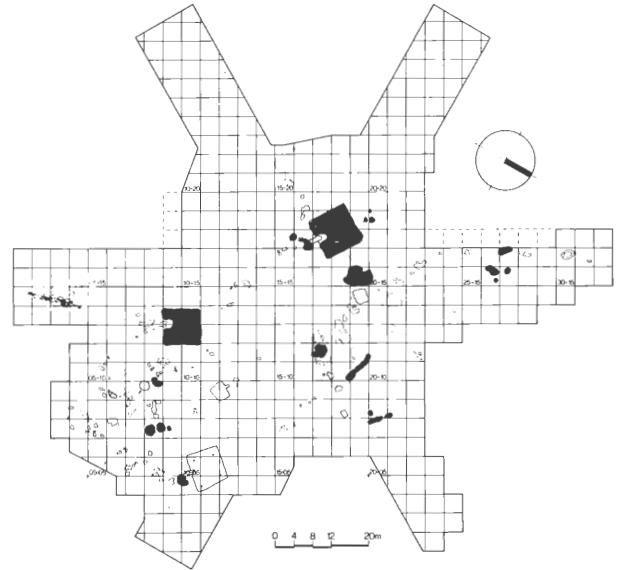
19 アジサイ属 (ノリウツギ等)



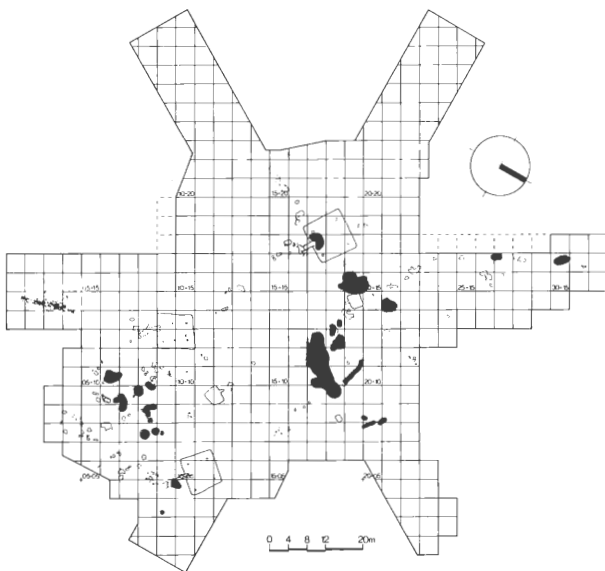
20 サクラ属 (エゾヤマザクラ等)



21 ニシキギ属 (マユミ等)



22 カエデ属 (イタヤカエデ等)



23 ニワトコ属 (エゾニワトコ等)



24 ツル性植物 (ヤマブドウ等)

エデも多いことから、2号堅穴においてもそれらが構造材として使用されていた可能性が強いように思われる。これからの事実からみれば両堅穴の家屋建築様式は、樹種的には類似し、構造材としてはトネリコ属が大部分を占め、補助的にニレ、クワ、キハダ、クルミ、カバノキ、カエデの各属が使用されていたものと推定される。覆土中のその他の樹種も構造材として利用されていた可能性があるが、量的にも少なく、道具や薪材である可能性の方がより高いように思われる。

堅穴ではトネリコ属材が主要樹種であるのに対して、2号土壙ではバインダー含浸材10点中7点がヤナギ属と、堅穴とはやや異なる樹種選択であり、やや異なる性質の構造物であったかもしれない。しかし、2号土壙中のニレ、キハダ、ヤナギの各属は3号堅穴の構造材としても認められており、主要樹種は異なっている、全く異なる樹種が利用されているわけではない。2号土壙中で認められたアジサイ属はノリウツギと推定されるが、小個体であり、道具類の一部と考えられる。これはテシ中で認められたヤス・中柄と同一樹種であり興味深い。

バインダー含浸材が構造材であるものとの前提で考察してきたが、テシとその周辺から出土した材と比較するならば、さらに興味深い事実が認められる。テシ中の割材の廃材はトネリコ属であり、その上流部から出土した割材はキハダ属であった。これら2属の個体は当時の家屋構造材の一部と考えて問題ないものと思われ、これらが3号堅穴の構造材と一致することは、テシと周辺部堅穴との関係を知る上で大きな手がかりとなるように思われる。

▶カマド材、カマドまわり材、煙道材

カマド材は燃料用材と考えられるが、12属中でトネリコ属がやや多い程度で、樹種ごとの量的差は少なく、針葉樹、広葉樹等幅広く利用していたものと考えられる。多くの場合、年輪の曲率からみて枝材が多く、比較的出土地点数の少ない樹種（モミ、コナラ、モクレン、ニシキギの各属）をも含むのが特徴である。また、焼土中で頻繁に認められるニワトコ属、ツル性植物を含まないのも特徴的である。

カマド材は、ある程度炭化し燃え残りが蓄積された時点で堅穴外へ捨てられたであろうが、場所としては、全12属中11属を共有する炭化物集積遺構（炭化物マウンド）の可能性が高いかもしれない。

カマドまわり材は、13属と多いが、トネリコ属材が極端に多いのは、覆土材の一部が混入したのかもしれない。ツル性植物が多いのは、カマド材の一部とも考えられず、用途は不明である。

煙道では殆ど炭化材は認められない。

▶土壙材

土壙材は各遺構ごとで構成樹種も異なり、また主要樹種も異なるなど変化に富み、各遺構の性格付けを木材からの情報だけで行なうのは困難である。しかし、4号と6号では、量的にトネリコ、ニレ、クルミ、ヤナギの各属が多く、炭化物集積遺構（炭化物マウンド）と類似している。また、1号と5号では、トネリコ、ヤナギ、ニワトコが量的に多い点、さらに出土地点数の少ないモミ、ニシキギの各属を含む等の点においては、類似している。2号と3号は、樹種数も少なく、他とはやや性格の異なる遺構のようである。

▶炭化物集積遺構（炭化物マウンド）

炭化物集積遺構（炭化物マウンド）では、小グリッドごとの検索により、遺構内で分布

傾向の異なる樹種が認められたが、それらは特に他の遺構との関係を示すものではない。炭化材全体で全25属のうち他遺構にあって本遺構にないものは、イチイ、トウヒ、ニガキ、ニシキギ、ミズキの5属であり、全て出土遺構数の少ない樹種である。炭化材量や樹種数が多い点において本遺構は遺跡中でもかなり重要な意味を持つ遺構であろうが、樹種的には他の全ての遺構のそれをカバーしてしまうため逆に他遺構との関連性について言及するのが困難である。既述したように、主要樹種は堅穴の構造材とはやや異なっており、燃料用材を代表する遺構であるといえるかもしれない。

▶焼土・炭化物

焼土は既述したように、各遺構ごとで樹種構成等が多様であるが、№16、43、52、58の4地点では、トネリコ、ヤナギ、ニレ、クルミの4属を全て含む点において焼土以外の他の遺構と類似している。中でも№52は、これら4樹種が量的に多く、堅穴内覆土や炭化物集積遺構（炭化物マウンド）と類似しているが、コナラ、ニワトコの各属やツル性植物を含む等の点においてはむしろ後者と類似している。

先のバインダー含浸材樹種をとりあげると、焼土中においては、ヤナギ、ニレ、トネリコ、クワの各属が29～16地点と広く認められかつ量的にもやや多い地点がかなりあるが、カエデ、クルミ、キハダ、カバノキの各属は10～3地点と少ない。また、後4者のうち焼土中で量的に多いものは、№52でのクルミのみである。№52が炭化物集積遺構（炭化物マウンド）と類似し、単なる焼土とは性格を異にする可能性が強いことをからみれば、前4者（ヤナギ、ニレ、トネリコ、クワ）は、構造材、かまど用燃料材、たき火用材として幅広く利用されていたのに対して、後4者（カエデ、クルミ、キハダ、カバノキ）は構造材やかまど用燃料材として一部利用はされているものの、単なるたき火用材としてはさほど用いられていなかったのかもしれない。それらに対して、ニワトコ属やツル性植物は出土地点数も多く、量的にも多い地点がある等たき火用材としては、かなり手軽に用いられていたのかもしれない。

炭化材についての分析結果をのべてきたが、炭化材は樹種数も多いことから遺構間で完全に樹種が一致する場合は少なく、遺構間の関連性等について樹種鑑定結果のみから言及するのは困難である。したがって、Tab.Ⅱ-16や同17等から気の付く点について羅列してきたが、これらについては他の遺物と照らし合わせてさらに検討していく必要がある。しかしいくつかの点においては、明らかに樹種的な特徴を示すものと思われ、それらは以下のように要約されるであろう。

- ① 堅穴構造材は、トネリコ属が主要利用樹種であり、補助的に他樹種が用いられ、それらはニレ、クワ、キハダ、ヤナギ、クルミ、カバノキ、カエデの各属である。
- ② 堅穴以外の遺構における構造材の使用例としては1例認められ、ヤナギ属が主要利用樹種であり、他にニレ、キハダの各属も使用されている。
- ③ 各遺構ごとに主要樹種は異っていても、構造材としては上記のいずれかが使用されている。
- ④ 構造材として使用されている樹種の中で、他にも燃料用材やたき火用材として大量に使用されているものには、ニレ、トネリコ、ヤナギの各属がある。
- ⑤ 構造材として補助的に使用されていた樹種の中でもキハダ、カバノキの各属は、焼土中には少なく、たき火用材としての使用は少ない。
- ⑥ カマド用燃料材の中で7属（モミ、コナラ、ハコヤナギ、カバノキ、ハンノキ、モクレン、ニシキギ）は焼土中には極めて少なく、同じ燃料材でも樹種構成はかなり異なる。しかし、ニレ、トネリコ、ヤナギの各属は、両方で共通に使用されている。

⑦ 炭化材として幅広く使用されている3属（ニレ、トネリコ、ヤナギ）は、テシ中の基本骨格構造材の構成樹種であり、また、堅穴構造材の主要樹種であるトネリコ属は、テシ中においても骨格構造材の主要樹種である。

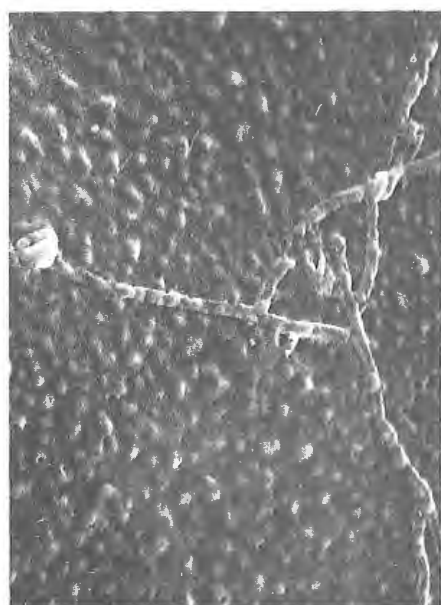
以上結果に加えて、炭化材の組織構造観察から得られた若干の知見についてのべる。炭化材をSEMにより観察した所、組織中には腐朽菌の菌糸や腐朽劣化跡、また泥状物質の沈着がしばしば認められた。これらは、一部の木材が、風倒や伐倒等の後に、かなりの時間放置されていたことや、河川流木であったことを示すものと考えられる。泥状物質の沈着は、炭化後の埋没中にも起こりうるであろうが、菌糸が炭化以前に繁殖していたことは確実である。PL.Ⅱ-31の1と2には、モミ属とサクラ属の炭化材中における菌糸を、同の3にはコナラ属の小道管の腐朽がかなり進んだ例を示す。

樹種的には、針葉樹や広葉樹等にかかわらず菌糸が認められるが、バインダー含浸材や堅穴覆土中のトネリコ属材では菌糸侵入や腐朽の例は少なく、かなり良質の木材を使用していたものと推定される。それに対して焼土中の木材では、菌糸侵入の例は多い。しかし、同3に示したような顕著な腐朽の例は少なく、少なくとも河川流木のような木材の使用は少なかったものと思われる。また、構造材については、家屋建立後に長年を経たものならば環境条件によっては木材は腐朽劣化するものと考えられるが、それも少ないようであり、建立後さほど老朽化しない状態のまま火災にあったものと考えられる。

枯枝等に時間的にどの程度菌糸が侵入するかについての報告は少なく、明確な判断はできないが、木材腐朽菌は一般的にさほど高温、多湿でなくとも繁殖することが知られている。1や2に示した程度の菌侵入は、外観的に異常が認められない木材においてもみられる例であり、これらはかなり腐朽が激しい例といえ、流木等かもしれない。

従って、本遺跡中の燃料用材は、外見上では少なくとも腐朽がわからない程度の材を利用していたものと考えられ、流木等は少なかったものと推定される。それは、テシの自然流木中で、ハンノキ属個体が多数みられるのにもかかわらず、炭化材はさほどの量ではないこととも一致している。構造材としては伐倒後の良材を、燃料用材としてはそれらの枝材に加えて枯枝や枯れた低木等を利用していたのではなかろうか。

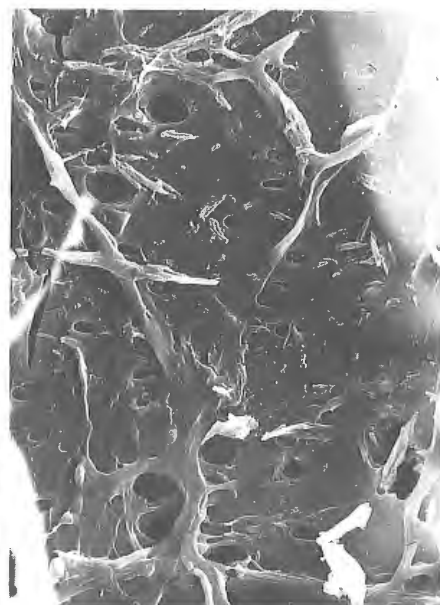
PL.Ⅱ-31 炭化材中の木材腐朽菌



1 モミ属炭化材の仮道管中の菌糸(×11,450)



2 サクラ属炭化材の道管中の菌糸(×2,820)



3 コナラ属炭化材の小道管内表面の腐朽状態(×1,140)

また、カマドや焼土の燃料用材では、枝材が多いことについては、それらの採取が容易であったことに加えて、木材の乾燥にも関係していたものと考えられる。例えば、頻繁に使用されているニレ属やトネリコ属でハルニレやヤチダモを利用していたとすれば、それらが多湿心材をもち心材部では伐倒後にもかなりの水分を含んでいることからみて大径木の伐倒直後の使用は困難であり、心材部が少なく乾燥しやすい枝を利用していたものであろう。

② 樹種同定の根拠, 写真の説明

サクシュコトニ川遺跡においては、テシの木材と堅穴、土壌、焼土、炭化物集積遺構の炭化材について樹種鑑定を行ない、前者では19科24属、後者では20科25属、全22科28属を同定した。それらの一覧表をTab.①-18に示し、以下にはそれらの同定の根拠、および鑑定結果の写真を示す。なお、同定にあたっては、既往の報告（Ohtani&Ishida 1976, 1978 a, 1978 b, 島地, 伊東 1982）および手持の材鑑と比較検討し、鑑定を行なった。

以下の樹種説明および写真の配列は、針葉樹、広葉樹の環孔材・散孔材、同定できなかったものの順とし、それらの中での配列順序や学名は、大井次三郎の日本植物誌（大井 1978）に従った。テシ木材の写真番号はアラビア数字で、炭化木材のそれは算用数字で表示してある。1組の写真（例えば 1a, 1b, 1c）では大部分のものについては木口面、板目面、らせん肥厚等の特徴的な細胞壁変異の微細形態の順に配列してあり、それらは全て同一個体の試料から得たものである。中には各樹種の典型的な組織・構造特徴を示さない写真もあるが、それは、枝やこぶ等のやや一般組織と異なるものが含まれていたり、腐朽等の影響により多少細胞壁形態が変化している場合があることによる。サクシュコトニ川遺跡から出土した木材の樹種同定の根拠、組織・構造の特徴は以下のとおりである。

1 イチイ (*Taxus cuspidata* Sieb.et Zucc.) [PL.②-348, PL.②-360]

材は仮道管と放射柔細胞からなり (Ia, 1a), 分野壁孔はヒノキ型とトウヒ型の間である (Ib, 1b)。仮道管の内壁にはらせん肥厚が常に存在する (Ic, 1c)。1bの左側の仮道管内壁には菌糸が認められる。

2 モミ属 (*Abies*) [PL.②-348, PL.②-360]

材は仮道管と放射柔細胞からなり (IIa, 2a), 晩材部の幅は狭い。分野壁孔は典型的なスギ型であり (IIb, 2b), 仮道管内壁にはいぼ状層が存在する (IIc, 2c)。放射柔細胞の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する。トドマツ (*Abies sachalinensis* <Fr.Schm.> Masters) と推定される。

3 トウヒ属 (*Picea*) [PL.②-348, PL.②-360]

材は仮道管、放射柔細胞、放射仮道管およびエピセリウム細胞からなり (IIIa, 3a), 分野壁孔はトウヒ型である (IIIb, 3b)。板目面では、水平樹脂道を含む紡錐形の放射組織がみられる (IIIc, 3c)。アカエゾマツ又はエゾマツと推定されるが、大量に出土した球果はアカエゾマツが大部分を占めており、アカエゾマツ (*Picea glehni* <Fr.Schm.> Masters) の可能性が強い。

4 コナラ属 (*Quercus*) [PL.②-349, PL.②-361]

環孔材であるが、孔圏外の道管は急に大きさに減じ、やや放射状に配列する (IVa, 4a)。孔

圈部の大道管にはチロースが認められる(Ⅳa)。放射組織は、単列および広放射組織のみからなり(Ⅳb,4b)、中間形ものは存在しない。ミズナラやコナラ等が推定されるが、孔圏外小道管が接線方向にかなり大きな幅で配列するものも認められ、カシワも存在するものと推定される。なお、Ohtaniらによれば、ミズナラ小道管には特異的肥厚 (Localized thickenings) が認められるとの報告 (Ohtani&Ishida 1978 b) があるが、その確認はできなかった。

5 ニレ属(*Ulmus*) (PL.2-349, PL.2-361)

環孔材であり、孔圏外では多数の小道管が接合して複合管孔を形成し、接線方向にかなり規則的に配列する(Va, 5a)。放射組織は1～6細胞幅で、同性である(Vb, 5b)。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する(Vc, 5c)。ハルニレ又はオヒョウと推定される。

6 エノキ属(*Celtis*) (PL.2-349, PL.2-361)

環孔材で、孔圏外の小道管は多数集まって円形等のやや不規則な集団管孔をなす(Va, 6a)。放射組織は1～2細胞幅の小型のものと7～10細胞幅の大型のものがあり、中間のものはない(Vb, 6b)。板目面では放射組織が異性であることは確認しづらいが、6bの左上の放射組織の下側では方形細胞が認められる。本属では鞘細胞の存在が特徴的であることが知られているが、本検体ではその確認が困難であった。小道管には、常に顕著ならせん肥厚が存在している(Vc, 6c)。エゾエノキ (*Celtis jessoensis* Koidz.) と推定される。

7 クワ属(*Morus*) (PL.2-350, PL.2-362)

環孔材で、孔圏部では2～3個の道管が複合し、孔圏外では小道管が複合して円形状をなす(VIa, 7a)。道管内にはチロースが認められ(VIa, 7a, 7b)、放射組織は1～6細胞幅で異性である(VIb, 7b)。小道管のらせん肥厚は一般的に走行方向が不規則なものが多いが、VIIcと7cではかなり規則的である。炭化材検体についてはヤマグワ (*Morus bombycis* Koidz.) と推定され、全く問題がないが、テンの検体についてはややらせん肥厚が規則的すぎ、他属樹種である可能性も否定できない。

8 イヌエンジュ属(*Maackia*) (PL.2-350, PL.2-362)

環孔材であるが、孔圏部から孔圏外への道管の大きさの移行はゆるやかであり、年輪界付近には小道管の集団管孔の不規則な配列がみられる(VIIa, 8a)。放射組織は1～8細胞幅で同性であり(VIIb)、板目面では小道管が層階状配列をなすことがわかる(8b)。小道管には顕著ならせん肥厚が認められ(8b, 8c)、マメ科等の特有のベスチャード壁孔が認められる(VIIc, 8c)。イヌエンジュ (*Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. var. *buergeri* (Maxim.) C.K.schm.) と推定される。

9 キハダ属(*Phellodendron*) (PL.2-350, PL.2-362)

環孔材であり、孔圏部では大道管が2～3個接して存在する(Xa, 9a)。放射組織は、1～4細胞幅で同性であり(Xb, 9b)、小道管には顕著ならせん肥厚が認められる(9c)。また、大道管にも不規則ではあるがらせん肥厚が存在する(Xc)。キハダやヒロハノキハダ等と推定される。写真Xaと9aとでは、同属であるにもかかわらず木口面での形状がかなり異ってみえる。

10 ニガキ(*Picrasma quassoides* <D.Don> Benn.) (PL.2-363)

環孔材であり、孔圏部道管は大きく、孔圏外では急激に大きさを減じる(10a)。放射組織は1～5細胞幅であるが、高さは4から時には20細胞高と不揃いであり異性である(10b)。道管にらせん肥厚は存在しない。

11 ハリギリ(*Kalopana pictus* <Thunb.> Nakai) (PL.2-351)

環孔材であり、孔圏部道管は一系列であり、孔圏外では小道管が多数接合し複合管孔を形成し斜線状に配列する(Xa)。放射組織は4～6細胞幅で異性である(Xb)。道管にらせん肥厚は存在しない。

12 トネリコ属(*Fraxinus*) (PL.2-351, PL.2-363)

環孔材であり、孔圏部道管は大きく、孔圏外では急激に大きさを減じかつ2～3個が半径方向に複合する(Xa, 11a)。放射組織は1～4細胞幅で、高さも10細胞高程で比較的均一であり同性である(Xb, 11b)。道管壁にらせん肥厚は存在しない。ヤチダモやアオダモ等が推定される。

13 ハコヤナギ属(*Populus*) (PL.2-351, PL.2-363)

散孔材であり、道管の多くは2～4個の複合管孔を形成し(XIIa, 12a)、全て単せん孔をもち、らせん肥厚は存在しない。写真12aではビスフレックスが認められる。放射組織は単列でかつ同性である(XIIb, 12b)。ドロノキ(ドロヤナギ)やヤマナラシ等が推定される。

14 ヤナギ属(*Salix*) (PL.2-352, PL.2-364)

散孔材であり、道管は2～3個の複合道管を時々形成する(XIIIa, 13a)。また、全ての道管要素が単せん孔を持ち、らせん肥厚は存在しない。放射組織は単列でかつ異性である(XIIIb, 13b)。エゾノカワヤナギ、オノエヤナギ、バッコヤナギ、エゾノバッコヤナギ等が推定される。

15 オニグルミ(*Juglans ailanthifolia* Carr.) (PL.2-352, PL.2-364)

散孔材であり、大型の道管が単独又は2～3個が複合して存在し(XIVa, 14a)、チロースを含むことが多い(14a, 14b)。また、道管要素は単せん孔をもちらせん肥厚は存在しない。放射組織は1～4細胞幅であり、一般的には同性である(XIVb, 14b)。本種やサワグルミ属の特徴である、木口面でみられる柔細胞の接線方向への配列(XIVa)は、炭化材のSEM観察では認めにくい。

16 アサダ(*Ostrya japonica* Sarg.) (PL.2-364)

散孔材で、比較的大型の道管が2～3個放射方向に複合し、年輪の外境付近では大きさを減じ、かつ3～8個放射方向に複合する(15a)。放射組織は1～3細胞幅であり、また20細胞高になる場合も多く同性である(15b)。道管要素は全て単せん孔をもつが、稀には特異な形状のものもあり、分布密度や走行方向が不規則ならせん肥厚をもつことが多い(15c)。

17 カバノキ属(*Betula*) (PL.2-352, PL.2-365)

散孔材で、道管は2～5個主として放射方向に複合し(XVa, 16a)、全ての道管要素は階段せん孔をもつ(XVb, c, 16b)。放射組織は1～4細胞幅で、同性である(XVb, 16b)。

また、写真16cでは、本属特有の道管相互間の壁孔が認められる。シラカンバやウダイカンバ等が推定される。

18 ハンノキ属(*Alnus*) [PL.②-353, PL.②-3]

散孔材で、道管は2～5個が主として放射方向に複合する(XVIa,17a)。放射組織は単列かつ同性であり(17b)、集合放射組織を形成する(XVIb)。全ての道管要素は階段せん孔をもち(XVIc,17c)、らせん肥厚は存在しない。ハンノキ、ケヤマハンノキ等が推定される。

19 カツラ(*Cercidiphyllum japonicum* Sieb.et Zucc.) [PL.②-353, PL.②-365]

散孔材であり、大部分の道管は複合せず単独で分布するが、道管の数は極めて多く年輪全体を通じて平等に分布する(XVIIa,18a)。放射組織は1～2細胞幅であり異性である(XVIIb,18b)。全ての道管要素は階段せん孔をもち、Barの数も1せん孔につき20本以上と多い(XVIIc,18c)。また、らせん肥厚は存在しない。

20 モクレン属(*Magnolia*) [PL.②-353, PL.②-366]

散孔材であり、単独あるいは2～数個主として放射方向に接合した道管が平等に分布する(XVIIIa,19a)。放射組織は1～2細胞幅であり異性であるが(XVIIIb,19b)、板目面では判別しにくい。多くの道管要素は単せん孔を持ち(XVIIIc)、階段壁孔(19c)およびらせん肥厚を持つ。ホオノキは隔壁木繊維を持つことが大きな特徴であるが、炭化材では確認しにくい。ホオノキ、コブシ等が推定される。

21 アジサイ属(*Hydrangea*) [PL.②-354, PL.②-366]

散孔材であり、道管が単独あるいは2～3個複合して年輪内に平等に分布し、木口面では柔細胞が放射方向へと連続して認められるのが特徴である(XXa,20)。放射組織は多くの場合2～3細胞幅であり、板目面では上下方向で柔細胞と接している(XXb,20b)が、高さは3～5細胞高と低い。全ての道管要素は階段せん孔を持つ(20c)。らせん肥厚は稀に道管要素の一部に認められることが報告されているが(Ohtani&Ishida 1978b)、本検体ではその存在は確認されなかった。材鑑標本および現生木から採取した標本と比較してノリウツギと一致することから、ノリウツギ(*Hydrangea paniculata* Siebold)と推定したが、アジサイ属の他樹種である可能性も否定できない。

22 サクラ属(*Prunus*) [PL.②-366]

散孔材であり、道管は単独あるいは2～3個複合して年輪内に平等に分布する(21a)。放射組織は1～4細胞幅であり、20細胞高以上に達する 경우가多く(21b)、異性であるが、板目面では判別しにくい。全ての道管要素は単せん孔を持ち、また幅の小さいらせん肥厚をもつ(21c)が枝分れするらせん肥厚は少ない。エゾヤマザクラ、ミヤマザクラ、シウリザクラ、ウワミズザクラ等が推定される。

23 ニシキギ属(*Euonymus*) [PL.②-367]

散孔材であり、極めて径の小さい道管が年輪内に平等に分布する(22a)。放射組織は単列かつ同性である(22b)。全ての道管要素は単せん孔を持ち、かつ、らせん肥厚を持つ(22c)。また、本属では木部繊維にもらせん肥厚を持つ(22b)ことが大きな特徴である。ニシキギ、マユミ、ツリバナ等が推定される。

24 カエデ属(*Acer*) [PL.2-354, PL.2-367]

散孔材であり、単独あるいは放射方向に数個複合した道管が均等に分布するが、道管数は比較的少ない(XXa, 23a)。放射組織は1～5細胞幅であり同性である(XXb, 23b)。道管要素は全て単せん孔を持ち、かつ比較的的不規則ならせん肥厚を持つ(XXc, 23c)。本検体のらせん肥厚は隆起線が長いことから、それが短いヤマモミジ等よりもイタヤカエデに近いものと推定される。しかし、カエデ属では、本道での自生種が多種に及ぶことが知られており、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、イタヤカエデ、アカイタヤ等が推定されるものの、樹種の特定はできない。

25 シナノキ属(*Tilia*) [PL.2-354]

散孔材であり、多くの場合道管は2～5個接合して複合管孔を形成する。(XXIa)。また、柔細胞が短接線状に並ぶことが多い(XXIa)。放射組織は1～4細胞幅であり同性である(XXIb)。道管要素は単せん孔を持ち、顕著ならせん肥厚を持つ(XXIc)。シナノキまたはオオバボダイジュであるものと推定される。

26 ミズキ属(*Cornus*) [PL.2-355, PL.2-367]

散孔材であり、道管は単独あるいは放射方向に数個複合して均等に分布する(XXIIa, 24a)。放射組織は1～4細胞幅で上下両端部付近に直立細胞が多く、異性である。(XXIIb, 24b)。道管要素は全て階段せん孔を持ち(24c)、らせん肥厚は存在しない。本属は、エゴノキ属やリョウブ属と組織が類似しているが、前者は複合道管が極めて多い点、後者は道管内での特異的肥厚を持つ点で区別できる。ミズキ(*Cornus cotroversa* Hemsley)であるものと推定される。

27 ハシドイ属(*Syringa*) [PL.2-355]

散孔材であり、多くの道管は複合道管を形成する(XXIIIa)。放射組織は1～2細胞幅であり、同性である(XXIIIb)。全ての道管要素は単せん孔を持ち、2本の対をなすらせん肥厚を持つ(XXIIIc)ことが大きな特徴である。ハシドイ(*Syringa reticulata* <Blume> Hara)であるものと推定される。

28 ニワトコ属(*Sambucus*) [PL.2-355, PL.2-368]

散孔材であり、道管は複合道管を多く形成し(XXIVa, 25a)、紋様状に配列することもある。放射組織は1～4細胞幅であり、異性である(XXIVb, 25b)。道管要素は多くの場合単せん孔を持つが(25b)、稀に、多孔せん孔様の形状を示す場合がある(XXIVb, 25b)。道管要素は多くの場合単せん孔を持つが(25b)、稀に、多孔せん孔様の形状を示す場合がある(XXIVc, 25c)。ニワトコまたはエゾニワトコであるものと推定される。

29 ツル性植物(ブドウ属: *Vitis*, ノブドウ属: *Ampelopsis*, 等) [PL.2-356, PL.2-368]

木口面では、極めて径の大きい道管が不規則に分布しているのが認められ(XXVa, 26a)、放射組織も10細胞幅以上で100細胞高以上に達し(XXVb, 26b)、樹木の一般木部組織とは大きく異なっている。また、道管には、階段壁孔状の構造がみられる。

ツル性植物には数多くの種類があり、その組織構造に関する報告がほとんどないため断定はできないが、現生ヤマブドウのツルを観察したところ、本検体とは組織が極めて類似していた。したがってヤマブドウ(*Vitis coignetiae* Pulliat)と推定したが、炭化種子では、マタタビまたはコクワ(*Actinidia* sp.)と推定されるものも出土しており、ノブドウ属も含めて多種の可能性も否定できない。そのため、ここでは、一括してツル性植物とし

て扱った。XXVIのa,bも写真XXVや26と組織が類似しているが、道管の配列状態や階段壁孔状の構造物のBarの数が少い等やや異なるため、写真を提示した。

以下には、不確実なものや同定できないものについて、テン、炭化材の順に記す。

30 不明1(ブナ科?) [PL.2-356]

材は放射孔材であり、道管は年輪に関係なく放射方向に配列する(XXVIIa)。放射組織は、同性で、大部分が単列であるが、稀に2~3細胞幅のものも存在する(XXVIIb)。本検体は、クリ属、シノキ属や常緑カン類と組織が類似しているが、同定はできなかった。

31 不明2(ウルシ属?) [PL.2-357, PL.2-368]

材は環孔材であり(XXVIIIa)、道管にはチロースを含む。放射組織は1~3細胞幅であり、異性である(XXVIIIb)。本検体は、放射組織の多列部が平伏細胞からなり、単列部が直立細胞からなることから、ウルシ属(*Rhus*)と推定されたが、ウルシ属特有のらせん肥厚がSEM観察でも確認できなかったことから不明樹種とした。しかし、本検体は自然流木で、細胞壁の劣化が著しく、そのためにらせん肥厚を得なかった可能性が強く、ウルシ属である可能性がかなり強いように思われる。

32 不明3 [PL.2-357]

広葉樹材で道管配列は半環孔状であり(XXXa)、放射組織は1~5細胞幅で異性である(XXXb)。また、道管には、比較的規則的のらせん肥厚が存在する(XXXc)。樹種の特定はできなかった。

33 不明4(コシアブラ?) [PL.2-357]

散孔材であり(XXXa)、年輪界に接する部分で道管は環孔状に配列する。放射組織は1~3細胞幅であり、上下部には方形細胞を含む(XXXb)。道管要素は全て単せん孔を持ち、らせん肥厚は持たない。本検体は道管がやや半環孔状に並ぶことなど、ウコギ属(*Acanthopanax*)のコシアブラに類似しているが、断定はできない。

34 不明5(クマシデ属?) [PL.2-358]

放射孔材であり(XXXIa)、放射組織は1~3細胞幅で異性である(XXXIb)。道管要素は階段せん孔を持ち、らせん肥厚は認められない。本検体は、道管配列や階段せん孔を持つことから、クマシデ属またはハンバミ属と推定はされるが、典型的な集合放射組織が確認できず、少なくともハンバミ属とは考えにくい。また、クマシデ属の可能性は高いものの、本検体ではらせん肥厚を確認できなかった。本検体も細胞壁劣化が著しく、そのためにらせん肥厚を認め得なかったものと思われ、クマシデ属(サワシバ等)と推定されるものの断定はできない。

35 不明6(クマシデ属?) [PL.2-358]

放射孔材であり(XXXIIa)、放射組織は1~2細胞幅で異性である(XXXIIb)、道管要素は階段せん孔を持ち、らせん肥厚は認められない。写真XXXIの検体と組織は類似しているが、道管数が極めて少なく、やや放射組織幅が狭い。本検体もクマシデ属であるものと推定されるが断定はできない。

36 不明7(ニレ科?) [PL.2-358]

散孔材であり、道管数は少なく、放射方向に複合する場合が多い(XXXIIIa)。また、道

管にはチロースを含む。放射組織は1～5細胞幅であり、異性である(XXXIII b)。道管要素は単せん孔を持ち、顕著ならせん肥厚を持つ(XXXIII c)。ニレ科のムクノキに組織は類似しているが、同定はできなかった。

37 不明8 (ナナカマド属?, リンゴ属?) (PL[2]-359)

散孔材であり、道管は、単独かまたは2～3個接合し(XXXIV a)、放射組織は1～2細胞幅で同性である(XXXIV b)。道管要素は、単せん孔を持ち、らせん肥厚は認められない。本検体は、ナナカマド属やリンゴ属と類似しているが、前者では特有のZ-helixのらせん肥厚の存在が知られており、後者でもらせん肥厚の存在が知られている。本検体は、自然流木であり、細胞壁の劣化が著しくらせん肥厚の確認が困難であったものと推定されいづれかの属であるものと考えられるが、特定はできない。

38 不明9 (ナナカマド属?, リンゴ属?) (PL[2]-359)

本検体も組織は写真XXXIVの検体と類似しているが、やや道管数も少なく(XXXV a)、放射組織も2列細胞幅のものが多く(XXXV b)。その他の点では37の検体と同様であり、ナナカマド属またはリンゴ属と推定されるが特定はできない。

39 不明10 (PL[2]-359)

散孔材であり、道管数は少なく、単独で散在している(XXXVI a)。放射組織は1～2細胞幅であり、異性である(XXXVI b)。道管要素は単せん孔を持ち、らせん肥厚は認められなかった。本検体は、細胞壁劣化が著しく、樹種特定ができなかった。

40 不明11 (PL[2]-368)

広葉樹材であり、道管は半環孔状に配列し(27a)、大道管が時折複合して分布する。放射組織は1～7細胞幅で異性である(27b)。道管要素は単せん孔を持ち、比較的規則的に配向するらせん肥厚を持つ(27c)。一般的に環孔材ではあっても小枝や髄付近では、道管が典型的な環孔状配列をしないことは良く知られているが、仮に本検体が環孔材であるならば、ウルシ属(*Rhus*)の可能性が高いかもしれない。

41 不明12 (PL[2]-369)

径1 cm程の小棒状炭化物で髄は空洞である(28a)。横断面では、維管束形成層と推定される構造が不規則に並んでおり(28b)、縦断面では、道管や柔細胞が認められる(28c)。単子葉植物であろうと推定されるが、同定はできなかった。

42 不明13 (PL[2]-369)

横断面では、写真28の検体と類似した構造が認められる(29a)。拡大像が29bであるが、この種の維管束配列は、ササ属(*Sasa*)にも類似しているように思われるが、同定はできなかった。

43 不明14 (PL[2]-369)

径5 mm程の小棒炭化物で、髄は空洞である。横断面では径の揃った細胞が認められる(30a)。縦断面でも、比較的大きさの揃った細胞が認められ(30b)、写真28や29の検体とは組織がかなり違っている。同定はできなかったが、参考資料として提示した。

以上の不明樹種の中で、ウルシ属(写真XXVIII)、ウコギ属・コシアブラ(写真XXX)、クマシデ属(写真XXXI)の3属については、細胞壁変異の観察が十分に行なえなかったことから不明樹種としたが、他に該当樹種もなく、おそらく同定には問題がないように思われる。また、ナナカマド属とリンゴ属(写真XXXIV, XXXV)については、前者では少数であるが存在が知られている多孔せん孔が認められないことから、ややリンゴ属の可能性が強いように思われる。これらの代表樹種は、ウルシ属：ヤマウルシ、ヌルデ等、クマシデ属：サワシバ、リンゴ属：エゾノコリンゴ、ズミ等であろう。

以上の樹種鑑定にあたっては、テン材、炭化材にかかわらず、SEM観察が極めて有効であった。出土木材は枝材等が多く、光学顕微鏡による一般組織の観察のみでは同定が難しい場合が多々あったが、細胞壁変異の観察によりかなり確実な同定を行なうことができる。例えば、針葉樹材では年輪幅の狭い個体やアテ材組織が多く、イチイ属とモミ属の判断が難しいが、らせん肥厚といば状層の確認により確実な識別を行うことができ、また、広葉樹材では、イヌエンジュ属のベスチャード壁孔や、多くの樹種に認められるらせん肥厚の形態がかなり確実な同定の根拠となった。

炭化材では、腐朽の少ないものが多く、特に微細形態の観察が容易であるが、テン材のかなり腐朽の進んだものでもほとんどの場合道管内壁が残存しており、微細形態の観察は十分に行なうことが可能である。木材細胞の最内壁で腐朽抵抗性が強いことは一般的に知られており、本検体中でもそれが裏付けられたといえよう。

SEM手法としては、テン材のような炭化していない材については、臨界点乾燥法を用いる必要がある程度で、他に特に難しい処理は必要なく、今後ともにこの種の研究にはSEMを用いていく必要があろう。

本遺跡では全28属にツル性植物が同定されたが、それらは北海道大学構内の現植生に照らしてみても特に大きく異なる樹種は含まれておらず(清水 1983)、当時の気候や地形等の環境条件は現代とさほど大きな差はなかったものと考えられる。テンと住居等の双方で大量に使用されているものはトネリコ、ニレ、ヤナギの各属であり、これらはヤチダモ、ハルニレ、エゾノカワヤナギ等と推定され、比較的湿潤な地を好むものであり、全体的にみれば、遺跡周辺はかなり湿地に近い環境であったように推察される。

しかし、ニワトコやニシキギ属等の低かん木類、また、炭化雑草種子ではギンギン属やイヌホオズキ属等の比較的日当たりの良い場所を好むものが認められている等の点からみれば、当時の遺跡周辺では、草原や疎林に近いような区域もあったように思われ、こまかくみれば周囲の環境はかなり変化に富んでいたように推察される。それらが人為的な、たとえば農耕等による環境変化によるものなのかどうかはさらに検討してから結論すべき問題であろう。

炭化種子との比較では、オニグルミ、エゾニワトコ、ミズキ属、ウルシ属、アサダ属の木本植物種子にブドウ属等のツル性植物種子が認められており、ウルシ属を除いては炭化材でも認められているものもある。しかし、炭化材中の他樹種、例えばイチイ、クワ、キハダ、モクレン、サクラ、ニシキギ等の各属の種子はかなり残りやすいものと思われるにもかかわらず見いだされていない。その理由としては種々あろうが、食用として遺跡内に持込まれず、かつ遺跡から離れた場所で材のみが採取されたためか、季節的な結実時期の違いが主なものであろう。ここで、注目したいのは、食用としても適し実の数も多いクワ属の材がかなり多く認められているにもかかわらず種子が見いだされていないことであり、本属が夏の時点で結実し、既述のエゾニワトコ等が秋に結実するのと異なる点である。これは、単に遺跡のごく近くの植生のためかもしれないが、仮に本遺跡が秋の生活跡のみを残しているとすれば、本遺跡が秋に限定されるような季節性をもった生活場所であった可能性も否定できないように思われる。

Tab. Ⅱ-18 サクシュコトニ川遺跡における木材の樹種

属名	代表的樹種	テシ木材		炭化材
		加工材	自然流木	
1 イチイ(<i>Taxus</i>)	イチイ*	○	○	○
2 モミ(<i>Abies</i>)	トドマツ	○	○	○
3 トウヒ(<i>Picea</i>)	アカエゾマツ	○	○	○
4 コナラ(<i>Quercus</i>)	ミズナラ	○	○	○
5 ニレ(<i>Ulmus</i>)	ハルニレ	○		○
6 エノキ(<i>Celtis</i>)	エゾエノキ	○		○
7 クワ(<i>Morus</i>)	ヤマグワ		○	○
8 イヌエンジュ(<i>Maackia</i>)	イヌエンジュ	○		○
9 キハダ(<i>Phellodendron</i>)	キハダ	○		○
10 ニガキ(<i>Picrasma</i>)	ニガキ			○
11 ハリギリ(<i>Kalopanax</i>)	ハリギリ*	○	○	
12 トネリコ(<i>Fraxinus</i>)	ヤチダモ	○	○	○
13 ハコヤナギ(<i>Populus</i>)	ドロノキ	○	○	○
14 ヤナギ(<i>Salix</i>)	エゾノカワヤナギ	○	○	○
15 クルミ(<i>Juglans</i>)	オニグルミ*	○		○
16 アサダ(<i>Ostrya</i>)	アサダ			○
17 カバノキ(<i>Betula</i>)	シラカンバ	○		○
18 ハンノキ(<i>Alnus</i>)	ハンノキ	○	○	○
19 カツラ(<i>Cercidiphyllum</i>)	カツラ	○		○
20 モクレン(<i>Magnolia</i>)	ホオノキ	○		○
21 アジサイ(<i>Hydrangea</i>)	ノリウツギ	○		○
22 サクラ(<i>Prunus</i>)	エゾヤマザクラ*			○
23 ニシキギ(<i>Euonymus</i>)	マユミ			○
24 カエデ(<i>Acer</i>)	イタヤカエデ	○	○	○
25 シナノキ(<i>Tilia</i>)	シナノキ	○		
26 ミズキ(<i>Cornus</i>)	ミズキ	○		○
27 ハシドイ(<i>Syringa</i>)	ハシドイ	○		
28 ニワトコ(<i>Sambucus</i>)	ニワトコ		○	○
29 ツル性植物(<i>Vitis</i> 等)	ヤマブドウ等		○	○

※種名が同定されたものには*印

最後に本遺跡の木材の樹種鑑定や保存処理にあたって多くのご協力とご教授をいただき北海道大学農学部石田茂雄名誉教授をはじめ林産学科、木材理学講座の諸先生方、また、開拓記念館の三野紀夫氏、山田悟郎氏に深甚なる謝意を表します。(平川泰彦)

《参考文献》

- ▶増澤文武 「出土木材の性質と保存上の問題点」『材料』 28, 582-590 1979
- ▶松田隆嗣 「出土木材の自然乾燥にともなう内部形態変化」『保存科学研究室紀要』 №3, 71-85 1974
- ▶松田隆嗣 「出土木材のPEG含浸処理に関する実験(Ⅲ)」『保存科学研究室紀要』 №4, 23-31 1975
- ▶大井次三郎 『日本植物誌』 至文堂 1978
- ▶Ohtani, J. & Ishida, S. Study on the pit of wood cells using scanning electron microscopy Report 5, Vestured pits in Japanese dicotyledonous woods. *Res. Bull. College Exp. For. Hokkaido Univ.*, 33-2, 433-464, 1976
- ▶Ohtani, J. & Ishida, S. An observation on the perforation plates in Japanese dicotyledonous woods using scanning electron microscopy. *ibid.* 35-1, 65-98, 1978 a
- ▶Ohtani, J. & Ishida, S. An observation on the spiral thickenings in the vessel members in Japanese dicotyledonous woods using scanning electron microscopy. *ibid.* 35-2, 433-464 1978 b

- ▶岡本一・増澤文武 「出土木材，その性質と保存処理」『木材工業』 39-6, 7-13 1984
- ▶佐藤健 「ポリエチレングリコール(PEG)と木材」『木材工業』 38-5 7-13 1983
- ▶島地謙・伊東隆夫 『図説木材組織』 地球社 1982
- ▶清水雅男 「自然環境の復元」『北大構内の遺跡2』 吉崎・岡田編 16-17 北海道大学 1983
- ▶W.Wilcox. Anatomical changes in wood cell walls attacked by fungi and bacteria. *Bot. Rev.* 36: 1-28 1970

VI-11

「刻字土器「𠂔」の意義」

佐伯有清 *

①

北海道大学構内のサクシュコトニ川遺跡から出土した多数の遺物のなかに、2粒のコメと、「𠂔」という文字が刻まれている土師器片が発見されたのは、1982年12月のことであった(「千年前の米つぶ出土」〈昭和57年12月3日付『北海道新聞』,「千年前にも道内で米食」〈同日付『朝日新聞』参照)。

その後、土師器片に刻まれていた「𠂔」という「漢字らしきもの」が、なんという文字なのか、判読してほしいと、北大埋蔵文化財調査室から依頼を受けた筆者は、ただちに、「𠂔」の字は、蝦夷の「夷」の異体字であろうと思われることを回答した。この判読については、まもなく新聞で報道されたが(「本道最古の漢字資料」〈昭和58年2月24日付『北海道新聞』参照)、それとは別に筆者は、「学内の遺跡から出土した文字のある西暦9世紀の土器片」と説明が付された同土器片の鮮明な写真を表紙に掲載した『北大時報』(昭和58年2月号, №347)に解説の短文を寄せた。

そのさい、「𠂔」の文字が、「夷」の異体字であろうとみなした論拠として、「夷」の字を、「𠂔」と書いた例のあることを指摘した。「夷」の字は、中国の隋唐時代の人である李靖(571~649)の書蹟などにみられる。だが、問題となるのは、土器片の「𠂔」の字には、3画目の「一」に、「𠂔」の字のように湾曲部分がないことがあげられるであろう。

しかし、『偏類碑別字』などの異体字書に掲げられている「夷」の異体字を調べてみると、たとえば、唐の等慈寺碑銘に「夷」の字が、「夷」と書かれているのとならんで、隋の首山舍利塔銘には、「夷」と記されていることは、注目してよいであろう。というのは、「夷」の字の「一」の部分の画が、「一」のように、真っすぐに一直線で書かれる場合のあったことが知られるからである。

事実、日本古代においても、「夷」の字の例ではないが、「佛」の字を、「𠂔」と墨書している資料があるのは、「𠂔」を「夷」の字とみなしてよい傍証としてあげることができるであろう。ちなみに、「𠂔」と書かれている墨書土器は、山形県東置賜郡川西町の道伝遺跡から出土したものである。同遺跡からは、寛平8年(896)の年紀を記す木簡が出土しており、「佛」の字を「𠂔」と記す墨書土器も、9世紀のものと考えてよい(『木簡研究』第2号, 47~49ページ参照)。

②

サクシュコトニ川遺跡から「𠂔」と刻字された土師器片が発見された当時、北大埋蔵文化財調査室では、同字体で記された遺物が、他の遺跡から出土していないかどうか、東北地方出土の墨書土器などについて克明な調査がなされた。しかし、他に類似した例が発見されず、本遺跡出土の刻字土器片は、孤立した資料として、その後の同類の資料の出現が望まれていたのである。

ところが、最近になって二つの同類の文字資料が知られるにいたった。

その(1)は、平城宮跡のS D2700と呼称されている推定第2次内裏東外郭回廊の東22メートルの位置において検出された玉石積の大規模な南北溝の遺跡から出土した墨書土器である。その土器片には、次頁の写真にみられるように、あきらかに「𠂔」の字が記されている。この土器片は、須恵器の坏であって、1964年度の第21次調査のさいに出土したもので

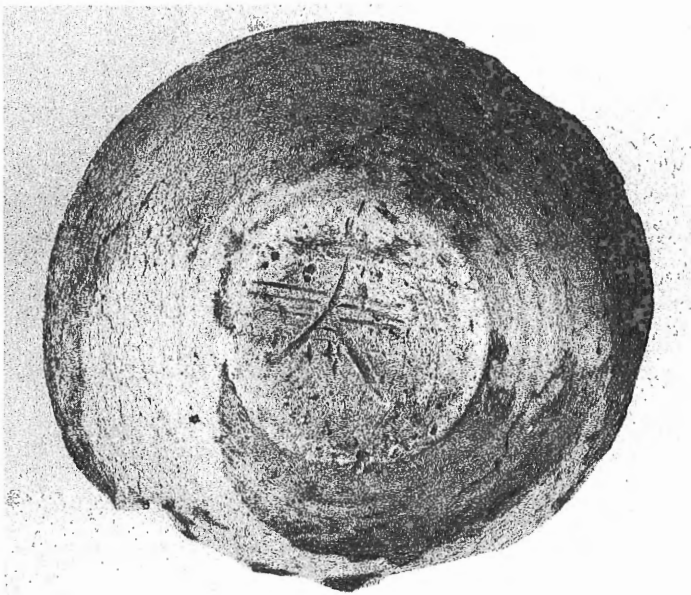
ある。この「夫」の文字は、不明文字として報告書では判読されていないが(奈良国立文化財研究所編『平城宮出土墨書土器集成』Ⅰ, 17ページ参照), サクシュコトニ川遺跡出土の刻字土器片の「夫」と、まったく同字体であって、「夷」の字と判読すべきであろう。

PL. Ⅲ-32 平城の「夫」



その(2)は、秋田城跡の南約12キロメートルの位置にある湯ノ沢F遺跡から出土した刻字土器である。この土器は、3号土壇墓から検出した2点のうちの一つであって、須恵器の杯の底部に「夫」と刻字されている。同遺跡の報告書には、「1の底部にはへら描きがあるが判読できなかった」(247ページ)とあるが、最近刊行された富樫泰時氏の著書には、「三

PL. Ⅲ-33 秋田市湯の沢F遺跡3号土壇墓出土土器の「夫」



号土壇墓から検出された杯の底部には線刻の文字があり、『夷』と判読される北海道大学構内の学生寮宿舎建設地区でも同様な線刻文字のある土器が検出されており、興味のもたれるところである」(富樫泰時『日本の古代遺跡』24 秋田, 147ページ)と述べられており、また同土器の図の説明には「湯ノ沢F遺跡の須恵器の線刻『夷』の文字」(148ページ)とある。

③

東北地方の秋田城跡に比較的近い湯ノ沢F遺跡から「蝦夷」と同字義の「夷」の字が刻まれた土器が検出されたのは、それほど異様なことではない。しかし、北海道大学構内のサクシュコトニ川遺跡や、平城宮跡のS D 2700遺跡から「夷」の字が記された土器が出土したことは、どういうわけなのであろうか。歴史的に、その背景を探ってみる必要があろう。

まず平城宮跡出土のものから考察を加えることにする。S D 2700遺跡は、その埋土が6層に分れていたという。その最下層である第Ⅵ層からは、天平元年(729)、同2年(730)の年紀をもつ木簡が出土し、最上層である第Ⅰ層からは、延暦元年(782)、同2年(783)の年紀を記す木簡が検出されている。これによって、この遺跡の年代が知られるが、出土した木簡のなかには、「宮内」「宮内省」と書かれているものが3点、「木工寮」「典膳」「豎子所」と記されたものが各1点あり、また「宮内省」「大炊」と墨書された土器も検出されており、宮内関係の名辭の比較的多いことが注意されている(奈良国立文化財研究所編『平城宮木簡』二、解説15～16ページ参照)。

なかでも、とくに注目されるのは、「宮内天長節」と墨書された土器が、第Ⅱ層より出土していることである。「天長節」のことが文献にみえる最初は、『続日本紀』宝亀6年(775)10月壬寅(11日)条であって、その記事には、

勅。十月十三日。是朕生日。毎至比辰。感慶兼集。宜令諸寺僧尼。毎年是日。轉經行道。海内諸国。并宜断屠。内外百官。賜酺宴一日。仍名此日。为天長節。庶使廻斯功德。虔奉先慈。以此慶情。普被天下。

とある。同書には、この初見記事につづいて、同年10月癸酉(13日)条に、

是日天長。大酺。群臣。献翫好酒食。宴畢。賜禄有差。

とみえ、さらに宝亀10年(779)10月己酉(13日)条に、

是日当天長節。仍宴群臣。賜禄有差。又詔贈外祖父從五位上紀朝臣諸人從一位。

とみえる。これらの記事によって、「天長節」が、宝亀6年(775)から始まり、以後毎年、この節が宮中で催されたことが知られ、「宮内天長節」とある墨書土器が出土した第Ⅱ層は、延暦元年(782)、同2年(783)の年紀をもつ木簡が出土した第Ⅰ層に接する埋土層であるので、まさに第Ⅱ層は、宝亀年間に廃棄された遺物の包含層と断じてよい。

遺憾ながら「夫」と記された須恵器の坏がどの埋土層より検出されたのか報告書には記載がないが、おそらく宝亀年間という年次を考慮のうちにに入れてもよいであろう。なぜならば、宝亀年間に、宮内における「蝦夷」の動向が、しばしば記録にみられるからである。

- (1)天皇御大極殿受朝。文武百官。渤海蕃客。陸奥出羽蝦夷。各依儀拝賀。(『続日本紀』宝亀3年正月壬午朔<1日>条)
- (2)陸奥出羽蝦夷歸郷。賜爵及物有差。(宝亀3年正月丁酉<16日>条)
- (3)御大極殿受朝。文武百官。及陸奥出羽夷俘。各依儀拝賀。(宝亀4年正月丁丑朔<1日>条)
- (4)陸奥出羽蝦夷俘囚歸郷。叙位賜禄有差。(宝亀4年正月庚辰<14日>条)
- (5)宴五位已上於楊梅宮。饗出羽蝦夷俘囚於朝堂。叙位賜禄有差。(宝亀5年正月丙辰<16日>条)
- (6)詔停蝦夷俘囚入朝。(宝亀5年正月庚申<20日>条)
- (7)仰陸奥出羽。追蝦夷廿人。為擬唐客拝朝儀衛也。(宝亀9年12月戊戌<26日>条)

これらの記事は、いずれも正月拝賀の儀に、「蝦夷」も参列したことにかかわるものである。『続日本紀』におけるその初見は、

- (8)天皇御大極殿受朝。隼人蝦夷等亦在列。左將軍正五位上大伴宿禰旅人。……等於皇城門外朱雀路。東西分頭。陳列騎兵。引隼人蝦夷等而進。(『続日本紀』和銅3年正月壬子朔<1日>条)
- (9)天皇御重閣門。賜宴文武百官并隼人蝦夷。奏諸方樂。從五位已上賜衣一襲。隼人蝦夷等。亦授位賜禄各有差。(和銅3年正月丁卯<16日>条)

であるが、また同書には、

(10)天皇御ニ大極殿ニ受レ朝。……陸奥出羽蝦夷。并南嶋奄美。夜久。度感。信覚。球美等
来朝。各貢ニ方物。其儀朱雀門左右陣ニ列鼓吹騎兵。……(靈龜元年正月甲申朔〈1日〉
条)

(11)蝦夷及南嶋七十七人。授レ位有レ差。(靈龜元年正月戊戌〈15日〉条)

(12)御ニ大極殿ニ受レ朝。文武百官及陸奥蝦夷。各依レ儀拝賀。(神護景雲3年正月辛未〈2日〉
条)

(13)御ニ法王宮。宴ニ於五位已上。道鏡与ニ五位已上摺衣人一領。蝦夷緋袍人一領。
(神護景雲3年正月丙子〈7日〉条)

(14)御ニ東院ニ賜ニ宴於侍臣。饗ニ文武百官。主典已上。陸奥蝦夷於朝堂。賜ニ蝦夷爵及
物。各有レ差。(神護景雲3年正月丙戌〈17日〉条)

などとみえる。

上に掲げた記事(5)・(9)・(14)などによって、正月拝賀の儀に参列した「蝦夷」が朝堂など
において賜宴されていることが知られ、また記事(2)・(4)・(5)・(9)・(14)などから、「蝦夷」
が位を授けられ、禄物を賜わったことがわかる。さらに記事(2)・(4)によって、「蝦夷」が
拝賀の儀が終ると「帰郷」したことが知られるので、「蝦夷」は拝賀の儀に参列するため
に、わざわざ陸奥・出羽の地から呼び出されたのであった。それは、記事(7)に、「蝦夷廿
人を追(めさ)しむ」とあることから確かめられる。

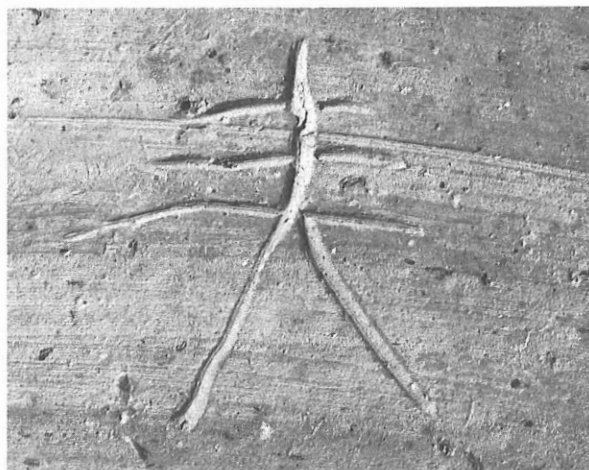
上掲の記事が、年代的に飛び離れているのは、「蝦夷」の拝賀のことが記載されなかつ
たというのではなく、「蝦夷」の地の情勢によって、「蝦夷」の拝賀をとりやめたことを
反映しているとみなすべきであろう。(6)に「蝦夷」と「俘囚」の入朝を停めたとあるのは、
その年、すなわち宝亀5年(774)の陸奥国における不穏な状況によるものであって、それ
は『続日本紀』宝亀5年7月丁巳(20日)条、同月庚申(23日)条、同月壬戌(25日)条、同年
8月己巳(2日)条、同月辛卯(24日)条以下の記事についてみればあきらかである。

いずれにしても、神護景雲3年(769)より宝亀9年(778)にかけて、「蝦夷」が、しば
しば正月拝賀の儀のために「入朝」し、饗宴を受けているのは、平城宮跡S D2700遺跡か
ら出土した墨書土器の一つに「夫」と記されていることと無関係でないと考えられる。お
そらく、「夫」銘のある須恵器の杯は、そうした「蝦夷」を饗応するために用いたものと
みなして差し支えないであろう。

④

それでは、北海道大学構内のサクシュコトニ川遺跡から出土した「夫」と刻字されてい
る土師器については、どのように考えたらよいのであろうか。

PL. Ⅲ-34 サクシュコトニ川遺跡出土土器



岡田淳子氏によると、その土器は、食物を盛る坏で、轆轤を使用して製作されており、内部が黒く塗られた典型的な本州の土師器であって9世紀に東北地方北部で焼かれたものと考えられるという(「本道最古の漢字資料」前掲参照)。

また岡田氏は、その土器は、9世紀の半ばごろのものとも指摘している(岡田淳子他「古代北方文化の形成」『創造の世界』第49号、1984年2月刊、106ページ参照)。

この岡田氏の指摘によって、問題の土師器は、9世紀ごろに作られ、東北地方北部から北海道のサクシュコトニ川地域に持ち込まれたものであって、そうした背景には、当時、北海道の石狩地方と東北地方北部とのあいだに交流があったことが、当然考えられてくる。

そこで思いいたるのは、「渡嶋蝦夷」についてのことである。「渡嶋蝦夷」に関して、
(A)陸奥国言。渡嶋狄二百余人来。著部下気仙郡。非。当国所。管。令。之。帰去。狄等云。
時。是。寒。節。海。路。難。越。願。候。来。春。欲。帰。本。郷。者。許。之。留。住。之。間。宜。給。衣。糧。
(『日本後紀』弘仁元年10月甲午〈27日〉条)

(B)出羽国言。渡嶋荒狄反叛。水軍八十艘。殺。略。秋田。飽海。兩郡。百姓。廿一人。勅。牧宰。討。平。之。
(『三代実録』貞観17年11月16日乙未条)

とあるのによれば、「渡嶋蝦夷」は、海路によって陸奥国気仙郡に来著していること(A)、水軍をもって出羽国秋田・飽海両郡を襲撃していること(B)が知られ、ここにみえる「渡嶋」は、海を越えて行く地方で、関口明氏が指摘しているように、「津軽の北方、すなわち北海道を想定することが最も妥当」である(関口明「北海道式古墳と渡嶋蝦夷」『古代文化』第37巻第7号〉18ページ)。

このように、北海道の「蝦夷」とみなすことができる「渡嶋蝦夷」は、(A)の記事で知られるように、陸奥国の所管外にあり、それが出羽国の管轄下にあったことは、次の『続日本紀』宝亀11年5月甲戌(11日)条の記事によって察することができる。

勅。出羽国。曰。渡嶋蝦狄早効。丹心。来朝。貢獻。為。日。稍。久。方。今。帰。俘。作。逆。侵。擾。辺。民。宜。將。軍。国。司。賜。饗。之。日。存。意。慰。諭。焉。

また、そのことは、延暦21年6月24日付の「太政官符」に、

右被。右大臣。宜。稱。渡嶋狄等来朝之日。所。貢。方。物。例。以。雜。皮。而。王。臣。諸。家。競。買。好。皮。所。殘。惡。物。以。擬。進。官。仍。先。下。符。禁。制。已。久。而。出。羽。国。司。寬。縱。曾。不。遵。奉。為。吏。之。道。豈。合。如。此。自。今。以。後。嚴。加。禁。斷。如。違。比。制。必。處。重。科。事。緣。勅。語。不。得。重。犯。

とあることからたしかめられる。

これらの記事によれば、「渡嶋蝦夷」は、出羽の国衙に「来朝貢獻」し、その「貢納物」には、雑皮があり、また「来朝」のさいには、「賜饗」のことがあったことがわかる。ここにいう「賜饗」とは、『養老令』職員令大国条に、「其陸奥出羽越後等国兼知。饗給。征討。斥候」とある「饗給」のことであって、『令義解』の同条に「謂。饗。食。并。給。祿。也」とあるように、「蝦夷」に対して食を饗し、祿を給することを「饗給」といったのである(関口明、前掲論文20ページ参照)。関口氏が述べているように、出羽の国司は、「来朝貢獻」した「渡嶋蝦夷」に対しても、職員令大国条の「饗給」の規定にもとづいて、饗宴を催し、祿物を給したのであった。そして、おそらく「夫」と刻字されているサクシュコトニ川遺跡出土の土師器は、そうした饗宴の場で用いられたものが、「渡嶋蝦夷」の手によって、「本郷」、すなわち北海道に持ち帰られたのであろう(関口明、前掲論文23ページ参照)。

「渡嶋蝦夷」のことについては、さらに『三代実録』元慶3年(879)正月11日辛丑条に、
又渡嶋夷首百三人。率。種類。三千人。詣。秋田城。与。津軽俘囚。不。連。賊者。百余人。同。共。帰。慕。聖。化。若。不。勞。賜。恐。生。怨。恨。由。是。遣。從。五。位。下。行。權。介。藤。原。朝。臣。統。行。從。五。位。下。行。權。掾。文。室。真。人。有。房。及。令。望。滋。実。貞。額。等。勞。饗。

とみえる。この記事で注目されるのは、「渡嶋夷首」103人が、その「種類三千人」を率

いて秋田城に詣ったことであり、また出羽国の権介藤原朝臣統行、同権掾の文室真人有房、同権掾清原真人令望、左馬権大允藤原朝臣滋実、また出羽国の権大目茨田連貞額らの国司などを遣わして「渡嶋蝦夷」を「労饗」していることである。ここにいう「労饗」とは、もちろん「賜饗」や「饗給」と同じ内容のものであり、もし彼ら多数の「渡嶋蝦夷」が、「本郷」に帰ったならば、彼らとともに、多量の出羽国内の物品が、北海道に持ちこまれたことになるであろう。9世紀における「渡嶋蝦夷」は、出羽国や、その管轄下の秋田城と密接な関係があるから、「夫」と刻字された土師器の出所は、おそらく、そうした地域に求めてよいであろう。その意味で、秋田城跡の南方に位置する湯ノ沢F遺跡から出土した刻字土器の存在が注目されるのである。

VI-12

[出土スラグの顕微鏡観察について]

野口徹・小笠原正明・石井邦宣*

1981年6月にサクシュコトニ川遺跡の発掘現場で出土し、鉄器またはスラグと推定された物質（個体番号4）について、顕微鏡による予備的な調査を行った。

この物質はPL-Ⅱ-35（切断後）に示すように縦8cm、最大幅約5cm、厚さ1.5—2cm程度の大きさの固体である。表面は赤褐色で凹凸があり、いたるところに気泡の凝固したあとが見られる。

マイクロトームを用いて図のように切断したところ、黒色の光沢をもつ面が得られた。しかし金属の存在を示す独特の光沢は認められなかった。断面のところどころに、気泡によるものと思われる大小さまざまな穴が見られた。

この断面の50倍および200倍の光学顕微鏡写真を、PL-Ⅱ-36およびPL-Ⅱ-37に示した。PL-Ⅱ-36に見られる黒い大きな影は、空孔によるものである。PL-Ⅱ-37の白い部分はマグネタイトの存在を示している。また残りの黒い部分はスラグによるものである。この部分をさらに拡大して見ると、未溶解のスラグが一部に認められた。

顕微鏡による観察からは、つぎのようなことが推定される。

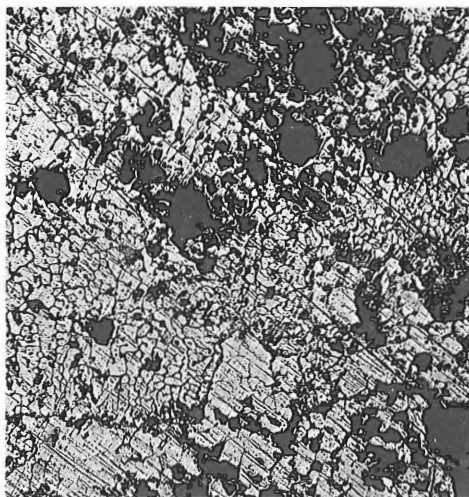
- ① この物質は、鉄の精錬の際に生じたスラグであって、鉄器ではない。
- ② 溶けかけたスラグが認められることから、この物質が生成した時の温度は1200度あるいはそれ以下と推定される。
- ③ マグネタイトは、空気中ではこのような低い温度では生成しないことから、一応還元的な雰囲気中で処理したときに生じたものと思われる。
- ④ しかし、マグネタイトよりもさらに酸素原子数の少ないウスタイトや金属鉄は認められないので、還元的雰囲気は完全とはいえず、密閉性の悪い、比較的簡単な炉の中で生成したものであることが推定される。

さらに信頼できる結論を得るためには、今後、化学分析およびエックス線マイクロアナライザーなどによるスラグの組成の分析が必要であろう。

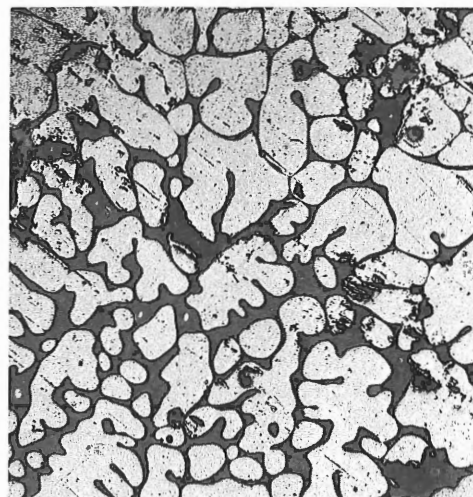
PL-Ⅱ-35 スラグの外観



PL-Ⅱ-36 スラグの顕微鏡写真(×50)



PL-Ⅱ-37 スラグの顕微鏡写真(×200)



Ⅵ-13 [花粉化石について]

山田 悟郎 *

① 試料および処理方法

ここで取扱った土壌試料は北海道大学構内のサクシュコトニ川遺跡の発掘調査に際して、住居の覆土・土壌の覆土・廃棄された炭化物の集積遺構・焼土から採取された14点である。

2号住居では覆土と床面から各1点、4号土壌の墳底から1点、廃棄された炭化物の集積遺構からは炭化物マウンド・炭化物4、16、19、40、52、58と呼称される7箇所から各1点が、焼土11・43・44・71の4箇所から各1点の試料がそれぞれ採取されている。試料はいずれも炭化物を多量に含む、腐植に富んだ砂質シルトである。

試料の処理にあたっては、土壌試料500gをビーカーにとり、下記のように化学・物理処理を行なった、

アルカリ処理(24時間)―水洗(3週間)―沈澱法により砂礫等を除く―混酸処理(3分間)―水洗―アルカリ処理(5分間)―水洗―比重分離(比重2.0, 1000r.p.m.で1時間遠心分離)―水洗―アセトリシス処理(3分間)―水洗―時計皿処理―HF処理―水洗の順に処理し、プレパラートを1試料につき各3点を作成した。

検鏡は通常400倍で行ない、必要に応じて1,000倍で行なった。同定にあたっては、樹木花粉を200個以上数えるまでに順次出現した花粉・胞子を無作為に同定して計数するように努めた。しかし樹木花粉が200個以上産出した試料は無かった。

従って、表示にあたっては各試料から産出した花粉・胞子数を一覧表にして示した。

② 分析結果

試料が花粉・胞子が腐食作用を受けやすい、通気性の高い砂質堆積物である為か、土壌の花粉含有数は少なかった。また、焼土中には熱によって変形した花粉・胞子が多く含まれていた。

14点の試料から21属1科の樹木花粉、2属23科の草本花粉、3科の胞子、形態分類胞子2種類が産出した。その内訳及び想定される主な母植物は下記の通りである。

樹木: *Picea*(トウヒ属; エゾマツ・アカエゾマツ), *Abies*(モミ属; トドマツ), *Pinus*(マツ属; ハイマツ), *Salix-Populus*(ヤナギーハコヤナギ属; エゾノカワヤナギ・オノエヤナギ他), *Alnus*(ハンノキ属; ハンノキ・ケヤマハンノキ他), *Betula*(カバノキ属; シラカンバ・ウダイカンバ・ダケカンバ), *Fagus*(ブナ属; ブナ), *Juglans*(クルミ属; オニグルミ), *Carpinus*(クマシデ属; サワシバ), *Corylus*(ハシバミ属; ハシバミ・ツノハシバミ), *Quercus*(コナラ亜属; コナラ・ミズナラ・カシワ), *Ulmus*(ニレ属; ハルニレ・オヒョウニレ), *Fraxinus*(トネリコ属; ヤチダモ・アオダモ), *Magnolia*(モクレン属; ホウノキ・コブシ), *Tilia*(シナノキ属; シナノキ・オオバボダイジュ), *Acer*(カエデ属; イタヤカエデ・ハウチワカエデ他), *Rubus*(キイチゴ属; クマイチゴ・エビガライチゴ他), *Phellodendron*(キハダ属; キハダ), *Araliaceae*(ウコギ科; ハリギリ・タラノキ他), *Rhus*(ウルシ属; ヌルデ・ヤマウルシ他), *Sambucus*(ニワトコ属; エゾニワトコ), *Hydr-*

* 北海道開拓記念館

Tab. Ⅱ-19 産出した花粉・孢子化石数

	2号竖穴住居		4号土壙	炭化物マウンド	炭化物					焼土				
	覆土	床面			4	16	19	40	58	11	43	44	52	71
<i>Picea</i>	1	2	2	1	1	4	1	4	1	5	2	1	3	—
<i>Abies</i>	3	5	5	13	2	8	5	8	2	11	6	5	5	1
<i>Pinus</i>	—	1	1	5	—	1	1	2	—	3	2	1	2	—
<i>Salix-Populus</i>	5	4	5	3	1	8	5	5	3	5	5	8	4	1
<i>Juglans</i>	11	15	11	5	2	11	7	12	5	9	11	7	8	3
<i>Alnus</i>	33	31	27	22	5	39	29	31	15	37	35	33	29	5
<i>Betula</i>	19	13	16	8	1	18	13	18	3	15	19	15	14	3
<i>Carpinus</i>	3	1	2	3	1	3	1	1	1	1	3	1	—	1
<i>Corylus</i>	2	1	2	2	—	2	1	1	—	1	1	—	—	—
<i>Fagus</i>	1	1	3	1	—	3	1	1	—	1	1	—	2	—
<i>Quercus</i>	39	41	36	36	3	36	37	39	19	45	43	41	38	11
<i>Ulmus</i>	18	20	21	18	1	23	19	23	13	24	21	19	19	9
<i>Magnolia</i>	2	1	1	2	—	3	1	1	1	2	1	1	2	—
<i>Hydrangea</i>	—	—	1	1	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—
<i>Rubus</i>	1	—	1	—	—	1	1	1	—	3	1	—	2	—
<i>Rhus</i>	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—
<i>Acer</i>	3	4	2	1	1	5	2	5	1	2	4	5	3	—
<i>Tilia</i>	3	5	4	4	2	3	3	6	3	5	4	3	3	1
Araliaceae	1	1	1	—	1	—	1	1	1	—	2	1	1	—
<i>Fraxinus</i>	1	3	3	1	1	6	3	3	1	3	3	1	4	—
<i>Phellodendron</i>	3	3	2	—	—	3	1	3	1	4	3	1	—	—
<i>Sambucus</i>	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	1	—
Moraceae	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	1	—	—
Urticaceae	—	3	—	—	—	1	—	—	—	3	2	—	5	—
Polygonaceae	22	35	29	3	1	26	15	23	16	24	26	24	14	21
Chenopodiaceae	1	5	3	—	—	5	3	1	1	1	1	—	1	1
Caryophyllaceae	1	4	2	—	2	3	2	1	—	2	2	—	1	—
Ranunculaceae	15	21	27	14	2	21	18	18	13	28	21	19	17	13
Cruciferae	1	6	1	3	—	1	—	—	1	3	—	1	2	—
Saxifragaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Rosaceae	5	1	3	1	—	3	3	6	1	9	3	3	5	3
Leguminosae	1	1	2	—	—	2	1	—	—	1	—	—	1	—
Balsaminaceae	1	—	2	—	—	—	—	—	—	1	1	—	3	—
Haloragaceae	—	—	2	—	—	—	1	1	—	1	—	—	—	—
Umbelliferae	7	15	7	2	1	8	5	8	3	9	7	9	6	7
Labiatae	2	5	—	1	—	—	—	—	—	2	—	—	2	—
Vglerianaceae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	—
Campanulaceae	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—
Garduoideae	13	25	8	4	1	11	5	11	12	5	21	20	6	9
Cichorioideae	3	6	1	—	—	3	1	3	1	1	3	1	1	1
<i>Artemisia</i>	41	59	39	9	8	45	36	43	25	31	45	44	37	25
Typhaceae	1	21	11	—	—	9	7	9	1	5	3	5	13	2
Gramineae	56	95	81	30	35	81	75	91	35	85	95	86	76	53
Gramineae(45 μ >)	—	3	5	3	—	5	2	8	—	8	6	2	5	1
Cyperaceae	11	15	13	2	1	21	17	20	2	15	13	17	18	11
<i>Lysichiton</i>	—	9	3	—	—	3	3	4	—	2	1	3	5	1
Commelinaceae	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—
Liliaceae	1	—	1	—	—	1	1	1	—	1	2	—	1	—
Equisetaceae	2	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
Osmundaceae	6	8	2	1	1	5	1	1	1	3	5	3	2	2
Lycopodiaceae	3	1	2	2	—	2	1	3	1	2	2	2	1	1
Monolate type spore	25	46	21	13	8	28	18	31	15	27	23	25	18	11
Trilite type spore	2	3	—	—	—	3	—	—	—	2	2	—	1	—
合計(個)	369	539	412	216	82	466	348	451	198	449	452	409	386	197
Undetermined(個)	8	3	9	3	9	11	7	5	8	13	8	10	9	7

angea(アジサイ属; ノリウツギ他)

草本; Moraceae(クワ科; カナムグラ・アサ), Chloranthaceae(センリョウ科; ヒトリシズカ他), Urticaceae(イラクサ科; イラクサ), Polygonaceae(タデ科; オオイタドリ・ミゾソバ・ハルタデ他), Chenopodiaceae(アカザ科; アカザ・シロザ), Caryophyllaceae(ナデシコ科; ハコベ・ミミナグサ他), Ranunculaceae(キンボウゲ科; カラマツソウ・アキカラマツ他), Cruciferae(アブラナ科; タネツケバナ・スカシタゴボウ他), Saxifragaceae(ユキノシタ科; ネコノメソウ他), Rosaceae(バラ科; オオダイコンソウ・エゾノシモツケソウ・ナガボノシロワレモコウ他), Leguminosae(マメ科; クサフジ・ハマエンドウ他), Balasaminaceae(ツリフネソウ科; キツリフネ・ツリフネソウ), Labiatae(シソ科; カワミドリ・イヌゴマ他), Onagraceae(アカバナ科; ヤナギラン), Araliaceae(ウコギ科; ウド), Umbelliferae(セリ科; ヤブジラミ・エゾニユウ・オオバセンキュウ他), Haloragaceae(アリノトウグサ科; アリノトウグサ), *Artemisia*(ヨモギ属; オオヨモギ他), Carduoideae(キク亜科; アキタブキ・ハンゴンソウ・ヨブスマソウ・チシマアザミ他), Cichorioideae(タンポポ亜科; ハチジョウナ・コウゾリナ他), Typhaceae(ガマ科; ガマ), Gramineae(イネ科; ススキ・ヨシ・イワノガリヤス・エノコログサ・栽培種のイネ科植物他), Cyperaceae(カヤツリグサ科; エゾアブラガヤ・オクノカンスゲ他), *Lysichiton*(ミズバショウ属; ミズバショウ・ザゼンソウ), Commelinaceae(ツユクサ科; ツユクサ), Liliaceae(ユリ科; バイケイソウ・オオウバユリ他)

孢子; Equisetaceae(トクサ科; トクサ・スギナ), Lycopodiaceae(ヒカゲノカズラ科; ヒカゲノカズラ他), Osmundaceae(ゼンマイ科; ゼンマイ・ヤマドリゼンマイ他)

形態分類孢子; Monolate type spore(単条孔型孢子; シダ類), Trilite type spore(三条孔型孢子; ワラビ他)

14点の試料で確認された花粉・孢子は、ほぼ同様な出現傾向を示している。

樹木花粉では針葉樹の *Abies*, *Picea* と落葉広葉樹の *Juglans*, *Salix-Populus*, *Juglans*, *Alnus*, *Betula*, *Quercus*, *Ulmus*, *Acer*, *Tilia*, *Fraxinus*, 草本花粉・孢子では *Polygonaceae*, *Ranunculaceae*, *Rosaceae*, *Umbelliferae*, *Carduoideae*, *Artemisia*, *Typhaceae*, *Gramineae*, *Cyperaceae*, *Lysichiton*, *Osmundaceae*, Monolate type spore を主とした花粉化石群集が各試料で確認されている。

樹木花粉では *Alnus*, *Quercus*, *Betula*, *Ulmus* が優勢で、次いで *Juglans*, *Abies*, *Picea*, *Salix-Populus*, *Acer*, *Tilia*, *Fraxinus*, *Phellodendron* が多く産出している。肥沃な沖積地を好む *Ulmus*, *Tilia* や河畔に多い *Alnus*, *Juglans*, *Salix-Populus* が多く産出している。また、日当たりのよい場所を好む *Rubus*, *Araliaceae*, *Sambucus* 等も産出するほか、現在その自生分布北限を黒松内低地帯とする、冷温帯落葉広葉樹の *Fagus* も僅かではあるが各試料で確認されている。針葉樹の *Picea*, *Abies*, *Pinus* は現地性の樹木ではないと考えられる。

草本花粉・孢子では *Polygonaceae*, *Ranunculaceae*, *Artemisia*, *Gramineae*, Monolate-type spore が優勢で、次いで *Chenopodiaceae*, *Caryophyllaceae*, *Rosaceae*, *Umbelliferae*, *Carduoideae*, *Typhaceae*, *Lysichiton*, *Cyperaceae*, *Osmundaceae* が多く産出する。低湿地や幾分湿った場所を好む *Urticaceae*, *Balasaminaceae*, *Typhaceae*, *Haloragaceae*, *Cyperaceae*, *Lysichiton* や、日当たりのよい草地を好む *Polygonaceae*, *Ranunculaceae*, *Rosaceae*, *Umbelliferae*, *Artemisia*, *Gramineae* 等の草本が多いのが注目される。

畑地雑草として耕作地に多く生育する *Chenopodiaceae*, *Caryophyllaceae*, *Cruciferae*, *Comelinaceae* が比較的多く産出しているほか、花粉の赤道直径が45 μ 以上の栽培種と考えられる *Gramineae* も各試料で確認されている。

わずかに産出している *Moraceae* の母植物について、栽培種のアサの可能性も考えられる。

③ 古環境について

a) 古植生

サクシュコトニ川沿いの微高地に位置した擦文時代のサクシュコトニ川遺跡の周囲には、ハンノキ、ヤチダモ、ヤナギ類、オニグルミ、シラカンバ、ハルニレ、ミズナラ、イタヤカエデ、シナノキ、キハダ等を主とした落葉広葉樹が分布していたと考えられる。

このような樹木構成からなる林は、河川沿いの肥沃な沖積地に発達したハルニレ、シナノキ、イタヤカエデを主とした落葉広葉樹林が、擦文時代の人々による伐採等の活動によって破壊され、一部にミズナラ、シラカンバ、オニグルミ等が進出して二次林が形成されたことを示すものと考えられる。

さらに、キイチゴ属、タラノキ、エゾニワトコ等の灌木の存在は、樹木が伐採され日当りの良い空間が存在したことを示している。

多く産出している陽地性のオオイタドリ、カラムツソウ、アキカラムツ、エゾニュウ、オオヨモギ、アキタブキ、チシマアザミ、バラ科植物、ススキは、遺跡周囲の林は伐採され陽地性草本群落が生育可能な、空間が広がっていたことを裏づけるものである。

また、河畔にはハンノキ、ヤチダモ、ヤナギ類からなる低湿地林が分布し、ガマ、ミズバショウ、エゾアブラガヤ、ヨシ、トクサ等が繁り、河畔沿いの幾分湿った場所にはツリフネソウ、キツリフネ、アリノトウグサ、ゼンマイ、シダ類が繁っていたことが予想される。

針葉樹のトウヒ属、モミ属、マツ属と冷温帯落葉広葉樹のブナについては、花粉が風によって運ばれたもので、遺跡周辺に生育していたとは考えがたい。

現在、遺跡周辺の川辺にはハンノキ、ヤチダモ、ハルニレ、イタヤカエデが優占する林が生育している。

b) 栽培植物について

サクシュコトニ川遺跡の発掘に伴って、炭化物廃棄遺構の土壌や焼土が多量に採取され、大規模にフローテーションが行なわれている。これまでに発表された概報等のなかで、多量のサケの骨のほかにコメ、オオムギ、コムギ、緑豆、キビ、アワ等の栽培植物遺存体の産出が報告されている(吉崎・岡田編 1984)。

吉崎・岡田(1984)によると、オオムギの出土は多量で栽培植物種子がセットになっていることから、かなりの規模で農耕が行なわれていたと推定されている。

産出した花粉の中には赤道直径が 45μ 以上の栽培種と考えられるイネ科花粉が含まれており、イネ科の雑穀が栽培されていたことを示している。

イネ科のどの栽培植物に該当するかは不明であるが、フローテーションで得られたコメ、オオムギ、コムギ、キビ、アワのいずれかの花粉であろう。

ただし、コメについては現地で栽培されたと考えより、本州から移入したと考えるべきであろう。

さらに、母植物として樹木のクワ、草本のアサ、カナグラムが想定されるクワ科の花粉がわずかであるが産出している。アサの種子は福井県鳥浜貝塚の縄文時代前期の遺物包含層から産出し、かなり古い時代に日本に渡来し栽培されていたことがあきらかとなっており(笠原 1984)、本道では統縄文時代の江別太遺跡から産出している(矢野 1981)。ここで確認されたクワ科花粉の母植物がアサであるか否かは、炭化種子の産出によって裏づけられるであろう。

アカザ、ミミナグサ、ハコベ、タネツケバナ、スカシタゴボウといった畑地雑草の花粉も比較的多く産出しており、遺跡近くに耕作地が存在しフローテーションで得られた植物

が栽培されていたのは確かであろう。道内では12個所の擦文時代遺跡から栽培植物遺存体や花粉化石が産出し、擦文時代に農耕活動が行なわれていたことは否定できない事実となっている。しかし、サクシュコトニ川遺跡のように、多量に栽培植物が産出するとともに多くの作物がセットとなって出土した例はなく、一見すると特異な遺跡に見える。このように多量の土壌のフローテーションを行なった発掘調査はかつてなく、擦文時代の遺跡の土壌の中に多くの情報が含まれていたことを示したもので、特異な遺跡とは言えないであろう。

④ おわりに

サクシュコトニ川遺跡の発掘に際して、採取された14点の土壌試料の花粉分析を行なった結果、下記の事が明らかとなった。

- 1) 樹木花粉21属 1 科，草本花粉 2 属23科，孢子 3 科，形態分類孢子 2 種類が確認された。
- 2) 遺跡の周辺にはハンノキ，ヤチダモ，ミズナラ，ハルニレ，イタヤカエデ，シナノキ，シラカンバ，オニグルミ，ヤナギ類を主とした落葉広葉樹林が分布していた。
- 3) 林は二次林の様相を示すもので，樹木が伐採された生活空間には陽地性の草本群落が繁っていた。
- 4) 赤道直径45 μ 以上の栽培種と考えられるイネ科花粉が産出するとともに，畑地雑草のアカザ科，ナデシコ科，アブラナ科花粉も多く産出していることから，イネ科に属する雑穀が栽培されていたことがあきらかとなった。
- 5) わずかではあるが母植物としてアサが想定されるクワ科花粉が産出している。

《参考文献》

- ▶ 笠原安夫（1984）「縄文時代（前・後期）遺跡から出土したゴボウ，アサの種実について」『昭和59年度文化財科学会大会研究発表要旨』
- ▶ 矢野牧夫（1981）「石狩低地帯の先史遺跡から出土した植物遺体」『北海道開拓記念館研究年報』第9号
- ▶ 吉崎昌一・岡田淳子編（1984）『北大構内の遺跡 3—昭和57年度』
- ▶ 吉崎昌一・岡田淳子（1984）「考古学におけるエゾとエゾ地」『創造の世界』№49

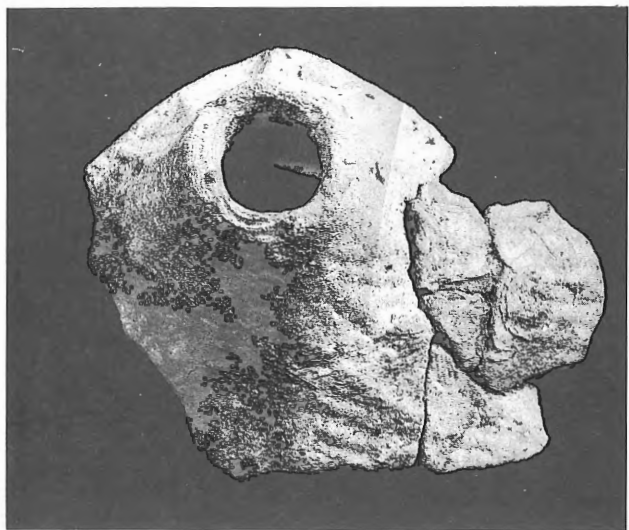
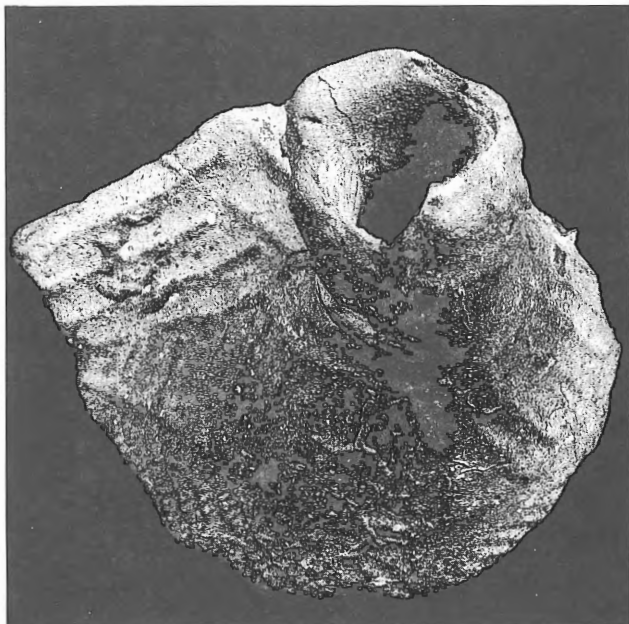
Ⅵ-14

[第3文化層の土器]

第Ⅵ層の砂層中から、続縄文期中葉（後北C 2式）の土器3個体分が出土した。そのうち図示した2個体は注口部分を残す破片である。PL.Ⅱ-38上は07-07〔12〕グリッドから、PL.Ⅱ-38下は06-10〔32〕グリッドから出土した。そこは埋没河川・セロンベツ川の左岸域にあたる。

（横山英介）

PL. Ⅱ-38 第三文化層出土の注口土器



まともにかえて

《発掘と整理》

北海道大学が新しい寮の建設を計画したのは、もう10年以上も前になる。昭和55年にその計画が具体化した時にまず問題となったのは、その敷地をどこにするかということであった。本学の施設部と埋蔵文化財プロジェクト・チームは幾多の協議を重ねながら、敷地の選定を模索した。できる限り埋蔵文化財の包蔵地にかからないよう配慮するためである。可能性のある地域はいくつかあったが、我々の手持ち資料と札幌市教育委員会の収集資料ならびに明治時代中期に調査された遺跡分布図から、文化財に関する情報のもっとも空白の地帯として、当時準硬式野球場だった現在地が選定された。記録によるかぎり、この場所は地下水位が高く、耕作も行なわれたことがなかったと伝えられている。ところが、全面的な発掘を実施した結果、擦文時代の集落が検出されたのである。ここに贈るのは、その発掘報告である。

発掘調査は、北海道大学埋蔵文化財プロジェクト・チームの岡田宏明・岡田淳子・菊池俊彦・林謙作・吉崎昌一と北海道大学埋蔵文化財調査室の横山英介・松岡達郎・平川泰彦・椿坂恭代ほか多数のメンバーがあたり、その作業を円滑に実施するため、北海道大学本部事務局が部・課の枠を越えた明確な支援態勢をととのえた。整理研究も同様である。

関連する諸分野についても多数の人々の御援助をいただいた。金属製品とスラグについては北海道大学工学部工業物理学講座助教授小笠原正明氏、機械材料学講座助教授野口徹氏、金属工学第二講座助教授石井邦宣氏らが、植物種子の同定には以前から共同作業を続けている、カナダ・トロント大学助教授のG・W・クロフォード氏が参加した。植物種子と出土木材の電子顕微鏡写真の撮影には、北海道大学農学部木材理学科の全面的な支援を受け、名誉教授石田茂雄氏、教授深沢和三氏の指導で可能になったものである。出土した魚歯骨は、東北大学考古学研究室の須藤隆助教授指導のもとに、高橋理氏があたった。問題の刻字土器の歴史的検討には元北海道大学教授で現在成城大学教授の佐伯有清氏から玉稿をたまわった。また、花粉分析は北海道開拓記念館の山田悟郎氏に依頼した。

遺跡の調査活動の第一段階は、こうした人々の協力と支援によって到達されたものである。

残された問題

《土器の接合関係と遺構》

擦文時代の遺跡をほぼ全面発掘できることになった時、大学構内という立地条件を生かして、いくつかの作業仮説の検討あるいは実験を含む調査を計画した。その一つは発掘区5,904㎡全域から出土する土器の接合関係を調べたことである。この方法は、先土器時代の発掘調査ではしばしば実施され、遺物スポットの相互関係の判断材料に使用されている。これを比較的遺物出土量の少ない擦文時代に適用し、そこから遺構や遺物の相互関係を判断する手がかりにしたいと最初に提案したのは横山である。その結果については、23～94頁を参照されたい。この分析から横山は遺構の相互関連に迫り、集落内部の変遷に触れている。だが、この手法が普遍的に無理なく使用できるためには、かなり量的にも多い接合

資料が必要となる。それなくしては、二次的な廃棄個所からの混入という危険性を無視できない場合があるろう。今後の資料増加を待ち、より精度の高い手順の開発を進めたい。

《遺物の廃棄パターン》

遺物の分布図と個体別出土表をみるかぎり、土器の廃棄散乱の状態におおまかに2種類あるように思われる。第一は特定個体を構成する破片が比較的まとまって出土する場合、第二は散乱の度合がはげしく、なかには50mも離れていた土器片が接合するといったケースも少なくない。この種の土器個体は、整理作業がある程度進行して後に復元、特定が可能になる場合が多い。このような廃棄散乱の差は、集落の存続期間中に使用されていた土器の時間的な新旧と関連するのであろうか。それとも遺物の種類によって廃棄の様式が異なるのだろうか。まだ検討の余地があり確定にいたっていない。今後、遺物廃棄パターンの資料として研究分析を実施したいと考えている。

遺物廃棄パターンに関連して、もうひとつ注意を喚起しておきたいことがある。それは各大型住居からの土器廃棄についてある傾向が認められそうなことだ。例を2号住居にとろう。29頁の記載にもあるとおり、この住居内の土器と接合関係を示す土器片は、2号住居の煙道に隣接する「焼土43」、住居の北東方向の「炭化物52」および「炭化物マウンド」に集中して発見された。横山も『2号竪穴住居の人々はもっぱら住居の周りや、炭化物マウンドを中心とする地域を廃棄の場として活用し、住居から大きくかけ離れた地域へはほとんど廃棄しなかった……』(116頁)と述べている。この基本的な廃棄のパターンは、他の2棟の大型住居についても同様に認められる。つまり、3、5号住居においても煙道に隣接して焼土や遺物の廃棄があるが、これらの住居に由来する土器は、主として両竪穴住居のほぼ中間に位置する地域、X08~09、Y05~10にかけて廃棄されていた。しかも横山の観察では3号住居が廃絶した直後に5号住居が建設されているから(92~94頁)、この廃棄の場に関するかぎりその場所は竪穴住居の移設とは関係なく、継続して利用されていた可能性が高い。

こうした廃棄の場が、ある程度の安定性をもって存在し得た背景は、どのように理解されるべきだろうか。それを説明するひとつの手がかりを、あまり検出例の多くない土玉の出土状況に求めたい。

この遺跡から総数で17個の土玉が検出されている。そのうち15個は2号住居と関連する炭化物マウンドから発掘され、1個はこのマウンドの周囲から、残る1個が炭化物52から見出された。

擦文時代の装飾品の検出例は、一般にあまり多くない。千歳末広遺跡から土製まが玉と木製玉(千歳市教育委員会 1981, p.36)、ウサクマイN遺跡(石附 1977 p.17)と、恵庭市柏木川から土玉(高橋 1971, p.6)、留萌管内小平遺跡からガラス玉(福士 1985, p.17~18)などが報告されているくらいである。このような状況のもとで、サクシュコトニ川遺跡第二文化層に属する炭化物マウンドから10個をこす土玉が出土したことは、この場所が墳墓でないこともあって注目する必要があるであろう。発掘精度からみても、この遺跡の他の地域や竪穴住居中の土玉を見逃しているという可能性は一応排除できる。だとすれば、これらの土玉の出土は、特定の場にたいする意図的な廃棄として説明できるのではないだろうか。もしこの推理が的を得ているならば、これこそアイヌ民族例にみられるような「送り場」(宇田川 1985: pp.32~78)の初期形態の例として、検討されるべきであろう。

《栽培植物の出現について》

サクシュコトニ川遺跡の住民が農耕を行っていたことは、G・クロフォード氏と山田悟郎氏の報文に詳しい。擦文時代の農耕については評価がまちまちであるが、大方の見解としては、きわめて小規模の家庭菜園程度のものであろうというのが一般的であった（たとえば加藤ほか 1983; p.21.21, 菊池 1983, p.2）。しかし、本報告のなかで述べられている資料からすれば、これまでの考えかたに変換を余儀なくさせる。

かつて筆者は、擦文時代の竪穴住居の形態、特にそれまで北海道に存在しなかった煙道付きのカマドの出現を説明する仮説として、この時点でおきた食生活の大幅な変化―穀物食の出現をあげたことがある。また、同時にそうした農耕文化が、北海道においては中世以降に衰退した可能性についてもふれた（吉崎ほか 1972, pp.50~52）。

現在までに語られている擦文時代生業論の致命的な欠陥は、具体的な資料の検出を図らないで遺跡の立地から想像をたくましくしすぎた点にある。こうした弱点を補強する資料として、サクシュコトニ川遺跡の資料のもつ意味は大きい。

この遺跡ではオオムギ、コムギ、アワなどを中心とする雑穀栽培が、かなり大規模に実施されていたことは、検出された種子の組成からもまちがいない。しかし、その具体的な農耕がどのようなものであったかについては、まだ資料が不足している。農耕具そのものの出土もなかった。だが、北海道内で発掘されている他の擦文時代の遺跡からは、鉄製農具の鍬・鋤先・鎌などの出土が知られている（岡田・山田 1982, p.27~28）。とくに、前出の柏木川遺跡で発見された墳墓には、鍬先と鎌がセットになって副葬されていたことを想起したい。しかし、これらの鉄製農具は北海道の背梁山脈以西から発見されているので、岡田らも指摘しているように（前出）、この分布にみられる差が、北海道内における農耕伝統の違いをあらわしている可能性のあることも否定できない。その意味では、サクシュコトニ川遺跡は、西部北海道伝統の代表例として扱う必要があるのかもしれない。

最近の本州各地の発掘では、畑そのものの遺構がしばしば確認されているが、ここでは確認できなかった。小河川によって囲まれていたサクシュコトニ川遺跡の居住空間は、それほど大きくないので、主たる畑は集落から若干離れていた可能性はある。今後、プラント・オパールなどの資料を収集して、その位置を検討する機会をもちたいと思う。なぜなら、施肥をおこなわないで雑穀栽培を実施した場合、その畑が使用に耐えうるのは、たかだか10年未満、状況によっては5年未満が限界であるからだ。第Ⅱ章で解説しているように、サクシュコトニ川・コトニ川水系には多数の遺跡が分布しているのだが、それらのうち、サクシュコトニ川遺跡と時間的に平行する集落が存在するとすれば、各々の耕作地を含めた集落領域の広さを念頭において、分析しなくてはならないからだ。同時に彼等の重要な蛋白源を供給していた魚止め（テシ）の設置地点と集落領域との関連についての分析も重要項目である。

《集落の廃絶と移動》

サクシュコトニ川遺跡においては、第2文化層の上部を無遺物の砂質粘土層がおおい、その上に第1文化層が存在していた。つまり第2文化層の集落の放棄と埋没については、2つの見方を提示することができる。それは、第2文化層の集落がなんらかの理由で放棄された後にこの地域が一定期間水没した場合と、水没が直接の原因で放棄された場合とである。扇状地末端の微高地という立地条件からすれば、この地域が冠水することは珍しくなかった。それは、この地が準硬式野球場として利用されるまで毎年の融雪期には水没するケースが多く、耕作地として不適格であったことでも分る。また、はげしい冠水は時として蛇行する水路の変更をもたらし、サケ・マスの産卵床をも破壊した。これは当時の集落の生活に大きくかわる問題であった。農耕地の荒廃も含めてこうしたいくつかの原因

が複合して、集落の遷移が引き起こされた可能性は十分にある。この集落の遷移パターンが、北海道でも有数に密度の高いコトニ川水系の遺跡分布様相と無関係であるとはいえないであろう。

結語にかえて

《生活形態のイメージ》

サクシュコトニ川遺跡の古代人は、オオムギ、コムギ、アワなどの耕地を所有し、さらに集落のはずれの小河川の魚止めで、豊富な蛋白源を確保していた。集落の規模は4軒でいどで構成されると推定できる。集落内では、低火度の鍛冶もおこなわれていた。また、集落の立地が中小河川の上流域にみられるにせよ、ここが季節的な漁場キャンプとか狩猟キャンプであったという証拠は全くない。周辺に農耕地をもつ通常の集落であろう。彼等は、サケの産卵床近くに共同でテシを設置し、ウグイ・サクラマス・シロザケなどを捕獲していた。他の集団との間の主たる物流には、丸木舟による水上輸送が用いられていたであろう。この点、サクシュコトニ川遺跡の立地が、河川の状態からみて、その遡上限界に近い所に位置しているのは示唆的である。河川のこうした利用形態から考えれば、本支流を含む各地点の住民が、なんらかの共通した規制のもとに生活していたことが予想されよう。もし、このような生活形態がサクシュコトニ川・コトニ川水系域住民のみにみられる特殊なケースでないとすれば、従来いわれている擦文時代の集落論や生業論は、再考の余地がありそうである。

《擦文文化の概念について》

遺物の記載部分をみてもわかるように、サクシュコトニ川遺跡出土の土器については、「土師器・土師質土器」という用語で説明されている。にもかかわらず「擦文時代あるいは擦文文化」という従来からの時代区分概念を検討せずに踏襲したことを断わっておきたい。北海道のこの時代のものは、本州の土師器を伴う一般的な住居と同種の構造の住居を持ち、米以外の雑穀栽培がなされていたことも確認されている。たしかに、当時の政治組織からすれば、ここは化外の地であろう。しかし、物質文化の上からみれば、東日本の大部分の地域と「擦文文化」の間に、それ程の異質性を強調する理由が果たして存在するだろうか。本州東北部の文化の周辺として扱ってはいけないのであろうか。調査関係者の間でも、この問題に関しては意見が一致していないのである（たとえば、吉崎昌一・岡田淳子：1984, pp.80～105）。今後、広い視野からの検討が必要なのであろう。

（吉崎昌一）

《引用文献》

- ▶ 石附喜三男編著 1977 『ウサクマイ遺跡—N地点発掘報告書』 千歳市教育委員会
- ▶ 宇田川洋 1985 「アイヌ文化期の送り場遺跡」『考古学雑誌』 70巻4号 32～78 日本考古学会
- ▶ 岡田淳子・山田悟郎 1982 「北海道における農耕の起源に関する予察」梅原達治編 『北海道における農耕の起源(予報)』 pp.26～30
- ▶ 加藤晋平ほか 1983 「擦文期の生業をめぐって」『考古学ジャーナル』 №213 pp.21～27
- ▶ 菊池徹夫 1983 「擦文文化研究の現状と課題」『考古学ジャーナル』 №213 pp.2～3
- ▶ 高橋正勝 1971 『柏木川』 恵庭町教育委員会
- ▶ 千歳市教育委員会 1981 『末広遺跡における考古学的調査(上)』 千歳市教育委員会
- ▶ 堀土廣志 1985 『高砂遺跡第Ⅱ地点発掘調査報告』 小平町教育委員会 285p.
- ▶ 吉崎昌一ほか 1972 『シンボジュウム・アイヌ』 北海道大学図書刊行会
- ▶ 吉崎昌一・岡田淳子 1984 「考古学におけるエゾとエゾ地」『創造の世界』 49号 pp.80～105 小学館

[本文編]

1

サクシュコトニ川遺跡

北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落

昭和61年3月20日発行

発行所——北海道大学
札幌市北区北8条西5丁目

編集——北海道大学埋蔵文化財調査室

デザイン——桜井雅章

印刷所——(株)北海道機関紙印刷所
札幌市北区北6条西7丁目

付表



Tab. Ⅱ-20 第Ⅰ文化層出土土師器・須恵器一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
壺	53	13183	66	06-10	[30]	Ⅲ	遺構外	口縁部	PL.[2]-8-2
		13452	1	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13869	1	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13206	1	05-10	[21]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13132	1	07-10	[00]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13161	1	07-10	[11]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13185	6	06-10	[30]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13190	1	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13191	1	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13857	2	06-10	[20]	カクラン	遺構外	口縁部	
		13453	1	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13867	2	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13197	1	06-10	[32]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13472	1	07-10	[12]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13118	1	06-11	[21]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13477	1	07-10	[13]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13875	1	06-10	[00]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		14332	1	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13137	1	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13176	1	07-10	[33]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13454	1	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		13868	6	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13185	4	06-10	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13205	1	05-09	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13202	2	06-09	[01]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13179	5	06-10	[23]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13182	4	06-10	[20]	Ⅲ	遺構外	胴部3, 底部1	
		13136	2	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13135	2	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13180	2	06-10	[23]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13856	1	06-10	[12]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13855	1	06-10	[12]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13177	7	06-10	[02]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13134	1	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13160	1	07-10	[11]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13186	4	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13873	1	06-10	[33]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13879	1	06-11	[30]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
		13379	1	07-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
		13882	1	06-11	[30]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
		13111	1	06-11	[20]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13120	1	06-11	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13458	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13184	9	06-10	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13149	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13147	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13649	1	08-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		13171	1	07-10	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13124	1	06-11	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13125	1	06-11	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13187	1	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13122	1	06-11	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		14417	1	06-10	[20]	カクラン	遺構外	胴部	
		13865	1	06-10	[21]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		14708	1	06-10	[32]	カクラン	遺構外	胴部	
		13188	1	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13166	1	07-10	[12]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13133	1	07-10	[00]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13139	1	07-10	[01]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13864	1	06-10	[22]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13334	1	09-09	[10]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13204	1	06-09	[23]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13142	1	07-10	[02]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		13150	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部	
172片									
壺	54	3678	3	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	PL.[2]-11
		3647	2	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
		3649	1	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
		3667	13	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
		3668	2	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
		3619	1	10-07	[02]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
54 壺 (つづき)	3683	1	09-08	[22]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3806	2	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3638	5	10-08	[00]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3958	2	10-08	[03]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3625	2	10-08	[01]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3674	2	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3664	6	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3653	1	09-08	[20]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3665	2	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3666	4	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3630	2	09-08	[30]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3634	1	09-08	[31]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3631	2	09-08	[31]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3632	3	09-08	[31]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3642	2	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3676	2	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	口縁部	
	3669	3	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3807	2	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3673	5	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3637	1	09-08	[22]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3629	1	09-08	[30]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3815	1	09-08	[02]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3618	1	10-07	[02]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3805	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3671	7	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3657	7	09-08	[20]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3624	3	10-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3661	4	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3809	3	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3677	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3641	1	09-08	[22]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3670	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3810	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3650	1	09-08	[20]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3680	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3654	1	09-08	[20]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3662	3	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3684	1	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3811	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3914	1	09-08	[30]	V	遺構外	胴部	
	3919	1	09-07	[33]	V	遺構外	胴部	
	3813	3	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3812	2	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	368	12	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3636	1	09-08	[32]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3682	1	09-08	[12]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3679	2	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3675	3	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部2, 底部1	
	3672	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3674	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3644	1	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3648	1	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3640	2	09-08	[22]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3643	1	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3804	3	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3660	1	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3663	2	09-08	[10]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3170	1	09-07	[22]	V	遺構外	胴部	
	3645	1	09-08	[21]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3651	1	09-08	[20]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3655	1	09-08	[20]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3614	1	09-07	[03]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3683	1	09-08	[12]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3623	1	10-08	[00]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3620	1	10-07	[03]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3621	3	10-07	[03]	Ⅲ上	遺構外	胴部	
	3635	3	09-08	[31]	Ⅲ上	遺構外	底部	
	3656	1	09-08	[20]	Ⅲ上	遺構外	底部	
166片(口縁部8片, 胴部3片, 底部1片 番号わからず)								
55	13461	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	口縁部	PL. [2]-9-4
	13158	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	口縁部	PL. [2]-13

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
窠 (つづき)	55	13884	1	08-11	[20]	焼土	焼土22	胴部
		13462	1	07-10	[03]	III	遺構外	口縁部
		13483	7	07-10	[13]	III	遺構外	口縁部
		13480	1	07-10	[13]	III	遺構外	口縁部
		13129	1	06-11	[31]	III	遺構外	口縁部
		13144	1	07-10	[02]	III	遺構外	口縁部
		13123	2	06-11	[30]	III	遺構外	口縁部
		13172	1	07-10	[13]	III	遺構外	口縁部
		13782	2	07-10	[02]	III	遺構外	口縁部
		13176	1	07-10	[33]	III	遺構外	口縁部
		13142	2	07-10	[02]	III	遺構外	口縁部
		13148	1	07-10	[03]	III	遺構外	口縁部
		13873	2	06-10	[33]	III	遺構外	口縁部
		13872	1	06-10	[33]	III	遺構外	口縁部
		13149	1	07-10	[03]	III	遺構外	口縁部
		13167	1	07-10	[13]	III	遺構外	口縁部
		13141	1	07-10	[02]	III	遺構外	口縁部
		13465	1	07-10	[03]	III	遺構外	口縁部
		13686	1	07-10	[03]	カクラン	遺構外	口縁部
		13116	2	06-11	[20]	III	遺構外	口縁部
		13107	1	06-11	[11]	III	遺構外	口縁部
		13174	1	07-10	[13]	III	遺構外	口縁部
		13110	3	06-11	[20]	III	遺構外	口縁部
		13876	1	06-11	[20]	III上	遺構外	口縁部
		13119	1	06-11	[30]	III	遺構外	胴部
		13130	1	06-11	[31]	III	遺構外	胴部
		13117	1	06-11	[21]	III	遺構外	胴部
		13127	1	06-11	[30]	III	遺構外	胴部
		13112	2	06-11	[20]	III	遺構外	胴部
		13128	1	06-11	[30]	III	遺構外	胴部
		13126	1	06-11	[30]	III	遺構外	胴部
		13129	1	06-11	[31]	III	遺構外	胴部
		13120	2	06-11	[30]	III	遺構外	胴部
		13878	2	06-11	[30]	III上	遺構外	胴部
		13877	1	06-11	[20]	III上	遺構外	胴部
		13200	3	06-10	[33]	III	遺構外	胴部
		13199	1	06-10	[33]	III	遺構外	胴部
		13109	1	06-11	[20]	III	遺構外	胴部
		13115	1	06-11	[20]	III	遺構外	胴部
		13201	1	06-10	[33]	III	遺構外	胴部
		13178	1	06-10	[23]	III	遺構外	胴部
		13880	1	06-11	[30]	III	遺構外	胴部
		13131	1	06-11	[31]	III	遺構外	胴部
		16075	2	06-11	[30]	IV	遺構外	胴部
		13154	1	07-10	[03]	III	遺構外	胴部
		13153	1	07-10	[03]	III	遺構外	胴部
		13181	1	06-10	[23]	III	遺構外	胴部
		13114	2	06-11	[20]	III	遺構外	胴部
		13484	3	07-10	[13]	III	遺構外	胴部
		13463	1	07-10	[03]	III	遺構外	胴部
		13489	1	07-10	[22]	IV	遺構外	胴部
		13490	1	07-10	[22]	IV	遺構外	胴部
		13494	1	07-10	[31]	IV	遺構外	胴部
		13487	1	07-10	[22]	IV	遺構外	胴部
		13486	1	07-10	[22]	IV	遺構外	胴部
		13476	3	07-10	[13]	III	遺構外	胴部
		13133	2	07-10	[00]	III	遺構外	胴部
		13455	1	07-10	[02]	III	遺構外	胴部
		13468	1	07-10	[12]	III	遺構外	胴部
		14708	1	06-10	[32]	カクラン	遺構外	胴部
		13163	1	07-10	[12]	III	遺構外	胴部
		13140	1	07-10	[02]	III	遺構外	胴部
		13099	1	07-11	[01]	III	遺構外	胴部
		13169	1	07-10	[13]	III	遺構外	胴部
		13124	1	06-11	[30]	III	遺構外	胴部
		13162	2	07-10	[12]	III	遺構外	胴部
		13152	1	07-10	[03]	III	遺構外	胴部
		13143	1	07-10	[02]	III	遺構外	胴部
		13157	1	07-10	[03]	III	遺構外	胴部
		13159	1	07-10	[03]	III	遺構外	胴部
		13173	1	07-10	[13]	III	遺構外	胴部

個体番号	遺物番号	破片数	大グリップ	小グリップ	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL・番号				
壺 (つづき)	55	13146	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13165	1	07-10	[12]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13196	1	06-10	[32]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13189	1	06-10	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13198	2	06-10	[32]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		14708	8	06-10	[32]	カクラン	遺構外	胴部				
		14882	2	05-11	[33]	Ⅵ	遺構外	胴部				
		13460	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13464	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13467	1	07-10	[12]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13478	1	07-10	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13479	1	07-10	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13481	1	07-10	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13457	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13474	2	07-10	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13496	1	07-10	[33]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13491	1	07-10	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		13488	1	07-10	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		13689	2	07-10	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13862	1	06-10	[23]	Ⅲ上	遺構外	胴部				
		13864	1	06-10	[22]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13883	1	06-11	[30]	Ⅲ上	遺構外	胴部				
		13108	1	06-11	[22]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13155	1	07-11	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13096	2	07-11	[00]	Ⅲ	遺構外	底部1, 胴部1				
		13156	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13197	1	06-10	[32]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		13466	1	07-10	[03]	Ⅲ	遺構外	底部				
		139片(胴部1片番号わからず)										
		壺	56	16366	10	09-18	[11]	Ⅲ		遺構外	口縁部	PL.[図]-8-1
				16365	46	09-18	[11]	カクラン		遺構外	口縁部	
				16364	13	09-18	[11]	Ⅲ		遺構外	口縁部	
				16367	18	09-18	[11]	カクラン		遺構外	口縁部	
16412	40			09-18	[不明]	カクラン	遺構外	胴部				
16363	11			09-18	[11]	Ⅲ	遺構外	胴部				
5710	4			09-18	[不明]	表土	遺構外	胴部				
142片												
壺	101	3109	1	09-07	[11]	Ⅲ	遺構外	胴部	PL.[図]-9-1			
		3103	1	09-07	[00]	Ⅲ	遺構外	胴部		PL.[図]-14		
		3101	1	09-07	[00]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3105	1	09-07	[00]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3110	1	09-07	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3082	1	09-06	[02]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3094	1	08-07	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3080	2	09-06	[02]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3735	1	09-07	[01]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3081	1	09-06	[02]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3084	1	09-06	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3086	1	09-06	[22]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		12915	1	07-06	[31]	Ⅲ	遺構外	底部				
		3096	1	08-07	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部				
		3085	2	09-06	[13]	Ⅲ	遺構外	口縁部				
		3615	1	09-07	[13]	Ⅲ上	遺構外	胴部				
		3613	1	09-07	[03]	Ⅲ上	遺構外	胴部				
		3104	1	09-07	[00]	Ⅲ	遺構外	口縁部				
		3097	1	08-07	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部				
		3098	1	08-07	[31]	Ⅲ	遺構外	口縁部				
		3612	1	09-07	[03]	Ⅲ上	遺構外	胴部				
		3095	1	08-07	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3082	1	09-06	[02]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3094	1	08-07	[31]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		3110	1	09-07	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		27片										
		壺	107	12624	20	30-16	[23]	Ⅳ	焼土72	胴部10, 底部10		
				20片								
		壺	157	12642	2	31-17	[10]	Ⅲ	遺構外	胴部	PL.[図]-9-3	
				12644	22	31-17	[10]	Ⅲ	遺構外	口縁部10, 胴部10, 底部2		
				12645	4	31-17	[10]	Ⅲ	遺構外	胴部		
12649	1			31-17	[10]	Ⅲ	遺構外	胴部				
29片												

Tab. ①-21 第2文化層出土土師器坏一覽表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL、番号	
坏	1	9508	1	18-15	[30]	x ²	炭化物52	体部	PL.[2]-266-1
		11548	1	21-17	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		11985	1	20-16	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		11978	8	20-17	[11]	Ⅳ	遺構外	体部7, 底部1	
		11975	1	20-17	[01]	Ⅳ	遺構外	体部	
		11538	1	21-17	[12]	Ⅳ	遺構外	体部	
		11533	1	21-17	[12]	Ⅳ	遺構外	体部	
(完形品)		11903	1	21-17	[11]	Ⅳ	遺構外	体部	
		15片							
坏	2	2190	9	09-05	[12]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部6, 体部2, 底部1	PL.[2]-157-3
		9片							PL.[2]-131
坏	3	1757	4	18-16	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部1, 体部2, 底部1	PL.[2]-210
		4片							PL.[2]-268-1
坏	4	10829	4	17-17	[11]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部3, 体部1	PL.[2]-32-1
		1801	2	17-17	[11]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-44
		1800	1	17-17	[11]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部	
		10510	2	17-16	[22]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部	
		1812	1	17-17	[22]	覆土④層	2号竪穴住居	体部	
		1834	2	17-17	[20]	覆土④層	2号竪穴住居	体部1, 底部1	
		12片							
坏	5	555	16	17-17	[11]	床直	2号竪穴住居	体部15, 底部1	PL.[2]-32-2
		9559	5	20-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部	PL.[2]-45
		21片							
坏	6	10796	2	17-11	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-202-1
		10688	1	18-11	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-211
		10677	1	18-11	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	体部～底部	
(完形品)		4片							
坏	7	1163	1	18-20	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部	PL.[2]-46
		1735	6	17-16	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部5, 体部～底部1	PL.[2]-268-2
		7片							
坏	8	960	4	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居	口縁部3, 体部～底部1	PL.[2]-127-2
		4片							PL.[2]-132
坏	9	1743	1	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-32-3
		9503	2	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	PL.[2]-270
		7427	6	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部2, 体部2, 底部2	
		5752	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部	
		5761	2	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部	
		5746	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部	
		5740	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部	
		14片							
(完形品)		14片							
坏	10	1902	2	17-16	[32]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-202-2
		3542	2	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-212
		10337	1	17-12	[20]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10486	1	17-11	[23]	マウンド下面	炭化物マウンド	口縁部	
		9355	1	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10267	1	17-11	[23]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10319	1	17-12	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		3520	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		7565	1	17-12	[31]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部	
		3463	1	17-11	[33]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		9286	1	17-12	[10]	マウンド上面	炭化物マウンド	底部	
		9366	1	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	
		2321	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	体部	
		10293	1	17-12	[20]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		9369	1	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		8757	1	17-12	[01]	マウンド上面	炭化物マウンド	体部	
		(完形品)		18片					
坏	11	2732	10	07-13	[22]	V	焼土24	口縁部3, 体部4, 底部3	PL.[2]-261-1
		14800	1	08-13	[30]	V	焼土24	口縁部	PL.[2]-271
		11774	1	18-15	[00]	V	炭化物52周辺	体部	
12片									
坏	12	1563	1	10-05	[00]	煙道	5号竪穴住居	PL.[2]-127-1	
(完形品)		1個体							PL.[2]-133
坏	13	1183	4	09-12	[02]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部1, 体部2, 底部1	PL.[2]-100-1
		4片							PL.[2]-101
坏	14	14550	1	06-08	[01]	Ⅵ	遺構外	PL.[2]-268-3	
(完形品)		1個体							
坏	15	3869	3	10-08	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部2, 体部1	PL.[2]-268-4
		3848	4	10-08	[00]	Ⅳ	遺構外	口縁部3, 底部1	
		3886	1	10-08	[10]	V	遺構外	底部	
(完形品)		8片							

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
坏	16	11710	1	15-17	[31]	土壌内	3号土壌	口縁部	PL.[2]-194-1
		11648	2	15-17	[32]	焼土	焼土41	口縁部	PL.[2]-213
		3329	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		3395	1	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	
		3336	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		6片							
坏	17	10755	1	17-11	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	巻頭図版5-上
		10442	2	17-11	[20]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部1, 体部1	PL.[1]-32
		10567	1	17-11	[31]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	PL.[2]-202-6
		13255	1	07-08	[31]	Ⅳ	焼土18	体部	PL.[2]-214
		13265	1	07-08	[31]	Ⅳ	焼土18	体部	
		14157	1	08-04	[33]	Ⅳ	焼土・炭化物28	体部	
		3866	1	10-08	[21]	Ⅳ	炭化物30	体部	
		14220	1	08-05	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
9片									
坏	18	12063	8	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部6, 体部～底部2	PL.[2]-32-4
		8片							
坏	19	2204	5	09-05	[22]	焼土	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部1, 体部4	PL.[2]-157-1
		2205	9	09-05	[22]	焼土	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部1, 体部5, 底部3	PL.[2]-134
		14片							
坏	20	73	1	19-15	[33]	(不明)	炭化物52	口縁部	PL.[2]-266-2
		71	2	19-16	[30]	(不明)	炭化物52周辺	口縁部1, 体部1	
		9080	2	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	口縁部1, 体部1	
		9083	1	19-16	[20]	x ¹	炭化物52	底部	
		7928	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	底部	
		7片							
坏	21	9801	1	17-13	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド周辺	口縁部	PL.[2]-202-3
		8893	1	17-17	[11]	炭	焼土43	口縁部	PL.[2]-215
		9760	1	15-17	[21]	Ⅳ	焼土43	口縁部	
		8219	1	15-17	[21]	Ⅲ	焼土43	体部	
4片									
坏	22	13647	2	08-08	[31]	Ⅳ	焼土27	体部	PL.[2]-202-4
		10021	1	17-11	[22]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-216
		7026	3	17-12	[20]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部2, 体部1	
		7111	1	17-12	[01]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部	
		6991	11	17-12	[01]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部3, 体部6, 底部2	
		18片							
坏	23	7421	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部	PL.[2]-266-3
		9097	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		11311	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		8183	1	19-15	[11]	Ⅲ	炭化物52	口縁部	
		7894	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		7700	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		7688	10	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	口縁部6, 体部3, 底部1	
		7907	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	底部	
		17片							
坏	24	8041	3	16-18	[21]	Ⅳ	焼土44	体部	PL.[2]-202-5
		7981	1	19-15	[10]	x ¹	炭化物52	口縁部	PL.[2]-217
		7149	2	17-12	[20]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部	
		10679	1	18-11	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		7030	1	17-12	[20]	Ⅳ	炭化物マウンド	体部	
		8772	1	17-12	[11]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	
		186	1	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部	
		7340	1	17-12	[10]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部	
		7331	1	17-12	[01]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部	
		7351	1	17-12	[11]	Ⅳ	炭化物マウンド	底部	
		7329	1	17-12	[01]	Ⅳ	炭化物マウンド	底部	
		7394	1	17-12	[21]	Ⅳ	炭化物マウンド	体部	
		15片							
		31							
坏	25	8906	1	17-18	[00]	覆土④層	2号竪穴住居	底部	PL.[2]-266-4
		11649	2	15-17	[31]	焼土	焼土43	口縁部	PL.[2]-273
		11195	1	15-17	[31]	Ⅳ	焼土43	口縁部	
		9711	1	16-17	[01]	焼土上面	焼土43	口縁部	
		9067	2	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		5814	1	19-16	[30]	Ⅲ	炭化物52周辺	口縁部	
		5808	1	19-16	[30]	Ⅲ	炭化物52周辺	体部	
		10826	1	15-14	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		5301	1	20-17	[22]	表採	遺構外	底部	
		11片							
坏	26	15946	1	08-09	[02]	x ⁸	4号土壌	口縁部	PL.[2]-194-3
		16049	1	08-09	[02]	x ⁸	4号土壌	口縁部	PL.[2]-167

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
坏 (つづき)	26	15422	2	08-09	[02]	炭化物層	4号土壌	体部1, 底部1
		4片						
坏	27	7175	7	26-16	[32]	炭化物層	炭化物・焼土70	口縁部2, 体部5
		7200	3	27-16	[03]	炭化物層	炭化物・焼土70	体部2, 底部1
		7194	1	27-16	[03]	炭化物層	炭化物・焼土70	体部
		11片						
坏	28	11957	1	18-15	[10]	IV	炭化物52周辺	口縁部
		3338	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		9257	2	17-11	[13]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部1, 体部1
		9308	1	17-11	[03]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		9205	1	17-11	[03]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部
		9307	1	17-11	[03]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		9310	1	17-11	[03]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		7130	1	17-12	[10]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		10285	1	17-12	[20]	マウンド内	炭化物マウンド	体部
		10310	1	17-12	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		9639	2	17-12	[11]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		2461	1	17-10	[33]	マウンド内	炭化物マウンド	底部
		9265	1	17-11	[13]	マウンド上面	炭化物マウンド	体部
		15片 (口縁部～胴部1片番号わからず)						
坏	29	1177	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	口縁部
		1196	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	底部
		1195	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	体部
坏	30	3片						
		3491	8	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部5, 体部2, 底部1
		8701	5	17-11	[22]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部1, 体部4
		9304	1	17-11	[02]	マウンド内	炭化物マウンド	体部
		3340	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	体部
		10253	1	17-11	[22]	マウンド内	炭化物マウンド	体部
坏	31	16片						
		15687	1	08-09	[03]	x*	4号土壌	口縁部
		1865	1	18-10	[11]	カクラン	炭化物マウンド	口縁部
		1860	1	18-10	[12]	カクラン	炭化物マウンド	底部
		2752	1	18-10	[01]	マウンド内	炭化物マウンド	体部
		4463	1	16-22	[31]	IV	炭化物42	体部
		9574	6	20-15	[31]	x ¹	炭化物52	口縁部3, 体部3
		8148	1	19-14	[33]	IV	炭化物52周辺	体部
		1717	1	15-08	[23]	IV	遺構外	体部
坏	32	13片						
		1185	3	09-11	[33]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部1, 体部1, 底部1
坏	33	3片						
		1356	7	11-06	[20]	床直	5号竪穴住居	口縁部2, 体部4, 底部1
		1353	1	11-06	[20]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		1453	1	11-06	[20]	床	5号竪穴住居	体部
		3890	1	08-08	[30]	IV	焼土27周辺	体部
		3294	1	09-06	[20]	V	1号土壌焼土周辺	体部
坏	34	11片						
		572	7	18-16	[23]	(不明)	炭化物52	口縁部2, 体部5
		1760	1	18-16	[13]	炭	炭化物52	体部
		11080	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	底部
		7669	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	底部
		1759	2	18-16	[13]	炭	炭化物52	体部
		9052	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	体部
		7993	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	体部
		1756	1	18-16	[03]	炭	炭化物52	体部
		1758	1	18-16	[13]	炭	炭化物52	体部
		16片						
坏	35	4386	1	16-22	[01]	IV	炭化物42	口縁部
		4384	1	16-22	[01]	IV	炭化物42	口縁部
		4383	1	16-22	[01]	IV	炭化物42	口縁部
		4387	1	16-22	[01]	IV	炭化物42	体部
		4382	1	16-22	[01]	IV	炭化物42	底部
		16519	1	16-12	[不明]	(不明)	炭化物マウンド周辺	口縁部
		4195	1	17-22	[00]	IV	遺構外	体部
		42	1	13-22	[不明]	カクラン	遺構外	体部
		8片						
坏	36	3496	2	17-11	[02]	IV	炭化物マウンド	口縁部1, 体部1
		7434	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部
		9520	1	20-15	[02]	x ¹	炭化物52	口縁部
		7451	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	口縁部
		9099	10	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	口縁部3, 体部3, 底部4

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
坏 (つづき)	36	7621	2	19-15	[11]	x ¹	炭化物52	口縁部1, 体部1	
		7977	1	19-15	[10]	x ²	炭化物52	底部	
		11083	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	体部	
		7668	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	体部	
	20片								
坏	37	2972	1	18-10	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	PL. [2]-203-5
		2973	1	18-10	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL. [2]-223
		2974	4	18-10	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部2, 体部2	
		2829	1	18-10	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
7片									
坏	38	14905	1	07-08	[13]	焼土	炭化物19	口縁部	PL. [2]-261-3
		15107	1	07-08	[13]	焼土下面	炭化物19	口縁部	PL. [2]-274
		15120	1	07-09	[10]	焼土下面	炭化物19	体部	
		16323	1	10-17	[00]	V	遺構外	口縁部	
		4484	1	08-14	[12]	IV	遺構外	口縁部	
		2717	1	08-12	[10]	V	遺構外	底部	
		15063	1	06-07	[30]	IV	遺構外	体部	
		4099	1	11-16	[10]	V	遺構外	体部	
8片									
坏	39	538	4	17-17	[20]	覆土④層	2号竪穴住居	体部	PL. [2]-268-5
		7500	1	14-15	[01]	IV	遺構外	口縁部	
		7781	1	13-15	[32]	IV	遺構外	口縁部	
		628	2	13-15	[11]	IV	遺構外	口縁部	
		7762	2	13-15	[01]	IV	遺構外	口縁部1, 体部1	
		1369	1	11-18	[21]	V	遺構外	底部	
		7540	1	13-15	[32]	IV	遺構外	体部	
		8256	1	13-17	[21]	IV	遺構外	体部	
		627	1	13-15	[11]	IV	遺構外	体部	
		14片							
坏	40	8967	1	12-14	[33]	IV	焼土35	底部	PL. [2]-261-4
		7530	1	13-15	[22]	IV	焼土37周辺	体部	
		7527	1	13-15	[22]	IV	焼土37周辺	体部	
		7534	1	13-15	[23]	IV	焼土37周辺	体部	
		5876	1	13-15	[33]	III	焼土37周辺	体部	
		7497	1	14-15	[00]	IV	遺構外	口縁部	
		7499	1	14-15	[01]	IV	遺構外	体部	
		7704	1	15-15	[00]	IV	遺構外	底部	
		8268	2	13-16	[13]	IV	遺構外	口縁部	
		10片							
坏	41	9349	2	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部1, 体部1	PL. [2]-203-6
		9438	1	17-12	[10]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	PL. [2]-224
		7610	1	19-15	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		11402	2	21-15	[13]	IV	焼土62	体部	
6片									
坏	42	10246	3	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL. [2]-203-7
		8802	1	16-11	[32]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	PL. [2]-225
		7814	1	18-11	[02]	IV	炭化物マウンド周辺	口縁部	
		10760	1	17-11	[32]	マウンド下面	炭化物マウンド	口縁部	
		10030	1	17-11	[22]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	
		10067	1	17-12	[21]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	
		8692	1	17-11	[22]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	
		10024	1	17-11	[22]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	
		9889	1	17-12	[11]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10431	1	17-12	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		3519	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	
		10430	2	17-12	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		3452	1	17-11	[32]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		3263	1	17-11	[23]	IV	炭化物マウンド	体部	
		9254	1	17-11	[12]	マウンド上面	炭化物マウンド	体部	
		3366	1	17-11	[13]	マウンド上面	炭化物マウンド	体部	
		10323	1	17-12	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		10246	1	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		10430	1	17-12	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		22片							
坏	43	1758	1	18-16	[13]	床	2号竪穴住居	口縁部	PL. [2]-32-5
		492	1	16-17	[03]	b ¹ 上	焼土43	口縁部	PL. [2]-226
		12251	1	16-18	[00]	IV	焼土43	口縁部	
		12256	1	16-18	[11]	IV	焼土43	体部	
		8027	1	16-18	[11]	IV	焼土43	底部	
		8039	1	16-18	[21]	IV	焼土43	底部	
		12528	1	16-18	[10]	IV	焼土43	体部	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL、番号			
環 (つづき)	43	12521	1	16-18	[00]	焼土	焼土43	体部			
		441	1	16-17	[02]	b' 上	焼土43	体部			
		12190	1	16-18	[21]	Ⅳ	焼土44	口縁部			
		12253	2	16-18	[10]	Ⅳ	焼土44周辺	口縁部			
		10062	1	17-12	[21]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部			
		7800	1	17-12	[20]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部			
14片											
環	44	6181	1	26-15	[32]	焼土	焼土68	口縁部	PL.[2]-261-5		
		6182	1	26-15	[32]	焼土	焼土68	体部			
		6171	1	26-15	[23]	焼土	焼土68	体部			
		6138	1	26-14	[33]	Ⅳ	焼土68周辺	底部			
		6709	1	26-15	[11]	Ⅳ	焼土68周辺	底部			
5片											
環	45	9816	1	17-13	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		10179	1	17-13	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		9807	2	17-13	[02]	Ⅳ	遺構外	体部			
		9808	1	17-13	[02]	Ⅳ	遺構外	体部			
		9838	1	17-13	[13]	Ⅳ	遺構外	体部			
		9969	1	16-13	[33]	Ⅳ	遺構外	底部			
		11454	1	20-16	[10]	Ⅳ	炭化物52周辺	底部			
		8片									
環	46	14923	1	07-08	[03]	焼土	炭化物19	口縁部	PL.[2]-261-6		
		8394	1	20-14	[30]	Ⅳ	焼土61	底部		PL.[2]-272	
		8396	1	20-14	[30]	Ⅳ	焼土61	底部			
		12967	1	07-07	[22]	Ⅳ	遺構外	体部			
4片											
環	47	14356	1	08-07	[32]	土壌内	6号土壌	体部	PL.[2]-194-4		
		14360	1	08-07	[31]	土壌内	6号土壌	体部		PL.[2]-192	
		13953	1	08-07	[30]	Ⅳ	6号土壌周辺	体部			
		3733	1	09-07	[00]	Ⅳ	6号土壌周辺	口縁部			
		3732	1	09-07	[00]	Ⅳ	6号土壌周辺	口縁部			
		5194	1	09-06	[01]	V	6号土壌周辺	口縁部			
		3741	1	09-07	[02]	Ⅳ	6号土壌周辺	口縁部			
		5097	2	08-06	[22]	Ⅳ	6号土壌周辺	底部			
9片											
環	48	1496	1	10-05	[13]	床直	5号竪穴住居	体部	PL.[2]-127-8		
		1410	1	10-05	[13]	床直	5号竪穴住居	体部		PL.[2]-183	
		12862	1	08-07	[21]	土壌内	5号土壌	体部			
		12771	1	08-07	[33]	Ⅳ	5号土壌周辺	底部			
		12914	1	08-07	[33]	Ⅳ	5号土壌周辺	体部			
		1348	1	10-06	[21]	Ⅳ	遺構外	体部			
		1349	1	10-06	[31]	Ⅳ	遺構外	体部			
		16242	1	04-06	[30]	V	遺構外	体部			
8片											
環	49	10509	2	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	口縁部1, 体部1	PL.[2]-32-6		
		8181	2	19-15	[01]	Ⅲ	炭化物52	口縁部		PL.[2]-275	
		8002	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部			
		12571	1	20-15	[23]	Ⅳ	炭化物52	口縁部			
		7633	1	19-15	[02]	x ¹	炭化物52	体部			
		9520	1	20-15	[02]	x ¹	炭化物52	体部			
		697	1	11-08	[02]	b' 上	炭化物30周辺	底部			
		9976	1	16-13	[22]	Ⅳ	遺構外	底部			
10片											
環	50	9084	19	19-16	[20]	x ¹	炭化物52	口縁部6, 体部11, 底部2	PL.[2]-266-5		
19片											
環	51	11180	1	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	底部	PL.[2]-204-1		
		10290	6	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部2, 体部4		PL.[2]-227	
		464	1	16-17	[12]	b' 上	焼土43	底部			
		12592	1	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43	底部			
		12546	1	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43	底部			
10片											
環	52	8301	1	16-16	[22]	Ⅳ	焼土43周辺	体部	PL.[2]-268-6		
		413	1	16-16	[21]	b' 上	焼土43周辺	体部			
		411	1	16-16	[21]	b' 上	焼土43周辺	体部			
		8290	1	16-16	[12]	Ⅳ	焼土43周辺	体部			
		11814	1	15-17	[12]	Ⅳ	焼土43周辺	体部			
		8082	3	14-17	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		4228	1	11-11	[31]	Ⅳ	遺構外	底部			
		7496	1	14-15	[00]	Ⅳ	遺構外	体部			
		4171	1	13-18	[22]	Ⅳ	遺構外	体部			
		4126	1	14-19	[30]	Ⅳ	遺構外	体部			
		12片									

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号		
坏	53	3514	1	17-12	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-204-2	
		3509	2	17-12	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部1, 体部1	PL.[2]-228	
		8372	2	17-12	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部		
		8371	2	17-12	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部1, 体部1		
		8369	2	17-12	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	底部		
		3510	3	17-12	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	体部		
		8379	1	16-12	[30]	Ⅳ	炭化物マウンド周辺	体部		
		8366	2	16-12	[30]	Ⅳ	炭化物マウンド周辺	体部		
		8396	2	20-14	[30]	Ⅳ	遺構外	底部		
17片										
坏	54	272	1	16-16	[33]	(不明)	焼土43	口縁部	PL.[2]-204-3	
		9708	1	16-16	[不明]	焼土上面	焼土43	口縁部	PL.[2]-229	
		264	1	16-16	[33]	(不明)	焼土43	底部		
		294	4	16-17	[20]	(不明)	焼土43	体部		
		8741	1	17-11	[32]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部		
		10031	1	17-11	[22]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部		
		10489	1	17-12	[20]	マウンド内	炭化物マウンド	底部		
		2898	1	17-10	[32]	b ¹	炭化物マウンド	体部		
		2413	1	17-10	[22]	b ¹	炭化物マウンド	体部		
		1864	1	18-10	[12]	カクラン	炭化物マウンド	体部		
		8516	1	13-17	[03]	Ⅳ	遺構外	底部		
		14片								
坏	55	8179	1	19-15	[11]	Ⅲ	炭化物52	底部	PL.[2]-204-4	
		3542	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-230	
		10303	1	17-12	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部		
		10061	2	17-12	[21]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部		
		184	2	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	体部		
		9660	1	17-12	[10]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部		
		8648	2	17-11	[13]	マウンド上面	炭化物マウンド	体部		
		7341	1	17-12	[10]	Ⅳ	炭化物マウンド	底部		
		9293	1	17-12	[10]	マウンド上面	炭化物マウンド	体部		
		8758	1	17-12	[01]	マウンド上面	炭化物マウンド	体部		
		10099	1	18-14	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
		4781	1	12-08	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
		15片								
		坏	56	539	2	17-17	[20]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部
537	2			17-17	[20]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部		
7591	1			20-16	[10]	Ⅲ	炭化物52周辺	体部		
226	2			15-16	[31]	(不明)	遺構外	口縁部		
7713	1			15-15	[13]	Ⅳ	遺構外	底部		
10813	1			15-14	[11]	Ⅳ	遺構外	体部		
7725	1			15-15	[23]	Ⅳ	遺構外	体部		
224	1			15-16	[30]	Ⅳ	遺構外	体部		
11片										
坏	57	105	2	21-14	[23]	(不明)	遺構外	口縁部	PL.[2]-229	
		106	7	21-14	[23]	(不明)	遺構外	口縁部	PL.[2]-268-7	
		8119	2	21-14	[22]	Ⅲ	遺構外	体部		
		8132	2	21-14	[30]	Ⅳ	遺構外	体部1, 底部1		
		8400	2	21-14	[10]	Ⅳ	遺構外	底部		
15片										
坏	58	10341	1	17-12	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-231	
		10761	1	17-11	[32]	マウンド下面	炭化物マウンド	口縁部		
		3434	1	17-11	[23]	マウンド下面	炭化物マウンド	口縁部		
		3435	1	17-11	[23]	マウンド下面	炭化物マウンド	口縁部		
		3436	1	17-11	[23]	マウンド下面	炭化物マウンド	口縁部		
		10342	1	17-12	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	体部		
		10761	1	17-11	[32]	マウンド下面	炭化物マウンド	体部		
		9110	1	18-16	[23]	b ²	炭化物53	体部		
		8片								
坏	59	10930	1	21-17	[12]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部	PL.[2]-268-8	
		10931	1	21-17	[12]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
		10935	1	21-17	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
		12410	1	19-18	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
		12808	1	21-13	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
		5片								
坏	60	12483	1	19-15	[11]	x ²	炭化物52	口縁部	PL.[2]-276	
		8195	1	19-15	[22]	Ⅳ	炭化物52	体部	PL.[2]-266-7	
		11973	1	19-15	[02]	x ²	炭化物52	体部		
		11877	1	18-15	[31]	Ⅳ	炭化物52	体部		
		12125	1	19-16	[30]	Ⅳ	炭化物52周辺	体部		
		211	1	20-16	[32]	(不明)	炭化物52周辺	底部		

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL・番号		
環 (つづき)	60	12490	1	21-15	[21]	Ⅳ	焼土62	口縁部		
		12487	1	21-15	[21]	Ⅳ	焼土62	口縁部		
		7488	1	21-16	[02]	Ⅳ	焼土62周辺	口縁部		
		12671	1	21-16	[00]	Ⅳ	焼土62周辺	口縁部		
		11913	1	21-17	[11]	Ⅳ	遺構外	体部		
		5902	1	23-17	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
		12片								
環	61	2804	2	17-10	[33]	b'	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-232	
		9268	1	17-11	[13]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部		
3片										
環	62	2181	1	09-05	[11]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	PL.[2]-157-2	
		2190	1	09-05	[12]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	PL.[2]-233	
		2198	1	09-05	[22]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部		
		2356	1	09-05	[11]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部		
		14746	1	07-05	[02]	V	焼土17	口縁部		
		8775	1	17-12	[12]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部		
		4735	1	14-09	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
7片										
環	63	741	1	11-04	[01]	覆土⑤層	5号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-194-5	
		12926	1	08-07	[11]	土城内	5号土壌	口縁部	PL.[2]-184	
		12944	1	08-07	[12]	土城内	5号土壌	口縁部		
		4123	1	10-08	[33]	V	炭化物30	口縁部		
4片										
環	64	11991	1	20-16	[30]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部	PL.[2]-234	
		11251	1	21-16	[01]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部	PL.[2]-267-2	
		11382	1	20-15	[22]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部		
3片										
環	65	7043	1	18-12	[10]	Ⅳ	焼土47	口縁部～体部	PL.[2]-261-7	
		3934	1	11-13	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
		6649	1	19-12	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
3片										
環	66	2232	1	10-04	[02]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部～体部	PL.[2]-157-4	
		4756	2	11-12	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		PL.[2]-169
		4697	1	11-13	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
		4698	1	11-13	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
		4710	1	11-13	[10]	V	遺構外	口縁部～体部		
		4711	1	11-13	[10]	V	遺構外	口縁部～体部		
		4716	1	11-13	[10]	V	遺構外	口縁部～体部		
8片										
環	67	8292	2	16-16	[23]	Ⅳ	焼土43周辺	口縁部		
		229	3	15-16	[33]	(不明)	焼土43周辺	口縁部		
		705	1	11-09	[01]	b' 上	遺構外	口縁部		
6片										
環	68	15947	1	08-09	[02]	x ³	4号土壌	口縁部	PL.[2]-170	
		16047	1	08-09	[02]	x ³	4号土壌	口縁部		
2片										
環	69	4220	1	11-11	[00]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
		8508	1	14-17	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
		8561	1	14-17	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
		8558	5	14-17	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部3, 体部2		
8片										
環	70	7903	1	19-15	[13]	x'	炭化物52	口縁部～体部	PL.[2]-235	
		10739	1	16-13	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部		
2片										
環	71	1422	1	10-05	[33]	床直	5号竪穴住居	体部	PL.[2]-185	
		5232	1	08-07	[11]	Ⅳ	5号土壌	口縁部		
		3124	3	09-06	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部2, 体部1		
		3125	1	09-06	[21]	V	遺構外	体部		
		3126	1	09-06	[21]	V	遺構外	体部		
		3129	1	09-06	[22]	V	遺構外	体部		
		3078	1	08-05	[33]	b' 上	遺構外	体部		
		3914	1	09-08	[30]	V	遺構外	口縁部		
10片										
環	72	5360	1	29-15	[22]	Ⅲ	遺構外	体部		
		5361	1	29-15	[22]	Ⅲ	遺構外	体部		
2片										
環	73	13549	8	10-10	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部3, 体部5	PL.[2]-171	
8片										
環	74	5541	1	26-17	[30]	Ⅲ	炭化物・焼土70	口縁部		
1片										

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL番号	
坏	75	13071	1	09-11	[21]	IV	遺構外	口縁部～体部	PL.[2]-172
			1片						
坏	76	14994	1	05-07	[01]	IV	焼土7	口縁部～体部	PL.[2]-277
		15551	1	05-10	[32]	焼土	焼土11	口縁部～体部	
		3838	1	09-08	[31]	IV	遺構外	口縁部～体部	
		12882	1	09-06	[01]	IV	遺構外	口縁部～体部	
		12966	1	07-07	[22]	IV	遺構外	口縁部～体部	
		13712	1	09-10	[20]	IV	遺構外	口縁部～体部	
			6片						
坏	77	10085	1	18-14	[00]	IV	遺構外	体部	
		10400	1	18-14	[22]	IV	遺構外	底部	
			2片						
坏	78	16303	1	08-09	[13]	焼土	4号土壌	底部	PL.[2]-278
			1片						
坏	79	7235	1	19-15	[11]	x ¹	炭化物52	底部	
		7445	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	体部	
		8864	1	19-15	[02]	x ¹	炭化物52	体部	
		8181	1	19-15	[01]	Ⅲ	炭化物52	体部	
		4035	1	10-09	[23]	V	遺構外	体部	
			5片						
坏	80	14392	1	06-08	[20]	V	遺構外	底部	
			1片						
坏	81	1361	1	11-06	[31]	床	5号竪穴住居	底部	PL.[2]-127-7
			1片						
坏	82	14022	1	08-09	[02]	V	4号土壌	底部	
		9818	1	17-13	[02]	IV	遺構外	体部	
			2片						
坏	83	13808	1	08-09	[30]	IV	遺構外	底部	
		5266	1	15-05	[32]	IV	遺構外	底部	
		10635	1	14-12	[12]	IV	遺構外	底部	
			3片						
坏	84	16206	2	08-10	[30]	V	炭化物・焼土20・21	底部	PL.[2]-279
			2片						
坏	85	1708	1	16-09	[22]	IV	遺構外	底部	
			1片						
坏	86	2994	1	07-12	[31]	Ⅵ	焼土24	底部	
			1片						
坏	87	7301	1	14-14	[03]	IV	遺構外	底部	
			1片						
坏	88	88	1	22-21	[31]	(不明)	遺構外	底部	
			1片						
坏	89	242	1	15-21	[30]	(不明)	炭化物 42	底部	
			1片						
坏	90	15133	1	05-11	[30]	IV	焼土11	底部	PL.[2]-281
		16175	1	05-10	[33]	V	焼土11	底部	
			2片						
坏	91	13360	1	07-08	[12]	IV	遺構外	底部	
			1片						
坏	92	14542	1	05-08	[30]	V	遺構外	底部	
		14643	1	05-08	[20]	V	遺構外	底部	
			2片						
坏	93	15693	1	07-09	[32]	x ²	4号土壌	底部	PL.[2]-280
			1片						
坏	94	3115	1	09-07	[22]	IV	遺構外	底部	PL.[2]-282
		4067	1	09-09	[23]	V	遺構外	底部	
			2片						
坏	95	12980	1	08-07	[21]	土壌内	5号土壌	底部	
			1片						
坏	96	5348	1	30-16	[20]	Ⅲ	遺構外	底部	
			1片						
坏	97	15761	1	04-09	[21]	IV	遺構外	底部	
			1片						
坏	98	13092	2	08-11	[30]	IV	炭化物・焼土22	底部	PL.[2]-284
		13549	1	10-10	[03]	IV	遺構外	底部	
			3片						
坏	99	15476	2	06-09	[10]	焼土	炭化物14	底部	PL.[2]-283
			2片						
坏	100	12943	1	08-07	[11]	土壌内	5号土壌	底部	
		14705	1	06-10	[32]	炭化物層	炭化物16	底部	
			2片						
坏	101	3796	1	09-08	[00]	IV	遺構外	底部	
			1片						

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
坏	102	6035	1	20-16	[01]	Ⅲ	遺構外	底部
			1片					
坏	103	1350	1	10-06	[31]	Ⅳ	遺構外	底部
			1片					PL.[図]-127-6
坏	104	15086	1	04-08	[11]	Ⅳ	炭化物4	底部
		14862	1	06-10	[21]	カクラン	炭化物16	底部
			2片					
坏	105	1501	1	10-05	[11]	Ⅳ	遺構外	底部
			1片					
坏	106	12232	2	17-17	[11]	カマド	2号竪穴住居	口縁部
		9562	1	20-15	[13]	x ¹	炭化物52	口縁部
			3片					
坏	107	15683	1	07-09	[32]	x ¹	4号土壌	口縁部
		15670	1	08-09	[03]	x ⁴	4号土壌	口縁部
		16057	1	08-09	[03]	x ⁴	4号土壌	口縁部
		13904	1	09-10	[03]	焼土	焼土22	口縁部
			4片					
坏	108	614	1	10-05	[13]	覆土⑤層	5号竪穴住居	口縁部
			1片					PL.[図]-186
坏	109	612	4	10-06	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		1348	1	10-06	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		13103	1	07-11	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部
			6片					
坏	110	2964	1	17-10	[10]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
			1片					PL.[図]-187 PL.[図]-237
坏	111	15138	2	05-11	[30]	Ⅳ	焼土11	口縁部
		14684	1	06-11	[20]	V	遺構外	口縁部
			3片					
坏	112	1187	2	11-04	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部～体部
			2片					PL.[図]-136
								(口縁部～体部1片番号わからず)
坏	113	199	1	20-15	[31]	x ¹	炭化物52	口縁部
		9575	1	20-15	[21]	x ¹	炭化物52	口縁部
		9570	1	20-15	[31]	x ¹	炭化物52	体部
		8103	2	20-14	[13]	Ⅲ	炭化物52周辺	口縁部
		10537	1	21-15	[00]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部
		11384	1	20-15	[31]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部
		5697	1	20-15	[31]	Ⅳ	炭化物52周辺	体部
		10538	1	21-15	[00]	Ⅳ	炭化物52周辺	体部
		11385	1	20-15	[32]	Ⅳ	炭化物52周辺	底部
(完形品)			10片					
その他(すり鉢形)	1623	4	08-13	[20]	煙道内	3号竪穴住居		PL.[図]-99-1
	2687	1	08-12	[22]	V	3号竪穴住居		
			5片					

Tab. Ⅱ-22 第2文化層出土須恵器一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL、番号	
須恵器(坏)	1	15868	1	04-08	[20]	Ⅵ	炭化物4	口縁部	PL[Ⅱ]-262-1
		15366	5	05-07	[10]	V上	遺構外	口縁部3, 体部1, 底部1	
		15749	1	06-07	[不明]	(不明)	遺構外	口縁部	
(完形品)		7片							
須恵器(坏) 「赤焼」	2	3334	1	17-11	[12]	上面	炭化物マウンド	口縁部	PL[Ⅱ]-204-5
		6765	1	19-11	[00]	Ⅳ	炭化物・焼土50	体部	PL[Ⅱ]-238
		6652	2	19-12	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部1, 体部1	
		10213	1	19-13	[10]	Ⅳ	遺構外	体部	
		10211	1	19-13	[00]	Ⅳ	遺構外	体部	
		7576	1	18-13	[31]	Ⅳ	遺構外	底部	
	(完形品)		7片						
須恵器(坏)	3	15456	1	06-09	[20]	焼土	焼土15	口縁部	
		15589	1	07-08	[不明]	(カクラン)	焼土18	体部	
		13018	1	07-08	[03]	Ⅳ	焼土18	底部	
		16532	1	09-03	[不明]	焼土	焼土25	体部	
		16526	1	08-07	[不明]	焼土	6号土壇周辺	体部	
		14939	1	07-09	[00]	焼土	炭化物19	口縁部	
		13618	1	07-09	[00]	Ⅳ	炭化物19	体部	
		15109	1	07-08	[03]	焼土下面	炭化物19	底部	
		13617	1	07-09	[00]	Ⅳ	炭化物19	底部	
		14112	1	06-08	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		15289	1	05-09	[21]	Ⅳ	遺構外	底部	
		11片							
	須恵器(坏) 「赤焼」	4	14411	1	06-10	[10]	V	炭化物16	口縁部
		15567	2	05-10	[21]	V	遺構外	口縁部1, 底部1	PL[Ⅱ]-138
		15175	1	05-10	[22]	V	遺構外	口縁部	
		15566	1	05-10	[21]	V	遺構外	体部	
		5片							
須恵器(坏) 「赤焼」	5	1161	1	20-18	[12]	Ⅳ	焼土・炭化物59	口縁部	PL[Ⅱ]-262-3
		4186	1	20-18	[13]	Ⅳ	焼土・炭化物59	口縁部	
		6065	1	21-17	[02]	Ⅳ	遺構外	底部	
		10989	1	22-18	[00]	Ⅳ	遺構外	底部	
		4片							
須恵器(坏)	6	783	2	21-15	[11]	Ⅳ	焼土62	口縁部	PL[Ⅱ]-262-4
		6060	2	21-16	[02]	Ⅲ	遺構外	口縁部	PL[Ⅱ]-104
		3139	1	10-07	[01]	V	遺構外	口縁部	
		5489	4	17-07	[31]	V	遺構外	口縁部3, 体部1	
		11459	5	20-16	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部4, 体部1	
		6055	1	21-16	[00]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		11463	2	20-16	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部1, 体部1	
		9592	1	20-16	[21]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		7483	2	21-16	[01]	Ⅳ	遺構外	体部	
		11246	1	21-16	[00]	Ⅳ	遺構外	体部	
		11992	1	20-16	[30]	Ⅳ	遺構外	体部	
		11456	1	20-16	[11]	Ⅳ	遺構外	底部	
		206	1	20-16	[30]	Ⅳ	遺構外	底部	
		9593	1	20-16	[21]	Ⅲ	遺構外	底部	
		25片							
須恵器(坏)	7	12659	1	16-17	[13]	Ⅳ	焼土43	口縁部	PL[Ⅱ]-204-6
		9328	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL[Ⅱ]-287
		10675	1	18-11	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10417	2	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10751	1	17-11	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10693	1	17-11	[22]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10791	1	17-11	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		10676	1	18-11	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		10416	1	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		10958	1	18-10	[03]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		2976	1	18-10	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	体部	
		10415	1	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	
		10462	1	17-11	[22]	マウンド下面	炭化物マウンド	底部	
		10461	1	17-11	[22]	マウンド下面	炭化物マウンド	底部	
		15片							
須恵器(瓶)	8	1780	1	18-17	[12]	覆土④層	2号竪穴住居	底部	PL[Ⅱ]-267-5
		1921	3	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	PL[Ⅱ]-239
		1861	1	18-10	[13]	カクラン	炭化物マウンド	胴部	
		5874	1	18-10	[不明]	表土	炭化物マウンド	胴部	
		6690	1	19-11	[23]	Ⅳ	炭化物・焼土50	胴部	
		9578	1	20-15	[20]	x ¹	炭化物52	胴部	
		9583	1	20-15	[11]	x ¹	炭化物52	胴部	
		9569	1	20-15	[22]	x ¹	炭化物52	底部	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL、番号	
須恵器(瓶) (つづき)	8	197	1	20-15	[31]	x ¹	炭化物52	胴部	
		8101	1	20-13	[13]	IV	炭化物57	底部	
		11398	1	21-15	[10]	IV	焼土62	胴部	
		5664	1	22-15	[00]	III	焼土64	胴部	
		5983	1	22-15	[03]	IV	焼土64	底部	
		5672	1	22-16	[30]	III	焼土64	底部	
		5980	1	22-15	[22]	IV	焼土64	底部	
		12807	1	23-16	[02]	IV	焼土65	底部	
		5950	1	23-16	[01]	III	焼土65	底部	
		6000	1	22-14	[01]	IV	遺構外	胴部	
		6490	1	11-10	[32]	IV	遺構外	胴部	
		6229	1	20-11	[00]	IV	遺構外	胴部	
		4084	1	20-10	[20]	V	遺構外	胴部	
		6230	1	20-11	[01]	IV	遺構外	胴部	
		6233	1	20-11	[21]	IV	遺構外	胴部	
		6491	4	11-10	[13]	IV	遺構外	胴部	
		4721	1	14-05	[不明]	表土	遺構外	胴部	
		6700	1	21-13	[13]	IV	遺構外	底部	
		31片							
須恵器(坏) 「赤焼」	9	7212	2	27-16	[03]	マウンド	炭化物・焼土70	口縁部	PL[2]-262-5
		7217	3	27-16	[03]	マウンド	炭化物・焼土70	口縁部1, 底部2	PL[2]-268-9
		6280	1	27-16	[03]	III	炭化物・焼土70	口縁部	
		12005	3	27-16	[03]	III	炭化物・焼土70	口縁部1, 体部2	
		7268	2	27-16	[03]	マウンド	炭化物・焼土70	口縁部1, 体部1	
		7209	1	27-16	[03]	マウンド	炭化物・焼土70	体部	
		7219	2	27-16	[03]	マウンド	炭化物・焼土70	体部	
		7213	1	27-16	[03]	マウンド	炭化物・焼土70	底部	
		6271	1	27-16	[03]	III	炭化物・焼土70	底部	
16片									
須恵器(坏)	10	14460	1	08-07	[32]	b ¹	6号土壌	口縁部	PL[2]-194-6
		16069	1	05-10	[33]	V	焼土11	体部	PL[2]-193
		13070	1	09-11	[20]	IV	遺構外	口縁部	
		13512	1	09-11	[21]	IV	遺構外	体部	
		10093	1	18-14	[10]	IV	遺構外	底部	
		5片							
須恵器(坏)	11	1346	2	10-06	[30]	床	5号竪穴住居	口縁部～体部	PL[2]-130-2
		2121	1	09-05	[31]	IV	遺構外	口縁部～体部	PL[2]-139
		3片							
須恵器(坏)	12	4682	1	11-12	[11]	IV	遺構外	口縁部～体部	
		4685	1	11-12	[21]	V	遺構外	口縁部～体部	
		3293	1	09-06	[20]	V	遺構外	口縁部～体部	
		4229	1	11-11	[22]	IV	遺構外	口縁部～体部	
		4207	1	11-10	[03]	IV	遺構外	体部	
		5片							
須恵器(瓶)	13	10086	1	18-14	[00]	IV	遺構外	口縁部	
1片									
須恵器(瓶)	14	9722	1	13-12	[00]	IV	遺構外	口縁部	
1片									
須恵器(瓶)	15	1421	1	10-05	[33]	床直	5号竪穴住居	口縁部	
		1461	1	11-05	[03]	床	5号竪穴住居	口縁部	
2片									
須恵器(瓶)	16	1911	1	18-17	[22]	床直	2号竪穴住居	口縁部	
		10965	1	17-10	[33]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
		2片							

Tab. 1-23 第2文化層出土土師器壺一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壺	1 14572	1	11-06	[11]	床	5号竪穴住居	底部	巻頭図版4上
	2664	14	09-04	[33]	土壌内	1号土壌	口縁部	PL.2-158
	2467	45	09-04	[33]	土壌内	1号土壌	胴部	PL.2-140
(完形品)	60片							
壺	2 2918	57	09-04	[33]	土壌内	1号土壌	口縁部21, 胴部35, 底部1	巻頭図版4上
(完形品)	57片							
壺	3 14044	5	08-08	[31]	V	焼土27	口縁部2, 胴部3,	PL.2-261-8
	13648	2	08-08	[31]	IV	焼土27	口縁部1, 胴部1	PL.2-142
	14045	3	08-08	[31]	V	焼土27	胴部2, 底部1	
	15550	1	08-07	[33]	VI	遺構外	口縁部	
(完形品)	11片							
壺	4 10850	9	17-18	[11]	床	2号竪穴住居	胴部8, 底部1	PL.2-33-1
	9614	1	17-12	[11]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	PL.2-48
	9335	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
	3542	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部	
	9692	1	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
	9226	1	17-12	[00]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部	
	16646	1	17-11	[30]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部	
	4201	1	10-11	[33]	IV	遺構外	口縁部	
	11124	1	16-13	[33]	IV	遺構外	口縁部	
	11125	1	16-13	[33]	IV	遺構外	口縁部	
(完形品)	18片							
壺	5 12134	1	21-17	[22]	IV	遺構外		
(完形品)	1個体							
壺	6 1511	12	09-12	[03]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部3, 胴部8, 底部1	PL.2-100-4
	12片							
壺	7 807	25	19-14	[11]	カマド	1号竪穴住居	口縁部5, 胴部15, 底部5	PL.2-201-1
(完形品)	25片							
壺	8 1500	15	10-05	[11]	床	5号竪穴住居	口縁部6, 胴部8, 底部1	PL.2-127-9
	15片							
壺	9 737	14	19-14	[11]	カマド	1号竪穴住居	口縁部13, 胴部~底部1	PL.2-20-2
	14片							
壺	10 582	1	19-14	[30]	覆土⑤層	1号竪穴住居	胴部	PL.2-207-1
	9870	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	PL.2-23
	9871	2	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	3542	19	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	胴部17, 底部2	
	9356	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	9344	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	9691	1	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	9676	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	10474	2	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	9421	2	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	54	1	16-16	[32]	(不明)	焼土43周辺	口縁部	
	8157	1	20-14	[11]	IV	炭化物58	胴部	
	64	1	19-16	[31]	(不明)	炭化物52周辺	口縁部	
	8134	1	19-14	[30]	IV	遺構外	胴部	
	10983	2	19-14	[10]	IV	遺構外	胴部	
	108	5	20-14	[13]	(不明)	遺構外	口縁部	
	112	1	20-14	[02]	(不明)	遺構外	口縁部	
	6595	1	22-17	[01]	IV	遺構外	口縁部	
	44片							
壺	11 7991	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	口縁部	PL.2-205-2
	16581	1	19-15	[不明]	x'	炭化物52	口縁部	PL.2-49
	11859	1	18-15	[11]	IV	炭化物52周辺	口縁部	
	11962	1	18-15	[11]	IV	炭化物52周辺	口縁部	
	11521	10	18-15	[31]	IV	炭化物52周辺	口縁部1, 胴部8, 底部1	
	12464	1	19-16	[30]	IV	炭化物52周辺	口縁部	
	8177	1	19-15	[01]	III	炭化物52周辺	胴部	
	7119	1	17-12	[01]	IV	炭化物マウンド	口縁部	
	16737	1	17-12	[11]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部	
	18片							
壺	12 309	1	16-17	[11]	(不明)	焼土43	口縁部	PL.2-207-2
	275	1	16-17	[10]	(不明)	焼土43	口縁部	PL.2-50
	359	1	16-17	[22]	(不明)	焼土43	胴部	
	467	1	16-17	[22]	炭	焼土43	胴部	
	300	1	16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部	
	8339	3	16-17	[11]	焼土	焼土43	胴部	
	8340	1	16-17	[11]	焼土	焼土43	胴部	
	8341	1	16-17	[11]	焼土	焼土43	胴部	
	307	2	16-17	[11]	(不明)	焼土43	胴部1, 底部1	
	317	1	16-17	[21]	(不明)	焼土43	胴部	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壺 (つづき)	12	289	1	16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部
		461	1	16-17	[12]	炭	焼土43	胴部
		12542	1	16-17	[23]	IV	焼土43	胴部
		8333	2	16-17	[21]	焼土	焼土43	胴部
		286	2	16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部1, 底部1
		2824	1	17-10	[33]	V	炭化物マウンド	口縁部
		7631	1	19-15	[02]	x ¹	炭化物52	口縁部
		11295	1	17-16	[22]	IV	遺構外	底部
		6045	1	20-16	[02]	III	遺構外	口縁部
24片								
壺	13	5896	1	18-14	[31]	IV	遺構外	口縁部
		8429	6	18-14	[22]	IV	遺構外	口縁部1, 胴部5
		10100	19	18-14	[11]	IV	遺構外	口縁部1, 胴部18
		10352	1	18-14	[22]	IV	遺構外	底部
		10367	1	18-14	[31]	IV	遺構外	胴部
28片								
壺	14	15441	2	08-09	[12]	IV	4号土壌	口縁部
		4845	1	11-11	[21]	焼土	焼土32	口縁部
		4848	1	11-11	[21]	焼土	焼土32	胴部
		4847	1	11-11	[21]	焼土	焼土32	底部
		4652	1	12-08	[02]	IV	遺構外	口縁部
		1631	1	12-08	[02]	b ¹	遺構外	口縁部
		709	1	12-08	[03]	b ¹	遺構外	口縁部
		4638	1	12-08	[02]	IV	遺構外	口縁部
		4787	2	12-08	[02]	IV	遺構外	口縁部
		1474	1	12-08	[12]	b ¹	遺構外	胴部
		4635	1	12-08	[02]	IV	遺構外	胴部
		4636	1	12-08	[02]	IV	遺構外	胴部
		1475	1	12-08	[12]	b ¹	遺構外	底部
		4633	1	12-08	[01]	IV	遺構外	底部
		4631	1	11-08	[32]	IV	遺構外	底部
		4626	1	11-08	[21]	IV	遺構外	胴部
		4679	1	11-10	[32]	IV	遺構外	口縁部
		4217	1	11-10	[32]	IV	遺構外	胴部
20片								
壺	15	10511	1	17-17	[20]	床	2号竪穴住居	底部
		174	2	17-11	[13]	IV	炭化物マウンド	胴部
		3191	1	17-11	[12]	IV	炭化物マウンド	胴部
		3337	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		178	1	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		8578	1	13-13	[30]	IV	焼土34周辺	口縁部
		9136	1	13-11	[33]	V	焼土34周辺	口縁部
		6795	1	19-13	[03]	IV	焼土51	胴部
		4948	1	12-12	[33]	V	遺構外	口縁部
		8583	1	13-13	[31]	IV	遺構外	口縁部
		4949	1	12-12	[33]	V	遺構外	口縁部
		4946	1	12-12	[32]	V	遺構外	口縁部
		4947	1	12-12	[33]	V	遺構外	口縁部
		4908	1	12-13	[21]	V	遺構外	口縁部
		4951	1	12-12	[33]	V	遺構外	口縁部
		10717	1	14-12	[22]	IV	遺構外	口縁部
		8947	4	14-13	[02]	IV	遺構外	口縁部1, 胴部3
		8269	1	13-13	[32]	IV	遺構外	口縁部
		9764	1	14-13	[12]	IV	遺構外	口縁部
		11613	2	13-13	[32]	IV	遺構外	口縁部
		11615	1	14-13	[02]	IV	遺構外	胴部
		8582	1	13-13	[31]	IV	遺構外	胴部
		8952	1	13-12	[03]	IV	遺構外	胴部
		8950	2	13-12	[02]	IV	遺構外	胴部
		10625	1	14-12	[03]	IV	遺構外	胴部
31片								
壺	16	1323	1	11-05	[03]	床	5号竪穴住居	口縁部
		1320	1	10-05	[33]	床	5号竪穴住居	口縁部
		1445	5	10-05	[32]	床	5号竪穴住居	口縁部
		1030	1	10-05	[31]	床	5号竪穴住居	口縁部
		684	3	11-04	[03]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		1542	1	10-05	[10]	燼道	5号竪穴住居	胴部
		1573	1	10-05	[13]	燼道	5号竪穴住居	胴部
		1547	1	10-05	[10]	床	5号竪穴住居	胴部
		1092	1	10-05	[30]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1541	1	10-05	[10]	床	5号竪穴住居	胴部

PL.[2]-127-10

PL.[2]-144

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	大グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL番号
瘡 (つづき)	16	1086	1	10-05	[20]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1543	2	10-05	[10]	煙道	5号竪穴住居	胴部
		1554	6	10-05	[13]	床直	5号竪穴住居	胴部1, 底部5
		25片						
瘡	17	1197	2	10-05	[30]	床	5号竪穴住居	口縁部
		1192	1	10-05	[20]	床	5号竪穴住居	口縁部
		1193	1	10-05	[20]	床	5号竪穴住居	口縁部
		1021	2	10-05	[21]	床	5号竪穴住居	口縁部
		989	1	10-05	[21]	床	5号竪穴住居	口縁部
		935	1	10-04	[33]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		1089	4	10-05	[20]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		942	1	10-05	[30]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		958	1	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		931	4	10-04	[32]	床直	5号竪穴住居	胴部
		937	2	10-04	[33]	床直	5号竪穴住居	胴部
		938	1	10-04	[23]	床直	5号竪穴住居	胴部
		934	1	10-04	[33]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1196	1	10-05	[20]	床	5号竪穴住居	胴部
		1198	2	10-05	[20]	床	5号竪穴住居	胴部
		1194	1	10-05	[20]	床	5号竪穴住居	胴部
		1091	1	10-05	[20]	床直	5号竪穴住居	胴部
		941	1	10-05	[30]	床直	5号竪穴住居	胴部
		833	1	10-05	[30]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1199	1	10-05	[30]	床	5号竪穴住居	胴部
		1215	2	11-05	[00]	床直	5号竪穴住居	胴部
		992	2	10-05	[21]	床	5号竪穴住居	胴部
		1177	1	10-05	[20]	床直	5号竪穴住居	胴部
		815	1	10-04	[23]	床直	5号竪穴住居	胴部
		831	1	10-05	[30]	床直	5号竪穴住居	胴部
		932	1	10-04	[32]	床直	5号竪穴住居	胴部
		988	2	10-05	[20]	床	5号竪穴住居	胴部
		957	1	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1204	7	10-04	[33]	床直	5号竪穴住居	胴部3, 底部4
		954	1	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		974	1	20-21	[01]	IV	遺構外	口縁部
		50片						
瘡	18	3971	1	09-09	[22]	IV	遺構外	口縁部
		3968	8	09-09	[21]	IV	遺構外	口縁部
		3992	4	09-09	[33]	IV	遺構外	口縁部
		3974	1	09-09	[32]	IV	遺構外	口縁部
		4114	1	10-09	[03]	V	遺構外	口縁部
		3978	4	09-09	[32]	IV	遺構外	口縁部
		4013	2	10-09	[02]	IV	遺構外	口縁部
		3976	4	09-09	[32]	IV	遺構外	口縁部
		4111	1	09-09	[32]	V	遺構外	口縁部
		3969	1	09-09	[31]	V	遺構外	口縁部
		3970	1	09-09	[32]	V	遺構外	口縁部
		4027	1	10-09	[03]	IV	遺構外	口縁部
		4110	1	09-09	[32]	V	遺構外	口縁部
		3977	1	09-09	[32]	V	遺構外	口縁部
		3981	4	09-09	[33]	IV	遺構外	胴部
		3983	1	09-09	[33]	IV	遺構外	胴部
		3980	1	09-09	[33]	IV	遺構外	胴部
		3991	1	09-09	[33]	V	遺構外	胴部
		4015	1	10-09	[02]	V	遺構外	胴部
		4014	1	10-09	[02]	V	遺構外	胴部
		4005	1	10-09	[01]	V	遺構外	胴部
		4025	1	10-09	[03]	V	遺構外	胴部
		3986	2	09-09	[33]	IV	遺構外	底部
		4068	1	09-09	[33]	V	遺構外	底部
		4069	1	09-09	[33]	V	遺構外	底部
		3984	2	09-09	[33]	IV	遺構外	底部
		48片						
瘡 (完形品)	19	6621	1	22-16	[02]	IV	焼土64	口縁部
		6618	1	22-16	[11]	IV	焼土64	口縁部
		6812	1	22-16	[22]	IV	焼土64	口縁部
		11272	1	21-16	[22]	IV	遺構外	口縁部
		11273	1	21-16	[22]	IV	遺構外	口縁部
		7495	1	21 16	[33]	IV	遺構外	口縁部
		5916	3	23-17	[13]	IV	遺構外	口縁部
		5652	1	22-17	[32]	IV	遺構外	口縁部

PL[2]-130-1

PL[2]-145

PL[2]-262-6

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
壙 (つづき)	19	5922	2	22-17	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部	
	6661	1	22-13	[12]	V	遺構外	口縁部		
	5945	1	23-16	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	5944	1	22-16	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	5920	5	22-17	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部1, 胴部4		
	6591	2	22-16	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	6627	1	22-16	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	6814	1	22-16	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	6597	9	23-16	[03]	Ⅳ	遺構外	底部		
	11274	2	21-16	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	5646	1	22-17	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	93	1	22-17	[32]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	6592	1	22-16	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	6589	1	22-16	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	6811	1	22-16	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	5921	1	22-17	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	92	3	22-17	[32]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	5647	1	22-17	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	5648	1	22-17	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	6581	1	22-16	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部		
(完形品) 47片									
壙	20	9869	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	PL.[2]-207-3
	9418	4	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部2, 胴部2	PL.[2]-24	
	9651	3	17-11	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部		
	2904	1	18-10	[02]	b'	炭化物マウンド	口縁部		
	9423	1	17-11	[13]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部		
	10279	5	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部		
	2643	1	18-10	[02]	b'	炭化物マウンド	胴部		
	2767	1	18-10	[02]	b'	炭化物マウンド	胴部		
	2067	1	18-10	[03]	b'	炭化物マウンド	胴部		
	9641	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9653	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	8697	3	17-11	[22]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9278	1	17-11	[13]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部		
	2311	1	18-10	[02]	b'	炭化物マウンド	胴部		
	7375	1	17-12	[20]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部		
	2069	1	18-10	[03]	b'	炭化物マウンド	胴部		
	2756	1	18-10	[01]	b'	炭化物マウンド	胴部		
	3488	2	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部		
	2742	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	胴部		
	10668	2	17-11	[20]	マウンド	炭化物マウンド	底部		
	7935	1	19-15	[33]	x'	炭化物52	口縁部		
	9094	1	19-15	[33]	x'	炭化物52	口縁部		
	7933	1	19-15	[33]	x'	炭化物52	口縁部		
	7651	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	口縁部		
	7442	1	19-15	[33]	x'	炭化物52	胴部		
	9070	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	胴部		
	11377	1	20-15	[13]	x'	炭化物52	胴部		
	9093	1	19-15	[33]	x'	炭化物52	胴部		
	9088	3	19-16	[30]	x'	炭化物52	底部		
	9091	3	19-15	[33]	x'	炭化物52	胴部		
	5812	2	19-16	[30]	Ⅲ	炭化物52	胴部		
	6052	3	19-16	[03]	Ⅲ	炭化物53	胴部		
	11109	1	15-12	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部		
(完形品) 53片									
壙	21	8927	1	19-18	[01]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	PL.[2]-39-1
	11827	1	16-17	[02]	土壌内	3号土壌	口縁部	PL.[2]-240	
	12552	1	16-17	[22]	Ⅳ	焼土43	口縁部		
	12589	1	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	12653	1	16-17	[22]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	502	1	16-17	[13]	炭	焼土43	口縁部		
	12587	4	16-17	[22]	Ⅳ	焼土43	口縁部		
	12586	13	16-17	[22]	Ⅳ	焼土43	口縁部		
	12505	1	16-17	[12]	焼土	焼土43	胴部		
	12518	2	16-17	[22]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	12651	4	16-17	[22]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	485	1	16-17	[32]	b' 上	焼土43	胴部		
	12547	9	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	12661	1	16-17	[13]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	12596	3	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	12655	2	16-17	[12]	Ⅳ	焼土43	胴部		

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壙 (つづき)	23	3453	1	17-11	[32]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		3477	4	17-11	[10]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		9380	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		3421	1	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		6562	2	18-10	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9428	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		6567	1	18-10	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9873	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9872	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		1993	1	18-10	[10]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		9867	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		7368	1	17-12	[12]	IV	炭化物マウンド	胴部
		1995	1	18-10	[10]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		10488	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9251	1	17-11	[12]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		10482	1	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		10260	2	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		2301	1	18-10	[01]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2803	1	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2634	1	18-10	[01]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2909	1	18-10	[01]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		9291	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		185	3	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9381	1	17-11	[03]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9315	1	17-11	[03]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		10044	1	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		3368	1	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		2759	1	18-10	[02]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		3465	1	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		3448	1	17-11	[31]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		3450	1	17-11	[32]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		3438	1	17-11	[23]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		9866	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		2289	1	17-10	[32]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2395	1	17-10	[20]	b ¹ 上	炭化物マウンド	胴部
		6564	1	18-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		69片(口縁部2片, 胴部1片 番号わからず)						
壙	24	947	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	口縁部
		826	1	10-05	[20]	覆土⑤層	5号竪穴住居	口縁部
		983	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	口縁部
		1351	1	10-06	[20]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		1029	1	10-05	[21]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1210	1	10-05	[32]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1500	2	10-05	[11]	床	5号竪穴住居	胴部
		1503	2	10-05	[10]	煙道	5号竪穴住居	胴部
		1026	1	10-05	[21]	床直	5号竪穴住居	胴部
		1212	1	10-05	[32]	床直	5号竪穴住居	胴部
		949	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	胴部
		985	2	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	胴部
		991	1	10-05	[21]	床	5号竪穴住居	胴部
		951	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	胴部
		748	1	10-05	[30]	覆土⑤層	5号竪穴住居	胴部
		1178	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	胴部
		945	1	10-05	[20]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		953	1	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居	口縁部
		742	1	11-04	[11]	覆土⑤層	5号竪穴住居	口縁部
		2218	1	10-05	[00]	覆土⑤層	5号竪穴住居	口縁部
		743	1	10-04	[23]	炭	1号土壇周辺の焼土・炭化物	胴部
		617	1	10-04	[23]	炭	1号土壇周辺の焼土・炭化物	胴部
		744	1	10-04	[23]	炭	1号土壇周辺の焼土・炭化物	胴部
		810	1	10-04	[22]	炭	1号土壇周辺の焼土・炭化物	胴部
		691	1	10-04	[23]	炭	1号土壇周辺の焼土・炭化物	胴部
		746	1	10-04	[23]	炭	1号土壇周辺の焼土・炭化物	胴部
		14046	1	09-07	[01]	炭	6号土壇	口縁部
		14352	1	08-07	[32]	土壇内	6号土壇	口縁部
		14353	1	08-07	[32]	土壇内	6号土壇	口縁部
		14107	2	08-07	[32]	炭	6号土壇	口縁部
		15513	1	08-07	[32]	土壇床面	6号土壇	胴部
		15096	1	09-07	[02]	土壇内	6号土壇	胴部
		15098	1	08-07	[32]	土壇床面	6号土壇	胴部
		13972	1	08-07	[31]	土壇内	6号土壇	口縁部

PL.②-130-3

PL.②-147

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
壙 (つづき)	24	13959	1	08-07	[21]	Ⅳ	6号土壌周辺	口縁部	
	3873	1	09-07	[01]	V	6号土壌周辺	口縁部		
	3752	1	09-07	[03]	Ⅳ	6号土壌周辺	胴部		
	3753	2	09-07	[03]	Ⅳ	6号土壌周辺	胴部		
	3748	1	09-07	[03]	Ⅳ	6号土壌周辺	胴部		
	15514	1	09-07	[02]	焼土	6号土壌周辺	胴部		
	3169	1	09-07	[12]	V	6号土壌周辺	胴部		
	3170	1	09-07	[22]	V	6号土壌周辺	胴部		
	12872	1	08-07	[21]	Ⅳ	6号土壌周辺	胴部		
	12782	2	08-07	[22]	Ⅳ	6号土壌周辺	胴部		
	13958	1	08-07	[21]	Ⅳ	5号土壌周辺	口縁		
	13957	1	08-07	[21]	Ⅳ	5号土壌周辺	口縁		
	3212	1	17-11	[22]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部		
	1852	1	18-10	[01]	カクラン	炭化物マウンド	底部		
	1181	1	11-04	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	1536	1	10-05	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1179	1	11-04	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1294	1	10-05	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	3127	1	09-06	[21]	V	遺構外	胴部		
	5191	1	09-06	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	16113	1	06-08	[01]	V	遺構外	胴部		
	61片(口縁部2片番号わからず)								
壙	25	5339	3	13-09	[31]	Ⅳ	炭化物36	胴部	PL.2-263-1
	11	1	15-07	[23]	(不明)	炭化物39	胴部		
	5271	1	15-07	[13]	(不明)	炭化物39	胴部		
	1222	1	12-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1223	1	12-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1224	1	12-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1221	1	12-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1225	2	12-08	[31]	Ⅳ	遺構外	底部		
	1226	1	12-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1636	1	12-08	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	4570	3	14-08	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4571	6	14-08	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4572	1	14-08	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4725	1	14-07	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4564	1	14-07	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	1339	1	13-08	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	10	1	15-08	[31]	(不明)	遺構外	口縁部		
	9	1	15-08	[21]	(不明)	遺構外	口縁部		
	4576	1	14-08	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4575	1	14-08	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4577	1	14-08	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4562	1	14-08	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4561	2	14-08	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	1640	1	13-08	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4579	1	14-09	[00]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4729	1	13-08	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	6	1	15-08	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	4574	1	14-08	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部		
	1234	1	13-08	[10]	カクラン	遺構外	胴部		
	4	1	15-08	[00]	(不明)	遺構外	胴部		
	5	2	15-08	[10]	(不明)	遺構外	胴部		
	722	1	15-07	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	12	1	16-08	[11]	(不明)	遺構外	胴部		
	1232	1	13-08	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1338	1	13-08	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1639	2	13-08	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	4568	1	14-08	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	4569	1	14-08	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4567	2	14-08	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4595	1	14-09	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	1239	1	13-08	[11]	カクラン	遺構外	口縁部		
	1484	1	13-08	[12]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	1341	1	13-08	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	1405	1	13-08	[11]	カクラン	遺構外	口縁部		
	4555	2	14-08	[00]	Ⅲ	遺構外	口縁部		
	4566	7	14-08	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	4556	1	14-08	[00]	Ⅲ	遺構外	口縁部		
	1342	1	13-08	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	5149	1	18-07	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部		

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
瘠 (つづき)	25	5479	1	17-06	[33]	IV	遺構外	口縁部
		5018	1	15-06	[13]	IV	遺構外	口縁部
		5158	1	16-07	[00]	IV	遺構外	口縁部
		5151	1	17-07	[30]	IV	遺構外	口縁部
		5473	1	17-06	[32]	IV	遺構外	口縁部
		5336	1	14-07	[03]	IV	遺構外	底部
		76片(底部1片番号わからず)						
瘠	26	83	1	19-15	[32]	(不明)	炭化物52	胴部
		4501	11	20-16	[33]	IV	炭化物52周辺	口縁部5, 胴部6
		11461	1	20-16	[21]	IV	炭化物52周辺	口縁部
		12470	1	20-17	[30]	IV	炭化物52周辺	口縁部
		5687	1	20-16	[33]	IV	炭化物52周辺	口縁部
		6013	1	20-16	[13]	III	炭化物52周辺	底部
		9458	2	20-16	[22]	IV	炭化物52周辺	胴部
		5688	1	20-16	[32]	III	炭化物52周辺	胴部
		9591	1	20-16	[31]	III	炭化物52周辺	胴部
		7604	1	20-16	[22]	III	炭化物52周辺	胴部
		213	6	20-16	[33]	(不明)	炭化物52周辺	胴部
		11475	2	20-16	[32]	IV	炭化物52周辺	胴部
		11464	1	20-16	[22]	IV	炭化物52周辺	胴部
		210	2	20-16	[32]	(不明)	炭化物52周辺	胴部
		201	1	20-15	[32]	(不明)	炭化物52周辺	胴部
		209	1	20-16	[32]	(不明)	炭化物52周辺	胴部
		211	1	20-16	[32]	(不明)	炭化物52周辺	胴部
		5686	1	20-16	[33]	IV	炭化物52周辺	胴部
		12670	1	21-15	[33]	IV	炭化物52周辺	底部
		11483	6	20-16	[33]	IV	炭化物52周辺	胴部3, 底部3
		11476	1	20-16	[32]	IV	炭化物52周辺	胴部
		6014	1	20-16	[23]	III	炭化物52周辺	胴部
		11479	1	20-16	[33]	IV	炭化物52周辺	底部
		46片(胴部5片番号わからず)						
瘠 (完形品)	27	650	1	19-14	[20]	床直	1号竪穴住居	口縁部
		574	1	19-14	[21]	床直	1号竪穴住居	口縁部
		575	1	19-14	[21]	床直	1号竪穴住居	口縁部
		577	1	19-14	[31]	床直	1号竪穴住居	口縁部
		578	1	19-14	[31]	床直	1号竪穴住居	胴部
		579	1	19-14	[31]	床直	1号竪穴住居	胴部
		581	2	19-14	[31]	床直	1号竪穴住居	胴部1, 底部1
		678	1	19-14	[10]	床直	1号竪穴住居	胴部
		735	1	19-14	[11]	カマド	1号竪穴住居カマド左袖	胴部
		736	1	19-14	[12]	カマド	1号竪穴住居カマド右袖	口縁部
		11828	1	16-17	[02]	土壌内	3号土壌	胴部
		16561	1	18-13	(不明)	焼土	焼土48	胴部
		7067	2	18-13	[30]	IV	焼土47・48周辺	口縁部
		11645	1	18-12	[33]	IV	焼土47・48周辺	口縁部
		12394	5	19-13	[10]	IV	焼土47・48周辺	口縁部2, 胴部3
		10215	8	19-13	[10]	IV	焼土47・48周辺	口縁部7, 胴部1
		6797	1	19-13	[10]	IV	焼土47・48周辺	口縁部
		10209	3	18-13	[33]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		6726	1	19-12	[22]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		12044	1	19-12	[03]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		10216	1	19-13	[10]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		6725	1	19-12	[13]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		6844	1	18-13	[31]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		6841	1	18-13	[30]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		12393	1	19-13	[00]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		10159	2	18-13	[20]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		6650	1	19-12	[03]	IV	焼土47・48周辺	胴部
		10160	1	18-14	[20]	IV	焼土51	胴部
		10165	3	18-14	[21]	IV	遺構外	胴部
		10379	1	19-13	[20]	IV	遺構外	胴部
		10214	3	19-13	[10]	IV	遺構外	胴部
		51片						
瘠	28	9913	1	17-16	[32]	床	2号竪穴住居	胴部
		6855	5	17-12	[01]	IV	炭化物マウンド	口縁部3, 胴部2
		3203	3	17-11	[32]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		7159	3	17-12	[21]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		171	5	17-11	[02]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部
		183	10	17-12	[00]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部
		3341	1	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		8368	3	17-12	[00]	IV	炭化物マウンド	口縁部

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
瘡 (つづき)	29	3460	1	17-11	[33]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		8672	1	17-11	[21]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部
		8608	1	18-10	[03]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部
		7034	1	17-12	[21]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		8763	1	17-12	[10]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部
		3390	2	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		8664	1	17-11	[21]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部
		3418	2	17-11	[22]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		8715	1	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部
		10011	1	17-11	[21]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部
		10069	1	17-11	[21]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部
		10194	1	17-13	[21]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		7166	1	17-12	[30]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		3537	1	16-11	[33]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		7152	1	17-12	[20]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		7042	1	17-12	[30]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		9628	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		7122	3	17-12	[01]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		3508	3	17-12	[00]	IV	炭化物マウンド	胴部
		6994	1	17-12	[01]	IV	炭化物マウンド	胴部
		6855	1	17-12	[01]	IV	炭化物マウンド	胴部
		8355	1	16-12	[31]	IV	炭化物マウンド	胴部
		7135	1	17-12	[10]	IV	炭化物マウンド	胴部
		7545	12	17-12	[21]	IV	炭化物マウンド	胴部
		7037	1	17-12	[21]	IV	炭化物マウンド	胴部
		1986	1	18-10	[00]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		10014	1	17-11	[21]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		7339	1	17-12	[10]	IV	炭化物マウンド	胴部
		10020	1	17-11	[22]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		2988	2	18-09	[03]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		3180	3	18-11	[03]	IV	炭化物マウンド	胴部
		2483	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2479	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2403	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2476	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2977	1	18-10	[00]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2494	1	17-10	[31]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		3380	1	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		3381	2	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		7381	1	17-12	[20]	IV	炭化物マウンド	胴部
		8496	1	16-11	[11]	IV	炭化物マウンド	胴部
		8782	1	17-12	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		3376	1	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		7029	1	17-12	[20]	IV	炭化物マウンド	胴部
		7801	1	17-12	[30]	IV	炭化物マウンド	胴部
		2032	1	18-10	[10]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2395	2	17-10	[20]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2402	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	底部
		2487	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		3392	1	17-11	[21]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		8588	1	16-17	[22]	Ⅲ	焼土43	口縁部
		8585	1	16-17	[31]	Ⅲ	焼土43	口縁部
		12599	1	16-17	[13]	IV	焼土43	胴部
		388	1	16-17	[30]	(不明)	焼土43	口縁部
		12668	1	16-17	[13]	IV	焼土43	胴部
		12665	1	16-17	[13]	IV	焼土43	胴部
		12290	1	16-17	[31]	煙道に落込	焼土43	胴部
		12499	1	16-17	[31]	煙道に落込	焼土43	胴部
		9079	3	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	胴部
		12174	1	15-12	[22]	IV	遺構外	口縁部
109片(口縁部3片番号わからず)								
瘡	30	1802	3	17-17	[11]	床直	2号竪穴住居	口縁部 PL.[2]-38-2
		10517	1	17-16	[23]	床	2号竪穴住居	口縁部 PL.[2]-57
		11013	1	17-18	[01]	床	2号竪穴住居	口縁部
		7515	1	13-15	[10]	IV	焼土37	胴部
		12298	1	16-17	[12]	焼土	焼土43	口縁部
		9999	1	16-17	[12]	焼土	焼土43	胴部
		5785	2	19-15	[23]	Ⅲ	炭化物52	口縁部
		11369	1	20-15	[10]	x ¹	炭化物52	口縁部
		5775	2	19-15	[33]	Ⅲ	炭化物52	口縁部
		11079	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
壙 (つづき)	30	9462	1	20-16	[23]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部	
		11465	1	20-16	[23]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部	
		7606	1	20-16	[22]	Ⅲ	炭化物52周辺	口縁部	
		6640	1	18-10	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		9882	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		2458	1	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部	
		9434	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		9279	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		10294	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		2438	1	17-10	[31]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部	
		9204	1	17-11	[02]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		10585	1	17-11	[32]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		9447	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		9212	1	17-11	[03]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部	
		9218	1	17-12	[00]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部	
		9667	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		9685	1	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		10017	1	17-11	[21]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
		186	1	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	胴部	
		7105	1	17-12	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部	
		3468	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		3529	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		187	2	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	胴部	
		3371	1	17-11	[20]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		8657	1	17-11	[20]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
		2444	3	17-10	[32]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		2399	2	17-10	[20]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		2436	1	17-10	[31]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		10962	1	17-10	[33]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		2889	1	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		2911	1	18-10	[02]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		2296	1	18-10	[00]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		2763	1	18-10	[02]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		9663	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		2055	1	18-10	[00]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		2056	1	18-10	[00]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		3443	1	17-11	[30]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		9892	1	17-12	[12]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		9893	1	17-12	[12]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		9625	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		9624	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		9620	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		7324	1	17-12	[01]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部	
		9672	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		9493	1	17-12	[12]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
		189	2	17-12	[11]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部	
		3264	1	17-11	[23]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部	
		8642	2	17-11	[12]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
		10060	1	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
		3253	1	17-11	[23]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部	
		3511	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		3515	3	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		3199	1	17-11	[23]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部	
		8731	1	17-11	[31]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
		3513	1	17-12	[00]	マウンド上	炭化物マウンド	底部	
		9443	2	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	底部	
		3512	1	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	底部	
80片(胴部4片番号わからず)									
壙	31	11302	1	17-16	[33]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部	PL. [2]-41-1 PL. [2]-58
		10837	1	17-17	[02]	床直	2号竪穴住居	口縁部	
		1888	1	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	胴部	
		11844	1	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	胴部	
		10119	1	17-17	[03]	床直	2号竪穴住居	胴部	
		11826	1	15-17	[32]	土壌内	3号土壌	胴部	
		370	2	16-17	[32]	(不明)	焼土43	口縁部	
		11199	1	16-17	[22]	焼土	焼土43	胴部	
		9716	1	16-17	[22]	Ⅳ	焼土43	胴部	
		9087	2	19-16	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		9599	1	20-16	[21]	Ⅲ	炭化物52周辺	胴部	
		9597	1	20-16	[21]	Ⅲ	炭化物52周辺	胴部	
		11389	1	20-15	[33]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部	

個体番号	遺物番号破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号				
壙 (つづき)	31	7605	1	20-16	[22]	Ⅲ	炭化物52周辺	底部			
		9590	1	20-16	[20]	Ⅲ	炭化物52周辺	底部			
		11458	1	20-16	[20]	Ⅳ	炭化物52周辺	底部			
		2084	1	18-09	[03]	b'	炭化物マウンド	口縁部			
		2491	1	17-10	[22]	b'	炭化物マウンド	口縁部			
		2907	1	18-10	[01]	b'	炭化物マウンド	口縁部			
		6605	1	18-10	[21]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部			
		10441	1	17-11	[20]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部			
		2490	1	17-10	[22]	b'	炭化物マウンド	口縁部			
		2990	1	18-09	[03]	b'	炭化物マウンド	口縁部			
		1919	1	17-10	[31]	カクラン	炭化物マウンド	口縁部			
		2828	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	口縁部			
		2975	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	口縁部			
		10960	1	17-11	[30]	マウンド	炭化物マウンド	胴部			
		9238	1	17-11	[10]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部			
		1927	1	17-10	[13]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		6606	2	18-10	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部			
		2250	1	17-10	[13]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		10967	1	17-10	[23]	マウンド	炭化物マウンド	胴部			
		9237	1	17-11	[10]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部			
		9240	1	17-11	[10]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部			
		2300	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		9248	1	17-11	[12]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部			
		8629	1	17-11	[10]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部			
		8625	1	17-11	[03]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部			
		2895	1	17-10	[31]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		2744	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		2650	1	18-10	[10]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		2631	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		2747	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		10463	1	17-11	[22]	マウンド下	炭化物マウンド	胴部			
		10459	1	17-11	[22]	マウンド	炭化物マウンド	胴部			
		10963	1	17-10	[33]	マウンド	炭化物マウンド	胴部			
		2745	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	胴部			
		1867	1	18-10	[12]	カクラン	炭化物マウンド	胴部			
		1866	1	18-10	[01]	カクラン	炭化物マウンド	胴部			
		6607	1	18-10	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部			
		9430	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	底部			
		5888	1	14-14	[22]	Ⅲ	遺構外	口縁部			
		7748	1	14-15	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		7507	1	14-15	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		1155	6	13-14	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部4, 胴部2			
		5883	2	14-14	[02]	Ⅲ	遺構外	口縁部			
		5882	1	14-14	[02]	Ⅲ	遺構外	口縁部			
		160	1	13-14	[31]	(不明)	遺構外	胴部			
		67片(胴部2片番号わからず)									
		壙	32	554	1	17-17	[11]	床	2号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-35-1
				555	6	17-17	[11]	床	2号竪穴住居	口縁部1, 胴部5	PL.[2]-59
				396	1	17-17	[22]	(不明)	2号竪穴住居	胴部	
				12516	1	16-17	[22]	焼土	焼土43	口縁部	
				475	5	16-17	[22]	b' 上	焼土43	胴部	
				471	1	16-17	[22]	b' 上	焼土43	胴部	
				476	1	16-17	[22]	b' 上	焼土43	胴部	
12549	1			16-17	[23]	Ⅳ	焼土43	胴部			
8347	1			16-17	[12]	焼土	焼土43	胴部			
474	1			16-17	[22]	b' 上	焼土43	胴部			
375	1			16-17	[32]	(不明)	焼土43	胴部			
363	1			16-17	[22]	(不明)	焼土43	胴部			
365	1			16-17	[32]	(不明)	焼土43	胴部			
8480	1			16-17	[22]	(不明)	焼土43	胴部			
12514	1			16-17	[22]	焼土	焼土43	胴部			
511	1			16-17	[23]	b' 上	焼土43	胴部			
374	1			16-17	[32]	(不明)	焼土43	胴部			
8586	2			16-17	[32]	Ⅲ	焼土43	胴部			
12519	2			16-17	[32]	焼土	焼土43	胴部			
8481	1			16-17	[22]	焼土	焼土43	胴部			
8476	1			16-17	[22]	焼土	焼土43	胴部			
373	1			16-17	[32]	(不明)	焼土43	胴部			
367	1			16-17	[32]	(不明)	焼土43	胴部			
515	1			16-17	[23]	b' 上	焼土43	胴部			
477	1			16-17	[22]	b' 上	焼土43	胴部			

個体番号	破片番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号				
壺 (つづき)	32	7099	1	20-15	[02]	焼土上面	炭化物52	胴部				
		9002	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		11047	8	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		11046	5	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9045	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7243	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9042	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9038	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9017	7	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9041	4	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9019	4	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9018	4	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9023	3	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		11050	2	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		11321	1	19-15	[12]	x ²	炭化物52	胴部				
		2820	1	17-10	[32]	b ¹	炭化物マウンド	胴部				
		10937	1	21-17	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		4732	1	13-08	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		4581	1	14-09	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		4529	1	13-09	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		85片(底部1片番号ナシ)										
		壺	33	565	2	17-17	[23]	覆土④層		2号竪穴住居	胴部	PL.[2]-37-2 PL.[2]-60
				549	1	17-17	[21]	覆土④層		2号竪穴住居	胴部	
397	1			17-17	[22]	(不明)	2号竪穴住居	胴部				
545	1			17-17	[31]	(不明)	2号竪穴住居	胴部				
396	1			17-17	[12]	(不明)	2号竪穴住居	底部				
559	1			17-17	[22]	覆土④層	2号竪穴住居	底部				
9482	22			16-17	[30]	焼土	焼土43	口縁部11, 胴部10, 底部1				
123	2			16-17	[30]	(不明)	焼土43	口縁部1, 胴部1				
124	4			16-17	[30]	(不明)	焼土43	口縁部2, 胴部2				
385	2			16-17	[30]	(不明)	焼土43	胴部				
9481	1			16-17	[20]	焼土	焼土43	胴部				
125	15			16-17	[30]	(不明)	焼土43	胴部				
273	1			16-16	[33]	(不明)	焼土43	胴部				
8322	1			16-17	[31]	焼土	焼土43	胴部				
384	2			16-17	[30]	(不明)	焼土43	胴部				
8307	1			16-17	[20]	焼土	焼土43	胴部				
378	1			16-17	[31]	(不明)	焼土43周辺	胴部				
1687	1			17-16	[03]	カクラン	焼土43周辺	胴部				
8594	1			16-15	[23]	Ⅲ	焼土43周辺	胴部				
57	1			16-18	[30]	(不明)	焼土43周辺	胴部				
113	1			16-17	[20]	(不明)	焼土43周辺	胴部				
296	2			16-17	[20]	(不明)	焼土43周辺	胴部				
11146	1			15-17	[31]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部				
390	1			16-17	[30]	(不明)	焼土43周辺	胴部				
350	1			16-17	[22]	(不明)	焼土43周辺	胴部				
68片												
壺	34			1900	1	17-16	[32]	床直	2号竪穴住居	胴部	PL.[2]-37-1 PL.[2]-61	
				11012	1	16-18	[31]	床直	2号竪穴住居	胴部		
				11836	1	17-16	[32]	床直	2号竪穴住居	胴部		
				524	1	17-16	[32]	床直	2号竪穴住居	胴部		
				1841	1	18-17	[20]	床直	2号竪穴住居	胴部		
				10873	1	19-17	[01]	床直	2号竪穴住居	胴部		
				1692	1	17-17	[01]	Ⅳ	2号竪穴住居	胴部		
		120	3	16-17	[23]	(不明)	焼土43	胴部				
		11563	1	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部				
		8212	8	15-17	[22]	Ⅲ	焼土43	胴部				
		11665	3	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部				
		11564	2	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部				
		11682	1	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部				
		12540	2	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43	胴部				
		12536	1	16-17	[13]	Ⅳ	焼土43	胴部				
		1060	1	13-14	[01]	Ⅳ	焼土34周辺	胴部				
		6719	1	19-12	[11]	Ⅳ	焼土47周辺	胴部				
		7412	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部				
		5735	1	19-15	[12]	Ⅲ	炭化物52	口縁部				
		5745	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部				
		5790	1	19-15	[23]	Ⅲ	炭化物52	口縁部				
		11070	3	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	口縁部				
		7248	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部				
11060	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部						

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL・番号				
壙 (つづき)	34	7425	2	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部				
		7458	3	19-15	[31]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7456	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7683	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7417	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		11890	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7239	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	胴部				
		85	1	19-15	[22]	(不明)	炭化物52	胴部				
		5749	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部				
		7460	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部				
		5755	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部				
		5754	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部				
		7238	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7640	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部				
		11049	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9015	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7692	2	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7815	1	18-11	[02]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部				
		1689	1	17-16	[03]	カクラン	遺構外	胴部				
		1716	1	14-09	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		11963	1	17-15	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		5667	1	22-14	[13]	Ⅲ	遺構外	胴部				
		61	3	17-15	[32]	(不明)	遺構外	胴部				
		11301	1	17-16	[32]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		12524	1	16-18	[12]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		11785	1	18-15	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		71片(胴部4片番号わからず)										
		壙	35	1793	7	18-18	[00]	覆土④層		2号竪穴住居	口縁部	PL[2]-62
				1798	1	18-18	[01]	覆土④層		2号竪穴住居	胴部	
				8537	1	17-18	[12]	覆土④層		2号竪穴住居	胴部	
				542	2	17-17	[30]	覆土④層		2号竪穴住居	胴部	
				118	8	16-17	[21]	(不明)		焼土43	胴部	
				117	4	16-17	[21]	(不明)		焼土43	胴部	
				115	1	16-17	[20]	(不明)		焼土43	胴部	
127	1			16-17	[30]	(不明)	焼土43	胴部				
139	1			16-17	[32]	カクラン	焼土43	胴部				
1693	1			16-17	[31]	Ⅳ	焼土43	胴部				
8321	1			16-17	[31]	焼土	焼土43	胴部				
8309	1			16-17	[20]	焼土	焼土43	胴部				
283	1			16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部				
8332	1			15-17	[20]	Ⅲ	焼土43	胴部				
1690	2			17-17	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部				
1629	1			12-08	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部				
8294	1			16-16	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部				
8225	2			15-17	[10]	Ⅲ	遺構外	胴部				
37片(底部1片番号ナシ・胴部2片番号わからず)												
壙	36			630	1	13-16	[10]	Ⅳ	焼土35・37	口縁部	PL[2]-201下	
				12657	2	16-17	[13]	Ⅳ	焼土43	口縁部	PL[2]-209-1	
				7443	1	19-15	[33]	x ¹	炭化物52	口縁部	PL[2]-63	
		7902	1	19-15	[03]	x ¹	炭化物52	口縁部				
		11737	1	19-15	[03]	Ⅳ	炭化物52	口縁部				
		9037	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部				
		9095	4	19-15	[33]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9092	1	19-15	[33]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7934	3	19-15	[33]	x ¹	炭化物52	胴部				
		9078	2	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	胴部				
		7632	1	19-15	[02]	x ¹	炭化物52	胴部				
		5778	2	19-15	[33]	Ⅲ	炭化物52	胴部				
		10248	1	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部				
		9424	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部				
		10258	1	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部				
		10041	1	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部				
		9273	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部				
		10042	2	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	口縁部				
		3198	1	17-11	[23]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部				
		3220	1	17-11	[23]	Ⅳ	炭化物マウンド	口縁部				
		10257	1	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部				
		10290	6	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部				
		9859	2	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部				
		10016	1	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部				

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
壙 (つづき)	36	9420	1	17-11	[13]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
	10244	2	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	10056	1	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	10029	1	17-11	[22]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部		
	2772	1	18-10	[02]	b ¹	炭化物マウンド	胴部		
	2757	1	18-10	[01]	b ¹	炭化物マウンド	胴部		
	9863	9	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9655	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9354	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9379	2	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9864	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9427	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	10331	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9865	3	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9371	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	10040	1	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部		
	10277	2	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	10330	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	10267	1	17-11	[23]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	10043	1	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部		
	9333	2	17-11	[12]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
	9652	2	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	底部		
	9462	14	20-16	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	6012	1	20-16	[13]	Ⅲ	遺構外	口縁部		
	91片(口縁部4片, 胴部2片 番号わからず)								
壙	37	12157	13	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部4, 胴部9	PL.[2]-34-1
	1778	1	18-17	[20]	床直	2号竪穴住居	口縁部		PL.[2]-64
	12248	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部		
	12249	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部		
	12060	2	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部		
	1829	1	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	11001	1	17-16	[33]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	11002	1	17-16	[33]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	10505	1	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	1740	1	17-16	[33]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	1891	1	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	9916	1	17-16	[33]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	12085	1	17-17	[11]	カマド	2号竪穴住居	胴部		
	12070	1	18-16	[23]	床	2号竪穴住居	胴部		
	12071	1	18-16	[23]	床	2号竪穴住居	胴部		
	16584	1	17-17	[不明]	カマド	2号竪穴住居	胴部		
	8892	1	18-16	[13]	床直	2号竪穴住居	口縁部		
	16590	1	17-16	[不明]	床直	2号竪穴住居	胴部		
	510	1	16-17	[23]	b ¹ 上	焼土43	胴部		
	5852	1	15-17	[31]	Ⅲ	焼土43	胴部		
	514	1	16-17	[23]	b ¹ 上	焼土43	胴部		
	11152	1	15-17	[21]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	11194	1	15-17	[31]	Ⅳ	焼土43	胴部		
	11683	1	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部		
	5760	2	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部		
	7461	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	口縁部		
	7454	2	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	口縁部		
	5759	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部		
	7450	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	口縁部		
	9083	1	19-16	[20]	x ¹	炭化物52	胴部		
	9090	1	19-15	[33]	x ¹	炭化物52	胴部		
	5719	1	19-15	[21]	Ⅲ	炭化物52	胴部		
	6018	1	20-16	[00]	Ⅲ	炭化物52	胴部		
	7584	1	20-16	[10]	Ⅲ	炭化物52	胴部		
	16560	1	26-17	[不明]	炭化物層	炭化物・焼土70	胴部		
	9811	1	17-13	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	10357	1	18-14	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	5822	1	19-16	[10]	Ⅲ	遺構外	口縁部		
	11959	1	18-15	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	8977	1	15-14	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	11488	1	18-15	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	7707	1	15-15	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	11865	1	18-15	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	5827	1	18-15	[12]	Ⅲ	遺構外	口縁部		
	7728	1	15-15	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	9385	1	17-13	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部		

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壙 (つづき)	37	10193	1	17-13	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		10723	1	14-12	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部
	63片(口縁部1片, 胴部11片番号わからず)							
壙	38	12065	2	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部 PL.[2]-36-1
		11837	1	17-16	[32]	床	2号竪穴住居	口縁部 PL.[2]-65
		12231	1	17-17	[11]	カマド	2号竪穴住居	口縁部
		10836	6	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部2, 胴部4
		12158	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部
		1755	1	18-16	[02]	床直	2号竪穴住居	胴部
		1749	1	17-17	[30]	床直	2号竪穴住居	胴部
		1830	1	17-17	[20]	床直	2号竪穴住居	胴部
		1748	1	17-17	[20]	床直	2号竪穴住居	胴部
		12084	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		16529	1	17-17	[不明]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		12246	2	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		1912	1	18-17	[13]	床直	2号竪穴住居	胴部
		11020	1	18-17	[33]	床直	2号竪穴住居	胴部
		1754	1	18-16	[02]	床直	2号竪穴住居	胴部
		12067	1	18-17	[33]	床直	2号竪穴住居	胴部
		11841	1	18-16	[03]	床直	2号竪穴住居	胴部
		12277	1	15-16	[20]	Ⅳ	焼土41周辺	胴部
		334	1	16-17	[02]	(不明)	焼土43	胴部
		282	1	16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部
		329	1	16-17	[02]	(不明)	焼土43	胴部
		8282	1	16-16	[00]	Ⅳ	焼土43	胴部
		9704	1	16-17	[21]	焼土上	焼土43	胴部
		10504	1	16-16	[33]	焼土	焼土43	胴部
		11033	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部
		7460	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部
		7241	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	胴部
		5740	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		82	1	19-15	[32]	(不明)	炭化物52	胴部
		72	1	19-15	[23]	(不明)	炭化物52	胴部
		7612	1	19-15	[01]	x ¹	炭化物52	胴部
		7613	1	19-15	[01]	x ¹	炭化物52	胴部
		5715	1	19-15	[20]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		9039	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部
		83	2	19-15	[32]	(不明)	炭化物52	胴部
		8851	1	19-15	[00]	x ¹	炭化物52	胴部
		9027	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部
		5762	3	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		5792	1	19-15	[23]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		5742	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		5748	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		3449	1	17-11	[32]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		3454	1	17-11	[32]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部
		10876	1	19-17	[03]	b ²	遺構外	胴部
		7608	1	19-17	[不明]	カクラン	遺構外	胴部
		8061	1	13-14	[22]	Ⅲ	遺構外	胴部
		6025	1	20-16	[10]	Ⅲ	遺構外	口縁部
		7596	1	20-16	[11]	Ⅲ	遺構外	口縁部
		6017	1	20-16	[00]	Ⅲ	遺構外	口縁部
	59片(胴部3片番号わからず)							
壙	39	605	2	11-06	[20]	床	5号竪穴住居	胴部 PL.[2]-128-1
		13547	1	10-10	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部 PL.[2]-148
		13548	4	10-10	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部1, 胴部3
		13540	4	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		13542	6	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部1, 胴部5
		4056	1	10-10	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4057	1	10-10	[20]	V	遺構外	口縁部
		13554	1	10-10	[12]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4019	1	10-09	[12]	V	遺構外	胴部
		4061	1	11-10	[00]	V	遺構外	胴部
		13535	1	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13537	4	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13538	2	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4076	1	10-10	[21]	V	遺構外	胴部
		14724	2	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13543	5	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13545	1	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13544	3	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
壙 (つづき)	39	13551	1	10-10	[12]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4037	1	10-09	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4039	1	10-10	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4049	1	10-10	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4051	1	10-10	[11]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		1655	1	15-09	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		13	1	15-09	[30]	(不明)	遺構外	胴部	
		4053	1	10-10	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4074	1	10-10	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4048	1	10-10	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4078	1	10-10	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		13536	1	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		705	1	11-09	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4032	1	10-09	[13]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		13539	3	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		13552	1	10-10	[12]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		13533	1	10-10	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		13546	1	10-10	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		3997	1	09-10	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4023	1	10-09	[22]	V	遺構外	底部	
		13335	1	09-09	[10]	Ⅳ	遺構外	底部	
		64片(胴部2片番号わからず)							
壙	40	811	1	10-04	[22]	覆土⑤層	5号竪穴住居	胴部	PL.②-129-1
		939	1	10-04	[23]	床直	5号竪穴住居	胴部	PL.②-149
		1564	1	10-05	[10]	煙道	5号竪穴住居	底部	
		1574	1	10-05	[10]	煙道	5号竪穴住居	胴部	
		2474	3	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	口縁部1, 胴部2	
		2468	3	10-04	[03]	土壌内	1号土壌	口縁部2, 胴部1	
		2471	2	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2656	1	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2659	1	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2664	1	09-04	[33]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2660	1	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2666	3	09-04	[33]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2470	1	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2472	1	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2661	1	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2469	1	09-04	[32]	土壌内	1号土壌	胴部	
		16711	1	09-04	[不明]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2915	1	09-04	[不明]	土壌内	1号土壌	胴部	
		2158	1	09-04	[32]	Ⅳ	1号土壌周辺	胴部	
		2157	2	09-04	[32]	Ⅳ	1号土壌周辺	胴部	
		2228	2	09-04	[31]	炭	1号土壌の焼土・炭化物	胴部	
		2832	1	09-04	[32]	焼土	1号土壌の焼土・炭化物	胴部	
		2833	1	09-04	[32]	焼土	1号土壌の焼土・炭化物	胴部	
		2831	1	09-04	[32]	焼土	1号土壌の焼土・炭化物	胴部	
		2835	2	09-04	[32]	焼土	1号土壌の焼土・炭化物	胴部	
		808	1	10-04	[13]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2166	1	09-05	[30]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2168	1	09-05	[30]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2107	1	09-05	[30]	Ⅳ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2165	2	09-05	[30]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2106	1	09-05	[20]	Ⅳ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2105	1	09-05	[20]	Ⅳ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2229	1	09-04	[32]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		2352	1	09-05	[02]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部	
		4708	1	11-13	[10]	V	遺構外	胴部	
		4715	2	11-13	[10]	V	遺構外	胴部	
		5286	2	11-12	[13]	V	遺構外	胴部	
		4699	1	11-13	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		4651	1	12-08	[01]	V	遺構外	底部	
		52片(胴部3片番号わからず)							
壙	41	546	4	17-17	[21]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部2, 胴部2	PL.②-33-2
		1807	7	17-17	[21]	床	2号竪穴住居	口縁部1, 胴部6	PL.②-66
		1808	4	17-17	[21]	床	2号竪穴住居	口縁部3, 胴部1	
		1813	10	17-17	[22]	床	2号竪穴住居	口縁部3, 胴部7	
		547	2	17-17	[21]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		1806	4	17-17	[21]	床	2号竪穴住居	胴部	
		1886	1	17-17	[21]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		1810	8	17-17	[31]	床	2号竪穴住居	胴部	
		1826	1	17-17	[32]	床	2号竪穴住居	胴部	

個体番号		遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
壺 (つづき)	41	1809	5	17-17	[31]	床	2号竪穴住居	胴部		
		1821	1	17-17	[23]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
		551	3	17-17	[11]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
		394	1	17-17	[12]	(不明)	2号竪穴住居	底部		
		405	2	16-16	[01]	b' 上	焼土43周辺	胴部		
		407	2	16-16	[01]	b' 上	焼土43周辺	胴部		
		409	1	16-16	[01]	b' 上	焼土43周辺	胴部		
		11506	1	18-15	[30]	Ⅳ	炭化物52	胴部		
		5831	1	16-15	[11]	Ⅲ	遺構外	胴部		
		9943	1	16-15	[03]	Ⅳ	遺構外	底部		
		59片(胴部1片番号わからず)								
		壺	42	1818	1	17-17	[33]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部
11008	6			17-17	[33]	床	2号竪穴住居	胴部	PL.[2]-67	
8598	1			17-18	[30]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
11003	1			17-16	[33]	床	2号竪穴住居	胴部		
9926	1			18-17	[03]	床	2号竪穴住居	胴部		
10855	1			18-18	[20]	床	2号竪穴住居	胴部		
1817	1			17-17	[33]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
562	1			17-17	[32]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
1882	2			17-17	[22]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
9701	2			17-18	[00]	床	2号竪穴住居	底部		
1820	1			17-17	[22]	床	2号竪穴住居	胴部		
10847	5			17-18	[00]	床	2号竪穴住居	胴部		
11011	1			17-17	[13]	床	2号竪穴住居	胴部		
1815	6			17-17	[32]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
9925	1			17-17	[32]	床	2号竪穴住居	胴部		
1816	1			17-17	[33]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
563	3			17-17	[32]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
1785	1			18-17	[23]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部		
15750	1			06-07	[03]	V	焼土13	胴部		
10983	1			19-14	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部		
38片										
壺	43	417	1	16-16	[12]	(不明)	焼土43	胴部	PL.[2]-206-2	
		1191	1	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部	PL.[2]-241	
		11306	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	胴部		
		5775	6	19-15	[33]	Ⅲ	炭化物52	胴部		
		9537	1	20-15	[03]	x ¹	炭化物52	胴部		
		7476	1	20-15	[03]	焼土上	炭化物52	胴部		
		12564	1	20-15	[03]	Ⅳ	炭化物52	胴部		
		9069	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	胴部		
		7916	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	胴部		
		221	1	18-15	[31]	(不明)	炭化物52周辺	胴部		
		11786	1	18-15	[01]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部		
		11787	1	18-15	[01]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部		
		11789	1	18-15	[01]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部		
		9622	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		9623	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		10489	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		8609	1	18-10	[03]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部		
		3486	1	18-10	[03]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部		
		9616	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		7810	1	18-11	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部		
		3483	1	18-11	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部		
		8624	1	17-11	[03]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部		
		10282	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		8753	1	17-12	[00]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部		
		9825	1	17-13	[11]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部		
		10308	1	17-12	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		10340	3	17-12	[30]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		10429	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		10289	2	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部		
		7132	1	17-12	[10]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部		
		7396	1	17-12	[21]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部		
		2338	1	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	胴部		
		5081	1	13-08	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部		
		12383	8	18-16	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
		10362	1	18-14	[23]	Ⅳ	遺構外	底部		
		8170	1	20-13	[30]	Ⅳ	遺構外	底部		
		51片(胴部6片番号わからず)								
壺	44	954	2	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居	胴部	PL.[2]-129-2	
		831	1	10-05	[30]	カマド	5号竪穴住居	胴部	PL.[2]-146	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL・番号		
甕 (つづき)	44	1020	1	10-05	[21]	カマド	5号竪穴住居	胴部		
		987	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	胴部		
		1191	1	10-05	[20]	煙道	5号竪穴住居	胴部		
		1194	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	胴部		
		1023	1	10-05	[21]	床直	5号竪穴住居	胴部		
		993	1	10-05	[21]	床直	5号竪穴住居	胴部		
		1027	1	10-05	[21]	床直	5号竪穴住居	胴部		
		944	1	10-05	[20]	カマド	5号竪穴住居	胴部		
		1019	1	10-05	[21]	床直	5号竪穴住居	底部		
					12片					
甕	45	12083	1	17-17	[22]	カマド	2号竪穴住居	胴部	PL. [2]-36-2	
		12285	1	17-17	[01]	煙道	2号竪穴住居	胴部	PL. [2]-68	
		11014	1	17-18	[01]	床直	2号竪穴住居	胴部		
		11847	1	17-18	[01]	床直	2号竪穴住居	胴部		
		1955	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部		
		1956	1	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	胴部		
		7254	1	19-15	[33]	x ¹	炭化物52	胴部		
		11783	1	18-15	[01]	IV	炭化物52	胴部		
		7645	2	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部		
		8894	2	18-15	[31]	x ²	炭化物52	胴部		
		7677	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	胴部		
		8025	1	16-18	[11]	IV	遺構外	胴部		
					14片(底部1片番号ナシ)					
甕	46	14368	1	06-08	[01]	V	遺構外	胴部		
		14667	1	05-08	[32]	V	遺構外	胴部		
		10387	1	19-13	[30]	IV	遺構外	胴部		
		6507	1	20-09	[02]	IV	遺構外	胴部		
		3133	1	09-06	[33]	IV	遺構外	胴部		
		10385	1	19-13	[30]	IV	遺構外	胴部		
		10384	1	19-13	[30]	IV	遺構外	底部		
		10386	1	19-13	[30]	IV	遺構外	底部		
				8片(胴部1片番号わからず)						
甕	47	4586	1	14-09	[11]	IV	遺構外	口縁部		
		5333	3	14-06	[11]	IV	遺構外	口縁部1, 胴部2		
		6793	1	19-13	[01]	IV	遺構外	口縁部		
		6798	4	19-13	[10]	IV	遺構外	口縁部1, 胴部3		
		8929	1	14-11	[12]	IV	遺構外	口縁部		
		8935	4	14-11	[22]	IV	遺構外	口縁部1, 胴部3		
		7833	1	15-10	[23]	IV	遺構外	口縁部		
		8933	4	14-11	[22]	IV	遺構外	胴部		
		8931	12	14-11	[12]	IV	遺構外	胴部		
		8932	3	14-11	[12]	IV	遺構外	胴部		
		9778	1	14-11	[12]	IV	遺構外	胴部		
		5895	2	13-11	[32]	IV	遺構外	胴部		
		8936	1	14-11	[21]	IV	遺構外	胴部		
		8937	2	14-11	[21]	IV	遺構外	胴部		
		9776	1	14-11	[22]	IV	遺構外	胴部		
					41片					
	甕	48	1722	4	18-16	[20]	IV	炭化物52	口縁部1, 胴部3	PL. [2]-208-2
		11750	1	20-15	[03]	IV	炭化物52	口縁部	PL. [2]-242	
		9102	1	18-16	[30]	IV	炭化物52周辺	胴部		
		12454	1	19-16	[30]	IV	炭化物52周辺	胴部		
		12453	2	19-16	[30]	IV	炭化物52周辺	胴部		
		12456	1	19-16	[20]	IV	炭化物52周辺	胴部		
		12455	6	19-16	[20]	IV	炭化物52周辺	口縁部3, 胴部3		
		9103	1	18-16	[31]	IV	炭化物53	胴部		
		16627	1	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部		
		186	1	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部		
		7343	1	17-12	[10]	IV	炭化物マウンド	口縁部		
		3330	2	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部1, 胴部1		
		3408	1	17-11	[22]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部		
		3407	3	17-11	[22]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部		
					26片					
甕		49	1906	2	18-17	[20]	床	2号竪穴住居	口縁部	PL. [2]-42-1
			1775	2	18-17	[20]	床	2号竪穴住居	口縁部	PL. [2]-69
		1773	2	18-17	[20]	床	2号竪穴住居	口縁部		
		1838	2	18-17	[10]	床	2号竪穴住居	口縁部		
		1777	1	18-17	[20]	床	2号竪穴住居	胴部		
		1772	1	18-17	[10]	床	2号竪穴住居	胴部		
		1840	1	18-17	[20]	床	2号竪穴住居	胴部		

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壺 (つづき)	49	1804	1	17-17	[21]	床	2号竪穴住居	胴部
		1946	1	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	口縁部
		1949	1	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	口縁部
		1944	1	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	口縁部
		1947	2	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	口縁部
		2273	1	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	口縁部
		2335	1	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	口縁部
		1948	1	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	胴部
		1945	2	17-10	[31]	b'	炭化物 マウンド	胴部
		1980	1	17-10	[30]	b'	炭化物 マウンド	口縁部
		9054	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	口縁部
		9050	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	口縁部
		7634	1	19-15	[02]	x'	炭化物52	口縁部
		7913	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	口縁部
		7975	1	19-15	[10]	x²	炭化物52	口縁部
		7230	2	19-15	[不明]	カクラン	炭化物52	口縁部
		7471	1	20-15	[03]	焼土上	炭化物52	胴部
		7249	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	胴部
		5721	1	19-15	[21]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		16531	1	19-15	[不明]	(不明)	炭化物52	胴部
		9049	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		7905	1	19-15	[13]	x'	炭化物52	胴部
		7891	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		11076	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	胴部
		9051	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		9034	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		11045	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		7438	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	胴部
		7651	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		7657	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	胴部
		11051	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		8853	1	19-15	[01]	x'	炭化物52	胴部
		7234	1	19-15	[11]	x'	炭化物52	胴部
		7897	1	19-15	[32]	x'	炭化物52	胴部
		9040	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		11077	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	胴部
		11036	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		7664	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	胴部
		7660	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	胴部
		7652	1	19-15	[12]	x'	炭化物52	胴部
		7638	1	19-15	[02]	x'	炭化物52	口縁部
		7658	1	19-15	[22]	x'	炭化物52	口縁部
		7980	1	19-15	[10]	x'	炭化物52	口縁部
		7091	1	20-15	[20]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部
		11102	1	15-12	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部
59片(胴部2片番号わからず)								
壺	50	6419	1	21-09	[不明]	カクラン	遺構外	口縁部
		6338	1	21-09	[03]	カクラン	遺構外	口縁部
		5427	1	20-10	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		6494	1	20-09	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		6342	3	21-09	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5413	1	20-10	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		6240	1	21-10	[00]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		729	1	20-10	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5433	1	20-10	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5434	3	20-10	[13]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5405	1	20-10	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5404	5	20-10	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部2, 胴部3
		5403	1	20-10	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5402	1	20-10	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		6346	1	21-09	[00]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5407	1	20-10	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		5437	1	21-10	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部
		5438	1	21-10	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部
		6239	1	21-10	[00]	Ⅲ	遺構外	胴部
		5423	2	20-10	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部
		5419	1	20-10	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部
		6339	2	21-09	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部
32片(胴部2片番号わからず)								
壺	51	13917	4	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27	口縁部 PL.[2]-264-2
		13303	1	08-08	[11]	Ⅳ	焼土27	口縁部 PL.[2]-174

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL番号
壙 (つづき)	51	13847	6	08-08	[20]	焼土	焼土27	口縁部1, 胴部5
		13640	1	08-08	[21]	IV	焼土27	口縁部
		13915	6	08-08	[20]	IV	焼土27	口縁部4, 胴部2
		13914	1	08-08	[10]	IV	焼土27	胴部
		13846	1	08-08	[20]	焼土	焼土27	口縁部
		13029	1	07-08	[13]	IV	遺構外	胴部
21片								
壙	52	11144	1	17-17	[12]	床	2号竪穴住居	口縁部
		1884	1	17-17	[22]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部
		1885	1	17-17	[21]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部
		1881	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部
		1811	1	17-17	[12]	床	2号竪穴住居	口縁部
		1749	1	17-17	[30]	床	2号竪穴住居	口縁部
		16528	1	19-17	[不明]	床	2号竪穴住居	口縁部
		16584	2	17-17	[不明]	カマド	2号竪穴住居	口縁部
		1831	1	17-17	[20]	床	2号竪穴住居	口縁部
		12156	1	17-17	[02]	カマド	2号竪穴住居	口縁部
		12080	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		9132	1	16-18	[31]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部
		43	2	15-17	[11]	(不明)	焼土41	胴部
		8035	3	16-18	[01]	IV	焼土43	胴部
		8029	1	16-18	[11]	IV	焼土43	胴部
		11683	2	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部
		11682	2	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部
		11673	1	15-17	[32]	焼土	焼土43	胴部
		11681	1	16-17	[02]	焼土	焼土43	底部
		8048	1	16-19	[22]	IV	焼土44	胴部
		12206	1	16-18	[12]	IV	焼土44	胴部
		7440	1	19-15	[23]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		5775	1	19-15	[33]	III	炭化物52	口縁部
		12117	1	19-15	[23]	IV	炭化物52	口縁部
		7919	2	19-15	[23]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		9072	1	19-15	[23]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		7986	1	19-15	[22]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		16518	1	19-15	[不明]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		7931	1	19-15	[23]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		9540	1	20-15	[03]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		9077	2	19-15	[23]	x ⁱ	炭化物52	口縁部
		7497	1	20-15	[13]	焼土上面	炭化物52	胴部
		11367	1	20-15	[03]	x ⁱ	炭化物52	胴部
		7932	4	19-15	[23]	x ⁱ	炭化物52	胴部
		74	1	19-15	[33]	(不明)	炭化物52	胴部
		5774	2	19-15	[33]	III	炭化物52	胴部
		7444	1	19-15	[33]	x ⁱ	炭化物52	胴部
		75	2	19-15	[33]	(不明)	炭化物52	胴部
		9553	1	20-15	[12]	x ⁱ	炭化物52	胴部
		12143	1	19-15	[23]	IV	炭化物52	胴部
		9528	1	20-15	[02]	x ⁱ	炭化物52	胴部
		16718	1	19-15	[不明]	(不明)	炭化物52	胴部
		12142	1	19-16	[20]	IV	炭化物52周辺	口縁部
		12463	2	20-16	[00]	IV	炭化物52周辺	口縁部
		11450	2	20-16	[10]	IV	炭化物52周辺	胴部
		12563	1	20-15	[03]	IV	炭化物52周辺	胴部
		1956	3	17-10	[21]	b ⁱ	炭化物マウンド	口縁部
		2807	1	17-10	[31]	b ⁱ	炭化物マウンド	口縁部
		8364	1	17-11	[02]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		1962	1	17-10	[11]	b ⁱ	炭化物マウンド	口縁部
		2031	1	18-10	[13]	b ⁱ	炭化物マウンド	胴部
		8776	1	17-12	[12]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		1955	2	17-10	[21]	b ⁱ	炭化物マウンド	胴部
		4452	1	15-18	[31]	IV	遺構外	胴部
		12205	2	16-18	[11]	IV	遺構外	胴部
		6051	1	20-16	[12]	III	遺構外	胴部
		6050	1	20-16	[12]	III	遺構外	胴部
		8021	1	16-18	[11]	IV	遺構外	胴部
		6723	1	19-12	[12]	IV	遺構外	胴部
		4500	1	08-13	[23]	(不明)	遺構外	胴部
79片(胴部4片番号わからず)								
壙	57	44	2	15-16	[02]	(不明)	焼土41	口縁部
		10801	1	15-16	[03]	IV	焼土41	胴部
		46	1	15-16	[02]	(不明)	焼土41周辺	胴部

PL. [2]-39-2

PL. [2]-70

PL. [2]-244

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壙 (つづき)	57	10803	1	15-16	[03]	IV	焼土41周辺	胴部
		272	5	16-16	[33]	(不明)	焼土43	口縁部
		8453	1	16-17	[12]	焼土	焼土43	胴部
		231	1	15-17	[31]	(不明)	焼土43	胴部
		10208	1	18-13	[31]	V	焼土48	胴部
		6741	1	19-11	[03]	IV	炭化物・焼土50	胴部
		9544	1	20-15	[02]	x ¹	炭化物52	胴部
		12420	1	20-16	[21]	IV	炭化物52周辺	胴部
		11452	1	20-16	[10]	IV	炭化物52周辺	胴部
		11987	1	20-16	[13]	IV	炭化物52周辺	胴部
		11469	1	20-16	[23]	IV	炭化物52周辺	胴部
		11477	8	20-16	[33]	IV	炭化物52周辺	胴部
		9457	1	20-16	[22]	IV	炭化物52周辺	胴部
		787	2	20-16	[11]	IV	炭化物52周辺	胴部
		11447	8	20-16	[01]	IV	炭化物52周辺	胴部3, 底部5片
		2642	1	18-10	[02]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		16577	1	17-11	[31]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		2266	1	17-10	[22]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		10929	1	21-17	[12]	IV	遺構外	胴部
		4333	1	17-20	[13]	IV	遺構外	胴部
		7760	1	14-15	[23]	IV	遺構外	胴部
		248	5	14-16	[32]	IV	遺構外	胴部
		7746	1	14-15	[11]	IV	遺構外	胴部
		10210	1	19-13	[00]	IV	遺構外	胴部
		7736	1	15-15	[32]	IV	遺構外	胴部
		7361	1	14-15	[30]	IV	遺構外	胴部
		8526	1	14-17	[33]	IV	遺構外	胴部
		1041	1	13-13	[02]	IV	遺構外	胴部
		7716	1	15-15	[13]	IV	遺構外	胴部
		7787	2	14-16	[32]	IV	遺構外	胴部
		12404	3	20-17	[01]	IV	遺構外	胴部
		11259	1	21-16	[20]	IV	遺構外	胴部
		246	1	14-16	[33]	(不明)	遺構外	胴部
		10399	1	18-14	[22]	IV	遺構外	胴部
		64片(胴部2片番号わからず)						
壙	58	6707	1	22-14	[21]	IV	遺構外	口縁部
		11215	3	21-17	[12]	IV	遺構外	口縁部
		12414	1	20-17	[11]	IV	遺構外	口縁部
		11216	1	21-17	[12]	IV	遺構外	胴部
		10896	1	21-17	[22]	IV	遺構外	胴部
		11214	1	21-17	[12]	IV	遺構外	胴部
		11549	1	21-17	[22]	IV	遺構外	胴部
		11537	1	21-17	[12]	IV	遺構外	胴部
		6002	3	20-17	[23]	IV	遺構外	胴部
		6005	2	20-17	[32]	III	遺構外	胴部
		10924	1	21-17	[12]	IV	遺構外	胴部
		9470	1	20-17	[21]	IV	遺構外	胴部
		6069	1	21-17	[02]	IV	遺構外	胴部
		11984	1	20-17	[21]	IV	遺構外	胴部
		10940	1	21-17	[22]	IV	遺構外	胴部
		6067	11	21-17	[02]	IV	遺構外	胴部
		11234	1	21-17	[22]	IV	遺構外	胴部
		11235	1	21-17	[22]	IV	遺構外	胴部
		10897	1	21-17	[22]	IV	遺構外	胴部
		1159	1	20-18	[10]	IV	遺構外	底部
		11227	3	21-17	[13]	IV	遺構外	底部
		38片(胴部6片番号わからず)						
壙	59	1896	1	17-16	[32]	床	2号竪穴住居	胴部
		1875	1	17-17	[33]	床	2号竪穴住居	胴部
		12466	1	20-16	[13]	IV	炭化物52	口縁部
		9533	1	20-15	[03]	x ¹	炭化物52	胴部
		186	1	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部
		2071	1	18-10	[03]	(不明)	炭化物マウンド	口縁部
		8383	1	18-11	[23]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		6669	1	18-11	[22]	IV	炭化物マウンド	口縁部
		3343	1	17-11	[13]	マウンド内	炭化物マウンド	口縁部
		10907	1	17-11	[22]	マウンド下	炭化物マウンド	口縁部
		10773	1	17-11	[22]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		9693	1	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		6608	1	18-10	[11]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		10465	1	17-11	[22]	マウンド下	炭化物マウンド	口縁部

PL. ②-71

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壙 (つづき)	61	7283	1	14-13	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部
		8981	1	16-14	[00]	Ⅲ	遺構外	胴部
		26片						
壙	62	5707	1	19-17	[12]	Ⅲ	2号竪穴住居	胴部
		10111	1	17-17	[03]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部
		8868	1	17-18	[02]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部
		10879	4	19-18	[00]	床	2号竪穴住居	胴部
		8925	1	19-18	[00]	床	2号竪穴住居	胴部
		1880	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		1879	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		10841	1	17-17	[03]	床	2号竪穴住居	胴部
		10840	1	17-17	[03]	床	2号竪穴住居	胴部
		11010	3	17-17	[03]	床	2号竪穴住居	胴部
		10842	1	17-17	[03]	床	2号竪穴住居	胴部
		10838	10	17-17	[02]	床	2号竪穴住居	胴部5, 底部5
		3062	1	08-13	[03]	Ⅳ	焼土24周辺	胴部
		347	4	16-17	[12]	(不明)	焼土43	口縁部2, 胴部2
		335	1	16-17	[12]	(不明)	焼土43	口縁部
		328	1	16-17	[02]	(不明)	焼土43	口縁部
		12537	1	16-17	[13]	Ⅳ	焼土43	胴部
		342	1	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部
		360	2	16-17	[22]	(不明)	焼土43	胴部
		9931	2	16-16	[23]	焼土	焼土43	胴部
		16598	1	16-17	[不明]	焼土	焼土43	胴部
		120	1	16-17	[23]	(不明)	焼土43	胴部
		8470	1	16-17	[23]	焼土	焼土43	胴部
		9164	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	口縁部
		5803	1	19-15	[13]	(不明)	炭化物52	口縁部
		79	1	19-15	[32]	(不明)	炭化物52	口縁部
		5797	1	19-15	[23]	Ⅲ	炭化物52	口縁部
		5757	3	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部
		7430	2	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	胴部
		7649	1	19-15	[31]	x ¹	炭化物52	胴部
		11073	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部
		7628	1	19-15	[02]	x ¹	炭化物52	胴部
		5727	4	19-15	[11]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		5724	1	19-15	[11]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		8178	1	19-15	[11]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		9556	1	20-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部
		7976	1	19-15	[10]	x ²	炭化物52	胴部
		7687	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部
		7689	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部
		7690	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	胴部
		6030	1	20-16	[10]	Ⅲ	炭化物52周辺	胴部
		11513	2	18-15	[31]	Ⅲ	炭化物52周辺	胴部
		217	7	18-15	[30]	(不明)	炭化物52周辺	胴部
		5739	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52周辺	胴部
		11496	1	18-15	[21]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部
		16454	1	10-18	[11]	V	遺構外	口縁部
		16455	1	10-18	[11]	V	遺構外	口縁部
		16457	2	10-18	[11]	V	遺構外	口縁部1, 胴部1
		8254	1	13-17	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4262	1	11-17	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		10749	2	13-16	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		16500	1	10-19	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		1375	2	11-19	[01]	V	遺構外	口縁部
		642	1	12-21	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4432	1	13-18	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		8514	1	13-17	[12]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4272	1	12-17	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		16355	1	10-18	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		805	1	11-16	[不明]	カクラン	遺構外	口縁部
		8258	3	13-17	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部
		1367	5	11-18	[13]	V	遺構外	胴部
		1374	5	11-19	[10]	V	遺構外	胴部
		1377	1	11-19	[02]	V	遺構外	胴部
		1380	1	11-19	[12]	V	遺構外	胴部
		11780	1	18-15	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部
		11294	1	17-16	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部
		1375	1	11-19	[01]	V	遺構外	胴部
		8252	1	13-17	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
変 (つづき)	62	9983	1	16-12	[23]	IV	遺構外	胴部
		8590	1	19-17	[不明]	カクラン	遺構外	胴部
		16356	2	10-18	[11]	IV	遺構外	胴部
		16432	1	10-18	[11]	V	遺構外	胴部
		16445	1	10-18	[11]	V	遺構外	胴部
		11574	1	15-16	[00]	IV	遺構外	胴部
		8507	1	14-17	[22]	IV	遺構外	胴部
		16383	1	10-18	[12]	IV	遺構外	胴部
		9952	3	16-14	[30]	IV	遺構外	胴部
		9830	2	17-13	[12]	IV	遺構外	胴部
		9963	1	16-13	[23]	IV	遺構外	胴部
		9814	2	17-13	[03]	IV	遺構外	胴部
		16486	1	09-18	[31]	IV	遺構外	胴部
		16372	1	10-18	[23]	IV	遺構外	胴部
		16430	3	10-18	[02]	V	遺構外	胴部
		16427	2	10-18	[01]	IV	遺構外	胴部
		16391	1	10-18	[02]	IV	遺構外	胴部
		16426	2	10-18	[01]	IV	遺構外	胴部
		16361	3	10-18	[33]	IV	遺構外	胴部
		16402	4	10-18	[10]	V	遺構外	胴部
		16488	1	09-18	[32]	IV	遺構外	胴部
		16467	1	10-18	[02]	V	遺構外	胴部
		16434	1	10-18	[10]	V	遺構外	胴部
		16444	1	10-18	[10]	V	遺構外	胴部
		16379	1	10-18	[12]	IV	遺構外	胴部
		16389	1	10-18	[02]	IV	遺構外	胴部
		16350	1	10-17	[31]	IV	遺構外	胴部
		4252	2	11-17	[11]	IV	遺構外	胴部
		16498	1	10-19	[31]	IV	遺構外	胴部
		16461	2	10-18	[01]	V	遺構外	胴部
		16400	1	10-18	[10]	IV	遺構外	胴部
		16429	1	10-18	[02]	V	遺構外	胴部
	161片(胴部1片番号わからず)							
変	63	12501	1	16-17	[12]	焼土	焼土43	口縁部
		✓ 10579	5	17-11	[31]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		✓ 16577	1	17-11	[31]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		✓ 8650	3	17-11	[13]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		✓ 1955	8	17-10	[21]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		✓ 9075	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	胴部
		✓ 7926	3	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	口縁部
		✓ 7439	3	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	口縁部
		✓ 7097	2	20-15	[02]	焼土上面	炭化物52	胴部
		✓ 7098	2	20-15	[02]	焼土上面	炭化物52	口縁部
		✓ 7096	1	20-15	[02]	焼土上面	炭化物52	胴部
		✓ 7100	3	20-15	[02]	焼土上面	炭化物52	胴部
	33片							
変	64	6453	1	15-16	[02]	Ⅲ	焼土41周辺	口縁部
		8087	4	15-16	[02]	IV	焼土41周辺	口縁部
		5840	2	15-16	[11]	Ⅲ	焼土41周辺	口縁部
		5846	1	15-16	[02]	Ⅲ	焼土41周辺	口縁部
		6454	2	15-16	[02]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部
		5848	4	15-16	[02]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部
		47	2	15-16	[02]	(不明)	焼土41周辺	胴部
		5846	2	15-16	[02]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部
		5847	2	15-16	[02]	Ⅲ	焼土41周辺	口縁部
		5842	2	15-16	[01]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部
		8087	1	15-16	[02]	IV	焼土41周辺	胴部
		44	4	15-16	[02]	(不明)	焼土41周辺	胴部
		48	1	15-16	[02]	(不明)	焼土41周辺	胴部
		49	1	15-16	[02]	(不明)	焼土41周辺	胴部
		50	1	15-16	[02]	(不明)	焼土41周辺	胴部
		5839	1	15-16	[11]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部
		10148	1	15-16	[00]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部
		8308	1	16-17	[20]	焼土	焼土43	口縁部
		285	1	16-17	[20]	(不明)	焼土43	口縁部
		269	27	16-16	[33]	(不明)	焼土43	胴部
		268	1	16-16	[33]	(不明)	焼土43	胴部
		12099	1	16-16	[33]	IV	焼土43	胴部
		433	1	16-16	[33]	b ¹ 上	焼土43	胴部
		12263	2	16-16	[33]	IV	焼土43	底部
		8303	1	16-16	[30]	IV	焼土43周辺	口縁部

PL. [2]-72

PL. [2]-206-1

PL. [2]-288

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壺 (つづき)	64	261	5	16-16	[32]	(不明)	焼土43周辺	口縁部
		8867	1	16-16	[不明]	カクラン	焼土43周辺	胴部
		12097	2	16-16	[33]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部
		14998	1	07-08	[03]	焼土	炭化物19	胴部
		14938	1	07-09	[00]	焼土	炭化物19	胴部
		9361	2	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		186	3	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	胴部
		9322	1	17-11	[03]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		2314	1	18-10	[03]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		112	1	20-14	[02]	(不明)	遺構外	胴部
		16484	1	09-18	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5886	1	14-14	[12]	Ⅲ	遺構外	口縁部
		5887	2	14-14	[12]	Ⅲ	遺構外	口縁部
		10147	2	14-16	[32]	Ⅲ	遺構外	口縁部
		10145	1	14-16	[00]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		249	1	14-16	[30]	(不明)	遺構外	口縁部
		7761	1	14-15	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		7781	1	13-15	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		5870	2	14-16	[32]	Ⅲ	遺構外	胴部
		11979	1	20-17	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部
		9792	1	14-16	[12]	Ⅳ	遺構外	胴部
		9905	1	14-16	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部
		6062	1	21-16	[03]	Ⅲ	遺構外	胴部
	101片(胴部1片番号わからず)							
壺	65	12234	1	17-17	[11]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		8471	2	16-17	[23]	焼土	焼土43	胴部
		371	2	16-17	[32]	(不明)	焼土43	胴部
		277	1	16-17	[10]	(不明)	焼土43	胴部
		9530	3	20-15	[03]	x ¹	炭化物52	底部
		7231	4	18-15	[03]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部
		12457	1	19-16	[20]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部
		1764	4	18-16	[23]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部
		2821	1	17-10	[32]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2823	1	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2825	1	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		2826	1	17-10	[33]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		10957	1	18-10	[03]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		2653	2	18-10	[11]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		9433	2	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		6604	1	18-10	[20]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9211	1	17-11	[03]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		186	1	17-12	[10]	(不明)	炭化物マウンド	胴部
		2013	2	18-10	[12]	b ¹	炭化物マウンド	胴部
		10794	1	17-11	[30]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		10700	1	17-11	[30]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		10670	2	17-11	[31]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		10678	1	18-11	[00]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		1874	1	18-10	[12]	カクラン	炭化物マウンド	底部
		2014	1	18-10	[12]	カクラン	炭化物マウンド	胴部
	39片(胴部2片,底部1片番号わからず)							
壺	66	12130	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部
		11145	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		12063	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		12079	2	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		12061	2	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		2161	1	10-04	[13]	カマド	5号竪穴住居	口縁部
		9552	4	20-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部
		9550	5	20-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部
		5784	1	19-15	[33]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		12143	1	19-15	[23]	Ⅳ	炭化物52	口縁部
	19片(胴部6片番号わからず)							
壺	67	16508	2	19-17	[不明]	床	2号竪穴住居	胴部
		16691	1	19-17	[不明]	床	2号竪穴住居	胴部
		12160	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		12131	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		714	5	12-09	[不明]	カクラン	焼土33周辺	胴部
		8338	1	16-17	[11]	焼土	焼土43	胴部
		502	3	16-17	[13]	b ¹	焼土43	胴部
		8466	1	16-17	[13]	焼土	焼土43	胴部
		8465	3	16-17	[13]	焼土	焼土43	胴部
		8464	3	16-17	[13]	焼土	焼土43	胴部

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
変	69	566	4	17-17	[23]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-43-1
		1770	1	18-17	[10]	床	2号竪穴住居	口縁部	
		12072	1	18-16	[23]	床	2号竪穴住居	口縁部	
		1799	1	17-17	[11]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		564	1	17-17	[33]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		8539	1	17-18	[10]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		8546	10	17-18	[21]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部4, 底部6	
		541	1	17-17	[30]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		8889	2	17-18	[02]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		7246	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		8144	1	16-12	[31]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部	
		230	2	15-17	[30]	(不明)	焼土41	胴部	
		11155	4	15-17	[32]	焼土	焼土41	胴部	
		228	1	15-16	[33]	(不明)	焼土41	胴部	
		8234	1	15-17	[30]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部	
		12211	1	15-17	[21]	Ⅳ	焼土41周辺	胴部	
		458	2	16-17	[12]	b ¹ 上	焼土43	口縁部	
		9489	2	16-17	[21]	焼土	焼土43	口縁部1, 胴部1	
		9487	1	16-17	[21]	焼土	焼土43	口縁部	
		377	1	16-17	[31]	(不明)	焼土43	口縁部	
		133	7	16-17	[31]	(不明)	焼土43	口縁部	
		303	2	16-17	[01]	(不明)	焼土43	胴部	
		9709	1	16-16	[13]	焼土上	焼土43	胴部	
		323	1	16-17	[21]	(不明)	焼土43	胴部	
		281	1	16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部	
		272	1	16-16	[33]	(不明)	焼土43	口縁部	
		361	1	16-17	[22]	(不明)	焼土43	口縁部	
		8456	1	16-17	[11]	焼土	焼土43	口縁部	
		331	1	16-17	[02]	(不明)	焼土43	口縁部	
		337	2	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
		457	1	16-17	[12]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		345	1	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
		120	1	16-17	[23]	(不明)	焼土43	胴部	
		517	3	16-17	[23]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		8457	1	16-17	[11]	焼土	焼土43	胴部	
		295	1	16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部	
		9490	2	16-17	[21]	焼土	焼土43	胴部	
		336	1	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
		9703	1	16-17	[21]	焼土	焼土43	胴部	
		11200	1	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部	
		10735	1	16-17	[31]	焼土	焼土43	胴部	
		8018	3	16-18	[10]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		9455	1	20-16	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		8482	2	16-18	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部	
77片(胴部1片番号わからず)									
変	70	571	2	18-16	[02]	覆土④層	2号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-34-3
		533	1	17-17	[01]	床	2号竪穴住居	胴部	
		9053	1	17-18	[00]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		570	3	18-16	[02]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		10112	1	17-17	[03]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		1892	1	17-16	[23]	床	2号竪穴住居	胴部	
		536	1	17-17	[20]	覆土④層	2号竪穴住居	胴部	
		11186	1	15-17	[32]	焼土	焼土41	胴部	
		341	2	16-17	[12]	(不明)	焼土43	口縁部	
		9713	1	16-17	[01]	焼土上	焼土43	胴部	
		327	1	16-17	[02]	(不明)	焼土43	胴部	
		343	1	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
		11552	1	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部	
		9929	1	16-17	[12]	焼土	焼土43	胴部	
		463	1	16-17	[12]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		449	1	16-17	[12]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		444	1	16-17	[02]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		505	1	16-17	[13]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		508	1	16-17	[13]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		340	1	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
		516	1	16-17	[23]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		295	1	16-17	[20]	(不明)	焼土43	胴部	
		342	4	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
		339	2	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
		497	1	16-17	[13]	b ¹ 上	焼土43	胴部	
		11196	1	16-17	[02]	Ⅳ	焼土43	胴部	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号	
瘻 (つづき)	70	12537	1	16-17	[13]	Ⅳ	焼土43	胴部	
	8235	1	19-15	[00]	(不明)	炭化物52	胴部		
	7232	1	19-15	[00]	x ¹	炭化物52	胴部		
	5798	1	19-15	[23]	Ⅲ	炭化物52	胴部		
	9403	2	17-14	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部		
	12261	1	17-14	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	10395	1	17-14	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	5645	1	24-14	[32]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	12179	1	16-13	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	11798	1	18-15	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	157	1	17-14	[33]	(不明)	遺構外	胴部		
	9383	1	17-13	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	11108	1	15-12	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	6648	1	19-12	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	7723	1	15-15	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	9405	1	17-14	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	9404	1	17-14	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	9414	1	18-14	[12]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	7729	1	15-15	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	8037	1	16-18	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	9721	1	16-18	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	12252	1	16-18	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	57片(底部1片番号ナシ)								
瘻	71	1602	2	10-13	[01]	床	3号竪穴住居	口縁部1, 胴部1	PL. [2]-99-6 PL. [2]-105
	1302	1	10-05	[12]	床	5号竪穴住居	胴部		
	15667	2	08-09	[03]	x ⁷	4号土壌	口縁部1, 胴部1		
	16299	1	08-09	[13]	x ⁷	4号土壌	口縁部		
	15642	1	08-09	[03]	x ⁶	4号土壌	口縁部		
	15674	1	08-09	[13]	x ³	4号土壌	胴部		
	16057	1	08-09	[03]	x ⁶	4号土壌	胴部		
	15669	1	08-09	[03]	x ³	4号土壌	胴部		
	15428	1	08-09	[03]	炭化物層	4号土壌	胴部		
	15663	1	08-09	[03]	x ³	4号土壌	胴部		
	16036	1	08-09	[02]	x ⁷	4号土壌	胴部		
	16053	1	08-09	[02]	x ⁷	4号土壌	胴部		
	15423	1	08-09	[02]	炭化物層	4号土壌	胴部		
	15429	1	08-09	[02]	炭化物層	4号土壌	口縁部		
	13891	4	08-11	[30]	焼土	焼土・炭化物22	口縁部		
	13897	5	09-11	[00]	焼土	焼土・炭化物22	口縁部		
	13890	3	08-11	[30]	焼土	焼土・炭化物22	口縁部		
	14291	1	09-11	[00]	V	焼土・炭化物22	胴部		
	13895	3	09-11	[00]	焼土	焼土・炭化物22	胴部		
	14290	3	09-11	[00]	V	焼土・炭化物22	胴部		
	13894	5	09-11	[00]	焼土	焼土・炭化物22	胴部		
	13896	5	09-11	[00]	焼土	焼土・炭化物22	胴部		
	13886	1	08-11	[33]	焼土	焼土・炭化物22	胴部		
	13089	3	08-11	[30]	Ⅳ	焼土・炭化物22	胴部		
	14246	1	08-11	[30]	V	焼土・炭化物22	胴部		
	13888	1	08-11	[30]	焼土	焼土・炭化物22	胴部		
	13094	1	08-11	[30]	Ⅳ	焼土・炭化物22	胴部		
	13893	8	09-11	[00]	焼土	焼土・炭化物22	口縁部1, 胴部7		
	13091	2	08-11	[30]	Ⅳ	焼土・炭化物22周辺	口縁部1, 胴部1		
	13743	8	08-11	[20]	Ⅳ	焼土・炭化物22周辺	口縁部1, 胴部7		
	13088	10	08-11	[30]	Ⅳ	焼土・炭化物22周辺	口縁部9, 胴部1		
	14793	1	08-10	[13]	V	焼土・炭化物22周辺	口縁部		
	13733	1	08-10	[33]	Ⅳ	焼土・炭化物22周辺	口縁部		
	13745	1	08-11	[20]	Ⅳ	焼土・炭化物22周辺	胴部		
	14245	1	08-11	[30]	V	焼土・炭化物22周辺	胴部		
	13710	1	09-10	[13]	Ⅳ	焼土・炭化物22周辺	口縁部		
	13526	2	09-10	[13]	Ⅳ	焼土・炭化物22周辺	口縁部		
	14297	1	09-11	[30]	V	焼土・炭化物22周辺	胴部		
	4849	1	11-11	[21]	焼土	焼土32	胴部		
	13871	7	06-10	[33]	Ⅲ	炭化物16周辺	口縁部		
	2985	1	18-09	[03]	b ¹	炭化物マウンド	胴部		
	12035	1	19-16	[12]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部		
	4694	1	11-12	[12]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	8574	1	13-14	[23]	Ⅲ	遺構外	口縁部		
	16199	1	04-08	[30]	V	遺構外	胴部		
	15087	1	04-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	7310	1	14-14	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部		
	1067	1	13-14	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部		

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL番号
甕 (つづき)	71	9141	1	13-13	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		16151	1	06-05	[02]	Ⅴ	遺構外	胴部
	106片(胴部1片番号わからず)							
甕	72	9058	2	19-15	[22]	x ²	炭化物52	胴部
		9059	2	19-15	[22]	x ²	炭化物52	胴部
		8249	2	19-15	[20]	Ⅳ	炭化物52	胴部
		12040	1	19-16	[32]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部
		8127	1	21-14	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部
		11432	1	21-16	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部
		11435	1	21-16	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部
		11422	1	21-16	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部
		11412	3	21-16	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4320	1	17-20	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4331	2	17-20	[13]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4428	1	16-20	[32]	Ⅳ	遺構外	底部
		4415	1	16-20	[21]	Ⅳ	遺構外	底部
		4188	1	17-21	[10]	Ⅳ	遺構外	底部
		4317	1	17-20	[01]	Ⅳ	遺構外	底部
	21片(胴部1片番号わからず)							
甕	73	15445	1	08-09	[12]	炭化物層	4号土壌	胴部
		15442	1	08-09	[02]	炭化物層	4号土壌	胴部
		15438	1	08-09	[12]	炭化物層	4号土壌	胴部
		3551	1	08-12	[20]	Ⅳ	焼土24	胴部
		2947	1	08-12	[11]	Ⅵ	焼土24	胴部
		13688	1	07-12	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13054	1	10-11	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13055	1	10-11	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13056	1	10-11	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		13057	1	10-11	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4884	1	12-11	[00]	Ⅴ	遺構外	胴部
		1705	1	16-09	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		15453	1	06-09	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部
		6503	1	19-09	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部
		5452	1	16-06	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部
	15片(胴部1片番号わからず)							
甕	74	1451	1	11-06	[00]	床	5号竪穴住居	底部
		1428	1	10-06	[30]	覆土⑤層	5号竪穴住居	胴部
		685	1	11-04	[13]	床直	5号竪穴住居	胴部
		2173	1	09-05	[11]	b ¹	焼土・炭化物28	胴部
		3043	1	10-04	[03]	焼土	焼土・炭化物28	胴部
		1497	2	10-06	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		1498	2	10-06	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		14001	1	08-09	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
	10片							
甕	75	12157	2	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	口縁部1, 胴部1
		12155	1	17-17	[02]	カマド	2号竪穴住居	胴部
		11324	1	19-15	[13]	x ²	炭化物52	口縁部
		8852	1	19-15	[00]	x ¹	炭化物52	口縁部
		7901	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部
		7641	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	口縁部
		5863	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	口縁部
		7246	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	口縁部
		8882	1	18-15	[31]	x ¹	炭化物52	口縁部
		11069	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	口縁部
		9525	1	20-15	[02]	x ¹	炭化物52	口縁部
		9527	1	20-15	[02]	x ¹	炭化物52	口縁部
		9168	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部
		9513	1	18-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部
		11500	1	18-15	[23]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部
		11871	1	18-15	[21]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部
		11862	1	18-15	[20]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部
		12452	1	19-16	[30]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部
		9658	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		2009	1	18-10	[11]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		2010	1	18-10	[11]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		2011	2	18-10	[12]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		2012	1	18-10	[12]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		16577	1	17-11	[31]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		2309	1	18-10	[02]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		2300	1	18-10	[00]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		2035	2	18-09	[13]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号			
表	77	13602	1	08-07	[11]	土城内	5号土壌	胴部	PL.〔2〕-264-1		
		13321	1	08-08	[13]	Ⅳ	焼土27	胴部			
		13323	3	08-08	[13]	Ⅳ	焼土27	胴部	PL.〔2〕-290		
		13931	1	08-08	[31]	Ⅳ	焼土27	口縁部			
		13941	3	08-08	[33]	Ⅳ	焼土27周辺	底部			
		13329	1	08-08	[21]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13324	1	08-08	[23]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13645	1	08-08	[23]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		14146	1	08-06	[10]	Ⅳ	焼土29	胴部			
		5226	2	08-05	[32]	Ⅳ	焼土・炭化物28	胴部			
		610	1	10-06	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		14103	8	08-09	[30]	V	遺構外	口縁部4, 胴部4			
		13811	1	08-09	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		16208	12	08-09	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部2, 胴部10			
		3754	2	08-07	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		3133	1	09-06	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部			
		13810	1	08-09	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13611	2	08-09	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		3123	1	10-07	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		16209	1	09-09	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		15903	1	09-09	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		15905	1	09-09	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		14009	1	08-09	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13652	1	09-09	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13616	1	08-09	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13608	1	08-09	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		14010	1	08-09	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		14098	2	08-09	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13610	2	08-09	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13614	1	08-09	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13393	1	08-07	[13]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13816	1	08-09	[31]	Ⅳ	遺構外	底部			
		3745	1	09-07	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		5241	2	08-07	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		16210	6	09-08	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13948	1	09-08	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		13650	1	09-08	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		70片(胴部3片番号わからず)									
		表	78	1607	1	09-12	[03]	煙道	3号竪穴住居	胴部	PL.〔2〕-99-5
				1612	1	09-13	[00]	カマド	3号竪穴住居	胴部	PL.〔2〕-106
				1613	1	09-13	[00]	カマド	3号竪穴住居	胴部	
				1625	4	09-13	[00]	カマド	3号竪穴住居	胴部	
				1627	1	09-12	[03]	カマド	3号竪穴住居	胴部	
8片											
表	79	13845	1	08-08	[20]	焼土	焼土27	胴部	PL.〔2〕-188		
		13841	1	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27周辺	口縁部	PL.〔2〕-269-2		
		13837	3	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27周辺	口縁部1, 胴部2			
		13830	4	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27周辺	口縁部1, 胴部3			
		13831	6	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27周辺	口縁部5, 胴部1			
		13926	1	08-08	[30]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13288	1	08-08	[01]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13928	1	08-08	[30]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13839	2	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13927	1	08-08	[30]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13804	3	08-09	[00]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13838	2	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13281	1	08-08	[02]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13974	1	08-07	[23]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13840	1	08-08	[20]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13300	1	08-08	[11]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		13909	1	08-08	[10]	Ⅳ	焼土27周辺	胴部			
		4457	2	16-22	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部			
		33片									
表	80	1549	8	10-05	[00]	覆土⑤層	5号竪穴住居	胴部	PL.〔2〕-157-6		
		2218	1	10-05	[00]	覆土⑤層	5号竪穴住居	胴部			
		2231	1	10-04	[02]	b ⁱ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部			
		2181	2	09-05	[11]	b ⁱ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部			
		2182	1	09-05	[11]	b ⁱ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部			
		2183	1	09-05	[21]	b ⁱ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部			
		2203	1	09-05	[22]	b ⁱ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部			
		2104	1	09-05	[20]	Ⅳ	1号土壌周辺の焼土・炭化物	胴部			

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL番号
瘞 (つづき)	80 2161	2	10-04	[13]	Ⅳ	1号土壇周辺の焼土・炭化物	胴部	
	3090	2	08-07	[30]	炭	5号土壇周辺	胴部	
	1535	1	10-05	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部	
	3048	1	10-05	[03]	V	遺構外	胴部	
	22片							
瘞	81 ✓ 1140	1	10-12	[00]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-100-3
	✓ 665	1	09-13	[10]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-107
	✓ 1138	1	09-12	[23]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部	
	✓ 1137	1	09-12	[22]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	✓ 666	1	09-13	[10]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	✓ 1139	1	09-12	[23]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	✓ 664	1	09-13	[10]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	✓ 668	1	09-13	[11]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	✓ 588	14	08-13	[30]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部5, 胴部9	
	✓ 1528	1	08-13	[30]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部	
	✓ 600	1	08-14	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部	
	24片							
瘞	82 1525	1	08-13	[30]	覆土⑤層	3号竪穴住居	口縁部	PL.[2]-100-5
	15137	1	05-11	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部	PL.[2]-108
	2片							
瘞	83 29	1	08-13	[21]	(不明)	焼土24	胴部	PL.[2]-109
	591	1	08-13	[21]	(不明)	焼土24	胴部	
	2868	1	08-13	[21]	V	焼土24	胴部	
	2927	1	08-13	[21]	Ⅵ	焼土24	胴部	
	2938	2	08-13	[21]	Ⅵ	焼土24	胴部	
6片								
瘞	84 12697	3	31-16	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部	PL.[2]-263-3
3片								
瘞	85 ✓ 12152	1	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部	PL.[2]-40-4
	12497	1	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部	PL.[2]-82
	12284	1	17-17	[01]	煙道	2号竪穴住居	胴部	
	12293	2	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12496	1	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部	
	1803	1	17-17	[21]	床	2号竪穴住居	胴部	
	1833	1	17-17	[20]	床	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 8531	1	17-18	[00]	床	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12297	5	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12295	1	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 8529	1	17-18	[00]	床直	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12240	4	17-17	[22]	カマド	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 1819	1	17-17	[22]	床直	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 11143	1	17-17	[22]	床直	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12238	2	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12286	1	17-17	[01]	煙道	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12500	1	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部	
	1828	1	17-16	[33]	床	2号竪穴住居	胴部	
	✓ 12516	1	16-17	[22]	焼土	焼土43	口縁部	
	✓ 488	1	16-17	[32]	b' 上	焼土43	口縁部	
	450	1	16-17	[12]	b' 上	焼土43	口縁部	
	✓ 472	1	16-17	[22]	b' 上	焼土43	胴部	
	498	1	16-17	[13]	b' 上	焼土43	胴部	
	485	4	16-17	[32]	b' 上	焼土43	胴部	
	482	1	16-17	[02]	b' 上	焼土43	胴部	
	483	1	16-17	[32]	b' 上	焼土43	胴部	
	✓ 11693	1	16-17	[12]	焼土	焼土43	胴部	
	12280	1	16-16	[33]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
	9942	1	16-17	[31]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
	12548	1	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
	✓ 9717	2	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43周辺	口縁部1, 胴部1	
	368	1	16-17	[22]	(不明)	焼土43周辺	胴部	
	✓ 12547	1	16-17	[23]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
	✓ 12283	1	16-16	[不明]	(不明)	焼土43周辺	口縁部	
	12282	1	16-16	[33]	Ⅳ	焼土43周辺	口縁部	
	6770	1	19-11	[20]	Ⅳ	焼土49	胴部	
	✓ 12490	1	21-15	[21]	Ⅳ	焼土62	胴部	
	✓ 7973	1	19-15	[00]	x ²	炭化物52	口縁部	
	7623	1	19-15	[11]	x ¹	炭化物52	口縁部	
	✓ 11344	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	口縁部	
	✓ 9025	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	口縁部	
	✓ 8997	1	19-15	[13]	x ¹	炭化物52	口縁部	
	7251	1	19-15	[33]	x ¹	炭化物52	胴部	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
85 甕 (つづき)	9069	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	口縁部	
	12118	2	19-15	[23]	IV	炭化物52	胴部	
	✓7921	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	胴部	
	✓7627	1	19-15	[11]	x'	炭化物52	胴部	
	✓5766	2	19-15	[32]	III	炭化物52	胴部	
	✓7925	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	胴部	
	✓9076	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	胴部	
	✓7586	1	20-16	[10]	III	炭化物52周辺	胴部	
	✓11449	2	20-16	[10]	IV	炭化物52周辺	胴部	
	✓12566	1	20-16	[00]	IV	炭化物52周辺	胴部	
	6040	1	20-16	[11]	III	炭化物52周辺	胴部	
	✓5690	5	20-16	[10]	III	炭化物52周辺	胴部	
	✓6019	4	20-16	[10]	III	炭化物52周辺	胴部	
	✓6020	2	20-16	[10]	III	炭化物52周辺	胴部	
	✓8788	1	17-12	[30]	マウンド上面	炭化物マウンド	口縁部	
	✓172	1	17-11	[03]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
	✓7028	1	17-12	[20]	IV	炭化物マウンド	口縁部	
	3303	4	17-11	[03]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
	7804	1	17-11	[13]	IV	炭化物マウンド	胴部	
	✓9680	3	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	✓8708	1	17-11	[23]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
	✓3341	2	17-11	[12]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
	✓2085	1	18-09	[03]	b'	炭化物マウンド	胴部	
	✓10239	1	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	✓16627	1	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	胴部	
	✓8688	2	17-11	[22]	マウンド上面	炭化物マウンド	胴部	
	✓9960	2	16-13	[23]	IV	遺構外	口縁部	
	✓9389	2	17-13	[31]	IV	遺構外	口縁部	
	✓9384	1	17-13	[13]	IV	遺構外	口縁部	
	✓6655	2	19-12	[32]	IV	遺構外	口縁部	
	✓9386	1	17-13	[21]	IV	遺構外	口縁部	
	✓9967	1	16-13	[22]	IV	遺構外	口縁部	
	✓5867	42	17-19	[11]	III	遺構外	口縁部	
	✓10737	1	16-13	[00]	IV	遺構外	口縁部	
	16433	3	10-18	[11]	V	遺構外	胴部	
	✓57	1	16-18	[30]	(不明)	遺構外	胴部	
	✓12204	1	16-18	[11]	IV	遺構外	胴部	
	✓9413	1	17-14	[00]	IV	遺構外	口縁部	
	✓9946	1	16-14	[03]	IV	遺構外	口縁部	
	158	1	16-13	[31]	(不明)	遺構外	口縁部	
160片								
86 甕	11437	1	21-16	[10]	IV	遺構外	口縁部	
	5938	1	22-16	[01]	IV	遺構外	口縁部	
	10990	1	22-18	[00]	カクラン	遺構外	口縁部	
	11420	1	21-16	[10]	IV	遺構外	胴部	
	11409	1	21-16	[00]	IV	遺構外	胴部	
	8921	4	20-13	[31]	V	遺構外	胴部	
	11419	1	21-16	[10]	IV	遺構外	胴部	
	11427	1	21-16	[10]	IV	遺構外	胴部	
	11417	1	21-16	[10]	IV	遺構外	胴部	
	11414	1	21-16	[01]	IV	遺構外	胴部	
	11442	1	21-16	[11]	IV	遺構外	胴部	
	11426	1	21-16	[10]	IV	遺構外	胴部	
	9476	1	21-16	[01]	III	遺構外	胴部	
	5695	1	20-15	[33]	IV	遺構外	底部	
	7881	5	21-16	[02]	IV	遺構外	胴部2, 底部3	
22片(口縁部1片, 胴部1片, 底部1片番号わからず)								
87 甕	1882	1	17-17	[22]	覆土④層	2号竪穴住居	底部	PL.②-42-3
	11809	1	15-17	[32]	土壌内	3号土壌	胴部	PL.②-83
	338	1	16-17	[12]	(不明)	焼土43	胴部	
	259	1	16-16	[32]	(不明)	焼土43	胴部	
	7625	1	19-15	[11]	x'	炭化物52	胴部	
	2002	2	18-10	[01]	b'	炭化物マウンド	胴部	
	2422	1	17-10	[30]	b'	炭化物マウンド	胴部	
	1867	2	18-10	[12]	カクラン	炭化物マウンド	胴部	
	1989	1	18-10	[00]	b'	炭化物マウンド	胴部	
	1999	1	18-10	[11]	b'	炭化物マウンド	胴部	
	1869	1	18-10	[01]	カクラン	炭化物マウンド	胴部	
	1872	1	18-10	[01]	カクラン	炭化物マウンド	胴部	
	1870	1	18-10	[01]	カクラン	炭化物マウンド	底部	
	1853	1	18-10	[01]	カクラン	炭化物マウンド	底部	

個体番号		遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL、番号
瘻 (つづき)	87	2269	1	17-10	[30]	b'	炭化物マウンド	胴部	
		2813	1	17-10	[31]	b'	炭化物マウンド	胴部	
		8734	1	17-11	[31]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	
		2270	1	17-10	[30]	b'	炭化物マウンド	胴部	
		20片							
瘻	88	11881	1	18-15	[31]	Ⅳ	炭化物52	口縁部	PL. [2]-267-4
		9515	1	18-15	[32]	x'	炭化物52	口縁部	
		11513	1	18-15	[31]	Ⅳ	炭化物52	口縁部	
		9512	1	18-15	[31]	x'	炭化物52	胴部	
		8438	2	19-14	[13]	カクラン	炭化物52周辺	口縁部	
		11490	3	18-15	[10]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部2, 胴部1	
		11795	1	18-15	[10]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部	
		11796	1	18-15	[10]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部	
11片(胴部1片番号わからず)									
瘻	89	14150	1	06-08	[20]	V	焼土13	胴部	PL. [2]-175
		14393	1	06-08	[20]	V	焼土13	胴部	
		15389	1	07-08	[03]	焼土	焼土18	口縁部	
		15407	1	07-08	[12]	V	焼土18周辺	胴部	
		13035	2	07-08	[11]	Ⅳ	焼土18周辺	胴部	
6片								胴部	
瘻	90	2755	1	18-10	[01]	b'	炭化物マウンド	口縁部	PL. [2]-205-1
		1123	3	21-22	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部1, 底部2	PL. [2]-243
4片									
瘻	91	11443	1	21-16	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		12669	1	21-15	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		12022	1	21-17	[12]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		11930	1	21-17	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		11931	1	21-17	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		11276	1	21-16	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		11277	1	21-16	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		7片							
瘻	92	1751	1	18-16	[02]	床直	2号竪穴住居	胴部	PL. [2]-43-3
		11555	1	18-16	[03]	床直	2号竪穴住居	胴部	PL. [2]-84
		1758	1	18-16	[13]	床直	2号竪穴住居	底部	
		7697	1	19-15	[23]	x'	炭化物52	胴部	
		5727	2	19-15	[11]	Ⅲ	炭化物52	胴部	
		7684	1	19-15	[13]	x'	炭化物52	胴部	
		8886	1	18-15	[31]	x'	炭化物52	胴部	
		7617	1	19-15	[01]	x'	炭化物52	胴部	
		5726	1	19-15	[11]	Ⅲ	炭化物52	胴部	
		222	1	18-15	[32]	(不明)	炭化物52	底部	
		5751	1	19-15	[22]	Ⅲ	炭化物52	胴部	
		16777	1	19-15	[不明]	(不明)	炭化物52	胴部	
		13片							
瘻	93	393	1	17-17	[12]	カマド周辺	2号竪穴住居	胴部	PL. [2]-33-3
		8214	1	15-17	[21]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部	PL. [2]-86
		8224	1	15-17	[31]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部	
		8229	1	15-17	[20]	Ⅲ	焼土41周辺	胴部	
		9754	1	15-17	[23]	Ⅳ	焼土41周辺	胴部	
		8469	1	16-17	[13]	焼土	焼土43	底部	
		8222	1	15-17	[31]	Ⅲ	焼土43周辺	胴部	
		11170	2	15-17	[23]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		8208	1	15-17	[22]	Ⅲ	焼土43周辺	胴部	
		8207	1	15-17	[22]	Ⅲ	焼土43周辺	胴部	
		5854	1	15-17	[21]	Ⅲ	焼土43周辺	胴部	
		5853	1	15-17	[21]	Ⅲ	焼土43周辺	胴部	
		11187	1	16-17	[02]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		11171	1	15-17	[23]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		11148	1	15-17	[31]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		11167	1	15-17	[13]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		803	1	15-17	[13]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		11166	1	15-17	[13]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		5857	2	15-17	[13]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		5837	1	15-16	[33]	Ⅲ	焼土43周辺	胴部	
		14521	1	04-08	[32]	Ⅵ	炭化物4	底部	
		11513	2	18-15	[31]	Ⅳ	炭化物52	胴部	
		11971	1	18-15	[31]	x²	炭化物52	胴部	
		8881	1	18-15	[31]	x'	炭化物52	胴部	
8857	1	19-15	[01]	x'	炭化物52	胴部			
7611	1	19-15	[01]	x'	炭化物52	胴部			
8856	1	19-15	[01]	x'	炭化物52	胴部			

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壙 (つづき)	93	7429	1	19-15	[22]	x ¹	炭化物52	胴部
		9098	1	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	胴部
		5767	1	19-15	[32]	Ⅲ	炭化物52	胴部
		7452	2	19-15	[32]	x ¹	炭化物52	胴部
		4449	1	15-18	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		5303	1	16-18	[不明]	表採	遺構外	胴部
		4448	1	15-18	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4447	1	15-18	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4146	1	15-18	[31]	Ⅳ	遺構外	底部
		8022	1	16-18	[11]	Ⅳ	遺構外	底部
		4133	1	15-18	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部
		42片(胴部4片番号わからず)						
壙	94	9167	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部
		9169	4	19-15	[30]	x ¹	炭化物52	胴部3, 底部1
		5片						
壙	95	381	1	16-17	[30]	(不明)	焼土43	胴部
		8315	1	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部
		3816	6	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部
		383	2	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部
		8317	3	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部
		9935	2	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部
		9720	1	16-17	[31]	焼土	焼土43	胴部
		9484	3	16-17	[31]	焼土	焼土43	胴部
		9483	4	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部
		8314	1	16-17	[30]	焼土	焼土43	胴部
		24片(胴部3片番号わからず)						
壙	96	4178	2	21-18	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4242	4	21-18	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部2, 胴部2
		878	1	21-19	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		862	7	21-19	[20]	Ⅳ	遺構外	口縁部4, 胴部3
		866	1	21-19	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4245	1	22-18	[01]	Ⅳ	遺構外	胴部
		854	1	21-19	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		858	1	21-19	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		861	1	21-19	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		864	1	21-19	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		857	3	21-19	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		871	1	21-19	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部
		24片(胴部1片番号わからず)						
壙	97	87	2	22-21	[31]	(不明)	遺構外	口縁部
		90	15	22-21	[31]	(不明)	遺構外	口縁部2, 胴部13
		91	2	22-18	[31]	(不明)	遺構外	胴部
		912	7	22-21	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部4, 胴部3
		913	10	22-21	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部8, 胴部2
		916	3	22-21	[21]	Ⅳ	遺構外	胴部
		918	1	22-21	[22]	Ⅳ	遺構外	底部
		774	1	22-21	[13]	Ⅳ	遺構外	底部
		775	2	22-21	[13]	Ⅳ	遺構外	底部
		43片						
壙	98	15664	2	08-09	[03]	x ^a	4号土壌	口縁部
		15636	4	08-09	[03]	x ^a	4号土壌	口縁部2, 胴部2
		13891	1	08-11	[30]	焼土	焼土・炭化物22	胴部
		13902	1	09-11	[03]	焼土	焼土・炭化物22	胴部
		13893	1	09-11	[00]	焼土	焼土・炭化物22	胴部
		13069	4	09-11	[00]	Ⅳ	焼土・炭化物22	口縁部2, 胴部2
		14283	1	09-10	[03]	V	焼土・炭化物22周辺	口縁部
		14片(口縁部1片番号わからず)						
壙	99	9243	1	17-11	[11]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		9312	1	17-11	[03]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部
		2876	10	18-10	[02]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部6, 胴部4
		12片						
壙	100	3854	4	10-08	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部2, 胴部2
		3857	5	10-08	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		3860	5	10-08	[11]	Ⅳ	遺構外	口縁部3, 胴部2
		14片						
壙	102	6444	1	18-10	[31]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部
		6610	4	18-10	[31]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部
		8384	1	18-10	[33]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部
		8266	3	18-11	[20]	Ⅳ	炭化物マウンド周辺	胴部
		6539	6	19-10	[11]	Ⅳ	焼土49周辺	胴部
		6540	3	19-10	[11]	Ⅳ	焼土49周辺	胴部2, 底部1

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壙 (つづき)	102	5413	1	20-10	[20]	IV	焼土49周辺	胴部
		6449	2	19-10	[13]	IV	焼土49周辺	胴部1, 底部1
		6456	1	19-10	[12]	IV	焼土49周辺	底部
		6611	1	19-11	[12]	IV	炭化物・焼土50	胴部
		6688	1	19-11	[20]	IV	炭化物・焼土50	胴部
		6477	8	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6485	1	11-10	[32]	IV	遺構外	胴部
		6467	1	11-10	[20]	IV	遺構外	胴部
		6463	1	11-10	[20]	IV	遺構外	胴部
		6481	3	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6479	1	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6480	2	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6488	1	11-10	[33]	IV	遺構外	胴部
		6461	1	11-10	[30]	IV	遺構外	胴部
		6471	1	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6462	1	11-10	[20]	IV	遺構外	胴部
		6487	1	11-10	[22]	IV	遺構外	胴部
		6475	3	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6486	1	11-10	[22]	IV	遺構外	胴部
		6476	1	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6489	2	11-10	[32]	IV	遺構外	胴部
		6483	2	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6465	1	11-10	[20]	IV	遺構外	胴部
		6473	1	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6478	4	11-10	[21]	IV	遺構外	胴部
		6474	3	11-10	[21]	IV	遺構外	底部
		12644	8	31-17	[10]	III	遺構外	口縁部
		6436	1	18-09	[32]	IV	遺構外	胴部
		6508	1	20-09	[02]	IV	遺構外	胴部
		6553	1	20-10	[10]	IV	遺構外	胴部
		6440	1	18-09	[33]	IV	遺構外	胴部
		6441	1	18-09	[33]	IV	遺構外	胴部
		6509	1	20-09	[01]	IV	遺構外	胴部
		6558	1	18-09	[33]	IV	遺構外	胴部
		79片						
壙	103	1446	1	10-05	[31]	床	5号竪穴住居	胴部
		1302	3	10-05	[12]	床	5号竪穴住居	胴部2, 底部1
		1301	1	10-05	[12]	床	5号竪穴住居	底部
		1466	1	12-08	[20]	IV	遺構外	胴部
		6片						
壙	104	2552	2	08-13	[11]	V	焼土24	胴部1, 底部1
壙	105	2片						
		12296	2	16-17	[31]	煙道	2号竪穴住居	胴部
		11708	1	15-17	[32]	土壌内	3号土壌	胴部
		11197	1	16-17	[02]	焼土	焼土43	胴部
		10502	1	16-16	[33]	焼土	焼土43	胴部
		12662	2	16-17	[13]	IV	焼土43周辺	底部1, 胴部1
		12096	1	16-16	[33]	IV	焼土43周辺	胴部
		173	1	17-11	[12]	(不明)	炭化物マウンド	胴部
		9203	1	17-11	[02]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		16550	1	17-12	[10]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		8625	1	17-11	[03]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		7798	1	17-12	[20]	IV	炭化物マウンド	胴部
		9630	1	17-12	[11]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9270	1	17-11	[13]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部
		9655	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		9695	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	胴部
		2421	1	17-10	[30]	b'	炭化物マウンド	底部
		16504	1	07-09	[33]	(不明)	遺構外	胴部
		15975	1	06-05	[33]	VI	遺構外	胴部
		20片						
壙	106	5731	16	19-15	[01]	III	炭化物52	胴部12, 底部4
壙	108	16片						
		1623	3	08-13	[20]	煙道	3号竪穴住居	胴部2, 底部1
		1624	4	09-13	[00]	煙道	3号竪穴住居	胴部
壙	109	7片						
		7271	1	27-16	[12]	炭	炭化物・焼土70	底部
		7269	2	27-16	[03]	炭	炭化物・焼土70	胴部1, 底部1
壙	110	3片						
		5497	1	26-17	[不明]	表土	炭化物・焼土70	底部
		5498	1	26-17	[不明]	表土	炭化物・焼土70	胴部

個体番号		遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL・番号
壺 (つづき)	110	5510	2	26-16	[22]	Ⅲ	炭化物・焼土70	胴部	
			4片						
壺	111	13374	1	07-08	[02]	Ⅳ	炭化物19	胴部	
		14894	2	07-08	[02]	焼土	炭化物19	胴部1, 底部1	
		16471	1	10-17	[22]	V	遺構外	底部	
		16474	1	10-17	[32]	V	遺構外	胴部	
			5片(胴部1片番号わからず)						
壺	112	7918	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	胴部	
		8856	3	19-15	[01]	x ¹	炭化物52	胴部2, 底部1	
		9073	1	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	胴部	
		898	1	18-20	[10]	Ⅳ	遺構外	底部	
		899	1	18-20	[10]	Ⅳ	遺構外	底部	
		1162	2	18-20	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		9片							
壺	113	9220	1	17-12	[00]	マウンド上	炭化物マウンド	胴部	PL[2]-249
		✓3523	4	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		✓3530	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	胴部	
		✓189	1	17-12	[11]	(不明)	炭化物マウンド	胴部	
		✓7347	3	17-12	[10]	Ⅳ	炭化物マウンド	胴部1, 底部2	
		✓9426	1	17-11	[13]	マウンド	炭化物マウンド	底部	
		✓3542	1	17-12	[00]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	
			12片						
壺	114	156	6	18-14	[32]	(不明)	遺構外	胴部3, 底部3	
		8431	1	18-14	[23]	Ⅳ	遺構外	底部	
			7片						
壺	115	7415	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	底部	PL[2]-88
		11960	3	18-15	[20]	Ⅳ	炭化物52周辺	胴部1, 底部2	
		9816	1	17-13	[03]	Ⅳ	炭化物マウンド周辺	胴部	
		10170	1	17-13	[00]	Ⅳ	炭化物マウンド周辺	胴部	
		11575	3	15-16	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		7281	1	15-13	[33]	Ⅳ	遺構外	底部	
		1237	1	12-07	[32]	Ⅳ	遺構外	底部	
			11片						
壺	116	1737	1	17-16	[33]	覆土④層	2号竪穴住居	底部	PL[2]-40-5
		11194	1	15-17	[31]	Ⅳ	焼土43	胴部	PL[2]-89
		11286	1	17-16	[12]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		11063	1	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	胴部	
		9046	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	胴部	
		78	1	19-15	[32]	(不明)	炭化物52	胴部	
		218	1	18-15	[30]	(不明)	炭化物52周辺	胴部	
		11630	1	16-13	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部	
	8片								
壺	117	14066	1	09-10	[10]	V	炭化物・焼土20・21	口縁部	
		14727	1	09-09	[03]	V	炭化物・焼土20・21	口縁部	
		14729	1	09-09	[13]	V	炭化物・焼土20・21	口縁部	
		14285	1	09-10	[10]	V	炭化物・焼土20・21	口縁部	
		14050	1	09-10	[00]	V	炭化物・焼土20・21	口縁部	
		14725	1	09-10	[20]	V	炭化物・焼土20・21周辺	口縁部	
		4022	1	10-09	[22]	V	炭化物・焼土20・21周辺	口縁部	
		4066	1	09-09	[23]	V	炭化物・焼土20・21周辺	口縁部	
		14069	1	09-09	[11]	V	炭化物・焼土20・21周辺	口縁部	
	9片								
壺	118	1889	1	17-16	[23]	床直	2号竪穴住居	口縁部	PL[2]-43-2
		16524	2	17-17	[不明]	カマド	2号竪穴住居	口縁部	PL[2]-90
		16702	1	17-17	[不明]	カマド	2号竪穴住居	口縁部	
		12161	1	17-17	[不明]	カマド	2号竪穴住居	胴部	
		535	1	17-17	[10]	床直	2号竪穴住居	胴部	
		12239	1	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居	胴部	
		1802	1	17-17	[11]	床直	2号竪穴住居	胴部	
		9193	1	17-18	[00]	床直	2号竪穴住居	胴部	
		9194	1	17-18	[00]	床直	2号竪穴住居	底部	
		16517	1	18-18	[不明]	床直	2号竪穴住居	口縁部	
		5858	1	15-17	[00]	Ⅲ	焼土41	胴部	
		8096	1	15-17	[00]	Ⅲ	焼土41	胴部	
		11812	1	15-17	[00]	(不明)	焼土41	胴部	
		11188	1	16-17	[02]	Ⅳ	焼土43	胴部	
		11150	1	15-17	[30]	Ⅳ	焼土43	胴部	
		12088	1	16-16	[21]	Ⅳ	焼土43周辺	口縁部	
		11569	2	15-16	[20]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
		9750	1	15-17	[01]	Ⅳ	焼土43周辺	胴部	
223	3	15-16	[30]	(不明)	焼土43周辺	胴部			

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL番号	
壙 (つづき)	118	225	3	15-16	[31]	(不明)	焼土43周辺	胴部	
		226	1	15-16	[31]	(不明)	焼土43周辺	胴部	
		7572	1	18-12	[20]	Ⅳ	焼土47	胴部	
		7059	1	18-12	[20]	Ⅳ	焼土47	胴部	
		11643	1	18-12	[30]	Ⅳ	焼土47	胴部	
		7056	1	18-12	[30]	Ⅳ	焼土47	胴部	
		8389	1	20-12	[33]	Ⅳ	焼土60周辺	口縁部	
		10068	1	17-12	[21]	マウンド	炭化物マウンド	口縁部	
		1952	2	17-10	[31]	b ¹	炭化物マウンド	胴部	
		16731	1	17-10	[不明]	b ²	炭化物マウンド	胴部	
		2045	1	17-09	[13]	b ¹	炭化物マウンド周辺	口縁部	
		6769	1	19-11	[01]	Ⅳ	炭化物・焼土50	口縁部	
		6742	1	19-11	[11]	Ⅳ	炭化物・焼土50	口縁部	
		6778	1	19-11	[21]	Ⅳ	炭化物・焼土50	胴部	
		6776	1	19-11	[21]	Ⅳ	炭化物・焼土50	胴部	
		6739	1	19-11	[02]	Ⅳ	炭化物・焼土50	胴部	
		6743	2	19-11	[11]	Ⅳ	炭化物・焼土50	胴部	
		6744	1	19-11	[12]	Ⅳ	炭化物・焼土50	胴部	
		10953	1	19-15	[10]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		5711	2	19-15	[10]	Ⅲ	炭化物52	口縁部	
		8887	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		11966	1	18-15	[30]	x ²	炭化物52	口縁部	
		8898	2	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		12138	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		11880	1	18-15	[31]	Ⅳ	炭化物52	口縁部	
		8851	1	19-15	[00]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		11507	2	18-15	[30]	Ⅳ	炭化物52	口縁部	
		8883	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		12440	1	18-15	[30]	x ²	炭化物52	口縁部	
		11875	1	18-15	[30]	Ⅳ	炭化物52	口縁部	
		8600	1	19-15	[00]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		8899	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		11965	1	18-15	[30]	x ²	炭化物52	口縁部	
		9048	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		7410	1	19-15	[11]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		7620	1	19-15	[11]	x ¹	炭化物52	口縁部	
		11970	1	18-15	[30]	x ²	炭化物52	口縁部	
		12562	1	20-15	[03]	Ⅲ	炭化物52	口縁部	
		9536	1	20-15	[03]	x ¹	炭化物52	胴部	
		12137	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	胴部	
		11876	1	18-15	[30]	Ⅳ	炭化物52	胴部	
		11968	2	18-15	[30]	x ²	炭化物52	胴部	
		9508	1	18-15	[30]	x ²	炭化物52	胴部	
		12140	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	胴部	
		12135	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	胴部	
		12139	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	胴部	
		11506	1	18-15	[30]	Ⅳ	炭化物52	胴部	
		9507	1	18-15	[30]	x ¹	炭化物52	胴部	
		11446	1	20-16	[30]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部	
		5691	1	20-16	[10]	Ⅲ	炭化物52周辺	胴部	
		12568	1	20-16	[00]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部	
		8184	1	19-14	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		10370	1	18-14	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		10373	1	18-14	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		10353	1	18-14	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		10355	1	18-14	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		10370	1	18-14	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		4080	1	10-10	[31]	V	遺構外	胴部	
		4034	1	10-09	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部	
		11632	1	16-13	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		7753	1	14-15	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部	
		8060	1	13-14	[22]	Ⅲ	遺構外	口縁部	
		5859	1	14-17	[30]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		3923	1	09-07	[33]	Ⅲ	遺構外	胴部	
		9955	1	16-14	[20]	Ⅲ	遺構外	胴部	
96片(口縁部3片番号わからず)									
壙	119	7472	1	20-15	[03]	焼土上	炭化物52	底部	PL.図-250
		8786	1	17-12	[22]	マウンド上	炭化物マウンド	底部	
		2片							
壙	120	3404	1	17-11	[22]	マウンド内	炭化物マウンド	底部	
		1片							

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壺	121	848	1	19-18	[33]	IV	遺構外	底部
			1片					
壺	122	13997	1	08-09	[10]	IV	4号土壇周辺	底部
		13999	1	08-09	[20]	IV	4号土壇周辺	底部
			2片					
壺	123	5681	1	21-17	[32]	IV	遺構外	底部
			1片					
壺	124	7791	1	14-13	[11]	IV	遺構外	底部
			1片					
壺	125	9982	1	16-13	[21]	IV	遺構外	底部
			1片					
壺	126	886	2	20-19	[23]	IV	遺構外	底部
		4176	1	22-18	[21]	III	遺構外	底部
			3片					
壺	127	4193	1	17-21	[30]	IV	遺構外	底部
		4318	1	17-20	[02]	IV	遺構外	底部
		4346	1	17-20	[32]	IV	遺構外	底部
		4358	1	17-20	[30]	IV	遺構外	底部
			4片(底部1片番号わからず)					
壺	128	12520	1	16-18	[00]	IV	焼土43	底部
			1片					
壺	129	822	1	11-04	[03]	床	5号竪穴住居	底部
			1片					
壺	130	10220	1	17-11	[20]	マウンド	炭化物マウンド	底部
			1片					
壺	131	9192	1	19-15	[00]	Ⅹ ²	炭化物52	底部
		892	1	20-19	[02]	IV	遺構外	底部
			2片(底部1片番号わからず)					
壺	132	9289	1	17-12	[10]	マウンド上	炭化物マウンド	底部
		10283	1	17-12	[20]	マウンド	炭化物マウンド	底部
			2片					
壺	133	5969	8	22-15	[01]	IV	遺構外	底部
			8片					
壺	134	16	1	07-14	[30]	(不明)	遺構外	底部
		4486	1	07-14	[31]	IV	遺構外	底部
			2片					
壺	135	15926	1	07-09	[33]	V	遺構外	底部
			1片					
壺	136	13273	1	08-08	[03]	IV	焼土27	胴部
		12961	1	07-06	[03]	IV	遺構外	胴部
		12996	1	07-08	[01]	IV	遺構外	胴部
		15059	1	06-07	[31]	IV	遺構外	胴部
			4片					
壺	137	14916	1	07-08	[13]	焼土	炭化物19	胴部
		14917	1	07-09	[10]	焼土	炭化物19	胴部
		14038	1	07-09	[01]	IV	炭化物19周辺	底部
		14039	1	07-09	[00]	IV	炭化物19周辺	底部
		14380	1	06-08	[33]	IV	遺構外	底部
		14500	1	07-05	[03]	IV	遺構外	底部
			6片					
壺	138	1145	1	10-11	[23]	覆土⑤層	3号竪穴住居	底部
		1146	1	10-12	[20]	覆土⑤層	3号竪穴住居	底部
			2片					
壺	139	15190	1	05-10	[23]	IV	遺構外	底部
		15191	1	05-10	[23]	IV	遺構外	底部
			2片					
壺	140	5529	2	26-16	[33]	III	遺構外	底部
			2片					
壺	141	1175	1	10-05	[21]	床直	5号竪穴住居	底部
		13390	1	08-08	[31]	IV	焼土27	底部
			2片					
壺	142	4607	1	11-07	[30]	IV	遺構外	底部
		4609	1	11-07	[30]	IV	遺構外	底部
			2片					
壺	143	3286	2	09-06	[22]	IV	遺構外	底部
			2片					
壺	144	640	1	12-21	[10]	IV	遺構外	底部
			1片					
壺	145	1555	6	27-16	[03]	III	炭化物・焼土70	底部
			6片					
壺	146	126	3	16-17	[30]	(不明)	焼土43	底部
			3片					

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
壙	147	543	1	17-17	[不明]	カクラン	2号竪穴住居	底部
		81	1	19-15	[32]	(不明)	炭化物52	底部
		7419	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	底部
		11057	1	19-15	[12]	x ¹	炭化物52	底部
		221	4	18-15	[31]	(不明)	炭化物52周辺	底部
		8片(底部2片番号わからず)						
壙	148	6166	1	26-15	[23]	焼土	焼土68	底部
		6097	1	29-15	[21]	Ⅲ	遺構外	底部
		2片(底部1片番号わからず)						
壙	149	617	1	10-04	[23]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	底部
		3033	1	10-04	[12]	炭化物層下	1号土壌周辺の焼土・炭化物	底部
		3785	1	10-07	[13]	Ⅳ	遺構外	底部
		14888	1	09-07	[02]	b ¹	遺構外	底部
		15717	1	05-06	[12]	V	遺構外	底部
		15996	2	05-06	[20]	V	遺構外	底部
		7片(底部1片番号わからず)						
壙	150	9122	1	18-18	[13]	覆土④層	2号竪穴住居	底部
		1片						
壙	151	7185	1	27-16	[02]	炭	炭化物・焼土70	底部
		7207	2	27-16	[03]	炭	炭化物・焼土70	底部
		5497	1	26-17	[不明]	表土	炭化物・焼土70	底部
		5498	2	26-17	[不明]	表土	炭化物・焼土70	底部
		6片						
壙	152	16163	1	08-09	[02]	x ⁷	4号土壌	底部
		15475	1	06-09	[10]	焼土	炭化物14	胴部
		15477	1	06-09	[10]	焼土	炭化物14	胴部
		15488	1	06-09	[11]	焼土	炭化物14	口縁部
		13568	1	07-09	[10]	Ⅳ	炭化物19	口縁部
		15384	1	07-09	[00]	カクラン	炭化物19	口縁部
		14908	1	07-08	[13]	焼土	炭化物19	胴部
		14914	1	07-08	[13]	焼土	炭化物19	胴部
		13586	1	07-09	[00]	Ⅳ	炭化物19周辺	口縁部
		13017	1	07-08	[03]	Ⅳ	炭化物19周辺	口縁部
		13223	1	07-08	[21]	Ⅳ	炭化物19周辺	胴部
		13023	1	07-08	[03]	Ⅳ	炭化物19周辺	胴部
		2684	2	08-12	[22]	V	焼土24	胴部
		15299	1	05-08	[02]	Ⅵ	遺構外	口縁部
		15754	1	04-09	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部
		15831	1	05-06	[31]	V	遺構外	胴部
		14382	1	06-08	[33]	V	遺構外	口縁部
		18片						
壙	153	14569	1	06-10	[31]	焼土	炭化物16	底部
		14404	1	06-10	[00]	V	炭化物16周辺	底部
		4632	1	12-08	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		1633	2	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4629	1	11-08	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4639	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		1632	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		1018	1	12-08	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4784	1	12-08	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4639	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4785	1	12-08	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4786	2	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4623	1	11-08	[11]	V	遺構外	胴部
		4624	1	11-08	[11]	V	遺構外	胴部
		4625	1	11-08	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部
		925	2	12-08	[03]	Ⅳ	遺構外	胴部
		752	1	11-08	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部
		765	1	12-09	[00]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4638	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4640	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		1468	1	12-08	[11]	Ⅳ	遺構外	胴部
		755	1	11-09	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部
		834	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		836	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		926	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		4636	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		1634	1	12-08	[02]	Ⅳ	遺構外	胴部
		762	1	11-10	[10]	Ⅳ	遺構外	胴部
		31片(口縁部1片, 胴部1片, 底部1片番号わからず)						
壙	154	63	1	19-20	[31]	(不明)	遺構外	口縁部

PL. [2]-269-3

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL、番号				
壙 (つづき)	154	907	1	20-20	[00]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		908	1	20-20	[02]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		918	45	22-21	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部8, 胴部37				
		921	5	22-21	[22]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		1128	11	22-21	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		914	14	22-21	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		915	18	22-21	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部15, 底部3				
		917	22	22-21	[22]	Ⅳ	遺構外	胴部16, 底部6				
118片(口縁部3片, 胴部9片, 底部1片 番号わからず)												
壙	155	5662	19	22-16	[02]	Ⅲ	焼土64	口縁部6, 胴部13	PL.[2]-263-2			
		5978	1	22-15	[12]	Ⅳ	焼土64	口縁部				
		5941	1	22-16	[21]	Ⅳ	焼土64	口縁部				
		5939	1	22-16	[11]	Ⅳ	焼土64	口縁部				
		5661	1	22-16	[02]	Ⅲ	焼土64	胴部				
		778	1	22-16	[12]	Ⅳ	焼土64	胴部				
		777	1	22-16	[11]	Ⅳ	焼土64	胴部				
		5933	1	22-16	[00]	Ⅳ	焼土64	胴部				
		5931	1	22-16	[00]	Ⅳ	焼土64	胴部				
		5657	1	22-16	[01]	Ⅳ	焼土64	胴部				
		5660	1	22-16	[02]	Ⅲ	焼土64	胴部				
		5653	4	22-16	[20]	Ⅳ	焼土64	胴部				
		5659	2	22-16	[01]	Ⅲ	焼土64	底部				
		7494	2	21-16	[21]	Ⅳ	焼土64周辺	口縁部1, 胴部1				
		6058	2	21-16	[01]	Ⅲ	焼土64周辺	胴部				
		5819	2	19-16	[01]	Ⅲ	遺構外	口縁部				
		41片(口縁部2片, 胴部3片 番号わからず)										
壙	156	9123	1	18-19	[20]	床	2号竪穴住居	胴部	PL.[2]-40-2			
		12485	1	19-14	[03]	Ⅳ	炭化物52周辺	口縁部		PL.[2]-91		
		12684	1	19-18	[31]	Ⅳ	焼土・炭化物59	胴部				
		4182	1	20-18	[01]	Ⅳ	焼土・炭化物59	胴部				
		4200	1	20-18	[02]	Ⅳ	焼土・炭化物59	底部				
		4187	1	19-18	[22]	Ⅳ	焼土・炭化物59周辺	口縁部				
		1160	2	20-18	[10]	Ⅳ	焼土・炭化物59周辺	口縁部				
		4315	1	17-20	[01]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		4345	1	17-20	[32]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		4350	1	17-20	[33]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		4356	1	17-20	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		10899	3	21-17	[23]	Ⅳ	遺構外	底部				
		10978	1	21-17	[不明]	カクラン	遺構外	底部				
		11241	1	21-17	[不明]	カクラン	遺構外	底部				
		17片(胴部2片 番号わからず)										
壙	158	3767	1	09-07	[23]	Ⅳ	遺構外	口縁部	PL.[2]-291			
		3920	8	09-07	[33]	V	遺構外	口縁部				
		3839	1	09-08	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		3823	2	09-08	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		3828	2	09-08	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		3831	2	09-08	[30]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		3838	1	09-08	[31]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		3843	1	09-08	[21]	Ⅳ	遺構外	口縁部				
		3820	1	09-08	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3821	1	09-08	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3830	1	09-08	[30]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3837	1	09-08	[31]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3922	2	09-07	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3767	1	09-07	[23]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3818	1	09-08	[20]	Ⅳ	遺構外	胴部				
		3919	1	09-07	[33]	V	遺構外	底部				
		3813	1	09-08	[11]	Ⅲ上	遺構外	底部				
		3769	1	09-07	[23]	Ⅳ	遺構外	底部				
		3817	1	09-08	[20]	Ⅳ	遺構外	底部				
		30片										
		壙	159	13570	1	07-09	[10]	Ⅳ		炭化物19	胴部	PL.[2]-40-6
				14031	1	07-09	[21]	Ⅳ		炭化物19	胴部	
16018	1			08-09	[33]	炭化物層	炭化物・焼土20・21	胴部				
16019	1			08-09	[33]	炭化物層	炭化物・焼土20・21	胴部				
16010	1			08-09	[23]	炭化物層	炭化物・焼土20・21	底部				
16013	1			08-09	[23]	炭化物層	炭化物・焼土20・21	底部				
4202	1			10-11	[33]	Ⅳ	遺構外	胴部				
14271	1			08-10	[30]	V	遺構外	底部				
16205	1			08-10	[30]	V	遺構外	胴部				
9片												

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
瘡	160	15129	1	05-11	[30]	IV	遺構外	底部
		15149	1	05-10	[00]	IV	遺構外	底部
		15285	1	05-09	[12]	IV	遺構外	底部
		3片						
瘡	161	6679	2	23-16	[01]	IV	焼土64	胴部
		12805	1	22-16	[31]	IV	焼土64	胴部
		5606	1	25-16	[03]	IV	焼土67	底部
		4片						PL.[2]-248
瘡	162	6923	1	27-16	[03]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		6926	1	27-16	[02]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		6940	2	27-16	[03]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		6943	1	27-16	[02]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		7174	1	26-16	[32]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		7205	2	27-16	[03]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		7218	1	27-16	[03]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		7222	1	27-16	[03]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		7262	1	27-16	[02]	炭	炭化物・焼土70	胴部
		16510	1	27-16	[不明]	炭化物層	炭化物・焼土70	胴部
		5557	1	27-16	[03]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		5558	1	27-16	[03]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		5569	1	27-16	[13]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		5576	1	27-16	[13]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		6245	1	27-16	[02]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		6248	1	27-16	[02]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		6265	1	27-16	[03]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		6296	1	27-16	[13]	Ⅲ	炭化物・焼土70周辺	胴部
		6331	1	27-16	[32]	IV	炭化物・焼土70周辺	胴部
		21片						PL.[2]-292
瘡	163	825	1	10-05	[20]	覆土⑤層	5号竪穴住居	口縁部
		3998	2	09-10	[21]	IV	焼土・炭化物22	口縁部
		13724	3	09-10	[23]	IV	焼土・炭化物22	胴部
		13721	2	09-10	[23]	IV	焼土・炭化物22	胴部
		13722	1	09-10	[23]	IV	焼土・炭化物22	口縁部
		13661	1	09-09	[03]	IV	遺構外	口縁部
		13665	1	09-09	[03]	IV	遺構外	口縁部
		13078	1	09-11	[33]	IV	遺構外	口縁部
		5198	1	09-06	[02]	IV	遺構外	口縁部
		12883	1	09-06	[01]	IV	遺構外	口縁部
		13666	2	09-09	[03]	IV	遺構外	胴部
		16片						
瘡	164	626	2	13-15	[10]	IV	焼土37	胴部
		1651	1	13-09	[20]	IV	遺構外	胴部
		7744	1	14-15	[10]	IV	遺構外	口縁部
		163	1	13-14	[32]	IV	遺構外	口縁部
		7303	1	14-14	[20]	IV	遺構外	胴部
		6片						
瘡	165	√3069	1	08-12	[13]	煙道	3号竪穴住居	胴部
		668	2	09-13	[11]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部
		1131	1	09-12	[11]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部
		1531	1	08-12	[23]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部
		674	1	09-13	[31]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部
		√1518	1	08-12	[33]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部
		√670	4	09-13	[12]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部
		√1520	2	08-12	[23]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部
		3356	1	07-13	[13]	IV	焼土24	胴部
		√2536	1	07-13	[30]	V	焼土24	胴部
		√2587	1	08-12	[21]	V	焼土24	胴部
		√2962	1	08-12	[13]	V	焼土24	胴部
		√2546	3	08-13	[10]	V	焼土24	胴部
		√1521	2	08-12	[23]	IV	焼土24	胴部
		√1604	4	08-13	[33]	(不明)	焼土24	胴部
		√17	1	08-13	[01]	(不明)	焼土24	胴部
		18	2	08-13	[01]	(不明)	焼土24	胴部
		√2540	1	07-13	[31]	V	焼土24	胴部
		2543	1	08-13	[10]	V	焼土24	胴部
		√2578	1	08-12	[02]	V	焼土24	胴部
		√2575	1	08-12	[13]	V	焼土24	胴部
		√1524	1	08-12	[22]	IV	焼土24	胴部
		√2582	1	08-12	[12]	V	焼土24	胴部
		2576	1	08-12	[13]	V	焼土24	胴部
		√24	3	08-13	[13]	(不明)	焼土24	胴部
		PL.[2]-114						

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
瘞 (つづき)	165 2534	1	07-13	[20]	V	焼土24	胴部	
	✓2580	1	08-12	[12]	V	焼土24	胴部	
	✓3009	1	08-13	[00]	V	焼土24	胴部	
	✓2610		07-12	[12]	V	焼土24	胴部	
	43片							
瘞	166 1609	4	08-13	[30]	煙道	3号竪穴住居	胴部	PL.[2]-99-4
	1526	1	08-13	[30]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	PL.[2]-115
	1141	1	10-12	[02]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	1142	1	10-12	[03]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	1520	4	08-12	[23]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部3, 底部1	
	1515	1	08-12	[33]	覆土⑤層	3号竪穴住居	胴部	
	2544	1	08-13	[10]	V	焼土24	胴部	
瘞	13片							
	167 16205	9	08-10	[30]	V	炭化物・焼土20・21	胴部6, 底部3	
	4513	1	08-16	[30]	IV	遺構外	胴部	
瘞	10片							
	168 10414	1	19-13	[32]	IV	遺構外	底部	
瘞	1片							
	169 5658	1	22-16	[01]	IV	遺構外	胴部	
	7486	2	21-16	[02]	IV	遺構外	胴部	
	7491	1	21-16	[30]	IV	遺構外	底部	
	11262	2	21-16	[20]	IV	遺構外	底部	
	11263	1	21-16	[20]	IV	遺構外	口縁部	
	11265	1	21-16	[20]	IV	遺構外	胴部	
	11267	1	21-16	[20]	IV	遺構外	胴部	
	11268	1	21-16	[20]	IV	遺構外	胴部	
	11269	1	21-16	[21]	IV	遺構外	胴部	
	11275	1	21-16	[30]	IV	遺構外	底部	
	11441	1	21-16	[11]	IV	遺構外	胴部	
	11533	1	21-17	[12]	IV	遺構外	胴部	
	12012	1	21-17	[11]	IV	遺構外	口縁部	
	12302	4	21-17	[31]	IV	遺構外	胴部	
	19片							
瘞	170 1618	1	08-13	[30]	煙道	3号竪穴住居	底部	PL.[2]-116
	1624	1	08-13	[30]	煙道	3号竪穴住居	底部	
	2片							
瘞	171 4299	8	15-22	[30]	IV	遺構外	底部	
	8片							
瘞	176 1534	2	10-05	[00]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	PL.[2]-128-2
	2160	3	10-04	[13]	IV	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	
	2235	2	10-04	[13]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	
	940	1	10-04	[23]	炭	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	
	2370	2	09-05	[22]	炭	1号土壌の焼土・炭化物	口縁部	
	3040	1	10-04	[03]	炭化物層下	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	
	1575	1	10-04	[03]	炭上	1号土壌周辺の焼土・炭化物	口縁部	
	14143	1	07-05	[31]	IV	遺構外	口縁部	
	1182	1	11-04	[10]	IV	遺構外	口縁部	
	14片							
瘞	177 6133	1	27-15	[23]	焼土	焼土69	胴部	
	6309	1	28-16	[22]	IV	焼土71	胴部	
	5371	1	29-15	[20]	IV	遺構外	胴部	
	6089	1	29-15	[31]	III	遺構外	胴部	
	6106	1	29-15	[20]	IV	遺構外	胴部	
	6110	1	29-14	[00]	IV	遺構外	口縁部	
	6113	1	28-15	[31]	IV	遺構外	口縁部	
	6131	4	29-14	[不明]	カクラン	遺構外	胴部	
	6147	1	26-13	[33]	III	遺構外	口縁部	
	6318	1	29-14	[10]	IV	遺構外	口縁部	
	6319	1	29-14	[10]	IV	遺構外	口縁部	
	6321	1	29-14	[12]	IV	遺構外	口縁部	
	6322	1	30-14	[00]	IV	遺構外	口縁部	
	6323	1	30-14	[01]	IV	遺構外	胴部	
	6324	1	30-14	[02]	IV	遺構外	胴部	
	6325	1	30-14	[02]	IV	遺構外	胴部	
	6326	1	30-14	[11]	IV	遺構外	胴部	
	6329	1	30-14	[20]	IV	遺構外	口縁部	
	12690	2	28-14	[31]	IV	遺構外	口縁部	
	23片							
瘞	178 13621	1	08-09	[32]	IV	遺構外	胴部	
	13762	1	09-09	[01]	IV	遺構外	胴部	
	13817	2	08-09	[31]	IV	遺構外	胴部1, 底部1	

個体番号	遺物番号	破片数	大グリット	小グリット	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
癸	193	11065	5	19-15	[21]	x ¹	炭化物52	口縁部
		11900	2	19-15	[23]	x ¹	炭化物52	口縁部
		7片						
癸	194	√1031	2	10-05	[20]	床	5号竪穴住居	口縁部
		1213	1	10-05	[32]	床	5号竪穴住居	口縁部
		√1506	1	10-05	[21]	床	5号竪穴住居	口縁部
		997	1	10-05	[31]	床	5号竪穴住居	口縁部
		14354	1	08-07	[32]	土壌内	6号土壌	口縁部
		3890	1	08-08	[30]	Ⅳ	焼土27周辺	口縁部
		7片						
癸	195	2274	1	17-10	[31]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		2814	1	17-10	[31]	b ¹	炭化物マウンド	口縁部
		2片						
癸	196	15059	1	06-07	[31]	Ⅳ	焼土13周辺	口縁部
		12996	1	07-08	[01]	Ⅳ	焼土18周辺	口縁部
		13273	1	08-08	[03]	Ⅳ	焼土27周辺	口縁部
		12961	1	07-06	[03]	Ⅳ	遺構外	口縁部
		4片						

Tab. Ⅰ-24 第2文化層出土支脚一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
支脚	1 676	1	10-13	[02]	覆土⑤層	3号竪穴住居		PL.Ⅱ-126・下
	1200	1	10-05	[20]	床	5号竪穴住居		PL.Ⅱ-297-1
	(完形品)	2片						PL.Ⅱ-301
支脚	2 956	2	10-05	[31]	床	5号竪穴住居		PL.Ⅱ-297-2
	1015	1	10-04	[22]	床	5号竪穴住居		PL.Ⅱ-302
	1036	1	10-04	[32]	床	5号竪穴住居		
	1203	1	10-04	[33]	床直	5号竪穴住居		
	1550	1	10-05	[00]	煙道	5号竪穴住居		
	2663	1	09-04	[33]	(不明)	1号土城焼土		
	2916	2	09-04	[不明]	埋土	1号土城		
	2917	1	09-04	[不明]	埋土	1号土城		
	14697	1	08-07	[不明]	b'	6号土城		
	14363	1	05-08	[13]	V	遺構外		
(完形品)		12片						
支脚	3 10000	1	16-17	[31]	IV	焼土43		PL.Ⅱ-254上
	132	1	16-17	[31]	(不明)	焼土43		PL.Ⅱ-298-1
	(完形品)	2片						PL.Ⅱ-303
支脚	4 956	2	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居		PL.Ⅱ-298-2
	957	4	10-05	[31]	床直	5号竪穴住居		PL.Ⅱ-304
	968	1	11-04	[03]	床直	5号竪穴住居		
	3023	1	09-04	[33]	焼土	1号土城周辺の焼土・炭化物		
	3039	1	10-04	[03]	炭化物層下	1号土城周辺の焼土・炭化物		
	(完形品)	9片						
支脚	5 13085	1	08-11	[30]	IV	焼土22		
	(完形品)	1片						PL.Ⅱ-305
支脚	6 12274	3	17-17	[12]	カマド	2号竪穴住居		PL.Ⅱ-27
	5790	1	19-15	[23]	Ⅲ	炭化物52		PL.Ⅱ-28
	5801	1	19-15	[13]	Ⅲ	炭化物52		PL.Ⅱ-30
	7422	4	19-15	[13]	x'	炭化物52		PL.Ⅱ-298-3
	8998	1	19-15	[13]	x'	炭化物52		PL.Ⅱ-306
	6030	3	20-16	[01]	Ⅲ	炭化物52周辺		
	6039	1	20-16	[11]	Ⅲ	炭化物52周辺		
	6041	1	20-16	[11]	Ⅲ	炭化物52周辺		
(完形品)		15片						
支脚	7 6184	1	26-15	[33]	焼土	焼土65		
	6177	3	26-15	[22]	焼土	焼土65		PL.Ⅱ-307
	(完形品)	4片						

Tab. Ⅰ-25 第2文化層出土土製玉一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
土製玉	1920	1	17-10	[21]	b'	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-1
	2247	1	17-10	[22]	b'	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-2
	6760	1	19-11	[01]	IV	炭化物マウンド周辺		PL.Ⅱ-309-3
	7386	1	17-12	[20]	IV	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-4
	7388	1	17-12	[22]	IV	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-5
	8172	1	17-11	[03]	マウンド上面	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-6
	8173	1	17-12	[20]	マウンド上面	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-7
	8175	4	17-10	[33]	マウンド上面	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-8,9,10,11
	9208	1	17-11	[03]	マウンド上面	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-12
	16501	2	17-12	[21]	マウンド	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-13,14
	16630	2	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド		PL.Ⅱ-309-15,17
	5601	1	19-15	[32]	Ⅲ	炭化物52		PL.Ⅱ-309-16
	(完形品)	17個						PL.Ⅱ-312

Tab. Ⅱ-26 第2文化層出土紡錘車一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	部位	関連PL.番号
紡錘車	1	725	1	09-13	[01]	覆土⑤層	3号竪穴住居	PL.Ⅱ-299-1
			1個					PL.Ⅱ-308
紡錘車	2	11650	1	15-17	[32]	焼土	3号土壌	PL.Ⅱ-299-2
(完形品)			1個					PL.Ⅱ-308
紡錘車	3	11850	1	18-18	[31]	床面	2号竪穴住居	PL.Ⅱ-299-3
(完形品)			1個					PL.Ⅱ-308
紡錘車	4	1032	1	10-05	[20]	床直	5号竪穴住居	PL.Ⅱ-299-4
(完形品)			1片					PL.Ⅱ-308
紡錘車	5	1117	1	13-10	[32]	b'上	遺構外	PL.Ⅱ-299-5
		1118	1	13-10	[32]	b'上	遺構外	PL.Ⅱ-308
			2片					
紡錘車	6	7233	1	19-15	[00]	x'	炭化物52	PL.Ⅱ-300-6
		10951	1	19-15	[10]	x'	炭化物52	PL.Ⅱ-308
			2片					
紡錘車	7	3960	1	09-09	[30]	Ⅲ	遺構外	PL.Ⅱ-300-7
		3957	1	09-08	[23]	Ⅲ	遺構外	PL.Ⅱ-308
			2片					
紡錘車	8	9669	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	PL.Ⅱ-300-8
		9683	2	17-12	[00]	マウンド	炭化物マウンド	PL.Ⅱ-308
		9874	1	17-12	[10]	マウンド	炭化物マウンド	
			4片					
紡錘車	9	6837	1	18-12	[31]	Ⅳ	炭化物マウンド	PL.Ⅱ-300-9
		8298	1	16-16	[22]	Ⅳ	焼土43	PL.Ⅱ-308
			2片					
紡錘車	10	7411	1	19-15	[11]	x'	炭化物52	PL.Ⅱ-300-10
		9165	1	19-15	[32]	x'	炭化物52	PL.Ⅱ-308
			2片					
紡錘車	11	1392	1	13-21	[13]	V	遺構外	PL.Ⅱ-300-11
			1片					PL.Ⅱ-308
紡錘車	12	4121	1	10-09	[10]	V	遺構外	PL.Ⅱ-308
			1片					
紡錘車	13	10230	1	17-11	[21]	マウンド	炭化物マウンド	PL.Ⅱ-308
			1片					
紡錘車	14	1103	1	12-05	[00]	覆土⑤層	5号竪穴住居	PL.Ⅱ-308
			1片					

Tab. Ⅱ-27 第2文化層出土ファイゴ羽口・石製品一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL.番号
ファイゴ羽口	1	613	9	10-05	[12]	覆土⑤層	5号竪穴住居	PL.Ⅱ-310-1
			9片					PL.Ⅱ-313
ファイゴ羽口	2	1287	1	10-05	[03]	Ⅳ	遺構外	PL.Ⅱ-310-2
		1288	2	10-05	[03]	Ⅳ	遺構外	PL.Ⅱ-313
		1289	1	10-05	[02]	Ⅳ	遺構外	
			4片					
石斧	1	400	1	16-17	[01]	b'上	焼土43	PL.Ⅱ-20-1
(完形品)			1個					PL.Ⅱ-310-11
石斧	2	4237	1	19-18	[03]	Ⅳ	遺構外	PL.Ⅱ-20-2
(完形品)			1個					PL.Ⅱ-310-12
たたき石		999	1	10-05	[20]	床直	5号竪穴住居	PL.Ⅱ-20-3
(完形品)			1個					PL.Ⅱ-310-10
石製品	1	190	1	14-18	[30]	(不明)	遺構外	
			1片					

Tab. Ⅱ-28 第2文化層出土金属器・鉄滓一覧表

個体番号	遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	形状・備考	関連PL.番号
金属器	1	8527	1	17-11	[33]	マウンド	炭化物マウンド	環状
								巻頭図版5中・右 PL.Ⅱ-200下 PL.Ⅱ-310-3
金属器	2	1180	1	11-04	[20]	Ⅳ	遺構外	環状
								巻頭図版5中・左 PL.Ⅱ-310-4
金属器	3	2374	1	09-05	[22]	炭	遺構外	刀子(?)
								PL.Ⅱ-310-7
鉄滓	4	580	1	19-14	[21]	床	1号竪穴住居	鉄滓
								PL.Ⅱ-310-9
鉄滓	5	2735	1	08-13	[10]	焼土	焼土24	鉄滓
								PL.Ⅱ-310-8
鉄滓	6	2737	1	08-13	[10]	焼土	焼土24	鉄滓
鉄滓	7	2802	1	08-13	[00]	V	焼土24周辺	鉄滓
鉄滓	8	3006	1	08-12	[03]	V	焼土24周辺	鉄滓
鉄滓	9	3845	1	10-08	[00]	Ⅳ	遺構外	鉄滓
鉄滓	10	16030	1	07-09	[33]	(不明)	4号土壌	鉄滓
鉄滓	11	14462	1	08-07	[32]	(不明)	6号土壌	鉄滓
鉄滓	12	3321	1	17-11	[11]	マウンド内	炭化物マウンド	鉄滓
鉄滓	13	—	1	—	—	—	焼土24	鱗片状

個体番号		遺物番号	破片数	大グリッド	小グリッド	層位・出土位置	関連遺構など	部位	関連PL番号
注口	1	14884	1	06-10	[32]	V	遺構外	口縁部	PL.Ⅲ-38上
	2	13587	1	07-07	[12]	Ⅳ	遺構外	口縁部	PL.Ⅲ-38下
				2片					

Tab. Ⅱ-30 焼土・炭化物集積一覧

No.	位置(グリッド)	層	形状	大きさ	状態(厚さ)	備考
1	03-14	川砂	—	—	—	自然堆積
2	02-08~03-08	V	楕円	70cm強	炭化物, 焼土, 粘土の混合(8mm)	
3	04-07	IV	不整形	1 m	焼土, (70mm)	
4	04-07~04-08~05-07~05-08	IV	不整形	約 4 m	炭化物, 焼土	
5	03-08~04-08	IV	不整形	1 m 弱	焼土, (10~40mm)	
6	05-05~06-05	V	不整形	大80cm, 小30cm	炭化物, (1~3mm)	2個
7	05-07	IV	不整形	大1.2m, 小1 m	焼土, (5~20mm)	4個
8	04-07~05-07	IV	不整形	大2.5m, 小0.5m	焼土, (5~10mm)	3個
9	05-09	V	不整形	1.3m	焼土, (15mm)	
10	05-09	IV	不整形	1.5m	焼土, (30~50mm)	
11	05-10~06-11	V	不整形	大1.5m, 小0.5m	焼土, (5~10mm)	3個
12	06-06~07-06	V	不整形	大0.7m, 小0.3m	焼土	4個
13	06-07~06-08	V	不整形	2.7m	焼土, (5mm)	
14	06-09	V	不整形	2.1m	炭化物, (10~20mm)	
15	06-10	V	不整形	0.6m	焼土	
16	06-10~07-10	IV下~V	不整形	3.6×2.5(m)	炭化物, (10~50mm)	
17	07-05	V	不整形	1~1.3(m)	焼土	3個
18	07-08	V	不整形	大1.4m, 小0.8m	焼土, (60mm)	2個
19	06-10~07-08~07-09	IV下~V	不整形	3.6×2.5(m)	炭化物, (10~40mm)	
20	08-09~08-10	V	不整形	2m	炭化物, (5~6mm)	21と重複
21	08-09~08-10	V	不整形	2m	焼土	20と重複
22	08-10~08-11~09-10~09-11	IV中	不整形	2.4m 弱	焼土・炭化物	
23	08-10	IV	不整形	大1.5m, 小0.4m	焼土, (2~3mm)	3号竪穴煙道前
24	07-12~07-13~08-12~08-13	IV	不整形	大7m, 小1m	焼土	
25	09-03	IV	不整形	1m 弱	焼土, (2~4mm)	
26	09-10	IV	不整形	1.3m	炭化物・焼土	
27	08-08	IV	不整形	大2.6m, 小1m	焼土	
28	08-04~08-05~09-04~09-05	V	不整形	0.5m 強	焼土・炭化物	
29	08-05~08-06	V	不整形	1m 強	焼土, (10~20mm)	2個
30	10-08	IV	不整形	2m 強	炭化物, (10~15mm)	
31	10-10	IV	不整形	1.1m	炭化物, (1~3mm)	
32	11-11	IV	不整形	大0.8m 弱, 小0.4m 強	焼土, (10~40mm)	
33	12-09~12-10~13-09~13-10	IV下	不整形	1.5m	焼土, (10~70mm)	
34	12-13~12-14	IV	楕円形	1.4×0.6(m)	焼土	
35	12-14~12-15	V	不整形	大0.6m, 小0.4m	焼土, (10mm)	2個
36	13-09	V	不整形	1m 強	炭化物	
37	13-15	IV下	不整形	1.6m	焼土, (10mm)	
38	14-11	IV	不整形	0.8m	焼土	
39	15-07~16-07	IV	不整形	2.4m 弱	炭化物, (30~40mm)	
40	15-12~16-12	IV	不整形	1.5m	炭化物	
41	15-16~15-17	IV	不整形	大1.5m, 小1m 強	焼土	
42	15-21~15-22~16-21, 16-22	IV	不整楕円形	大7m	炭化物	
43	2号竪穴煙道前	IV	不整形		焼土・炭化物	
44	16-18~16-19	IV	不整形	大3m 強, 小0.8m	焼土	2個
45	16-11	IV	不明	不明	焼土	
46	16-13	IV	不明	不明	焼土	
47	18-11~18-12~18-13~19-11~19-12	IV	不整形	3m~1.5m	焼土	3個
48	18-13	IV	不整形	1.5m	焼土	
49	18-10~19-10~20-10~20-11	IV	不整形	7.5×1(m)	焼土	
50	19-11	IV	不整形	炭化物2.6m, 焼土0.6m	炭化物・焼土	2個
51	18-13~19-13	IV	不整形	大2.5m, 小0.6m	焼土	2個
52	18-15, 19-14, 19-15, 19-16, 20-14	IV	不整形	8m 弱	炭化物	
53	18-16~19-16	V上	不整楕円形	1.8×1.2(m)	炭化物	
54	19-07~20-07	IV	不整形	大3m 弱	焼土	
55	20-07~20-08~21-08	IV	不整形	2m 強	焼土, (30~50mm)	
56	20-12	IV	不明	不明	焼土	
57	20-13	IV	不明	不明	炭化物	
58	20-13~20-14~21-14	IV	不整形	大2.3m 強	焼土	3個

No.	位置	層	形状	大きさ	状態	備考
59	19-18～20-18	Ⅳ	不整形	焼土・大0.9m, 炭化物・大0.3m	焼土・炭化物	
60	21-12	Ⅳ	不整形	1.7m	焼土	
61	21-14	Ⅳ	不整形	2.8m	焼土	
62	21-15	Ⅳ	不整形	2.3m	焼土	
63	22-11	Ⅳ	不整形	1.8m	焼土	
64	22-15～22-16～23-16	Ⅳ	不整形	大2.5m, 小0.8m	焼土	
65	23-16	Ⅳ	不整形	0.7m	焼土	
66	24-13	Ⅳ	不整形	0.4m	焼土, (8mm)	
67	25-16	Ⅳ	不整形	1.3m	焼土, (10～60mm)	
68	26-15～26-16	Ⅳ	不整形	大2.5m, 小0.8m	焼土, (5～7mm)	
69	27-15	Ⅳ	不整形	0.7m 強	焼土	
70	26-16～26-17～27-16～27-17	Ⅳ	不整形	約2m	炭化物・焼土	
71	28-16	Ⅳ	不整形	大1.5m, 小0.5m	焼土, (20～40mm)	
72	30-16～31-16	Ⅳ	不整形	5m 強	焼土	第1文化層
73	31-16	Ⅳ	不整形	1m 強	炭化物, (5mm)	
74	16-08, 17-09	Ⅳ	不整形	1.10～1.4(m)	焼土	3個
75	21-17	Ⅳ	不明	不明	炭化物	

注：「炭化物マウンド」はこの表に示していない。

Tab. Ⅱ-31 集石の計測

■2号竪穴住居跡

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
11849	8.26	4.45	3.77	180
12051	7.92	4.67	2.70	150
12052	10.25	5.34	3.64	200
12053	9.16	5.10	2.93	220
12054	7.38	4.60	3.08	164
12055	7.73	4.32	3.32	148
12056	7.87	4.55	3.09	150
12057	8.22	4.01	3.47	154
12058	7.70	5.26	3.11	170
12059	8.03	3.20	2.37	107
11838	11.47	6.70	2.78	198
12069	9.16	4.04	3.03	135
12073	10.95	4.31	2.85	187
12078	—	—	—	256

■20-08～21-08グリッド

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
6360	5.49	4.45	3.34	111
6361	6.37	3.08	2.84	86
6362	6.45	3.68	3.68	118
6363	5.99	4.17	3.09	69
6364	6.78	3.81	2.99	77
6365	—	—	—	68
6366	5.69	4.97	2.35	77
6367	7.89	4.28	3.61	132
6368	—	—	—	35
6369	—	—	—	47
6370	6.31	3.99	2.31	83
6371	5.96	4.12	3.37	83
6372	5.80	4.39	3.28	64
6373	7.10	3.95	2.85	110
6374	5.08	3.33	2.40	37
6375	6.21	2.52	3.20	65
6376	6.74	3.26	2.23	66
6377	5.47	2.81	2.16	45
6378	6.93	3.78	2.37	91
6379	5.75	2.75	3.26	57
6380	—	—	—	64
6381	5.76	4.22	2.43	55
6382	8.24	4.38	2.46	106
6383	5.79	4.67	3.22	92
6384	6.02	3.90	2.83	62
6385	5.67	3.49	2.37	44
6386	6.93	5.63	3.55	153
6387	—	—	—	52
6388	8.01	3.60	2.95	104
6389	6.86	3.31	3.26	90
6390	5.95	3.16	3.74	94
6391	6.03	3.50	2.84	89
6392	6.84	3.87	3.90	120
6393	5.45	3.90	3.94	85
6394	—	—	—	64
6395	5.76	2.83	3.07	61
6396	6.85	4.20	3.11	93
6397	5.80	3.91	3.49	92
6398	5.80	3.98	2.97	71
6399	7.37	4.42	4.07	108
6400	6.27	3.96	2.70	92
6401	6.44	3.40	3.12	106
6402	6.99	3.94	2.06	38
6403	6.57	2.98	2.75	70
6404	7.10	4.63	2.55	127

■3号土壇④層上面

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
11652	9.65	3.89	2.98	155
11653	8.51	4.14	2.60	128
11654	10.11	3.63	2.58	123
11655	8.95	5.24	2.78	164
11656	11.46	4.32	2.49	162
11657	8.11	4.10	3.76	155
11658	7.99	3.61	3.79	158
11659	8.50	5.35	2.24	134
11660	10.37	3.59	2.87	157
11661	8.82	4.64	3.12	188
11662	10.21	3.82	3.49	192
11663	11.07	5.57	3.53	306
11664	8.84	5.01	2.75	167
11667	8.30	5.44	2.65	154
11668	9.11	4.11	2.81	137
11669	8.26	3.95	2.86	136
11670	9.07	5.52	3.00	209
11671	9.23	4.99	3.37	198
11672	8.38	4.54	3.28	173
11674	11.93	4.03	2.88	216
11675	8.38	4.66	2.33	120
11676	7.75	4.80	3.04	176
11677	8.85	4.62	3.45	187
11678	8.20	4.72	3.70	182
11679	9.43	5.00	3.39	212
11680	8.00	5.01	3.03	182
11684	9.40	4.47	1.88	105
11685	8.77	4.15	2.68	136
11686	8.94	5.03	3.67	172
11687	7.68	3.84	2.23	102
11688	8.67	4.37	2.56	134
11689	8.16	3.81	3.13	134
11690	8.01	3.66	3.31	137

■31-16グリッド

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
12625	8.75	5.86	2.47	164
12626	8.24	6.43	2.38	152
12627	8.12	5.03	2.97	170
12628	8.72	4.99	3.12	120
12629	8.77	4.29	2.96	151
12630	8.23	4.80	3.24	177
12631	7.80	4.91	2.85	150

■13-10グリッド

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
4804	6.98	4.91	2.31	124
4805	6.52	5.04	2.42	107
4806	7.12	5.51	2.47	99
4807	6.99	4.54	3.64	120
4808	9.18	5.48	2.51	226
4809	8.22	4.65	2.74	162
4810	7.00	4.33	3.16	131
4811	5.92	4.05	3.66	135
4812	6.29	4.63	1.46	53
4813	6.91	5.12	3.43	152
4814	6.47	4.46	3.51	150
4815	7.33	4.24	3.02	120
4816	7.00	4.47	3.00	130
4817	7.71	4.51	4.17	228
4818	8.25	4.61	2.78	146
4819	7.31	4.69	2.23	128
4820	10.71	6.09	2.55	252
4821	8.50	3.92	1.95	89
4822	6.52	4.37	2.40	91
4823	8.05	4.82	2.67	135
4824	5.66	4.40	3.14	108
4825	6.76	4.50	2.55	107
4826	7.80	4.61	2.72	129
4827	7.95	3.96	2.55	127
4828	7.56	4.43	2.52	111
4829	7.72	5.17	2.27	144
4830	7.96	4.14	3.08	133
4831	6.34	4.15	2.87	102
4832	6.60	4.06	3.15	129
4833	7.06	3.90	3.60	133
4834	8.10	4.32	3.04	128
4835	6.91	4.50	2.22	111
4836	7.00	3.99	3.09	116
4837	6.40	4.05	3.16	113
4838	8.02	5.12	3.40	182
4839	7.39	4.37	3.12	117
4840	6.79	3.93	3.25	114
4841	6.82	3.58	2.83	87
4842	6.90	4.49	2.93	117

■21-15グリッド

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
10534	3.18	2.34	0.95	7
10539	7.22	4.01	2.50	102
10540	6.40	4.79	3.44	104
10541	6.49	3.47	2.06	49
10542	8.69	4.56	2.51	144
10543	7.91	5.26	3.31	168
10544	5.67	3.86	2.98	90
10545	5.61	4.28	3.60	107
10546	—	—	—	120
10547	5.02	2.81	1.98	30
10548	5.85	3.69	2.96	48
10549	7.15	4.37	2.12	101
10550	10.38	6.85	4.31	409
10601	5.28	5.00	3.16	116
10602	5.95	4.37	3.75	109
10603	5.02	3.63	1.87	50
10604	5.74	2.63	1.95	41
10605	7.00	4.37	2.41	104
10606	7.41	5.10	2.47	93
10607	7.44	3.56	2.89	100
10608	—	—	—	94
10609	4.83	2.70	2.72	53
10610	4.80	2.98	2.14	35
10611	8.26	5.41	2.62	152
10612	5.40	3.24	3.14	76
10613	4.98	2.88	2.50	48
10614	6.33	3.79	2.56	63
10615	—	—	—	107
10616	6.72	3.29	2.49	77
10617	5.90	3.38	3.01	80
10618	6.33	4.97	2.61	106
10619	7.19	3.94	2.14	80
10620	5.94	4.40	4.17	113

■20-15グリッド

No.	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)
12305	6.20	4.17	3.73	82
12306	4.04	3.62	1.84	21
12307	—	—	—	43
12308	5.98	3.84	4.89	93
12309	6.66	2.69	2.26	41
12310	4.94	3.90	2.40	33
12311	5.90	5.16	4.40	120
12312	3.35	3.03	1.00	8
12313	4.38	3.13	2.19	19
12314	4.55	3.34	3.04	42
12315	3.68	2.46	1.81	17
12317	5.28	4.29	3.11	57
12318	6.35	3.20	2.53	48
12319	6.33	5.52	2.76	66
12320	4.61	4.00	3.22	51
12321	3.46	2.09	1.23	9
12322	6.53	4.38	3.00	73
12323	6.49	3.47	3.24	99
12324	4.46	2.92	1.70	22
12325	4.54	3.81	2.05	32
12326	6.46	4.01	3.64	86
12327	5.14	2.58	2.99	24
12328	2.97	2.57	1.02	8
12329	6.71	4.25	3.04	92
12330	—	—	—	9
12331	—	—	—	88
12332	6.33	4.77	2.96	86
12333	—	—	—	63
12334	5.31	4.09	1.64	45
12335	—	—	—	44
12336	6.09	3.32	2.74	68
12337	4.55	3.32	2.50	30
12338	5.39	3.10	2.02	29
12339	3.38	2.36	1.86	12
12340	5.98	2.36	1.65	20
12341	3.95	2.79	1.86	16
12342	4.45	3.91	1.47	24
12343	—	—	—	23
12344	3.98	2.87	0.72	12
12345	6.74	3.41	2.46	61
12346	2.89	2.26	2.05	9
12347	4.81	3.90	3.45	48
12348	6.48	4.21	1.79	50
12349	—	—	—	71
12350	5.05	3.70	1.35	18
12351	3.63	2.70	1.34	11
12352	—	—	—	6
12353	6.22	4.47	4.02	100
12354	5.78	3.19	2.95	58
12355	4.115	2.74	0.93	16
12356	3.24	2.44	1.70	10
12357	3.76	2.64	2.03	15
12358	6.67	3.99	2.61	58
12359	—	—	—	15
12360	4.37	1.95	0.67	5
12361	7.32	3.31	3.43	70
12362	—	—	—	60
12363	7.31	3.67	3.87	72
12364	7.40	4.83	2.58	74
12365	5.86	4.07	2.50	57
12366	7.52	3.38	2.73	61
12367	6.18	2.98	1.48	19
12368	6.94	4.10	3.62	89
12369	2.38	1.79	1.85	5

[本文編]

1

サクシュコトニ川遺跡

北海道大学構内で発掘された西暦9世紀代の原初的農耕集落

1986

北海道大学